

東海環状自動車道建設事業に伴う

なかのやま

中野山遺跡

(第2・3・6・7次)

発掘調査報告

— 四日市市北山町所在 —

2016 (平成28) 年3月

三重県埋蔵文化財センター



写1 煙道付炉穴群（手前：S F 373・402・409, 奥：S F 367・369・383）（東から）



写2 竪穴住居SH624（東から）



写3 炭化材No. 19出土状況（東から）



写4 掘立柱建物S B206 (北から)



写5 掘立柱建物群 (S B321・322・333・747) (東から)



写6 SH317焼土痕検出状況（北西から）



写7 SH317中央焼土痕断面（北西から）



写 8 中野山遺跡から朝明川と御在所岳を望む（北東から）



写 9 中野山遺跡から伊勢湾を望む（西から）



写10 縄文時代早期遺構出土土器片



写11 出土剥片



74

写12 S K403出土石棒



74

写13 石棒赤変部分



209

写14 S H624出土赤彩須恵器



209

写15 赤彩部分



273

写16 S H317出土金床石



273

写17 金床石鉄附着部分

序

中野山遺跡は、朝明川の北岸、四日市市北山町の丘陵上にあります。

水道や自動車などの無かった時代には、丘の上は、たいへん不便な場所であったように想像される方もみえるかもしれません。しかし、今回報告する一連の発掘調査では、丘陵上から縄文時代から飛鳥時代までの遺構と遺物が多数発見されました。

縄文時代早期の炉跡や飛鳥時代の竪穴住居、掘立柱建物は、丘陵のほぼ全面に広がっています。ともすれば不便と思われがちな丘の上には、何千年にもわたる人々の豊かな暮らしのあとが残されていました。

今回の調査によって、この地域のこれまで知られていなかった過去の姿を、またひとつ明らかにすることができました。埋蔵文化財は、それぞれの地域における、かけがえのない過去の遺産であり、国民共有の財産です。明らかになった過去の歴史が、現在から未来への「みちしるべ」として、今後のまちづくり、ひとづくりにつながれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査の実施にあたっては、地元四日市市北山町にお住まいの皆さまをはじめとして、国土交通省中部地方整備局北勢国道事務所、四日市市教育委員会および関係各位から多大なるご協力と、温かいご配慮を頂くことができました。みなさまの誠意あるご対応に、心から御礼申し上げます。

平成28年3月

三重県埋蔵文化財センター
所長 野原 宏司

例 言

- 1 本書は、三重県四日市市北山町に所在する中野山遺跡の発掘調査のうち、東海環状自動車道建設事業に伴う、第2・3・6・7次調査に係る発掘調査報告書である。
- 2 上記の調査にかかる費用は国土交通省中部地方整備局が負担した。
- 3 調査は下記の体制で実施した。
 - 委託者 国土交通省中部地方整備局
 - 受託者 三重県
 - 調査主体 三重県教育委員会
 - 調査担当 三重県埋蔵文化財センター

※年度ごとの現地調査担当者は第I章 前言を参照。
- 4 出土遺物の整理および報告書作成は平成21～27年度に行った。
- 5 本書の執筆は勝山、編集は田中・勝山が行った。遺構の撮影は現地調査の各担当者、遺物の撮影は勝山が行った。なお、文責は目次に表記した。
- 6 自然化学分析のうち、放射性炭素年代測定および炭化材樹種同定については、株式会社 パレオ・ラボに、残存デンプン粒分析は、渋谷綾子氏（国立歴史民俗博物館）に、鉄滓・鉄製品の分析は、日鉄住金テクノロジー株式会社に委託し、その報告書を掲載した。
- 7 本書で用いた座標値は、世界測地系による座標第Ⅵ系による。
- 8 遺構は、遺構の種別によって、以下の記号と数字の組み合わせにより表記する。
 - S H：竪穴住居 S B：掘立柱建物 S D：溝 S F：煙道付炉穴
 - S K：土坑・集石炉 P it：柱穴・小穴
- 9 本書で表記する色調は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』（日本色研事業株式会社1967年初版）を用いた。
- 10 発掘調査及び本報告書の作成に際しては、下記の機関と方々に、ご指導とご協力を賜った（敬称略）。
北山町自治会・四日市市教育委員会・石野博信・大下 明・久保勝正・渋谷綾子・山田昌久
- 11 本書に関連した中野山遺跡の調査成果については、発掘調査ニュース等で随時報告しているが、本報告書をもって正式報告とする。
- 12 本書が扱う発掘調査の記録および出土遺物等は、三重県埋蔵文化財センターが保管している。

目次

第 I 章	前言	(勝山)	1
	第 1 節	原因事業の概要	1
	第 2 節	調査に至る経緯	1
	第 3 節	調査の体制と経過	4
	第 4 節	文化財保護法に係る諸通知	9
	第 5 節	調査の方法	9
	第 6 節	普及公開活動	10
第 II 章	位置と環境	(勝山)	11
	第 1 節	地理的環境	11
	第 2 節	歴史的環境	13
第 III 章	基本層序	(勝山)	16
第 IV 章	遺構	(勝山)	39
	第 1 節	縄文時代	39
	第 2 節	弥生時代	70
	第 3 節	古墳時代	75
	第 4 節	飛鳥時代	80
	第 5 節	中世	141
	第 6 節	時期不明	141
第 V 章	遺物	(勝山)	143
	第 1 節	縄文時代	143
	第 2 節	弥生時代	155
	第 3 節	古墳時代	159
	第 4 節	飛鳥時代	165
	第 5 節	中世	179
第 VI 章	自然科学分析		182
	第 1 節	放射性炭素年代測定	(株式会社パレオ・ラボ) 182
	第 2 節	出土炭化材の樹種同定	(株式会社パレオ・ラボ) 194
	第 3 節	出土石器の残存デンプン粒分析	(渋谷綾子) 202
	第 4 節	出土滓の分析調査	(日鉄住金テクノロジー株式会社) 208
第 VII 章	調査のまとめ	(勝山)	221
	第 1 節	遺跡の変遷	221
	第 2 節	縄文時代早期の集石炉について	222
	第 3 節	飛鳥時代の遺構と遺物について	229

図版一覧

- 第1図 東海環状自動車道路線上遺跡位置図
第2図 四日市北JCT周辺調査区位置図
第3図 中野山遺跡トレンチ位置図
第4図 中野山遺跡大地区割図
第5図 遺跡位置図
第6図 北区土層断面図
第7図 南区土層断面図
第8図 北区遺構平面図①
第9図 北区遺構平面図②
第10図 北区遺構平面図③
第11図 北区遺構平面図④
第12図 北区遺構平面図⑤
第13図 北区遺構平面図⑥
第14図 北区遺構平面図⑦
第15図 北区遺構平面図⑧
第16図 南区遺構平面図①
第17図 南区遺構平面図②
第18図 南区遺構平面図③
第19図 南区遺構平面図④
第20図 南区遺構平面図⑤
第21図 南区遺構平面図⑥
第22図 南区遺構平面図⑦
第23図 南区遺構平面図⑧
第24図 南区遺構平面図⑨
第25図 南区遺構平面図⑩
第26図 南区遺構平面図⑪
第27図 南区遺構平面図⑫
第28図 南区遺構平面図⑬
第29図 南区遺構平面図⑭
第30図 S H 370平面・断面図
第31図 S K 341・411平面・断面図
第32図 S K 343平面・断面図
第33図 S K 346・744平面・断面図
第34図 S K 348平面・断面図
第35図 S K 349平面・断面図
第36図 S K 351平面・断面図
第37図 S K 357平面・断面図
第38図 煙道付炉穴模式図
第39図 S K 364・408平面・断面図
第40図 S F 369平面・断面図
第41図 S F 367・369・383平面・断面図
第42図 S F 373・402・409平面・断面図
第43図 S F 373・402・409平面図
第44図 S F 368・374・S K 371・379平面・断面図
第45図 S K 372・S F 375平面・断面図①
第46図 S K 372・S F 375平面・断面図②
第47図 S F 390・391平面・断面図
第48図 S F 392・406平面・断面図
第49図 S F 754・755・756平面・断面図
第50図 S K 396・399・403・724平面・断面図
第51図 S K 316・330・347・378・380・398・606平面・断面図
第52図 S H 385・389・S K 400・401平面・断面図
第53図 S H 393・628平面・断面図
第54図 S K 213・306・307・400平面・断面図
第55図 S H 387・624・S K 395・397・405平面・断面図
第56図 S H 624遺物出土状況図
第57図 S K 216・382・412平面・断面図
第58図 S H 201・貯蔵穴平面・断面図
第59図 S H 208・211平面・断面図
第60図 S H 227・311平面・断面図
第61図 S H 304平面・断面図
第62図 S H 310・352・353・354・355・S K 358・359・360・361・362・363平面・断面図
第63図 S H 317・319平面・断面図
第64図 S H 329平面・断面図
第65図 S H 386・貯蔵穴平面・断面図
第66図 S H 394・701平面・断面図
第67図 S H 704・706・S K 702・707平面・断面図
第68図 S H 713・カマド平面・断面図
第69図 S H 727・730平面・断面図
第70図 S H 731・732・S K 728・729平面・断面図
第71図 S H 734平面・断面図
第72図 S H 737・745・S K 735平面・断面図
第73図 S H 743・S K 721平面・断面図
第74図 S B 202・204平面・断面図
第75図 S B 205・217平面・断面図

第76図	S B 206・215平面・断面図	第108図	出土遺物実測図⑤
第77図	S B 214・219平面・断面図	第109図	出土遺物実測図⑥
第78図	S B 220・224平面・断面図	第110図	出土遺物実測図⑦
第79図	S B 226・231平面・断面図	第111図	出土遺物実測図⑧
第80図	S B 232・301平面・断面図	第112図	出土遺物実測図⑨
第81図	S B 305平面・断面図	第113図	出土遺物実測図⑩
第82図	S B 308・309平面・断面図	第114図	出土遺物実測図⑪
第83図	S B 314・321平面・断面図	第115図	出土遺物実測図⑫
第84図	S B 322・331平面・断面図	第116図	出土遺物実測図⑬
第85図	S B 333・334平面・断面図	第117図	出土遺物実測図⑭
第86図	S B 338・342平面・断面図	第118図	出土遺物実測図⑮
第87図	S B 344・345・384平面・断面図	第119図	出土遺物実測図⑯
第88図	S B 376・407・410平面・断面図	第120図	出土遺物実測図⑰
第89図	S B 601・636平面・断面図	第121図	出土遺物実測図⑱
第90図	S B 602・603平面・断面図	第122図	出土遺物実測図⑲
第91図	S B 604・712平面・断面図	第123図	出土遺物実測図⑳
第92図	S B 747・748・749・750平面・断面図	第124図	出土遺物実測図㉑
第93図	S B 751・752・753平面・断面図	第125図	出土遺物実測図㉒
第94図	S K 207・209・210・225平面・断面図	第126図	出土遺物実測図㉓
第95図	S K 212・218・221平面・断面図	第127図	出土遺物実測図㉔
第96図	S K 222・228・302・312平面・断面図	第128図	出土遺物実測図㉕
第97図	S K 313・315・318・320平面・断面図	第129図	暦年較正結果の分布
第98図	S K 324・325・326・327平面・断面図	第130図	暦年較正結果(1)
第99図	S K 328・332・335・336平面・断面図	第131図	暦年較正結果(2)
第100図	S K 337・339・340・356・366平面・断面図	第132図	暦年較正結果(3)
第101図	S K 608・612・616・620・621・623・726 平面・断面図	第133図	暦年較正結果(4)
第102図	S K 710・711・719・720平面・断面図	第134図	デンプン粒の形態分類の基準と現生標本 17属の形態分類図
第103図	S K 223・229・230・350・365・377平面・ 断面図	第135図	中野山遺跡の変遷①
第104図	出土遺物実測図①	第136図	中野山遺跡の変遷②
第105図	出土遺物実測図②	第137図	中野山遺跡の変遷③
第106図	出土遺物実測図③	第138図	縄文時代早期遺構図
第107図	出土遺物実測図④	第139図	飛鳥時代遺構図
		第140図	集石炉使用過程

表一覧

第1表	東海環状自動車道路線上遺跡一覧	(第3次)	
第2表	遺跡位置図番号	第6表	測定試料および処理(第7次)
第3表	集石炉の被熱礫・底石重量一覧	第7表	放射性炭素年代測定および暦年較正の結果 (第7次)
第4表	測定試料および処理(第3次)	第8表	中野山遺跡(第3次)出土炭化材の樹種同
第5表	放射性炭素年代測定および暦年較正の結果		

- 定結果一覧
- 第9表 中野山遺跡（第7次）出土炭化材の樹種同定結果
- 第10表 竪穴住居出土炭化材の樹種同定結果
- 第11表 竪穴住居出土炭化材の樹種同定結果一覧
- 第12表 出土石器の分析試料と残存デンプン粒の検出回数
- 第13表 石器から検出した残存デンプン粒
- 第14表 供試材の履歴と調査項目

- 第15表 供試材の化学組成
- 第16表 出土遺物の調査結果のまとめ
- 第17表 遺構一覧（1～8）
- 第18表 掘立柱建物一覧（1～4）
- 第19表 土器・土製品観察表（1～9）
- 第20表 石器・石製品観察表（1～3）
- 第21表 鍛冶滓・鉄製品観察表
- 第22表 出土鍛冶滓一覧

写真一覧

- 写1 煙道付炉穴群（東から）
- 写2 竪穴住居S H 624（東から）
- 写3 炭化材No.19出土状況（東から）
- 写4 掘立柱建物S B 206（北から）
- 写5 掘立柱建物群（東から）
- 写6 S H 317焼土痕検出状況（北西から）
- 写7 S H 317中央焼土痕断面（北西から）
- 写8 中野山遺跡から朝明川と御在所岳を望む（北東から）
- 写9 中野山遺跡から伊勢湾を望む（西から）
- 写10 縄文時代早期遺構出土土器片
- 写11 出土剥片
- 写12 S K 403出土石棒
- 写13 石棒赤変部分
- 写14 S H 624出土赤彩須恵器
- 写15 赤彩部分
- 写16 S H 317出土金床石
- 写17 金床石鉄付着部分
- 写18 第2次調査 現地説明会
- 写19 下野小学校 遺跡見学会
- 写20 放射性炭素年代測定試料(1)
- 写21 放射性炭素年代測定試料(2)
- 写22 放射性炭素年代測定試料(3)
- 写23 中野山遺跡（第3次）出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真
- 写24 中野山遺跡（第7次）出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真
- 写25 竪穴住居出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真(1)
- 写26 竪穴住居出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真(2)
- 写27 分析した中野山遺跡出土石器の例と検出された残存デンプン粒
- 写28 椀形鍛冶滓の顕微鏡組織(1)
- 写29 椀形鍛冶滓の顕微鏡組織(2)
- 写30 銅滓?の顕微鏡組織(3)
- 写31 椀形鍛冶滓の顕微鏡組織(4)
- 写32 椀形鍛冶滓の顕微鏡組織(5)
- 写33 椀形鍛冶滓の顕微鏡組織(6)
- 写34 米軍撮影空中写真（昭和21年）
- 写35 第2次調査区遠景（南から）
- 写36 第2次調査区垂直全景（上が北）
- 写37 第3次調査区南区全景（西から）
- 写38 第3次調査区南区垂直全景（上が北）
- 写39 第3次北区・第6次調査区垂直全景（上が北）
- 写40 第3次北区・第6次調査区全景（東から）
- 写41 第7次調査区北区垂直全景（上が北）
- 写42 第7次調査区北区全景（東から）
- 写43 第7次調査区南区垂直全景（上が北）
- 写44 第7次調査区南区全景（東から）
- 写45 S H 201（南から）
- 写46 S H 201貯蔵穴遺物出土状況（南から）
- 写47 S H 208・S K 213（東から）
- 写48 S H 211（北から）
- 写49 S H 304検出状況（西から）
- 写50 S H 304完掘（西から）
- 写51 S H 304中央土坑（南東から）
- 写52 S H 311（西から）
- 写53 S H 310・352・354・355検出状況（北東から）
- 写54 S H 310・352・353・354・355（南から）
- 写55 S H 317・319, S B 342（南から）
- 写56 S H 329, S B 345・384（南から）

- 写57 S H 317 (南から)
写58 S H 319 (南から)
写59 S H 329 (南から)
写60 S H 370 遺物出土状況 (南から)
写61 S H 386 (南から)
写62 S H 386 (南東から)
写63 S H 387・389, S K 395・397 (東から)
写64 S H 393, S K 404 (南から)
写65 S H 394 (北から)
写66 S H 624・628 (北から)
写67 S H 624 遺物出土状況 (東から)
写68 S H 624・628 遠景 (西から)
写69 S H 701・706 (南東から)
写70 S H 704 (北西から)
写71 S H 713 (西から)
写72 S H 713 カマド出土状況 (西から)
写73 S H 727 検出状況 (北から)
写74 S H 730 (北から)
写75 S H 731・732 (北西から)
写76 S H 734 (北東から)
写77 S H 745 カマド出土状況 (西から)
写78 S B 202 (南東から)
写79 S B 205 (東から)
写80 S B 206・215 検出状況 (北から)
写81 S B 206・215 (北から)
写82 S B 214 検出状況 (北西から)
写83 S B 217 (北から)
写84 S B 219 検出状況 (西から)
写85 S B 220 (南から)
写86 S B 224 (南から)
写87 S B 226 (西から)
写88 S B 220・226, S K 221・222 (東から)
写89 S B 231 (南から)
写90 S B 301 検出状況 (南東から)
写91 S B 305, S H 304 検出状況 (東から)
写92 S B 309 検出状況 (南東から)
写93 S B 314 検出状況 (南東から)
写94 S B 321 検出状況 (西から)
写95 S B 322 検出状況 (北から)
写96 S B 331 検出状況 (東から)
写97 S B 333 検出状況 (西から)
写98 S B 334 検出状況 (北から)
写99 S B 334・338 検出状況 (北から)
写100 S B 338 北側部分 (北から)
写101 S B 338 南側部分 (北東から)
写102 S B 376・410, S K 398 検出状況 (北から)
写103 S B 601・636 検出状況 (北から)
写104 S B 602 検出状況 (北から)
写105 S B 601・602・636 (西から)
写106 S B 603・604 (北から)
写107 S B 712 (北西から)
写108 S B 748 (西から)
写109 S B 747, S K 320 北側部分 (東から)
写110 S B 747 他 (北から)
写111 S B 735 (北東から)
写112 第7次調査南②区全景 (北東から)
写113 第3次調査南区西側 (南から)
写114 S K 209・225 (南から)
写115 S K 210 (南西から)
写116 S K 212 (北東から)
写117 S K 221 (南から)
写118 S K 223 検出状況 (南から)
写119 S K 223 実掘 (南から)
写120 S K 302 検出状況 (南から)
写121 S K 306・307 (南東から)
写122 S K 316 遺物出土状況 (南東から)
写123 S K 324 (南から)
写124 S K 330 (南東から)
写125 S K 702 遺物出土状況 (南から)
写126 縄文土器底部 (80) 出土状況 (西から)
写127 S K 403 石棒 (74) 出土状況 (西から)
写128 S F 367・369・383 (南から)
写129 S F 367・369・383 (東から)
写130 S F 368 (南から)
写131 S K 371・372 (西から)
写132 S F 374 検出状況 (西から)
写133 S F 374 炭化物採取状況 (東から)
写134 S K 379 (南から)
写135 S K 396 (南東から)
写136 S F 375 (東から)
写137 S F 375 第3層底面出土礫 (北から)
写138 S F 375 煙道断面 (南から)

写139 S F 375煙道断面（南西から）
写140 S F 373検出状況（東から）
写141 S F 373（東から）
写142 S F 373煙道断面（南から）
写143 S F 373・402断面（南から）
写144 S F 373・402（東から）
写145 S F 402遺物出土状況（南東から）
写146 S F 373・402・409（東から）
写147 S F 409炭化物（No.11）採取状況（南から）
写148 S F 390（西から）
写149 S F 391（南から）
写150 S F 406検出状況（南から）
写151 S F 406（北西から）
写152 S F 392（北東から）
写153 S F 754（北から）
写154 S F 756（北から）
写155 S F 755（北から）
写156 S F 754・755・756発見現場（北西から）
写157 S K 341・411検出状況（南から）
写158 S K 341・411断面（東から）
写159 S K 341・411木炭出土状況（東から）
写160 S K 343検出状況（南から）
写161 S K 343断面（南東から）
写162 S K 343木炭・底石出土状況（南東から）
写163 S K 346検出状況（北から）
写164 S K 346底石出土状況（南東から）
写165 S K 744検出状況（北から）
写166 S K 744底石出土状況（南から）
写167 S K 348検出状況（南東から）
写168 S K 348断面（南東から）
写169 S K 348底石出土状況（南東から）
写170 S K 357検出状況（南から）
写171 S K 357断面（南西から）
写172 S K 357底石出土状況（東から）
写173 S K 349検出状況（北から）
写174 S K 349底石出土状況（南から）
写175 S K 351検出状況（東から）
写176 S K 351底石出土状況（南から）
写177 S K 364・408検出状況（北から）
写178 S K 364・408断面（南から）
写179 出土遺物(1)
写180 出土遺物(2)
写181 出土遺物(3)
写182 出土遺物(4)
写183 出土遺物(5)
写184 出土遺物(6)
写185 出土遺物(7)
写186 出土遺物(8)
写187 出土遺物(9)
写188 出土遺物(10)
写189 出土遺物(11)
写190 出土遺物(12)
写191 出土遺物(13)
写192 出土遺物(14)
写193 出土遺物(15)
写194 出土遺物(16)
写195 出土遺物(17)
写196 出土遺物(18)
写197 出土遺物(19)
写198 出土遺物(20)
写199 出土遺物(21)

第 I 章 前 言

第 1 節 原因事業の概要

国道 475 号東海環状自動車道（以下、東海環状自動車道）は、名古屋市周辺の 30～40km 圏に位置する四日市市・東員町・いなべ市・大垣市・岐阜市・関市・土岐市・豊田市等の諸都市を有機的に結ぶ延長約 160km の高規格幹線道路である。

同路線は名古屋市と周辺諸都市の機能分担をより効果的に進め、都市内外の交通混雑緩和および交通機能の回復を図るものとして計画された。

三重県内の北勢地域においては、道路網の充実、四日市港の集積拡大による活性化、内陸部の適正な開発、地震や台風等の非常時の緊急輸送道路の確保等に寄与することが期待されている。

計画路線は、四日市市北山町の四日市北 JCT（仮称）で新名神高速道路から分岐し、員弁川の右岸を北上し、東員町、いなべ市を経た後、岐阜県養老町と連絡するものとなっている。

同事業は、平成 2 年度に「一般国道 475 号東海環状自動車道（北勢～四日市）」として、員弁郡北勢

町阿下喜（当時）～四日市市北山町の区間（14.4km）が事業化された。また、平成 4 年 1 月 21 日には、北勢 IC（仮称）～四日市 JCT 間（員弁郡北勢町阿下喜～四日市市伊坂町、延長 18.7km）の都市計画が決定された^①。

阿下喜以北については、平成 19 年 4 月 24 日に北勢 IC～岐阜県境間（いなべ市北勢町阿下喜～いなべ市北勢町二之瀬、延長 8.9km）の都市計画決定が告示され、同年度中に事業着手されている。

【註】

①但し、四日市 JCT～四日市北 JCT 間については、平成 18 年 3 月 31 日に国土交通大臣より、近畿自動車道名古屋神戸線（以下、新名神高速道路）として事業許可が下され、中日本高速道路株式会社により建設が進められることとなった。そのため、上記区間の遺跡については、新名神高速道路建設事業に伴うものとして保護措置がとられている。

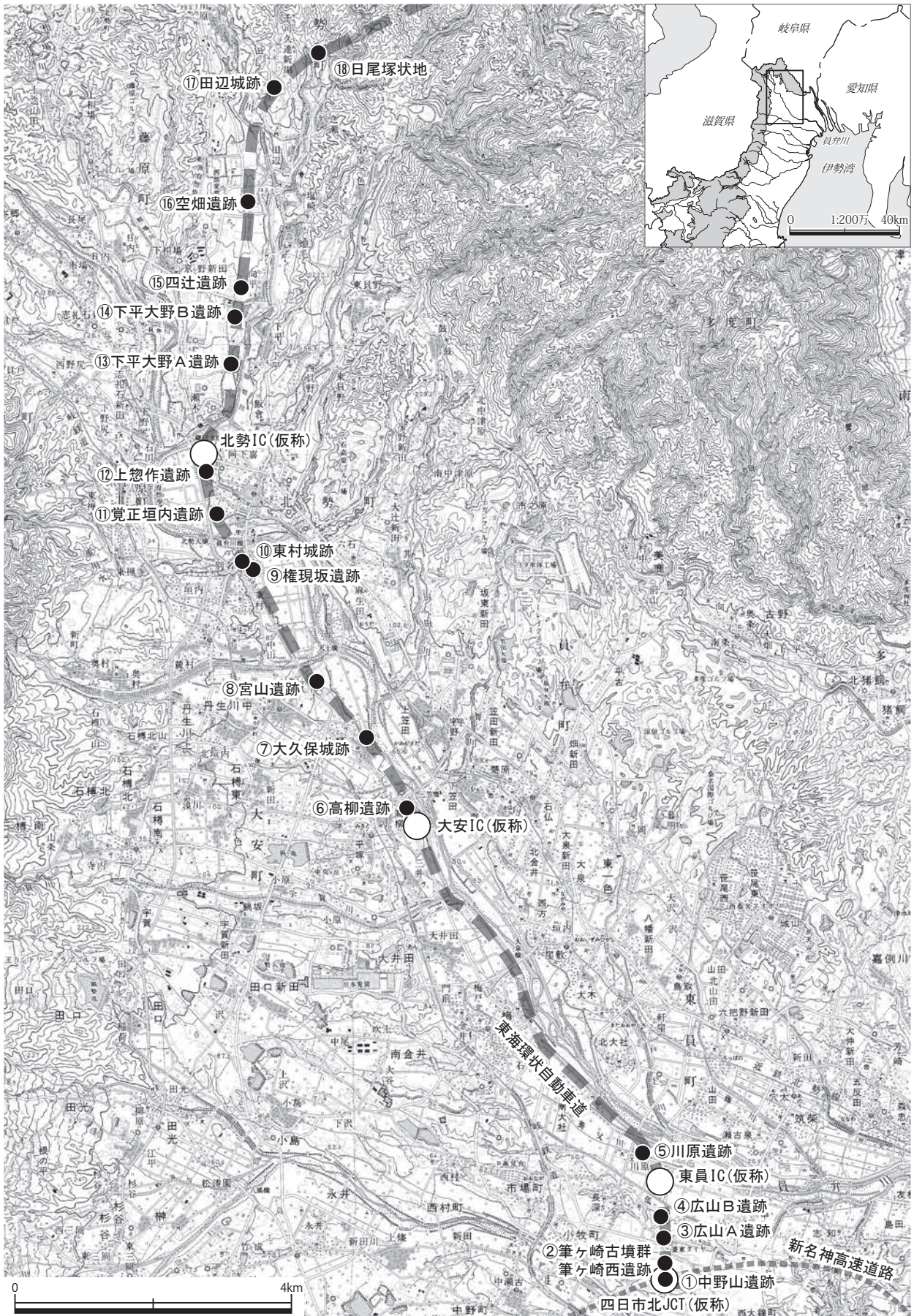
第 2 節 調査に至る経緯

平成元年度 平成元年 9 月 28 日、三重県埋蔵文化財センター（以下、埋蔵文化財センター）と三重県教育委員会文化振興課（当時。以下、文化振興課）は、三重県土木部道路建設課（当時。以下、道路建設課）と「建設省事業にかかる埋蔵文化財」についての協議を行った。この中で東海環状自動車道の建設計画が議題のひとつとしてあげられた。情報の共有を図るため、埋蔵文化財センターは、同年 10 月 2 日に「東海環状自動車道・伊勢湾岸道路・北勢バイパスにかかる埋蔵文化財保護連絡会議」を開催し、関係市町村と事業計画の概要、埋蔵文化財の所在状況の確認、保護とその取扱いについての協議をおこなった。

その後、道路建設課から、「東海環状自動車道の計画（概略）説明会について（通知）」（平成元年 10 月 17 日付け、道建第 1223 号）が、文化振興課

に送られた。文化振興課は埋蔵文化財センターと協議し、同説明会にて、予定路線の詳細平面図等の提出を求めた。これを受け、道路建設課は建設省中部地方建設局三重工事事務所（当時）からの回答と計画平面図（概略図 1：1,000）等（平成元年 12 月 5 日付け、道建第 1366 号）を文化振興課に送付した。**平成 2 年度** 平成 2 年 4 月 11 日～13 日、埋蔵文化財センターは前年度に送付された計画平面図をもとに建設予定地内の埋蔵文化財詳細分布調査を行った。この結果は「東海環状自動車道建設予定地内埋蔵文化財分布調査報告」（平成 2 年 5 月 9 日付け、教埋第 201 号）として、文化振興課を経由して関係部局に送付している。

平成 4 年度 平成 4 年 8 月 19 日、埋蔵文化財センターは「東海環状自動車道等にかかる文化財保護連



第1図 東海環状自動車道路上遺跡位置図 (1:80,000)

第1表 東海環状自動車道路線上遺跡一覧

遺跡名	所在地	調査面積(m ²) (上段:一次調査 下段:二次調査)													備考			
		6年度	7年度	8年度	9年度	10年度	11年度	12年度	13年度	19年度	20年度	21年度	22年度	23年度		24年度	25年度	合計
① 中野山遺跡	四日市市北山町 字中野山																1370 14391	調査終了
② 筆ヶ崎古墳群 筆ヶ崎西遺跡	四日市市小牧町 字筆ヶ先																740 11945	調査終了
③ 広山A遺跡	員弁郡東員町長深 字広山ほか					1242											1242 1280	調査終了
④ 広山B遺跡	員弁郡東員町長深 字広山					372						270					642 4299	調査終了
⑤ 川原遺跡	員弁郡東員町長深 字川原			192													192 0	範囲確認のみ 調査終了
⑥ 高柳遺跡	いなべ市大安町 字高柳																0 0	土取りにより消滅
⑦ 大久保城跡	いなべ市大安町片樋 字大久保			1420													0 1420	調査終了
⑧ 宮山遺跡	いなべ市大安町片樋 字宮山	1280	147			225							860				1652 13120	調査終了
⑨ 権現坂遺跡	いなべ市北勢町東村 字治田外面	96	128														224 3186	調査終了
⑩ 東村城跡	いなべ市北勢町東村	2020	1130				80										80 3150	調査終了
⑪ 覚正垣内遺跡	いなべ市北勢町阿下喜 字覚正垣内	96	80	64		16											256 2670	調査終了
⑫ 上惣作遺跡	いなべ市北勢町阿下喜 字上惣作ほか		202	320													522 11780	調査終了
⑬ 下平大野A遺跡	いなべ市北勢町下平 字大野ほか			4470	5600							1470					0 0	平成18・19年度分布調査
⑭ 下平大野B遺跡	いなべ市北勢町下平 字大野ほか																0 0	三重県埋蔵文化財センター『一般国道475号東海環状自動車道(北勢IC～岐阜県境)建設予定地内埋蔵文化財一覧』2007
⑮ 四辻遺跡	いなべ市北勢町向平 字四辻ほか																0 0	
⑯ 空畑遺跡	いなべ市北勢町塩崎 字空畑ほか																0 0	
⑰ 田辺城跡	いなべ市北勢町田辺 字北山ほか																0 0	
⑱ 日尾塚状地	いなべ市北勢町二之瀬 字日尾																0 0	

絡会議」を開催し、四日市市・東員町・員弁町（当時）・大安町（当時）・北勢町（当時）・藤原町（当時）の各教育委員会と建設予定地内の文化財保護についての協議を行った。

平成5年度 平成5年8月23日、建設省中部地方建設局北勢国道工事事務所（当時。以下、北勢国道工事事務所）と埋蔵文化財センターは、埋蔵文化財

の保護協議を行った。さらに、10月13日には北勢国道工事事務所、三重県土木部高速道推進室（当時）、文化振興課、埋蔵文化財センターの4者で、建設予定地内の埋蔵文化財の取り扱いに関する協議を行った。これらの協議の結果、現状保存が困難な遺跡については事前に発掘調査を実施し、記録保存を図ることが決定された。

第3節 調査の体制と経過

（1）調査の体制

東海環状自動車道建設事業に伴う中野山遺跡の埋蔵文化財発掘調査と整理作業は、以下の体制で行った。

調査主体：三重県教育委員会

調査担当：三重県埋蔵文化財センター

【平成21年度】

調査研究Ⅱ課

課長 田村陽一

主幹 長谷川哲也

技師 水谷 豊

【平成22年度】

調査研究Ⅱ課

課長 田村陽一

主幹 長谷川哲也

主事 勝山孝文

【平成23年度】

調査研究Ⅱ課

課長 田村陽一

主幹 長谷川哲也・松永公喜

主査 勝山孝文

技師 川部浩司

業務補助員 永田尚美

【平成24年度】

調査研究3課

課長 森川常厚

主幹 穂積裕昌

技師 川部浩司・渡辺和仁

業務補助員 永田尚美

【平成25年度】

調査研究3課

課長 森川常厚

主幹 河尻浩一

技師 渡辺和仁

業務補助員 中村里美

【平成26年度】

調査研究3課

課長 森川常厚

主査 勝山孝文

業務補助員 中村里美・蛭原由希絵

【平成27年度】

調査研究4課

課長 田中久生

主査 水谷 豊

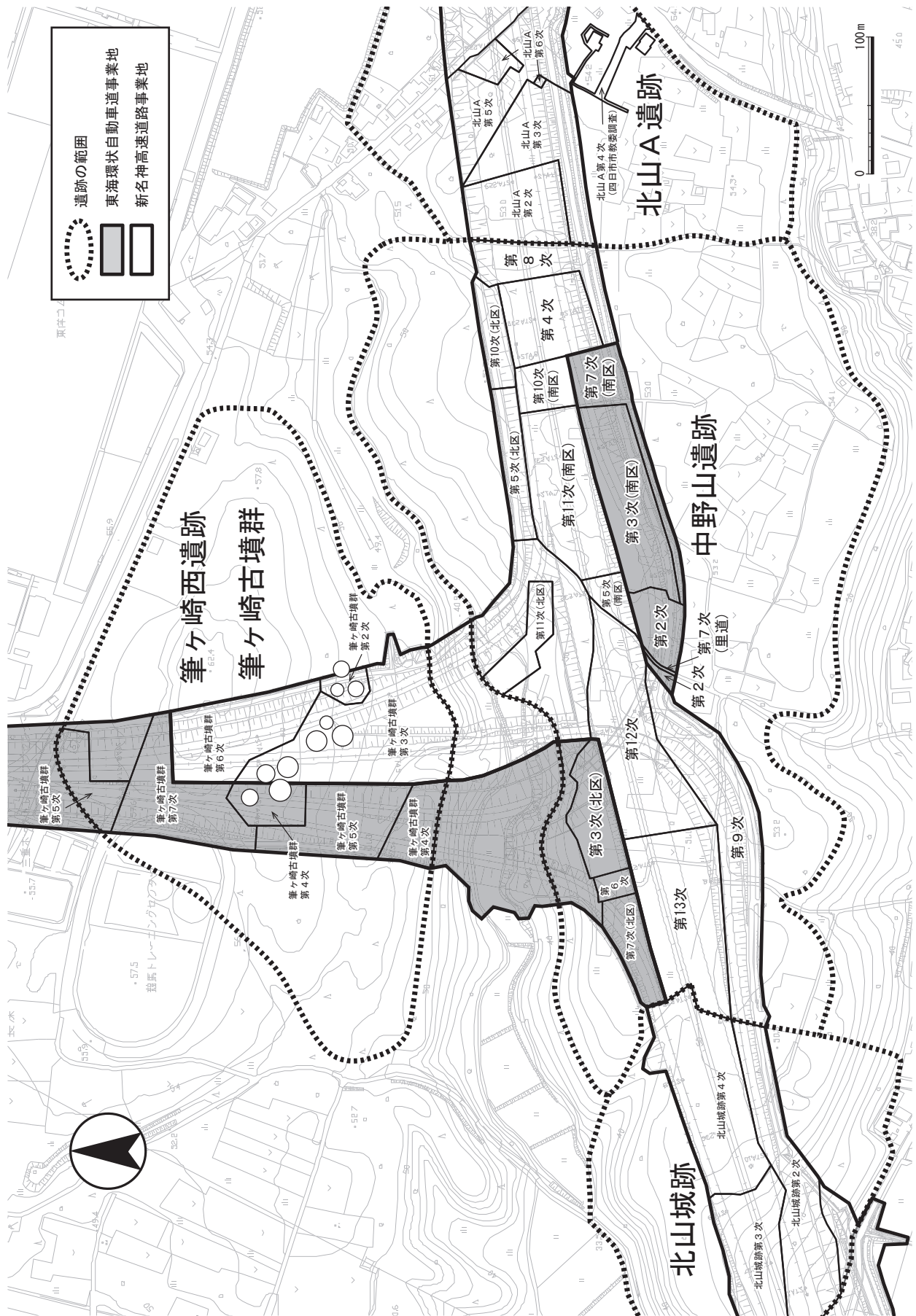
技師 高松雅文

業務補助員 中村里美・蛭原由希絵

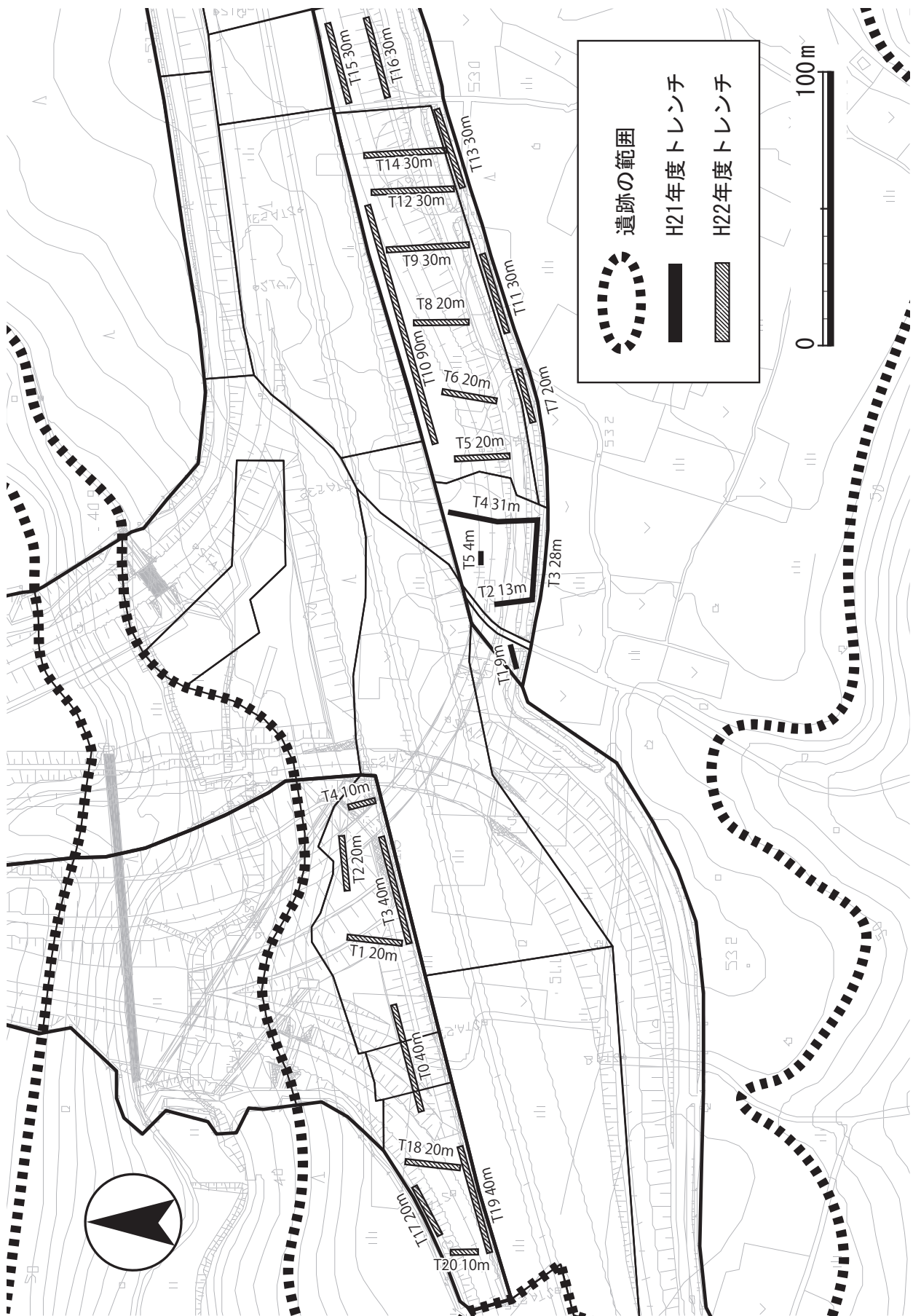
（2）調査の経過

東海環状自動車道の路線にある遺跡は、18遺跡である（第1図・第1表）。③～⑫までの遺跡については、既刊の報告書に詳述されているため、詳細はそちらを参照されたい^①。ここでは、中野山遺跡に関してのみ記述する。

中野山遺跡は、東海環状自動車道と新名神高速道路が結節する四日市北JCTの建設用地に重なっており、発掘調査はそれぞれの事業地ごとに分割して行われた（第2図）。東海環状自動車道事業としての調査は、平成21～24年度まで行われており、各調査期間と面積は以下の通りである^②。



第2図 四日市北JCT周辺調査区位置図 (1 : 4,000)



第3図 中野山遺跡トレンチ位置図 (1 : 2,000)

【第2次調査】

期間：平成22年8月30日～平成23年1月24日

面積：1,715㎡

【第3次調査】

期間：平成23年4月25日～平成23年11月15日

面積：7,572㎡

【第6次調査】

期間：平成23年10月11日～平成23年12月19日

面積：504㎡

【第7次調査】

期間：平成24年7月31日～平成25年1月7日

面積：4,600㎡

※第4・5・8～13次調査は新名神事業

(3) 調査日誌 (抄)**【第2次調査】 (平成22年度)**

9月17日 里道西の調査区より表土掘削開始

10月14日 遺構検出・掘削開始

10月25日 里道西の調査区 空中写真撮影1回目

11月12日 追加調査区表土掘削開始

11月30日 追加調査区遺構検出・掘削開始

12月4日 現地説明会

12月16日 四日市市立下野小学校6年生遺跡見学

12月22日 調査区全景 空中写真撮影2回目

1月12日 埋め戻し開始

【第3次調査】 (平成23年度)

5月16日 南調査区東側より表土掘削開始

5月31日 南調査区東側より遺構検出・掘削開始
南調査区西側の表土掘削継続

6月6日 南調査区 表土掘削終了

8月22日 北調査区 表土掘削開始

8月25日 南調査区全景 空中写真撮影

8月26日 南調査区全景 高所作業車による写真
撮影

8月29日 南調査区 補足調査開始

9月5日 石野博信先生からの調査指導

9月6日 北調査区 遺構検出・掘削開始

10月2日 南調査区において現地説明会

10月18日 南調査区 埋め戻し開始

10月25日 北調査区全景 空中写真撮影

10月27日 北調査区 埋め戻し開始

【第6次調査】 (平成23年度)

11月8日 表土掘削開始

11月14日 遺構検出・掘削開始

11月28日 調査区全景 空中写真撮影

11月30日 埋め戻し開始

【第7次調査】 (平成24年度)

8月20日 南調査区 表土掘削開始

8月27日 北調査区 表土掘削開始

8月28日 南調査区 遺構検出・掘削開始

9月4日 北調査区 遺構検出・掘削開始

10月13日 現地説明会

11月22日 北・南調査区 空中写真測量実施

11月27日 南調査区里道部分 表土掘削開始

11月28日 南調査区里道部分 遺構検出・掘削開始

12月4日 南調査区 補足調査開始

12月7日 部分写真撮影・補足調査開始

12月11日 南調査区里道部分 埋め戻し開始

12月13日 南調査区 埋め戻し開始

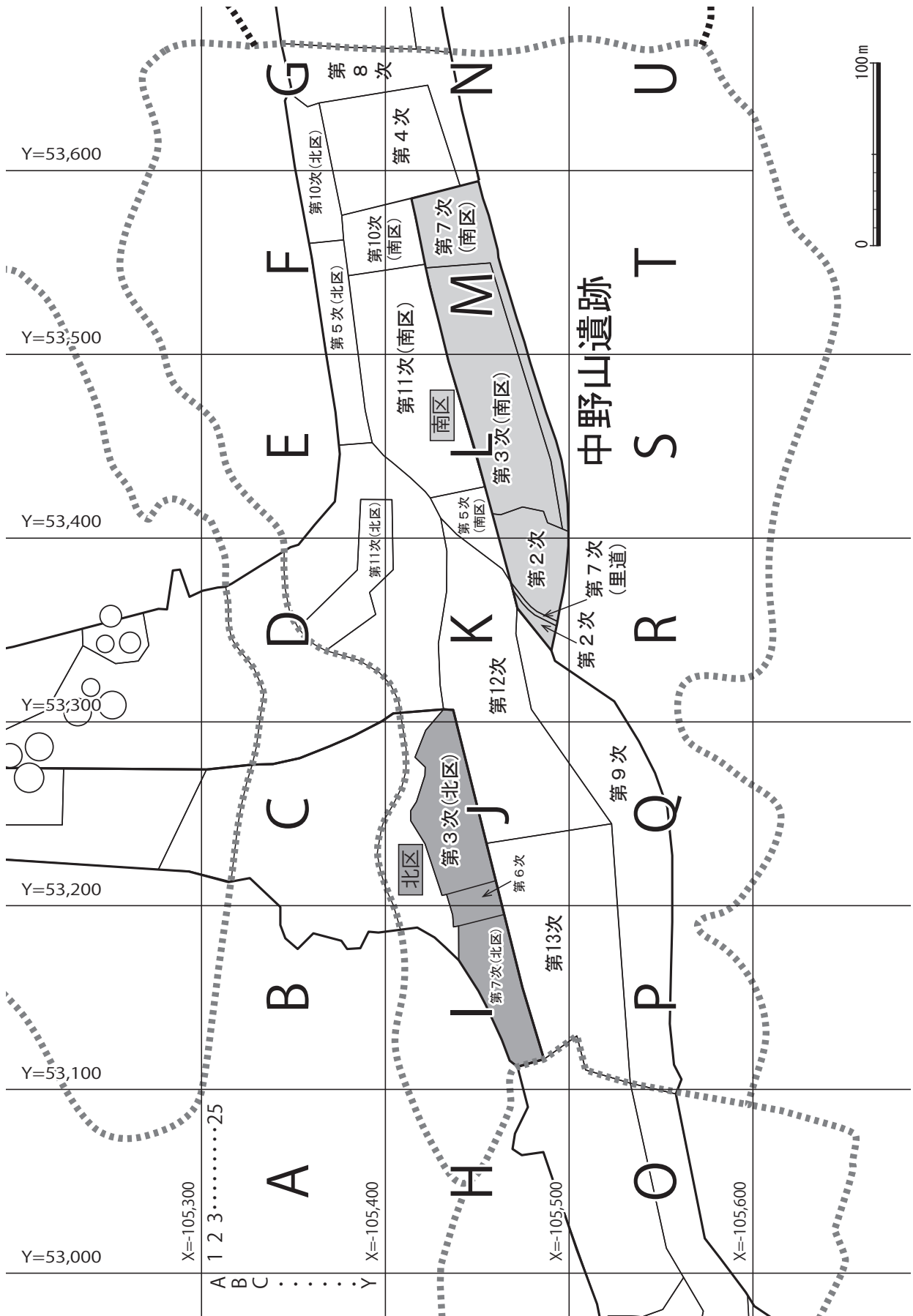
12月21日 北調査区 埋め戻し開始

12月27日 現場撤収完了

【註】

①『宮山遺跡発掘調査報告』1999、『東村城跡発掘調査報告』2000、『上惣作遺跡発掘調査報告』2001、『権現坂遺跡発掘調査報告』2002、『宮山遺跡(第2次)・大久保城跡発掘調査報告』2003、『覚正垣内遺跡発掘調査報告』2003、『広山A遺跡・広山B遺跡発掘調査報告』2009、いずれも三重県埋蔵文化財センター編。

②なお、平成22年度の発掘調査(第2次調査)に先駆けて、平成21～22年度に、遺跡内の数箇所ですくみ取りによる先行調査が行われており、これを「第1次調査(東環)」としてカウントしている。位置については第3図を参照されたい。



第4图 中野山遺跡大地区割図 (1 : 3,000)

第4節 文化財保護法に係る諸通知

文化財保護法等に係る諸通知は、以下の通りである。

○**土木工事等のための発掘に関する通知**（文化財保護法第94条に基づく三重県文化財保護条例第48条第1項）

・平成22年7月28日付け、国部整北調第28号（県教育長あて国土交通省中部地方整備局北勢国道事務所長通知）

○**発掘調査の着手報告**（文化財保護法第99条第1項）

・第2次調査

平成22年9月13日付け、教埋第149号（県教育長あて三重県埋蔵文化財センター所長報告）

・第3次調査

平成23年4月26日付け、教埋第31号（県教育長あて三重県埋蔵文化財センター所長報告）

・第6次調査

平成23年10月11日付け、教埋第204号（県教育長あて三重県埋蔵文化財センター所長報告）

・第7次調査

平成24年8月22日付け、教埋第188号（県教育長あて三重県埋蔵文化財センター所長報告）

○**文化財の発見・認定通知**（文化財保護法第100条第2項）

・第2次調査

平成23年3月11日付け、教委第12-4422号（四日市北警察署長あて県教育長通知）

・第3次調査

平成23年11月24日付け、教委第12-4406号（四日市北警察署長あて県教育長通知）

・第6次調査

平成24年1月16日付け、教委第12-4417号（四日市北警察署長あて県教育長通知）

・第7次調査

平成25年1月18日付け、教委第12-4422号（四日市北警察署長あて県教育長通知）

第5節 調査の方法

地区設定 中野山遺跡では、道路完成後に周辺地域の開発も予想されることから、四日市市教育委員会とも協議し、100m四方の大地区を設定した。

具体的には、世界測地系第IV系のY = 53,000 m・X = - 105,300 mの地点を基点として、遺跡の北西隅から南東端までを網羅する100m×100mの大地区（A～U）を設定した（第4図）。

さらに、大地区の中に東西、南北とも100mを25分割した4m×4mを1単位とする小地区（グリッド）を設定した。各グリッドは北西隅を基点とし、調査区の西から東へは1～25の算用数字、北から南へはA～Yのアルファベットを付与した。小地区の名称は、大地区の記号を頭に、アルファベットと数字を組み合わせて表している（例：L-A1）。

掘削と検出 表土掘削は重機（バックホウ）を用いて行い、グリッドを表す地区杭の設置後に、人力による包含層掘削を行った。包含層掘削後は、ジョレ

ン又はステーキホー等で遺構検出面を精査して遺構検出を行った。その際、遺構の重複関係など、検出状況を記録するために、1/40の縮尺で、遺構略測図（以下、遺構カード）をグリッドごとに作成した。さらに、遺構カードをもとに1/100の遺構略測図を作成し、掘立柱建物や遺跡全体の性格についての検討を行った。遺構掘削は、遺構カード記入後、順次、手作業で行った。

遺構番号 ピット以外の遺構については、例言で示したSK・SHなど遺構の形態等を表す略号を冠した上で、調査区全体で通し番号を付与した。通し番号については、第2次調査は201～232、第3次調査は301～412、第6次調査は601～604、第7次調査は、北区：605～636、南区：701～756の番号を使用した。

ピットについては、遺物の出土したもの及び、無遺物のものでも、必要と判断したものについてはグ

リッドごとに番号を付与した。

遺構実測図 第2次調査区の遺構実測については、1/20で手描き実測を行った。第3次調査からは空中写真測量を実施し、縮尺1/50と1/100の遺構図・等高線図・遺構平面図を作成した。この場合、「遺構図」には遺構のみを、「等高線図」には遺構と等高線を、「遺構平面図」には遺構、等高線と標高を記載した。なお、各土層断面図は1/20で作成した。特に重要と思われる遺構については、個別に1/10または1/20の実測図を作成した。

写真撮影 フィルムは、モノクロネガとカラーリバーサルフィルムを用い、35mm・ブローニー判（6×6cm）・4×5inch判を使用した。検出状況等は

適宜撮影を行い、完掘後の遺構や調査区全景の撮影は、約5mの足場の上から行った（第3次調査南区は、約10mの高所作業車の上からも撮影を行っている）。調査区遠景と垂直写真は、ラジコンヘリを用いて上空から撮影した。遺物の写真撮影には、デジタルカメラ（Nikon D800E）を使用した。

整理作業 出土遺物は、洗浄、接合、注記を行った後、出土地点・出土遺構ごとに分類した。さらに実測すべき遺物を選別し、実測を行った。実測された遺物は実測図との照合ができるよう遺物と図面の両方に「R」を付した実測登録番号（「R○○○ - ○○」）を与えた。

第6節 普及公開活動

発掘調査に伴う普及公開活動としては、現地説明会・遺跡見学会の開催、調査だよりの発行などを行った。現地説明会は発掘調査現場で遺跡の中を歩き、出土した遺物を間近で見させていただいた。第2次調査では平成22年12月4日に行い、約150名の参加を得た。第3次調査では平成23年10月2日に行い、約320名の参加を得た。第7次調査では、平成24年10月13日に行い、約300名の参加を得た。

遺跡見学会は、平成22年12月16日、地元の下野小学校6年生児童と引率教師の約100名を対象に、現地説明会とほぼ同じ内容で行った。

地元の方々や関係者に発掘調査の成果の速報を知っていただくために、『東海環状自動車道発掘調査だよりの』を随時作成・配布した。平成22年度は第1～3号を、平成23年度は第4～5号を、平成24年度は第6～8号を配布した。



写18 第2次調査 現地説明会



写19 下野小学校 遺跡見学会

第Ⅱ章 位置と環境

第1節 地理的環境

位置と地形 中野山遺跡（1）は、三重県四日市市北山町字中野山に所在する。ここは近畿三角帯^①の東部、鈴鹿山脈東嶺から伊勢湾に至るまでの範囲に位置し、旧伊勢国の北部にあたることから、北勢地域（地方）と呼ばれることが多い。北勢地域には、員弁川や朝明川など、鈴鹿山脈から伊勢湾に向かって西から東へ流れる河川が数kmごとにあり、各河川の流域には、鈴鹿山脈の山岳地形をはじめ、扇状地、河岸段丘、沖積平野など、比較的小規模ながらも変化に富んだ地形が形成されている。

各流域は河川と河川の間に形成された段丘や丘陵によってやや隔てられる形となっており、明治以前の旧郡境もそれらの頭頂部や尾根沿いに設けられていることが多く、それらは現在も市町の境界として踏襲されている部分が多く見受けられる。

中野山遺跡は、そのような段丘のひとつである、員弁川と朝明川の間に形成された河岸段丘上にあり、立地する中位段丘面の標高は約 50 m、段丘下にある沖積地との標高差は約 25 m である。朝明川の河口からは約 10km ほど内陸に位置し、この辺りの中位段丘面は、員弁川上流でみられる高位段丘面ほどは開析を受けていないが、段丘崖は丸みを帯び小規模な開析谷が多く形成されている。

調査前の現況は畑地と山林であったが、地元の方の話では戦前までは桑畑として利用されていたという。

地質 山地は基盤岩、丘陵は東海層群の未固結堆積

物から構成され、それらの上に段丘堆積物が分布している。鈴鹿山脈東嶺の基盤岩は、竜ヶ岳を境に北側では中生代に形成された堆積岩類、南側は白亜紀形成の花崗岩類である。東海層群は、鮮新～更新世に形成された河成・湖成堆積物である。

中位段丘面の被覆層では、テフラ分析の結果^②、試料採取地点によってばらつきはあるものの、深度 10～20cm に鬼界アカホヤ (K-Ah) 層準（降下年代 7.3ka）、深度 35～60cm に始良 (AT) 層準（降下年代 26～29ka）が推定されている。また、これより下位の複数の層準では、高温型石英（β 石英）が検出されており、第四紀後期以降に降灰した広域テフラのうち、β 石英を含むのは鬼界葛原テフラ (K-Tz)（降下年代 95ka）に限られることから、この中位段丘面が、K-Tz 降灰以前に離水したものと推定される根拠となっている。以上のことから、この段丘は海洋酸素同位体ステージ (MIS) 5 e の段丘に比定され、形成は 12.5 万～11 万年前からと推定されている。

【註】

- ①本節の記述にあたっては以下の文献を参照した。
太田陽子ほか『日本の地形6 近畿・中国・四国』東京大学出版会 2004、近畿地方土木地質図編纂委員会『近畿地方土木地質図解説書』2003、四日市市『四日市市史 第一巻 資料編 自然』1990。
- ②テフラ分析については、石村大輔「第四紀後期の伊勢湾西岸地域の段丘形成過程と地殻変動」『地学雑誌』No. 122 東京地学協会 2013 による。

1 中野山遺跡	11 小牧南遺跡	21 山村遺跡	31 江平古墳群	41 飛塚古墳	51 六谷遺跡
2 川向遺跡	12 鈴山遺跡	22 西ヶ広遺跡	32 野々田古墳群	42 西辻遺跡	52 中村遺跡
3 前野遺跡	13 覚正垣内遺跡	23 山奥遺跡	33 宇賀新田古墳群	43 鐘撞遺跡	53 久留倍遺跡
4 高原遺跡	14 宮山遺跡	24 伊坂遺跡	34 大辻古墳群	44 北山A遺跡	
5 照光寺遺跡	15 丸岡遺跡	25 小牧北遺跡	35 上小原古墳群	45 筆ヶ崎西遺跡	
6 野々田遺跡	16 権現坂遺跡	26 北山城跡	36 下小原古墳群	46 広山B遺跡	
7 中山遺跡	17 山田遺跡	27 筆ヶ崎古墳群	37 猪名部神社古墳群	47 西山遺跡	
8 中大野遺跡	18 志知南浦遺跡	28 西山古墳群	38 岡古墳群	48 新野遺跡	
9 北野遺跡	19 東村城跡	29 門ノ上古墳群	39 麻績塚古墳群	49 北山C遺跡	
10 村前遺跡	20 菟上遺跡	30 鶯谷古墳群	40 広古墳群	50 下江平遺跡	

第2表 遺跡位置図番号



第5図 遺跡位置図 (1 : 80,000)

第2節 歴史的環境

旧石器時代 この地域では、旧石器時代の遺跡として明確なものは確認されていないが、員弁川上流の川向遺跡^③（2）で、ナイフ型石器の可能性を持つチャート製剥片石器の出土が報告されている。

縄文時代 草創期では、矢柄研磨器13点が採集されている菰野町の西江野A遺跡の他、同町鶴岡・雁沢に、有茎尖頭器が多数採集されている前野遺跡（3）と高原遺跡（4）がある^④。また、員弁川上流域の照光寺遺跡^⑤（5）でもチャートや石英製の有茎尖頭器の採集例が報告されている。

早期では、員弁川支流の宇賀川左岸に、前述の照光寺遺跡、野々田遺跡^⑥（6）があり、押型文土器や繊維土器が多く採集されている。

前期では、員弁川流域に中山遺跡^⑦（7）、照光寺遺跡、中大野遺跡^⑧（8）、北野遺跡^⑨（9）がある。中大野遺跡と北野遺跡では発掘調査が行われており、北白川下層式に併行する土器や石匙・石斧などが出土している。

中期では、員弁川左岸に川向遺跡、村前遺跡^⑩（10）、朝明川右岸に小牧南遺跡^⑪（11）、三滝川左岸に鈴山遺跡^⑫（12）がある。いずれの遺跡からも北白川C式や中富・神明式に併行する遺物が出土しているが、特に小牧南遺跡では、竪穴住居や石囲炉の他に掘立柱建物が数棟検出されており注目される。

後期では、員弁川上流の覚正垣内遺跡^⑬（13）で、竪穴住居や中津式土器の土坑一括資料などの報告がある。また、宮山遺跡^⑭（14）でも中津式の土器が相当数出土している。朝明川流域では、左岸に丸岡遺跡^⑮（15）がある。

晩期は、員弁川流域に、宮山遺跡、権現坂遺跡^⑯（16）、野々田遺跡、山田遺跡^⑰（17）、志知南浦遺跡^⑱（18）がある。各遺跡で突帯文土器の土器棺墓などが確認されているが、宮山遺跡では、平地式住居の可能性を持つピット群も報告されている。

縄文時代の遺跡は、員弁高等学校郷土史研究部の活動や東海環状自動車道建設に伴う調査が行われていることもあり、員弁川上流域に報告例が多い。それに比べると員弁川中・下流域や朝明川流域の調査はあまり進展していないが、徐々に各所で遺跡の存

在が報告されるようになってきており、今後もさらに多くの遺跡が発見されるものと思われる。

弥生時代 員弁川上流域は、東村城跡^⑲（19）の調査で前期の土器が出土していることや、各所で少量ながら弥生時代の全期間にわたる遺物が採集されていることから、小規模ながらも早くから各地に集落が点在していたことが推察できる。中でも宮山遺跡は、中期の石斧生産集落として注目されている。

朝明川流域では、上流の菰野町内にはほとんど遺跡の報告例がなく、中・下流域の四日市市内に、中期の菟上遺跡^⑳（20）、山村遺跡^㉑（21）、後期の西ヶ広遺跡^㉒（22）、山奥遺跡^㉓（23）等があり、大規模な集落や方形周溝墓などが確認されている。また、伊坂遺跡^㉔（24）では銅鐸出土の伝承がある。

中野山遺跡の周辺では、小牧北遺跡^㉕（25）で後期の方形周溝墓、北山城跡^㉖（26）で同じく後期の竪穴住居が報告されている。

古墳時代 古墳^㉗は、員弁川や朝明川流域の段丘上やその斜面、および、朝明川上流の扇状地に多くつくられている。ただし、員弁川流域でも支流によって差があり、宇賀川・山田川・戸上川のように古墳が多く集中する地区と、青川・源太川・明智川・嘉例川のように、古墳がほとんどみられない地区があるなど一様ではない。この地域の古墳（図中の黒丸）は、単独の円墳または2～10基未満の円墳で構成されることが多く、10基以上の群集墳は、筆ヶ崎古墳群（27）、西山古墳群（28）、門ノ上古墳群（29）、鶯谷古墳群（30）、江平古墳群（31）、野々田古墳群（32）、宇賀新田古墳群（33）、大辻古墳群（34）、上小原古墳群（35）、下小原古墳群（36）がある。群集墳の多くは横穴式石室を伴うことや副葬品等から後期～終末期のものとみられるが、特に筆ヶ崎古墳群は中野山遺跡とは距離も近く、集落の時期とも重なるため、関連が窺える。

また、少数であるが、円墳以外の古墳として、猪名部神社古墳群（37）、岡古墳群（38）、麻績塚古墳群（39）、広古墳群（40）、西山古墳群に方墳や前方後円（方）墳がある。

なお、海蔵川上流の竹谷川沿いに前期末とされる

飛塚古墳^㉔ (41) があり、近年の発掘調査で家形埴輪の破片が出土しており、前期古墳の少ないこの地域では貴重といえる。

古代 律令制下では、員弁川の中・上流域に員弁郡、朝明川流域に朝明郡が置かれ、員弁郡には、野摩（也未）・笠間（加佐萬）・石加（以之加）・美耶（三也）・久米（久女）の5郷、朝明郡には田光（多比加）・杖部（鉢世都加倍）・額田（沼加多）・大金（於保加禰）・豊田（止與多）・訓覇（久留倍）の6郷がある^㉕。

中野山遺跡の西方には、「大鐘」の地名があり、それを遺称として、この一帯を大金郷に比定する見方は、『勢陽五鈴遺響』^㉖など近世の地誌にもみられ、採集遺物から、西辻遺跡（42）や鐘撞遺跡（43）周辺をその中心とする見方もある^㉗。また、丘陵上にも、北山A遺跡^㉘（44）、筆ヶ崎西遺跡（45）、広山B遺跡^㉙（46）西山遺跡^㉚（47）、新野遺跡（48）、北山C遺跡（49）など、飛鳥・奈良時代の集落は多くあり、大金の名の由来ともされる「鍛冶」に関連する遺構・遺物もこれらの遺跡から多くみつまっている。

朝明川流域では他に、上流の菰野町内に下江平遺跡^㉛（50）、六谷遺跡^㉜（51）、中・下流域に菟上遺跡、西ヶ広遺跡、山奥遺跡、中村遺跡^㉝（52）・久留倍遺跡^㉞（53）がある。特に久留倍遺跡は、政庁・正倉院等の施設がみつき、朝明郡衙に比定されており、重要である。

なお、員弁郡は940年、朝明郡は1017年に神宮に施入され神郡とされており、以降、多くの御厨・御園が各地にたてられた。これらの多くは中世に至っても存続していく。

中世 古代から引き続き、北勢地域には御厨・御園が多く存続しており、1364年の式年遷宮に向けて作成された『神鳳抄』^㉟には、員弁郡に48箇所、朝明郡に31箇所の御厨・御園等が記されている。

中世後期になると、朝明郡には「十ヶ所人数」と称される幕府奉公衆が存在し、また、員弁郡・朝明郡には、国人・地侍によって「北方一揆」という一揆集団が組織された^㊱。これらの国人領主の拠点とされる中世城館がこの地域には数多く残されており、それらは中世の街道や河川の流れに沿うようなかたちで1～3kmおきに立地している^㊲。

【註】

- ③以下、川向遺跡については、北勢町教育委員会『川向遺跡発掘調査報告』1993による。
- ④久保勝正「三重郡菰野町鶴岡・雁沢周辺出土の有茎尖頭器と『矢根石器』について」『三重県史研究』13 三重県 1997。
- ⑤以下、照光寺遺跡については、平岡 容「照光寺遺跡の考察」『猪名部』第4号 三重県員弁高等学校郷土研究部 1951、篠木二郎「員弁郡石榑村照光寺西南遺跡出土遺物」『猪名部』第9号 三重県員弁高等学校郷土研究部 1955、岩野見司・並河 豊「照光寺遺跡」『大安町史』第1巻 大安町教育委員会 1986による。
- ⑥以下、野々田遺跡については、並河 豊「野々田遺跡と遺物について（上）・（下）」『猪名部』第4・5号 三重県員弁高等学校郷土研究部 1951、岩野見司・並河 豊「野々田遺跡」『大安町史』第1巻 大安町教育委員会 1986による。
- ⑦並河 豊「治田村中山遺跡」『猪名部』第2号 三重県員弁高等学校郷土研究部 1950、並河 豊「続・治田村中山遺跡」『猪名部』第3号 三重県員弁高等学校郷土研究部 1950、川瀬 聡「北勢町中山遺跡とその遺物」『研究紀要』第8号 三重県埋蔵文化財センター 1999。
- ⑧並河 豊「中大野遺跡発掘概要」『猪名部』第8号 三重県員弁高等学校郷土研究部 1954、岩野見司・並河 豊「中大野遺跡」『大安町史』第1巻大安町教育委員会 1986。
- ⑨以下、北野遺跡については、鷲野憲成他『北野遺跡発掘調査報告書』員弁町教育委員会 1981、蔭山誠一他『北野遺跡第2次発掘調査』員弁町教育委員会 1994による。
- ⑩以下、村前遺跡については、東員町教育委員会『村前遺跡発掘調査報告』1993による。
- ⑪以下、小牧南遺跡については、三重県埋蔵文化財センター『近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅳ』2014による。
- ⑫以下、鈴山遺跡については、三重県埋蔵文化財センター『近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅳ』2014による。
- ⑬以下、覚正垣内遺跡については、三重県埋蔵文化財センター『覚正垣内遺跡発掘調査報告』2003
- ⑭以下、宮山遺跡については、三重県埋蔵文化財センター『宮山遺跡発掘調査報告』1999、同『宮山遺跡（第2次）・大久保城跡』2003による。
- ⑮以下、丸岡遺跡については、四日市市『四日市市史第二巻資料編考古Ⅰ』1988、四日市市『四日市市史第三巻資料編考古Ⅱ』1993による。
- ⑯以下、権現坂遺跡については、三重県埋蔵文化財センター『権現坂遺跡発掘調査報告』2002による。
- ⑰以下、山田遺跡については、東員町教育委員会『山田遺跡発掘調査報告-縄文時代編-』1991による。
- ⑱以下、志知南浦遺跡については、三重県埋蔵文化財センター『志知南浦遺跡発掘調査報告』2008による。
- ⑲以下、東村城跡については、三重県埋蔵文化財センター『東村城跡発掘調査報告』2000による。
- ⑳以下、菟上遺跡については、三重県埋蔵文化財センター『菟上遺跡発掘調査報告』2005による。
- ㉑以下、山村遺跡については、三重県埋蔵文化財センター『金塚遺跡・金塚横穴墓群・山村遺跡発掘調査報告』

- 2002、三重県埋蔵文化財センター『山村遺跡（第2次）発掘調査報告』2004による。
- ②以下、西ヶ広遺跡については、三重県教育委員会「西ヶ広遺跡」『日本道路公団東名阪道路埋蔵文化財調査報告』1970、四日市教育委員会『西ヶ広遺跡発掘調査報告-D地区-』1972、三重県埋蔵文化財センター『西ヶ広遺跡（第3・4次）発掘調査報告』2006による。
- ③以下、山奥遺跡については、四日市市教育委員会『山奥遺跡Ⅰ』2003、四日市市教育委員会『山奥遺跡Ⅱ』2004による。
- ④三重県埋蔵文化財センター『伊坂遺跡発掘調査報告』2004
- ⑤以下、小牧北遺跡については、三重県埋蔵文化財センター『小牧北遺跡発掘調査報告』2007による。
- ⑥以下、北山城跡については、三重県埋蔵文化財センター『近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ』2013、同『近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅳ』2014による。
- ⑦以下、この地域の古墳については、三重県『三重県史資料編考古Ⅰ』2005、四日市市『四日市市史第二巻資料編考古Ⅰ』1988、四日市市『四日市市史第三巻資料編考古Ⅱ』1993、四日市市教育委員会『四日市市遺跡地図-改訂版-』1994、いなべ市教育委員会『三重県いなべ市内遺跡分布地図』2009、三重大学人文学部考古学研究室『宇賀新田古墳群』2003、三重県埋蔵文化財センター『近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ』2013、同『近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅳ』2014による。
- ⑧三重県埋蔵文化財センター『飛塚古墳発掘調査報告』2015。
- ⑨各郷の表記と訓は、京都大学文学部国語学国文学研究室『諸本集成倭名類聚抄』のうち、那波道円天和古活字本による。
- ⑩安岡親毅『勢陽五鈴遺響』三重県郷土資料刊行会1975。
- ⑪四日市市『四日市市史第三巻資料編考古Ⅱ』1993
- ⑫以下、北山A遺跡・北山C遺跡・筆ヶ崎西遺跡については、三重県埋蔵文化財センター『近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ』2013、同『近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅳ』2014による。
- ⑬三重県埋蔵文化財センター『広山A遺跡・広山B遺跡発掘調査報告』2009。
- ⑭以下、西山遺跡・新野遺跡については、東員町教育委員会『西山遺跡・新野遺跡発掘調査報告書』1976による。
- ⑮菰野町教育委員会『下江平遺跡発掘調査報告Ⅰ』1987・同『下江平遺跡発掘調査報告Ⅱ』1988。
- ⑯三重県埋蔵文化財センター「六谷遺跡」『昭和58年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』1984。
- ⑰四日市市教育委員会『中村遺跡』1979。
- ⑱以下、久留倍遺跡については、四日市市教育委員会『久留倍遺跡5』2013による。
- ⑲『神風抄』は、塙保己一『群書類従 第一輯』続群書類従完成会1987所収のものによる。
- ⑳飯田良一「北伊勢の国人領主-十カ所人数、北方一揆を中心にして-」『年報中世史研究9』1984。
- ㉑なお、この地域の戦国時代を語る際によく出される「北勢四十八家」は、上述の国人等の伝承が近世の地誌や軍

記に叙述されたものである。確実な史料に基づくものではないため、史料として扱うには注意が必要である。

第三章 基本層序

中野山遺跡は標高約 50 m の中位段丘面に立地する。調査前の現況は、半分程度が畑地、残りが森林・荒蕪地であった。地元の方の話では、戦前は一面の桑畑で、戦中・戦後の食糧難の際に畑に変わり、現在は耕作者の高齢化もあり、荒れ地や森林が増えているという。

今回の調査区は、南北約 100 m ・東西約 500 m の範囲に広がり、調査面積は約 14,400㎡におよぶ。ジャンクション建設事業の関係から調査区は「北区」と「南区」に分かれた（第 4 図）。

北区 北区は段丘面の北側縁辺に位置しており、調査区の北側は部分的に段丘の縁辺に沿うかたちとなっている。面積は約 5,100㎡である。北区の層序は基本的に、第 I 層：表土・耕作土、第 II 層：灰黄褐色土、第 III 層：明黄褐色粘質土の 3 層である（第 6 図）。

第 II 層には、全体的に少量だが焼土粒や炭化物粒が含まれており、また部分的に地山をブロック状に含むところもあった。これらは開墾等で樹木が焼かれたり、抜根や耕作等で生じたものと考えられる。

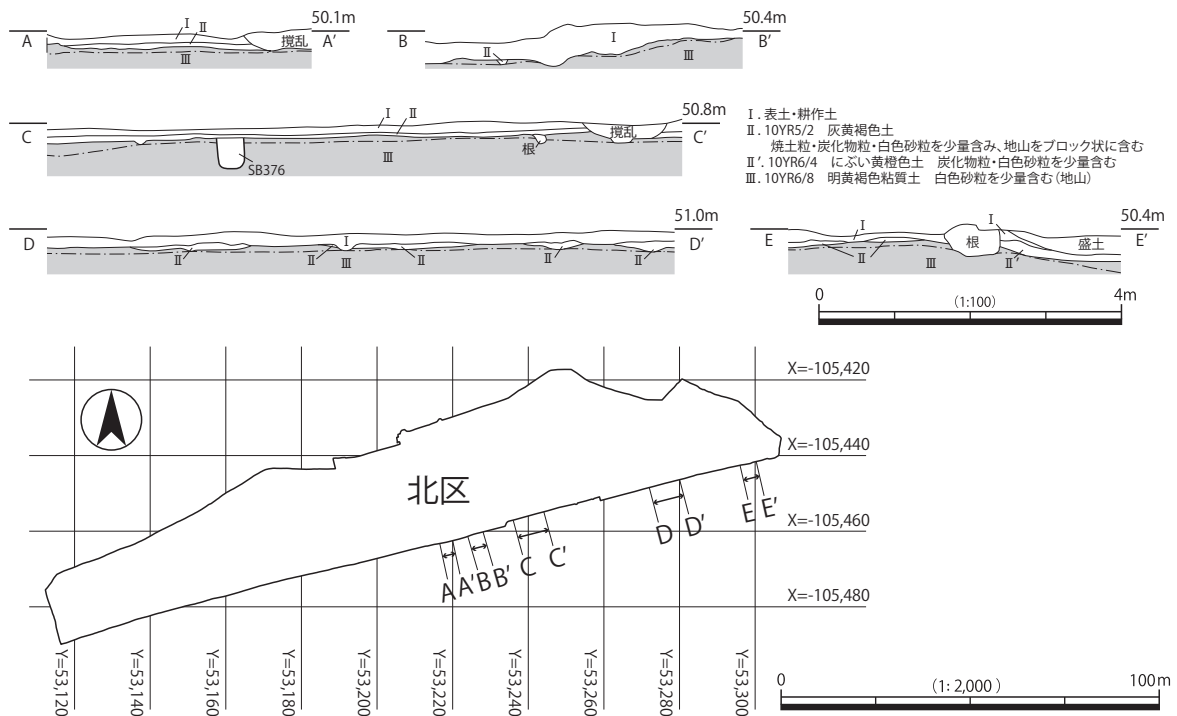
北区では飛鳥時代以降の遺構・遺物がほとんどみられないことから、飛鳥時代以降は樹木の繁茂する

状態となり、その後、時期は不明だが、樹木が伐採されたり焼き払われたりして開墾が行われ、耕作等も行われていた可能性が考えられる。飛鳥時代の遺構（S B 376 の柱穴）はこの第 II 層の下から第 III 層に掘り込まれており（C-C'）、北区では遺構検出を第 III 層（地山）の上面で行っている。

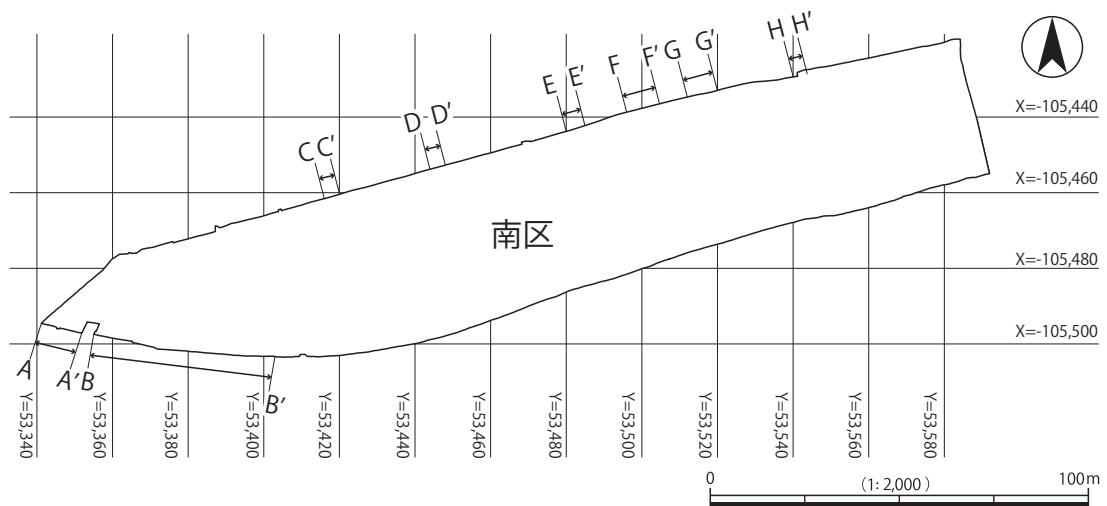
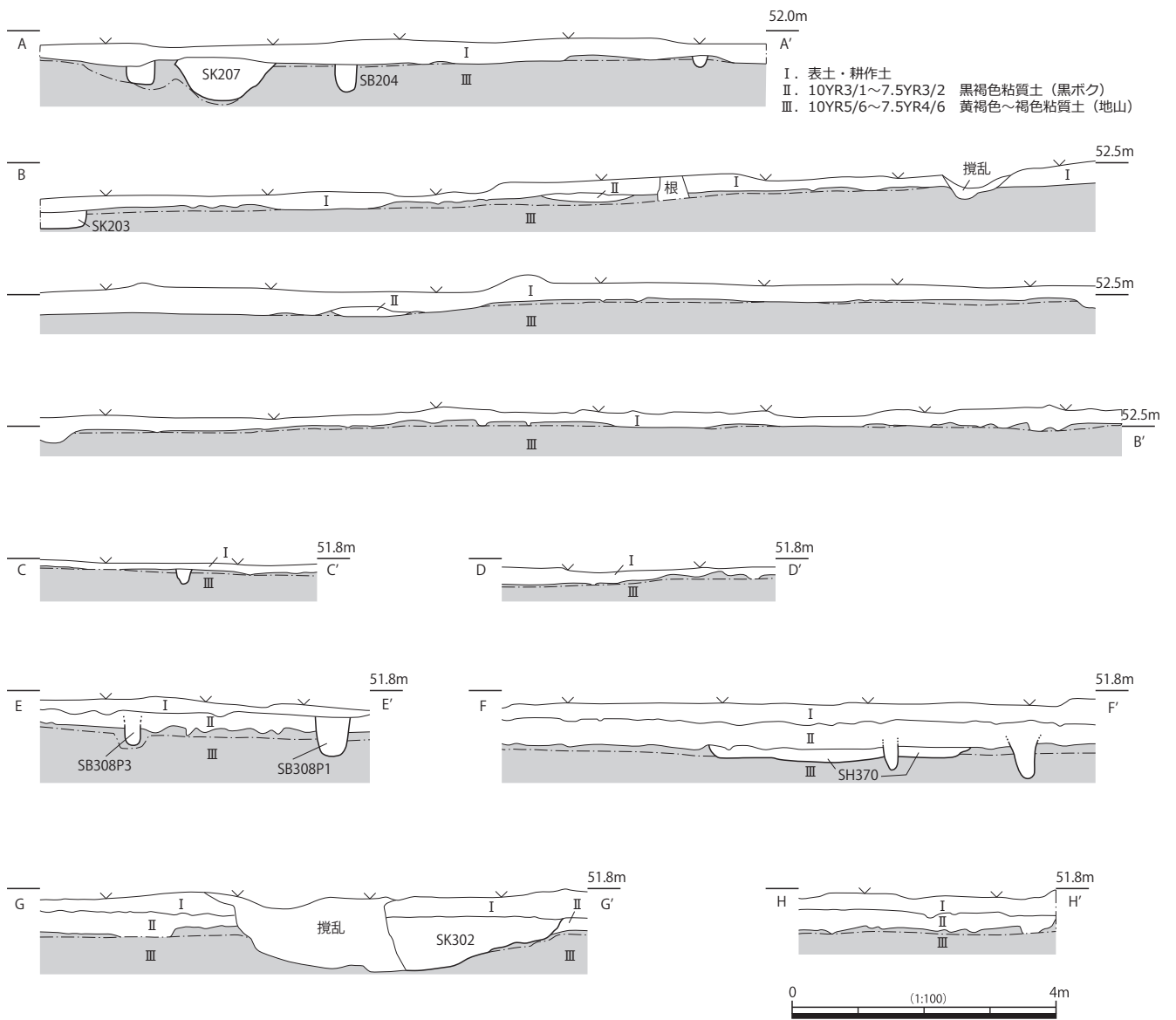
南区 南区は段丘面のほぼ中央に位置し、面積は約 9,300㎡である。南区の層序は基本的に、第 I 層：表土・耕作土、第 II 層：黒褐色粘質土（黒ボク）、第 III 層：黄褐色粘質土（地山）の 3 層である（第 7 図）。黒ボク層は調査区の東側（E-E' より東）で厚く、厚いところでは約 40cm の堆積がみられるが、西側にいくほど薄くなり、調査区の西側（D-D' より西）ではほとんど確認できなくなる。

飛鳥時代の遺構（S B 308 の柱穴）は、第 II 層の黒ボク層を掘り込んで第 III 層に達しており（E-E'）、縄文時代早期の遺構（S H 370）は、黒ボク層の下から地山に掘り込まれている（F-F'）。

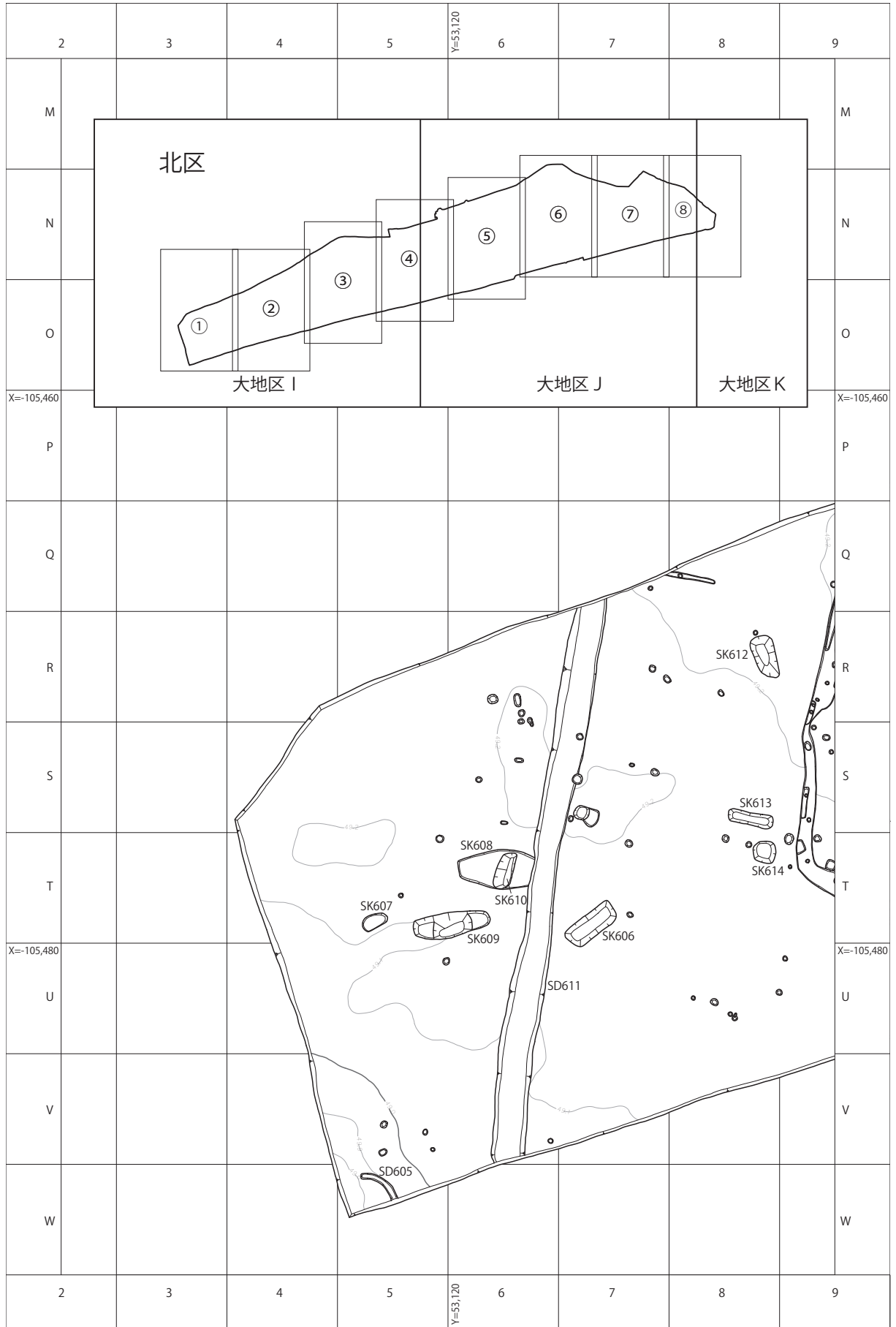
縄文時代早期以外の遺構は、埋土に黒ボクを多量に含むため、黒ボクそのものとは切り合いが分からないものがほとんどであった。そのため、南区では遺構検出を第 III 層（地山）の上面で行っている。



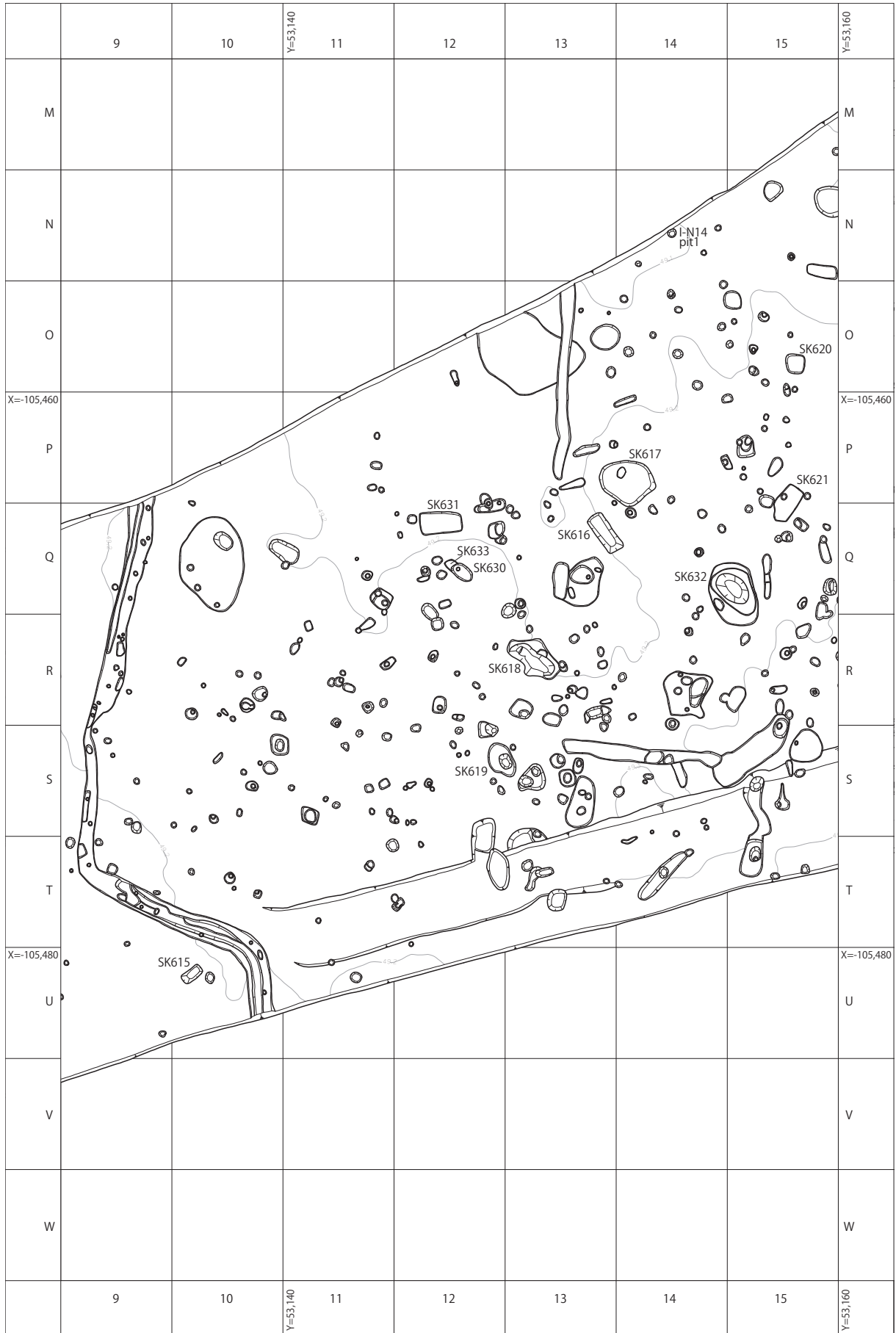
第 6 図 北区土層断面図 (1:100・1:2,000)



第7図 南区土層断面図 (1:100・1:2,000)



第8图 北区遺構平面図① (1 : 200)



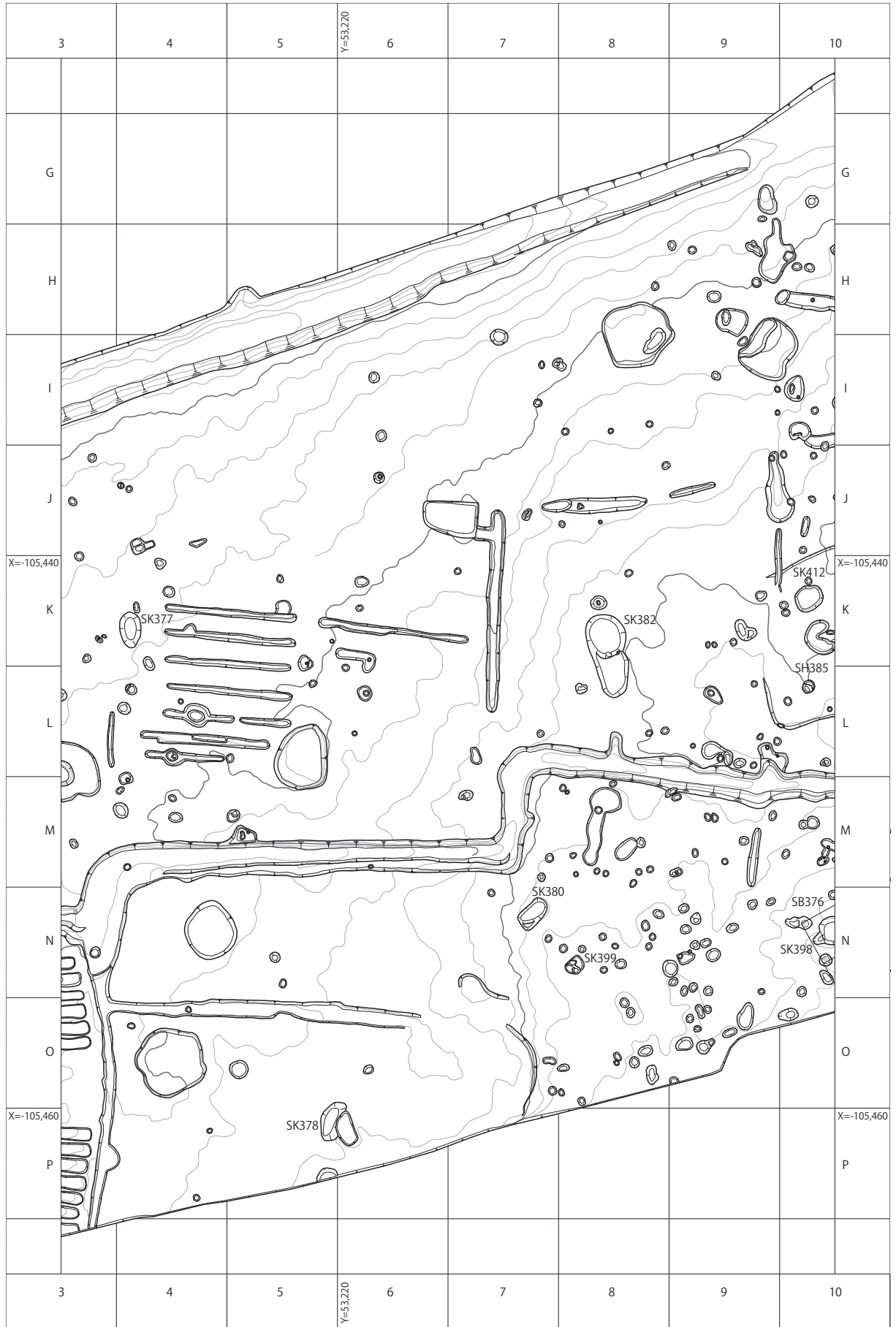
第9图 北区遺構平面圖② (1 : 200)



第10图 北区遺構平面図③ (1 : 200)



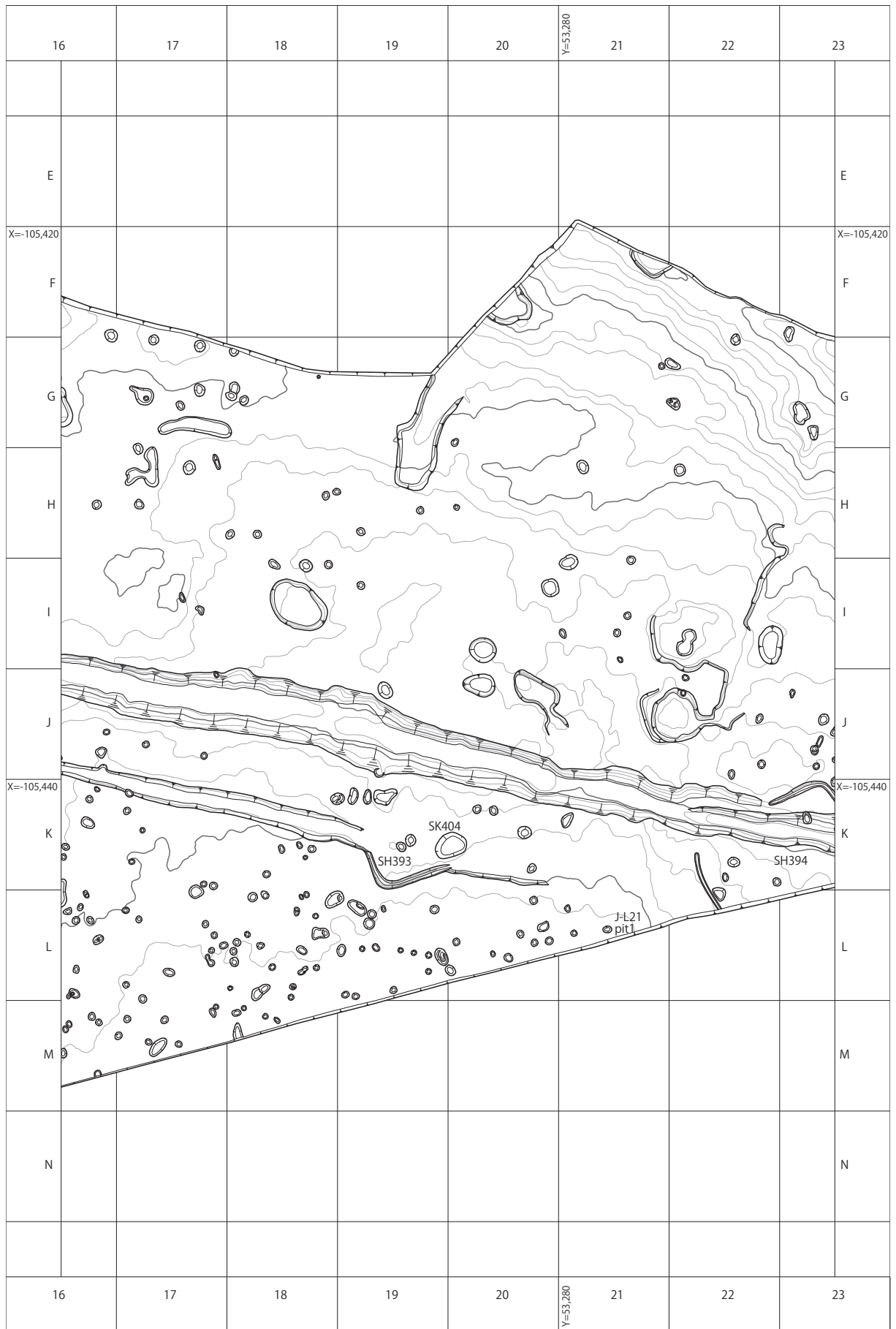
第11图 北区遺構平面図④ (1 : 200)



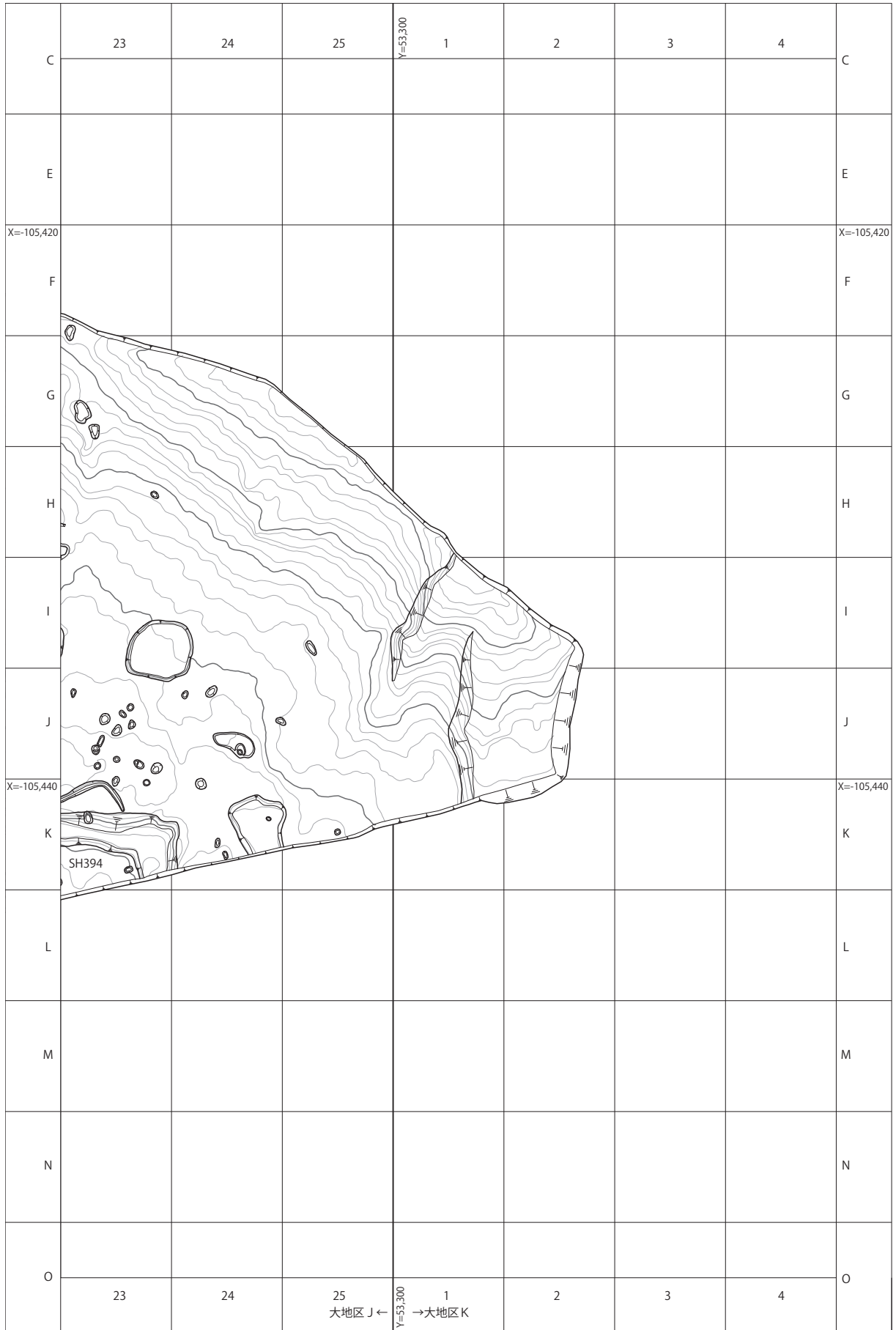
第12图 北区遺構平面図⑤ (1 : 200)



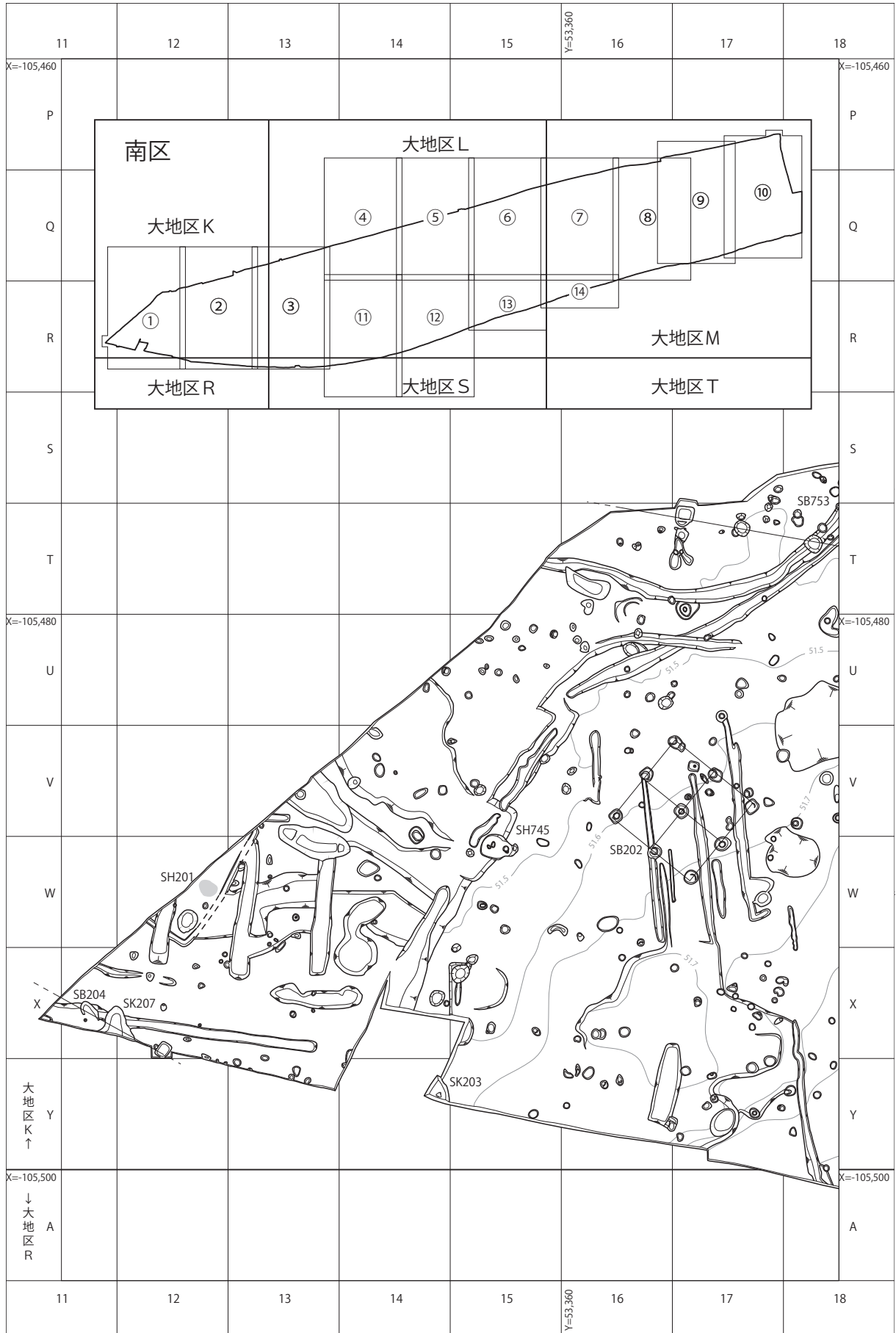
第13图 北区遺構平面図⑥ (1 : 200)



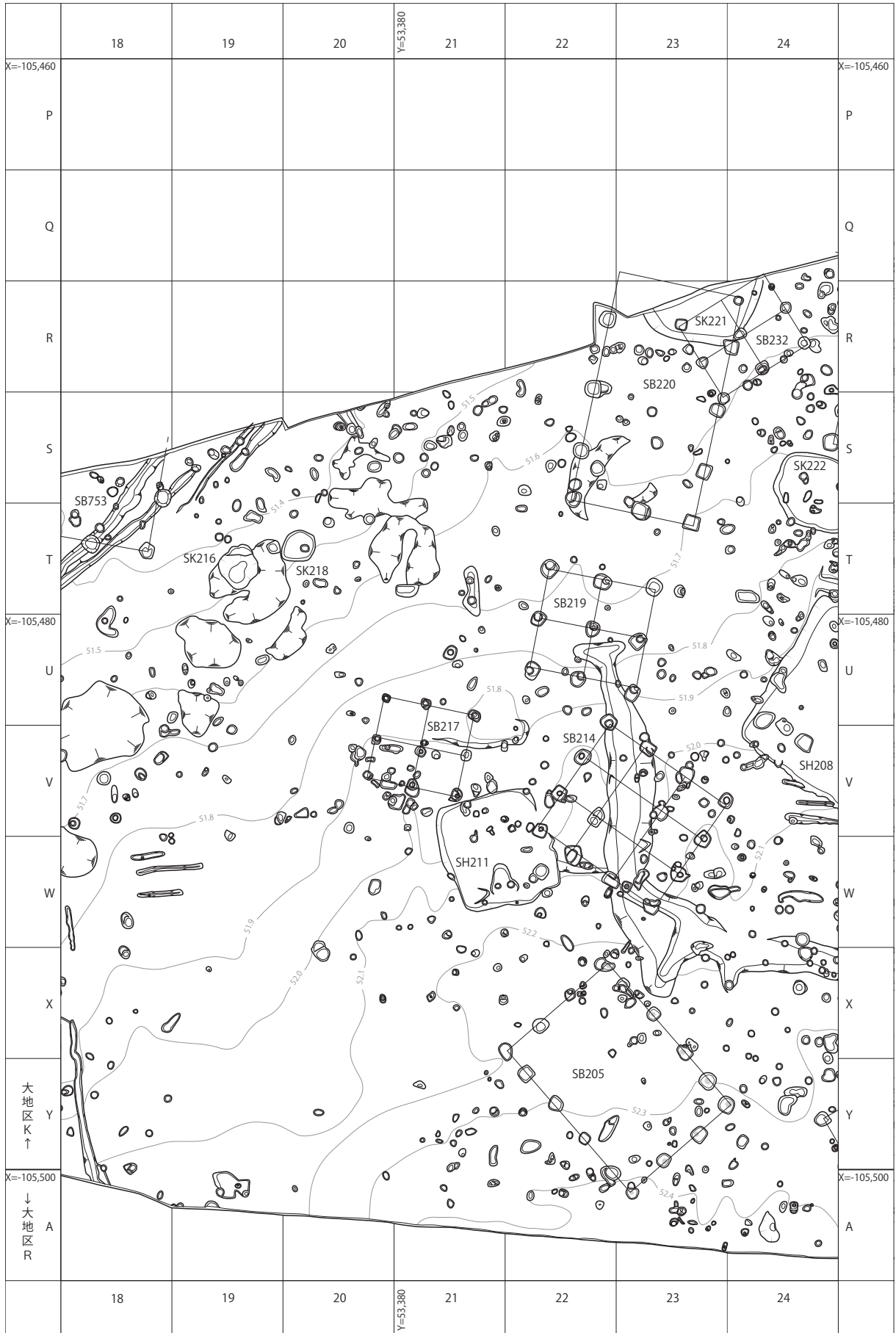
第14图 北区遺構平面図⑦ (1 : 200)



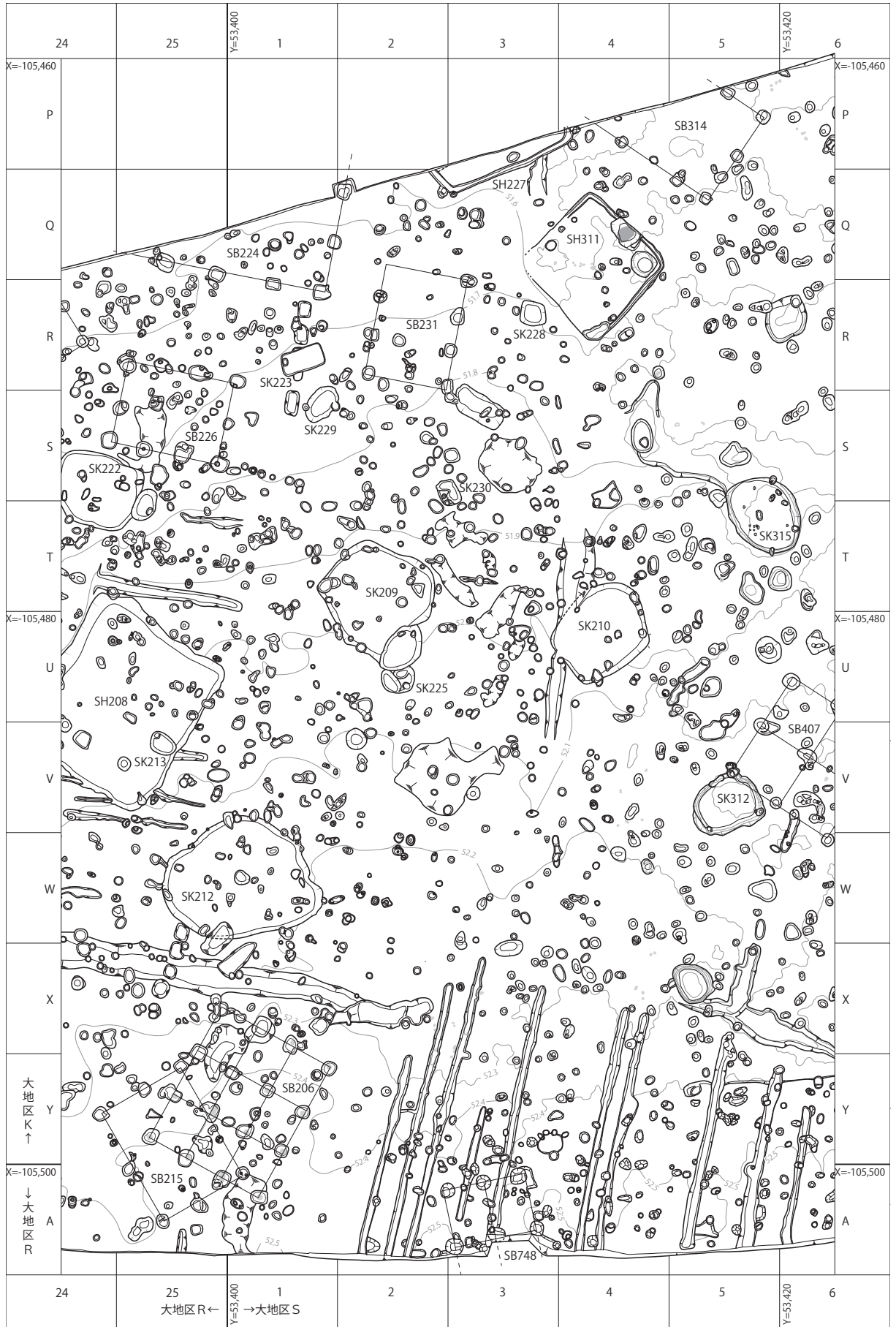
第15图 北区遺構平面图⑧ (1 : 200)



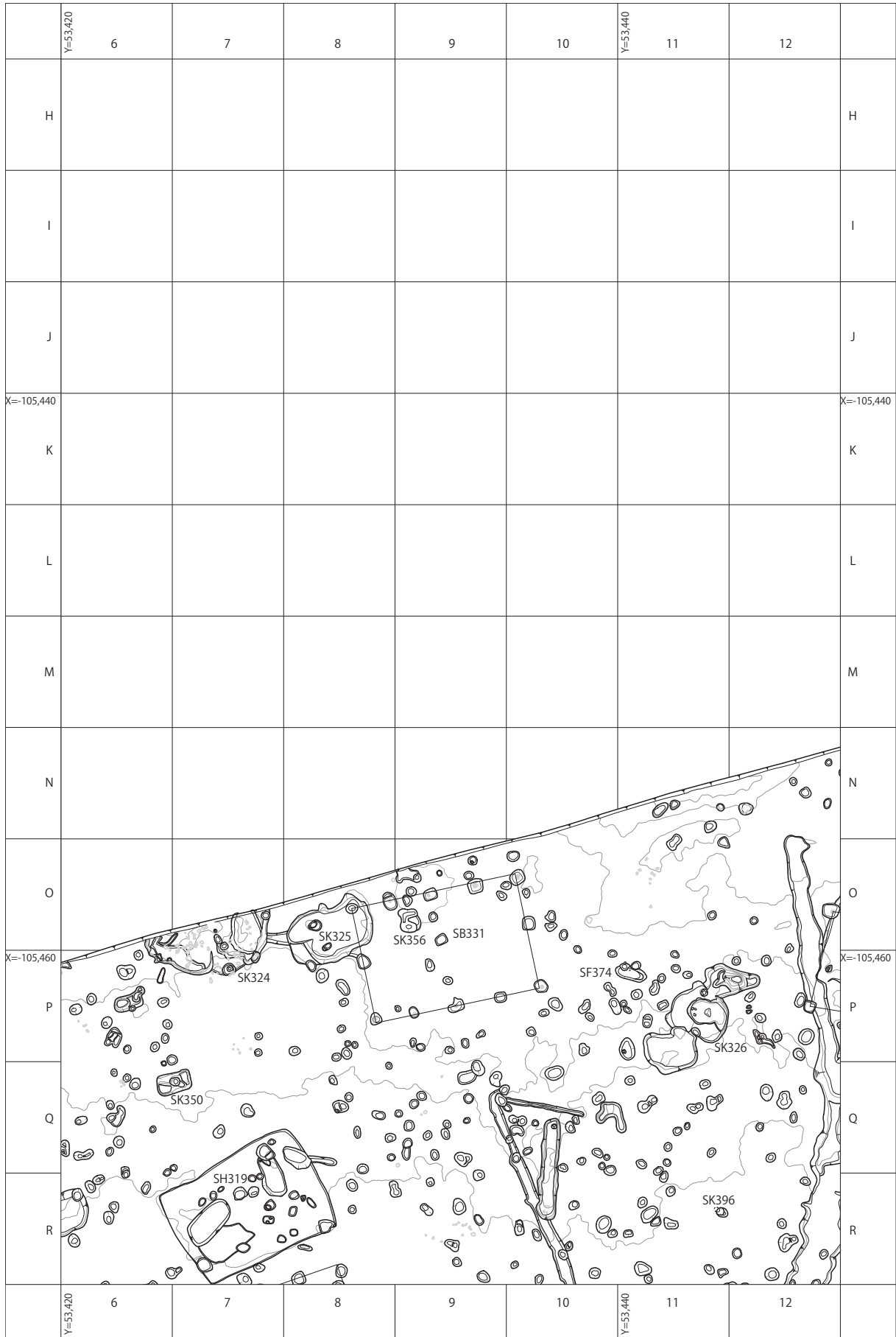
第16図 南区遺構平面図① (1 : 200)



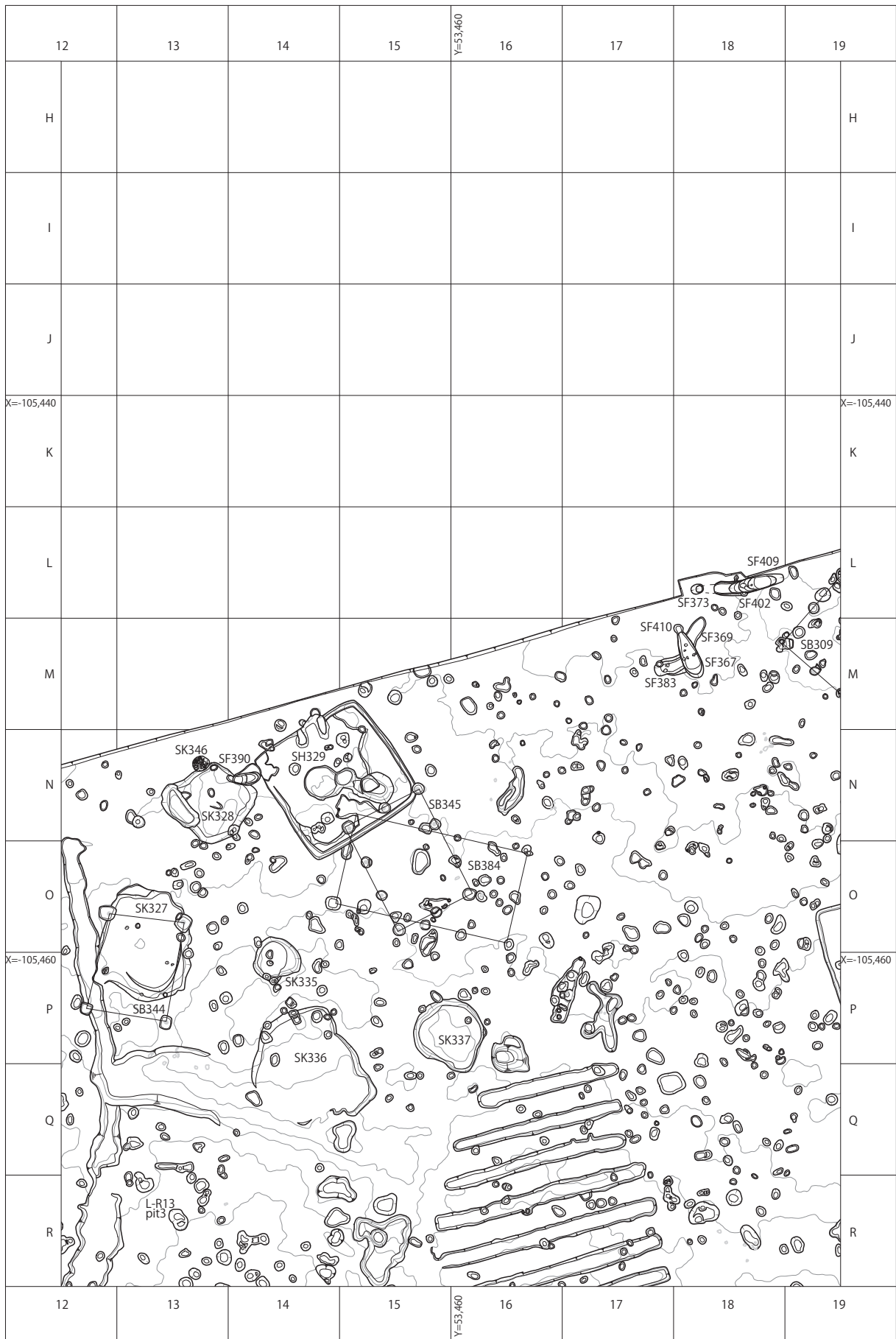
第17图 南区遺構平面図② (1 : 200)



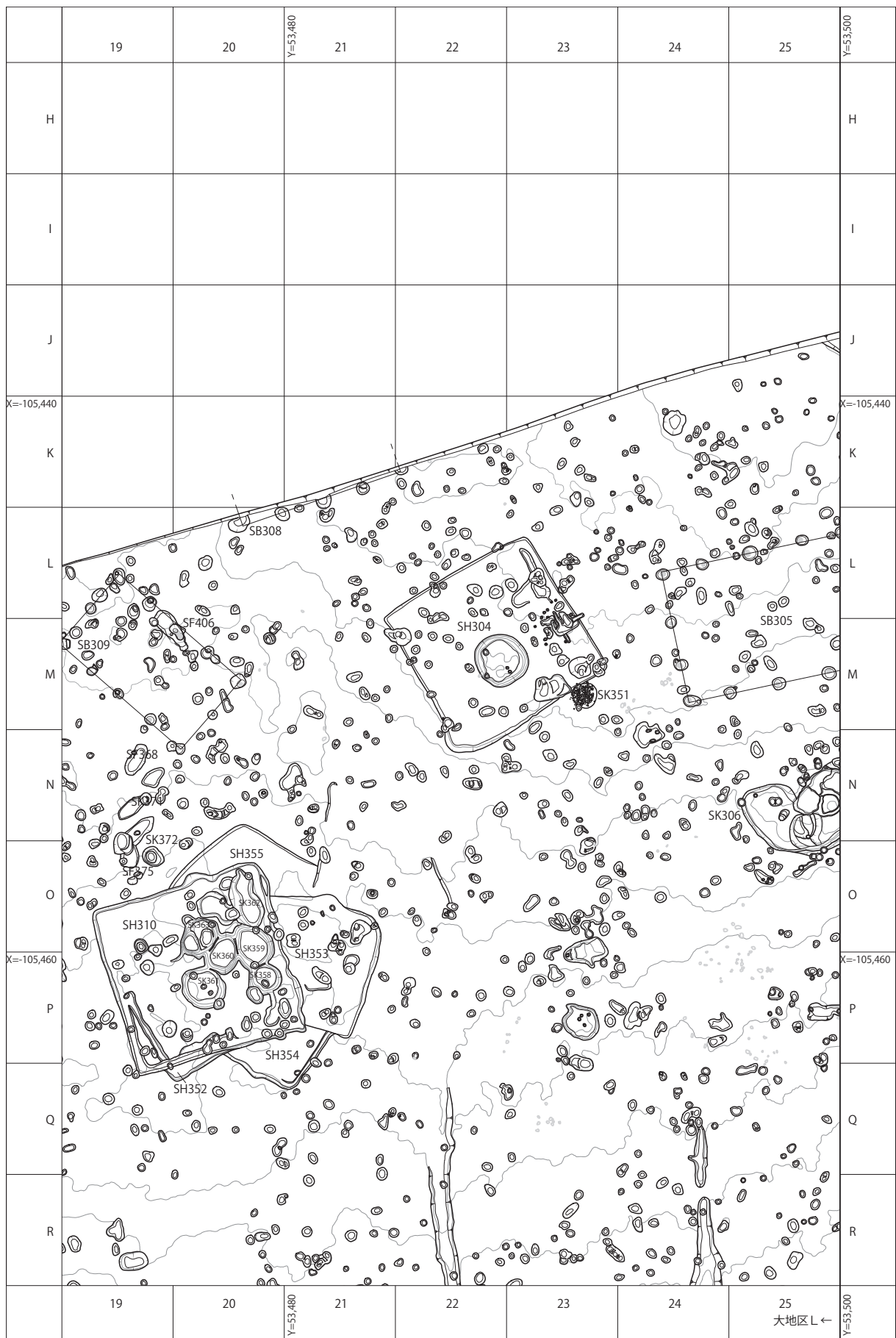
第18図 南区遺構平面図③ (1 : 200)



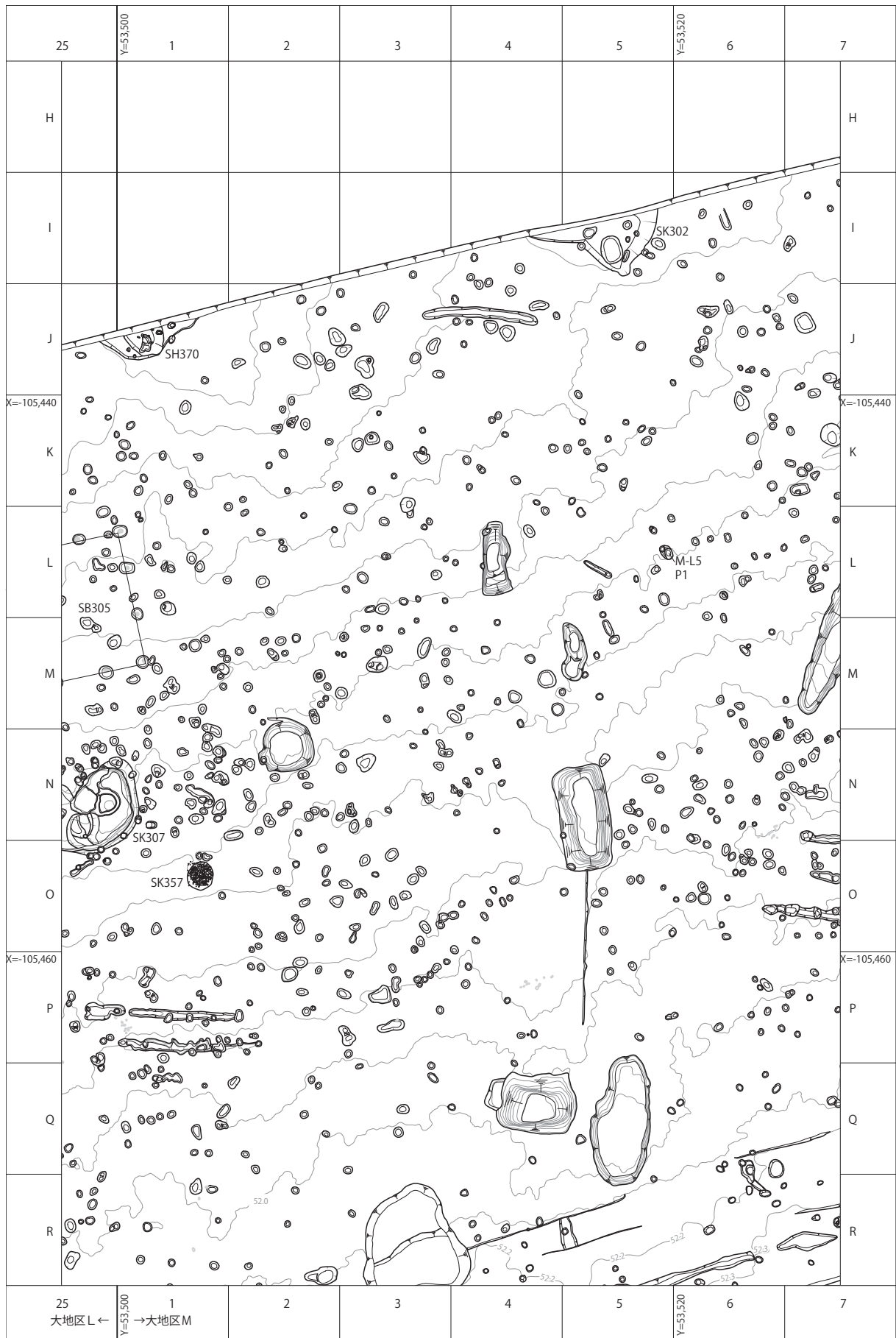
第19图 南区遺構平面図④ (1 : 200)



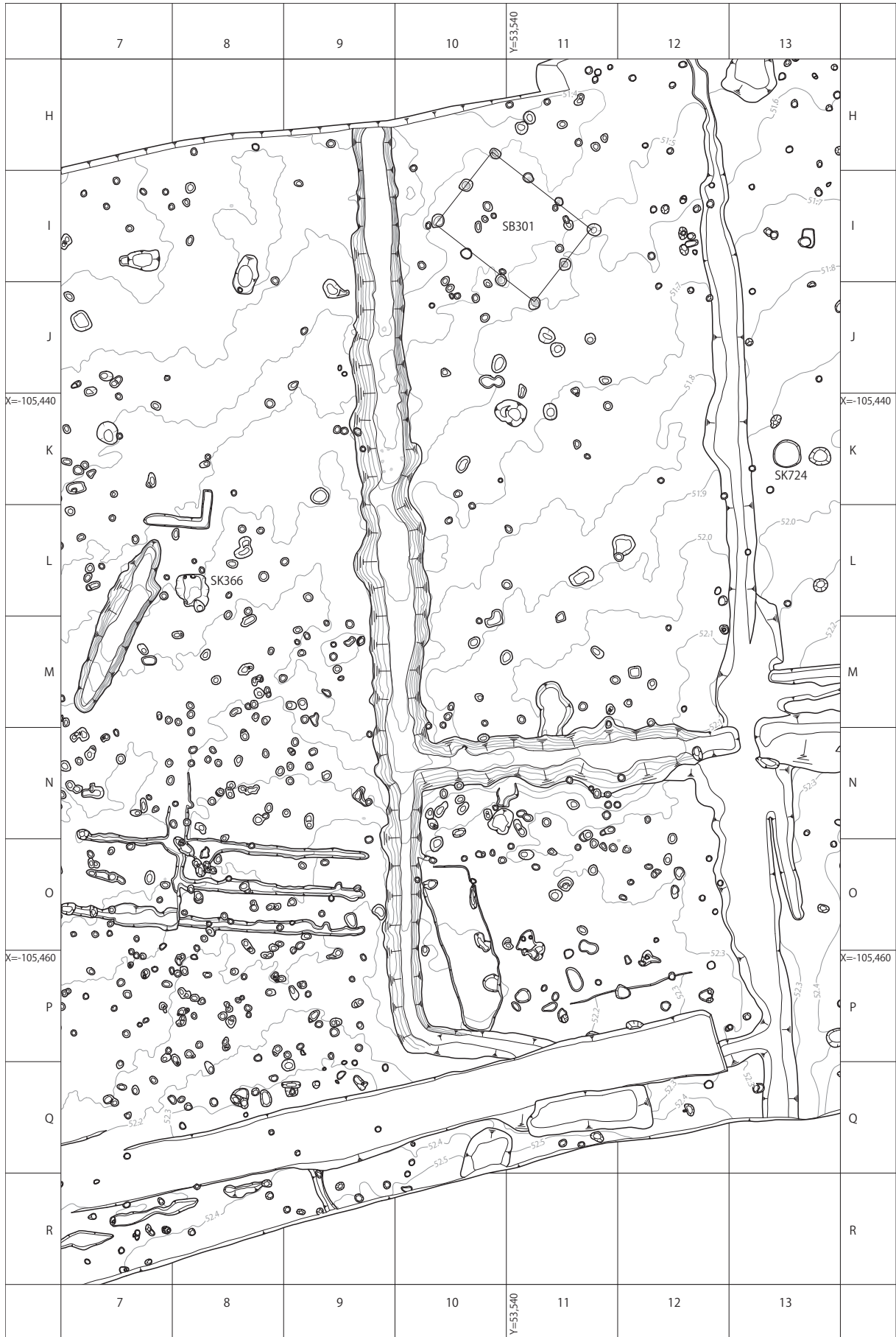
第20図 南区遺構平面図⑤ (1 : 200)



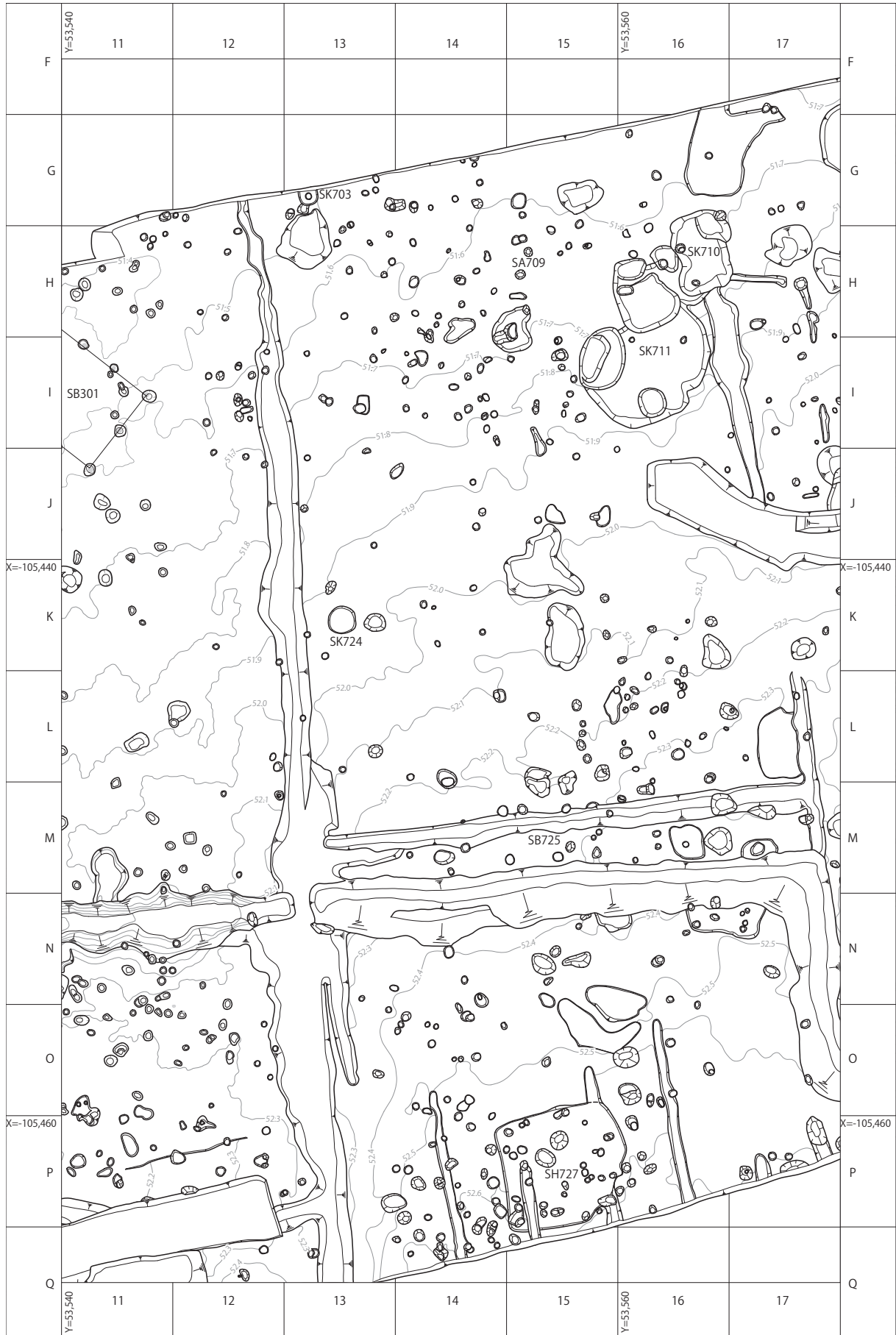
第21図 南区遺構平面図⑥ (1 : 200)



第22図 南区遺構平面図⑦ (1 : 200)



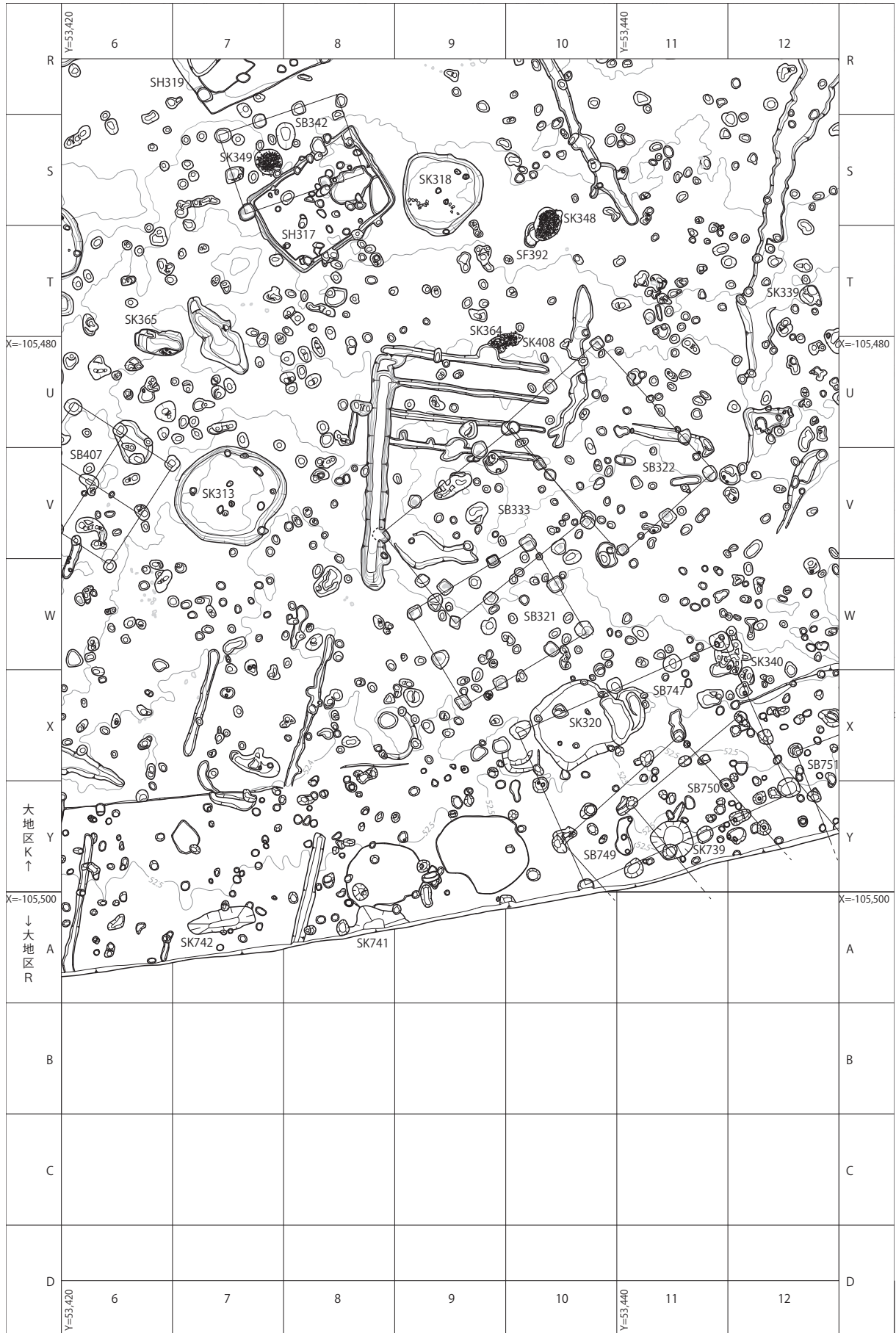
第23图 南区遺構平面図⑧ (1 : 200)



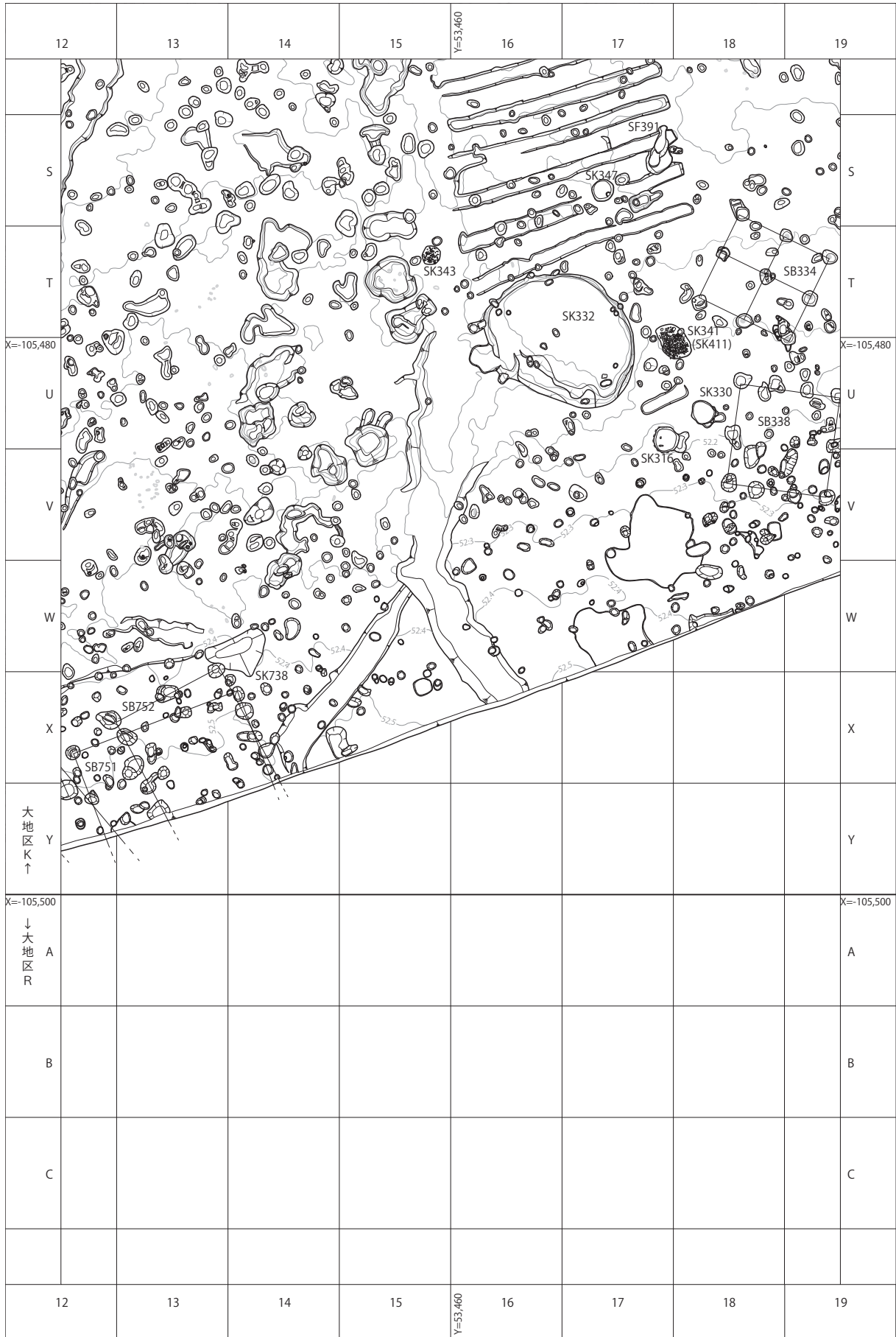
第24图 南区遺構平面図⑨ (1 : 200)



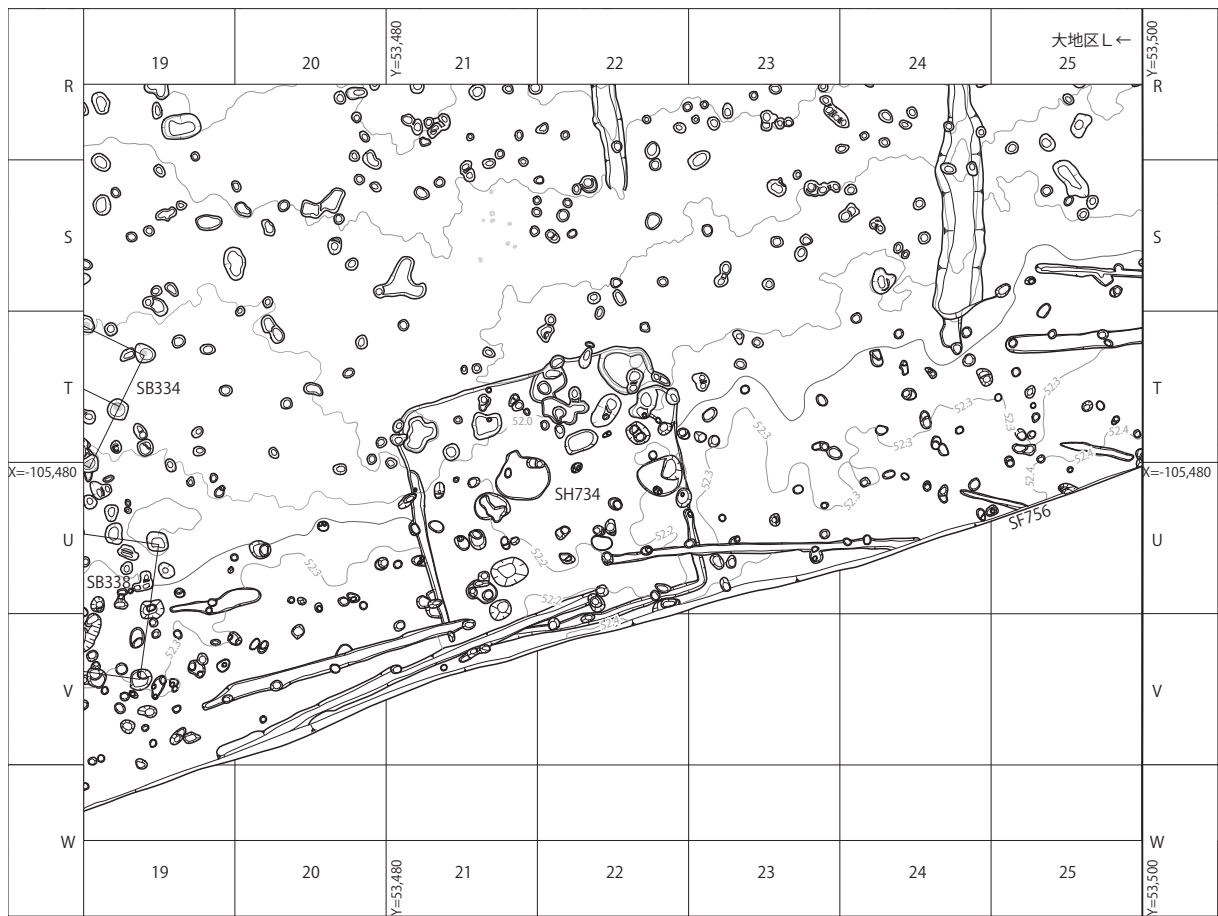
第25图 南区遺構平面図⑩ (1 : 200)



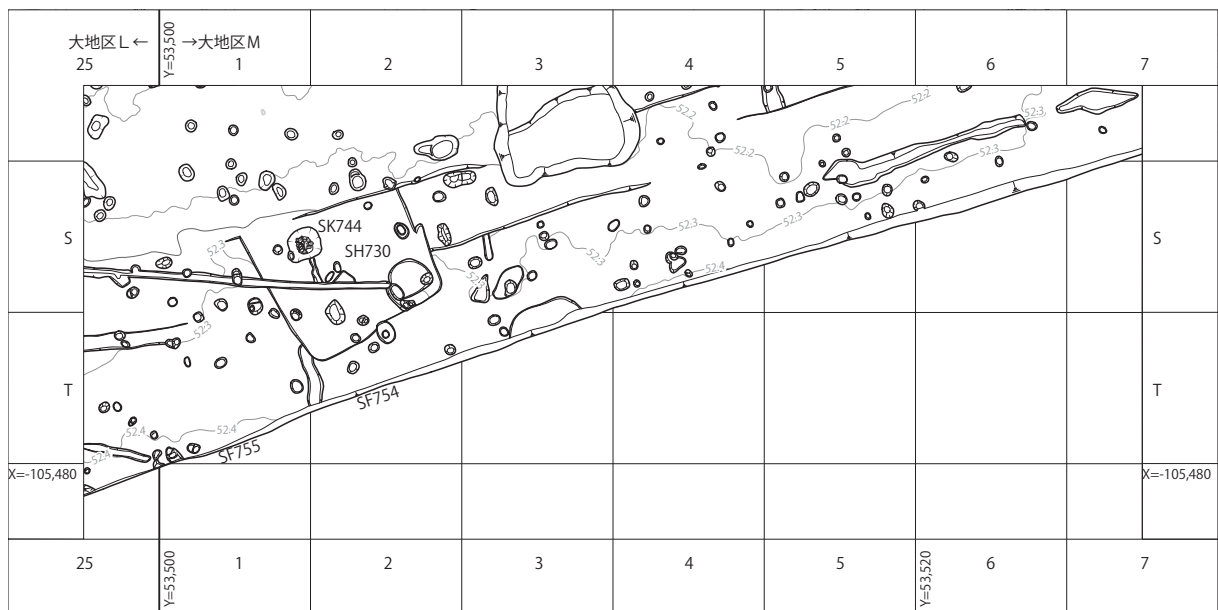
第26图 南区遺構平面図⑪ (1 : 200)



第27图 南区遺構平面図⑫ (1 : 200)



第28図 南区遺構平面図⑬ (1 : 200)



第29図 南区遺構平面図⑭ (1 : 200)

第IV章 遺構

第1節 縄文時代

縄文時代は、早期・中期・後期の遺構を確認した^①。このうち、最も遺構の数が増え、面的にも広がりを見せるのは早期であり、それ以外の時期は遺構数も少なく、散在的である。以下、各時期ごとに報告する。

1 縄文時代早期

当該期の遺構・遺物のほぼ全てが南区で確認されており、北区では土坑（S K 379）が1基確認されているのみである。うちわけは、竪穴住居1棟、集石炉11基、煙道付炉穴16基、土坑4基である。

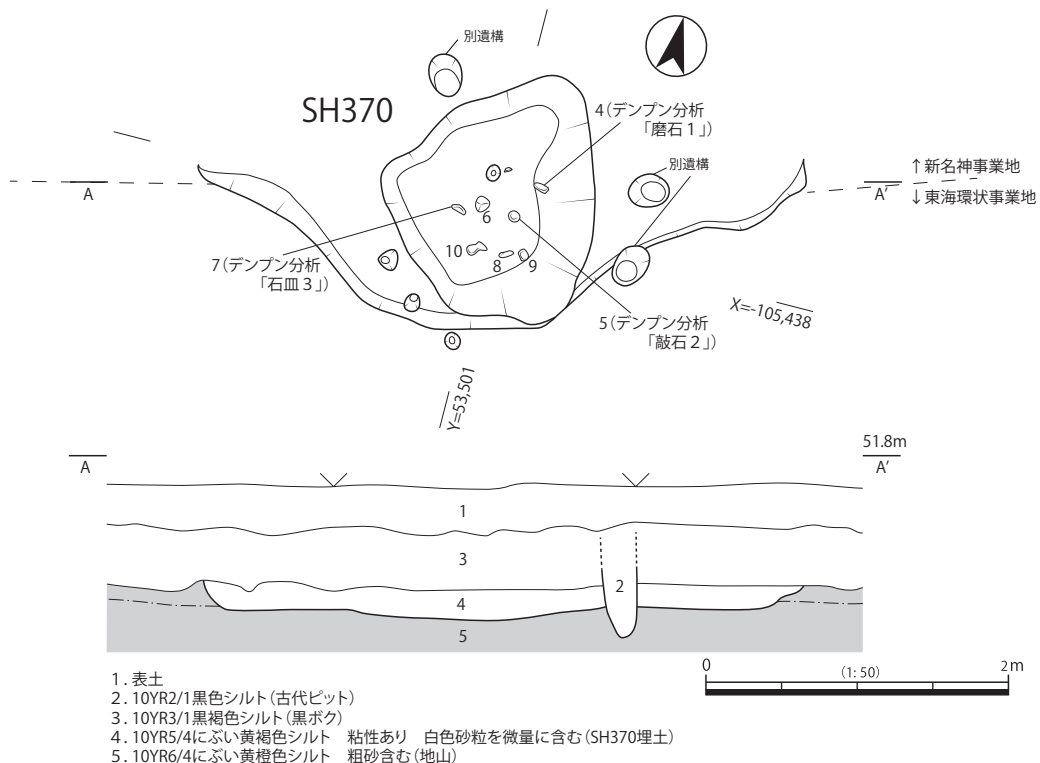
(1) 竪穴住居

S H 370（第30図）南区中央部の調査区北壁付近で検出した。平成23年度の第3次調査では、底面付近から押型文土器が出土したため、縄文時代早期の遺構であることは判明していたが、遺構の北側が事業地外に延びるため、全体の形状等は明らかでは

なかった。

その後、平成25年度に新名神高速道路建設事業（以下、新名神事業）に伴う第11次調査が行われ、北側部分の遺構の状況が明らかとなった^②。しかし、北側は南側より残りが悪く、遺構の浅い部分は検出されていない。そのため、遺構の性格については、今後も検討の余地は残るものであるが、今回報告するにあたっては、平成23年度に新名神事業として行われた第4次調査^③で報告されている縄文時代早期の「竪穴住居」に類似する部分があることや、押型文土器だけでなく石皿や敲石等の生活道具が床面付近から出土していることから、当該期の竪穴住居として報告することとした。

遺構の平面形は、前述のとおり北側の浅い部分が検出されなかったため、全体形は円形とも方形とも特定できない状況となっている。



第30図 S H 370 平面・断面図（1：50）

土層断面は、ちょうど第3次調査区の北壁が遺構の上に位置していたため、地表面からの土層が記録できた。遺構は第3層の黒ボク層の下にあり、遺構埋土には黒ボクを含まない^④。北側と東側に飛鳥時代のピットが3つ重複しており、これらは、黒ボク層を切って地山まで達している。これらのピットは埋土に黒ボクを多量に含むため、縄文時代早期の遺構との区別は容易であった。

遺構の底面は全体的に浅く平坦であるが、中央付近はやや窪んでいる。このやや窪んでいる部分の床面から、前述の土器片（1・2）と石器類（3～10）が出土した。石器の一部について残存デンプン粒分析を行った結果、1点からデンプン粒が検出された（詳細は第Ⅶ章を参照）。

主柱穴や上屋を支える柱の痕跡、垂木穴等は確認できなかった。また、この時期の住居の通例であるが、建物内に焼土痕（炉跡）は確認できなかった。

（2）集石炉

被熱した多量の礫（以下、被熱礫）を伴う土坑を「集石炉」として報告する。集石炉は11基を検出した。

集石炉の時期 今回報告する集石炉からは、時期を明確にできる土器は出土していないが、大半の集石炉から炭化物を採取しており、これらの放射性炭素年代測定を行った結果、得られた数値は、すべて縄文時代早期の所産と見做せるものであった（詳細は第Ⅶ章を参照）。このため、検出された全ての集石炉を縄文時代早期の遺構として報告する。

底石 今回報告する集石炉には穴の底に石が並べられているものが7基あり、この石は上面でみられる被熱礫よりも大きいものが多く、平らな面が上になるように揃えて配置されたことが窺えるものがあるなど、明らかに被熱礫とは性格の異なるものであった。本書では、この石のことを「底石」と呼称して報告している。

出土遺物の扱い 前述のとおり、時期を特定できる土器は出土しなかったが、合計500kgを超える被熱礫と底石、木炭を主とする多量の炭化物が出土した。被熱礫と底石は分別し、洗浄後に重量を計測した（第3表参照）。その後、石器などが含まれていないかを確認し^⑤、石皿や磨石等の一部については残存デ

ンプン粒分析を行っている^⑥。

炭化物については、年代測定と樹種同定を念頭に、遺構の底面付近の残り具合の良いものを採取した。その際、位置を遺構実測図に記録し、同時に写真撮影も行っている。これら、自然科学分析については第Ⅶ章を参照されたい。

以下、遺構ごとに詳述する。

S K 341（第31図） 平面形は若干角のある長楕円形を呈し、長径1.5m、短径0.9m、深さは25cmを測る。底石はない。

S K 411と重複しており、中心部の大半はS K 411（土層断面の第1～3層）によって失われているが、第4・5層に焼土粒や炭化物を含み、第6層の上面で若干の被熱礫が確認できることから、たんなる土坑ではなく集石炉と判断した。

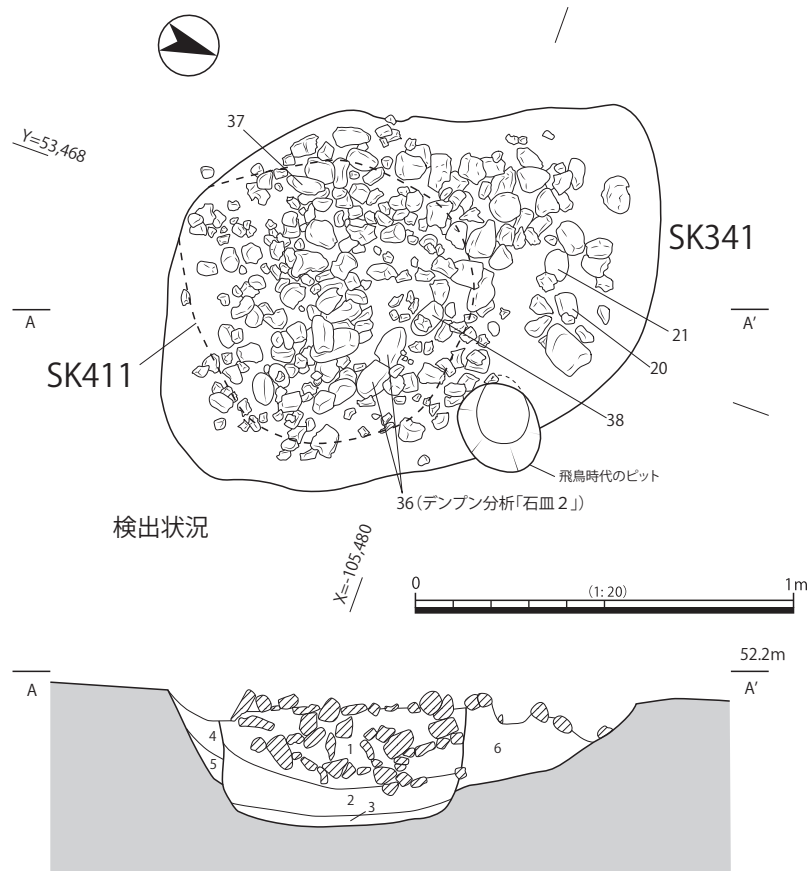
S K 411との切り合いは、検出面では被熱礫のために判然としなかったが、土層断面ではS K 411の方が新しいことが明確に判断できた。ただし、被熱礫の大半は、どちらの遺構に伴うものか分別できなかったため、第3表にはS K 411との合計として重量を示した。また、被熱礫の中には、磨石や石皿の破片が含まれていたが、これらについてもどちらの遺構に伴うものか分別しにくいものが多く（22～35）、出土位置や層位等からS K 341に伴うと判断できたものは2点（20・21）にとどまる。

なお、前述のとおり、底石はなかったが、S K 411によって中心部分を消失しているため、もとは存在

第3表 集石炉の被熱礫・底石重量一覧

遺構名	被熱礫	底石	計
SK341			
SK411	61.10	-	61.10
SK343	9.15	8.95	18.10
SK346	13.10	20.25	33.35
SK348	91.25	33.50	124.75
SK349	136.75	16.90	153.65
SK351	36.85	11.00	47.85
SK357	58.10	6.15	64.25
SK364			
SK408	24.60	-	24.60
SK744	32.10	11.45	43.55
計	463.00	108.20	571.20

単位はkg。被熱礫は検出時に残存していた重量。遺構が重複し、分別不能の場合は合計重量。



検出状況

- | | |
|---------------------|--|
| 1. 10YR4/2 灰黄褐色シルト | 炭化物を少量含む (SK341埋土) |
| 2. 10YR3/1 黒褐色シルト | 焼土ブロックと炭化物を多く含み、10YR6/4にぶい黄褐色を少量含む (SK341埋土) |
| 3. 10YR6/4にぶい黄褐色シルト | 炭化物と黄色砂粒を若干含む (SK341埋土) |
| 4. 10YR5/3にぶい黄褐色シルト | 焼土粒と炭化物を少量含む (SK411埋土) |
| 5. 10YR6/4にぶい黄褐色シルト | 焼土を多く含む 炭化物も微量に含む (SK411埋土) |
| 6. 10YR5/6 黄褐色シルト | 炭化物を少量含む 粘性あり (SK411埋土) |



木炭出土・完掘状況

※木炭は第2層から出土

第31図 SK341・411 平面・断面図 (1:20)

していた可能性がある。例えば、S K 411 の被熱礫の中から出土した石皿（36・37・38）はいずれも破砕しているが、元来の大きさを考えると、底石として使用されてもおかしくないサイズである。

S K 343（第 32 図） 平面形は円形を呈し、直径は 0.6～0.7 m、深さは 25cm を測る。底石は 4 個あった。

埋土は 3 層に分層できた。被熱礫の大半は第 1 層に含まれていたが、あまり多くなく、今回報告する集石炉の中では、残存する被熱礫の量（重量）は最も少ない（第 3 表）。被熱礫の中には、磨石や敲石の破片（39～45）が含まれていた。

底石直上からは、木炭が 3 本並んで出土した。うち 1 本（試料 No. 14）の放射性炭素年代測定を行った結果、 9280 ± 30 (yrBP $\pm 1 \sigma$) の年代値が得られた。また、2 本（試料 No. 13・14）について樹種同定を行った結果、樹種はどちらもクリであることが判明した（詳細は第 VI 章を参照）。

4 個の底石は平坦な面を上にして中央がやや窪むような形で配置され、上面は赤く被熱していた。底石は 4 個とも石皿として使用されたものが転用されており（42～45）、このうち、45 について残存デンプン粒分析を行った結果、デンプン粒が検出された（詳細は第 VI 章を参照）。

S K 346（第 33 図） 古代の土坑（S K 328）と重複するため、南側縁が一部失われている。平面形は径約 0.6 m の円形を呈し、深さは 22cm を測る。底石は 4 個である。炉穴の壁面はオーバーハングしており、北側縁では明瞭に焼土（硬化・赤変）が確認できた。

埋土は 2 層に分かれ、どちらの層もある程度の炭化物を含むものの、他の集石炉で見られるような全体が黒色となるほどの炭化物を含む層はみられない。

底石は状況からみていずれも被熱しているものと思われるが、顕著に赤変しているものと、ほとんど赤変していないものがあった^⑦。底石は、大きさにばらつきはあるものの、第 1 層の被熱礫よりはるかに大きいものが使われており、凹凸はあるものの、比較的平坦な面が上になるように並べられていた。

採取した炭化物の放射性炭素年代測定を行った結果、 9420 ± 30 (yrBP $\pm 1 \sigma$) の年代値が得られた（詳細は第 VI 章を参照）。

S K 348（第 34 図） 平面形は楕円形を呈し、長径 1.2 m、短径 0.9 m、深さは 38cm を測る。東側で古代のピット、西側で煙道付炉穴 S F 392 と重複している。切り合いは、S F 392 より S K 348 の方が新しい。

埋土は 3 層に分層できたが、第 1 層と第 2 層の境界は礫が多く、不明瞭であった。残存する被熱礫は他の集石炉に比べて多く、また、大きめの礫が使用されており、大きいものでは他の集石炉で底石として使われている石と同程度のものも混じっていた。

被熱礫の中には、磨石や石皿の破片が含まれていた（46～51）。このうち 49 について残存デンプン粒分析を行ったが、デンプン粒は検出されなかった（詳細は第 VI 章を参照）。

底石が多く、20 個程度の石が使用されており、大半は上面が被熱により赤変し、高温のために爆ぜて亀裂ができたり、割れたりしているものもみられた。

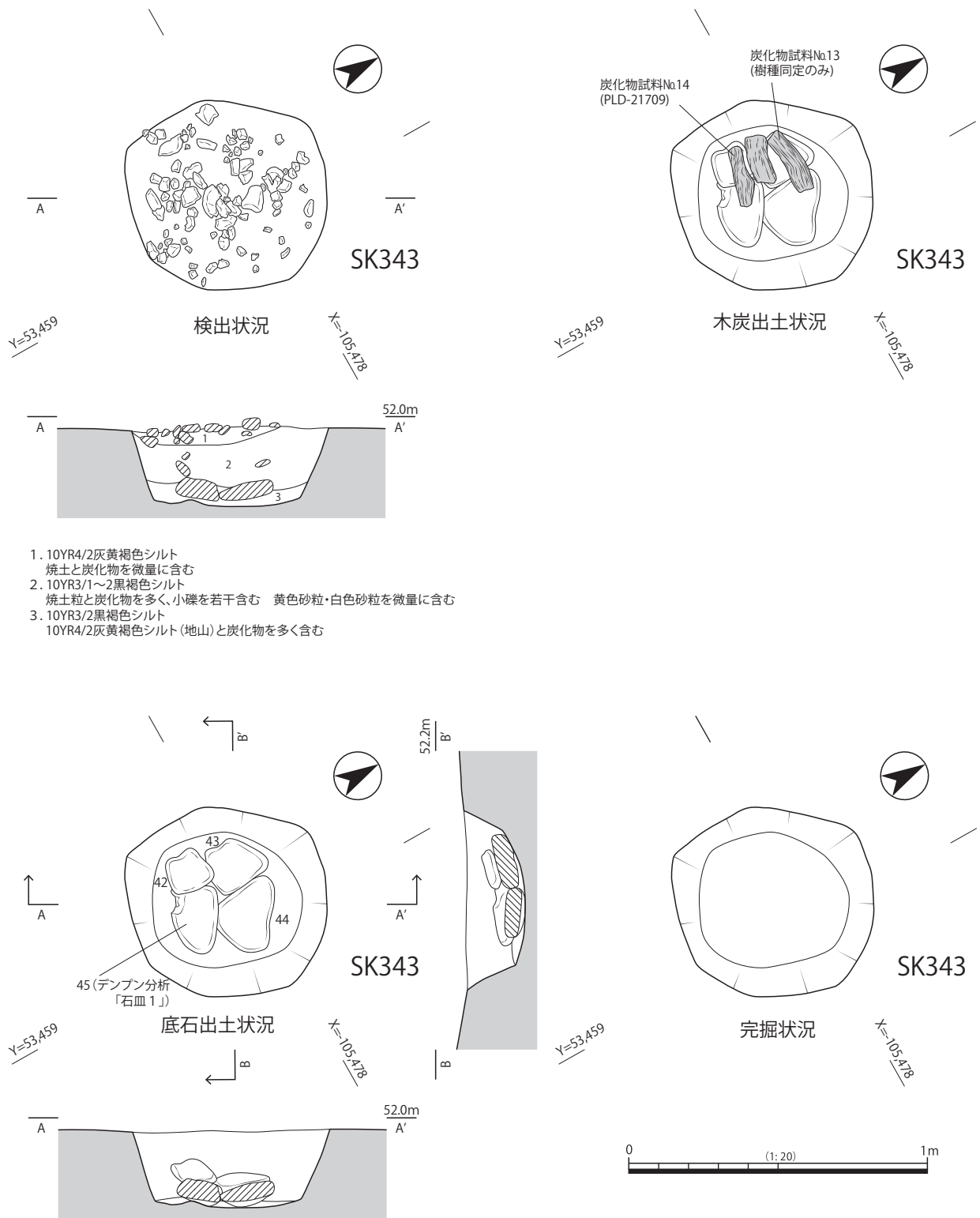
また、底石の下に多量の木炭片を含む黒褐色シルト（第 3 層）が存在し、一部の底石が底面から浮いた状態となっていた。他の集石炉では、底石は炉穴の底面に直に置かれており^⑧、それらとは状況が大きく異なっている。前述のとおり、この S K 348 は煙道付炉穴 S F 392 の後に重複して作られていることから、この黒褐色シルト層を S F 392 に伴うものとみることが出来る。しかし、後述する煙道付炉穴の埋土のほとんどが暗褐色～褐色を呈しており、また、これほど多量の木炭を伴うものは皆無であったため^⑨、本報告ではこの層を S K 348 に伴うものとして扱うこととした。この場合、この集石炉は使用の際に底石が動かされたか、もしくは、集石炉が再度利用されている可能性も考えられる。

土器片が 1 点出土したが、細片のため図化できなかった。

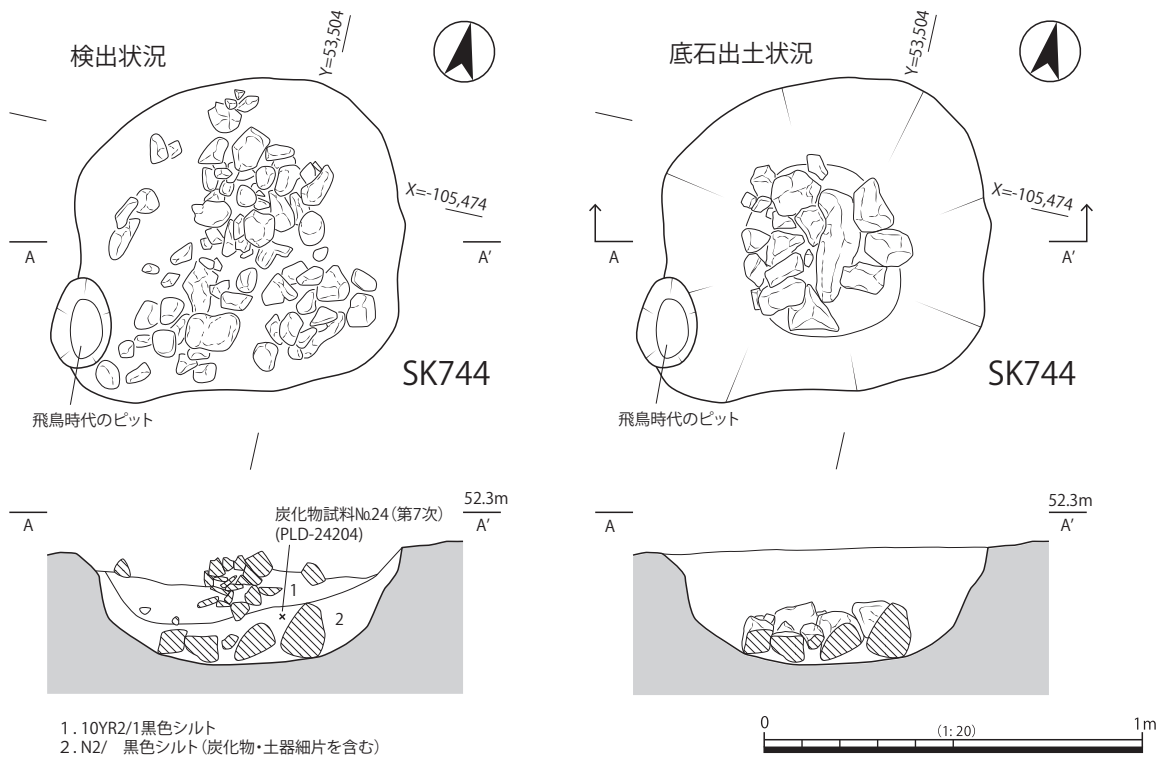
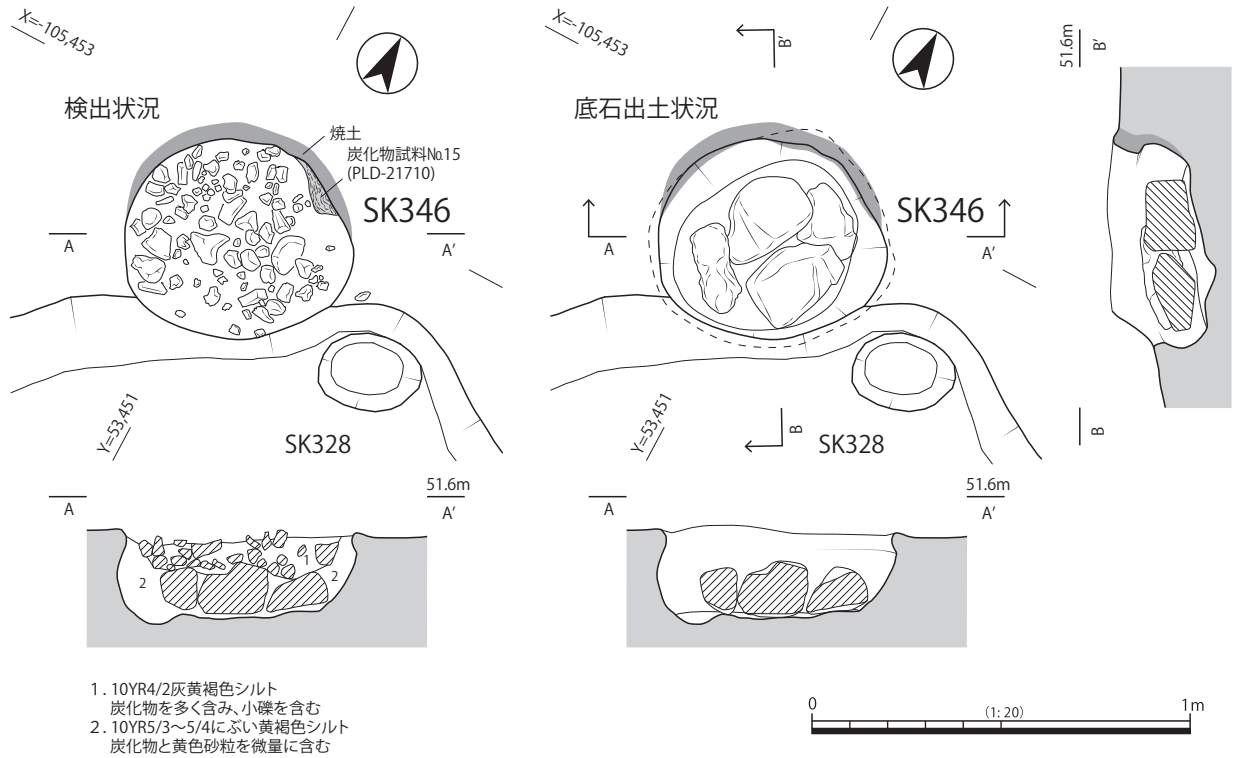
第 3 層で採取した炭化物の放射性炭素年代測定を行った結果、 9340 ± 30 (yrBP $\pm 1 \sigma$) の年代値が得られた（詳細は第 VI 章を参照）^⑩。

S K 349（第 35 図） 平面形は円形を呈し、直径約～1 m、深さは 43cm を測る。底石は 3 個である。南側縁に古代のピットが重複している。

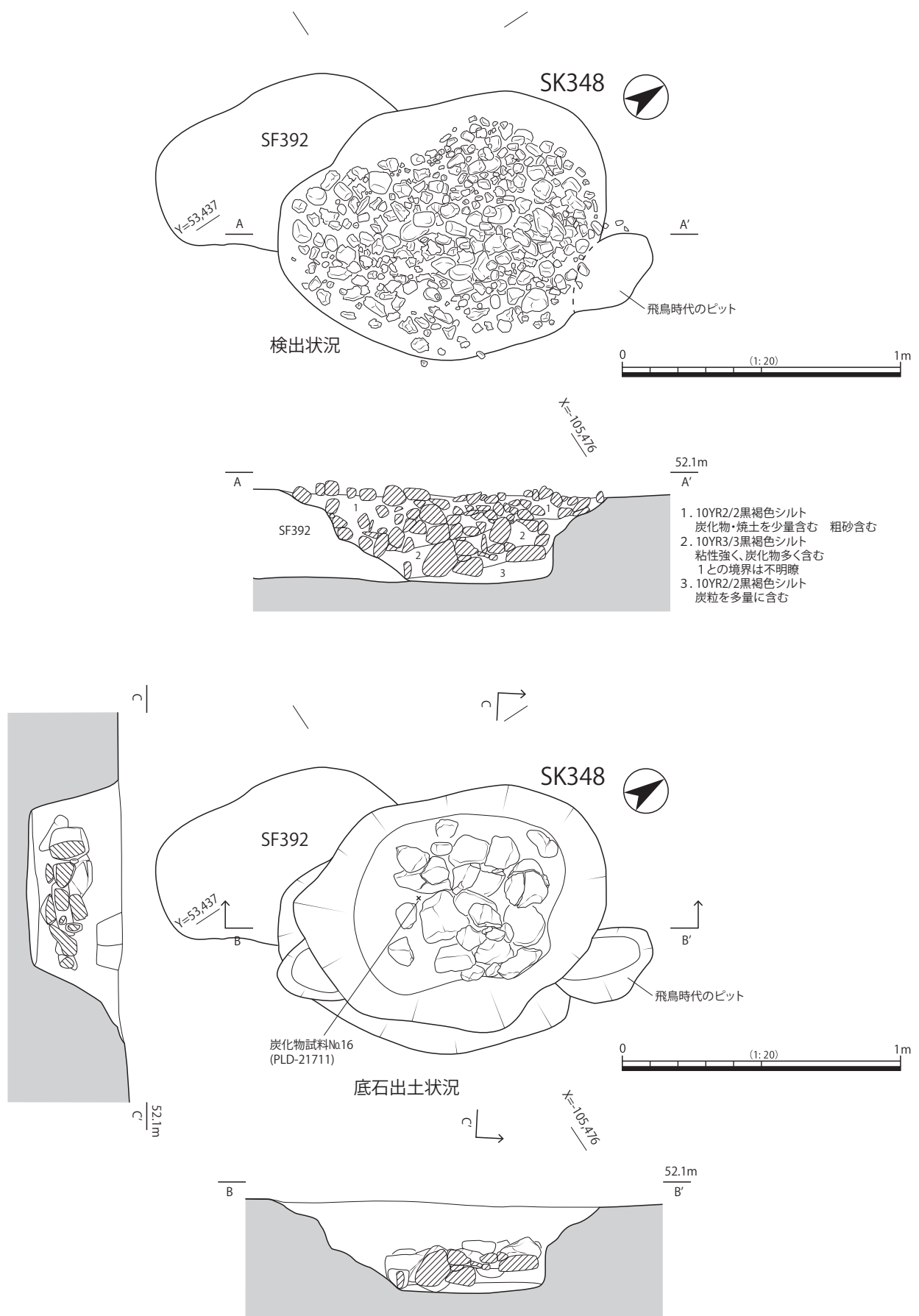
埋土は 3 層に分層できた。第 1 層は被熱礫を多量に含む灰黄褐色シルト、第 2 層も多く被熱礫を包含



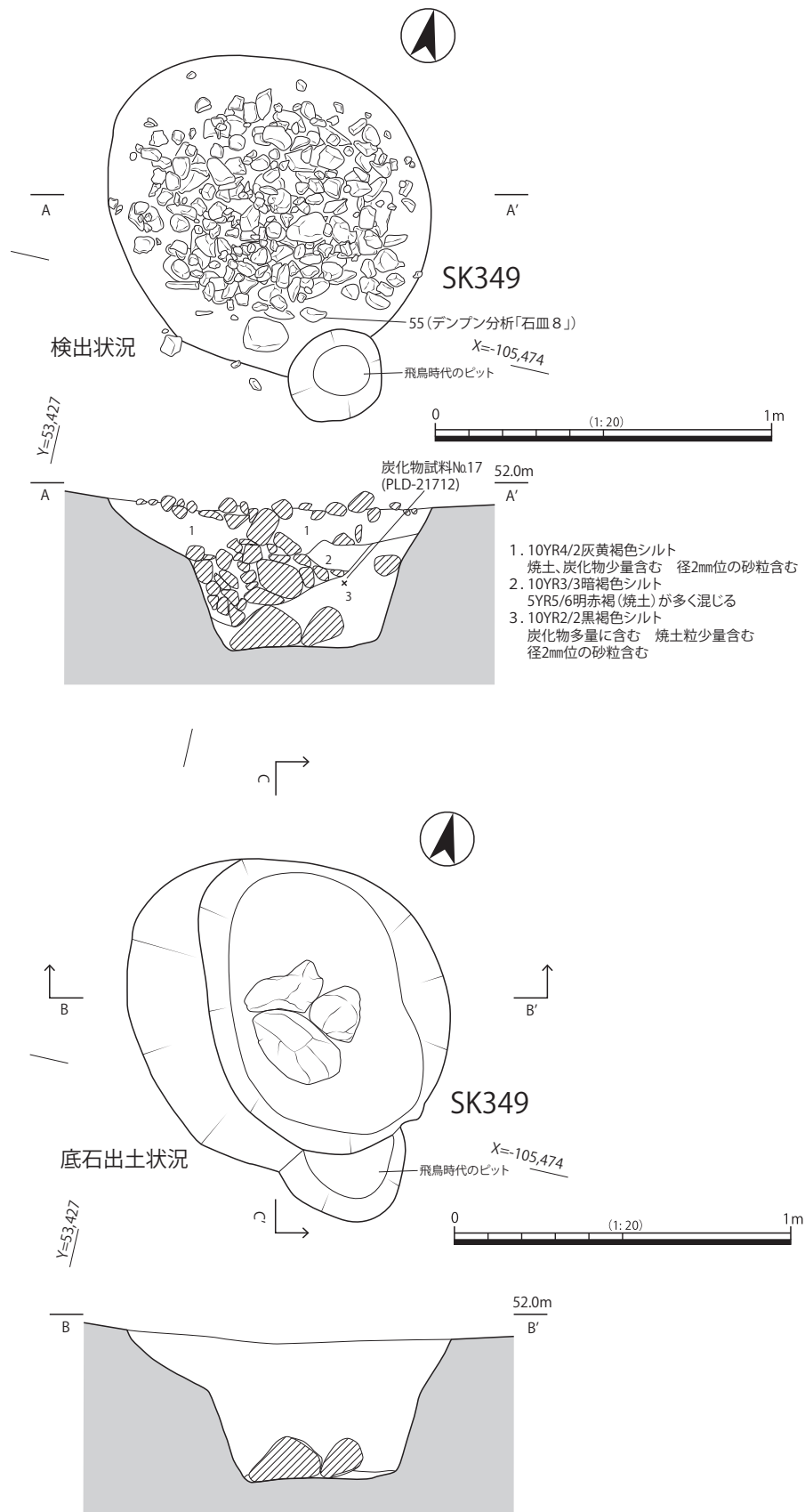
第32図 SK343 平面・断面図 (1:20)



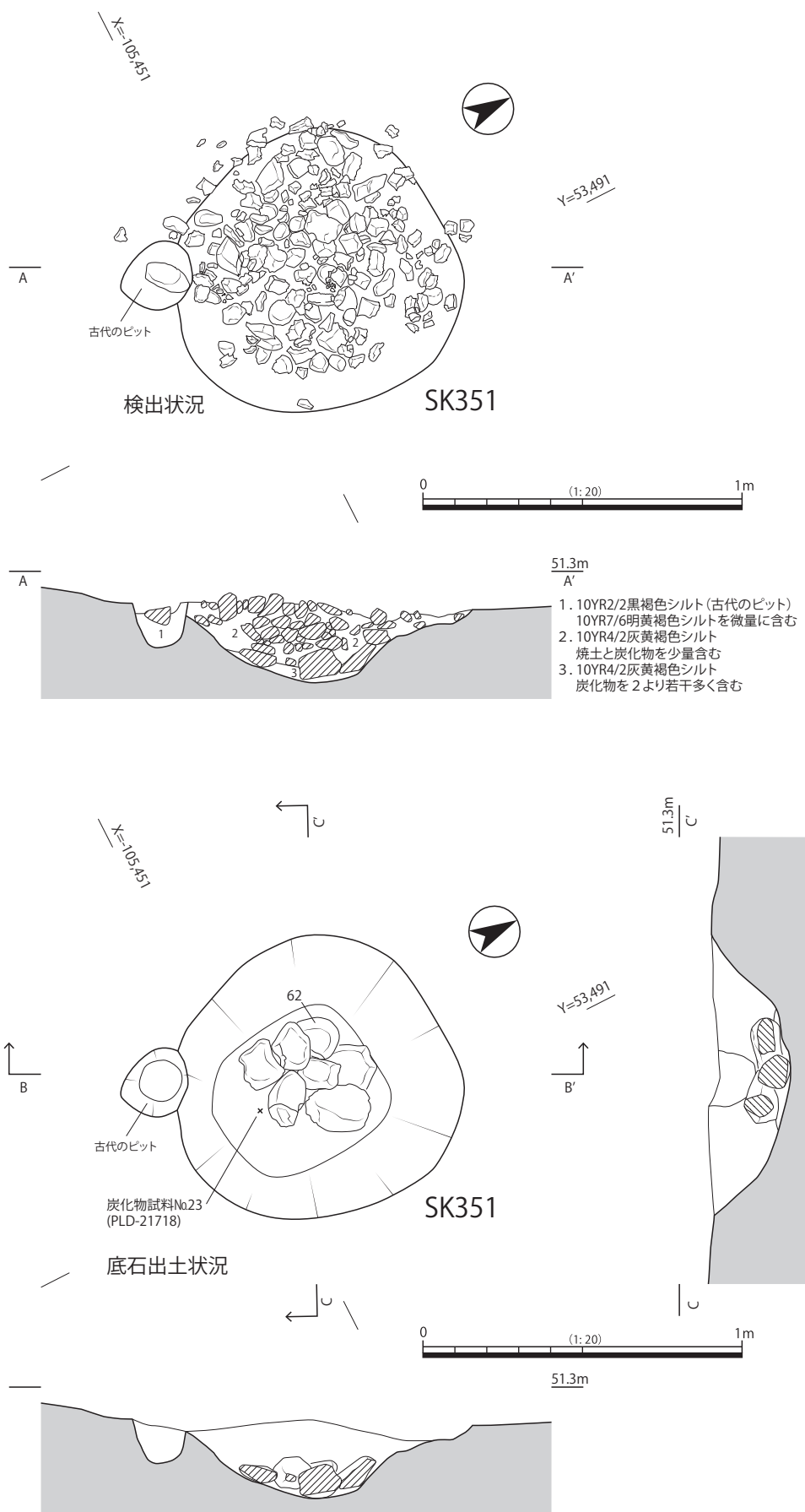
第33図 SK346・744 平面・断面図 (1:20)



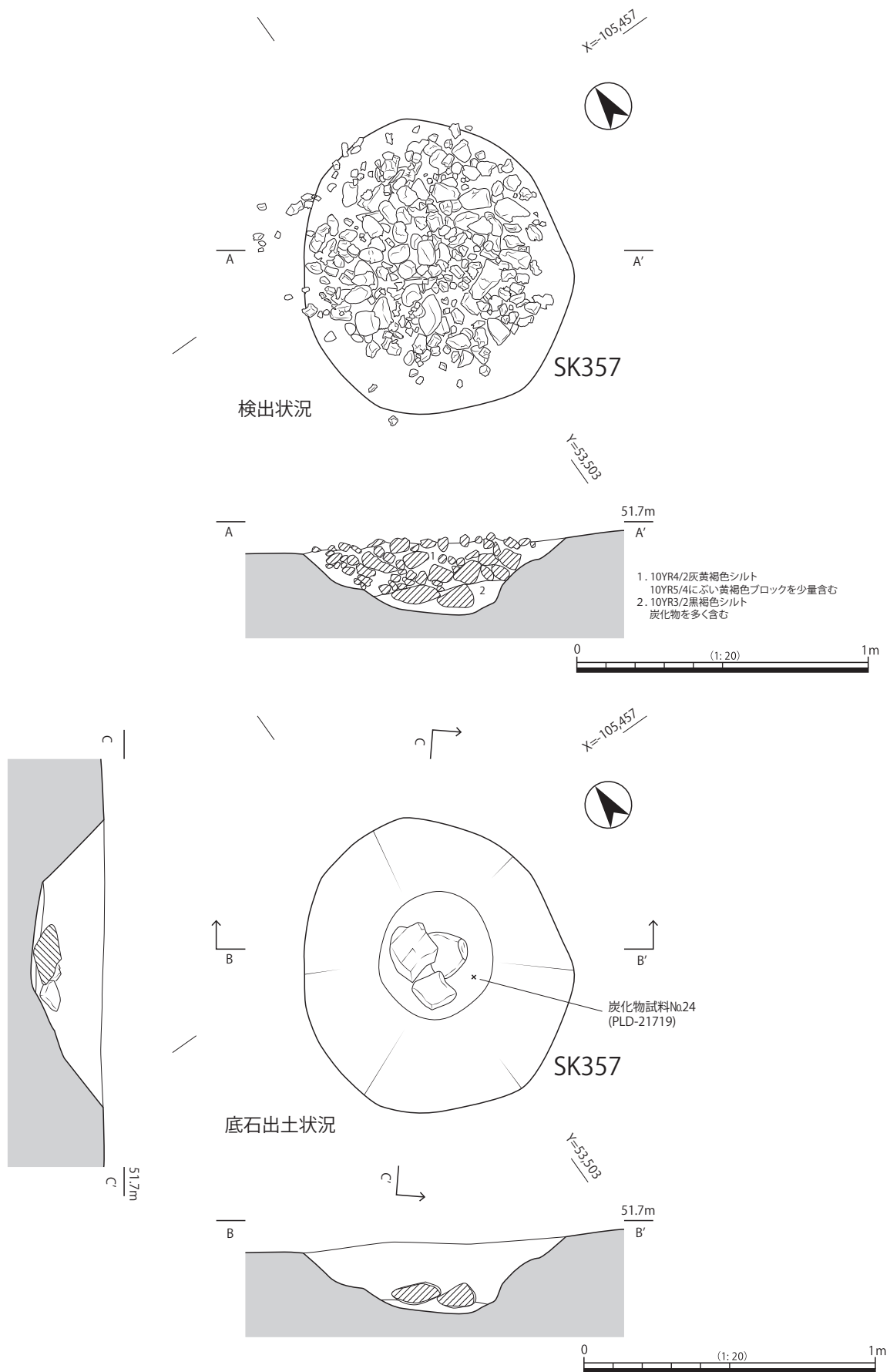
第34図 SK348 平面・断面図 (1 : 20)



第35図 SK349 平面・断面図 (1:20)



第36図 SK351 平面・断面図 (1:20)



第37図 SK357 平面・断面図 (1:20)

する暗褐色シルトで焼土が多く混じっていた。

使用されている被熱礫の量は今回報告している集石炉中で最も多く（第3表参照）、断面図を取った位置では被熱礫の間に隙間があるが、他の位置ではほぼ隙間なく被熱礫によって埋め尽くされていた。

被熱礫の中には礫器や磨石等（52～55）が含まれていた。このうち、55について残存デンプン粒分析を行ったが、デンプン粒は検出されなかった（詳細は第VI章を参照）。

第3層からは多量の木炭片が出土した。そのうちの一片について放射性炭素年代測定と樹種同定を行った結果、年代値は 9380 ± 30 (yrBP $\pm 1 \sigma$)、樹種はクリであることが判明した（詳細は第VI章を参照）。底石は顕著に赤変しているものと、そうでないものがあり、大きさにばらつきはあるものの、高さは概ね揃うように並べられていた。

S K 351（第36図） 平面形は円形を呈し、直径0.9 m、深さは25cmを測る。底石は7個である。南側縁に古代のピットが重複している。

埋土は2層と捉えたが、どちらも灰黄褐色シルトのため、被熱礫の有無と炭化物の多寡で分層した。

底石は赤変しているものが多く、大きさにばらつきはあるものの第2層の被熱礫より大きい石が使われ、中央の石を中心にそれを囲むように他の石が並べられている。被熱礫と底石の中には、礫器や石皿の破片（56～62）が含まれていた。

底面付近で採取した炭化物の放射性炭素年代測定を行った結果、 9285 ± 30 (yrBP $\pm 1 \sigma$) の年代値が得られた（詳細は第VI章を参照）。

S K 357（第37図） 平面形は円形を呈し、直径約1 m、深さは30cmを測る。底石は3個である。

埋土は2層に分層できた。第1層は被熱礫を含む灰黄褐色シルト、第2層は炭化物を多く含む黒褐色シルトとなっている。第2層の黒褐色シルトは底石の隙間にも入り込んでいる。

底石は比較的平坦な面を持つ石が選ばれており、いずれも赤変していた。底石は中央付近で重なっているため、断面図の位置では、底面から浮いているように見えるが、別の位置で底面に直に接している。

被熱礫の中には、礫器や石皿の破片（63～67）が含まれていた。

底面付近で採取した炭化物の放射性炭素年代測定を行った結果、 9345 ± 30 (yrBP $\pm 1 \sigma$) の年代値が得られた（詳細は第VI章を参照）。

S K 364（第39図） 平面形は長楕円形を呈し、長径0.9 m、短径0.6 m、深さは11cmを測る。底石は無い。西側は古代の土坑、東側は集石炉S K 408と重複している。切り合いは、S K 408よりS K 364の方が新しい。

被熱礫を伴い、埋土に微量であるが炭化物と焼土を含むことから集石炉に分類したが、底も浅く、被熱礫が底面まで達しているなど、他の集石炉と比較して異なる点が多い。

S K 408（第39図） 平面形は長楕円形を呈し、長径0.7 m以上、短径0.4 m、深さは11cmを測る。底石は無い。西側はS K 364と重複しており、切り合いはS K 364の方が新しい。

被熱礫を伴い、埋土に微量であるが炭化物と焼土を含むことから集石炉に分類したが、底も浅く、被熱礫が底面まで達しているなど、他の集石炉と比較して異なる点が多い。

S K 411（第31図） 平面形は円形を呈し、直径0.8 m、深さは37cmを測る。底石は無い。S K 341と重複しており、S K 411の方が新しい。

平面検出時には被熱礫のためにS K 341との重複に気付かなかったが、土層断面では切り合いが明瞭に確認できた。しかし、被熱礫は、どちらの遺構に伴うものか分別できないものが多く、第3表にはS K 341との合計として重量を示した。

埋土は3層に分層できた。第1層は多量の被熱礫を含む灰黄褐色シルト、第2層は炭化物を多く含む黒褐色シルト、第3層は少量の炭化物が、にぶい黄褐色シルト（地山）に混じる層となっている。

第2層中には長さ約45cmの木炭が残存していた。放射性炭素年代測定と樹種同定を行った結果、年代値は 9310 ± 30 (yrBP $\pm 1 \sigma$)、樹種はクリであることが判明した（詳細は第VI章を参照）。

被熱礫の中には、磨石や石皿の破片が含まれていたが、これらについてもどちらの遺構に伴うものか分別しにくいものが多く（22～35）、出土位置や層位等からS K 411に伴うと判断できたものは3点（36～38）にとどまる。このうち36について残存

デンプン粒分析を行った結果、デンプン粒が検出された（詳細は第Ⅶ章を参照）。

S K 744（第 33 図） 平面形は若干角のある円形を呈し、長径 1.0 m、短径 0.8 m、深さは 30cmを測る。南西側縁に古代のピットが重複している。

底石は被熱により割れているものもあるが、12 個程度あり、第 1 層に含まれている被熱礫に比べて大きい石が主体である。凹凸はあるものの、個々の石の高さは、ある程度揃えられている。

埋土は 2 層に分かれ、第 1 層は多量の被熱礫と小さな木炭片を含む黒色シルト、第 2 層は木炭片を多く含む黒色シルトである。

第 2 層に含まれていた木炭片の放射性炭素年代測定と樹種同定を行った結果、年代値は 9435 ± 30 (yrBP $\pm 1 \sigma$)、樹種はクリであることが判明した。

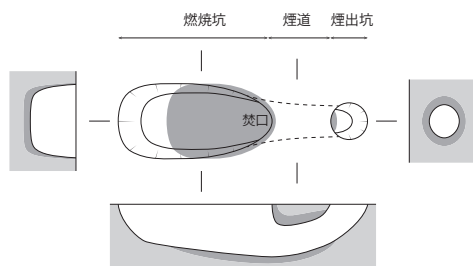
被熱礫の中には、礫器と石皿の破片（70・71）が含まれていた。このうち 70 について残存デンプン粒分析を行った結果、デンプン粒が検出された（詳細は第Ⅶ章を参照）。

（3）煙道付炉穴

大小 2 つの規模の異なる穴がトンネルで繋がり、穴の底や側面に被熱痕（赤変等）がみられるものを本書では「煙道付炉穴」として報告する。煙道付炉穴は 16 基を確認した。

各部分の呼称 煙道付炉穴の各部分の呼称については、先行研究でもあまり統一されていないが、本書では、規模の小さい方の穴を「煙出坑」、規模の大きい方の穴を「燃焼坑」、煙出坑と燃焼坑を結ぶトンネルを「煙道」、煙道と燃焼坑の境界付近を「焚口」と呼称して報告する（第 38 図参照）。

遺存状況 今回、煙道付炉穴として報告する遺構は、煙道が天井まで完存しているものは少なく、大半は崩落または削平等によって煙出坑と燃焼坑がひとつとなり、平面形が長楕円形または紡錘形の被



第38図 煙道付炉穴 模式図

熱土坑的形態で検出されたものが多い。これらは断面の形状等から、煙道が付いていたことがある程度推定できるものと、どちらとも判断の難しいものがあるが、上述のような平面形で一定程度の深さがあり、かつ、被熱痕（赤変）が確認できたものは、今回すべて煙道付炉穴として報告している^⑪。当然ながら古代の遺構を切っているものや埋土に黒ボクが入るもの等は除外しているが、遺存状況の悪い炉穴の分類については今後も検討の余地は残るものである。

遺構の時期 煙道付炉穴の所属時期であるが、出土した土器や時期の特定できた集石炉との切り合い、放射性炭素年代測定の結果（詳細は第Ⅶ章を参照）等から、縄文時代早期の遺構であると判断できたものが 12 基である。それ以外の煙道付炉穴についても、時期の特定できた煙道付炉穴との形態や埋土等に大きな差異はみられないため、今回報告する煙道付炉穴はすべて縄文時代早期の遺構として扱っている。

出土遺物の扱い 土器の扱いは他の遺構と同様であるが、後述するように一部の煙道付炉穴の煙道付近からは、石がまとまって出土している。これらの石は洗浄後に石器などが含まれていないかを確認し^⑫、石皿や磨石等の一部については残存デンプン粒分析を行った^⑬。

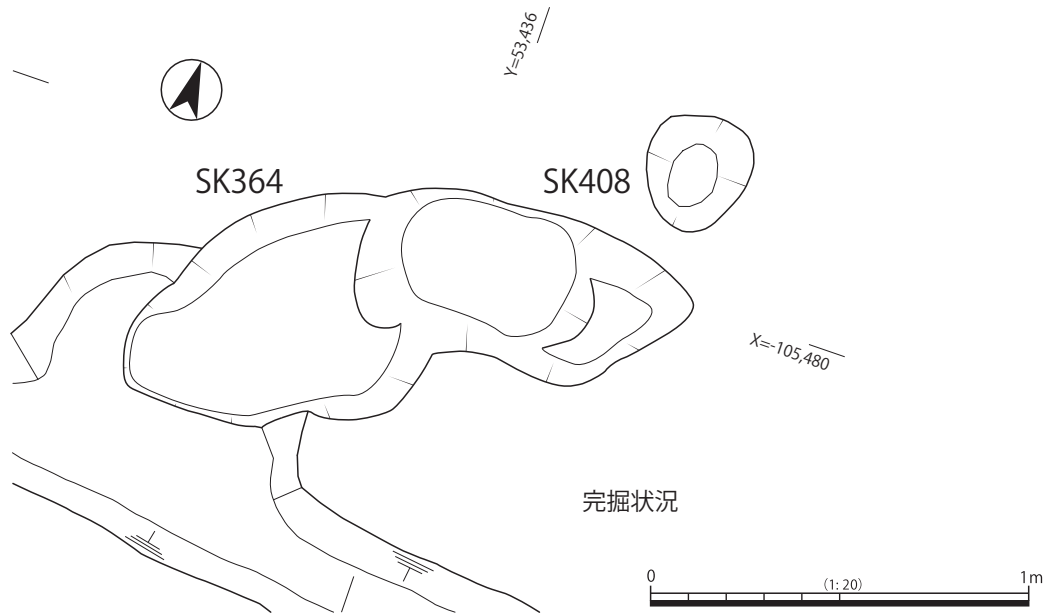
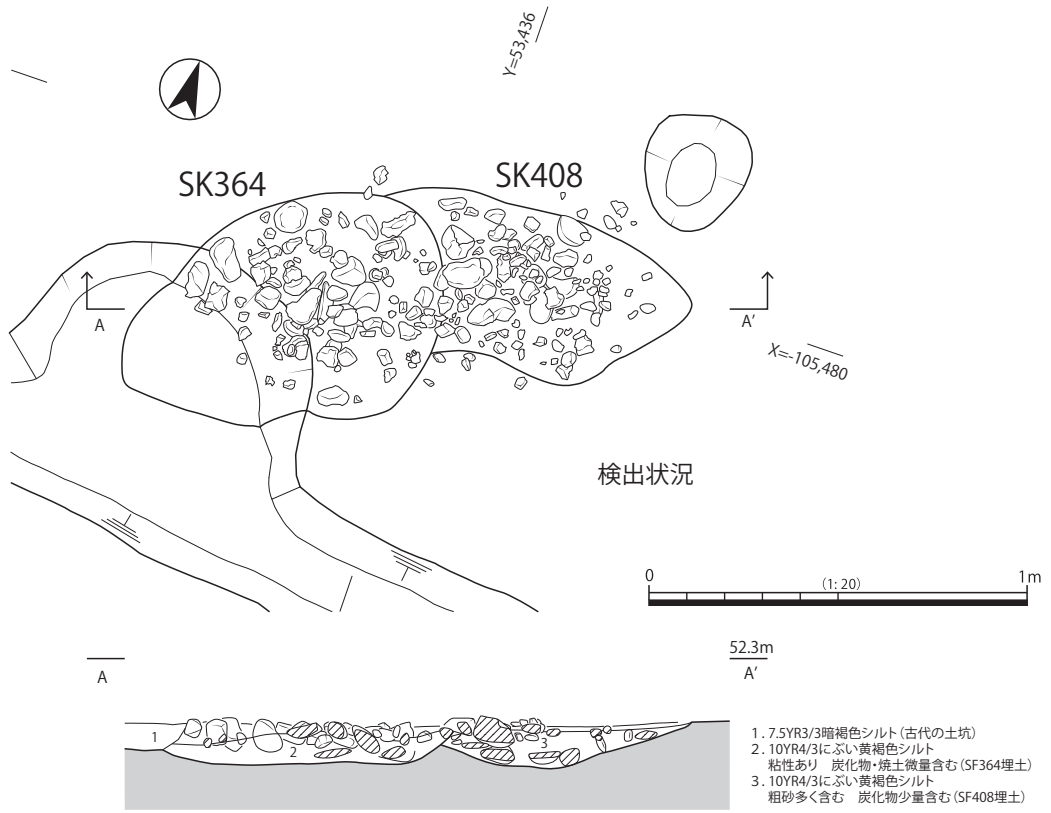
炭化物については、年代測定と樹種同定を念頭に、遺構の底面付近の残り具合の良いものを採取した。その際、位置を遺構実測図に記録し、同時に写真撮影も行っている。これら、自然科学分析については第Ⅶ章を参照されたい。

以下、遺構ごとに詳述する。

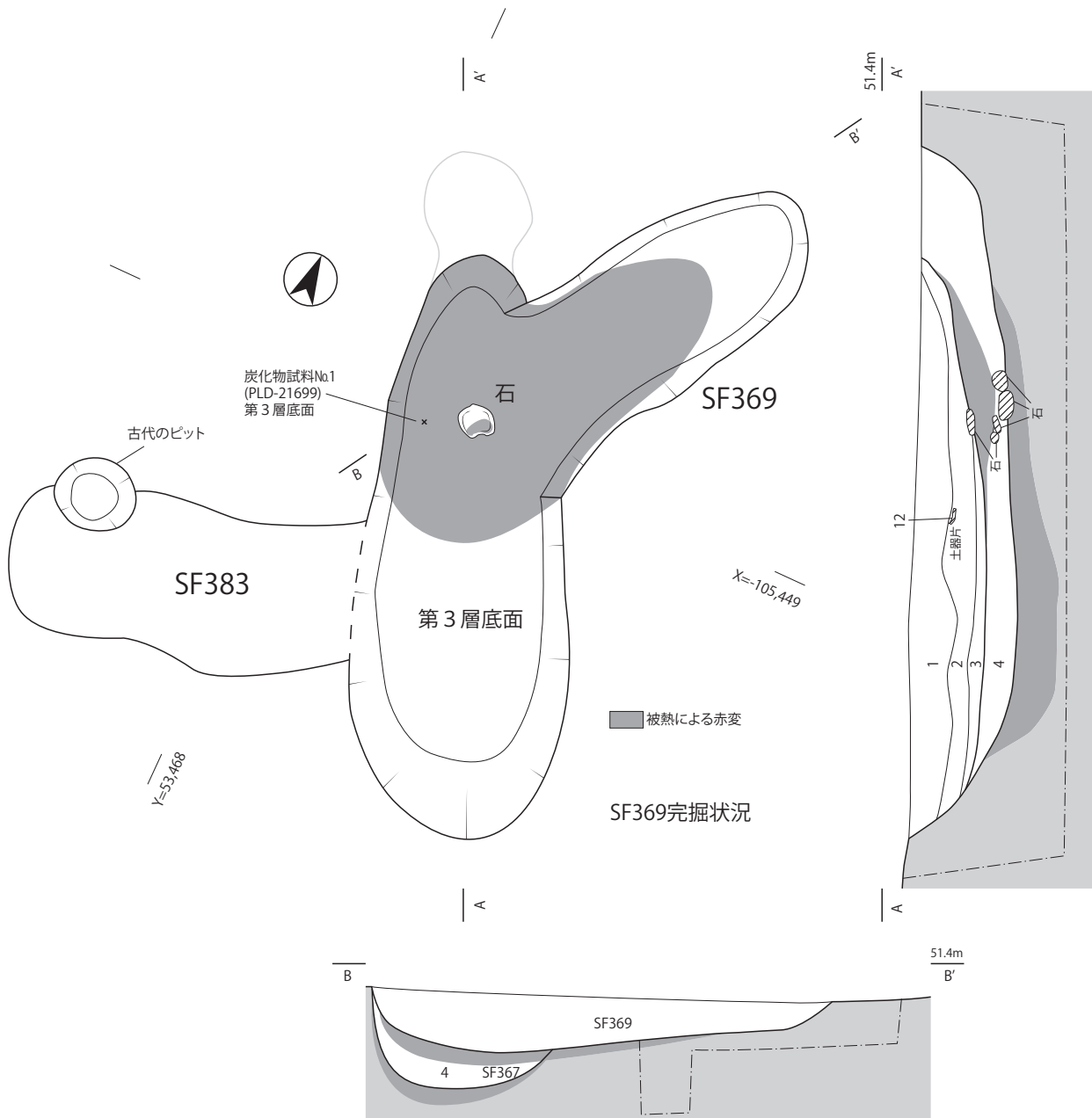
S F 367（第 41 図） 南区中央部北壁付近で検出した。煙道の天井は残存していないが、平面形から、北が煙出坑、南が燃焼坑、その間のくびれた部分あたりが煙道であったと考えられる。

S F 367・S F 369・S F 383 は重複しており、新旧関係は、平面および断面の切り合いから、古い順に、S F 383、S F 367、S F 369 となる。ただし、S F 383 と S F 367 の切り合いについては、平面・断面ともに不明瞭であったため、確実なものとはいえない（破線で示した部分）^⑭。

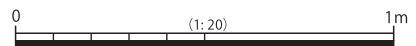
S F 367 が第 4 層まで埋没した時点で、炉穴の一



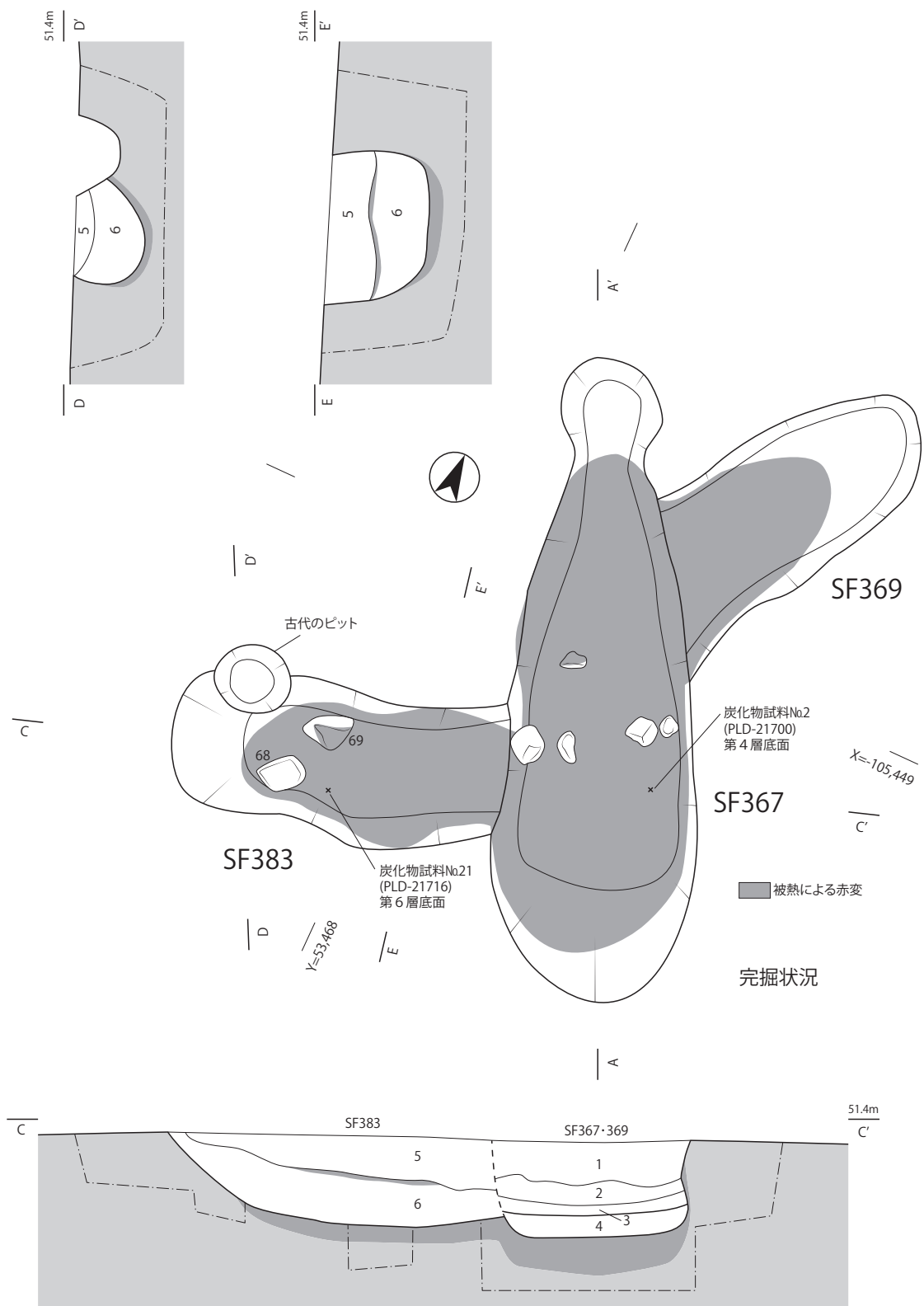
第39図 SK364・408 平面・断面図 (1:20)



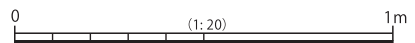
1. 7.5YR5/4にぶい褐色粘質土 (SF369)
2. 7.5YR4/3褐色粘質土 焼土粒、炭化粒、土器片が混じる、10YR4/2灰黄褐色粘質土をブロック状に少量含む、小礫を少量含む (SF369)
3. 2.5Y7/4浅黄色粘質土 焼土・炭化物・白色砂粒・10YR4/2灰黄褐色粘質土を少量含む 固くしまっている (SF369)
4. 2.5Y5/3黄褐色粘質土 (SF367)



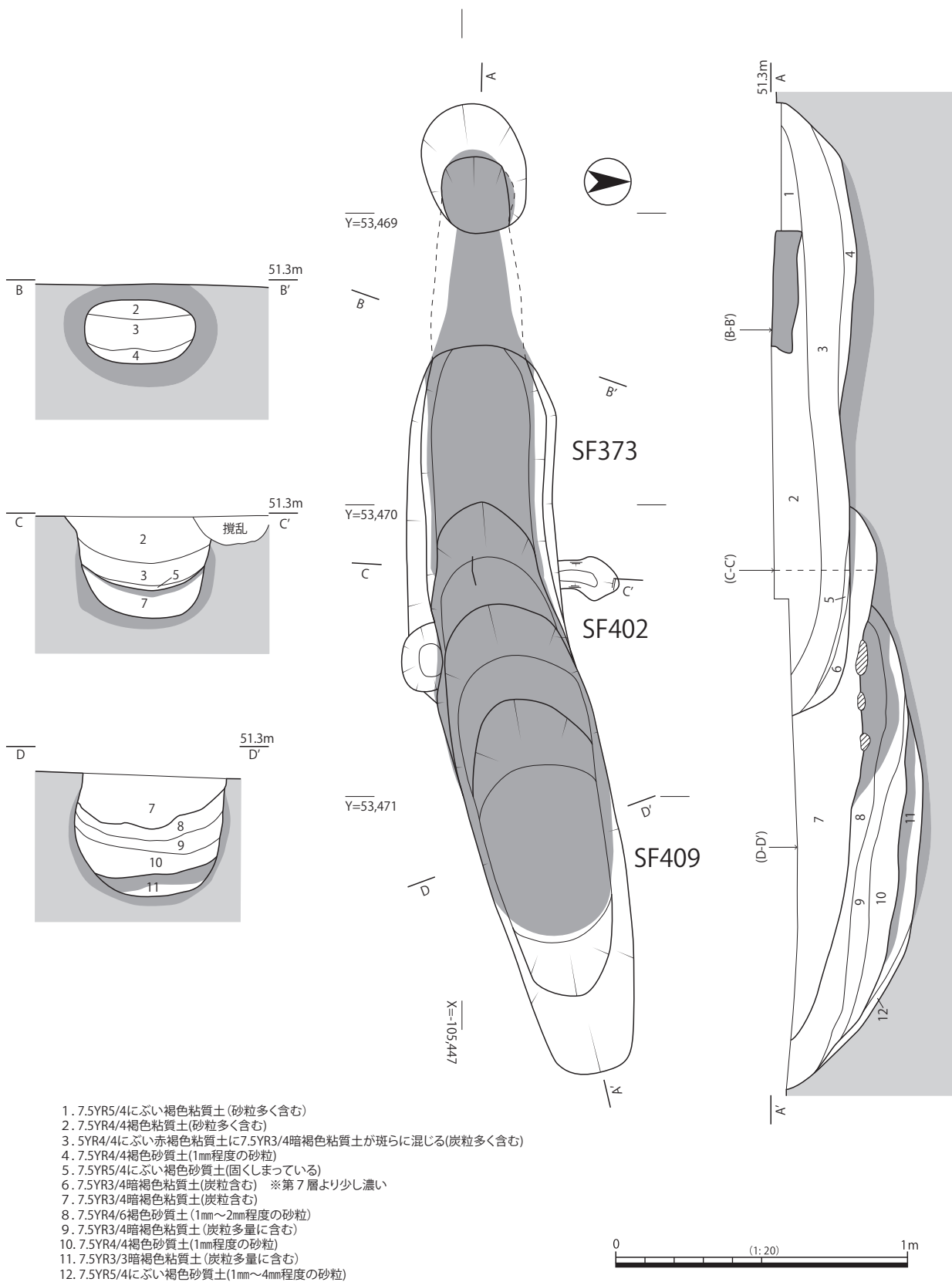
第40図 SF369 平面・断面図 (1:20)



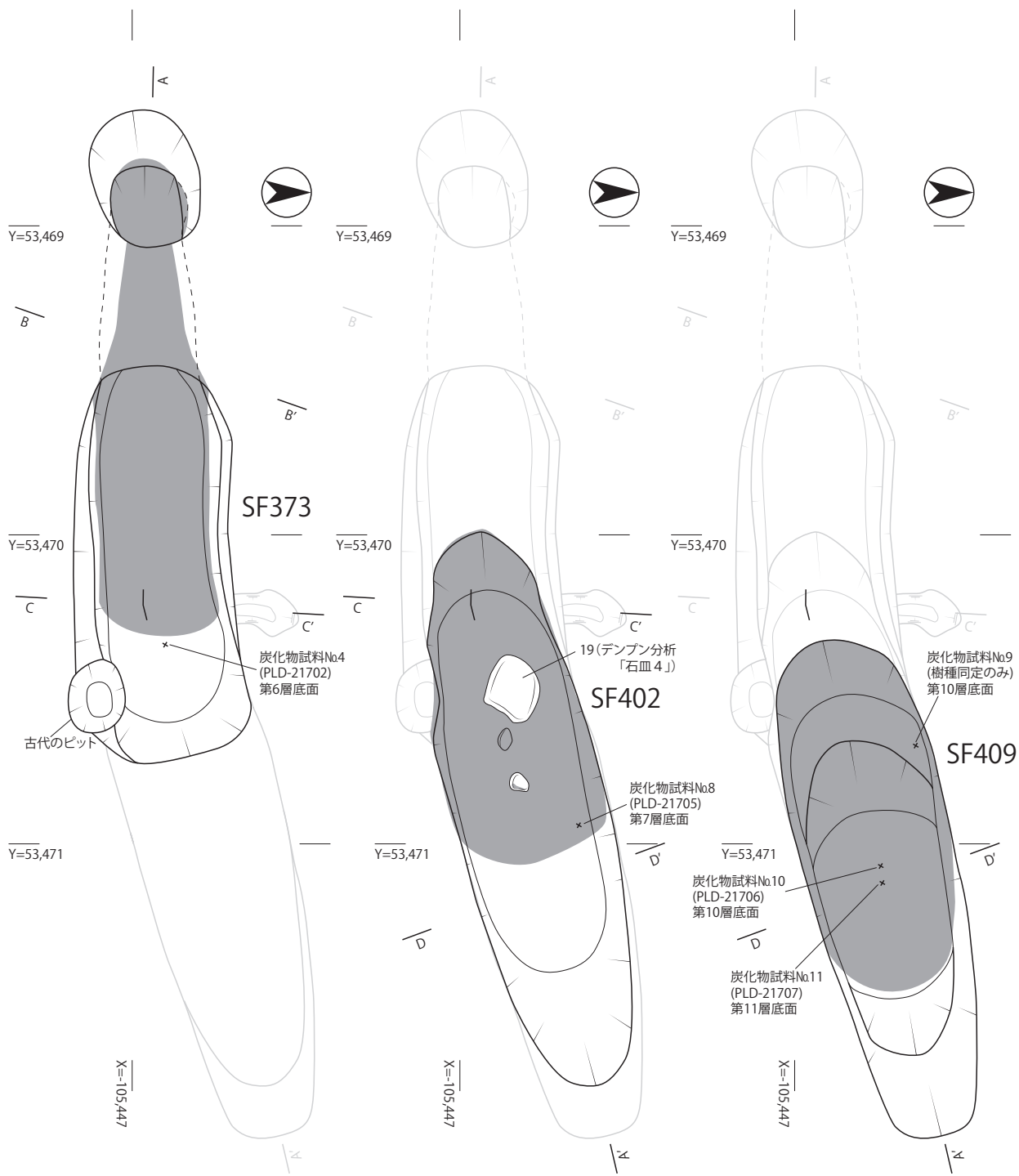
1. 7.5YR5/4にぶい褐色粘質土 (SF369)
2. 7.5YR4/3褐色粘質土 焼土粒、炭化粒、土器片が混じる、
10YR4/2灰黄褐色粘質土をブロック状に少量含み、小礫を少量含む (SF369)
3. 2.5Y7/4浅黄色粘質土 焼土・炭化物・白色砂粒・10YR4/2灰黄褐色粘質土を少量含む 固くしまっている (SF369)
4. 2.5Y5/3黄褐色粘質土 (SF367)
5. 7.5YR4/4褐色粘質土 (SF383)
6. 5YR5/4にぶい赤褐色粘質土 焼土粒、炭粒混じる (SF383)



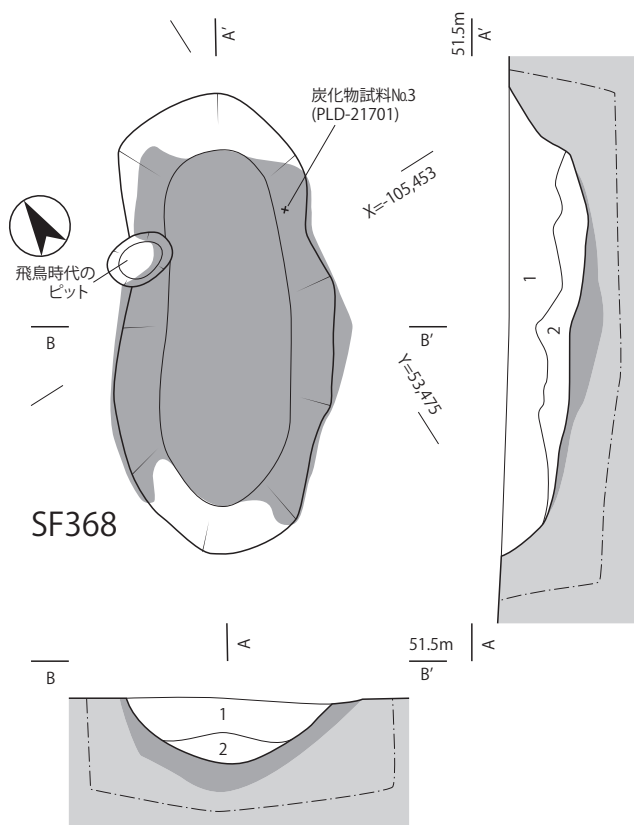
第41図 S F 367・369・383 平面・断面図 (1:20)



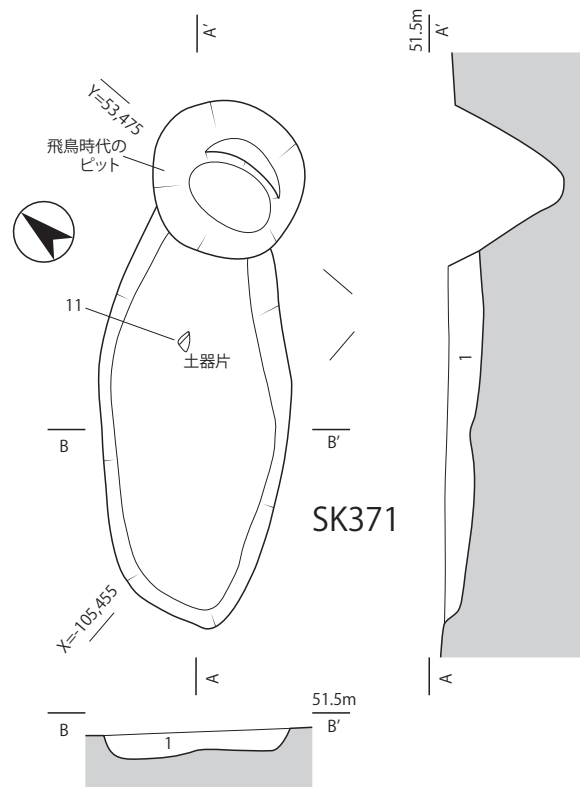
第42図 SF373・402・409 平面・断面図 (1:20)



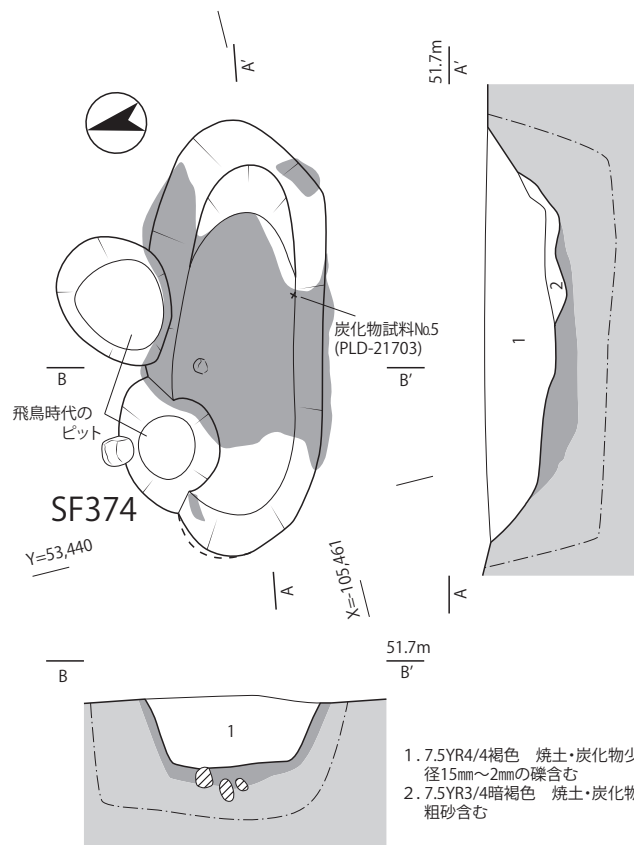
第43図 S F 373・402・409 平面・断面図 (1 : 20)



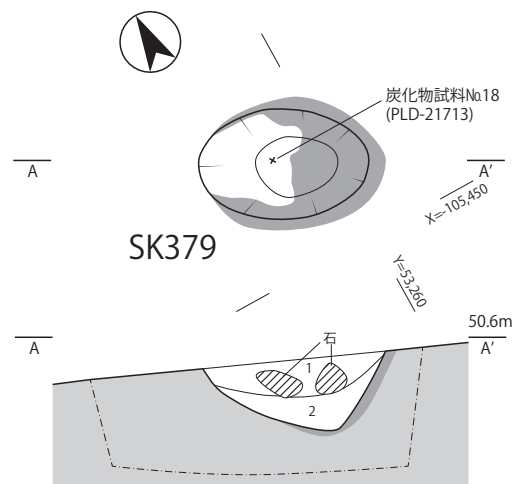
1. 7.5YR3/3暗褐色 (7.5YR4/3褐色斑らに混じる) 炭化物少量、径5mm位の礫含む
2. 7.5YR3/2黒褐色 焼土粒少量、炭化物含む 粘性あり



1. 7.5YR3/3暗褐色 (7.5YR4/4褐色混じる) 炭化物少量、径20mm~3mm位の礫含む

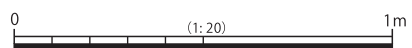


1. 7.5YR4/4褐色 焼土・炭化物少量含む 径15mm~2mmの礫含む
2. 7.5YR3/4暗褐色 焼土・炭化物少量含む 粗砂含む



1. 7.5YR4/3褐色粘質土
2. 7.5YR4/4褐色粘質土(焼土粒、炭粒を含む)

■ 被熱による赤変



第44図 SF368・374・SK371・379 平面・断面図 (1:20)

部を利用して、新たにS F 369がつくられている。

燃焼坑の底面に、石が横一列に並んでいる状況が確認できた。さらに、平面図に記録はないが、煙道付近にも石が数個存在しており、一部は土層断面図に記録が残っている。なお、横一列に並んでいる石は赤変していなかったが、それ以外の石は、赤変しているものと、そうでないものがあった¹⁵⁾。出土した石はすべて自然石で使用痕や加工痕はみられなかった。

炉穴の赤変は、煙出坑以外のはほぼ全面におよんでいる。断面(A-A')では特に燃焼坑の南側の底面が厚く焼けており、焚口付近が強く焼ける通例とは異なる状況が窺えた¹⁶⁾。

土器は出土していないが、第4層の底面で採取した炭化物について放射性炭素年代測定を行った結果、 9355 ± 30 (yrBP $\pm 1 \sigma$) の年代値が得られた(詳細は第VI章を参照)。

S F 368 (第44図) 南区中央部北側で検出した。煙道の天井が残っておらず、平面形や赤変の範囲等からも、どの方向に煙出坑があったのか判断しづらいが、S F 390やS F 406のように煙道から煙出坑にかけて深くなる例があるため、北側を煙出坑と仮定して図示した。

埋土は2層に分層できた。第1層は炭化物の少ない暗褐色の層、第2層は炭化物が多い黒褐色粘質土である。この違いは比較的、明瞭であった。

赤変は炉穴の両端以外のはほぼ全面に及んでいるが、断面(A-A')では特に中央部の赤変が厚くなっており、その部分の被熱が強かったことが窺える。

土器片が1点出土したが、細片のため図化はできなかった。底面で採取した炭化物について放射性炭素年代測定を行った結果、 9425 ± 30 (yrBP $\pm 1 \sigma$) の年代値が得られた(詳細は第VI章を参照)。

S F 369 (第40・41図) 南区中央部北壁付近で検出した。S F 367と重複しており、断面の切り合い等はS F 369の方が新しい。S F 367が第4層まで埋没した時点で、その一部を利用するかたちで新たにつくられたものとみられる。

煙道の天井は残存していないが、北東の先端部分が煙出坑、埋没途中のS F 367が燃焼坑、赤変した石の出土したあたりが焚口とみられる。

赤変した石は扁平な自然石で、特に加工痕や使用痕はみられなかったが、出土した位置から、人為的に置かれた可能性は高いと思われる。ただし、その意図や意味はよく分からない。

炉穴の赤変は、煙道および焚口と想定される部分で確認できた。

埋土は3層に分層したが、第1層と第2層は炭化物の多寡で分層しており、明瞭に境界があるものではなかった。第3層は炭化物と焼土を含む灰混じりの層で、部分的に第1・2層より固くしまっていた。

第1層からチャートの剥片が2点(13・14)と、細片のため図化できなかったが、土器片2点が出土し、第2層からは縄文土器の小片(12)が1点出土している。また、第3層の底面で採取した炭化物について放射性炭素年代測定を行った結果、 9400 ± 30 (yrBP $\pm 1 \sigma$) の年代値が得られた(詳細は第VI章を参照)。

S F 373 (第42・43図) 南区中央部北壁付近で検出した。

煙道がほぼ完存しており、西側が煙出坑、東側が燃焼坑である。

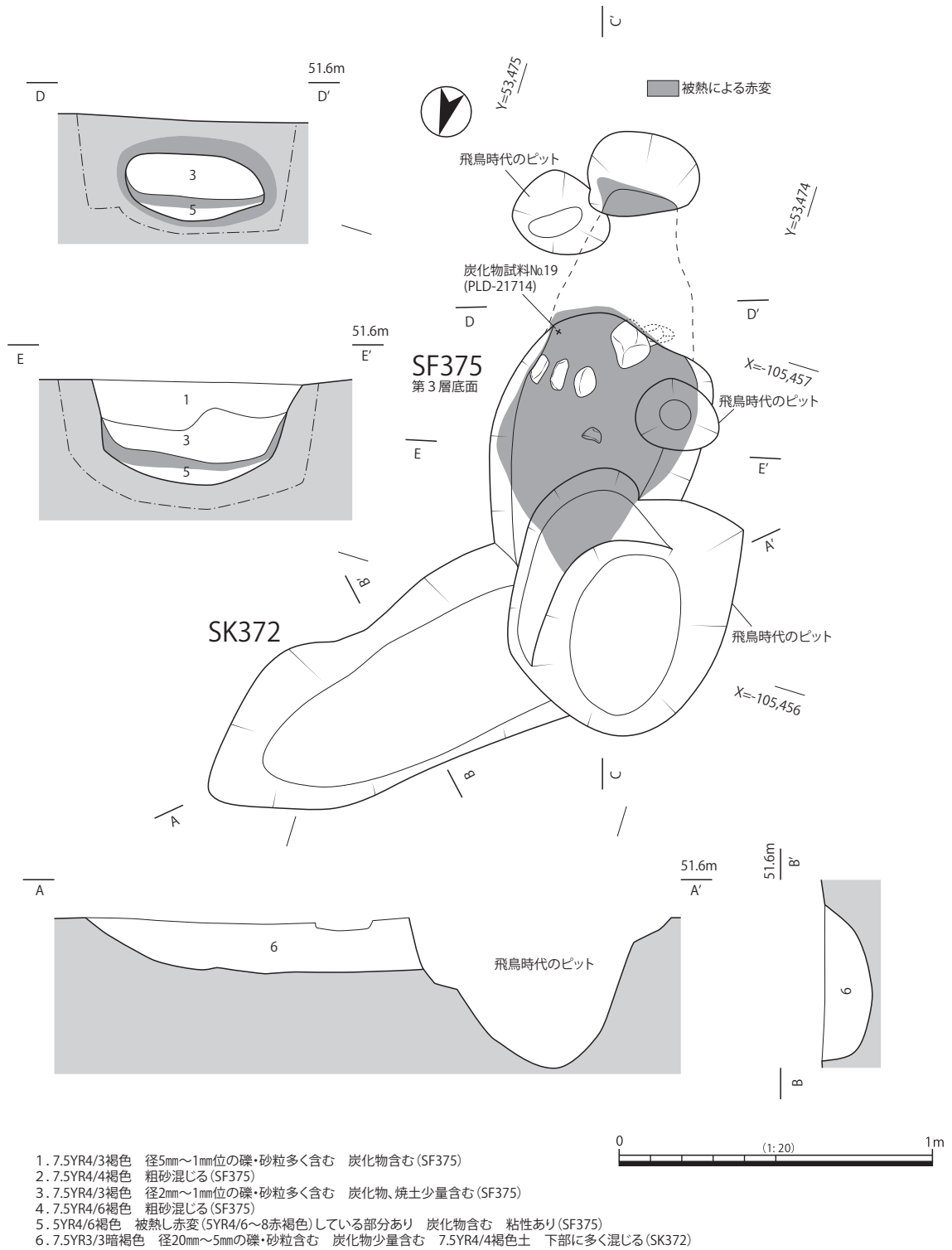
S F 373・S F 402・S F 409は重複しており、新旧関係は、断面の切り合いから、古い順に、S F 409、S F 402、S F 373である。

S F 402・S F 409の延長上に若干角度を変えて重複しているが、断面の切り合いは、それらの炉穴を再利用したのではなく、完全に埋没してから新しくS F 373がつくられたことを示している。

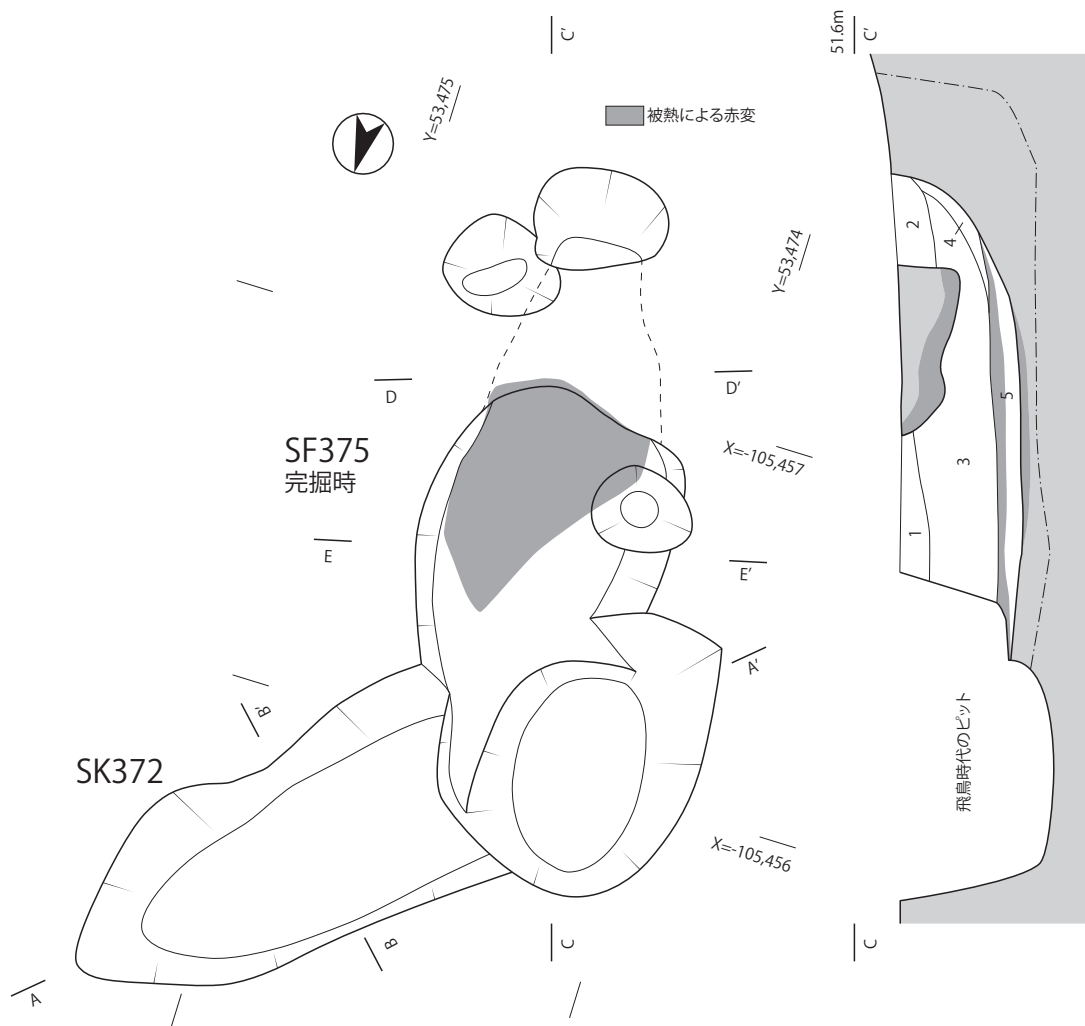
埋土は、全体的な色の濃淡や砂粒・炭化物の含み具合などで6つに分層したが、その境界はあまり明瞭なものではなかった。ただし、第5層は固くしまった砂質土で他とは明確に区別できた。また、第6層とS F 402の第7層との差異はわずかであった。

遺物は、第1層より押型文土器(粗いネガ楕円?) 1点、第3層より押型文土器(斜格子?) 1点が出土したが、いずれも摩耗した細片のため、図化はできなかった。第6層の底面付近で採取した炭化物について放射性炭素年代測定を行った結果、 9325 ± 30 (yrBP $\pm 1 \sigma$) の年代値が得られた(詳細は第VI章を参照)。

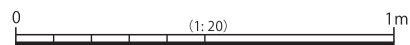
S F 374 (第44図) 南区中央部北側で検出した。



第45図 SK372・SF375 平面・断面図① (1:20)



1. 7.5YR4/3褐色 径5mm~1mm位の礫・砂粒多く含む 炭化物含む(SF375)
2. 7.5YR4/4褐色 粗砂混じる(SF375)
3. 7.5YR4/3褐色 径2mm~1mm位の礫・砂粒多く含む 炭化物、焼土少量含む(SF375)
4. 7.5YR4/6褐色 粗砂混じる(SF375)
5. 5YR4/6褐色 被熱し赤変(5YR4/6~8赤褐色)している部分あり 炭化物含む 粘性あり(SF375)



第46図 SK372・SF375 平面・断面図② (1:20)

煙道の天井が残っておらず、どの方向に煙出坑があったのか判断が難しいが、より強く焼けている方を焚口側と考えて、東側を煙出坑と仮定して図示した。

埋土は炉穴の深い部分に暗褐色の第2層が認められるほかは大半が褐色の第1層で占められている。

炉穴の西端は若干オーバーハングしており（図中の破線部分）、その付近から押型文土器の小片（15）が出土した。また、底面で採取した炭化物について放射性炭素年代測定を行った結果、 9320 ± 30 (yrBP $\pm 1 \sigma$) の年代値が得られた（詳細は第VI章を参照）。**S F 375**（第45・46図） 南区中央部北側で検出した。煙道がほぼ完存しており、南側が煙出坑、北側が燃焼坑である。

S K 372 と一部重複しているが、重複部分のほとんどが古代のピットによって壊されているため、S K 372 との新旧関係を明らかにすることはできなかった。

焚口付近から石が6個出土した。奥の5個は赤変しておらず、手前の1個のみが赤変していた。石に加工痕や使用痕はみられず、すべて自然石であった。これらは、すべて第3層の底面から出土した。

断面では底面に赤変が2層確認できた。赤変が明瞭で厚みもあり、側面にまでおよんでいることから、炉内の焼土が崩れて堆積したものではなく、いちど使用された後に再度燃焼が行われたことを示すものと考えられる。

土器片が1点出土したが、細片のため図化はできなかった。第3層の底面で採取した炭化物について放射性炭素年代測定を行ったが、残念ながら必要な炭素量を回収できず年代値は得られなかった（詳細は第VI章を参照）。

S F 383（第40・41図） 南区中央部北壁付近で検出した煙道付炉穴である。S F 367 と重複しており、断面の切り合いはS F 367 より古いことを示している。ただし、この切り合いについては、平面・断面ともに不明瞭であったため、誤認している可能性がある（破線で示した部分）^⑩。

煙道の天井は残存していないが、断面形等から、西側が煙出坑、石の出土したあたりが煙道であったものと思われる。この2つの石は調査後の選別で石器であると判断された（68・69）。

埋土の第5層と第6層の間に、赤色の薄い層を確認した。調査時は被熱痕と解釈して記録したが、縮まりもなく、側面にまでおよんでいないことから、煙道の天井などの焼土が崩れて溜まったものである可能性が高い。

第6層の底面で採取した炭化物について放射性炭素年代測定を行った結果、 9240 ± 30 (yrBP $\pm 1 \sigma$) の年代値が得られた（詳細は第VI章を参照）。

S F 390（第47図） 南区中央部北壁付近で検出した。古代の土坑（S K 328）と一部重複している。

東側が煙出坑、西側が燃焼坑である。煙道は完存ではないものの、一部は天井に近い部分まで残っていた。このサイズの炉穴にも煙道が付いていたことが分かる貴重な例といえる。

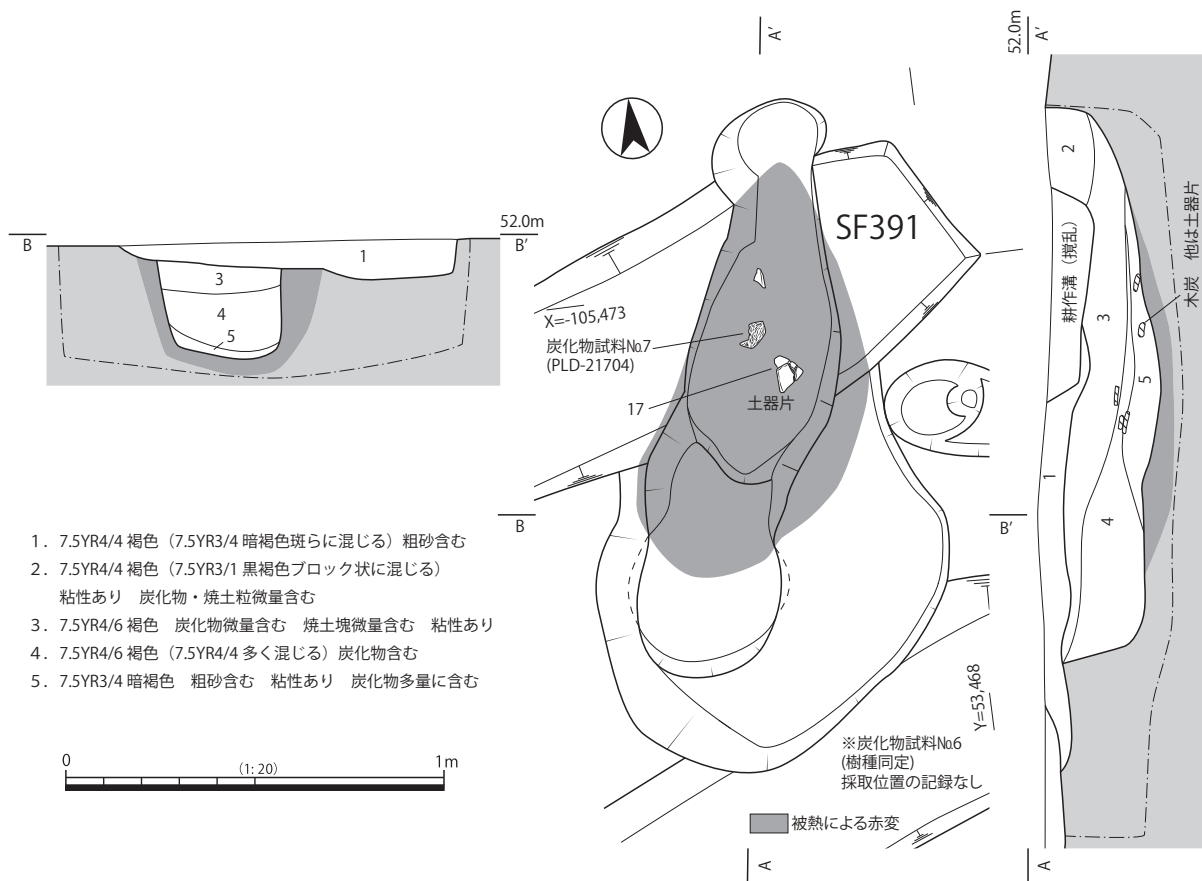
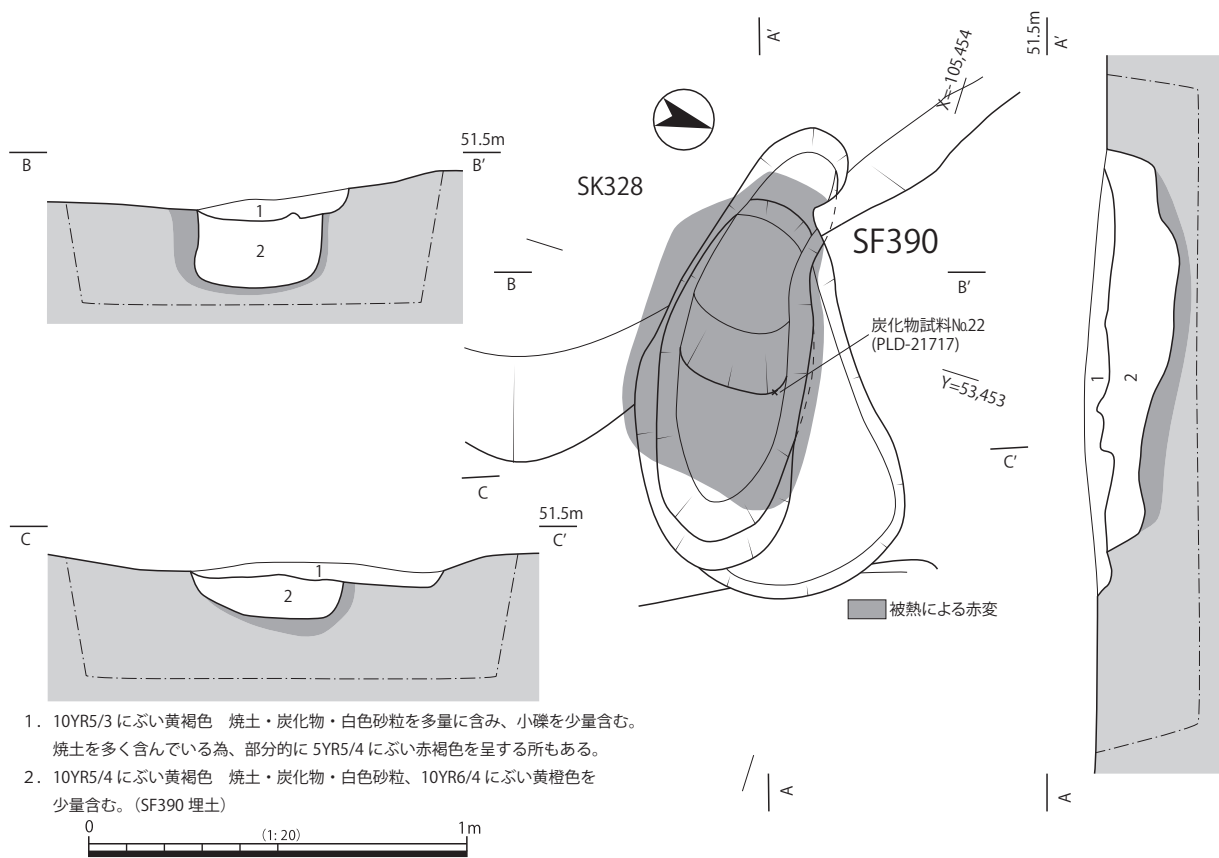
土層断面図の第1層は浅い攪乱状の掘り込みである。表土の土が入っていないことから、現代のものではない。重複するS K 328 に関連する可能性もあるが、後述のS F 391 やS F 392 にも同様の浅い攪乱状の掘り込みがみられることから、炉穴となんらかの関連がある可能性も考えられる。第2層はS F 390 の埋土である。炭化物や砂粒の含み具合が雑多で、色ムラ等も多く、それらをつないで細かく分層することはできなかった。

炉穴の底面は中央の手前から徐々に深くなっており、奥の煙道と煙出坑との接合部分は段になっている。側面は右側中央付近に若干のオーバーハングがみられる。赤変の範囲は、炉穴の両端以外の大部分におよび、断面（A-A'）では、燃焼坑の少し浅くなっている部分が厚く焼けている。この厚く焼けているあたりが焚口とみられる。

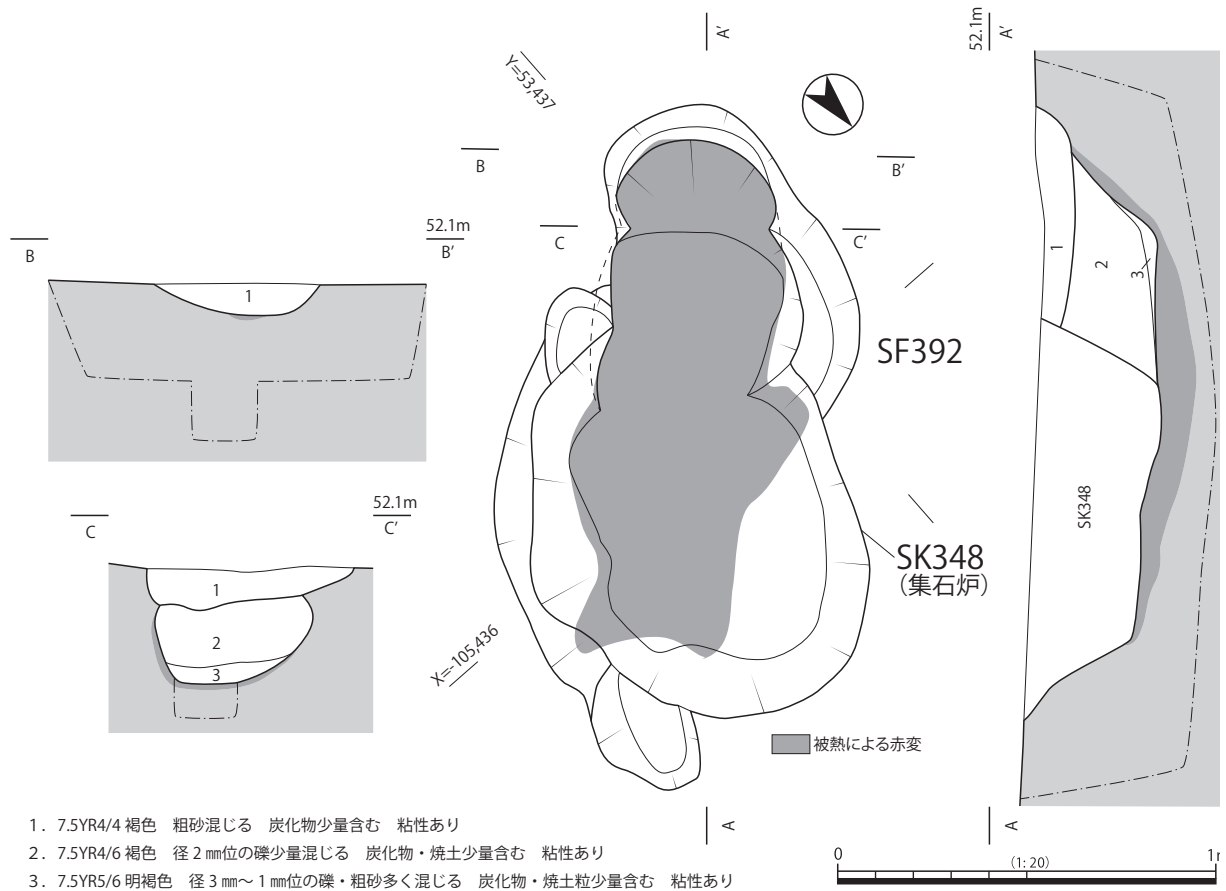
出土遺物は被熱して赤変した敲石（16）がある。この敲石について、残存デンプン粒分析を行ったが、デンプン粒は検出されなかった。また、底面で採取した炭化物について放射性炭素年代測定を行った結果、 9340 ± 30 (yrBP $\pm 1 \sigma$) の年代値が得られた（詳細は第VI章を参照）。

S F 391（第47図） 南区中央部で検出した。攪乱（現代の耕作溝）のために煙道の天井は残っていないが、平面の形状から、北が煙出坑、南が燃焼坑と思われる。

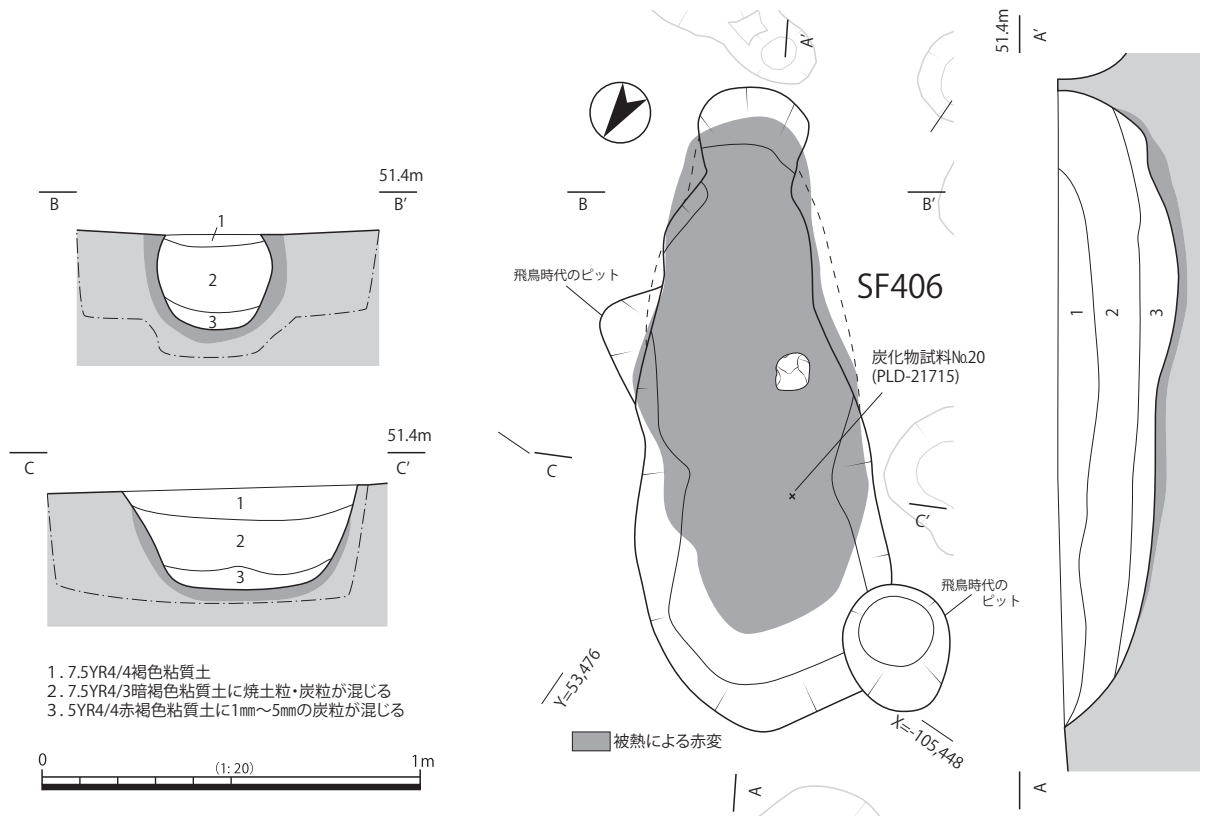
土層断面図の第1層は、上述の攪乱（耕作溝）と



第47図 SK390・391 平面・断面図 (1:20)



1. 7.5YR4/4 褐色 粗砂混じる 炭化物少量含む 粘性あり
2. 7.5YR4/6 褐色 径2mm位の礫少量混じる 炭化物・焼土少量含む 粘性あり
3. 7.5YR5/6 明褐色 径3mm~1mm位の礫・粗砂多く混じる 炭化物・焼土粒少量含む 粘性あり



第48図 S F 392・406 平面・断面図 (1:20)

は別の浅い攪乱状の掘り込みである。表土の土が入っていないことから、現代のものではない。S F 390 や S F 392 にも同様の浅い攪乱状の掘り込みがみられることから、炉穴となんらかの関連がある可能性も考えられるが詳細は不明である。第2～5層が炉穴の埋土である。第5層の境界は比較的明瞭であったが、他はあまり明瞭ではなかった。

炉穴の底面は中央が最も深く、奥の煙出坑に向かって少しずつ浅くなっており、手前の燃焼坑は平坦になっている。燃焼坑の側面はオーバーハングしており、この点は今回報告している他の煙道付炉穴ではみられない特徴である。また、赤変範囲は焚口と考えられる付近が特に厚く焼けている。

他の炉穴に比べて土器片が多く出土したが、ほとんどが風化した細片で、接合して図化できたのは口縁部付近(17)の1点のみである。

底面付近で採取した炭化物(試料No.7)について放射性炭素年代測定を行った結果、 9340 ± 30 (yrBP $\pm 1 \sigma$) の年代値が得られた。また、試料No.6・7の樹種同定を行った結果、どちらもクリであることが判明した(詳細は第VI章を参照)。

S F 392 (第48図) 南区中央部西側で検出した。集石炉 S K 348 と重複しており、S K 348 より古い。遺構の大半が S K 348 によって失われているが、赤変している範囲がおおよそその本来の規模を示しているものと思われる^⑧。また、浅い攪乱状の掘り込み(第1層)があり、そのために遺構の上面が失われている。煙道の天井は残っていないが、一部にオーバーハングする部分(破線部分)があり、そのあたりが煙道、続いてその先(南西側)が煙出坑と思われる。

土層断面は、重複する集石炉(S K 348)が S F 392 の埋没後に掘削されたことを示している^⑨。

出土遺物はなく、放射性炭素年代測定も行われていない。

S F 402 (第42・43図) 南区中央部北壁付近で検出した。

S F 373・S F 402・S F 409 は重複しており、新旧関係は、断面の切り合いから、古い順に、S F 409、S F 402、S F 373 である。

土層断面から、S F 402 は、下層の S F 409 が第

8層まで埋没した時点で、S F 409 を西側に延長するかたちで新たに煙道と煙出坑を掘削してつくられたものとみられる。S F 402 が埋没した後に、新たに S F 373 が掘削されているため、煙道と煙出坑は消滅している。

埋土は、第7層の1層とした。第7層中には部分的に土層の境界面とみられる部分も存在したが、炭化物や砂粒の含み具合も雑多で、色ムラ等も多く、それらをつないで細かく分層することはできなかった。

焚口と想定できる位置から石が3個出土した。手前の2個は自然石で、程度の差はあるもののどちらも被熱して赤変していた。この2つは小さいこともあり、意図的に入れられたものではなく、自然に転がり込んだものと思われる。

奥の扁平で大きな石は、選別の結果、石皿と判断された(19)。赤変は感じられず、被熱はしていないと思われる。残存デンプン粒分析を行ったが、デンプン粒は検出されなかった(詳細は第VI章を参照)。

出土遺物としては、他にチャートの剥片(18)と細片のため図化できなかったが、土器片が1点ある。第7層の底面で採取した炭化物について放射性炭素年代測定を行った結果、 9375 ± 30 (yrBP $\pm 1 \sigma$) の年代値が得られた(詳細は第VI章を参照)。

S F 406 (第48図) 南区中央部北壁付近で検出した。煙道は完存ではないものの一部は天井に近い部分まで残っていた。炉穴の側面にオーバーハングした部分(破線部分)があり、煙道が炉穴の中央付近まで続いていた可能性が考えられる。

埋土は3つに分層した。第1層と第2層の境界はあまり明瞭ではなかったが、第3層は赤味が強く第2層との境界は比較的明瞭であった。第3層はしまりがなく炭化物を多く含むことから、赤変した地山を誤認したのではなく^⑩、炉壁の焼土が流れて灰に混じり、堆積したものと思われる。

焚口と考えられるあたりで石が1個出土した。炉穴の底面に置かれており、赤変はしていなかった。

遺物は出土していないが、底面で採取した炭化物について放射性炭素年代測定を行った結果、 9410 ± 30 (yrBP $\pm 1 \sigma$) の年代値が得られた(詳細は第VI章を参照)。

S F 409 (第 42・43 図) 南区中央部北壁付近で検出した。

S F 373・S F 402・S F 409 は重複しており、新旧関係は、断面の切り合いから、古い順に、S F 409、S F 402、S F 373 である。

埋土は第 8～12 層までの 5 層に分層できた。砂粒を多く含む層と炭化物を含む粘質土の互層になっており、重複する他の炉穴に比べ、各層の境界は明瞭であった。

底面では赤変が 2 層確認できた。赤色が明瞭で厚みもあることから、炉内の焼土が崩れて堆積したのではなく、いちど使用された後、ある程度の期間の後に再度燃焼が行われたことを示すものと考えられる。

第 8 層まで埋没した時点で残った炉穴を延長するかたちで新たに S F 402 が掘削されている。

土器等の出土はなかったが、第 10 層の底面で採取した炭化物(試料 No. 10)と第 11 層の底面で採取した炭化物(試料 No. 11)について放射性炭素年代測定を行った結果、No. 10 は 9310 ± 30 (yrBP $\pm 1 \sigma$)、No. 11 は 9200 ± 30 (yrBP $\pm 1 \sigma$) の年代値であった。また、試料 No. 9～11 の樹種同定を行った結果、樹種はすべてクリであることが判明した(詳細は第 VI 章を参照)。

S F 754・S F 755・S F 756 (第 49 図)

平成 24 年度の第 7 次調査終了後、高速道路建設工事中に不時発見された炉穴である。工事によって掘削された巨大な溝の壁面に炉穴の断面が確認できた。

形状と被熱範囲等から煙道付炉穴と思われる。

現場は工事のために、5 m 以上の深さに掘削されており、各炉穴の位置と形状はかろうじて記録できたが、遺構の掘削等はできなかった。

(4) 土坑

早期の土坑は 4 基を確認した。

S K 371 (第 44 図) 南区中央部北側で検出した。平面形は長楕円形で煙道付炉穴に似るものの、深さは 9 cm と浅く、赤変等の被熱痕は確認できなかった。

押型文土器の小片(11)が出土していることから、当該期の遺構とした。

煙道付炉穴の集中する範囲に位置することから、煙道付炉穴の燃焼坑の掘削途中のものである可能性

もあるが、詳細は不明である。

S K 372 (第 45・46 図) 南区中央部北側で検出した。平面形は煙道付炉穴に似るものの、深さは 16 cm と浅く、赤変等の被熱痕は確認できなかった。上述の S K 371 とは南に 50 cm ほどの間隔をおいて位置し、平面形や規模・埋土などが似ており、軸方向も概ね揃う。これらの類似性から、S K 371 と同じ時期の遺構とした。

S F 375 と一部重複しているが、重複部分のほとんどが古代のピットによって壊されているため、S F 375 との新旧関係は明らかにすることはできなかった。

S K 371 と同様に、煙道付炉穴の集中する範囲に位置することから、煙道付炉穴の燃焼坑部分の掘削途中のものである可能性もあるが、詳細は不明である。

S K 379 (第 44 図) 北区東側南壁付近で検出した被熱(赤変)した小土坑である。北区において早期の遺構であることが確認できた唯一の遺構である。

平面形は長径 45 cm・短径 29 cm の楕円形を呈し、底面は東側が浅く西側が深い。最も深いところで 20 cm の深さがあった。

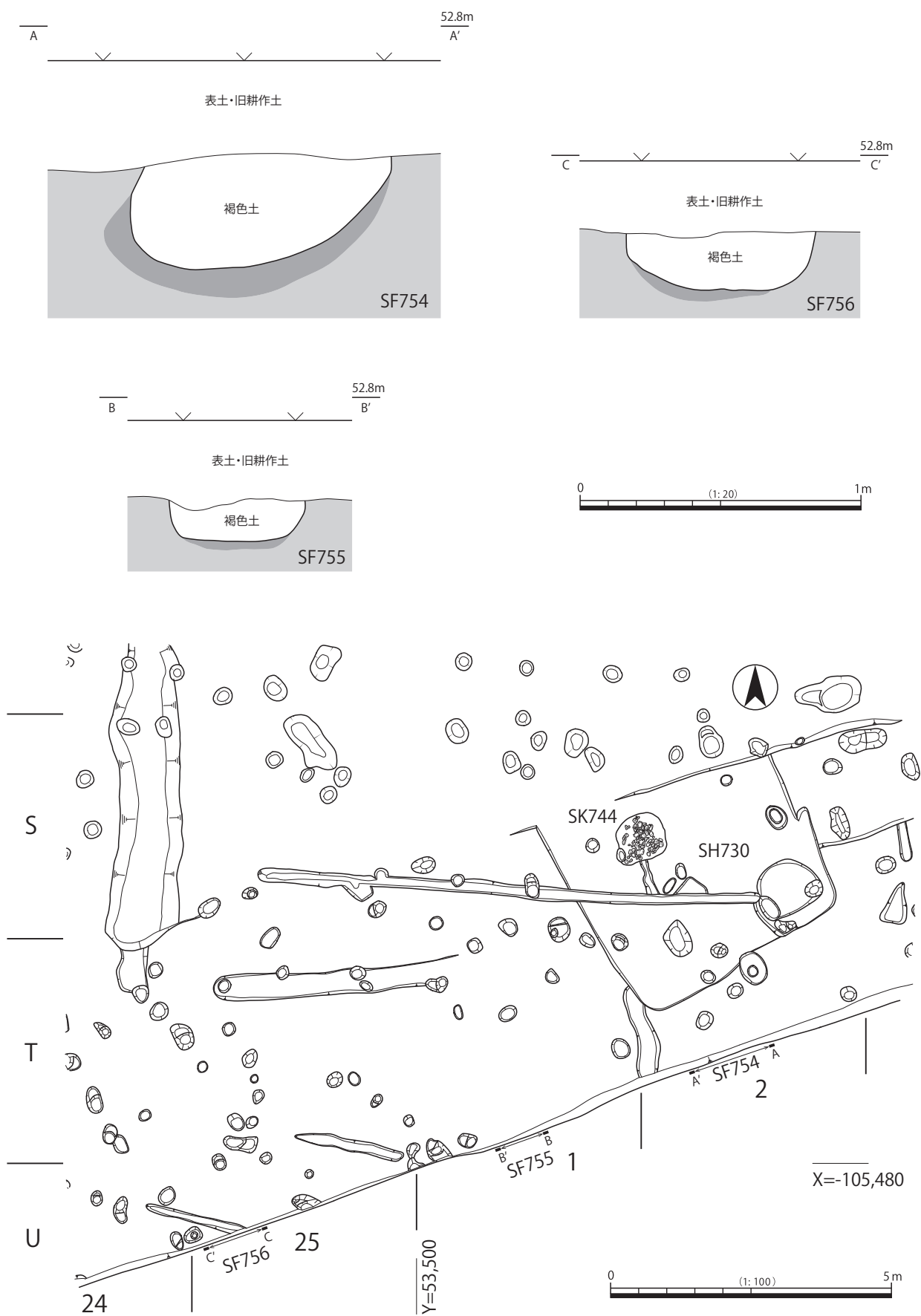
埋土は 2 層に分層したが、境界はあまり明瞭ではなかった。第 1 層からは拳大の自然石が 2 個出土した。石に赤変は感じられなかった。第 2 層は焼土や木炭を含んでおり、底面付近は木炭が少し多くなるように感じられた。

土坑の側面と底面の一部が赤変していることから、たんに燃え残りが捨てられた穴ではなく、この穴の中で燃焼が行われたことが分かる。

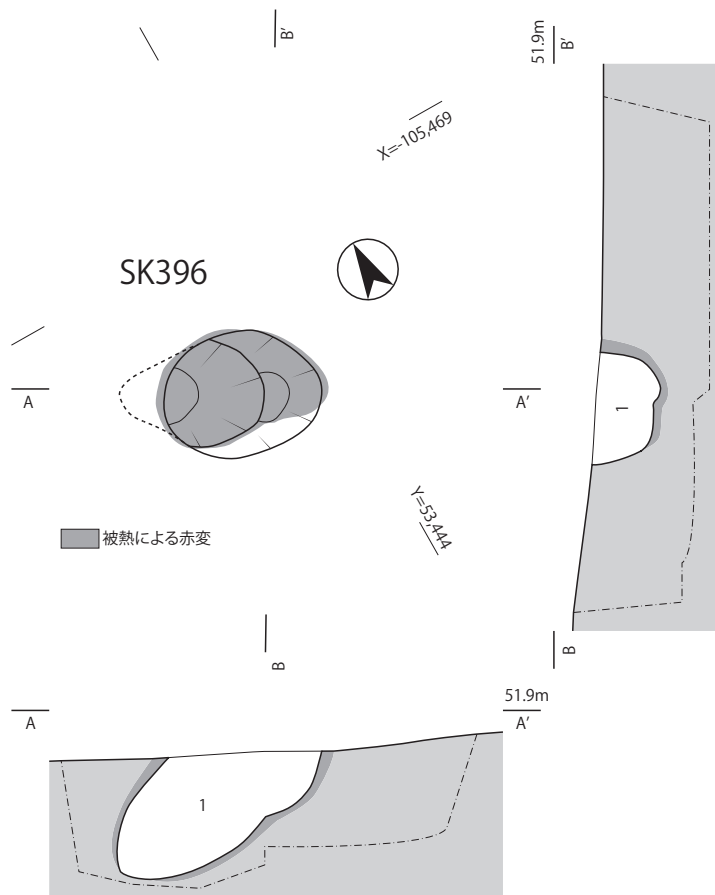
煙道付炉穴の煙出坑の可能性も考えられたため、断ち割って断面を観察したが、穴が他に続いていく様子はなく、単独の被熱土坑であることを確認した。

赤変の厚さは底面よりも側面の方が厚くなっており、底面の傾斜を含め、燃焼の方向となんらかの関係があると思われる。地上部にも造作を想定するべきかもしれないが、周囲にはなんの痕跡もなく詳細は不明である。

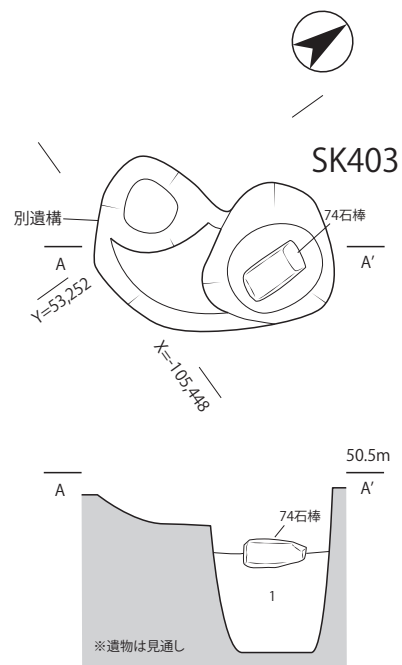
底面付近で採取した炭化物について放射性炭素年代測定を行った結果、 9305 ± 30 (yrBP $\pm 1 \sigma$) の年代値が得られた(詳細は第 VI 章を参照)。



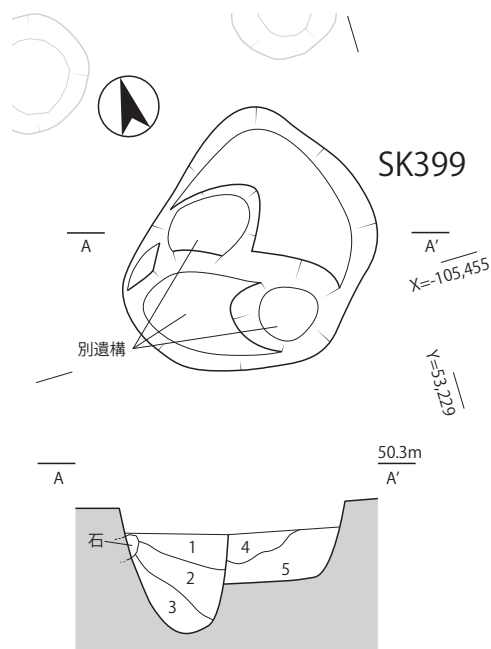
第49図 S F 754・755・756 平面・断面図 (1:20・1:100)



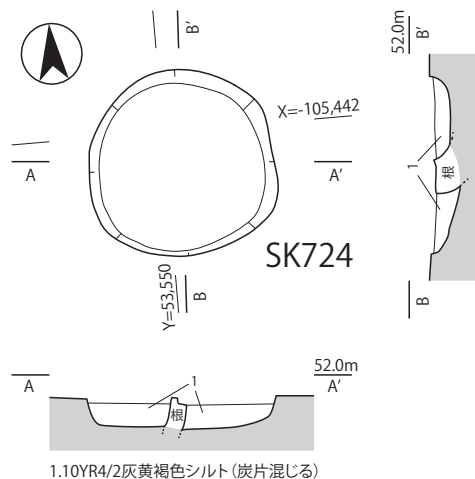
1. 7.5YR4/6褐色(7.5YR3/2黒褐色斑らに混じる)
炭化物・粘土粒少量、径5mm~1mmの礫・粗砂含む



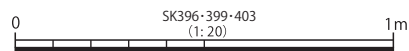
1. 7.5YR4/3褐色~7.5YR3/3暗褐色粘質土(炭粒を含む)



1. 10YR3/2黒褐色粘質土(10YR4/1褐灰色粘質土ブロック少量含む) ※別ピット埋土
2. 10YR3/3暗褐色粘質土(10YR4/1褐灰色粘質土多量含む) ※別ピット埋土
3. 10YR4/1褐灰色粘質土 ※別ピット埋土
4. 10YR2/2黒褐色粘質土 ※SK399埋土
5. 10YR2/3黒褐色粘質土(10YR5/2灰黄褐色粘質土ブロック少量含む) ※SK399埋土



1. 10YR4/2灰黄褐色シルト(炭片混じる)



第50図 SK396・399・403・724 平面・断面図 (1:20・1:40)

S K 396 (第 50 図) 南区中央部西側で検出した被熱(赤変)した小土坑である。

開口部の平面形は、長径 42cm・短径 34cmの楕円形を呈する。穴は斜めに掘り込まれており、検出面からの深さは 32cmを測る。

煙道付炉穴の煙出坑の可能性も考えられたため、断ち割って断面を観察したが、穴が続いていく様子はみられなかった。

埋土に炭化物を含み、側面と底面は被熱し赤変している。土器等の出土はなかった。

前述の S K 379 に形態が類似することから、関連性を重視して、この時期の遺構とした。

2 縄文時代中期

出土した遺物等から中期の可能性のある遺構のうち、主なものについて報告する。

(1) 土坑

S K 399 (第 50 図) 北区中央部東側で検出した。南側は他の時代のピットによって大半が失われている。

鉢の口縁部小片 1 点 (72) と土器細片が 4 点、打製石斧 (73) 1 点が出土した。

S K 403 (第 50 図) 北区の古墳時代の竪穴住居 S H 387 の南側で検出した。

両端を欠損した大型石棒 (74) と、重さ 1.9kgの緑色の自然石が出土した。石棒は土坑の中ほどに横たわった状態で出土した。自然石の出土状況は遺憾ながら記録がない。

石棒は中期以降のものとみられる。緑色の自然石は角張ってはいるが、端部は水磨をうけて丸みを帯びていた。祭祀に関連する可能性も考えられるが詳細は不明である。

S K 724 (第 50 図) 南区東側で検出した。平面形は直径約 1 mの円形を呈し、底面は平坦である。深さは 15cmを測る。

中期末とみられる深鉢の口縁部 (75～77) が出土した。

3 縄文時代後期

出土した遺物等から後期の可能性のある遺構のうち、主なものについて報告する。

(1) 土坑

S K 316 (第 51 図) 南区中央部で検出した。約 1 mの円形の土坑の東側に足場状の浅い掘り込みが付

いている。土坑の底面は平坦で、側面は僅かだがオーバーハングしている。被熱痕(赤変等)は見られなかった。

縄文土器片 2 点 (81・82)、切目石錘 2 点 (83・84)、赤チャートの剥片 1 点 (85)、無文の縄文土器細片 5 点が出土した。遺物は全て第 5 層の直上で出土した。

S K 330 (第 51 図) 前述の S K 316 から、北東に 50cmほど離れた地点で検出した。S K 316 と同様に、約 1 mの円形の土坑の東側に足場状の浅い掘り込みが付いている。土層断面では土坑と足場状の掘り込みに切り合いが記されているが、境界はあまり明瞭ではなく、平面検出時には確認できなかった。

土坑の底面は平坦で、側面は僅かだがオーバーハングしている。底面と側面の一部に赤変が見られた。

遺物は出土していないが、遺構の形状と埋土が S K 316 と類似していることから、当該期の遺構とした。

S K 347 (第 51 図) 前述の S K 316・330 から北に 9 m程離れた地点で検出した。

平面形は約 1 mの円形を呈する。土坑の底面は平坦で、側面は僅かだがオーバーハングしている。被熱痕(赤変)は見られなかった。

遺物は出土していないが、遺構の形状等が S K 316 に類似していることから、当該期の遺構とした。

S K 398 (第 51 図) 北区中央部東側で検出した。

平面形は約 1 mの円形を呈し、底面は平坦で、深さは約 20cmである。

遺物は、中津式の深鉢 (86・87) と底部片 (88) が出土した。

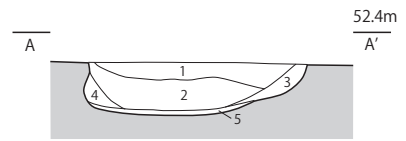
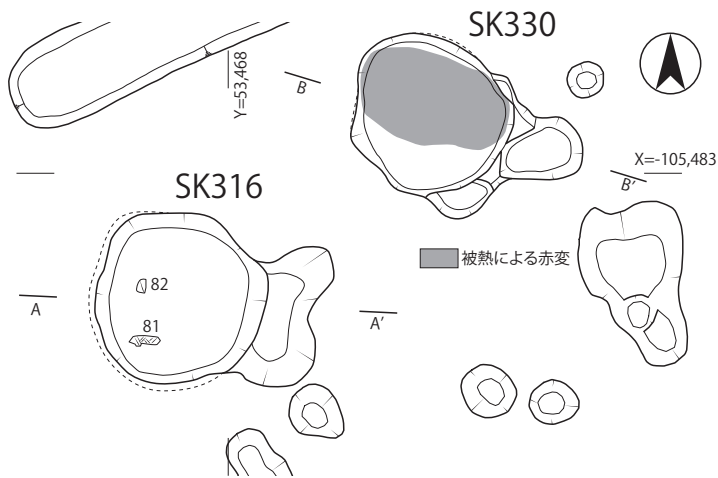
4 その他

出土遺物等から縄文時代の遺構と考えられるが、詳細な所属時期が比定できないものをここで報告する。規模の大小はあるものの、いずれも長方形～長楕円形の土坑である。

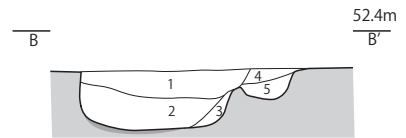
(1) 土坑

S K 378 (第 51 図) 北区中央部東側で検出した。平面形は、長さ 1.5 m・幅 0.7 mの長楕円形を呈する。底面の深さは約 0.4 mで、中央部が船底状に窪んでいる。

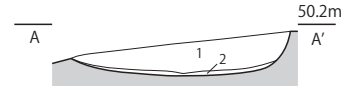
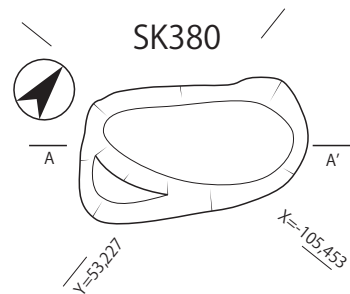
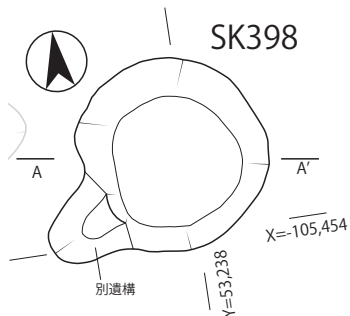
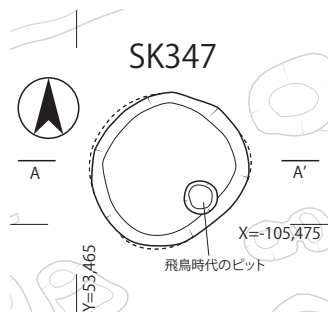
細片のため図化できなかったが、縄文土器と思わ



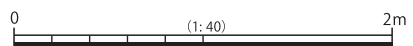
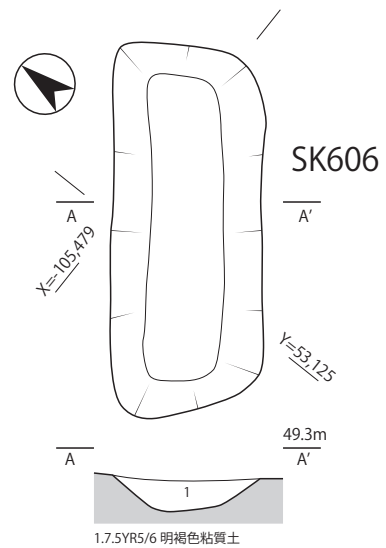
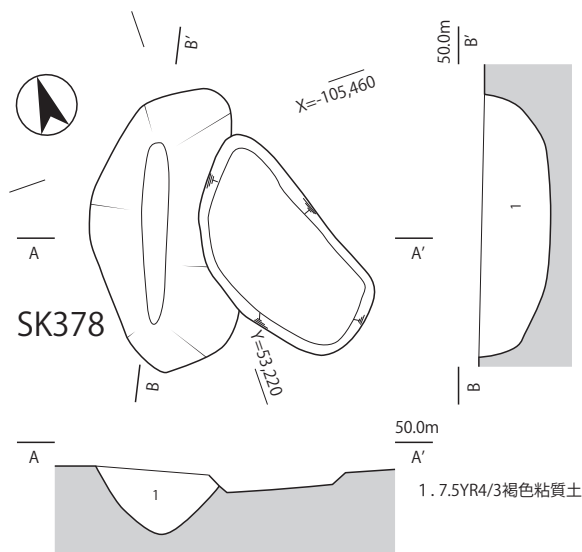
1. 7.5YR3/2黒褐色粘質土
 2. 7.5YR3/3暗褐色粘質土
 3. 7.5YR3/4暗褐色粘質土 (地山が斑々に混じる)
 4. 7.5YR4/3褐色粘質土 (やや砂っぽい)
 5. 7.5YR4/4褐色粘質土 (地山が多く混じる)
- ※土器は第5層上面から出土。



1. 7.5YR3/2黒褐色粘質土
2. 7.5YR3/2黒褐色粘質土 (5mm~1cm程の炭粒が混じる)
3. 7.5YR3/3暗褐色粘質土 (地山が混じる)
4. 7.5YR3/3暗褐色粘質土
5. 7.5YR4/3褐色粘質土



1. 7.5YR4/3褐色粘質土 (炭粒・焼土粒少量含む)
2. 7.5YR4/4褐色粘質土



第51図 SK316・330・347・378・380・398・606 平面・断面図 (1:20)

れる土器片が1点出土した。

S K 380 (第51図) 北区中央部東側で検出した。平面形は、長さ1.2m・幅0.7mの長方形を呈する。底面は平坦で、深さは約0.2mである。

細片のため図化できなかったが、縄文土器と思われる土器細片が15点出土した。

【註】

- ①出土した縄文土器については、小林達雄編『総覧 縄文土器』株式会社アム・プロモーション2008を参考にした。
- ②以下、第11次調査については、三重県埋蔵文化財センター『近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅳ』2014による。
- ③以下、第4次調査については、三重県埋蔵文化財センター『近畿自動車道名古屋神戸線建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ』2012による。
- ④これは、中野山遺跡の縄文時代早期の遺構の全てについて当てはまることである。
- ⑤石器の選別と器種の同定は、平成24年2月5日と平成26年6月30日の2回にわたり、大下明氏と久保勝正氏に依頼して、三重県埋蔵文化財センター四日市整理所にて行った。
- ⑥試料の採取は、平成24年2月16・17日と平成25年2月7・8日の2回にわたり、渋谷綾子氏に依頼して、三重県埋蔵文化財センター四日市整理所において行った。
- ⑦当然であるが、石材によって赤変しやすいものとそうでないものがある。そのため、赤変していないからといって、被熱していないとはいえない。これは、土壌についてもいえることである。
- ⑧本報告の他の集石炉で、底石が一見、浮いているように見える断面図もあるが、そういう場合でも石は断面以外の位置で底面と接している。
- ⑨集石炉に比べ、煙道付炉穴の埋土に炭化物が少ないのは、煙道付炉穴の内部が比較的閉ざされており、燃焼温度が集石炉より高くなることが原因と思われる。
- ⑩前述のとおり、第3層をどちらの遺構に伴うものとして捉えるかについては、今後も検討の余地はあるため、扱いは注意が必要である。
- ⑪形状が類似していても検出面からの深さが20cm未満で赤変のないものは「土坑」として分類した。
- ⑫石器の選別と器種の同定は、平成24年2月5日と平成26年6月30日の2回にわたり、大下明氏と久保勝正氏に依頼して、三重県埋蔵文化財センター四日市整理所にて行った。
- ⑬試料の採取は、平成24年2月16・17日と平成25年2月7・8日の2回にわたり、渋谷綾子氏に依頼して、三重県埋蔵文化財センター四日市整理所において行った。
- ⑭当時の調査記録にその旨を示唆する注釈やメモ書きが残っている。詳細は省くが、最初の検出段階でS F 383の存在に気付かず、S F 367・369を掘りきり、その後にS F 383を検出した。土層断面図の分層も、第5層は第1・2層に、第6層は第3層に、第6層の底面は第

S K 606 (第51図) 北区西側で検出した。平面形は1.9m・幅0.8mの長方形を呈する。底面は平坦で、深さは約0.2mである。

細片のため図化できなかったが、縄文土器と思われる土器片が1点出土した。

3層の底面に、それぞれ対応する可能性がある。その場合、S F 367とS F 383の新旧関係は逆になる。

- ⑮赤変の有無にかかわらずいずれも被熱している可能性は残る。
- ⑯この点から、南方向に煙出坑をもつ煙道付炉穴が先行して存在した可能性も考えられる。
- ⑰前掲註⑭。
- ⑱今回報告している集石炉で顕著に底部が赤変しているものはないため。
- ⑲しかし、この重複がたんなる偶然とも考えにくいため、燃焼坑付近はある程度開口していたのかも知れない。
- ⑳中野山遺跡の炉穴類は、埋土と被熱した地山の色が似ているため、断ち割って遺構と地山の境界を確認した後、掘削しないと掘りすぎることが多い。

第2節 弥生時代

弥生時代中期の土坑2基と後期の竪穴住居4棟・土坑3基を検出した^①。竪穴住居はすべて北区で見つかっており、南区では確認できなかった。

1 弥生時代中期

中期の遺構は南区で検出された土坑2基のみである。

(1) 土坑

S K 306 (第54図) 南区中央部で検出した土坑である。重複するS K 307のため南東部は不明であるが、残存している部分は、長径2.6 m、短径1.9 m、深さ18 cm、楕円形に近い形状を呈する。重複するS K 307より古い。出土遺物に弥生時代中期の甕(111～113)と縄文時代の敲石(114)がある。同様の敲石は調査区内で検出されている縄文時代早期の遺構から多く出土しており、土坑の埋没過程で混入したものとみられる。

遺構の性格は不明だが、底面が平らに整えられており、人が入れる大きさであることから、単なる廃棄土坑ではないと思われる。

S K 307 (第54図) 南区中央部で検出した土坑である。規模は、長径3.7 m、短径2.4 m、深さ47 cm。重複するS K 306より新しい。出土遺物に弥生時代中期の甕(115)がある。

形状等から、複数の土坑が重複している可能性も考えられるが、分層することはできなかった。土坑の周囲にピットが周るため、上屋があった可能性も考えられるが、ピットと土坑の切合い関係を明確に確認できなかったため、関連性は不明である。

土坑の中央部にリング状の高まりが検出されている。埋土(第7層)は土坑全体の埋土(第1層)と同様の黒ボクであり、焼土などは認められなかった。この形状が完存状態なのか、それとも一部が残存しているだけなのか、はっきりしないが、周囲には破壊した際に出たと思われるような土は認められなかったため、この状態でおおむね、本来の状態を表しているとみられる。凹みを利用して何かを入れていたのか、あるいは、大甕などを据え付けた痕跡かも知れないが、詳細は不明である。

2 弥生時代後期

後期の遺構は北区で検出された竪穴住居4棟・土坑2基と南区で検出された土坑1基がある。出土した土器は、中期末まで遡る可能性をもつものも混じるが、大半は後期初頭から前半までのものである。

(1) 竪穴住居

S H 385 (第52図) 北区東側で検出した竪穴住居である。規模は、6.7 m×5.8 m、深さ10 cm。主柱穴は4個あり、柱間は3.6 m×3.1 m。柱の配置は全体に歪んで菱形に近い形状を呈する。竪穴の平面形も同様に歪んでいる。南側の壁際中央に貯蔵穴を有する。貯蔵穴の規模は、0.9 m×0.8 m、深さ18 cmである。東側の一部で壁周溝を検出した。炉跡は確認できなかった。

竪穴の埋土から弥生時代中期末～後期初頭の壺口縁部(134)、貯蔵穴から同様の時期の壺口縁部(135)が出土している。なお、貼床から混入遺物と思われるチャートの剥片(136)が出土している。

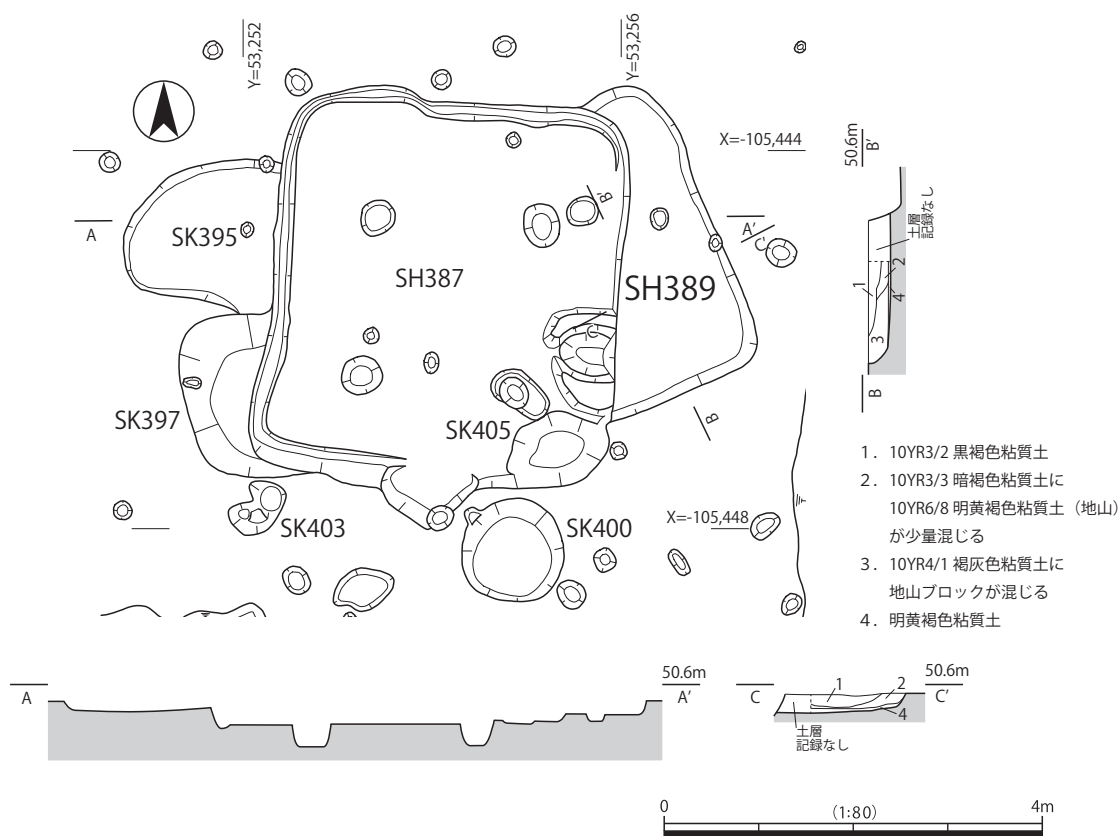
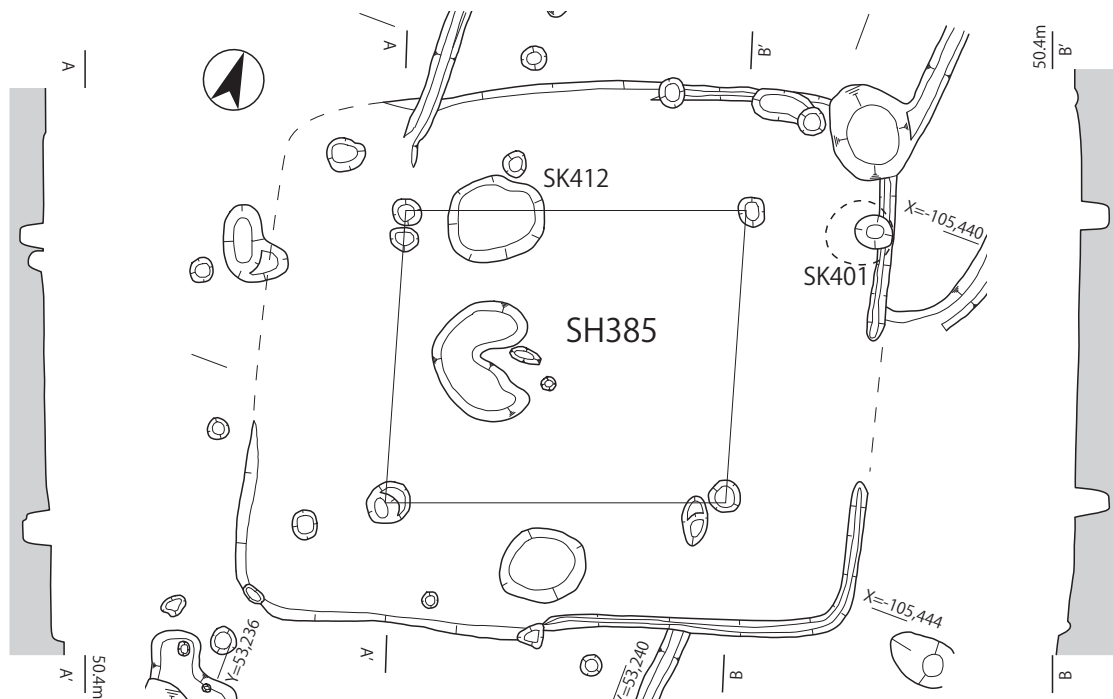
北東壁際の土坑S K 401からも、同様の時期の遺物が出土している。検出時の切合いの記録では、この竪穴住居の埋土を切っており、廃絶後に掘られたものである。

中央北側の土坑S K 412からは古墳時代の須恵器が出土しており、これも後世に掘られたものである。

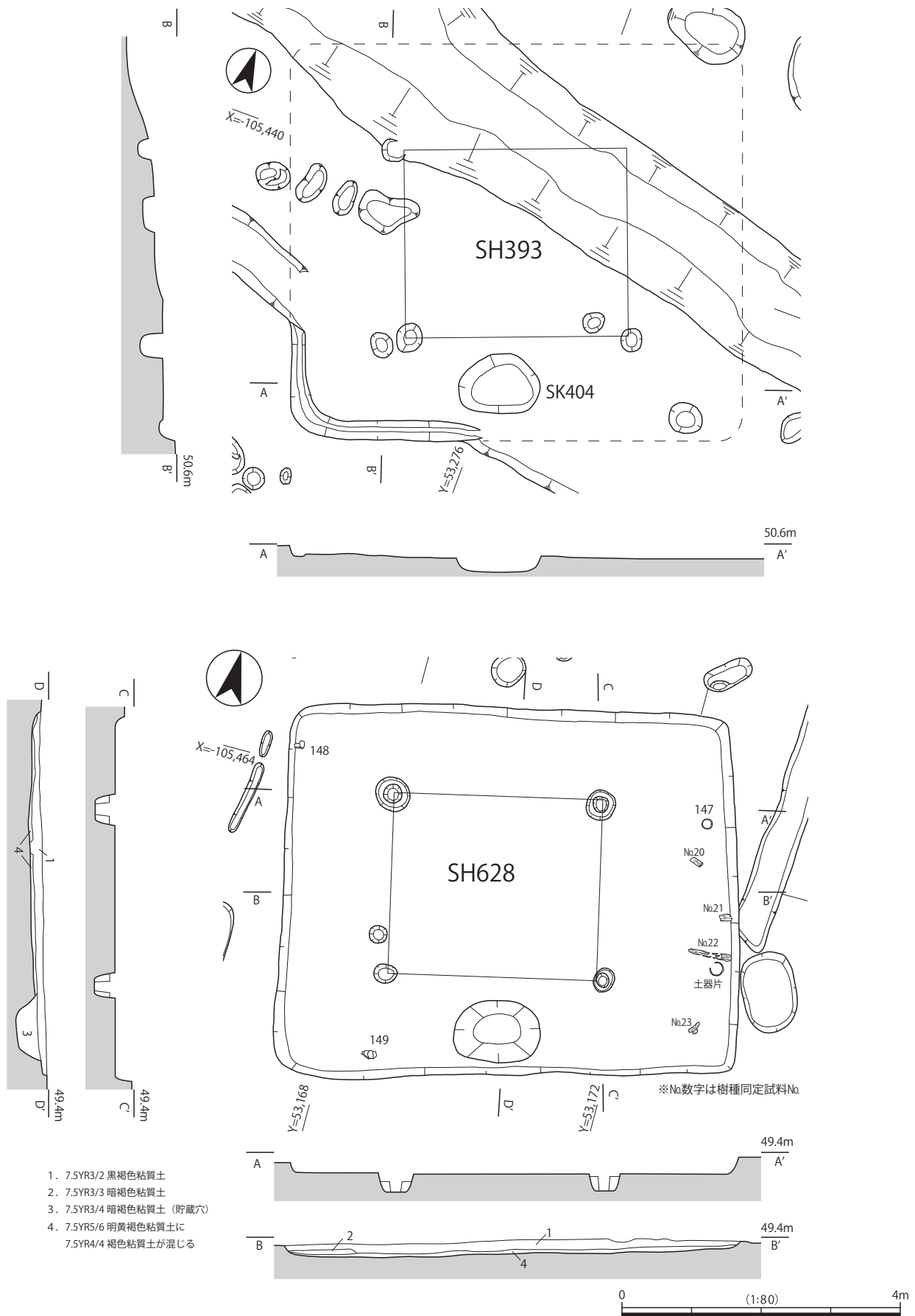
S H 389 (第52図) 北区東側で検出した竪穴住居である。古墳時代の竪穴住居S H 387と重複し、1/3程度しか残存していない。規模は、3.2 m×1.8 m以上、深さ22 cm。主柱穴といえるピットは確認できなかった。また、貯蔵穴、壁周溝、炉跡も検出できなかった。

竪穴埋土から、中期末～後期初頭の壺または甕の底部片(137・138)が出土している。

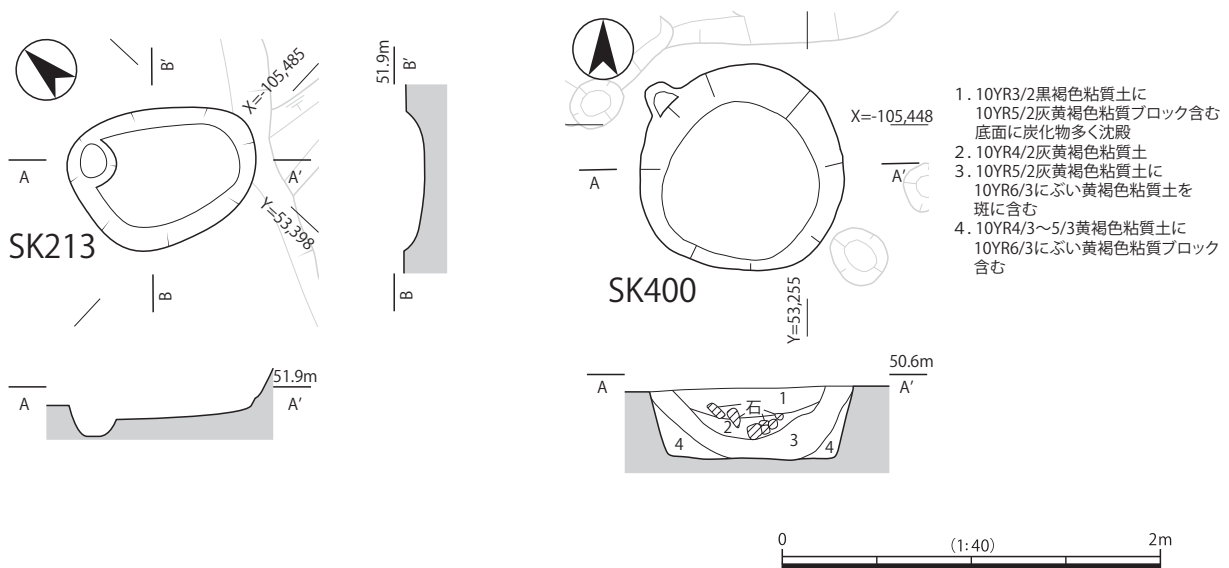
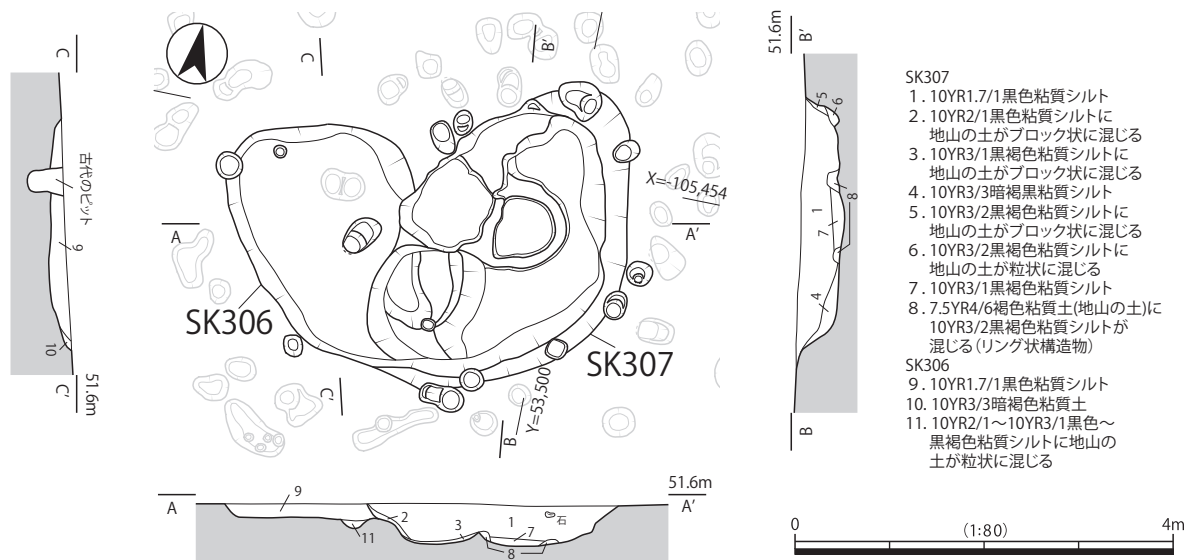
S H 393 (第53図) 北区東側で検出した竪穴住居である。丘陵の斜面に近い土砂が流出しており、南西隅以外のは失われている。ただし、残存部分から平面規模を推定することは可能で、推定規模は、6.5 m×5.7 mとなる。残存する竪穴の深さは22 cmである。主柱穴は、北東側の1個が攪乱溝のために失われているが、それ以外の3個は確認できた。



第52図 SH385・389・SK400・401 平面・断面図 (1:80)



第53図 SH393・628 平面・断面図 (1:80)



第54図 SK213・306・307・400 平面・断面図 (1:40・1:80)

柱間は3.2 m × 2.7 mである。壁周溝があり、南側の壁際中央には貯蔵穴（S K 404）を有する。貯蔵穴の規模は、1.2 m × 0.9 m、深さ22cmである。炉跡は確認できなかった。

竪穴の埋土からは、弥生土器が数点と混入遺物の縄文時代の切目石錘（140）が出土した。土器は大半が細片のため、図化できたのは高杯口縁部（139）のみである。

貯蔵穴（S K 404）からの出土遺物も小片が多かったが、図化できたものとして、甕口縁部・短頸壺・高杯・壺底部（141～146）がある。いずれも弥生時代中期末～後期前半に収まるものである。

S H 628（第53図） 北区西側で検出した竪穴住居である。規模は、6.7 m × 5.4 m、深さ19cm。炉跡や周溝は検出できなかったが、4個の支柱穴と南側の壁際中央に貯蔵穴を確認した。支柱穴の柱間は東西3 m、南北2.5～2.6 mを測り、残りの良い北西側及び北東側柱穴は概ね50cm × 40cmの柱掘形に直径20cm内外の柱痕跡をもつ。貯蔵穴の規模は、1.2 m × 0.9 m、深さ31cmである。貯蔵穴は土層図中の第4層を切っており、第4層は貼床（床面整地土）と思われる。

遺物は乏しいが、住居東辺及び北西隅に若干の壺・甕（147～149）が、貯蔵穴からは、台付甕の脚部（150）が出土している。また、少数であるが、炭化木材片の出土があり、分析の結果、コナラ属コナラ節（No.20）、クマシデ属イヌシデ節（No.21）、

【註】

①出土した弥生土器については、上村安夫「伊勢・伊賀地域」『弥生土器の様式と編年－東海編－』木耳社2002を参考にした。

スダジイ（No.22）、コナラ属アカガシ亜属（No.23）を確認した（詳細は第VI章自然科学分析を参照）。

（2）土坑

S K 213（第54図） 南区西側で検出した土坑である。規模は、長径1.0 m、短径0.7 m、深さ5 cm。楕円形に近い形状を呈する。飛鳥時代の竪穴住居S H 208と重複しており、その床面の下から検出された。出土遺物に弥生土器蓋・壺底部片・器台小片（第114図151～153）がある。

S K 400（第54図） 北区東側で検出した土坑である。平面形は、径1.1 mのほぼ円形を呈し、深さは38cmである。多数の礫とともに縄文土器片が数点と弥生土器鉢（154）が出土した。縄文土器は胎土からかろうじて縄文土器と判断できる程度の細片ばかりで、図化はできなかった。土層断面からは掘り直しの可能性も窺えるため、縄文時代の土坑が重複していた可能性もあるが、明確には確認できなかった。

約1 m北に弥生後期の竪穴住居S H 389があり、それとの関連も考えられる。

S K 401（第52図） 北区東側で検出した小土坑である。竪穴住居S H 385と重複しており、切合いから、竪穴住居廃絶後に掘られたことが確認できた。掘削後の記録がS H 385の完掘時のものしか残っていないため、底面付近の残存部分しか図示できなかったが、検出時の記録では、破線で示したように、径0.7 m程度の円形を呈していた。出土遺物に弥生時代中期末～後期初頭の壺口縁部（155）がある。

第3節 古墳時代

古墳時代後期^①の竪穴住居2棟と土坑4基を検出した。竪穴住居はすべて北区でみつかり、南区では確認できなかった。

1 古墳時代後期

(1) 竪穴住居

S H 387 (第55図) 北区東側で検出した竪穴住居である。規模は、4.1 m × 3.7 m、深さ24cm。支柱穴は4個あり、柱間は1.8～1.7 mである。東壁のやや南寄りの位置に竈、南東隅に貯蔵穴(S K 405)を伴う。貯蔵穴は、1.1 m × 0.9 mの楕円形を呈し、深さは22 cmである。壁周溝は北・西・南壁沿いで検出できた。

弥生時代の竪穴住居S H 389、古墳時代の土坑S K 397、飛鳥時代の土坑S K 395と重複し、S K 397より新しい。

遺物は、土師器(161～166)、須恵器(167～187)、土錘(188)の他、埋没過程で混入したと思われる石器(189～193)がある。このうち、床面から161、竈袖内から162・166、竈付近から188が出土している。貯蔵穴(S K 405)からは土師器甕(194)が出土した。

出土した須恵器は田辺昭三氏による須恵器編年^②(以下、田辺編年)のTK 10～TK 43に併行することから、本住居は6世紀中葉～後葉の所産と思われる。

S H 624 (第55・56図) 北区西側で検出した竪穴住居である。規模は、5.7 m × 4.5 m、深さ22cm。支柱穴は4個あり、柱間は2.2～2.4 mである。東壁のやや南寄りの位置に竈、南東隅に貯蔵穴を伴う。貯蔵穴は1.5 m × 1.3 mの略円形を呈し、深さは29 cmである。壁周溝は検出されなかった。

本住居で特筆すべきことは、本住居がいわゆる焼失住居^③であることである。全体に遺存状況は良くないが、北側縁辺は比較的炭化材の残りが良い(第56図遺物出土状況図参照)。ただし、ここでも明瞭な柱に相当する炭化材は認められず、炭化材の多くは垂木ないしは木舞に相当するとみられる棒状のもので、一部建築材以外の道具類とみられる炭化物や焼土を含む。棒状炭化材は、住居隅のものは斜め方向、住居中央のものは住居縁辺に沿って直交方向、

すなわち住居中央に向かって放射状に遺存することとを特徴とする。これらの炭化材は土層断面図の第18層直上から出土しており、第18層が焼失時の床面と考えられる。

炭化材は非常に脆く、取り上げ及び洗浄の際に多くが碎け、遺憾ながら原形を留めるものはないが、辛うじて断面形が判明するものは、幅8 cm前後、厚さ3 cm前後の長方形を呈し、自然木そのものを切断したものではないようである。

出土した炭化材で比較的残りの良いものを19点抽出して樹種同定を実施したところ、スダジイ・クヌギ節・クリ・アカガシ亜属などが認められた(第Ⅵ章参照)。スギやヒノキなど組物系の建築部材に好適の樹種を含まず、広葉樹を中心とした周辺植生を一定程度反映しているとみられる^④。

遺物の出土箇所は大きく分けて、住居床面、竈、貯蔵穴に分けられる。

まず住居床面は、北東隅からの出土が比較的多く、特に竈脇となる住居北東隅は須恵器杯身(213)や土師器甕(195・198・203)、比較的残りの良い長方形の炭化材(試料No.19)がある。この炭化材は、長径40cm前後、短径20cm弱(出土時)で、中央部がやや厚く、炭化した形状から木製鋤類の可能性が疑われたため樹種同定を実施したが、同定の結果、クリであることが判明した。クリは、東海・中部全般では曲柄鋤身に用いられることがあることは指摘されているが、本材は長さの割にやや厚みがあり、曲柄鋤身の適応ではなく、また伊勢地域では曲柄鋤身は基本的にアカガシ亜属が用いられることが判明している。したがって、本材も曲柄鋤身である可能性は低く、農具以外の建物にかかわる部材もしくは他の方形の器物であった可能性が高い。

住居南西隅からは、検出面付近の高さから土師器甕(205)、須恵器甕(216・217)、朱書きのある杯蓋(209)、砥石(220)が出土した。本住居の廃絶後に投棄されたとみられるが、床面付近から出土した他の遺物との時期差はあまり感じられない。

竈では、袖の内側から土師器長胴甕(206)や須恵器甕(215)が出土した。

貯蔵穴の遺物は、多くが底面から少し浮いた状態で出土しており（196・200・201・212）、しかも土器の下には火災時に崩落したとみられる棒状の炭化材が入り込んでいた。貯蔵穴の土器の大半は、住居が焼失した後に投棄されたとみられる。ただし、ほぼ底面に近い土器（197）もあり、これらは貯蔵穴の廃絶時とさほど時間差はないであろう。

出土した須恵器は田辺編年のMT 15～TK 10に併行することから、本住居は6世紀前葉～中葉の所産と思われる。

（2）土坑

SK 216（第57図） 南区西端で検出した土坑である。規模は、長径1.6 m、短径1.4 m、深さ68cmで若干角のある楕円形を呈する。遺物はごく浅い位置から須恵器杯身（221）が出土した。風倒木痕と重複しており、これより新しい。

北側に浅い平場があり、足場状になっている。底面は平坦な部分もあるが、丸い部分もあり、一様ではない。廃棄土坑にしては遺物が少なく、性格は不明である。

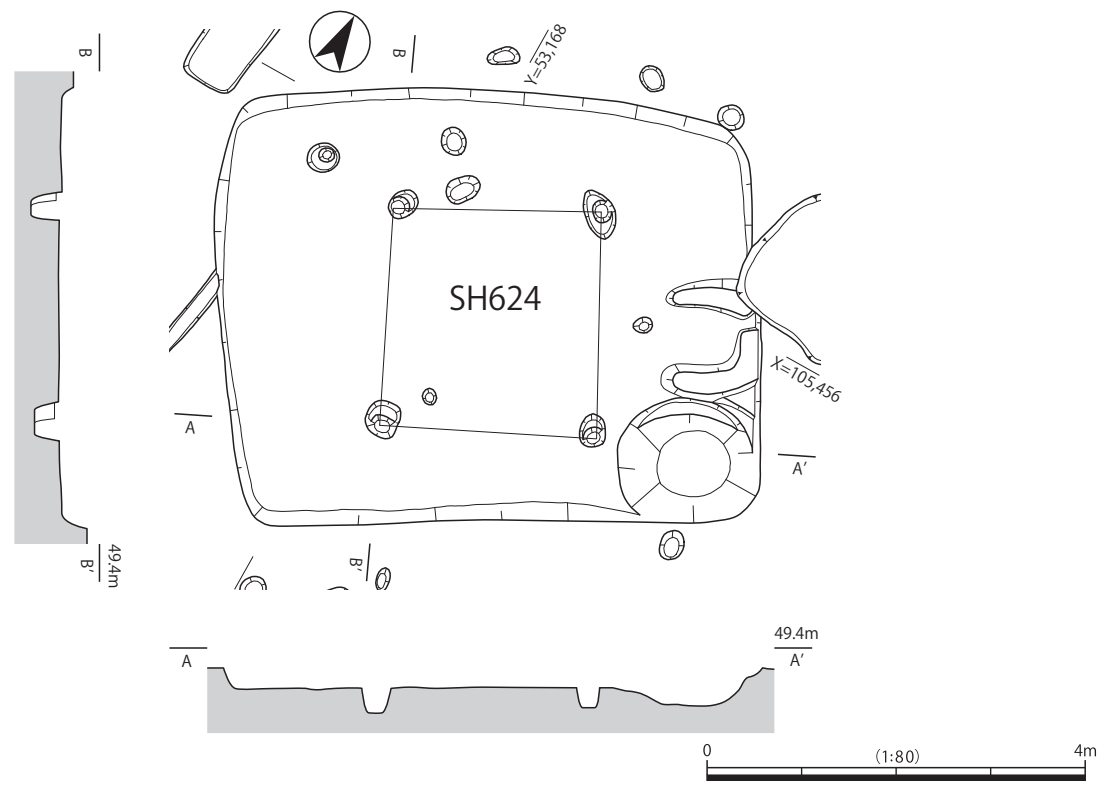
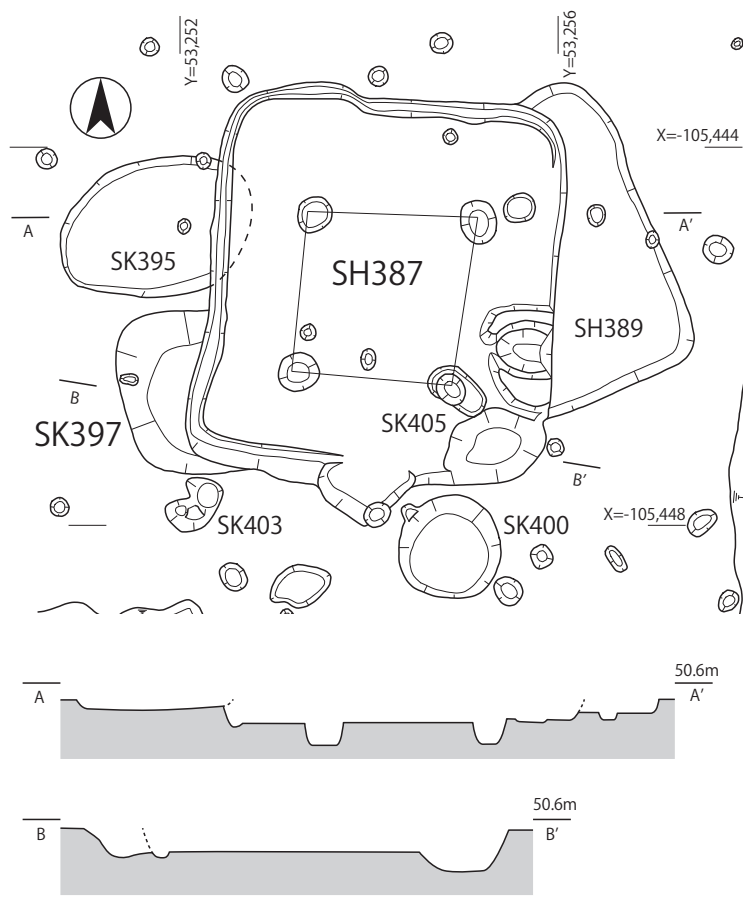
SK 382（第57図） 北区東側で検出した土坑である。規模は長径3.1 m、短径1.4 m。底の浅い部分と深い部分があり、浅い方は9 cm、深い方は24 cmである。土層断面からは土坑の重複が窺える。出土遺物は、土師器片・須恵器片が20点ほど出土している。大半は細片であるが、図化できたものとして、土師器甕（222）、須恵器杯蓋・杯身・高杯（223～225）がある。遺物はすべて深い方から出土しているが、いずれの層からの出土であるかの記録は残されていない。2つの土坑の関係は、たんに廃棄土坑を拡張したものかも知れないが、詳細は不明である。

SK 397（第55図） 北区東側で検出した土坑である。東側は竪穴住居SH 387のために消滅しており、残存部分の規模は、1.8 m×1.1 m、深さ32 cm。隅丸の方形を呈する。古墳時代の竪穴住居SH 387と飛鳥時代の土坑SK 395と重複し、SH 387より古い。出土遺物は土師器甕（226）の1点のみである。

SK 412（第57図） 北区東側で検出した土坑である。規模は、長径1.0×短径0.9 m、深さ22 cmの略円形を呈する。弥生時代の竪穴住居SH 385と重複している。遺物は須恵器杯身（227）が出土している。底面が比較的平らに掘られているが、詳細は不明である。

【註】

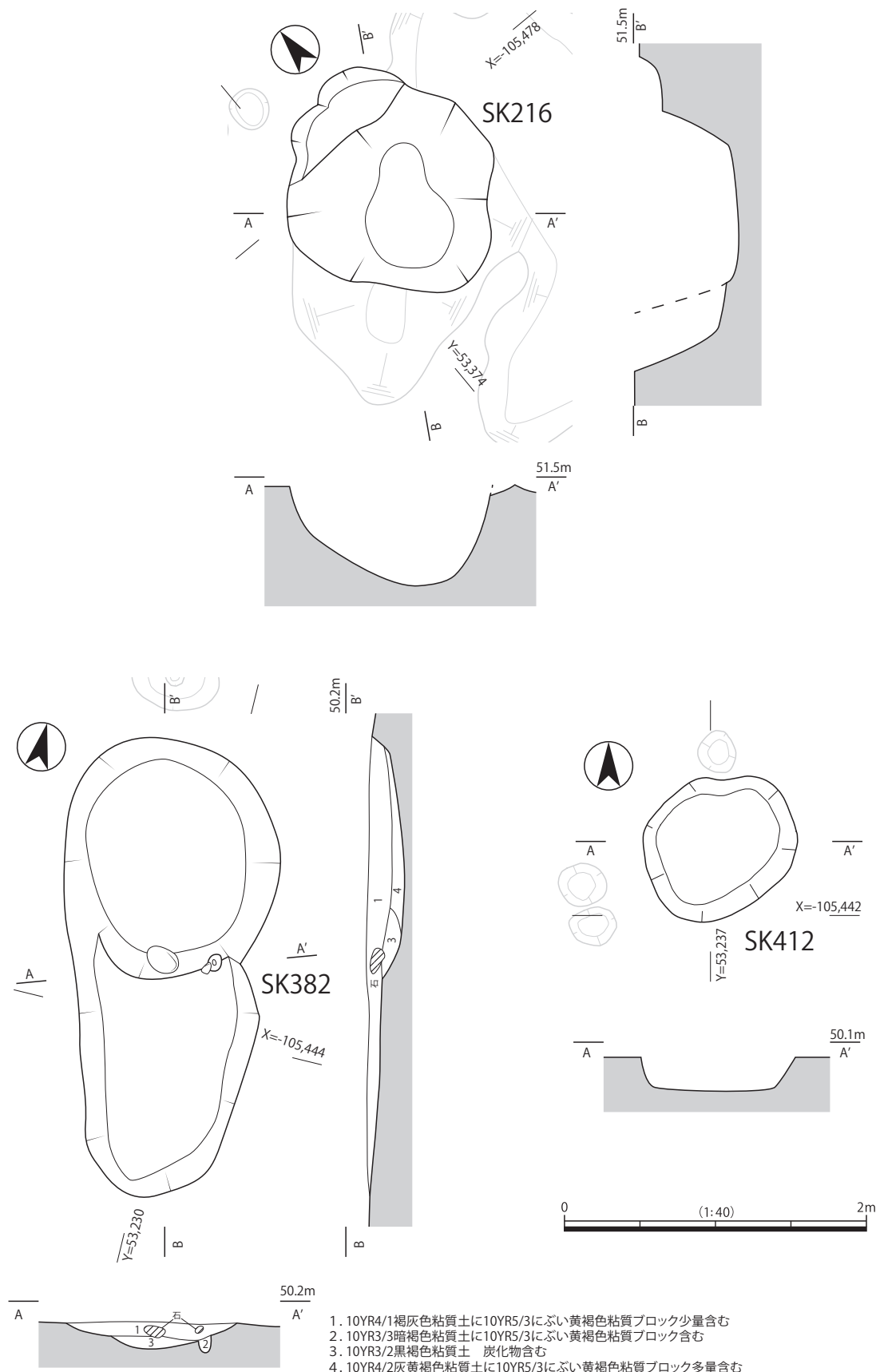
- ①この節でいう「古墳時代後期」は概ね6世紀代を指す。
- ②田辺昭三『須恵器大成』角川書店1980
- ③後述するが、床面から被熱した土器がほとんど出土していないことから失火・放火等による火災ではなく、転居・建て替え等による意図的な焼却である可能性が考えられる。
- ④ただし、クリやクヌギなどの堅硬木は、現在でも木炭の原料として利用されているように、炭化材として残りやすく、それに比べてスギ・ヒノキなどの針葉樹は燃え尽きやすいため炭化材として残りにくい。その点はある程度留意しておく必要がある。



第55图 SH387·624·SK395·397·405 平面·断面图 (1:80)



第56図 SH624 遺物出土状況図 (1:50)



第57図 SK216・382・412 平面・断面図 (1:40)

第4節 飛鳥時代

この節でいう飛鳥時代は、概ね7世紀代であり、古墳等の調査において「古墳時代後期末」、または「古墳時代終末期」等として扱われる時期を含んでいる。

各遺構から出土した須恵器はいずれも田辺昭三氏による須恵器編年^①（以下、田辺編年）のTK 209～TK 217におさまるものである。

中野山遺跡において、遺構・遺物の数が最も増える時期である。

(1) 竪穴住居

28棟を確認した。ほぼ正方形を呈するものと長方形を呈するものがあり、中央に円形の土坑（以下、中央土坑）を伴うものがある。竪穴住居のほとんどは重複することなく建てられている。

以下、遺構ごとに記述する。

SH 201（第58図） 南区西端で検出した竪穴住居である。平成22年度の第2次調査では遺構の南東側の竈と貯蔵穴付近を確認できたに過ぎなかったが、平成24年度に新名神事業として行われた第9次調査で遺構の全体像が確認された^②。

竪穴の規模は、長辺5.1m×短辺5.0mで、ほぼ正方形を呈し、深さ^③は20cm程度である。4辺すべてで壁周溝が検出された。支柱穴は、攪乱溝のため南隅の1つを欠くものの4個と考えられる。柱間は3.0～3.1mである。南東壁の中央やや南寄りに竈、南隅に貯蔵穴を伴う。貯蔵穴は、0.8m×0.7mの楕円形を呈し、深さは34cmである。

貯蔵穴中には竈を壊した際にでたものと思われる焼土や灰・木炭片、赤く焼けた石^④などが投げ込まれていた。

遺物は、竈の灰中から土師器甕（232・233）、貯蔵穴から土師器甕（228～230）・須恵器杯蓋（231）が出土した。228と229は、リング状になった口縁部を重ね合わせ、中に焼石を通すような形で出土している。

SH 208（第59図） 南区西側で検出した竪穴住居である。長辺6.2m×短辺5.5mの長方形を呈し、深さは32cmである。支柱穴は4個である。柱間は、長辺が3.4mの等間だが、短辺は北側2.7m、南側2.9

mとばらつきがある。竈・貯蔵穴・壁周溝は確認できなかった。東壁中央付近の床面下から弥生時代の土坑SK 213が検出されている。

主な遺物として、須恵器杯身・短頸壺・壺底部・壺（234～237）と砥石（238）がある。

SH 211（第59図） 南区西側で検出した竪穴住居である。長辺4.1m×短辺4.0mのほぼ正方形を呈し、深さは24cmである。

南壁中央やや西寄りに竈、南西隅に浅い窪みがある。窪みは貯蔵穴と呼ぶには浅いが、位置的にみて、それに類するものであろうか。支柱穴といえるピットや壁周溝は確認できなかった。

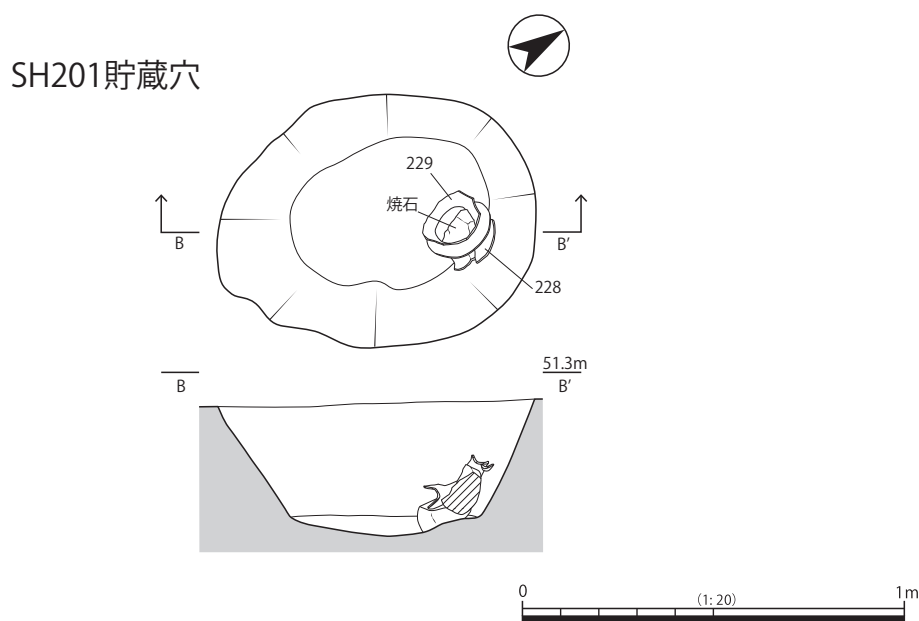
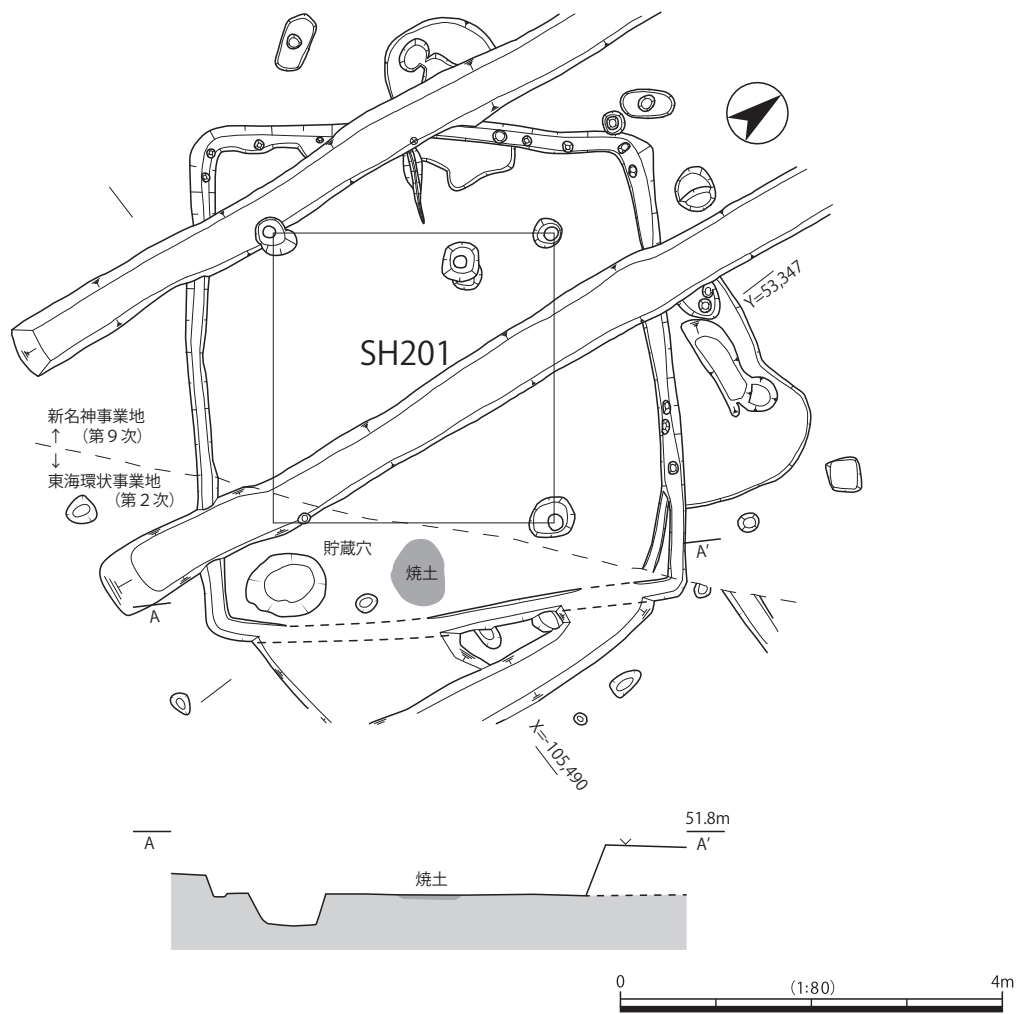
主な遺物として、須恵器杯蓋片（239）がある。

SH 227（第60図） 南区西側北壁付近で検出した竪穴住居である。平成22年度の第2次調査では遺構の南壁付近を確認できたただけであったが、その後、平成23年度に新名神事業として行われた第5次調査で遺構の全体像が確認された^⑤。

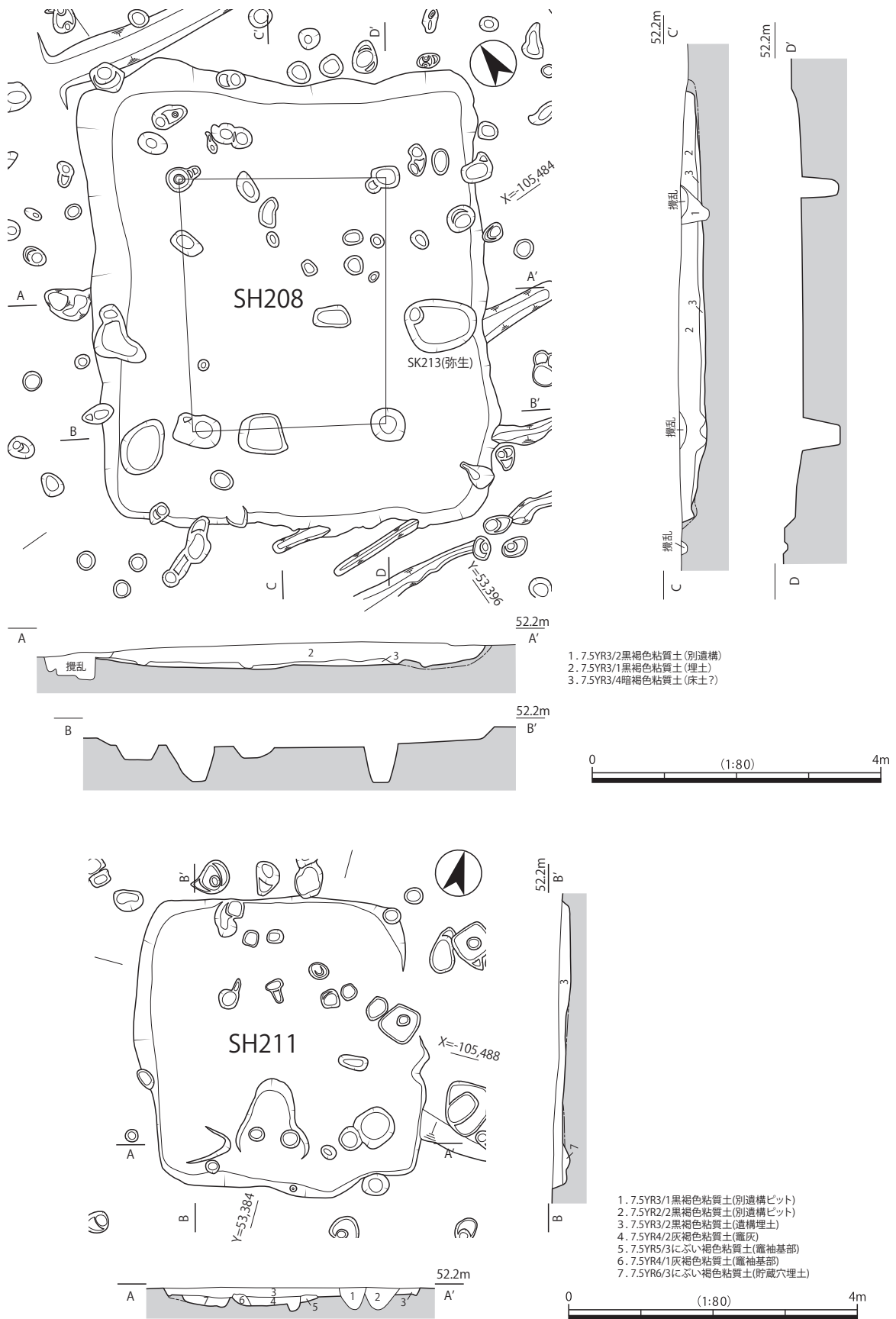
各辺は、南北は5.4mだが、東西は、北側が5.6m、南側が5.2mで、平面形は台形を呈し、深さは16cmである。東壁中央に竈、四辺に壁周溝がめぐる。支柱穴は4個で、柱間は南北2.7m、東西は北側が3.3m、南側が3.1mと、竪穴の平面形に合わせて南側が短くなっている。

遺物は、第2次調査では、土師器甕（240）が1点出土している。

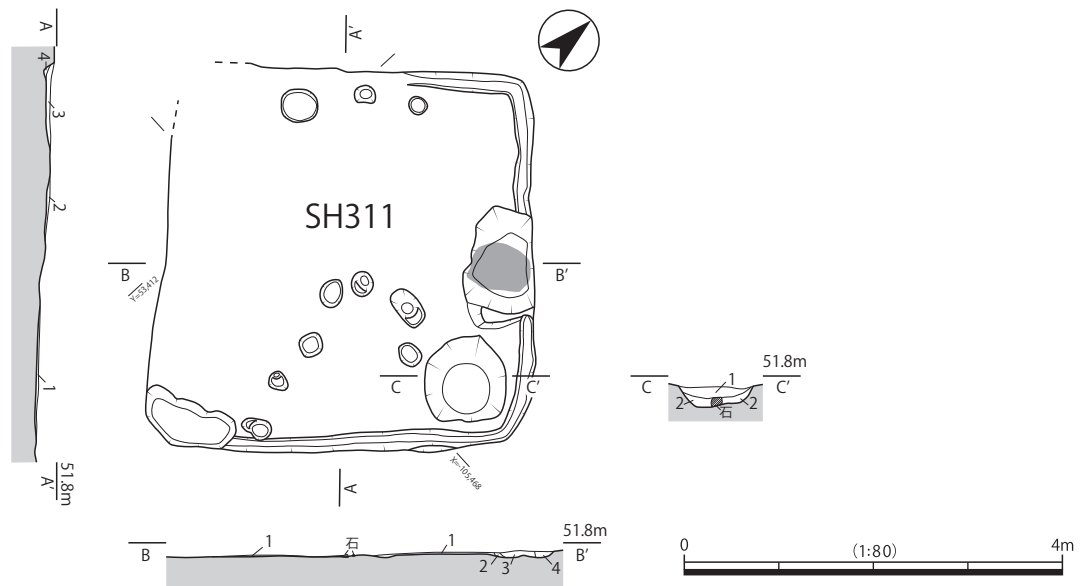
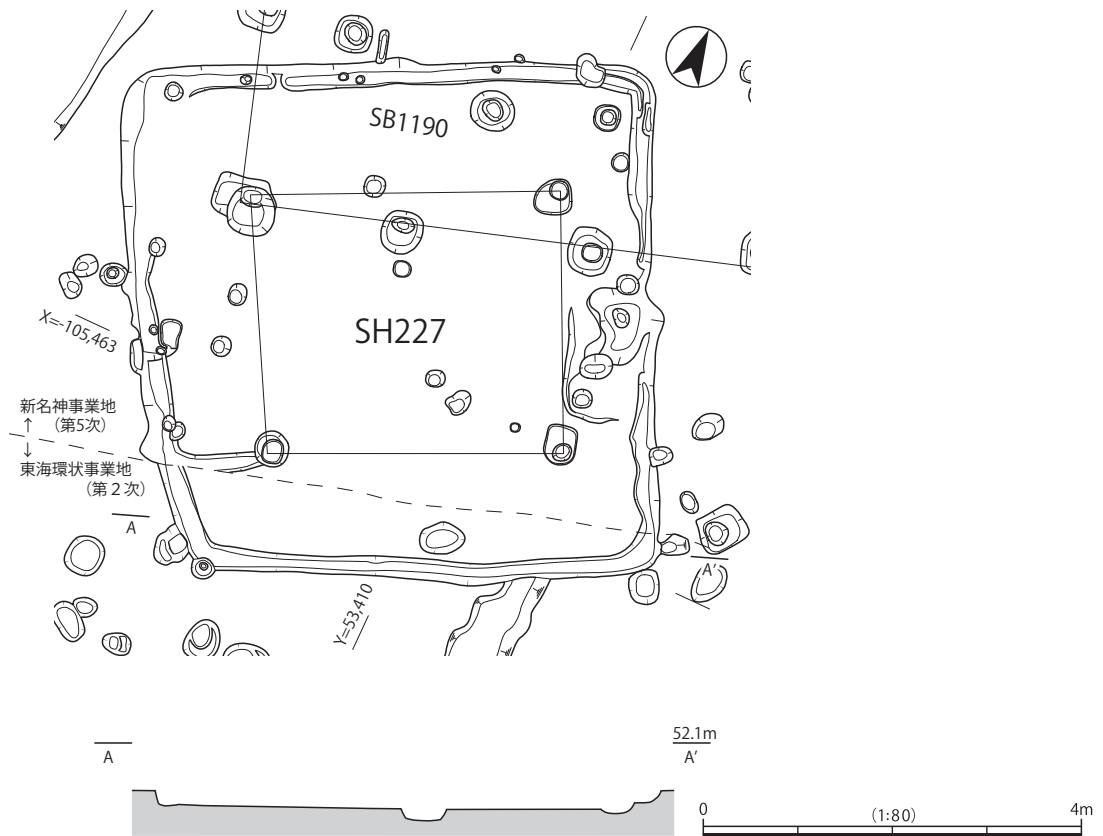
SH 304（第61図） 南区中央部北側で検出した竪穴住居である。6.0m四方のほぼ正方形を呈し、深さは4cm程度である。支柱穴は4個で、柱間は南北2.7m、東西3.4mである。東壁中央やや南寄りに竈、南東隅に貯蔵穴がある。壁周溝は確認できなかった。中央やや南寄りに径1.8m、深さ26cmの円形を呈する土坑（中央土坑）がある。削平が著しく、竪穴の埋土がほとんど残っていなかったため、中央土坑と竪穴床面との切り合いは判然としなかった^⑥。中央土坑の埋土には、焼石や焼土、炭化物粒などが多く含まれており、竈を破壊した際に出るものが捨てられているように思われるが、土坑本来の用途は不明である。



第58図 SH201・貯藏穴 平面・断面図 (1:80・1:20)

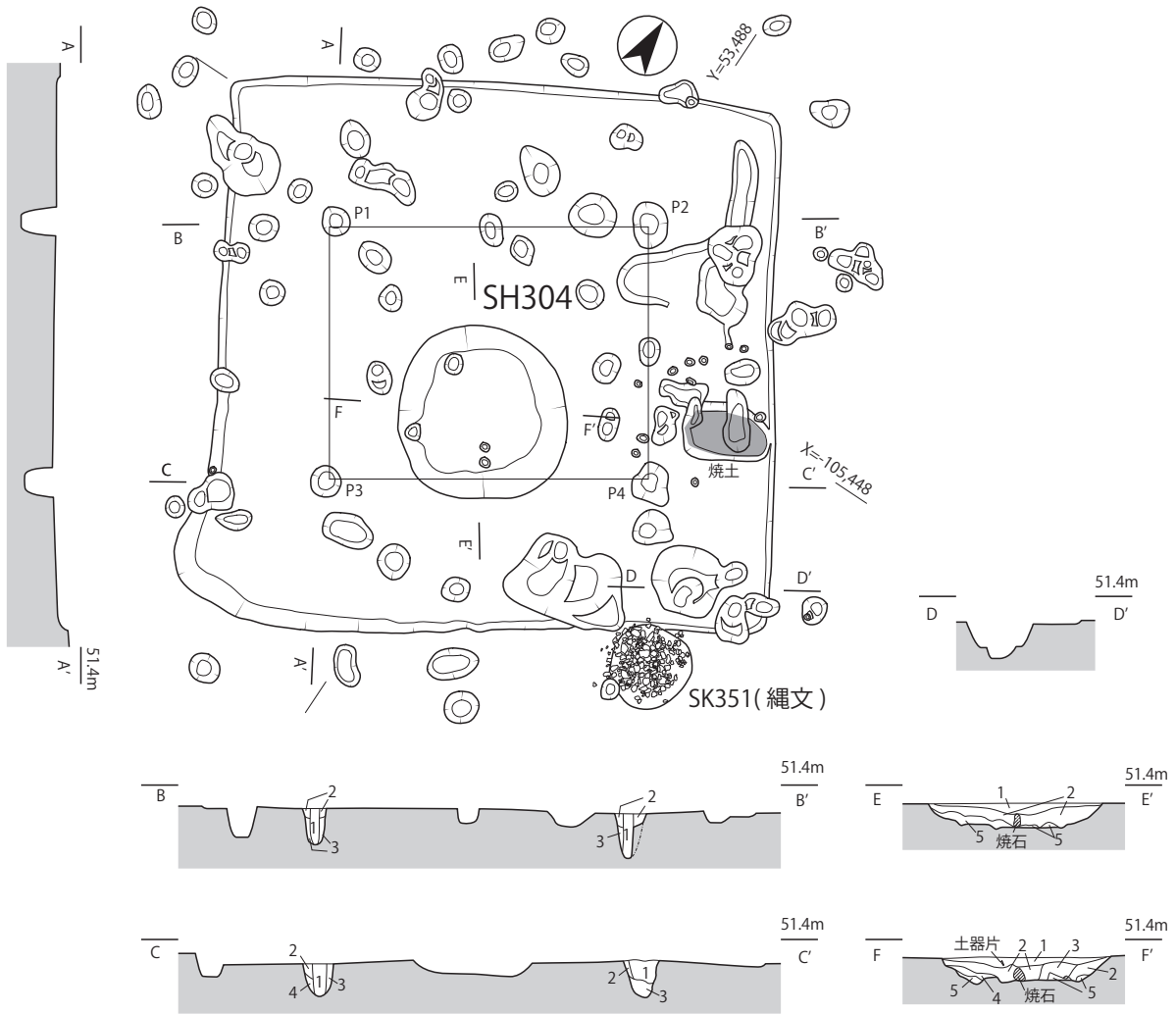


第59図 SH208・211 平面・断面図 (1:80)



- A-A'
1. 7.5YR4/4~4/6褐色 (10YR3/2黒褐色土・7.5YR3/3暗褐色土・炭化物・粗砂含む)
 2. 10YR3/3暗褐色 (10YR4/6褐色多く混じる) 径10mm~5mmの石含む 粗砂含む
 3. 10YR3/1黒褐色 (10YR3/3暗褐色混じる) 径20mm~5mm位の石含む 粗砂含む
 4. 10YR3/2黒褐色 (10YR4/4褐色少量混じる) 粗砂含む (周壁溝)
- B-B'
1. 10YR4/6褐色 (10YR3/2黒褐色少量混じる) 粗砂含む 粘性あり
 2. 7.5YR4/4褐色 (7.5YR3/3暗褐色混じる, 5YR4/8赤褐色: 焼土: 混じる) 径20mm位の石, 粗砂含む (カマド)
 3. 10YR3/4暗褐色 (10YR3/3暗褐色少量混じる 粗砂含む) 炭化物, 粗砂含む (5YR4/8赤褐色: 焼土: 混じる) (カマド)
 4. 10YR3/3暗褐色 (10YR3/4暗褐色少量混じる) 炭化物, 粗砂含む (カマド)
- C-C'
1. 10YR3/2黒褐色 (10YR4/6褐色少量混じる) 径10mm位の石少量含む 細砂含む
 2. 10YR2/2黒褐色 (10YR4/6褐色斑らに混じる) 炭化物含む

第60図 SH227・311 平面・断面図 (1:80)



P1

1. 10YR3/1 黒褐色 (10YR5/6 黄褐色斑らに混じる)
2. 10YR3/2 黒褐色 (10YR5/6 黄褐色ブロック少量含む)
3. 10YR2/2 黒褐色 (10YR5/6 黄褐色ブロック多量含む)

P2

1. 10YR3/1 黒褐色 (10YR5/6 黄褐色ブロック多量に含む)
2. 10YR3/2 黒褐色 (10YR5/6 黄褐色ブロック多量に含む)
3. 10YR2/2 黒褐色 (10YR5/6 黄褐色ブロック含む)

P3

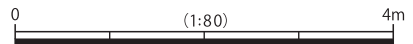
1. 10YR2/2 ~ 2/3 黒褐色 (10YR5/6 黄褐色ブロック多量含む) 粘性強い
2. 10YR3/1 黒褐色 (10YR5/6 黄褐色ブロック少量含む)
3. 10YR3/2 黒褐色 (10YR5/6 黄褐色ブロック多量含む) 径 10 mm の石混じる
4. 10YR3/2 黒褐色 (10YR5/6 黄褐色ブロック含む)

P4

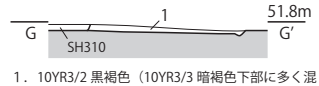
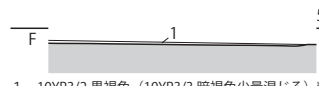
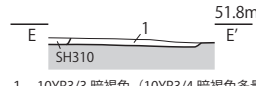
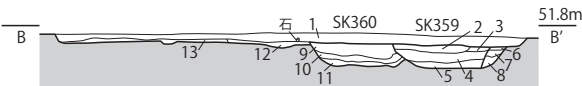
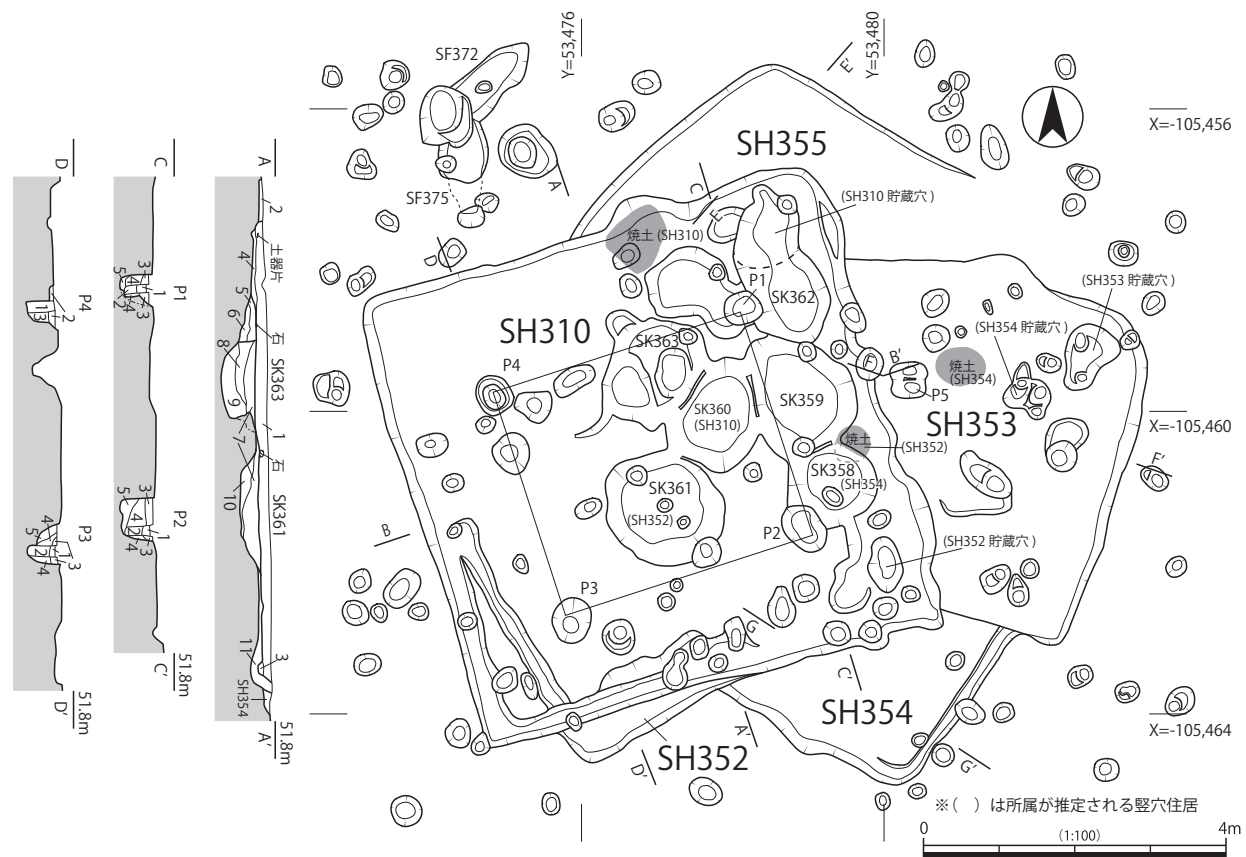
1. 10YR2/1 黒色 (10YR6/2 灰黄褐色ブロック少量混じる)
2. 10YR4/1 褐灰色 (10YR5/6 黄褐色ブロック含む)
3. 10YR3/1 黒褐色 (10YR5/6 黄褐色ブロック含む)

中央土坑 (E-E', F-F')

1. 7.5YR3/2 黒褐色粘質土に 7.5YR4/4 褐色粘質土がブロック状に混じる
2. 7.5YR2/2 黒褐色粘質土に 7.5YR4/4 褐色粘質土がブロック状に混じる
3. 7.5YR3/1 黒褐色粘質土 (焼土粒あり)
4. 7.5YR4/3 褐色粘質土に 7.5YR 3/3 暗褐色粘質土が斑らに混じる
5. 7.5YR3/2 黒褐色粘質土に 7.5YR4/4 褐色粘質土と焼土粒が混じる



第61図 SH304 平面・断面図 (1:80)



A-A'

1. 10YR2/2 黒褐色 (7.5YR5/8 明褐色：焼土：粒状に混じる) 径 20 mm ~ 5 mm 位の石含む
2. 10YR3/2 黒褐色 (10YR3/3 暗褐色斑らに混じる) 径 2 mm 位の石含む (SH355)
3. 10YR3/1 黒褐色 径 10 mm 位の石含む 粘性あり
4. 10YR2/2 黒褐色 (7.5YR4/4 褐色斑らに混じる) (5YR4/8 赤褐色：焼土：粒状に少量混じる) 炭化物、径 5 mm 位の石少量含む (カマド基部・崩壊土)
5. 10YR3/3 暗褐色 (10YR4/6 褐色粒状に混じる) 炭化物、径 15 mm ~ 2 mm の石少量含む
6. 10YR2/2 黒褐色 (10YR3/3 暗褐色混じる) 径 10 mm ~ 1 mm の石少量含む
7. 10YR3/1 黒褐色 (10YR3/3 暗褐色斑らに混じる) (5YR4/8 明褐色：焼土：粒状に混じる) 炭化物、径 5 mm ~ 1 mm の石少量含む (SK363・361)
8. 7.5YR3/3 暗褐色 (5YR4/8 赤褐色：焼土：粒状に多量混じる) 炭化物含む 粗砂含む (SK363)
9. 7.5YR3/1 黒褐色 (7.5YR3/3 暗褐色斑らに混じる) (10YR3/3 暗褐色ブロック状に混じる) (5YR4/8 赤褐色：焼土：粒状に混じる) 炭化物含む 径 5 mm 位の石含む 細砂含む (SK363)
10. 7.5YR3/3 暗褐色 (7.5YR4/4 褐色ブロック状に混じる) (5YR4/8 赤褐色：焼土：粒状に多く混じる) 炭化物、土器片、径 10 mm ~ 3 mm の石含む (SK361)
11. 10YR2/2 黒褐色 (7.5YR4/4 褐色ブロック状に多く混じる)

B-B'

1. 10YR2/2 黒褐色 (7.5YR5/8 明褐色：焼土：粒状に混じる) (10YR4/3 にふい黄褐色粒状に混じる)
2. 10YR3/1 黒褐色 (10YR3/4 暗褐色斑らに混じる) (7.5YR5/8 明褐色：焼土：粒状に少量混じる) 径 10 mm 位の石含む (SK359)
3. 10YR3/1 黒褐色 (10YR3/4 暗褐色斑らに混じる) 炭化物、径 3 mm の石含む (SK359)
4. 10YR3/2 黒褐色 (10YR4/6 褐色斑らに多く混じる・10YR4/3 暗褐色粒状に少量混じる) 炭化物、径 5 mm 位の石含む (SK359)
5. 10YR3/2 暗褐色 (10YR4/6 褐色斑らに混じる) 炭化物、径 10 mm ~ 2 mm の石含む (SK359)
6. 10YR3/1 黒褐色 (10YR4/6 褐色斑らに混じる) 粗砂含む
7. 10YR3/1 黒褐色 (10YR3/4 暗褐色斑らに混じる) 粗砂含む
8. 10YR3/1 黒褐色 (10YR3/4 暗褐色斑らに少量混じる) 粗砂含む 粘性あり
9. 10YR2/1 黒色 (10YR3/4 暗褐色斑らに混じる) 径 10 mm ~ 1 mm の石含む (SK360)
10. 10YR3/1 黒褐色 (10YR3/4 暗褐色斑らに混じる) 径 3 mm 位の石含む 粗砂含む 粘性あり (SK360)
11. 10YR3/1 黒褐色 (10YR3/4 暗褐色少量混じる) 径 20 mm ~ 5 mm の石含む (SK360)
12. 10YR3/1 黒褐色 (10YR3/3 褐色斑らに混じる) (5YR4/8 赤褐色：焼土：粒状に混じる) 炭化物、径 8 mm ~ 5 mm の石含む
13. 10YR2/2 黒褐色 (7.5YR4/4 褐色多く混じる) 径 8 mm ~ 3 mm の石含む

P1

1. 10YR2/2 黒褐色 (5YR5/8 明赤褐色：焼土少量混じる) 粗砂、炭化物含む (柱痕)
2. 10YR3/1 黒褐色 (10YR4/6 褐色混じる) 粗砂含む (柱痕)
3. 10YR3/2 黒褐色 (10YR4/3 にふい黄褐色斑らに混じる) 径 10 mm ~ 5 mm の石多く含む
4. 10YR2/2 黒褐色 (10YR4/6 褐色ブロック状に混じる) 粗砂含む
5. 10YR3/1 黒褐色 (10YR4/6 褐色少量混じる) 粘性あり

P2

1. 10YR2/2 黒褐色 (10YR4/6 褐色粒状に混じる) (5YR5/8 明赤褐色：焼土：粒状に少量混じる) 炭化物含む (柱痕)
2. 10YR2/1 黒色 (10YR4/6 褐色斑らに混じる) 粗砂含む 粘性あり (柱痕)
3. 10YR3/1 黒褐色 (10YR4/6 褐色斑らに混じる) (5YR5/8 明赤褐色：焼土：粒状に微量混じる) 炭化物少量含む 粗砂含む
4. 7.5YR3/1 黒褐色 (10YR4/6 褐色斑らに多量に混じる) 細砂含む
5. 10YR2/1 黒色 (10YR4/6 褐色多量に混じる) 粗砂含む

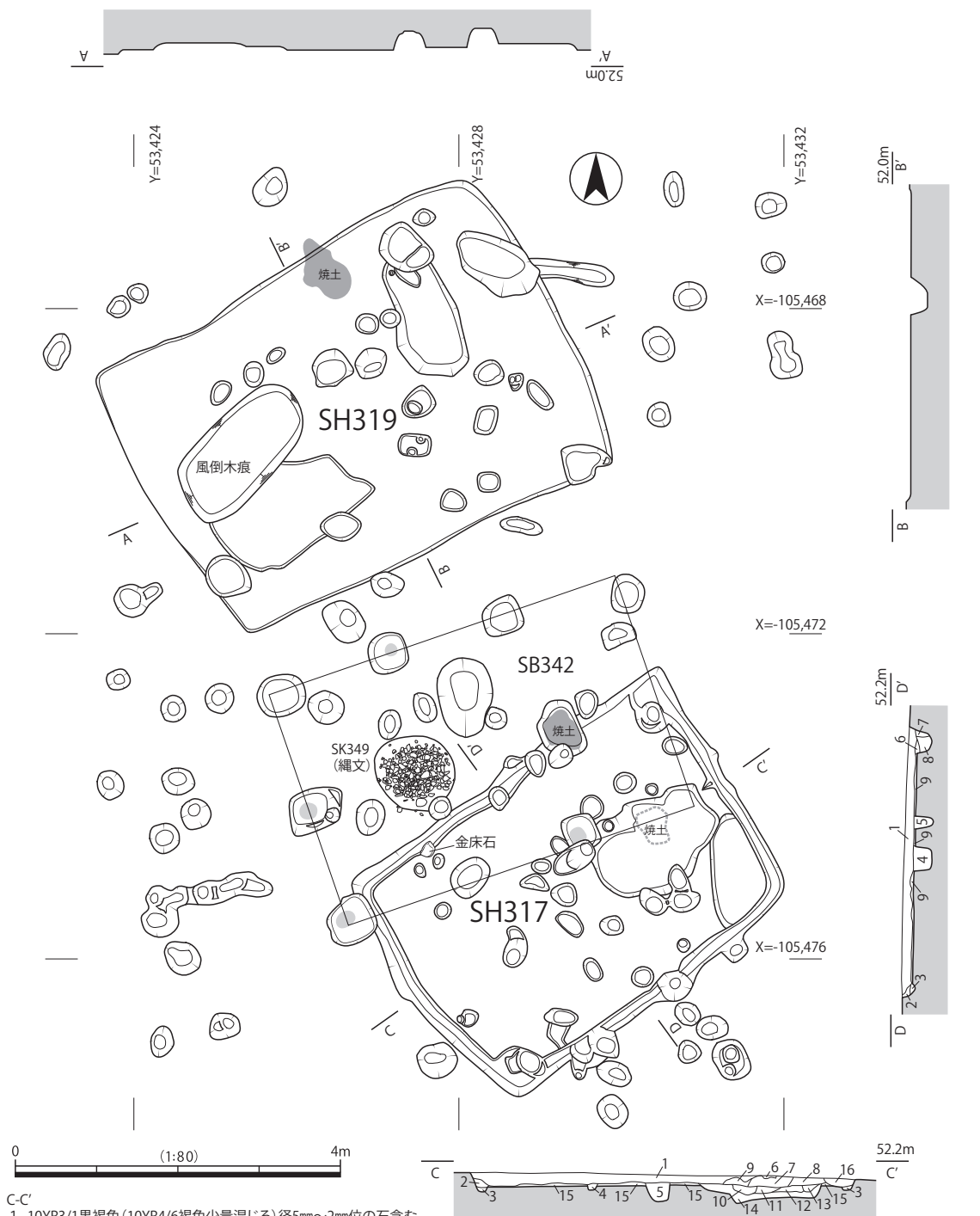
P3

1. 10YR3/1 黒褐色 (柱痕)
2. 10YR3/1 黒褐色 (10YR3/3 暗褐色少量混じる) 粗砂含む (柱痕)
3. 10YR3/2 黒褐色 (10YR4/6 褐色少量混じる) 粗砂含む 径 10 mm 位の石含む
4. 10YR2/2 黒褐色 (10YR4/6 褐色斑らに多量混じる) 径 5 mm 位の石含む
5. 10YR3/1 黒褐色 (10YR3/3 暗褐色斑らに混じる) 径 5 mm 位の石少量含む

P4

1. 10YR3/1 黒褐色 (10YR4/6 褐色少量混じる) 粗砂含む (柱痕)
2. 10YR3/1 黒褐色 (10YR3/3 暗褐色斑らに多く混じる) 径 20 mm ~ 3 mm の石含む 粗砂含む
3. 10YR3/1 黒褐色 (10YR4/3 にふい黄褐色多量に混じる)

第62図 S H 310・352・353・354・355・S K 358・359・360・361・362・363 平面・断面図 (1 : 100)



C-C'

1. 10YR3/1黒褐色(10YR4/6褐色少量混じる)径5mm~2mm位の石含む炭化物少量含む
2. 10YR3/3暗褐色(10YR4/6褐色少量混じる)径2mm位の石含む(壁周溝)
3. 10YR2/2黒褐色(10YR4/6褐色多く混じる)壁周溝
4. 10YR2/2黒褐色(10YR4/6褐色混じる)粗砂含む(Pit)
5. 10YR2/2黒褐色(10YR4/6褐色多く混じる)粗砂含む(Pit)
6. 10YR3/3暗褐色(5YR5/6明赤褐色:焼土:少量混じる)径10mm位の石少量含む(カマド)
7. 10YR3/3暗褐色(5YR5/6明赤褐色:焼土:ブロック状に多く混じる)炭化物、径2mm位の石含む(カマド)
8. 10YR2/2黒褐色(10YR4/6褐色ブロック状に多く混じる)径3mm位の石含む
9. 10YR4/3にぶい黄褐色(5YR5/6明赤褐色:焼土:斑々に混じる)径3mm位の石、炭化物少量含む(カマド)
10. 10YR3/3暗褐色(5YR5/6明赤褐色:焼土:ブロック状斑々に混じる)粗砂、炭化物少量含む(カマド)
11. 5YR5/6明赤褐色(7.5YR4/3褐色少量混じる):焼土:径10mm~2mm位の石含む炭化物少量含む(カマド)
12. 10YR3/1黒褐色(7.5YR4/4褐色多く混じる)径5mm~2mm位の石含む(カマド下土坑)
13. 10YR3/3暗褐色(7.5YR4/4褐色混じる)炭化物、径2mm位の石含む(カマド下土坑)
14. 10YR2/2黒褐色(10YR4/6明赤褐色:焼土:ブロック状に多く混じる)炭化物、径2mm位の石含む(カマド下土坑)
15. 10YR4/3にぶい黄褐色(10YR4/6褐色多く混じる)(貼床)
16. 10YR3/3暗褐色(10YR3/4暗褐色混じる)粗砂少量含む(カマド下土坑)

D-D'

1. 10YR3/1黒褐色(10YR4/6褐色少量混じる)径5mm~2mm位の石含む
2. 10YR3/3暗褐色(10YR4/6褐色微量混じる)(壁周溝)
3. 10YR2/2黒褐色(10YR4/6褐色微量混じる)(壁周溝)
4. 10YR2/2黒褐色(10YR4/6褐色多く混じる)粗砂含む(Pit2)
5. 10YR3/2黒褐色(10YR4/6褐色少量混じる)(Pit)
6. 10YR2/2黒褐色(10YR4/6褐色線状に混じる)径5mm~2mm位の石含む(Pit)
7. 10YR3/2黒褐色(10YR4/6褐色多く混じる)径5mm位の石少量含む(Pit)
8. 10YR3/1黒褐色(10YR4/6褐色少量混じる)(Pit)
9. 10YR4/3にぶい黄褐色(10YR4/6褐色多く混じる)(貼床)

第63図 SH317・319 平面・断面図 (1:80)

遺物は細片が多かったが、主なものに、須恵器杯蓋・杯身・脚台（241～244）があり、中央土坑からは土師器甕（245）、須恵器杯蓋（246・247）・杯身（248）、埋没過程で混入した可能性のある磨石（249）が出土した。

S H 310（第 62 図） 南区の中央部で検出した竪穴住居である。S H 352・353・354・355 および S K 358・359・360・361・362・363 と重複している。これらとの新旧関係は煩雑になるため、遺構一覧表の記載を参照されたい。

各竪穴住居は全体的にかなり削平を受けており、埋土が 1 cm に満たない部分も多く、大半は最も新しい S H 310 によって破壊されている。それに加え、土色はほぼ黒褐色一色であったため、竪穴住居の切り合いは平面・断面ともに不明瞭であった。

重複する土坑は規模や形状等から、S H 304 にみられるような中央土坑にいくつかの貯蔵穴等が重複しているものと考えられるが^⑦、確認できた竪穴住居とは数と位置が完全には対応しなかった。検出できたもの以外にもあと 1～2 棟の竪穴住居の重複があった可能性は高いと思われる。それらのなかである程度、所属関係が推定できた中央土坑・貯蔵穴・焼土（竈）については図中に括弧書きで対応する遺構名を記載した。

S H 310 は前述のとおり、重複する竪穴住居群のなかで最も新しいため、比較的遺存状況は良い。竪穴の規模は、南北 6.1 m × 東西 6.2 m で、ほぼ正方形を呈し、深さは 12 cm 程度である。主柱穴は 4 個あり（P1～P4）、柱間は南北 3.1 m、東西 3.4 m である。北壁の中央やや東寄りに竈（焼土）^⑧、北東隅に貯蔵穴と推定できる土坑がある。壁周溝は南西隅で検出できた。中央土坑は S K 360 がそれにあたると考えられる^⑨。

遺物は細片が多かったが、主なものとして、土師器（250～252）、須恵器（253～255・257・258）があり、このうち床面からの出土は 255・258 である。他に、鞆羽口（259）、砥石（262・263）、釘状鉄製品（265）、鉄滓（266）、柱穴 P 1 から土師器甕（256）、埋没過程での混入とみられる磨石（264）、楔形石器（260）・使用痕のあるチャート剥片（261）がある。鉄滓は合わせて 3 点（合計 197.5 g）が出土している。

これらのなかで特徴的なのは鞆羽口・砥石・釘状鉄製品・鉄滓であるが、住居内から鍛冶炉やその痕跡は検出されておらず、調査区全体でも鍛冶炉はみつからない。

本例以外に、竪穴住居どうしの重複がみられるのは、南区においては、S H 731 と 732 の重複だけであり、5 棟以上が切り合う例は他にない。この位置に繰り返し竪穴住居が建てられた理由については、鍛冶に関連する遺物がある手がかりであろうが、現段階では不明である。

S H 311（第 60 図） 南区西側北寄りで検出した竪穴住居である。規模は 4.1～4.0 m のほぼ正方形を呈する。深さは 2 cm 程度である。北東壁中央やや南寄りの位置に竈、東隅に貯蔵穴がある。主柱穴といえるピットは確認できなかった。壁周溝は西側以外の 3 辺で確認できたが、西側は削平が著しいため、本来は 4 辺すべてに壁周溝が回っていた可能性がある。

遺物は、竪穴埋土・貯蔵穴・竈より、土師器片が合計 14 点出土しているが、いずれも細片のため図示できなかった。器種等も不明であるが、胎土・焼成・色調・ハケメ等の調整は他の飛鳥時代の遺構から出土している遺物と差異のないものである。

S H 317（第 63 図） 南区中央部西側で検出した竪穴住居である。長辺 4.8 m × 短辺 3.4 m の長方形を呈し、深さは 18 cm である。S B 342 と重複しており、切り合いは不明瞭であったが、S H 317 の方が新しいと思われる^⑩。

壁周溝は 4 辺で確認できたが、主柱穴や貯蔵穴といえるものは確認できない。

焼土が 2 箇所検出された。北西壁の焼土は、北隣にある S H 319 でも同じ位置で焼土が確認されており、位置的には竈跡と考えられる。一方、建物内部の焼土は、焼土面の下に 1.6 m × 1.2 m、深さ 20 cm 程度の土坑状の掘り込みがあり、その埋土には焼土塊や炭化物が多く含まれていた。焼土面はその埋土の上面が被熱したものである。焼土面の南側には土師器甕の体部片が埋め込まれており（巻頭図版 5 下）、この焼土に関連する施設の構築材として使われたものの一部と思われる。

遺物は、土師器甕（267・268）、須恵器杯蓋・壺・甕・

鉢 (269～272)、北西壁付近から金床石 (273)、東隅土坑から須恵器杯蓋 (274)、焼土下土坑から土師器甕 (275)、須恵器壺 (276)、土錘 (277)、径 10 cm 程度の軽石が出土した。なお、金床石は床面より 1 cm 程度浮いた状態で、壁周溝に一部重なる位置で出土している。

S H 319 (第 63 図) 南区中央部西側で検出した堅穴住居である。長辺 5.4 m × 短辺 3.9 m の長方形を呈し、深さは 3 cm 程度である。北西壁で焼土が検出された。主柱穴や貯蔵穴といえるものは無く、壁周溝も確認されていない。北西壁の焼土は、南隣にある S H 317 でも同じ位置で焼土が確認されており、位置的には竈跡と考えられる。

遺物は土師器細片が 2 点出土した。南隣の S H 317 と堅穴の長短辺の比率や竈 (焼土) の位置などがほぼ同じであることから、なんらかの関連のある遺構と考えられる。

S H 329 (第 64 図) 南区中央部北側で検出した堅穴住居である。堅穴の規模は、南北 4.4 m × 東西 4.5 m で、ほぼ正方形を呈し、深さは 4 cm 程度である。主柱穴は 4 個で、柱間は南北 2.1 m、東西 2.0 m である。北壁中央やや東寄りに竈があり、壁周溝はほぼ 4 辺で検出されている。堅穴の東側と 4 隅が不定形に浅く窪んでおり、黒褐色土が床面整地土として入れられていた。堅穴の中央に大小 2 基の土坑が検出されているが、平断面ともに切り合いはみられず、どちらの埋土にも焼土塊や木炭粒、土師器片等が含まれていた。

主な遺物として、土師器甕 (278・279)、須恵器杯蓋・壺 (280・281)、土錘 (282)、磨石 (283)、竈から土師器甕 (284) と鉄と銅を含む鍛冶滓 (285)、中央土坑から須恵器壺 (286) が出土している。この他には土師器と須恵器の細片が 14 点出土している。

S H 352 (第 62 図) 南区中央部で検出した S H 310 に重複する堅穴住居群のひとつである。大部分は S H 310 によって破壊されており、南西隅と壁周溝の一部が残るのみである。遺物は、確実にこの遺構からの出土といえるものはない。検出時の状況、重複関係等については S H 310 の項に記述したのでそちらを参照されたい。

堅穴の規模は、西壁の延長が S H 310 の堅穴より外側では検出されていないことから、最大でも 6 m 程度と考えられる。試みに S H 310 と同程度の約 6 m の規模と仮定すると、S H 310 を時計回りに約 90° 回転させた位置に、それぞれ対応する焼土 (竈)・小土坑 (貯蔵穴)・S K 361 (中央土坑) が確認できる。これは、S H 304 と同規模・同配置であり、これらの堅穴住居は同じ規格 (プラン) で建てられている可能性がある。

S H 353 (第 62 図) 南区中央部で検出した S H 310 に重複する堅穴住居群のひとつである。検出時の状況、重複関係等については S H 310 の項に記述したのでそちらを参照されたい。

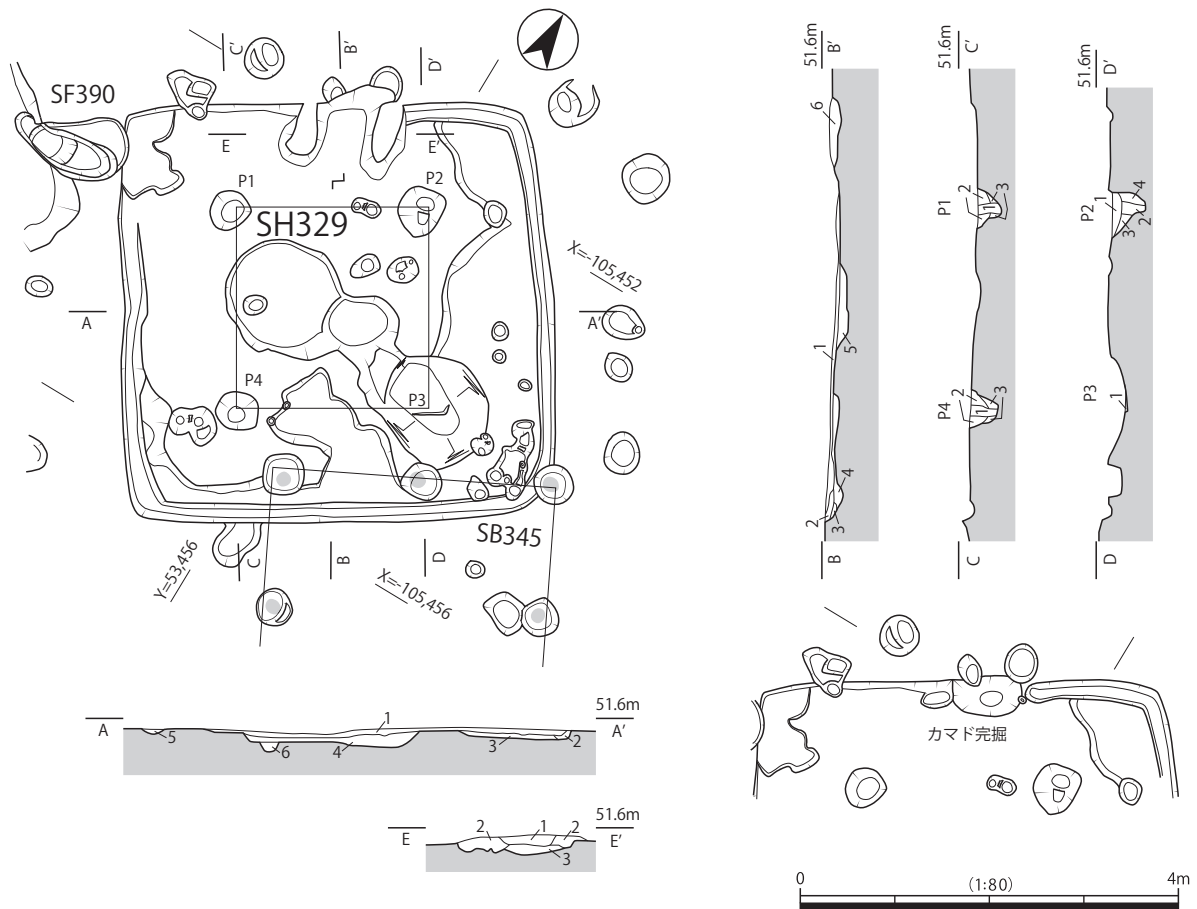
堅穴の規模は、南北 4.5 m × 東西 4.0 m 以上、深さ 2 cm である。主柱穴といえるピットや壁周溝は確認できなかった。北壁の一部が外側に張り出しており、その位置に竈、その東隣に貯蔵穴が想定できるが、焼土等は確認されていない。

遺物は、須恵器杯蓋 (287) の他、細片のため図化できなかったが土師器片が 10 点程度出土した。また、必ずしもこの堅穴住居に伴うとはいえないが、柱穴 P 5 から土師器甕 (288・289)、須恵器短頸壺 (290)、図化できなかったが鞆羽口小片が出土している。

S H 354 (第 62 図) 南区中央部で検出した S H 310 に重複する堅穴住居群のひとつである。遺構の大半は他の堅穴住居によって破壊されており、南隅の一角だけが残存するのみである。検出時の状況、重複関係等については S H 310 の項に記述したのでそちらを参照されたい。

堅穴の規模は、上述のとおり、南隅の 2 辺、各 2.5 m 程度と壁周溝の一部が残存しているのみで不明であるが、仮に S H 310 等と同規模の 6 m 四方の堅穴を想定すると、S H 310 を時計回りに約 45° 回転させた位置に、それぞれ対応する焼土 (竈)・小土坑 (貯蔵穴)・S K 358 (中央土坑) が確認できる。これは、既述の S H 304 と同規模・同配置となり、これらの堅穴住居は同じ規格 (プラン) で建てられている可能性がある。

遺物は、細片のため図化できなかったが土師器片が 10 点出土した。



A-A'

1. 10YR3/2 黒褐色 (10YR4/3 にぶい黄褐色少量混じる)
径 30 mm ~ 5 mm 位の石含む 炭化物少量含む
2. 10YR2/2 黒褐色 (10YR5/6 黄褐色少量混じる) 粗砂含む (壁周溝)
3. 10YR3/2 黒褐色 (10YR4/4 褐色斑状に混じる)
径 10 mm ~ 2 mm 位の石含む (床面整地土)
4. 10YR3/3 暗褐色 (7.5YR5/8 明褐色 : 焼土 : 斑らに多く混じる)
炭化物含む 径 100 mm 以上の石、径 20 mm 位の石、土器片含む (中央土坑)
5. 10YR3/2 黒褐色 (10YR4/4 褐色少量混じる) 径 50 mm 位の石含む (壁周溝)
6. 10YR3/2 黒褐色 (10YR4/4 褐色斑らに混じる) 粗砂含む (Pit)

B-B'

1. 10YR3/2 黒褐色 (10YR4/3 にぶい黄褐色少量混じる)
径 10 mm ~ 2 mm 位の石含む
2. 10YR3/1 黒褐色 (10YR5/6 黄褐色少量混じる) 粗砂含む
3. 10YR3/2 黒褐色 (10YR4/6 褐色少量混じる) 粗砂含む (壁周溝)
4. 10YR2/2 黒褐色 (10YR4/4 褐色ブロック状に混じる) (床面整地土)
5. 10YR3/3 暗褐色 (7.5YR5/8 明褐色 : 焼土 : 斑らに多く混じる)
炭化物含む 径 100 mm 以上の石、径 20 mm 位の石、土器片含む (中央土坑)
6. 10YR3/3 暗褐色 (7.5YR5/8 明褐色 : 焼土 : 混じる)
径 5 mm ~ 2 mm 位の石含む (カマド崩落土)

P1

1. 10YR3/2 黒褐色 (10YR4/3 にぶい黄褐色斑らに混じる) 粗砂含む (柱痕)
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色 径 5 mm 前後の石多く含む
3. 10YR3/4 暗褐色 (10YR4/6 褐色多く混じる) 径 8 mm ~ 2 mm 位の石含む

P2

1. 10YR3/2 黒褐色 (10YR3/3 暗褐色斑らに多量混じる) 径 8 mm ~ 2 mm 位の石含む
2. 10YR2/2 黒褐色 (10YR3/3 暗褐色多く混じる) 径 5 mm の石含む 粗砂含む (柱痕)
3. 10YR3/1 黒褐色 (10YR3/3 暗褐色多量に混じる) 径 2 mm 前後の石多く含む
4. 10YR2/2 黒褐色 (10YR4/4 褐色斑状に多く混じる) 粗砂含む

P3

1. 10YR3/2 黒褐色 (10YR4/4 褐色少量混じる) 径 10 mm 位の石、粗砂含む

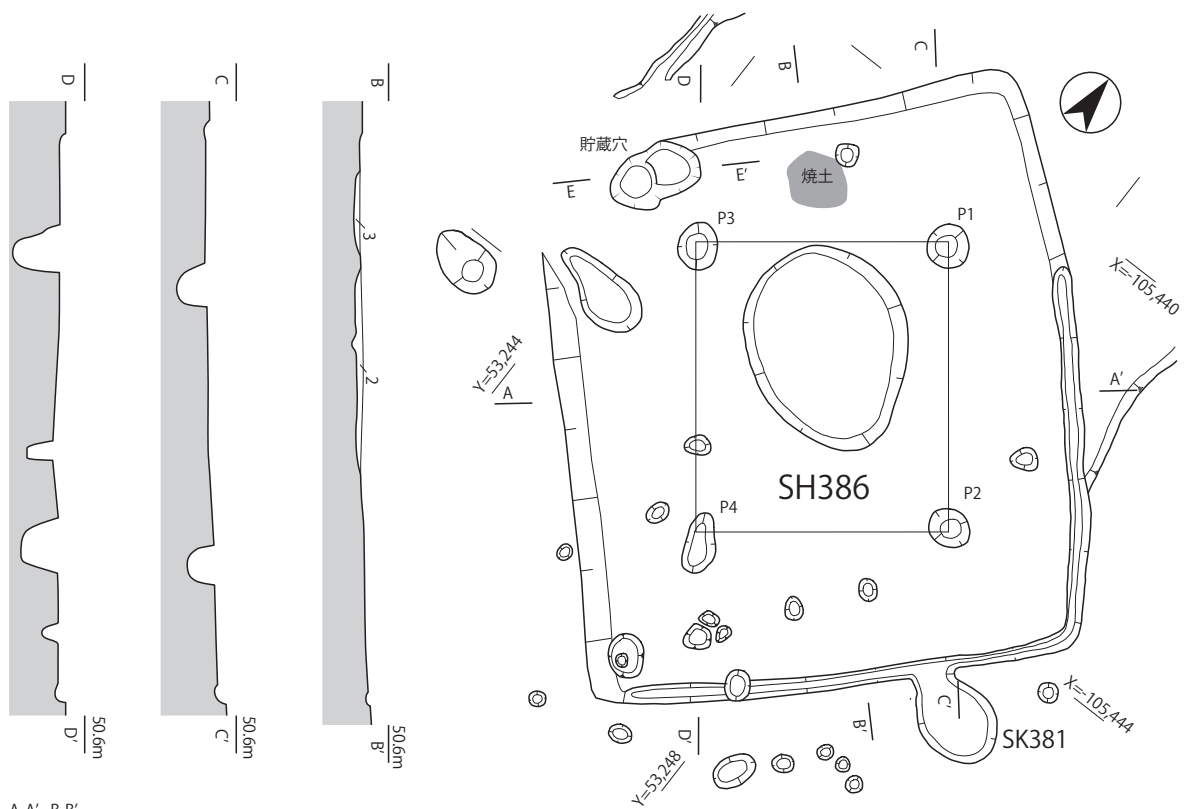
P4

1. 10YR3/2 黒褐色 (10YR4/3 にぶい黄褐色少量混じる) 径 5 mm 前後の石含む (柱痕)
2. 10YR3/1 黒褐色 (10YR4/3 にぶい黄褐色斑状に混じる) 径 8 mm ~ 2 mm 位の石含む
3. 10YR2/1 黒色 (10YR4/4 褐色斑状に多く混じる) 粗砂少量含む 粘性あり

E-E' カマド

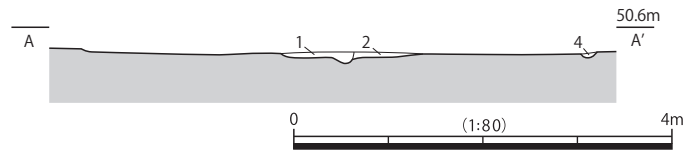
1. 10YR3/3 暗褐色 (7.5YR5/8 明褐色 : 焼土 : 混じる)
径 5 mm ~ 2 mm 位の石含む (カマド崩落土)
2. 10YR3/2 黒褐色 (7.5YR5/8 明褐色 : 焼土 : ブロック状に少量混じる)
(7.5YR4/4 褐色斑らに少量混じる) 径 2 mm 位の石混じる 粘性あり (カマド基部)
3. カマド掘形埋土 土色記録なし

第64図 SH329 平面・断面図 (1 : 80)

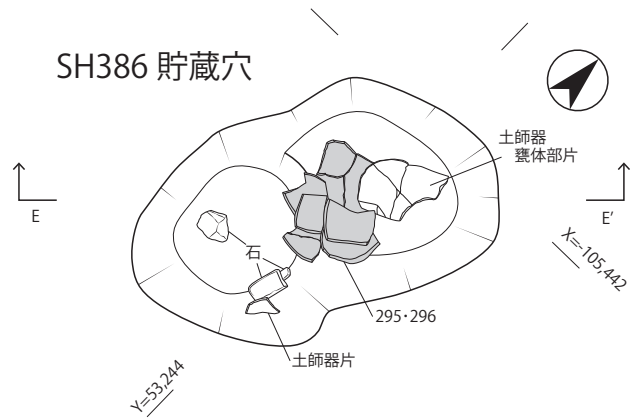


A-A' ,B-B'

1. 10YR4/2 灰黄褐色粘質土に
10YR6/4 にぶい黄橙色粘質ブロック含む (中央土坑)
2. 10YR5/3 にぶい黄褐色粘質土に
10YR6/4 にぶい黄橙色粘質ブロック含む (中央土坑)
3. 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土に
焼土ブロック (炭化物) 混じる (カマド)
4. 10YR3/2 黒褐色粘質土 (壁周溝)

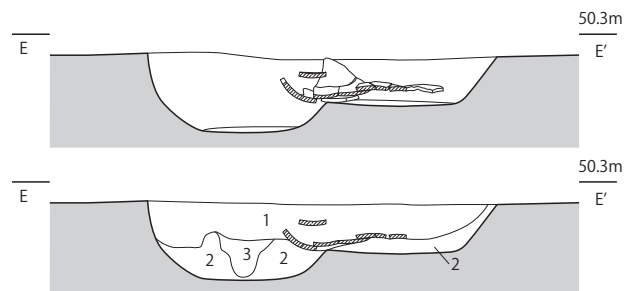
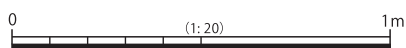


SH386 貯蔵穴

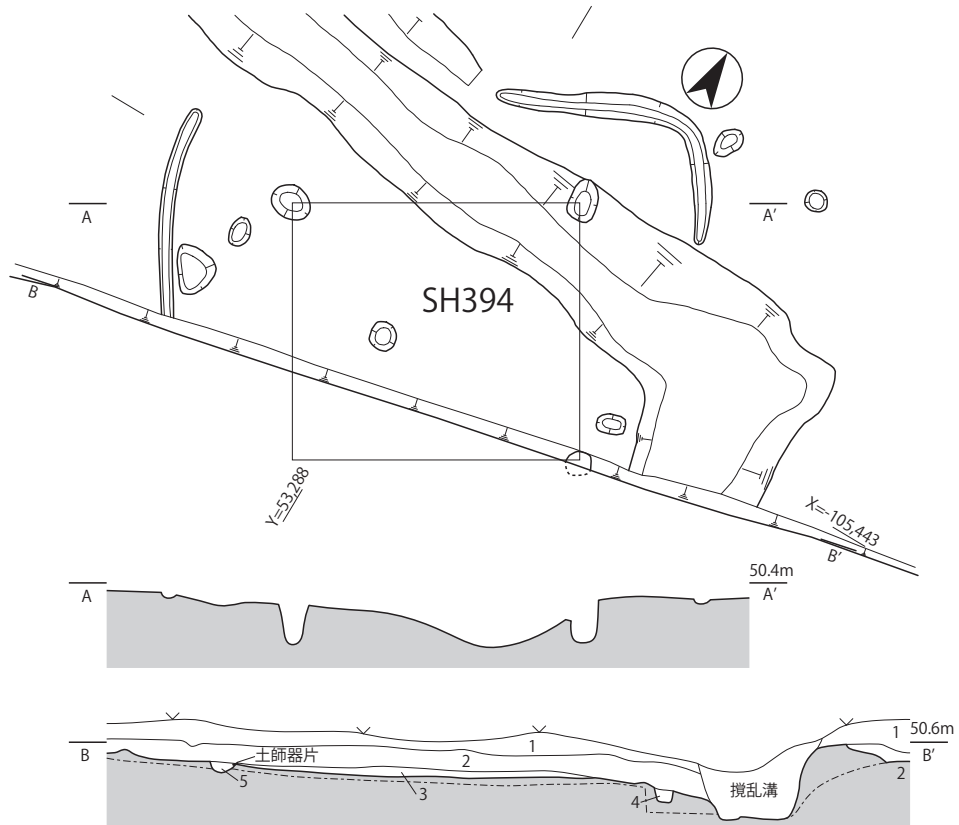


E-E'

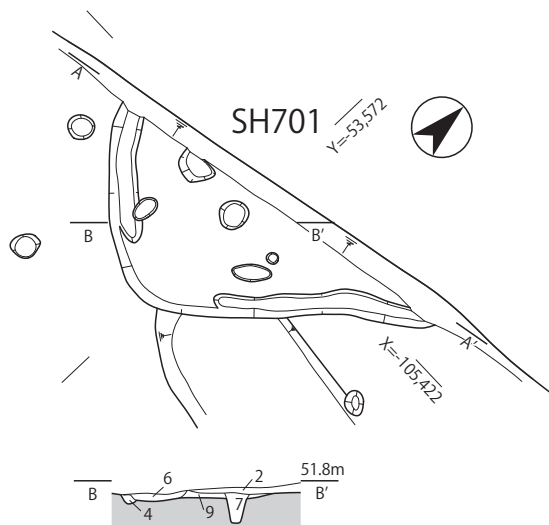
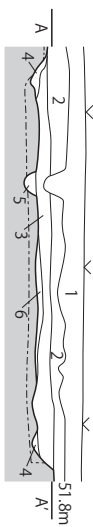
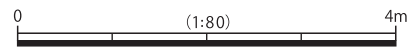
1. 10YR3/2 黒褐色粘質土に
10YR6/4 にぶい黄橙色粘質ブロック含む
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土に
炭化物混じる
3. 1と2の混着



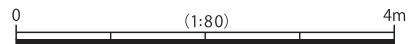
第65図 SH386・貯蔵穴 平面・断面図 (1:80・1:20)



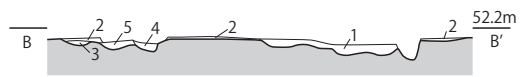
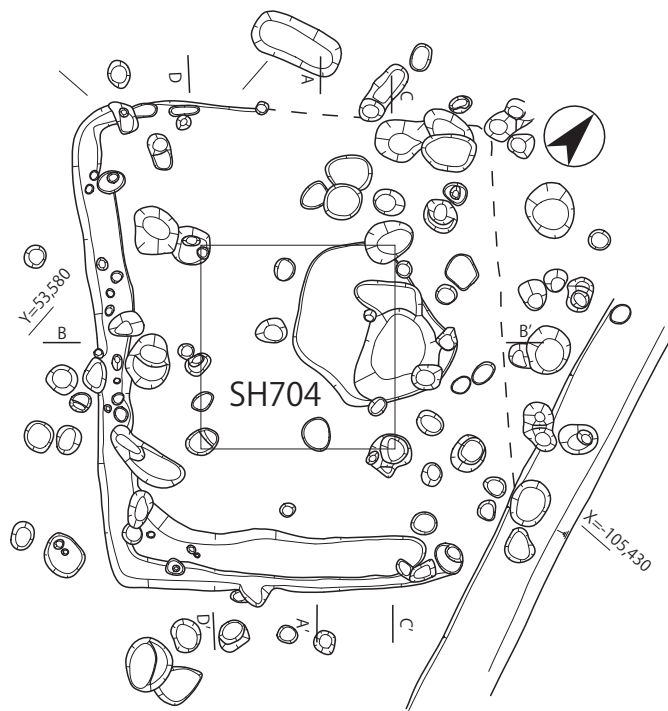
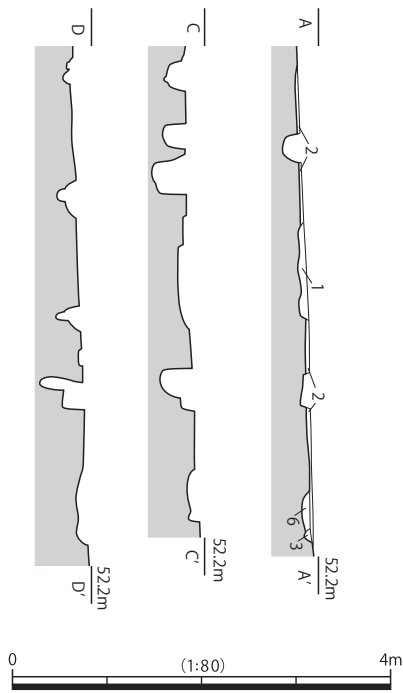
1. 表土
2. 10YR5/2 灰黄褐色土 焼土・炭化物・明黄褐色粒子を含む 礫・白色砂粒を少量含む (旧耕作土)
3. 10YR3/2 黒褐色土 やや粘性あり (竪穴埋土)
4. 10YR5/2 灰黄褐色土 炭化物と地山の土を少量含む 黄白色砂粒を含む (壁周溝埋土)
5. 10YR3/2 黒褐色粘質土 炭粒含む (主柱穴)



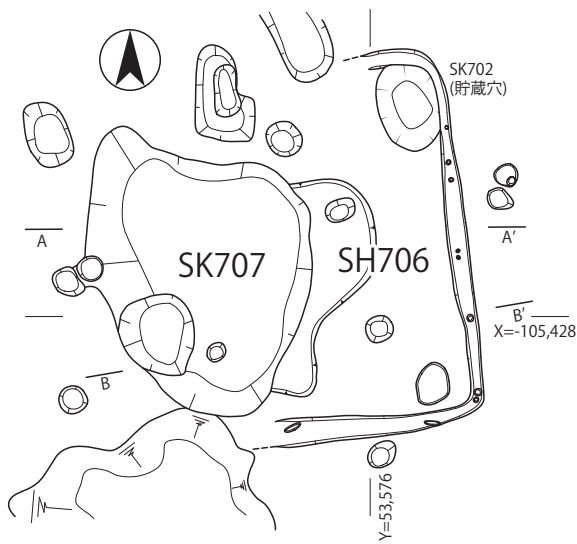
1. 2.5Y3/2 黒褐黒砂質土 (現表土)
2. 2.5Y2/1 黒色シルト (旧表土)
3. 10YR2/1 黒色シルト
土師器細片・炭片・須恵器片含む (埋土1)
4. 10YR3/2 黒褐色砂質土
10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土ブロック含む (周壁溝)
5. 10YR2/2 黒褐色シルト (ピット)
6. 10YR3/1 黒褐色シルト
10YR5/4 にぶい黄褐色粘質土ブロック含む (埋土2)
7. 10YR3/1 黒褐色砂礫混じりシルト (主柱穴)
9. 10YR4/3 にぶい黄褐色粘質土 (床土か)



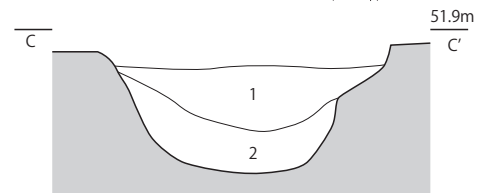
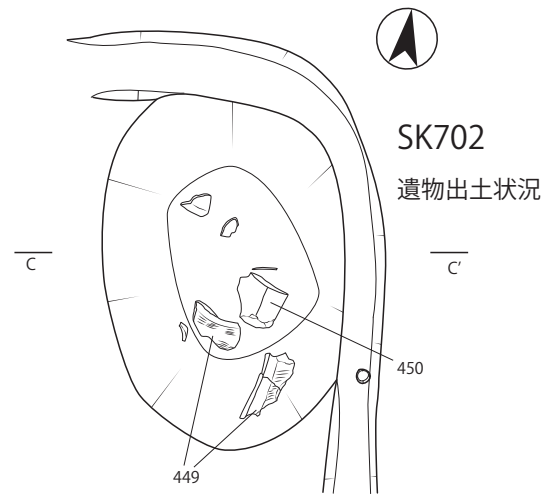
第66図 SH394・701 平面・断面図 (1:80)



1. 7.5YR3/1 黒褐色シルト
2. 10YR3/2 黒褐色砂質土 (竪穴埋土)
3. 10YR3/1 黒褐色砂質土 (壁周溝)
4. 7.5YR2/1 黒色シルト (ピット)
5. 10YR2/2 黒褐色砂質土 (ピット)
6. 10YR3/1 黒褐色シルト (10YR4/3 にぶい黄褐色シルトブロック含む)



1. 10YR2/2 黒色シルト (10YR4/2 灰黄褐色シルトブロック含む)



1. 10YR1.7/1 黒色シルト
2. 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト (10YR4/6 褐色粘質土ブロック含む)



第67図 SH704・706・SK702・707 平面・断面図 (1:80・1:20)

S H 355 (第 62 図) 南区中央部で検出した S H 310 に重複する竪穴住居群のひとつである。遺構の大半は他の竪穴住居によって破壊されており、北隅の一角だけが残存するのみである。検出時の状況、重複関係等については S H 310 の項に記述したのでそちらを参照されたい。

竪穴の規模は、上述のとおり、北隅の 2 辺、各 3.5 m 程度が残存しているのみで不明である。仮に S H 310 等と同規模の 6 m 四方の竪穴を想定すると、S K 359 が位置的に中央土坑の候補となるが、竈跡や貯蔵穴に相当するものは確認されていない。

なお、確実にこの遺構からの出土といえる遺物は確認できなかった。

S H 386 (第 65 図) 北区中央部東側で検出した竪穴住居である。竪穴の規模は、長辺 6.0 m × 短辺 5.5 m で長方形を呈し、深さは 3 cm 程度である。支柱穴は 4 個あり、柱間は長辺 3.0 m、短辺 2.6 m である。北西壁寄り中央に焼土 (竈)、西隅に貯蔵穴、壁周溝は北東壁と南東壁で検出されている。中央に 2.2 m × 1.7 m の楕円形を呈する深さ約 5 cm の土坑を伴っている。

遺物は、壁周溝から土師器甕 (291)、柱穴 P 3 から土師器甕 (292)、中央土坑から須恵器杯蓋 (293)、貯蔵穴から須恵器甕 (295・296)・土師器把手 (297)・土師器甕の体部片・自然石、柱穴 P 1 から埋没過程での混入とみられる弥生土器壺口縁部小片 (294) が出土している。

なお、貯蔵穴は南側が深く、北側が浅い。土層断面からは、第 1 層が掘り直しである可能性が窺える。出土した遺物は南側の自然石を含め、すべて第 1 層底面からの出土である。

S H 394 (第 66 図) 北区東端で検出した竪穴住居である。遺構の南側は調査区外となっている。

削平が著しく、竪穴はほとんど確認できなかったが、北側と南西側で壁周溝の一部と、支柱穴が平面で 2 個、調査区壁面で 1 個検出できた。竪穴の規模は、壁周溝と支柱穴の位置から推定すると、東西 5.7 m × 南北 5.1 m、柱間は東西 3.0 m、南北 2.7 m である。竈、貯蔵穴等は検出されなかった。

遺物は、調査区壁面の壁周溝から土師器片が 1 点出土した。細片のため図化できなかったが、胎土・

焼成・色調・ハケメ等の調整は、他の飛鳥時代の遺構から出土している遺物と差異は感じられないものである。

S H 701 (第 66 図) 南区東側北壁付近で検出した竪穴住居である。南隅の一角を確認した。遺構の大半は北側の調査区外に続いている。壁周溝が検出されているが、南隅では途切れている。床面でピットを 5 つ検出したが、支柱穴かどうかは今回の範囲では判断できなかった。床面の一部で固く締まったにぶい黄褐色粘質土が確認されている。貼床の可能性も考えられるが部分的であるため断定はできない。

遺物は、土師器甕 (298)、須恵器瓶の口縁部 (299) が出土した。

S H 704 (第 67 図) 南区東端で検出した竪穴住居である。平成 23 年度に新名神事業として行われた第 4 次調査区と重なるが、第 4 次調査時には認識されていなかった遺構である。今回、遺構のほぼ全体を検出することができたが、削平が著しく、東隅から北隅にかけてのラインは明確ではない。埋土は深いところで 4 cm 程度であった。

後述する支柱穴や壁周溝の位置等をもとに竪穴の規模を推定すると、長辺 5.2 m × 短辺 4.4 m の長方形となる。中央のやや東寄りに 1.8 m × 1.4 m、深さ 20 cm 程度の土坑がある。この土坑以外にも重複するピットが多く検出されているが削平されており、切り合いおよび新旧関係は確認できなかった。

支柱穴とみられるピットが 4 個あり、柱間は長辺が 2.2 m、短辺が 2.0 m である。竈 (焼土) や貯蔵穴といえるものは確認されていない。

遺物は、細片のため図化できなかったが、土師器片が出土した。胎土・焼成・色調・ハケメ等の調整は他の飛鳥時代の遺構から出土している遺物と差異の感じられないものである。

S H 706 (第 67 図) 南区東側北寄りで検出した竪穴住居である。S K 707 と重複しているが、切り合いは不明である。北東隅の S K 702 は貯蔵穴の機能を持つと考えられる。焼土痕 (竈) 等は検出されていない。

削平が著しく、遺構の西半は失われている。壁周溝が 3 辺で確認されており、推定できる竪穴の規模は、南北 4.0 m × 東西 2.4 m 以上である。竪穴から

の出土遺物はないが、S K 702 から飛鳥時代の遺物が出土している。

S H 713 (第 68 図) 南区東側で検出した竪穴住居である。竪穴の規模は、5.0 m 四方で正方形を呈し、深さは 24cm である。東壁中央に竈、南東隅に貯蔵穴、4 辺に壁周溝を伴う。竈を断ち割った際にも確認しているが、壁周溝は竈の下には延びておらず、手前で途切れている。支柱穴といえるピットは確認できなかった。

竪穴埋土は、おおむね黒～黒褐色シルトの堆積が主だが、中央部に焼土塊や炭化物を多く含む黒褐色シルトの堆積が顕著に認められた。

竈の位置には崩落土や焼土が堆積し、上部構造は原形を留めていなかったが、底面には固く焼け締まった焼土面が残存しており、この面が燃焼時の機能面と考えられる。焼土面の奥方から鞆羽口 (300) が支柱石の代用として底面に据え付けられた状態で出土した (写 72)。

貯蔵穴は一部が深く掘られ底面が 2 段になっており、埋土からは拳大の礫が多数出土した。

遺物は、上述の鞆羽口の他、須恵器杯蓋・甕 (301・302)、台石、混入とみられる弥生土器壺口縁部 (303) が出土した。

S H 727 (第 69 図) 南区東側南壁付近で検出した竪穴住居である。全体的に削平され、攪乱溝もあるため、南東隅の一角を欠くものの、おおむね 4.2 m 四方の正方形を呈するものと思われる。深さは 5 cm 程度である。焼土、壁周溝、支柱穴に相当する柱穴等は検出されなかった。

遺物は、細片のため図化できなかったが、飛鳥時代のものとみられる土師器片が数点出土した。

S H 730 (第 69 図) 南区中央部南壁付近で検出した竪穴住居である。北側は削平されており残存していない。竪穴の規模は、4.1 m × 4.0 m 以上で深さは 6 cm 程度である。縄文時代の集石炉 S K 744 と重複している。竈、支柱穴等は検出されていない。

遺物は土師器甕底部 (304) が出土した。

S H 731 (第 70 図) 南区東端で検出した竪穴住居である。遺構の大半は重複する S H 732 や攪乱溝によって失われている。切り合いは S H 732 より古い。

壁周溝を伴うが、検出できたのは南辺の 4.0 m と

西辺の 3.2 m のみである。竪穴の中央部と考えられる位置に径 1.0 m、深さ 20cm の土坑 (S K 728) が検出されており、埋土には焼土塊が多量に含まれている。削平のため、この土坑との新旧関係は判然としないが、重複する S H 732 の中央部にも同様の土坑 (S K 729) が検出されているため、これらの土坑はそれぞれの竪穴住居に伴うものとみてよいと思われる。なお、竈の痕跡や支柱穴は検出されていない。

S H 731 から遺物は出土していないが、S K 728 からは須恵器杯身が出土している。

S H 732 (第 70 図) 南区東端で検出した竪穴住居である。S H 731 と重複しており、S H 731 より新しい。南北 4.6 m × 東西 4.2 m の長方形を呈し、深さは 4 cm 程度である。壁周溝は北辺の一部を除いてほぼ全周で検出されている。

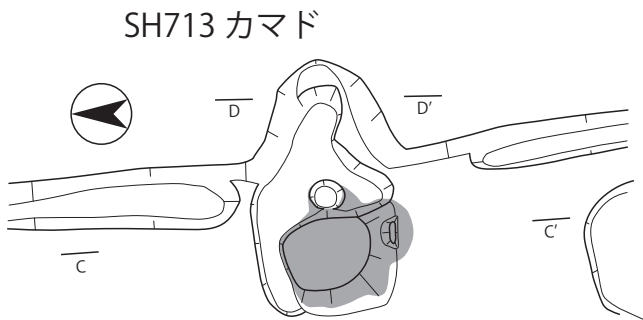
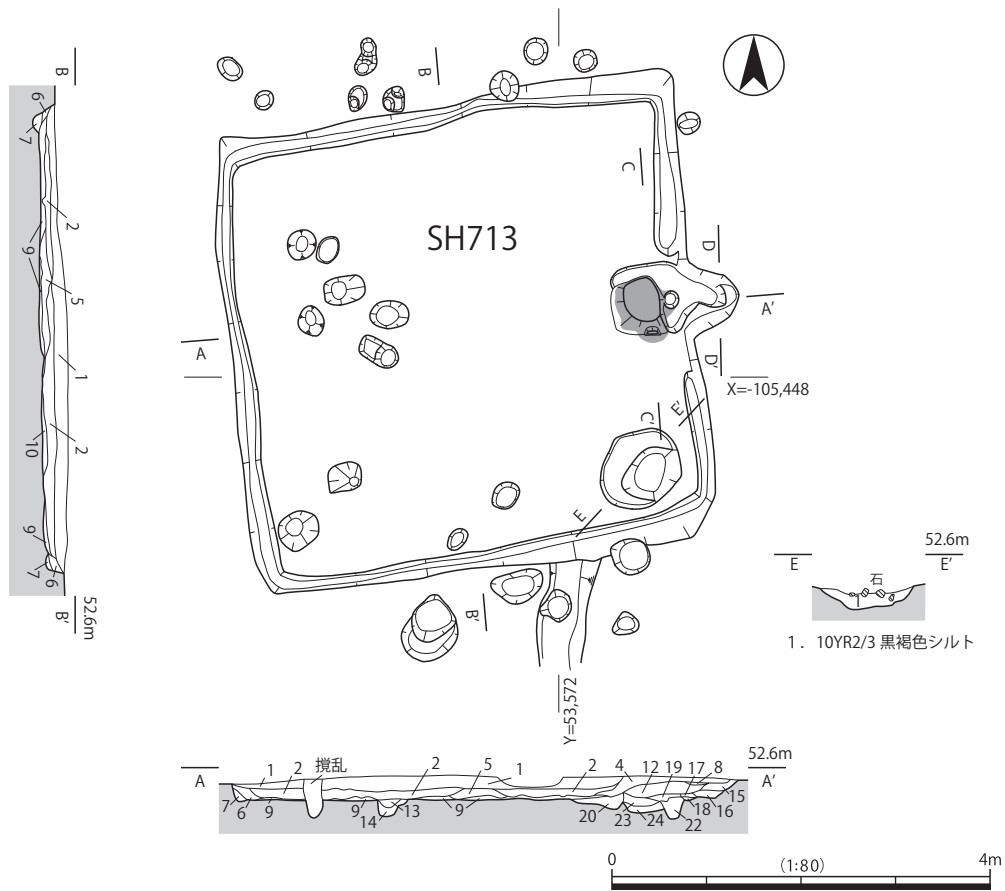
竪穴の中央部と考えられる位置に径 2.0 m、深さ 22cm の土坑 (S K 729) が検出されており、埋土には焼土塊が多量に含まれている。土層断面図の第 2 層は締まりがないため、床土ではなく埋没過程で堆積した土と考えられる^⑩。土坑は竪穴住居に伴うもので、少なくとも竪穴住居の廃絶時には開口していたものと思われる。なお、竈の痕跡や支柱穴は検出されていない。

遺物は、土師器甕 (305)、須恵器杯 (307)・瓶または杯の口縁部 (306)、板状鉄製品の断片 (308) が出土した。なお、S K 729 からは土師器片が 2 点出土したが、細片のため図化はできなかった。

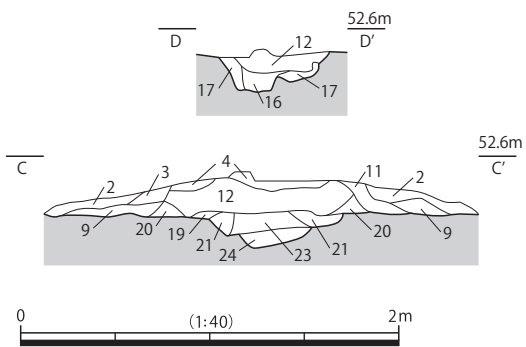
S H 734 (第 71 図) 南区中央部南壁付近で検出した竪穴住居である。竪穴の規模は南北 6.8 m × 東西 7.0 m で、四方形に近い長方形を呈し、深さは 8 cm 程度である。支柱穴は 4 個で柱間は南北 4.0 m、東西 4.4 m である。北壁中央やや東寄りに焼土 (竈)、北東隅に貯蔵穴、壁周溝は北辺以外の 3 辺で検出されている。また、西壁中央の土坑の埋土には焼土塊や炭化物が多く含まれていた。

遺物は、土師器片・須恵器片が数点出土したが、図化できたのは土師器甕 (309～311) のみである。

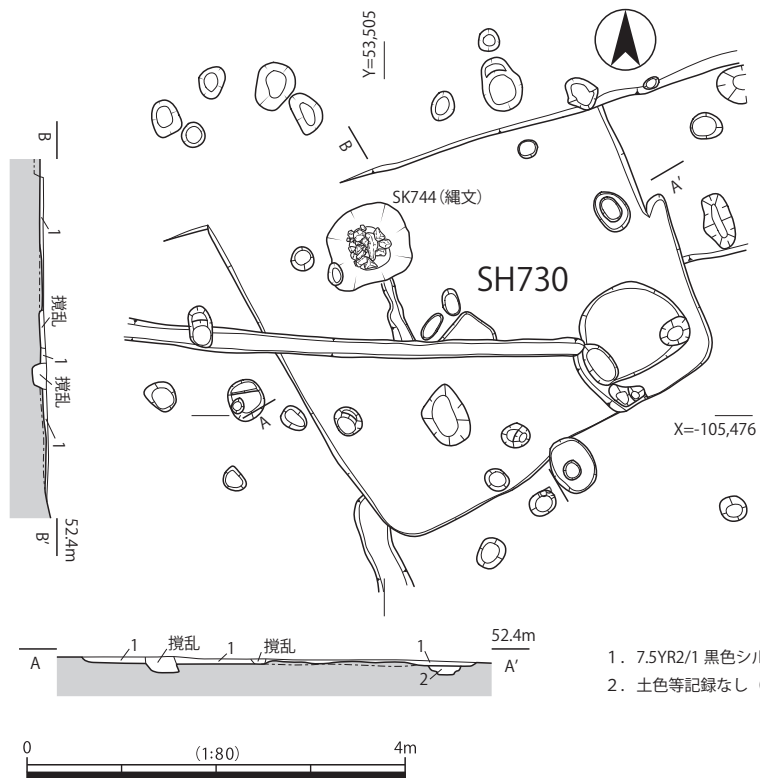
本例は調査区内で最大の竪穴住居であるが、出土遺物や付属する施設に関して他の竪穴住居とあまり



- A-A' ,B-B' ,C-C' ,D-D'
1. 7.5YR2/1 黒色シルト
 2. 7.5YR2/1 黒色シルト (地山ブロック少量混じる)
 3. 2.5Y3/1 黒褐色シルト (焼土ブロック炭片含む)
 4. 10YR3/2 黒色シルト (焼土ブロック・地山ブロック少量混じる)
 5. 10YR2/2 黒褐色シルト (5mm ~ 10mm の焼土ブロック含む)
 6. 10YR3/2 黒色シルト
 7. 10YR3/3 暗褐色シルト (壁周溝埋土)
 8. 10YR4/2 灰褐色シルト
 9. 10YR3/3 暗褐色シルト (地山ブロック多量に混じる)
 10. 7.5YR5/6 暗褐色シルト (しまり強い、貼床か?)
 11. 2.5Y3/1 黒褐色シルト (住居埋土、少量の地山ブロック含む)
 12. 10YR3/3 暗褐色シルト (カマド崩落土、焼土ブロック多量に混じる)
 13. 5YR3/1 暗褐色シルト
 14. 7.5YR2/1 黒色シルト (地山ブロック混じる)
 15. 7.5YR3/3 暗褐色シルト
 16. 10YR2/2 黒褐色シルト (少量の地山ブロック含む)
 17. 7.5YR4/6 褐色シルトブロック (崩落土)
 18. 7.5YR4/4 褐色シルト (焼土ブロック含む)
 19. 5YR 4 / 6 赤褐色シルトブロック土 (カマド底面の焼土層)
 20. 10YR4/3 にぶい黄褐色シルト (カマド・袖部痕跡、崩落か?)
 21. 2.5YR3/1 暗赤灰色シルト
 22. 10YR4/2 灰黄褐色シルト (支柱掘方)
 23. 10YR5/6 赤色シルト (焼土)
 24. 7.5YR5/3 にぶい褐色シルト (焼土下掘り込み)

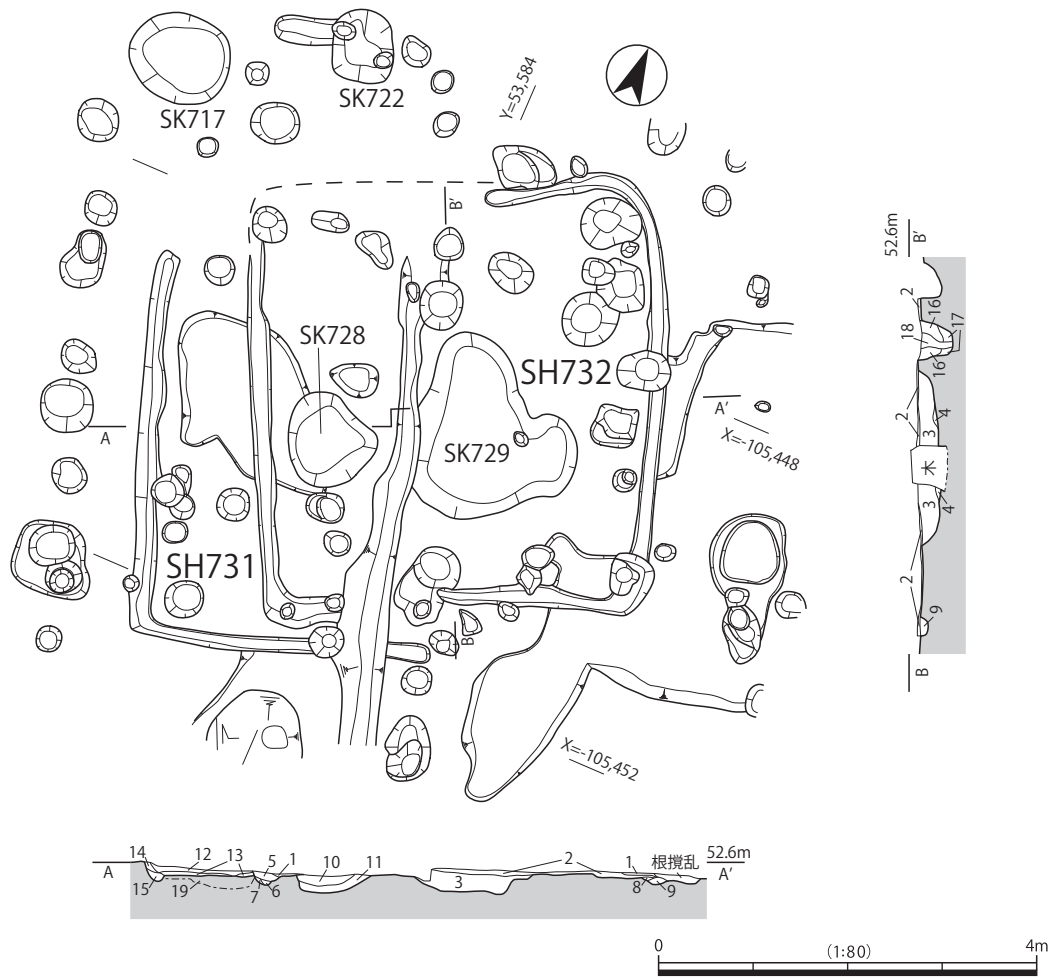


第68図 SH713・カマド 平面・断面図 (1:80・1:40)



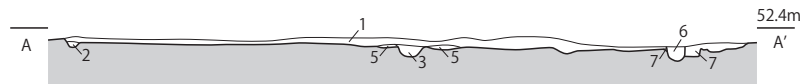
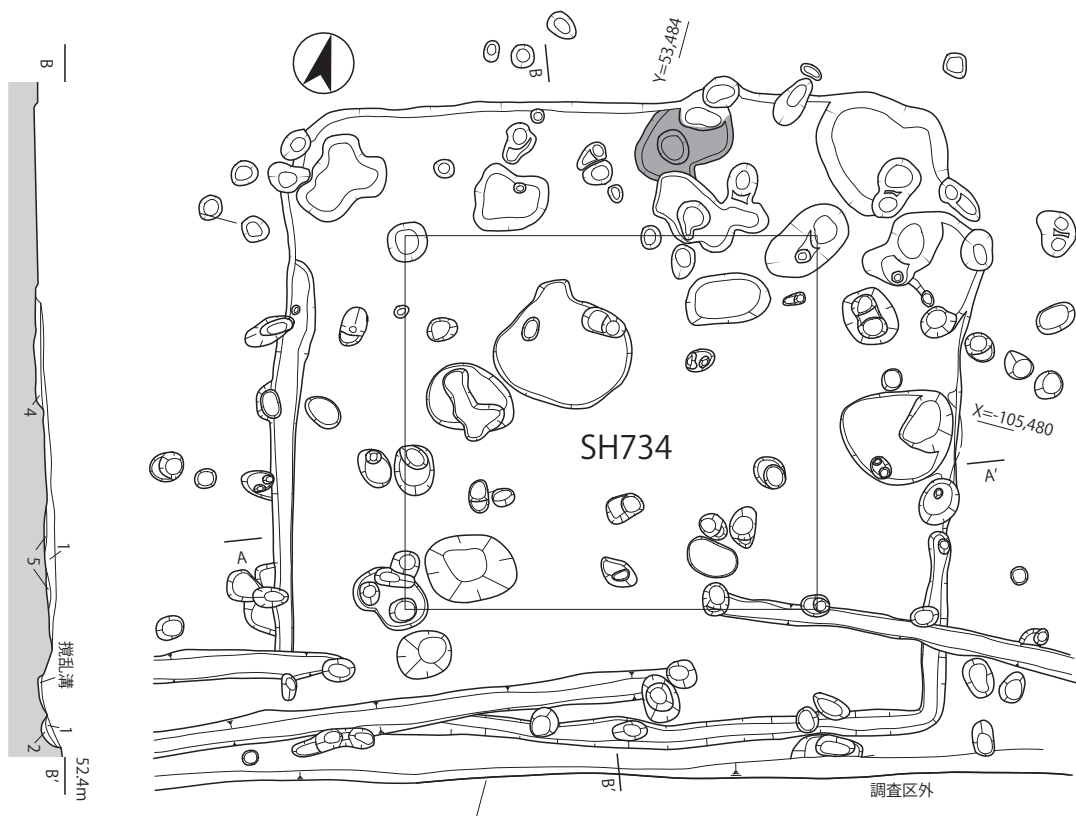
1. 7.5YR2/1 黒色シルト (竪穴埋土)
2. 土色等記録なし (別ビット)

第69図 SH727・730 平面・断面図 (1:80)

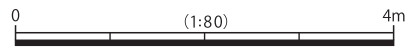


1. 10YR3/3 暗褐色シルト (SH732)
2. 7.5YR2/2 黒褐色シルト 締めりなし (SH732)
3. 10YR2/3 黒褐色シルト 焼土ブロック・地山ブロック含む、根の影響あり (SK729)
4. 10YR3/3 暗褐色シルト (SK729)
5. 10YR3/2 黒褐色シルト (SH732 壁周溝)
6. 10YR2/3 黒褐シルト 地山ブロック混じる (SH732 壁周溝)
7. 10YR2/2 黒褐色シルト (SH732 壁周溝)
8. 10YR4/6 褐色シルト 地山ブロック・焼土ブロック含む (SH732 壁周溝)
9. 7.5YR2/3 極暗褐色シルト (SH732 壁周溝)
10. 10YR2/3 黒褐色シルト 焼土ブロック・地山ブロック多量に含む (SK728)
11. 7.5YR3/3 暗褐色シルト 焼土ブロック・地山ブロック多量に含む (SK728)
12. 10YR2/1 黒色シルト (SH731)
13. 10YR3/3 暗褐色シルト 地山ブロック含む (SH731)
14. 10YR3/2 黒褐色シルト 地山ブロック混じる (SH731)
15. 10YR2/2 黒褐シルト 地山ブロック混じる (SH731)
16. 10YR2/1 黒色シルト 地山ブロック混じる (ピット掘形)
17. 10YR2/2 黒褐色シルト (ピット掘形)
18. 7.5YR2/2 黒褐色シルト 焼土ブロック混じる (柱痕・柱抜取痕)
19. 10YR5/6 黄褐色シルト (風倒木痕)

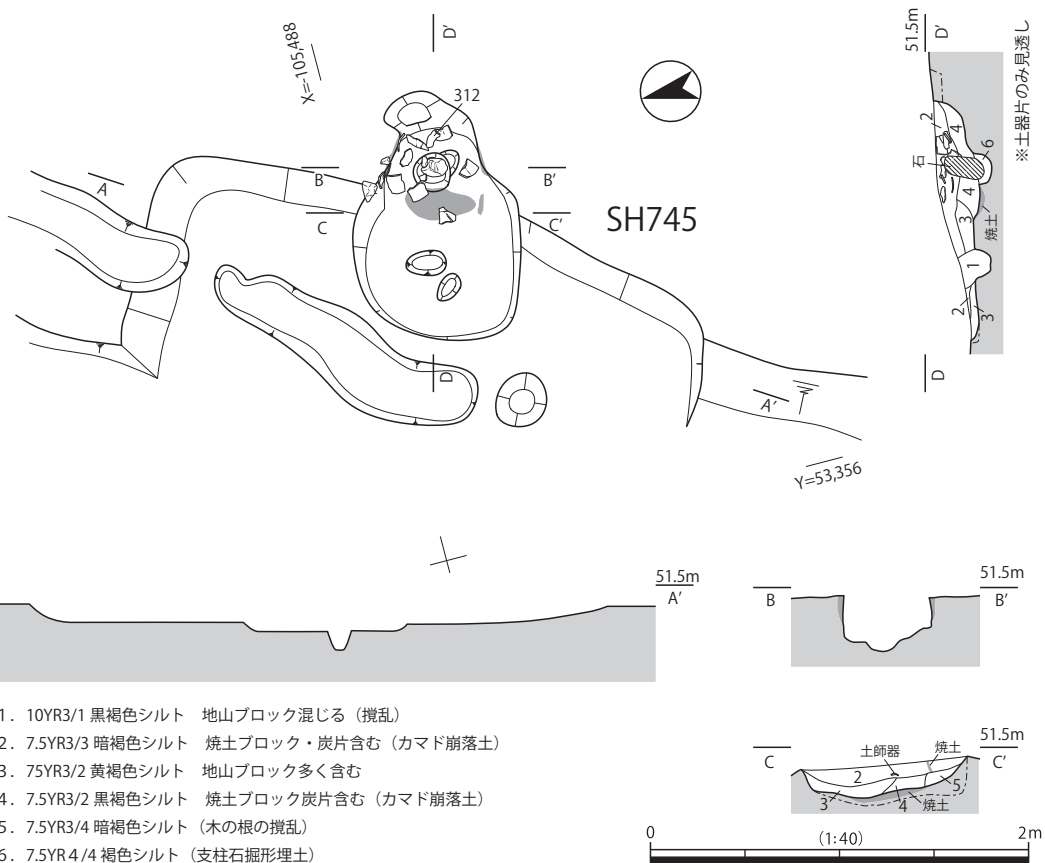
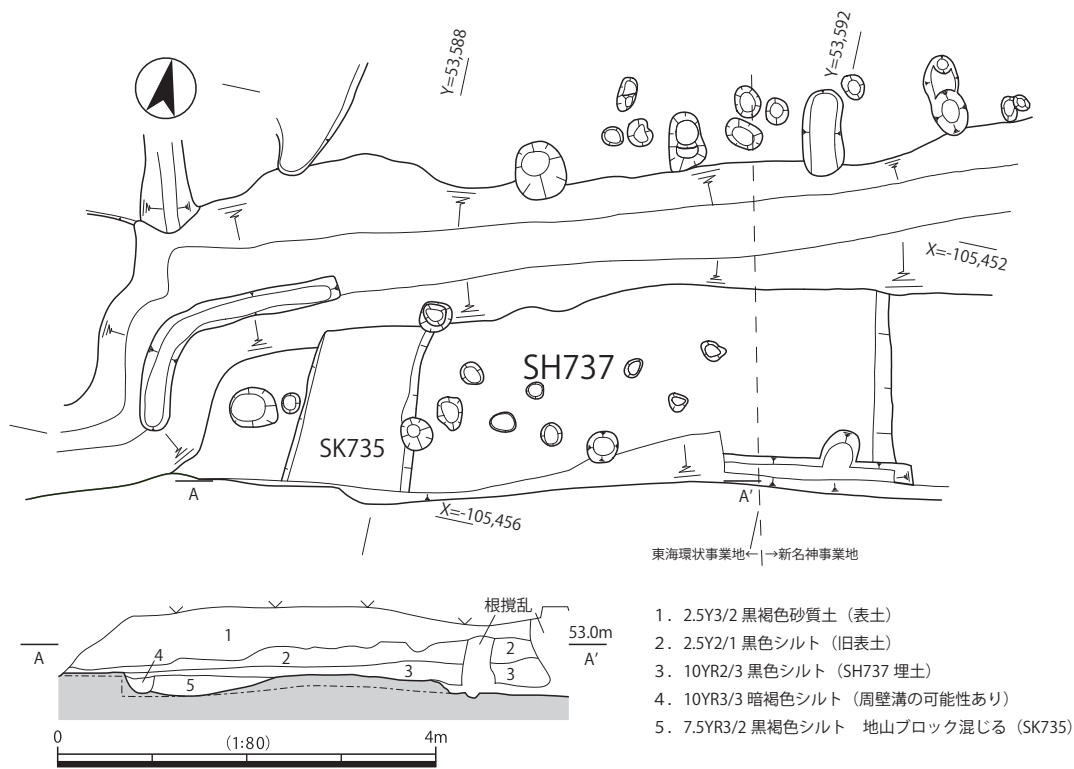
第70図 SH731・732・SK728・729 平面・断面図 (1:80)



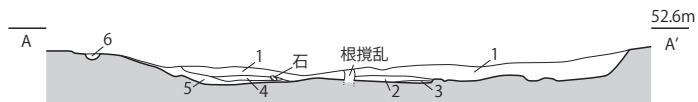
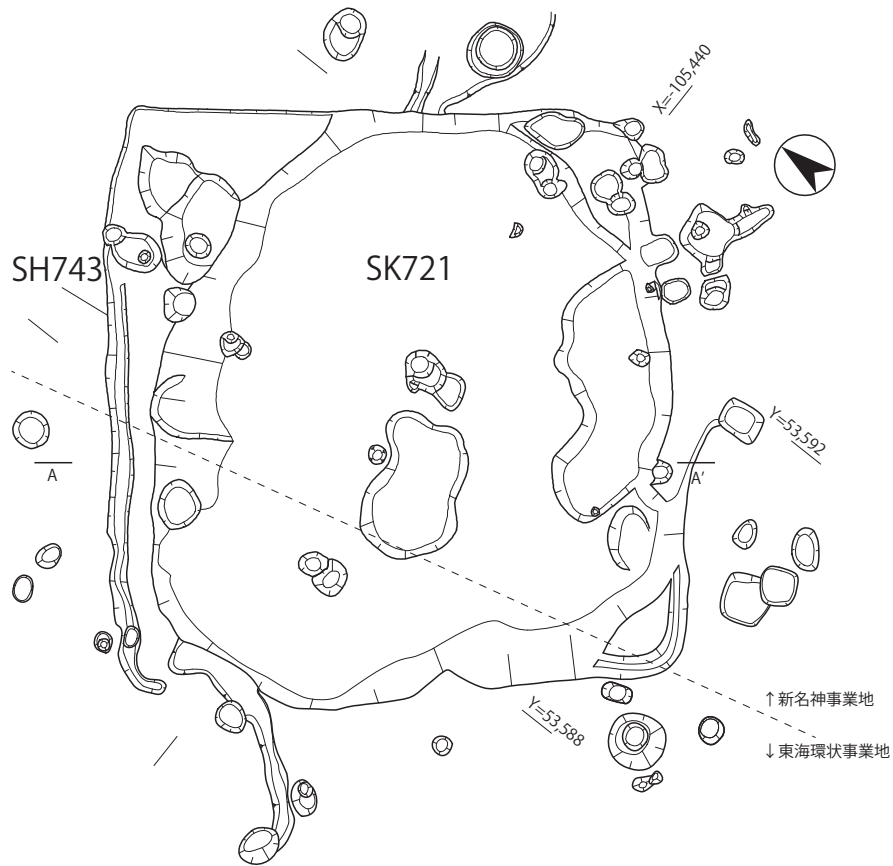
1. 10YR2/2 黒褐色シルト (SH734 埋土)
2. 10YR3/3 暗褐色シルト (SH734 壁周溝)
3. 10YR2/3 黒褐色シルト (住居内ビット埋土)
4. 10YR3/2 黒褐色シルト 地山ブロック混じる (住居内落込み埋土)
5. 10YR4/6 褐色シルト (貼床か?)
6. 2.5Y2/1 黒色シルト (攪乱か?)
7. 10YR2/2 黒褐色シルト 地山ブロック含む (住居内落込み埋土)



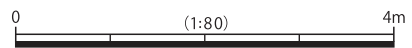
第71図 SH734 平面・断面図 (1:80)



第72図 SH737・745・SK735 平面・断面図 (1:80・1:40)



1. 黒褐色粘質土 黄褐色土粒・焼土・炭少量含む (以下、1～5はSK721埋土)
2. 黒褐色砂質土 焼土・炭少量含む
3. 黒褐色砂質土 黄褐色土粒・焼土・炭少量含む
4. 黒褐色砂質土 焼土少量含む
5. 暗褐色砂質土 黄褐色土粒少量含む
6. 暗褐色砂質土 (SH743壁周溝)



第73図 SH743・SK721 平面・断面図 (1:80)

差異を感じさせるものはない。

S H 737 (第 72 図) 南区東端南壁付近で検出した堅穴住居である。平成 24 年度に新名神事業として行われた第 8 次調査で確認されている S H 1233 と同一遺構である^⑭。S K 735 と重複しており、S K 735 より新しい。北側を攪乱溝に破壊されていることに加え、南側が調査区外であるため、本来の規模は不明だが、南北 2.2 m × 東西 6.2 m が検出されている。平面では壁周溝は確認されていないが、土層断面図には壁周溝の可能性のある掘り込みが検出されている。

出土遺物はないが、埋土や遺構の特徴等から当該期の遺構とした。

S H 743 (第 73 図) 南区東端で検出した堅穴住居である。平成 23 年度に新名神事業として行われた第 4 次調査で確認されている S H 1057 と同一遺構である^⑮。第 4 次調査で確認されていなかった西隅周辺と南隅を検出した。遺構の大半は重複する S K 721 によって破壊されているものの、残存する壁周溝等から推測すると、堅穴の規模は 6.0 ～ 6.1 m 四方で、ほぼ正方形を呈すると考えられる。遺物は出土しなかった。遺物等を含めた詳細については、第 4 次調査の整理作業が進むことを待ちたい。

S H 745 (第 72 図) 南区西側で検出した堅穴住居である。調査前まで里道として利用されていた部分であるため、攪乱が著しく、遺構の東側が検出できたのみである。堅穴の規模は、南北 3.0 m × 東西 1.1 m 以上で、深さは 10cm 程度である。東壁のほぼ中央に竈がある。竈の位置には、崩落土や焼土が堆積し、上部構造は原形を留めていなかったが、底面には焼土面が残存しており、この面が燃焼時の機能面と考えられる。焼土面の奥方には支柱石が据え付けられた状態で出土した。

遺物は、竈の崩落土中から土師器甕 (312) が出土している。

(2) 掘立柱建物

中野山遺跡では、縄文時代から中世まで、すべての遺構の検出は褐色粘質土層を若干掘り下げた同一面にて行っている。このため、掘立柱建物の時期を決定するために以下の作業を行った^⑯。

まず、暫定的に 1 尺を 30cm と措定し、尺に合う

平面プランの復元が可能か否かの検討を行った。その結果、おおむね 30cm 前後の単位で平面プランが復元できるものが相当数確認できた。調査区内では飛鳥時代以降の遺物はほとんど確認できないことから、とりあえず、30cm 程度の尺の想定できる建物は、飛鳥時代の建物である可能性が高いと仮定した。

さらに、これらの建物について、柱穴からの出土遺物および建物の形式や柱掘形の形状、所属時期の明確な他の遺構との切り合い、埋土の共通性等の検討を行い、矛盾がないかを検証した。その結果、掘立柱建物 44 棟を当該期の遺構と判断した。

以下、記述にあたって、棟方向は、特に根拠を示さない場合、柱間数の多い側を、また同じ間数の場合は、総長の長い側を棟方向として扱い、総長が等しい場合は便宜的に南北棟として扱った。建物方位は、南北棟・東西棟に関係なく座標北に対する振れを表記した。遺物の出土した柱穴は、図中もしくは土色一覧にピット番号 (例:K-V17P1) を記載した。これは掘立柱建物一覧表 (第 18 表) に対応する。

以下、遺構ごとに記述する。

S B 202 (第 74 図) 南区西側で検出した 2 間 (3.6 m) 四方の総柱建物である。柱間は 1.8 m 等間。建物方位は N39° E である。柱穴は径 43 ～ 60cm、深さ 19 ～ 37cm、柱穴からは鉄滓 (313) と土師器片が数点出土しているが、土師器は細片のため図化できなかった。

柱掘形の平面形が方形を呈するものがみられる。柱穴が浅いものもあり、削平が進んでいることが窺えることから、検出面で円形を呈する柱穴も上面では方形に掘られていた可能性は高いだろう。

S B 204 (第 74 図) 南区西端で検出した桁行 4 間 (8.4 m) 以上 × 梁行 2 間 (3.0 m) 以上の側柱建物である^⑰。南側は調査区外のため未確認。柱間は、桁行の西 3 間は 1.8 m 等間だが、残り 1 間のみ 2.7 m と広い。S K 207 により柱穴が失われている可能性も考えられるが、その場合でも等間とはならない。また、南区土層断面図 (第 7 図) の断面 A-A' に、柱穴らしき断面が確認できることから、桁行は 3 間で終わる可能性も考えられる。梁行は 1.5 m 等間である。建物方位は N30° E。柱穴は径 43 ～ 55cm、深さ 20 ～ 43cm、出土遺物は無い。

新名神事業に伴う第9次調査部分では柱穴に重複がみられることから建て替え等の可能性も窺えるが、詳細については、第9次調査の整理作業が進むことを待ちたい。

S B 205 (第75図) 南区西側で検出した桁行5間(6.6 m) × 梁行3間(4.8 m)の側柱建物である。柱間は、桁行の両端1間が1.05 m、中央の3間が1.5 m等間、梁行は両端1間が1.65 m、中央1間が1.5 mと両端のみ寸法が違う。建物方位はN41° W。柱穴は径40～58cm、深さ16～58cm、出土遺物は無い。柱掘形の平面形が方形を呈するものがみられる。

S B 206 (第76図) 南区西側で検出した桁行3間(5.4 m) × 梁行3間(4.5 m)の総柱建物である。柱間は、桁行が1.8 m等間、梁行が1.5 m等間。建物方位はN29° E。柱穴は径45～73cm、深さ20～52cm、柱穴P3・P4・P6から土師器片が出土したが、細片のため図化できなかった。S B 215と重複し、これより古い。

柱穴P9・P10・P13・P14のみ柱痕跡を図示していないが、これは土層等の記録をとる前に掘り抜いてしまったためであり、これらも他と同様に柱痕跡が残っていた可能性は高い。

北西約10 mの位置に同規模の3間四方の総柱建物S B 214があり、関連が窺える。

S B 214 (第77図) 南区西側で検出した桁行3間(5.4 m) × 梁行3間(4.5 m)の総柱建物である。柱間は、桁行が1.8 m等間、梁行が1.5 m等間。建物方位はN35° E。柱穴は径45～73cm、深さ15～30cm、出土遺物は無い。S H 211と重複しており、これより新しい。

南東約10 mの位置に同規模の3間四方の総柱建物S B 206があり、関連が窺える。

S B 215 (第76図) 南区西側で検出した桁行2間(4.5 m) × 梁行2間(3.3 m)の側柱建物である。柱間は、桁行の北側が1.8 mと2.7 m、南側が2.1 mと2.4 mとばらつきがあるものの、梁行は1.65 m等間となっている。建物方位はN30° W。柱穴は径41～57cm、深さ18～25cmである。柱穴からは土師器片が出土しているが、細片のため図化できなかった。S B 206と重複しており、これより新しい。

S B 217 (第75図) 南区西側で検出した桁行2間

(3.3 m) × 梁行2間(3.0 m)の総柱建物である。柱間は、桁行が1.65 m等間、梁行が1.5 m等間。建物方位はN12° E。柱穴は径28～46cm、深さ20～36cmである。柱穴から土師器細片と須恵器杯蓋片(314)が出土している。

S B 224を中心に方位を揃える建物群を構成する建物のひとつである。

S B 219 (第77図) 南区西側で検出した桁行2間(3.9 m) × 梁行2間(3.6 m)の総柱建物である。柱間は、桁行が1.95 m等間、梁行が1.8 m等間。建物方位はN11° E。柱穴は径48～64cm、深さ15～33cmである。柱穴から須恵器杯蓋(315)が出土している。

S B 224を中心に方位を揃える建物群を構成する建物のひとつである。

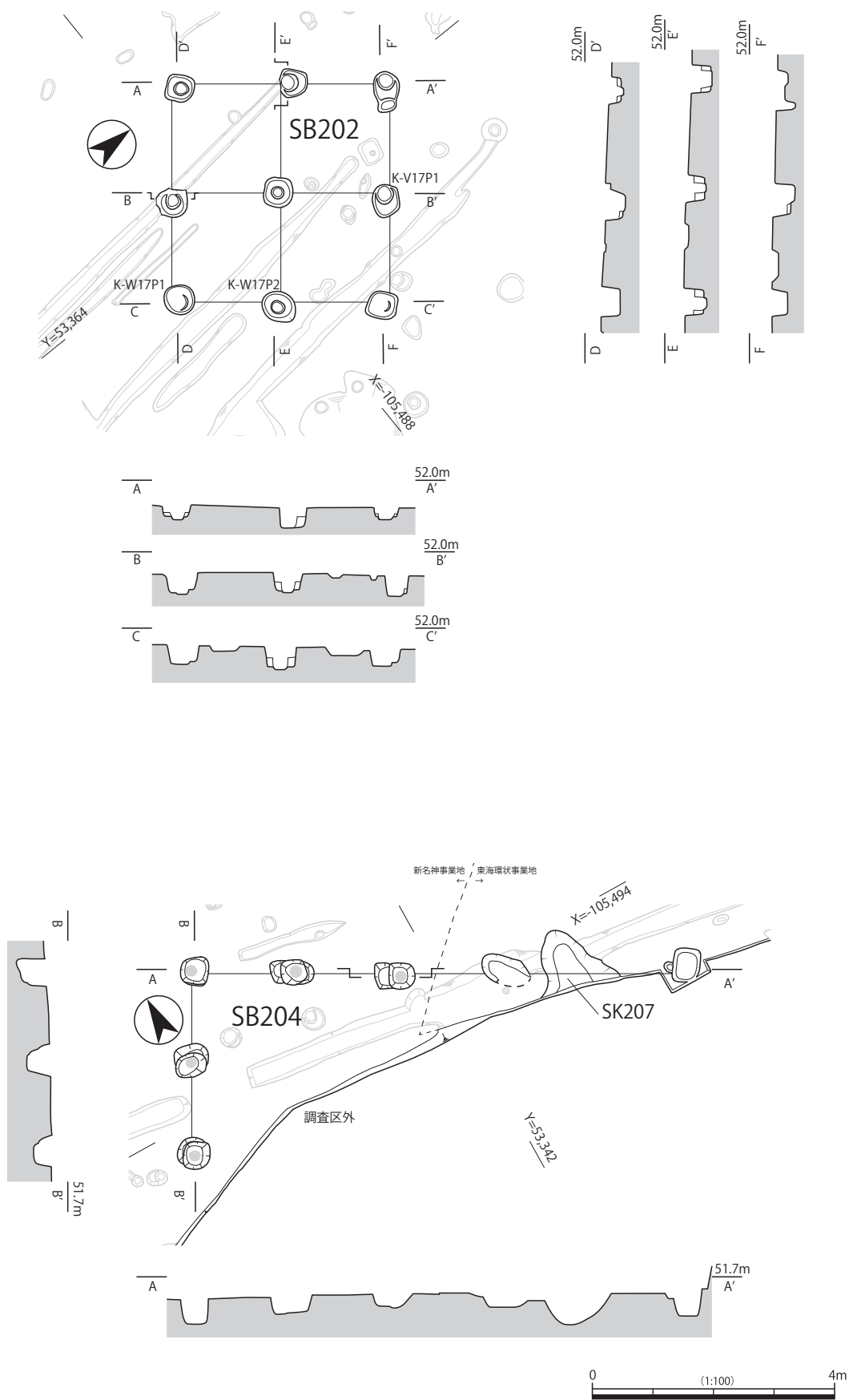
S B 220 (第78図) 南区西側で検出した桁行4間(8.4 m) × 梁行2間(4.5 m)の側柱建物である^⑩。柱間は、桁行の両端1間が1.8 m、中央の2間が2.4 m等間、梁行は2.25 m等間である。建物方位はN12° E。柱穴は径47～60cm、深さ26～39cmである。柱穴から須恵器杯蓋(316)と、細片で図化できなかったが土師器甕体部片が出土している。S K 221と重複しており、これより新しい。

S B 224を中心に方位を揃える建物群を構成する建物のひとつである。

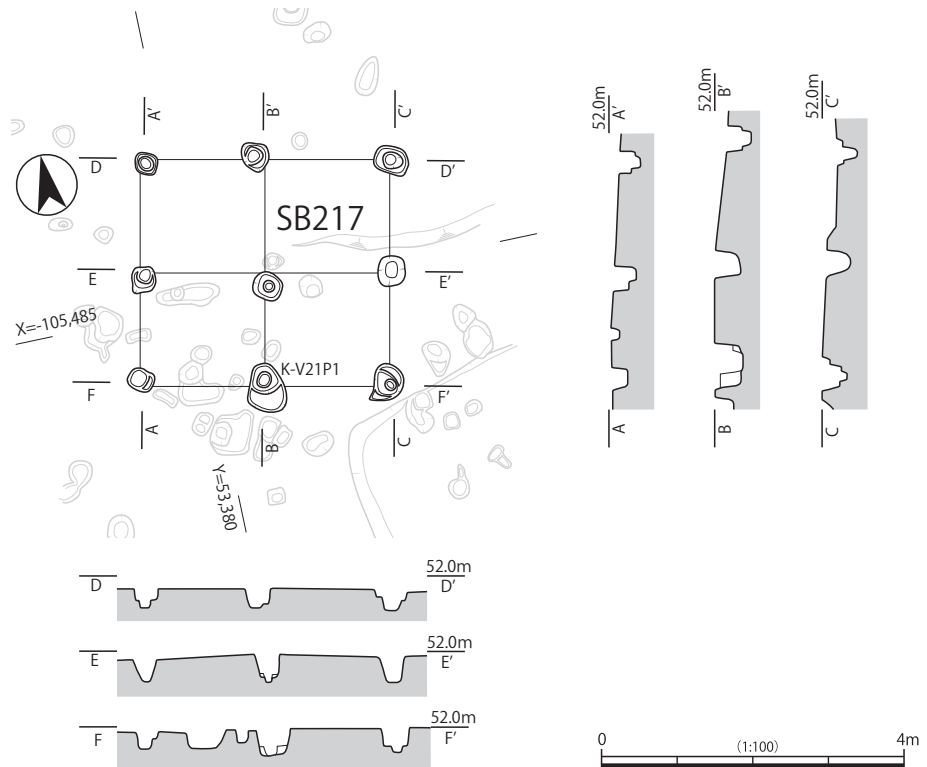
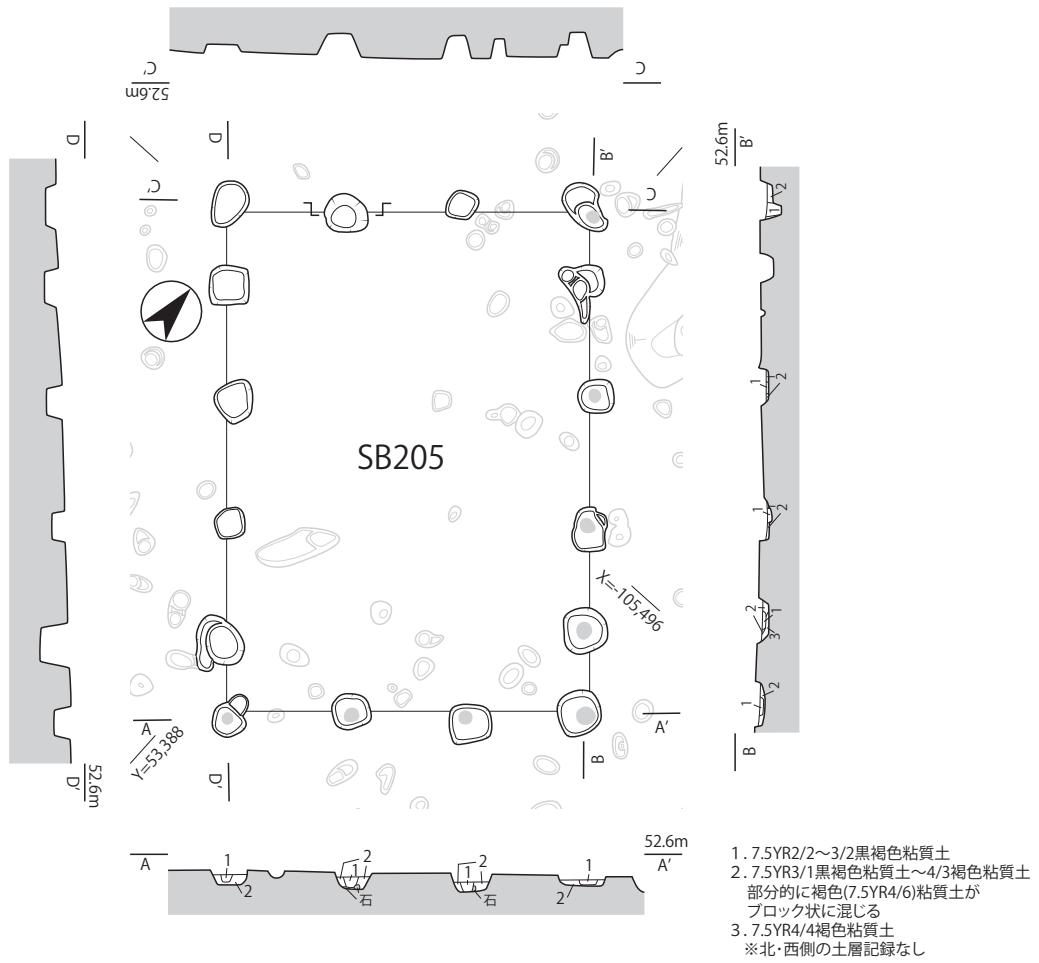
S B 224 (第78図) 南区西側で検出した桁行4間(7.8 m) × 梁行3間(5.7 m)の側柱建物である^⑪。柱間は、桁行の両端1間が1.8 m、中央の2間が2.1 m等間、梁行は北1間が2.1 m、南2間は1.8 mである。建物方位はN11° E。柱穴は径42～67cm、深さ18～28cm、出土遺物は無い。

このS B 224と方位を揃える建物が他に6棟あり(S B 217・219・220・224・226・231・1188)、これらの中でこのS B 224は最も規模が大きく、中心的な建物と考えられる。

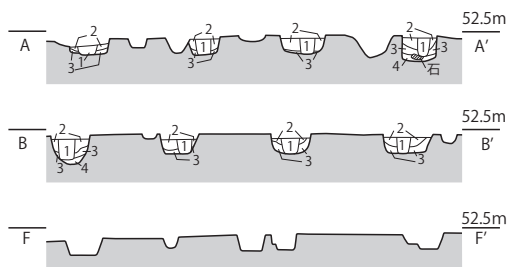
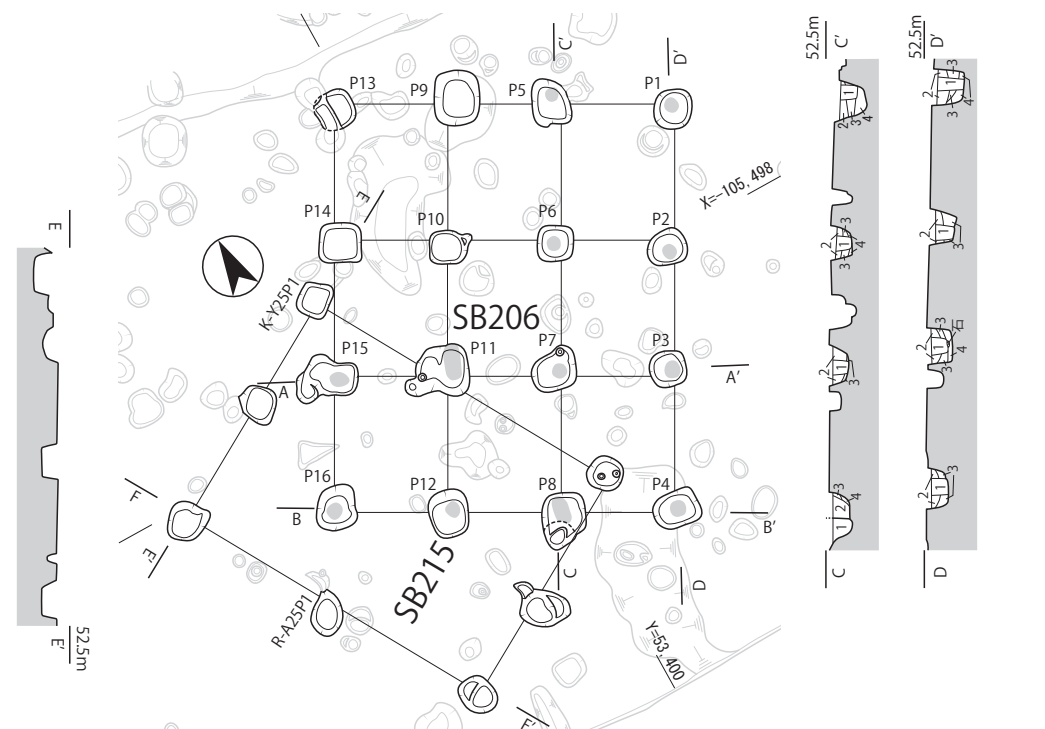
S B 226 (第79図) 南区西側で検出した桁行3間(3.9 m) × 梁行2間(3.0 m)の側柱建物である。柱間は、桁行の両端1間が1.2 m、中央の1間が1.5 m、梁行は1.5 m等間である。建物方位はN12° E。柱穴は径36～80cm、深さ7～32cm、出土遺物は無い。



第74図 SB202・204 平面・断面図 (1:100)

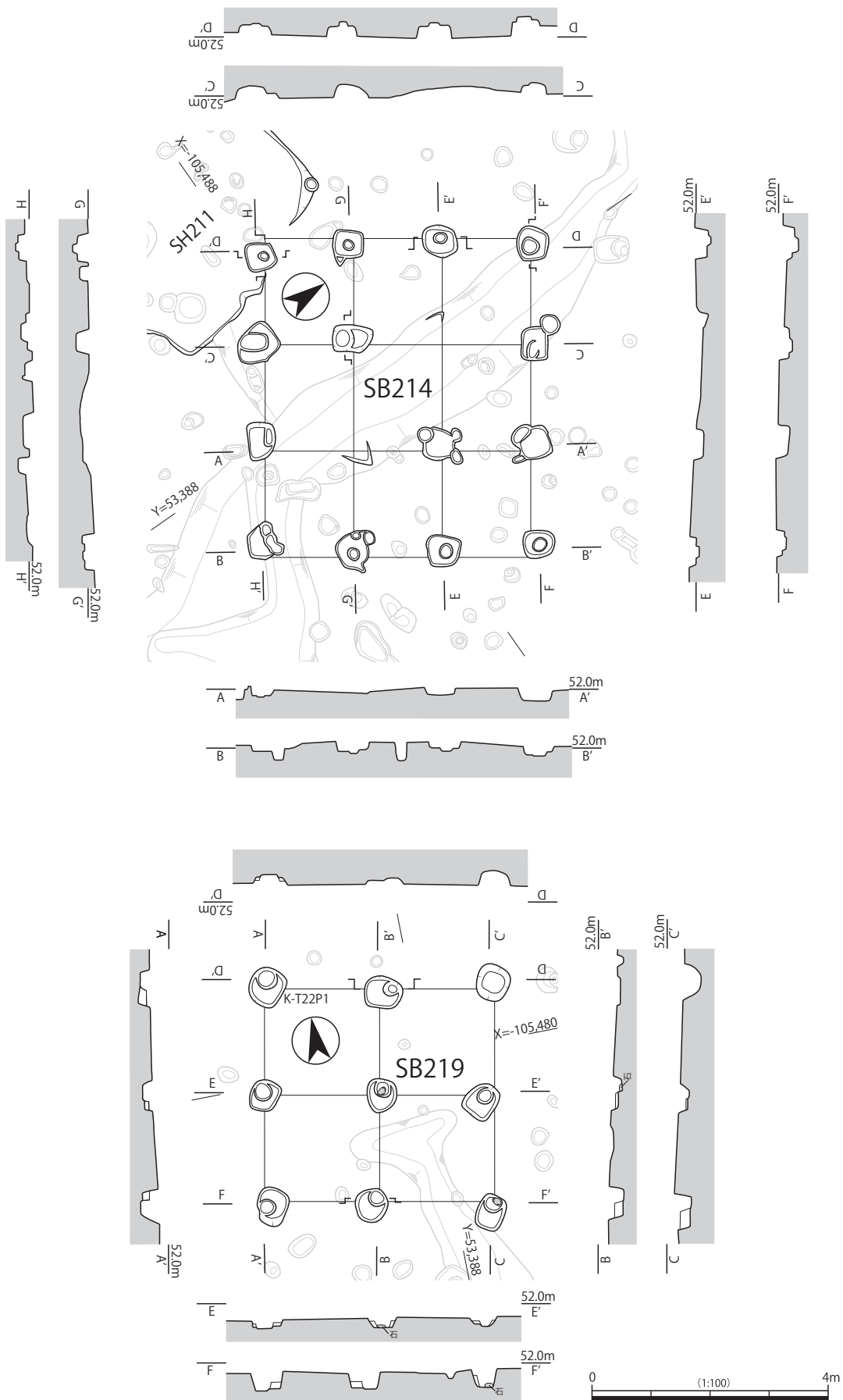


第75図 SB205・217 平面・断面図 (1:100)

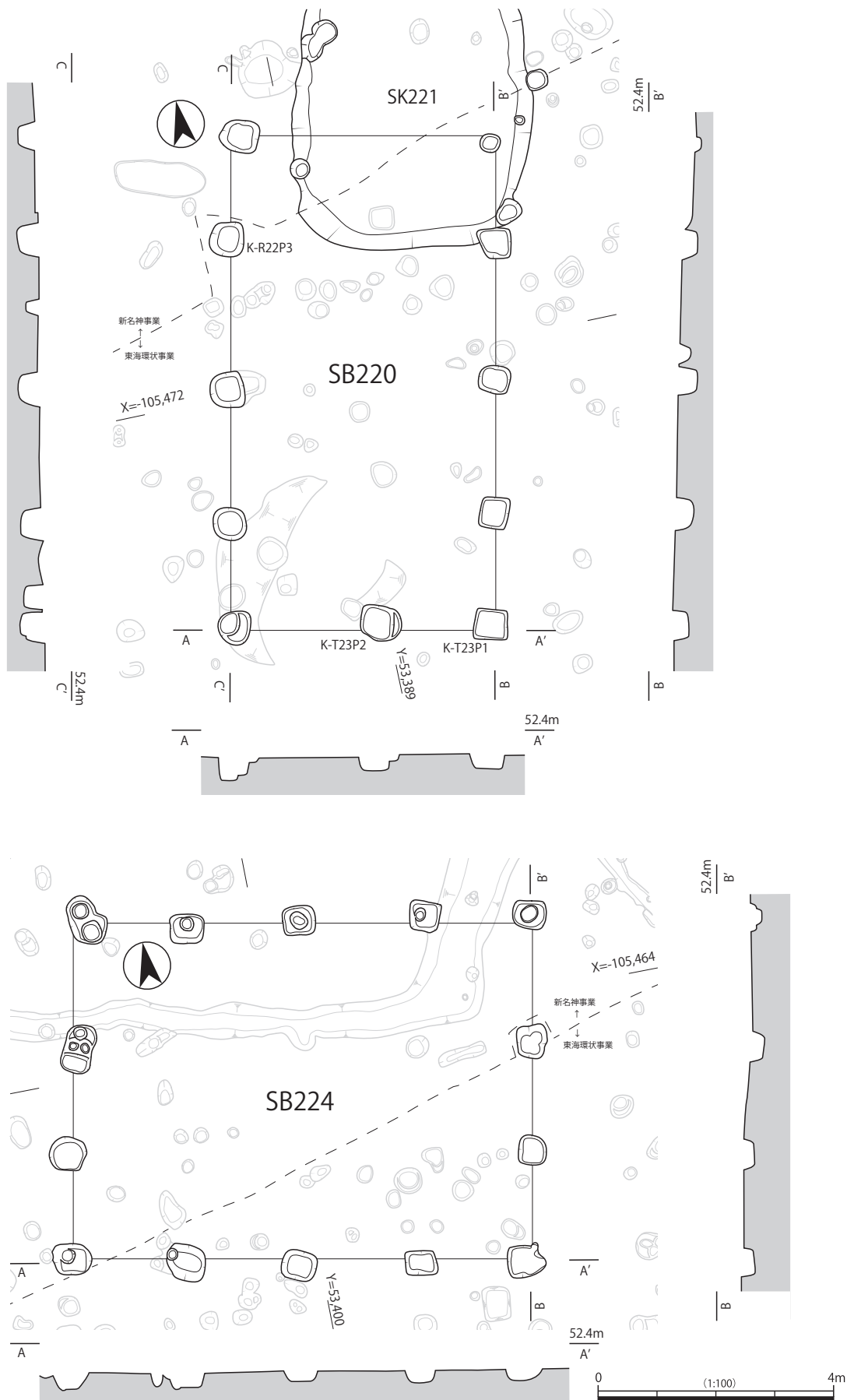


- | | | |
|---|--|---|
| <p>P 1</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 7.5YR2/2 黒褐色粘質土 2. 7.5YR5/8 明褐色粘質土に
7.5YR4/3 褐色粘質土が混じる 3. 7.5YR4/3 褐色粘質土に
7.5YR5/6 明褐色粘質土が混じる 4. 7.5YR4/4 褐色粘質土 <p>P 2</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 7.5YR2/2 黒褐色粘質土 2. 7.5YR3/2 黒褐色粘質土に
7.5YR5/6 明褐色粘質土が混じる 3. 7.5YR3/2 黒褐色粘質土に
7.5YR4/3 褐色粘質土が混じる <p>P 3 (L-Y1Pit2)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 7.5YR2/3 極暗褐色粘質土 2. 7.5YR4/3 褐色粘質土 3. 7.5YR3/2 黒褐色粘質土に
7.5YR5/6 明褐色粘質土が混じる 4. 7.5YR5/8 明褐色粘質土に
7.5YR5/4 にぶい褐色粘質土が混じる <p>P 4 (S-A1Pit2)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 7.5YR2/2 黒褐色粘質土 2. 7.5YR3/3 暗褐色粘質土に
7.5YR4/3 褐色粘質土が混じる 3. 7.5YR2/2 黒褐色粘質土に
7.5YR4/3 褐色粘質土が混じる | <p>P 5</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 7.5YR2/2 黒褐色粘質土 2. 7.5YR3/3 暗褐色粘質土に
7.5YR4/6 褐色粘質土が混じる 3. 7.5YR3/3 暗褐色粘質土に
7.5YR5/6 明褐色粘質土がブロック状に混じる 4. 7.5YR2/2 黒褐色粘質土に
7.5YR4/6 褐色粘質土が混じる <p>P 6 (L-Y1Pit1)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 7.5YR3/3 暗褐色粘質土 2. 7.5YR2/2 黒褐色粘質土に
7.5YR4/4 褐色粘質土が混じる 3. 7.5YR3/3 暗褐色粘質土に
7.5YR4/6 褐色粘質土がブロック状に混じる 4. 7.5YR5/6 明褐色粘質土に
7.5YR4/4 褐色粘質土が混じる <p>P 7</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 7.5YR3/3 暗褐色粘質土 2. 7.5YR3/4 暗褐色粘質土に
7.5YR4/4 褐色粘質土がブロック状に混じる 3. 7.5YR5/6 明褐色粘質土に
7.5YR4/3 褐色粘質土が混じる | <p>P 8</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 7.5YR3/2 黒褐色粘質土 (別遺構) 2. 7.5YR5/6 明褐色粘質土と
7.5YR4/2 灰褐色粘質土がまだらに混じる 3. 7.5YR4/3 褐色粘質土 4. 7.5YR3/3 暗褐色粘質土に
7.5YR4/4 褐色粘質土が混じる <p>P 11</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 7.5YR2/2 黒褐色粘質土に
7.5YR5/6 明褐色粘質土が混じる (抜き取り痕?) 2. 7.5YR2/2 黒褐色粘質土 3. 7.5YR3/4 暗褐色粘質土に
7.5YR4/6 褐色粘質土が混じる <p>P 12</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 7.5YR3/2 暗褐色粘質土 2. 7.5YR4/3 褐色粘質土に
7.5YR5/6 明褐色粘質土がブロック状に混じる 3. 7.5YR4/4 褐色粘質土に
7.5YR5/6 明褐色粘質土が混じる <p>P 15</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 7.5YR3/2 黒褐色粘質土 2. 7.5YR3/3 暗褐色粘質土に
7.5YR4/6 褐色粘質土が混じる 3. 7.5YR5/6 明褐色粘質土に
7.5YR4/3 褐色粘質土が混じる <p>P 16</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 7.5YR2/2 黒褐色粘質土 2. 7.5YR2/2 黒褐色粘質土に
7.5YR3/3 暗褐色粘質土がブロック状に混じる 3. 7.5YR3/3 暗褐色粘質土に
7.5YR4/4 褐色粘質土が混じる 4. 7.5YR3/3 暗褐色粘質土 |
|---|--|---|

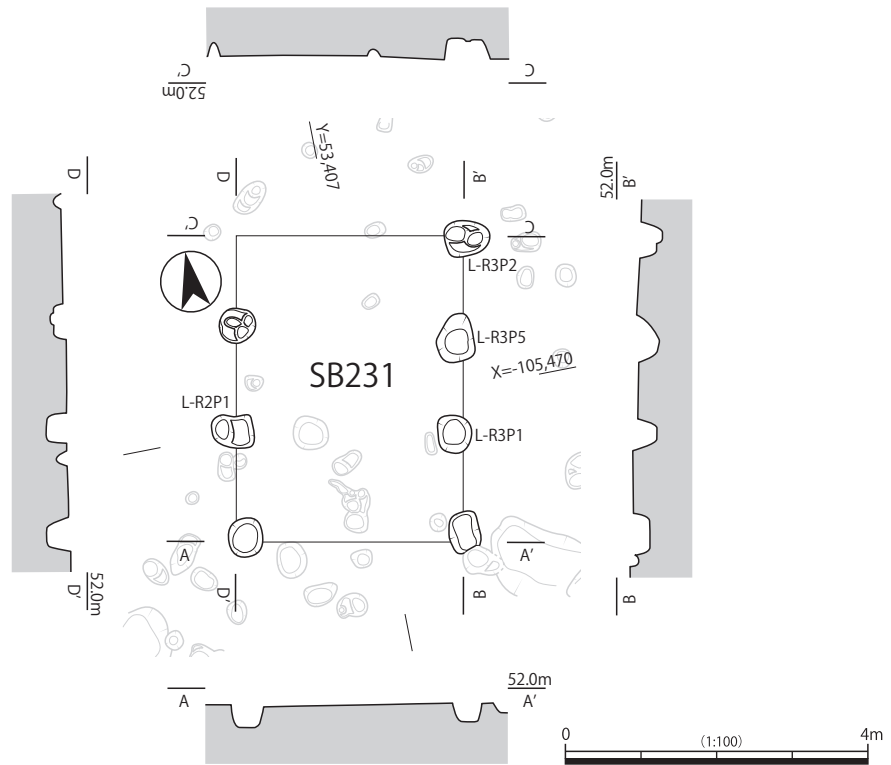
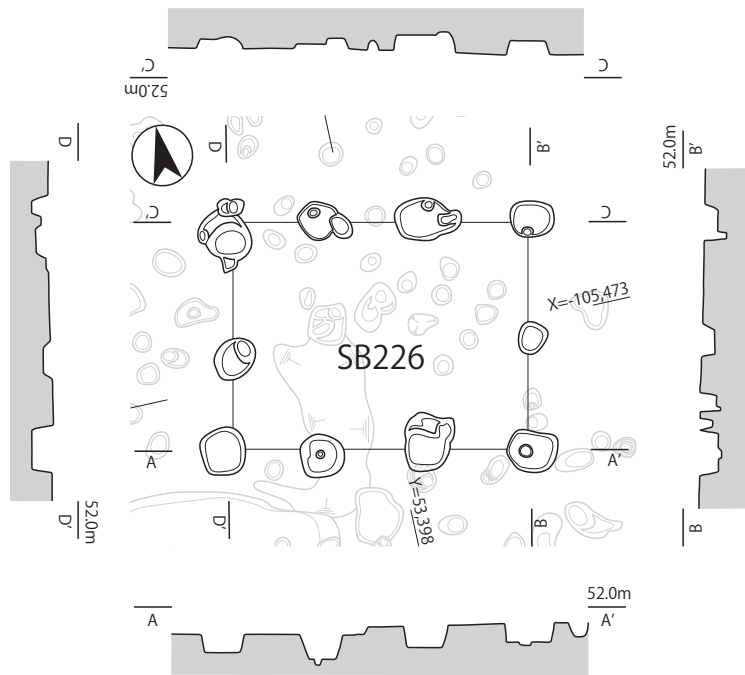
第76図 S B 206・215 平面・断面図 (1:100)



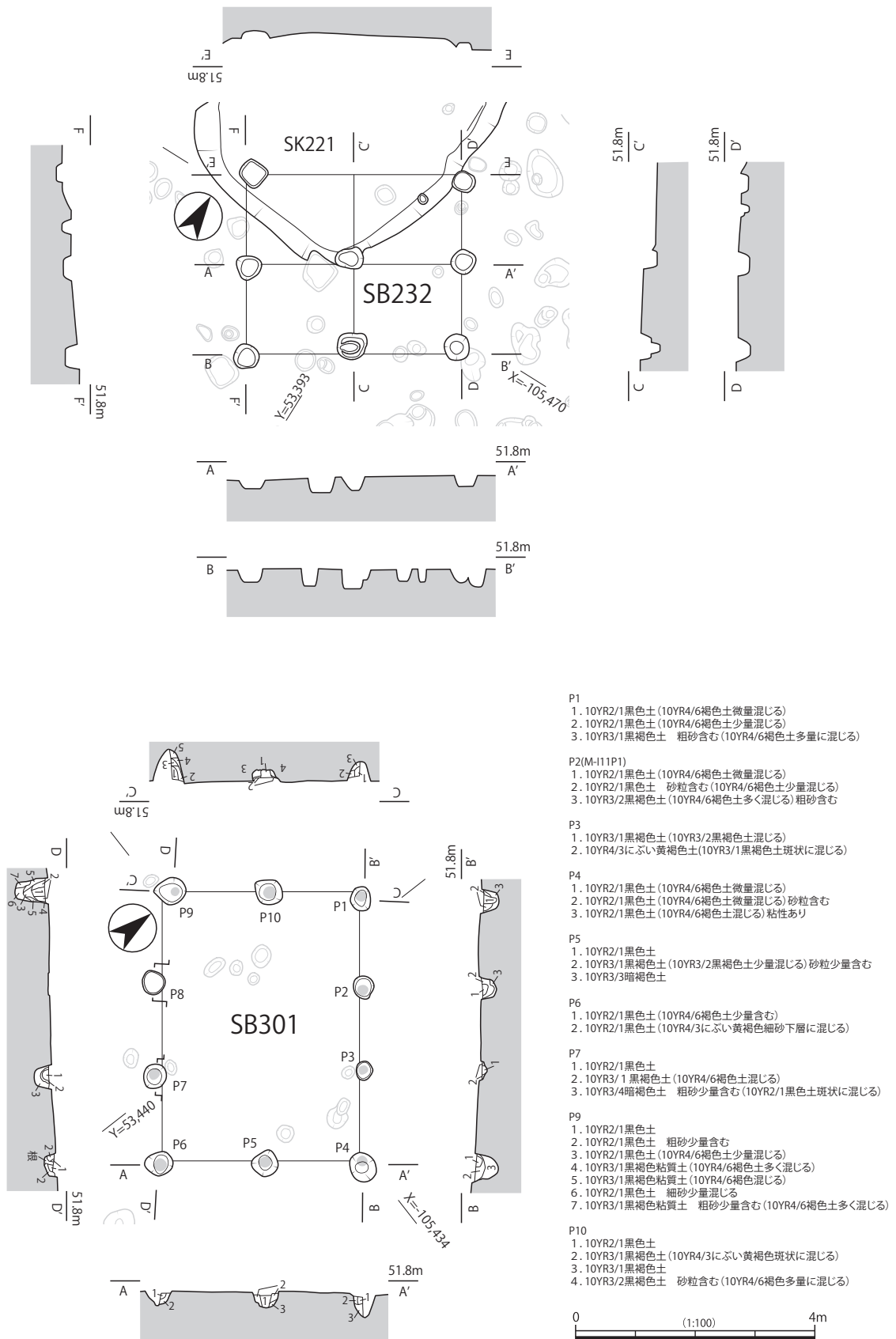
第77图 SB214·219 平面·断面图 (1:100)



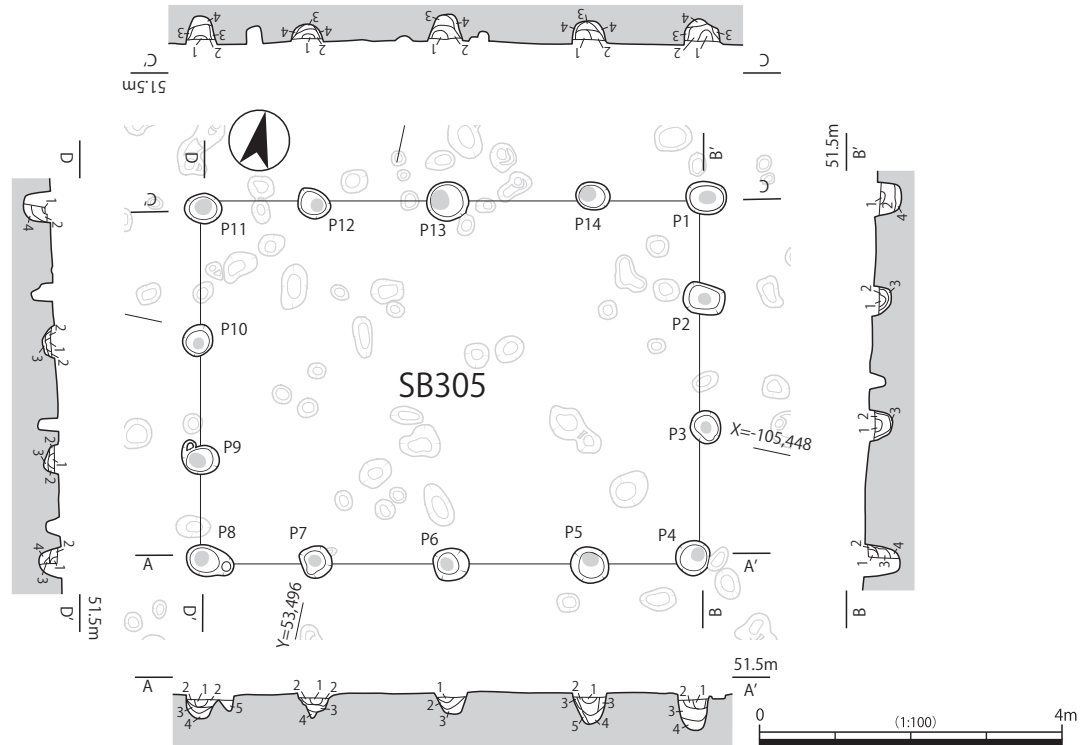
第78図 SB220・224 平面・断面図 (1:100)



第79图 SB226·231 平面·断面图 (1:100)



第80図 SB232・301 平面・断面図 (1:100)



- P1
1. 10YR2/1黒色土
 2. 10YR2/1黒色土(10YR4/6褐色土少量混じる)
 3. 10YR3/1黒褐色土 砂粒少量含む(10YR4/6褐色土斑状に混じる)
 4. 10YR2/1黒色土 細砂少量含む(10YR4/6褐色土少量混じる)

- P2(M-L1Pt2)
1. 10YR2/1黒色土
 2. 10YR2/1黒色土(10YR4/6褐色土少量混じる)
 3. 10YR3/1黒褐色土(10YR4/6褐色土多量に混じる)

- P3
1. 10YR2/1黒色土
 2. 10YR2/1黒褐色土 粗砂少量含む(10YR4/6褐色土少量混じる)
 3. 10YR3/1黒褐色土(10YR4/6褐色土斑状に多量混じる)

- P4
1. 10YR2/1黒色土
 2. 10YR2/1黒色土(10YR4/6褐色土少量混じる)
 3. 10YR2/1黒色土 細砂少量含む(10YR4/6褐色土斑状に少量混じる)
 4. 10YR3/1黒褐色土 粗砂混じる(10YR4/6褐色土多量に混じる)

- P5
1. 10YR2/1黒色土
 2. 10YR2/1黒色土 粗砂少量含む 粘性あり
 3. 10YR2/1黒色土(10YR4/6褐色土少量混じる)
 4. 10YR2/1黒色土 細砂含む(10YR4/3にぶい黄褐色土少量混じる)
 5. 10YR3/1黒褐色土 砂粒少量含む(10YR4/6褐色土斑状に混じる)

- P6
1. 10YR2/1黒色土
 2. 10YR2/1黒色土 細砂少量含む
 3. 10YR2/1黒色土 細砂少量含む(10YR4/6褐色土少量混じる)

- P7
1. 10YR2/1黒色土(10YR4/3にぶい黄褐色土少量混じる)
 2. 10YR2/1黒色土(10YR4/6褐色土少量混じる)
 3. 10YR3/1黒褐色土 粗砂少量含む(10YR4/6褐色土少量混じる)
 4. 10YR3/2黒褐色土 細砂少量含む(10YR4/6褐色土混じる)粘性あり

- P8
1. 10YR2/1黒色土
 2. 10YR2/1黒色土 砂粒少量混じる
 3. 10YR3/1黒褐色土 粗砂少量混じる 粘性あり
 4. 10YR2/1黒色土(10YR4/6褐色土混じる)細砂含む
 5. 10YR2/1黒色土

- P9
1. 10YR2/1黒色土
 2. 10YR2/1黒色土 粗砂混じる(10YR4/6褐色土少量混じる)
 3. 10YR2/1黒色土 粗砂少量含む(10YR4/6褐色土多量に混じる)

- P10
1. 10YR2/2黒褐色土(10YR4/6褐色粗砂斑に混じる)
 2. 10YR2/1黒色土 粗砂含む(10YR4/6褐色土少量混じる)
 3. 10YR4/3にぶい黄褐色土 粗砂含む

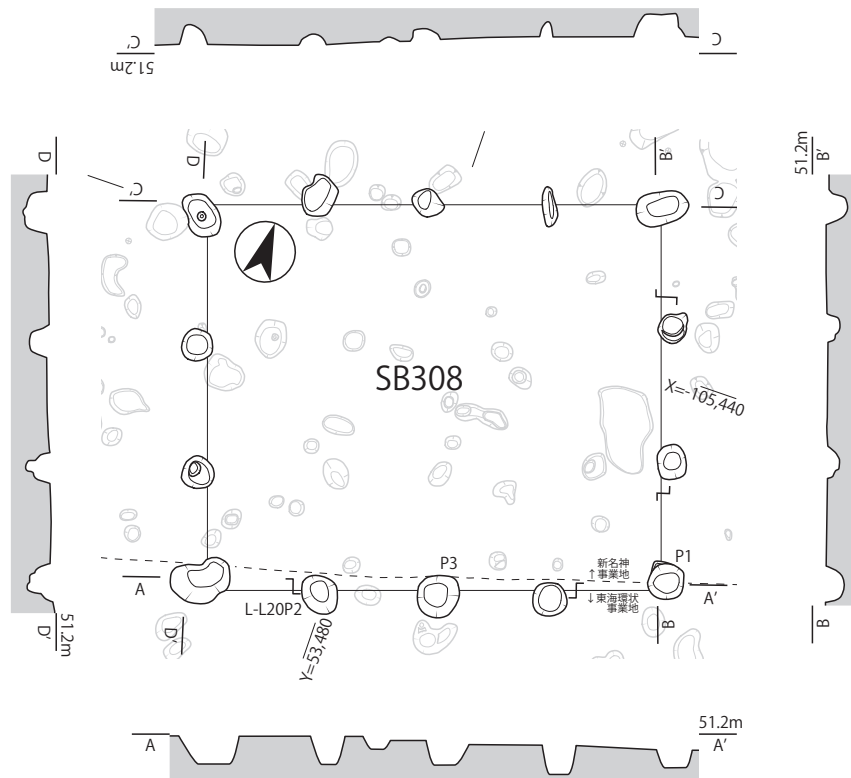
- P11
1. 10YR2/1黒色土
 2. 10YR2/1黒色土 粘性あり
 3. 10YR2/1黒色土(10YR4/6褐色土少量混じる)
 4. 10YR2/1黒色土(10YR4/6褐色土混じる)粘性あり

- P12
1. 10YR2/1黒色土
 2. 10YR2/1黒色土(10YR4/3にぶい黄褐色土少量混じる)
 3. 10YR3/1黒褐色粘質土(10YR4/6褐色土少量混じる)
 4. 10YR2/1黒色土 細砂含む 粘性あり(10YR4/6褐色土多量に混じる)

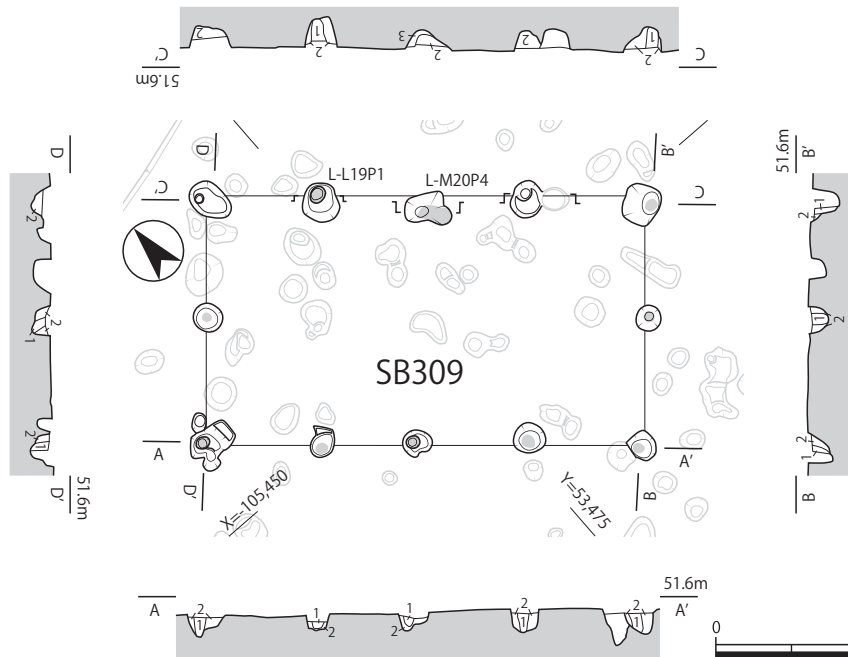
- P13
1. 10YR2/1黒色土
 2. 10YR2/1黒色土(10YR4/6褐色土斑状に混じる)細砂少量含む
 3. 10YR2/1黒色土 粘性あり(10YR4/6褐色土少量混じる)
 4. 10YR2/1黒色土 細砂含む(10YR4/3にぶい黄褐色土多量に混じる)

- P14
1. 10YR2/1黒色土
 2. 10YR2/1黒色土 細砂少量含む
 3. 10YR2/1黒色土(10YR4/3にぶい黄褐色土少量混じる)細砂少量含む
 4. 10YR2/1黒色土(10YR4/3にぶい黄褐色土斑状に混じる)

第81図 SB305 平面・断面図 (1:100)

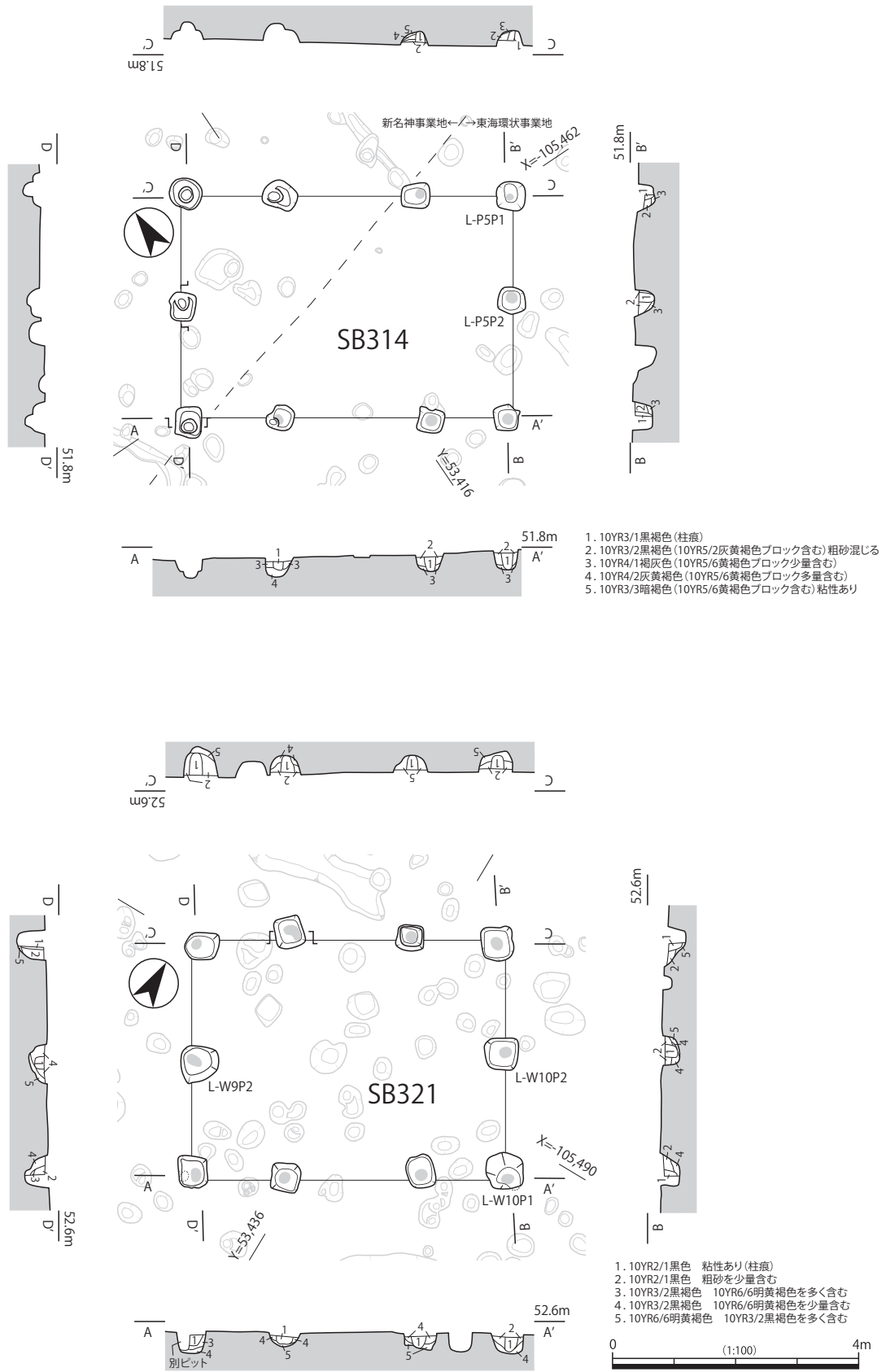


SB308

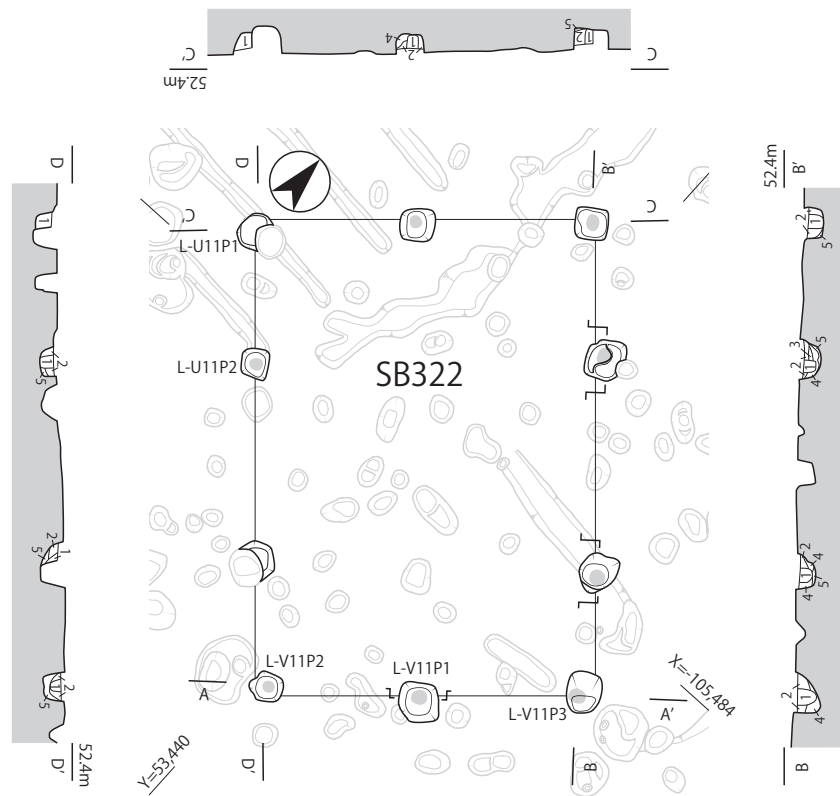


1. 10YR2/1黒色(10YR4/6褐色混じるものあり)粘性あり(柱痕)
2. 10YR2/1~3/1黒~黒褐色(10YR4/6褐色ブロック状に混じる)砂粒少量含む
3. 10YR3/4暗褐色 粗砂混じる

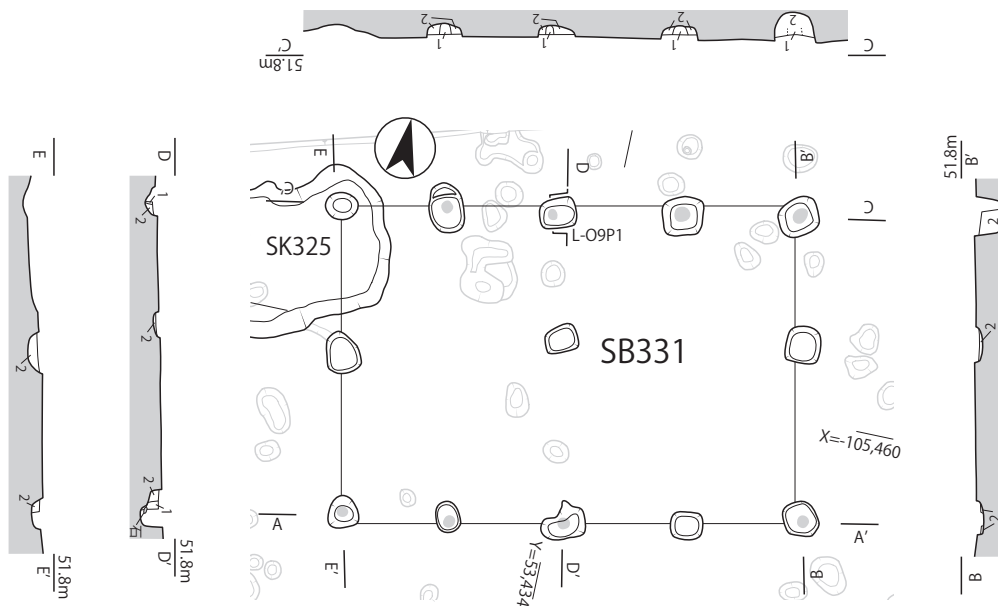
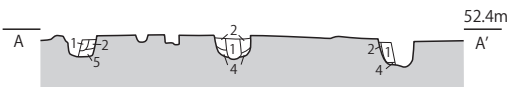
第82図 SB308・309 平面・断面図 (1:100)



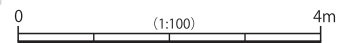
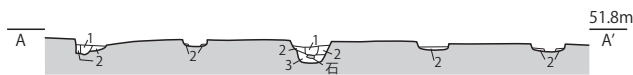
第83図 SB314・321 平面・断面図 (1:100)



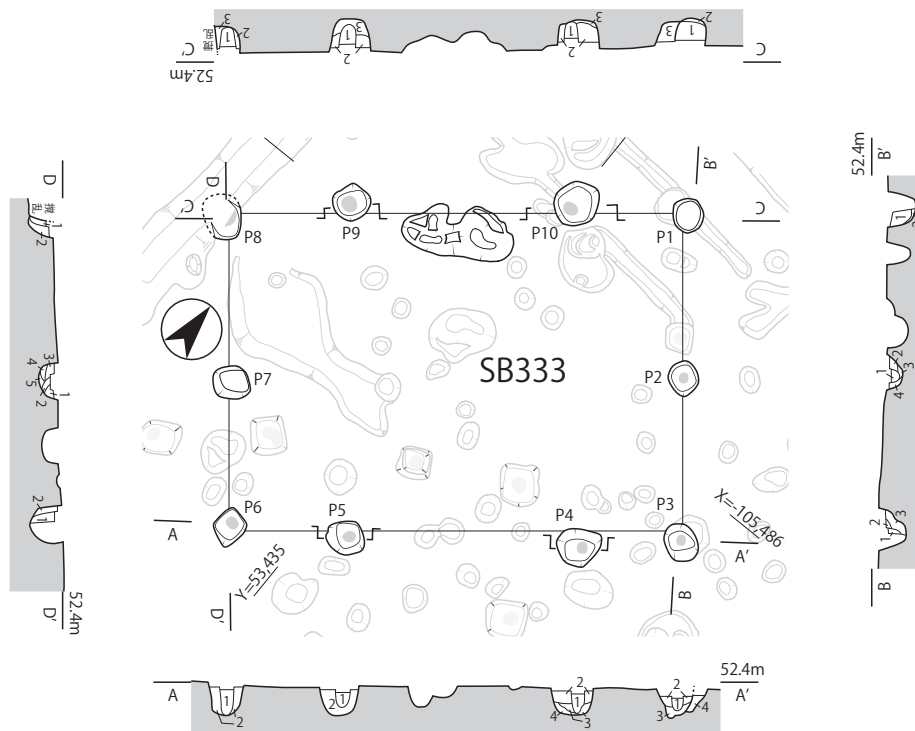
1. 10YR2/1黒色(10YR4/6褐色微量混じる)粘性あり(柱痕)
2. 10YR3/1~3/2黒褐色(10YR5/6黄褐色斑状に混じる)
3. 10YR4/4褐色(10YR3/2黒褐色多く混じる)粗砂含む
4. 10YR3/1黒褐色(10YR4/6褐色混じる)
5. 10YR2/2~3/3黒褐色~暗褐色(10YR4/6褐色多く混じる)



1. 10YR3/1黒褐色(10YR5/6黄褐色微量含む)
2. 10YR2/2黒褐色(10YR5/6黄褐色ブロック含む)
3. 10YR3/2黒褐色(10YR5/6黄褐色ブロック含む)

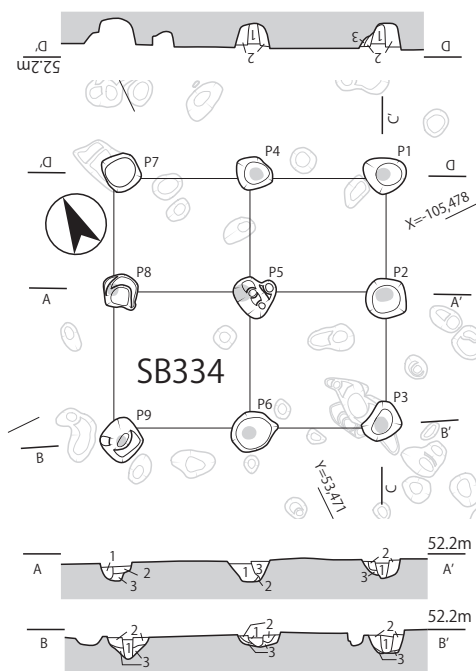


第84図 SB322・331 平面・断面図 (1:100)

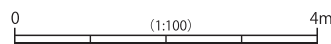


- P1
 1. 10YR3/1黒褐色 10YR6/6明黄褐色地山を少量含む、炭化物を微量に含む
 2. 10YR3/2黒褐色 (10YR4/6褐色少量含む) 粘性あり
 3. 10YR2/1黒色 10YR6/6明黄褐色地山を微量に含む (SB322柱穴)
 P2(L-V10Pit3)
 1. 10YR2/1黒色 (柱痕)
 2. 10YR3/1黒褐色 10YR6/6明黄褐色地山を少量含む
 3. 10YR2/2黒褐色 10YR6/6明黄褐色地山を少量含む
 4. 10YR6/6明黄褐色 10YR2/2黒褐色を少量含む
 P3(L-V10Pit1)
 1. 10YR2/1黒色 焼土粒を微量に含む (柱痕)
 2. 10YR3/1黒褐色 焼土粒・炭化物を少量含む
 3. 10YR2/2黒褐色 焼土粒と10YR6/6明黄褐色 (地山) を少量含む
 4. 10YR2/3黒褐色 10YR6/6明黄褐色地山を少量含む (SB322柱穴)
 P4(L-V10Pit2)
 1. 10YR2/2黒褐色 焼土粒を微量に含む (柱痕)
 2. 10YR3/2黒褐色 焼土粒と白色粒子を微量に含む
 3. 10YR3/1黒褐色 10YR6/6明黄褐色地山を少量含む
 4. 10YR3/1黒褐色 10YR6/6明黄褐色地山を多く含む
 P5(L-W9Pit1)
 1. 10YR2/1黒色 10YR6/6明黄褐色粒子を微量に含む やや粘性あり (柱痕)
 2. 10YR3/1黒褐色 10YR6/6明黄褐色地山を微量に含む

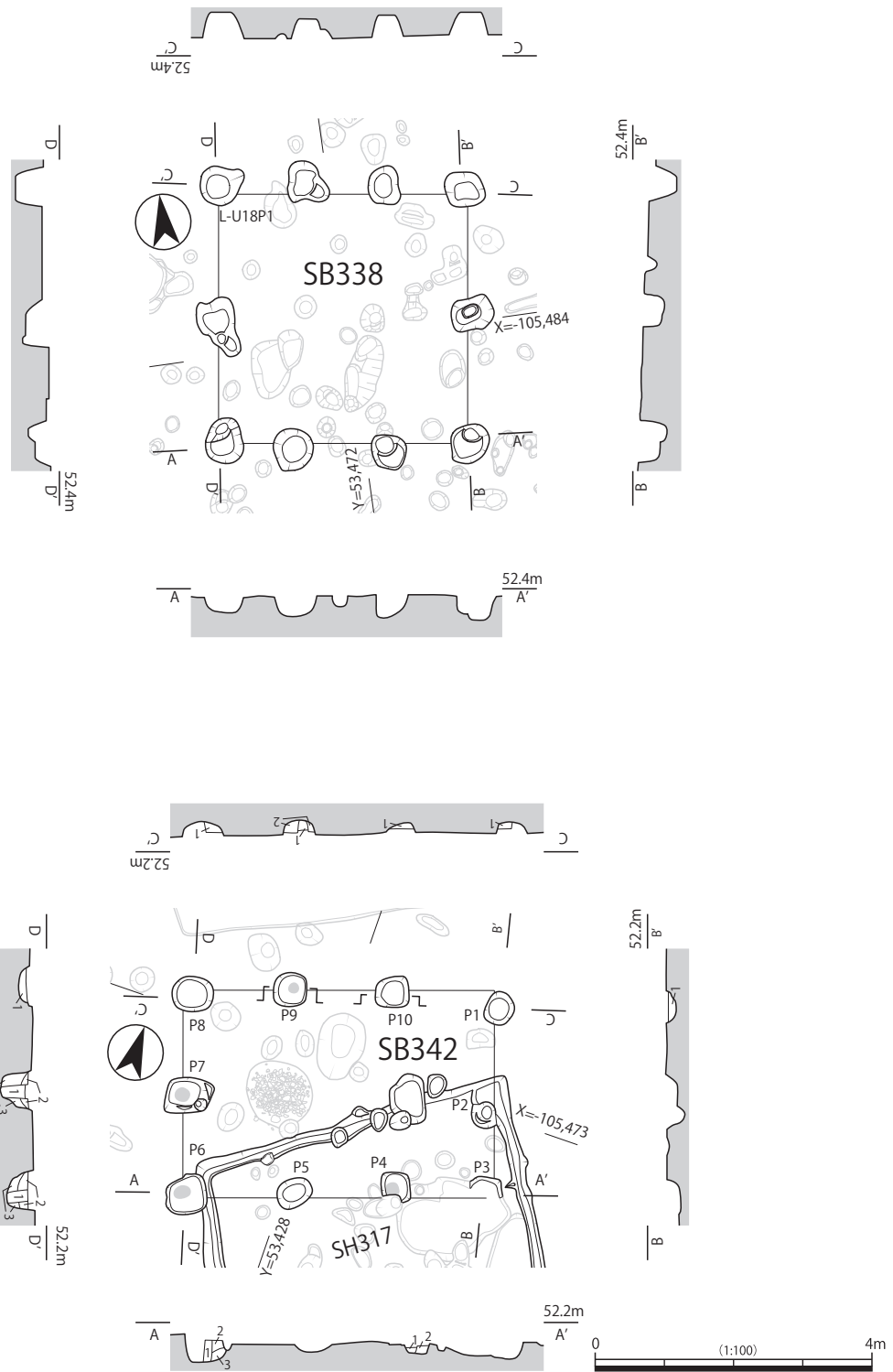
- P6
 1. 10YR2/1黒色 10YR6/6明黄褐色粒子と焼土粒を微量に含む (柱痕)
 2. 10YR3/1黒褐色 10YR6/6明黄褐色地山を少量含む
 P7
 1. 10YR3/1黒褐色 10YR6/6明黄褐色地山を少量含む
 2. 10YR6/6明黄褐色 10YR3/1黒褐色を少量含む
 3. 10YR3/1黒褐色 10YR6/6明黄褐色地山を微量に含む
 4. 10YR2/2黒褐色 10YR6/6明黄褐色地山を少量含む
 5. 10YR2/3黒褐色 10YR6/6明黄褐色地山を少量含む
 P8
 1. 10YR2/1黒色 10YR6/6明黄褐色ブロック状に少量混じる 炭化物微量含む (柱痕)
 2. 10YR6/6明黄褐色と10YR4/3灰黄褐色が混じる
 3. 10YR3/2黒褐色 10YR3/1黒褐色と10YR6/6明黄褐色を少量含む
 P9(L-V9Pit2)
 1. 10YR2/1黒色 10YR6/6明黄褐色地山をブロック状に少量含む、炭化物を微量に含む (柱痕)
 2. 10YR3/1黒褐色 10YR6/6明黄褐色地山を少量含む
 3. 10YR3/1黒褐色と10YR6/6明黄褐色ブロックと同程度混在した層
 P10(L-V9Pit1)
 1. 10YR2/1黒色 白色粒子を微量に含む (柱痕)
 2. 10YR3/1黒褐色 10YR6/6明黄褐色地山と焼土粒を微量に含む
 3. 10YR6/6明黄褐色 10YR3/1黒褐色を多量に含む



- P1(L-T19Pit1)
 1. 10YR2/1黒色 (10YR3/3暗褐色斑状に少量混じる) 粗砂含む 粘性あり (柱痕)
 2. 10YR3/1黒褐色 (10YR3/3暗褐色斑状に混じる) 粗砂含む 炭化物含む
 3. 10YR2/3黒褐色 粗砂含む
 P2
 1. 10YR2/1黒色 (10YR4/6褐色微量混じる) 細砂含む (柱痕)
 2. 10YR3/2黒褐色 (10YR4/6褐色少量混じる) 径2mm位の石含む
 3. 10YR3/2黒褐色 (10YR4/6褐色多く混じる) 粗砂含む
 P3
 1. 10YR2/1黒色 (10YR3/4暗褐色微量混じる) 粗砂含む (柱痕)
 2. 10YR3/1黒褐色 (10YR4/6褐色少量混じる) 径10mm位の石含む
 3. 10YR3/1黒褐色 (10YR4/6褐色混じる) 粘性あり
 P4
 1. 10YR2/1黒色 粘性あり (柱痕)
 2. 10YR3/1黒褐色 (10YR4/6褐色少量混じる) 径10mm位の礫と粗砂含む
 P5
 1. 10YR3/1黒褐色 (10YR4/6褐色ブロック状に多く混じる) 粗砂含む (柱抜取穴)
 2. 10YR3/2黒褐色 (10YR4/6褐色混じる) 細砂含む
 3. 10YR3/1黒褐色 (10YR3/4暗褐色斑状に少量混じる) 粗砂含む
 P6(L-T18Pit1)
 1. 10YR2/1黒色 (柱痕)
 2. 10YR2/1黒色 (10YR4/6褐色少量混じる)
 3. 10YR3/1黒褐色 (10YR4/6褐色下部に多く混じる) 粗砂含む
 P8
 1. 10YR2/1黒色 (10YR4/6褐色混じる) (柱痕)
 2. 10YR3/1黒褐色 (10YR2/2黒褐色少量混じる) 粗砂含む
 3. 10YR3/4暗褐色 (10YR3/1黒褐色微量混じる) 細砂含む
 P9
 1. 10YR2/1黒色 (2.5YR4/6赤褐色; 焼土; つぶ微量混じる) (10YR4/6褐色つぶ微量混じる)
 2. 10YR3/1黒褐色 (10YR4/6褐色微量混じる) 径5mm~1mm位の石含む



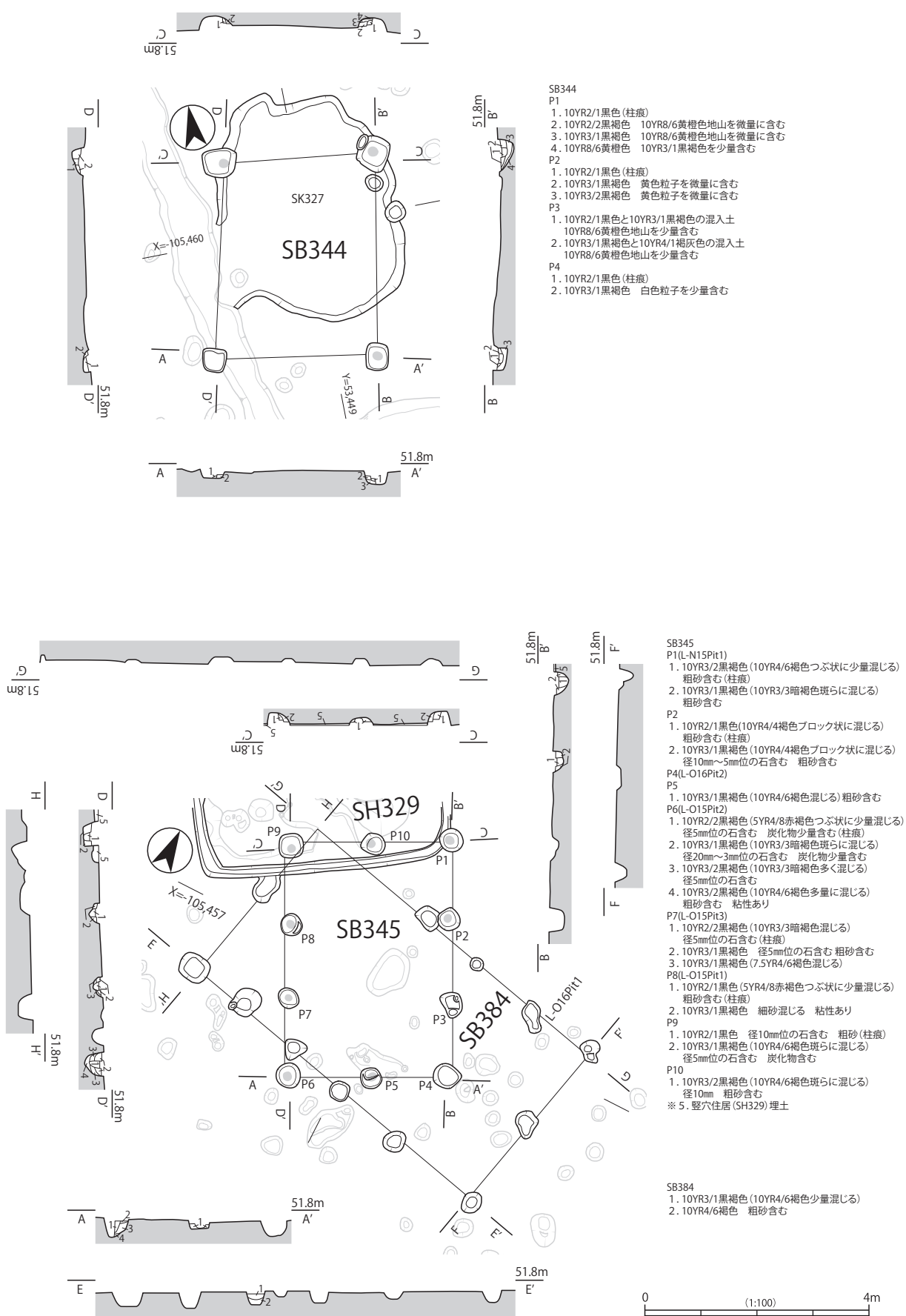
第85図 SB333・334 平面・断面図 (1:100)



- P1
 1. 10YR3/2黒褐色 (10YR5/6黄褐色ブロック含む)
 P4
 1. 10YR3/1黒褐色 (10YR5/6黄褐色ブロック少量含む)
 2. 10YR3/2黒褐色 (10YR5/6黄褐色ブロック多量含む)
 P6(L-S7Pit3)
 1. 10YR2/2黒褐色 (10YR5/6黄褐色ブロック微量含む)
 2. 10YR4/1褐灰色 (10YR5/6黄褐色ブロック少量含む)
 3. 10YR3/2黒褐色 (10YR5/6黄褐色ブロック含む)

- P7(L-S7Pit1)
 1. 10YR3/1黒褐色 (10YR5/6黄褐色ブロック微量含む)
 2. 10YR4/1褐灰色 (10YR5/6黄褐色ブロック少量含む)
 3. 10YR3/2黒褐色 (10YR5/6黄褐色ブロック含む)
 P8
 1. 10YR3/2黒褐色 (10YR5/6黄褐色ブロック含む)
 P9
 1. 10YR3/1黒褐色 (10YR5/6黄褐色小ブロック微量含む)
 2. 10YR3/2黒褐色 (10YR5/6黄褐色ブロック含む)
 P10
 1. 10YR3/2黒褐色 (10YR5/6黄褐色ブロック含む)

第86図 S B 338・342 平面・断面図 (1:100)

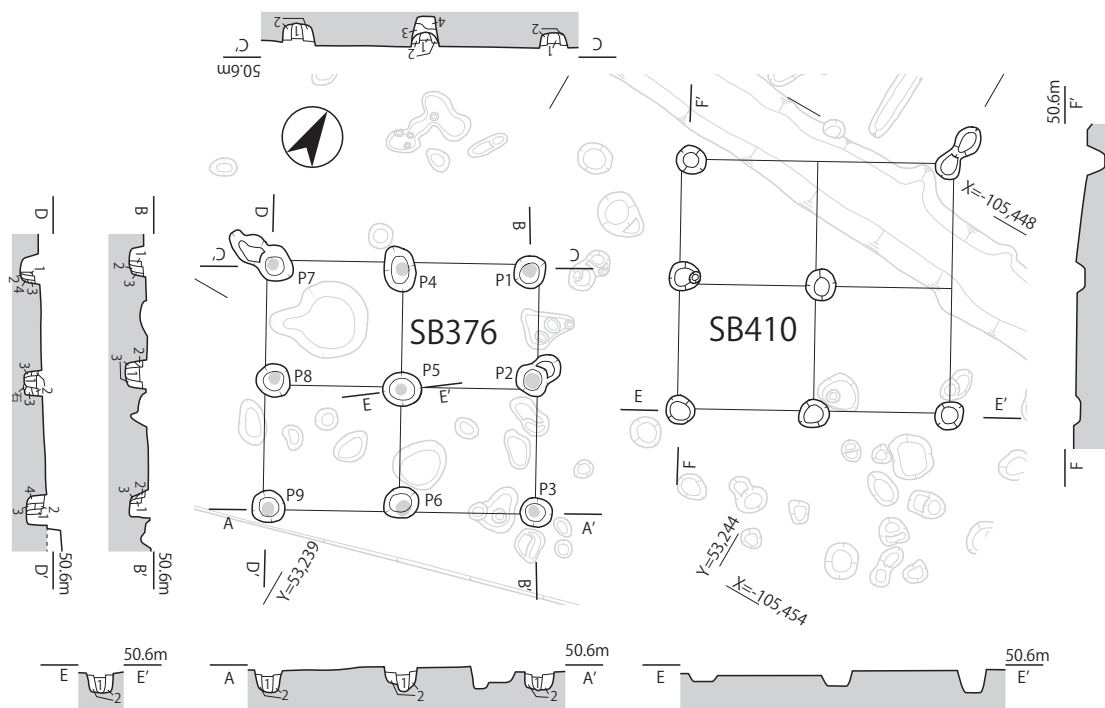


- SB344
- P1
- 10YR2/1黒色 (柱痕)
 - 10YR2/2黒褐色 10YR8/6黄褐色地山を微量に含む
 - 10YR3/1黒褐色 10YR8/6黄褐色地山を微量に含む
 - 10YR8/6黄褐色 10YR3/1黒褐色を少量含む
- P2
- 10YR2/1黒色 (柱痕)
 - 10YR3/1黒褐色 黄色粒子を微量に含む
 - 10YR3/2黒褐色 黄色粒子を微量に含む
- P3
- 10YR2/1黒色と10YR3/1黒褐色の混入土 10YR8/6黄褐色地山を少量含む
 - 10YR3/1黒褐色と10YR4/1褐灰色の混入土 10YR8/6黄褐色地山を少量含む
- P4
- 10YR2/1黒色 (柱痕)
 - 10YR3/1黒褐色 白色粒子を少量含む

- SB345
- P1(L-N15Pit1)
- 10YR3/2黒褐色 (10YR4/6褐色つぶ状に少量混じる) 粗砂含む (柱痕)
 - 10YR3/1黒褐色 (10YR3/3暗褐色斑らに混じる) 粗砂含む
- P2
- 10YR2/1黒色 (10YR4/4褐色ブロック状に混じる) 粗砂含む (柱痕)
 - 10YR3/1黒褐色 (10YR4/4褐色ブロック状に混じる) 径10mm~5mm位の石含む 粗砂含む
- P4(L-O16Pit2)
- P5
- 10YR3/1黒褐色 (10YR4/6褐色混じる) 粗砂含む
- P6(L-O15Pit2)
- 10YR2/2黒褐色 (5YR4/8赤褐色つぶ状に少量混じる) 径5mm位の石含む 炭化物少量含む (柱痕)
 - 10YR3/1黒褐色 (10YR3/3暗褐色斑らに混じる) 径20mm~3mm位の石含む 炭化物少量含む
 - 10YR3/2黒褐色 (10YR3/3暗褐色多く混じる) 径5mm位の石含む
 - 10YR3/2黒褐色 (10YR4/6褐色多量に混じる) 粗砂含む 粘性あり
- P7(L-O15Pit3)
- 10YR2/2黒褐色 (10YR3/3暗褐色混じる) 径5mm位の石含む (柱痕)
 - 10YR3/1黒褐色 径5mm位の石含む 粗砂含む
 - 10YR3/1黒褐色 (7.5YR4/6褐色混じる)
- P8(L-O15Pit1)
- 10YR2/1黒色 (5YR4/8赤褐色つぶ状に少量混じる) 粗砂含む (柱痕)
 - 10YR3/1黒褐色 細砂混じる 粘性あり
- P9
- 10YR2/1黒色 径10mm位の石含む 粗砂 (柱痕)
 - 10YR3/1黒褐色 (10YR4/6褐色斑らに混じる) 径5mm位の石含む 炭化物含む
- P10
- 10YR3/2黒褐色 (10YR4/6褐色斑らに混じる) 径10mm 粗砂含む
- ※ 5. 竪穴住居 (SH329) 埋土

- SB384
- 10YR3/1黒褐色 (10YR4/6褐色少量混じる)
 - 10YR4/6褐色 粗砂含む

第87図 SB344・345・384 平面・断面図 (1:100)



P1

1. 10YR3/2黒褐色粘質土
2. 10YR4/2灰黄褐色粘質土に
10YR6/6明黄褐色粘質ブロック多く含む
3. 10YR4/3にふい黄褐色粘質土に
10YR6/6明黄褐色粘質ブロック含む

P2(J-N11Pt4)

1. 10YR3/2黒褐色粘質土
2. 10YR4/1褐灰色粘質土
3. 10YR4/2灰黄褐色粘質土に
10YR6/6明黄褐色粘質ブロック含む

P3(J-N11Pt1)

1. 10YR3/2黒褐色粘質土
2. 10YR4/2灰黄褐色粘質土に
10YR6/6明黄褐色粘質ブロック含む
3. 10YR5/3にふい黄褐色粘質土

P4(J-N10Pt4)

1. 10YR3/2黒褐色粘質土
2. 10YR5/2灰黄褐色粘質土に
10YR6/4にふい黄褐色粘質ブロック含む
3. 10YR5/3にふい黄褐色粘質土
4. 10YR3/2黒褐色粘質土に炭化物多く含む

P5

1. 10YR3/2黒褐色粘質土
2. 10YR4/2灰黄褐色粘質土に
10YR6/6明黄褐色粘質ブロック含む

P6(J-N10Pt6)

1. 10YR3/2黒褐色粘質土
2. 10YR4/2灰黄褐色粘質土に
10YR6/6明黄褐色粘質ブロック含む

P7

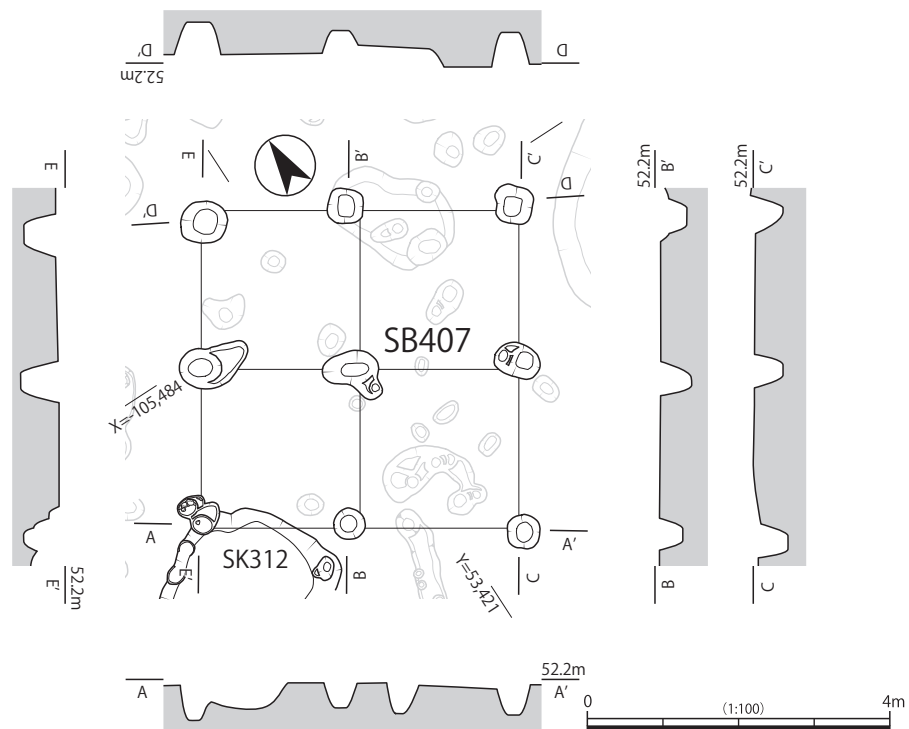
1. 10YR3/2黒褐色粘質土
2. 10YR4/2灰黄褐色粘質土に
10YR6/6明黄褐色粘質ブロック含む
3. 10YR3/1黒褐色粘質土に
10YR6/6明黄褐色粘質ブロック含む
4. 10YR4/3にふい黄褐色粘質土に
10YR6/6明黄褐色粘質ブロック含む

P8

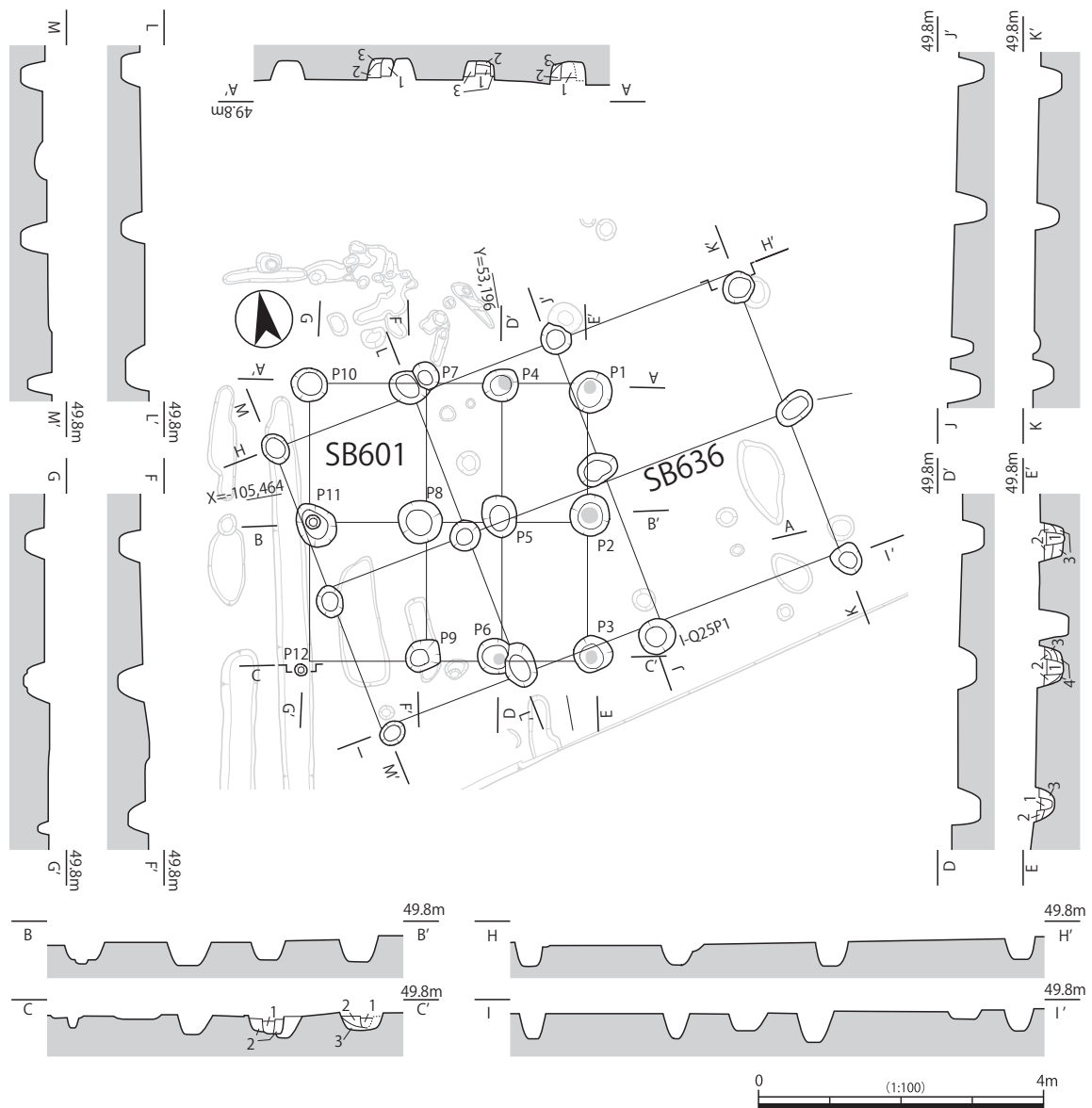
1. 10YR6/4にふい黄褐色粘質土に
10YR4/2灰黄褐色粘質土まだらに入る
2. 10YR4/1褐灰色粘質土
3. 10YR4/1褐灰色粘質土に
10YR6/6明黄褐色粘質ブロック含む

P9

1. 10YR3/2黒褐色粘質土
2. 10YR4/2灰黄褐色粘質土に
10YR6/6明黄褐色粘質ブロック含む
3. 10YR4/1褐灰色粘質土に
10YR6/6明黄褐色粘質ブロック含む
4. 10YR4/3にふい黄褐色粘質土



第88図 SB376・407・410 平面・断面図 (1:100)



P1

1. 10YR3/1 黒褐色粘質土
2. 10YR3/1 黒褐色粘質土に 10YR6/6 明黄褐色粘質土がブロック状に混じる
3. 10YR6/6 明黄褐色粘質土

P2

1. 10YR3/1 黒褐色粘質土
2. 10YR4/1 褐灰色粘質土に 10YR6/6 明黄褐色粘質土がブロック状に少量混じる
3. 10YR3/1 黒褐色粘質土に径 5mmの礫および 10YR6/6 明黄褐色粘質土がブロック状に混じる
4. 10YR6/6 明黄褐色粘質土

P3

1. 10YR3/1 黒褐色粘質土に径 5mmの礫および 10YR6/6 明黄褐色粘質土がブロック状に混じる
2. 10YR6/6 明黄褐色粘質土
3. 10YR4/1 褐灰色粘質土に 10YR6/6 粘質土がブロック状に少量混じる

P4

1. 10YR3/1 黒褐色粘質土
2. 10YR3/1 黒褐色粘質土に 10YR6/6 明黄褐色粘質土がブロック状に混じる
3. 10YR6/6 明黄褐色粘質土

P6

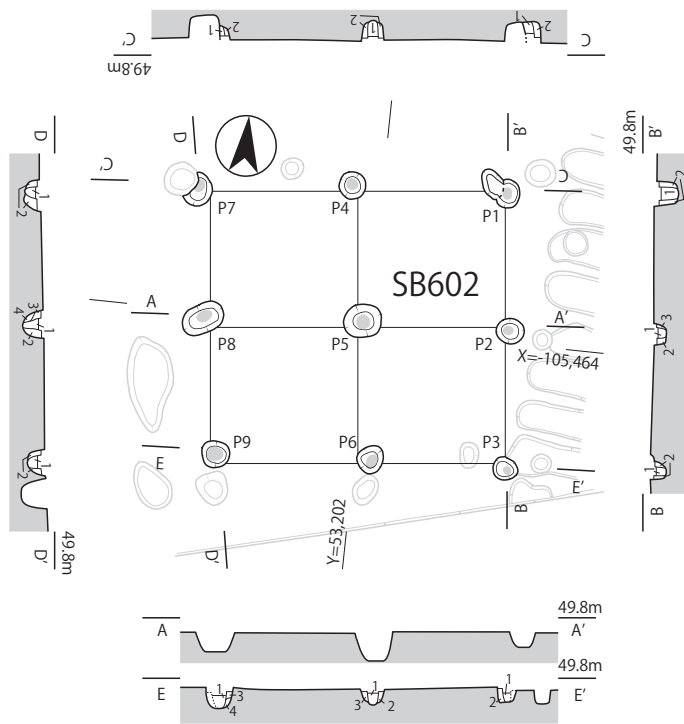
1. 10YR3/1 黒褐色粘質土 径 5mmの礫混じる
2. 10YR3/1 黒褐色粘質土に 10YR6/6 明黄褐色粘質土がブロック状に混じる

P7

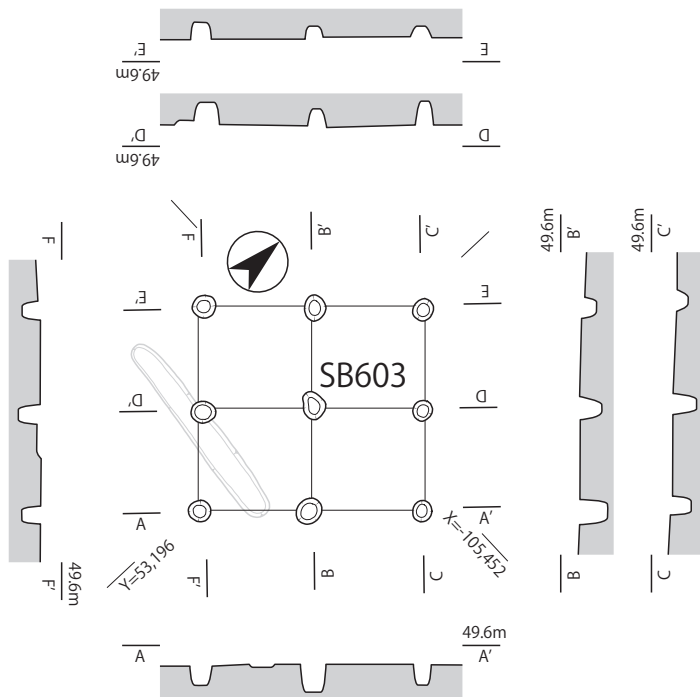
1. 10YR3/1 黒褐色粘質土に 10YR6/6 明黄褐色粘質土がブロック状に多量に混じる
2. 10YR3/1 黒褐色粘質土に 10YR6/6 明黄褐色粘質土がブロック状に混じる
3. 10YR6/6 明黄褐色粘質土

P11 (I-Q24P2)

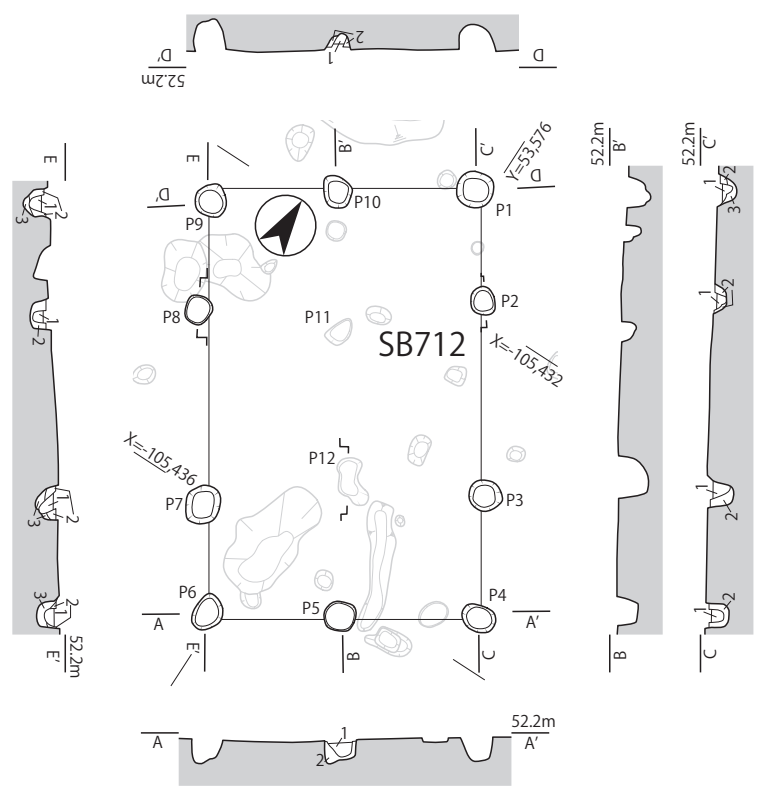
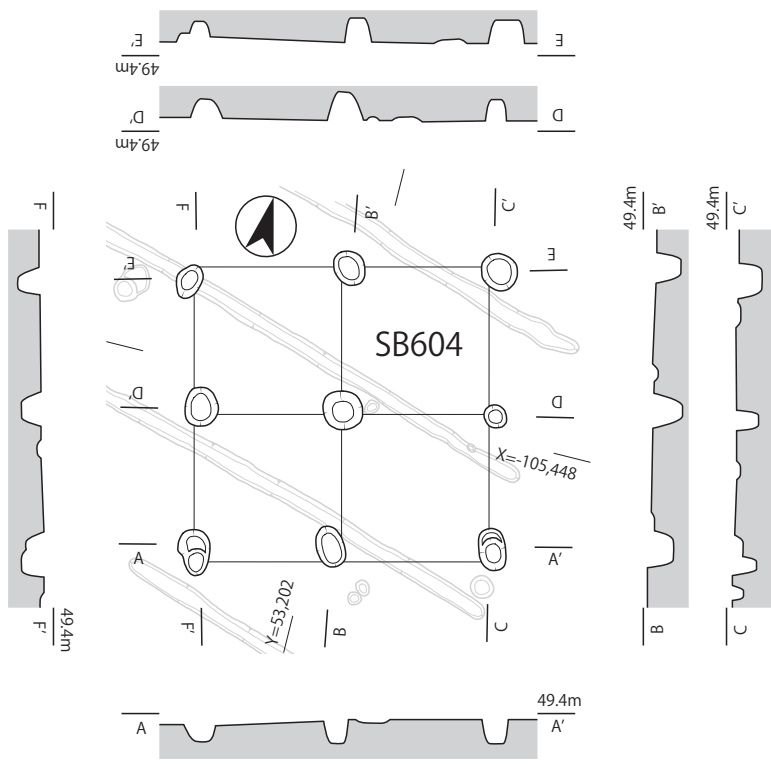
第89図 SB601・636 平面・断面図 (1:100)



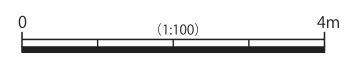
- P1
1. 10YR3/1黒褐色粘質土に10YR6/6明黄褐色粘質土混じる
 2. 10YR6/6明黄褐色粘質土
- P2
1. 10YR3/1黒褐色粘質土
 2. 10YR3/1黒褐色粘質土に10YR6/6明黄褐色粘質土多量に混じる
 3. 10YR6/6明黄褐色粘質土
- P3
1. 10YR3/1黒褐色粘質土
 2. 10YR3/1黒褐色粘質土に10YR6/6明黄褐色粘質土ブロック混じる
- P4
1. 10YR3/1黒褐色粘質土
 2. 10YR3/1黒褐色粘質土に10YR6/6明黄褐色粘質土ブロック少量混じる
 - 炭化物混じる
- P6
1. 10YR3/1黒褐色粘質土
 2. 10YR3/1黒褐色粘質土に10YR6/6明黄褐色粘質土ブロック少量混じる
 3. 10YR6/6明黄褐色粘質土
- P7
1. 10YR3/1黒褐色粘質土
 2. 10YR5/1褐灰色粘質土に10YR6/6明黄褐色粘質土ブロック混じる
- P8
1. 10YR3/1黒褐色粘質土 炭化物混じる
 2. 10YR3/1黒褐色粘質土に10YR6/6明黄褐色粘質土ブロック少量混じる
 3. 10YR5/1褐灰色粘質土に10YR6/6明黄褐色粘質土ブロック少量混じる
 4. 10YR6/6明黄褐色粘質土
- P9
1. 10YR3/1黒褐色粘質土に10YR6/6明黄褐色粘質土ブロック混じる
 2. 10YR5/1褐灰色粘質土 径5mmの礫混じる
 3. 10YR3/1黒褐色粘質土に10YR6/6明黄褐色粘質土ブロック少量混じる
 4. 10YR6/6明黄褐色粘質土



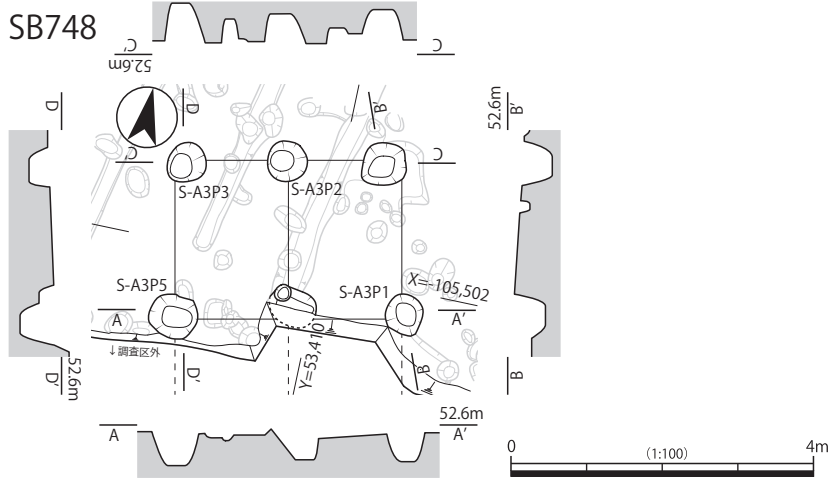
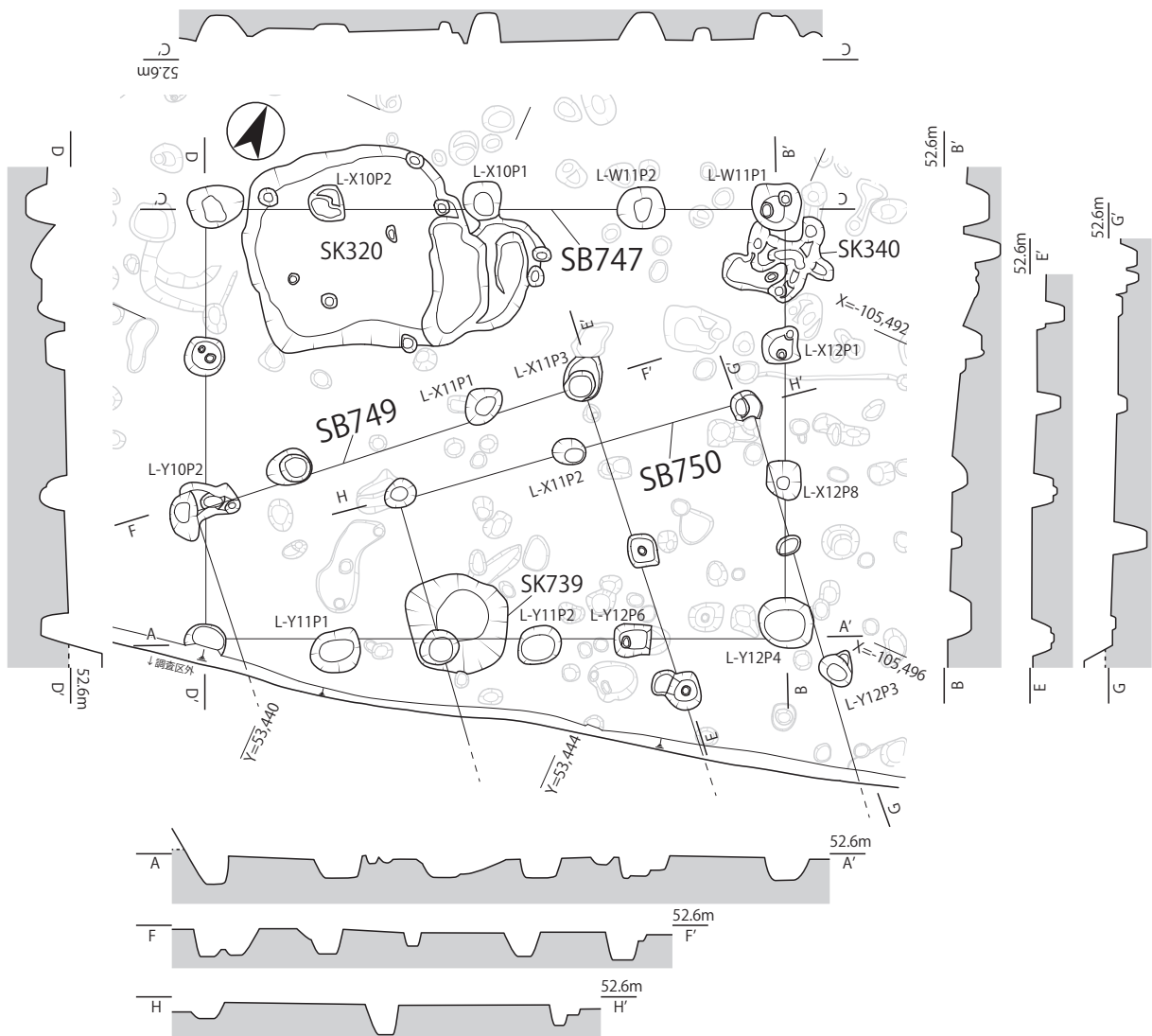
第90図 SB602・603 平面・断面図 (1:100)



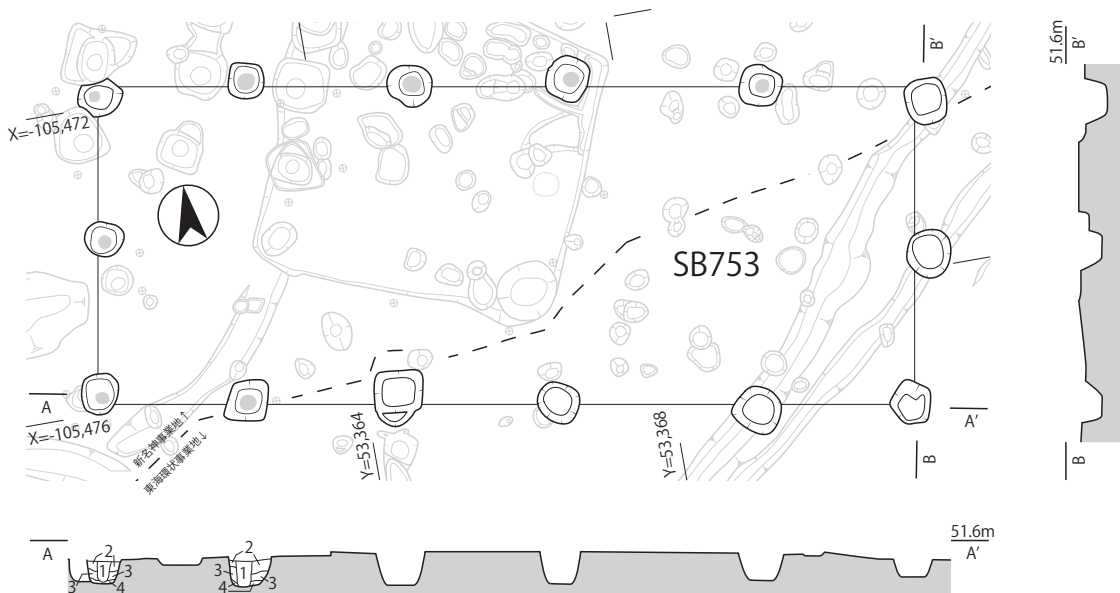
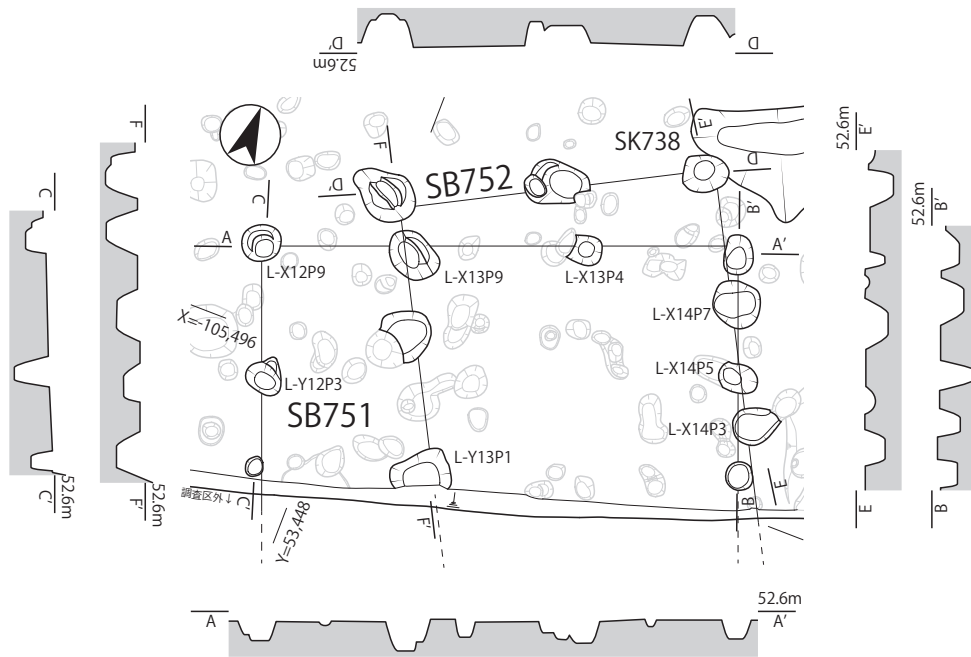
- P1
 - 1. 10YR2/1黒色シルト
 - 2. 10YR2/2黒褐色シルト
 - 3. 10YR3/2黒褐色シルト (10YR5/6黄褐色シルトブロックを含む)
- P2
 - 1. 10YR2/1黒色シルト
 - 2. 10YR3/2黒褐色シルト (10YR5/6黄褐色シルトブロックを含む)
- P3
 - 1. 10YR1.7/1黒色シルト
 - 2. 10YR2/1黒色シルト
- P4
 - 1. 10YR1.7/1黒色シルト
 - 2. 10YR2/1黒色シルト
- P5(M-J20PitZ)
 - 1. 10YR2/1黒色シルト
 - 2. 10YR3/2黒褐色シルト (10YR5/6黄褐色シルトブロックを含む)
- P6
 - 1. 2.5Y2/1黒色シルト
 - 2. 10YR2/2黒褐色シルト
 - 3. 10YR2/2黒褐色シルト (10YR5/6黄褐色シルトブロックを含む)
 - 4. 10YR3/1黒褐色シルト (10YR5/6黄褐色シルトブロックを含む)
- P7
 - 1. 10YR2/1黒色シルト
 - 2. 10YR2/2黒褐色シルト (10YR5/6黄褐色シルトブロックを含む)
 - 3. 10YR3/2黒褐色シルト (10YR5/6黄褐色シルトブロックを含む)
- P8
 - 1. 10YR2/1黒色シルト
 - 2. 10YR2/2黒褐色シルト (10YR5/6黄褐色シルトブロックを含む)
- P9
 - 1. 10YR2/1黒色シルト
 - 2. 10YR2/2黒褐色シルト (10YR5/6黄褐色シルトブロックを含む)
 - 3. 10YR3/2黒褐色シルト (10YR5/6黄褐色シルトブロックを含む)
- P10
 - 1. 10YR1.7/1黒色シルト
 - 2. 10YR2/1黒色シルト (10YR5/6黄褐色シルトブロックを含む)



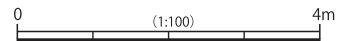
第91図 SB604・712 平面・断面図 (1:100)



第92图 SB747·748·749·750 平面·断面图 (1:100)



1. 10YR3/1黒褐色土(柱痕)
2. 10YR4/2灰黄褐色シルト
3. 10YR3/3暗褐色シルト
4. 10YR5/4にふい黄褐色シルト(7.5YR5/6明褐色ブロック2%含む)



第93図 SB751・752・753 平面・断面図 (1:100)

S B 224 を中心に方位を揃える建物群を構成する建物のひとつである。

S B 231 (第 79 図) 南区西側で検出した桁行 3 間 (4.05 m) × 梁行 1 間 (3.0 m) の側柱建物である。柱間は、桁行が 1.35 m 等間、梁行が 3.0 m。建物方位は N11° E。柱穴は径 42 ~ 65cm、深さ 17 ~ 32cm である。柱穴から須恵器高杯と杯蓋 (318・317) の他、細片のため図化できなかったが、須恵器甕・壺、土師器甕が出土している。

S B 224 を中心に方位を揃える建物群を構成する建物のひとつであるが、梁行が 1 間であることや北西隅の柱穴を欠くため、他の建物に比べて違和感が残る。桁行 2 間 × 梁行 1 間の正方形に近い建物か、なんらかの構築物の一部である可能性も考えられる¹⁸⁾。

S B 232 (第 80 図) 南区西側で検出した桁行 2 間 (3.6 m) × 梁行 2 間 (3.0 m) の総柱建物である。柱間は、桁行が 1.8 m 等間、梁行が 1.5 m 等間。建物方位は N32° W。柱穴は径 39 ~ 51cm、深さ 16 ~ 33cm、出土遺物は無い。S K 221 と重複しており、これより新しい。

S B 301 (第 80 図) 南区東側で検出した桁行 3 間 (4.5 m) × 梁行 2 間 (3.3 m) の側柱建物である。柱間は、桁行が 1.5 m 等間、梁行が 1.65 m 等間。建物方位は N38° E。柱穴は径 27 ~ 54cm、深さ 13 ~ 58cm である。柱穴から土師器片が出土しているが、細片のため図化できなかった。

S B 305 (第 81 図) 南区中央部で検出した桁行 4 間 (6.6 m) × 梁行 3 間 (4.8 m) の側柱建物である。柱間は、桁行の両端 1 間が 1.5 m、中央の 2 間が 1.8 m 等間、梁行は、東側の北 1 間と西側の南 1 間のみ 1.2 m、他は 1.8 m 等間である。建物方位は N12° W。柱穴は径 36 ~ 53cm、深さ 18 ~ 47cm である。柱穴からは土師器片が出土しているが、細片のため図化できなかった。

S B 308 (第 82 図) 南区中央部で検出した桁行 4 間 (6.0 m) × 梁行 3 間 (5.1 m) の側柱建物である¹⁹⁾。柱間は、桁行が 1.5 m 等間、梁行は両端 1 間が 1.65 m、中央 1 間が 1.8 m である。建物方位は N19° W。柱穴は径 41 ~ 68cm、深さ 18 ~ 41cm である。柱穴からは土師器片が出土しているが、細片のため図化

できなかった。

なお、柱穴 P1 と P3 は、南区土層断面図 (第 7 図) の断面 E-E' 中の P1・P3 を示している。

S B 309 (第 82 図) 南区中央部で検出した桁行 4 間 (5.7 m) × 梁行 2 間 (3.3 m) の側柱建物である。柱間は、桁行の両端 1 間が 1.5 m、中央 2 間が 1.35 m 等間、梁行が 1.65 m 等間である。建物方位は N41° E。柱穴は径 30 ~ 60cm、深さ 22 ~ 40cm である。柱穴からは土師器片が出土しているが、細片のため図化できなかった。

S B 314 (第 83 図) 南区西側で検出した桁行 3 間 (5.4 m) × 梁行 2 間 (3.6 m) の側柱建物である²⁰⁾。柱間は、桁行の両端 1 間が 1.5 m、中央 1 間が 2.4 m、梁行が 1.8 m 等間である。建物方位は N34° E。柱穴は径 39 ~ 46cm、深さ 23 ~ 33cm である。柱穴からは土師器片が出土しているが、細片のため図化できなかった。

S B 321 (第 83 図) 南区中央部で検出した桁行 3 間 (5.1 m) × 梁行 2 間 (3.9 m) の側柱建物である。柱間は、桁行の両端 1 間が 1.5 m、中央 1 間が 2.1 m、梁行が 1.95 m 等間である。建物方位は N31° W。柱穴は径 42 ~ 61cm、深さ 23 ~ 49cm である。柱穴からは、混入とみられるチャートの剥片 2 点 (319・320) の他、細片のため図化できなかったが須恵器片・土師器片が出土した。

S B 322 (第 84 図) 南区中央部で検出した桁行 3 間 (6.3 m) × 梁行 2 間 (4.5 m) の側柱建物である。柱間は、桁行の両端 1 間が 1.8 m、中央 1 間が 2.7 m、梁行が 2.25 m 等間である。建物方位は N42° W。柱穴は径 36 ~ 55cm、深さ 22 ~ 38cm である。柱穴からは、須恵器片・土師器片が多数出土したが、須恵器壺底部 (323)・杯身 (322)、土師器甕口縁部 (321) の他は細片のため図化できなかった。S B 333 と重複しており、これより古い。

S B 331 (第 84 図) 南区中央部で検出した桁行 4 間 (6.0 m) × 梁行 2 間 (4.2 m) の側柱建物である。柱間は、桁行が 1.5 等間、梁行は、北 1 間が 1.8 m、南 1 間が 2.4 m である。建物方位は N12° W。柱穴は径 31 ~ 59cm、深さ 9 ~ 42cm である。柱穴からは土師器片が出土しているが、細片のため図化できなかった。S K 325 と重複しているが、切り合いは不

明である。

建物中央の柱通りの良い位置に、浅いピットが1つ検出されている。念のため断面を図示したが、この建物に伴うものかどうかは不明である。

S B 333 (第 85 図) 南区中央部で検出した桁行 3 間 (6.0 m) × 梁行 2 間 (4.2 m) の側柱建物である。柱間は、桁行の両端 1 間が 1.5 m、中央 1 間が 3.0 m、梁行が 2.1 m 等間である。建物方位は N39° W。柱穴は径 38 ~ 62cm、深さ 21 ~ 44cm である。柱穴からは、スサ入りの焼土や須恵器片・土師器片が出土したが、いずれも細片のため図化できなかつた。S B 322 と重複しており、これより新しい。

北壁の中央付近に不定形の土坑が検出されており、埋土も柱穴のものと同様であった。この建物に伴うものかどうかは不明であるが、なんらかの構造物が据え付けられていた可能性もある。

S B 334 (第 85 図) 南区中央部で検出した桁行 2 間 (3.6 m) × 梁行 2 間 (3.3 m) の総柱建物である。柱間は、桁行が 1.8 m 等間、梁行は、北 1 間が 1.5 m、南 1 間が 1.8 m である。建物方位は N26° E。柱穴は径 40 ~ 63cm、深さ 19 ~ 34cm である。柱穴からは土師器片が出土しているが、細片のため図化できなかつた。

S B 338 (第 86 図) 南区中央部で検出した桁行 3 間 (3.6 m) × 梁行 2 間 (3.6 m) の側柱建物である。柱間は、桁行が 1.2 m 等間、梁行が 1.8 m 等間である。建物方位は N8° E。柱穴は径 49 ~ 65cm、深さ 22 ~ 45cm である。柱穴からは土師器片が出土しているが、細片のため図化できなかつた。

3 間 × 2 間の側柱建物でありながら、桁行の柱間を詰めて梁行と同じ寸法の正方形の建物となっており、中野山遺跡では特異な作りの建物である。

S B 342 (第 86 図) 南区中央部で検出した桁行 3 間 (4.5 m) × 梁行 2 間 (3.0 m) の側柱建物である。柱間は、桁行・梁行ともに 1.5 m 等間である。建物方位は N17° W。柱穴は径 40 ~ 64cm、深さ 13 ~ 46cm である。柱穴からは須恵器片・土師器片が出土しているが、細片のため図化できなかつた。なお、混入とみられる縄文時代の切目石錘 (324) が 1 点出土している。S H 317 と重複しており、これより古い。

S B 344 (第 87 図) 南区中央部で検出した桁行 1 間 (3.5 ~ 3.6 m) × 梁行 1 間 (2.7 ~ 2.9 m) の側柱建物である。建物方位は N11° E。柱穴は径 40 ~ 60cm、深さ 14 ~ 29cm、出土遺物は無い。S K 327 と重複しているが、切り合いは不明。

柱穴が比較的大きな方形をしており、現地調査の時点で、周囲の他のピットとは明らかに区別できたため建物としたが、1 間 × 1 間で四隅が直角にならず、全ての辺の寸法が異なるなど、他の建物とは異なる点が多い。

S B 345 (第 87 図) 南区中央部で検出した桁行 3 間 (4.2 m) × 梁行 2 間 (3.0 m) の側柱建物である。柱間は、桁行の両端 1 間が 1.35 m、中央 1 間が 1.5 m、梁行が 1.5 m 等間である。建物方位は N27° W。柱穴は径 33 ~ 46cm、深さ 15 ~ 34cm。柱穴からは須恵器片・土師器片が出土しているが、いずれも細片のため図化できなかつた。S H 329 および S B 384 と重複しており、切合いは、S B 384 が最も古く、次が S H 329、最も新しいのが S B 345 となっている。

S B 376 (第 88 図) 北区東側で検出した桁行 2 間 (3.6 m) × 梁行 2 間 (3.3 m) の総柱建物である。柱間は、桁行が 1.8 m 等間、梁行が 1.65 m 等間である。建物方位は N29° W。柱穴は径 33 ~ 52cm、深さ 20 ~ 51cm である。柱穴からは埋没過程での混入とみられる縄文土器片 (325) と弥生土器壺片 (326) の他、細片のため図化できなかつたが、須恵器甕体部片が出土している。S B 376 とは規模・方位が同じである。

S B 384 (第 87 図) 南区中央部で検出した桁行 5 間 (6.3 m) × 梁行 2 間 (3.3 m) の側柱建物である。柱間は、桁行が 1.0 ~ 1.7 m、梁行が 1.4 ~ 1.9 m とばらつきがある。建物方位は N13° E。柱穴は径 22 ~ 55cm、深さ 6 ~ 27cm である。柱穴からは土師器片が出土しているが、細片のため図化できなかつた。S H 329 および S B 345 と重複しており、切合いは、S B 384 が最も古く、次が S H 329、最も新しいのが S B 345 となっている。

S B 407 (第 88 図) 南区西側で検出した 2 間 (4.2 m) 四方の総柱建物である。柱間は 2.1 等間。建物方位は N33° E。柱穴は径 34 ~ 75cm、深さ 46 ~ 86cm、

出土遺物は無い。S K 312と重複しているが、切り合いは不明。

S B 410 (第 88 図) 北区東側で検出した桁行 2 間 (3.6 m) × 梁行 2 間 (3.3 m) の総柱建物である。柱間は、桁行が 1.8 m 等間、梁行が 1.65 m 等間である。建物方位は N29° W。柱穴は径 32 ~ 42cm、深さ 8 ~ 30cm である。出土遺物は無い。S B 376 とは規模・方位が同じである。

S B 601 (第 89 図) 北区中央部で検出した桁行 3 間 (3.9 m) × 梁行 2 間 (3.9 m) の総柱建物である。柱間は、桁行の西 1 間が 1.5 m、東 2 間は 1.2 m、梁行が 1.95 m 等間である。建物方位は N10° E。柱穴は径 40 ~ 62cm、深さ 24 ~ 36cm である。柱穴からは須恵器片が出土しているが、細片のため図化できなかつた。S B 636 と重複しており、これより新しい。

S B 602 (第 90 図) 北区中央部で検出した桁行 2 間 (3.9 m) × 梁行 2 間 (3.6 m) の総柱建物である。柱間は、桁行が 1.95 等間、梁行が 1.8 m 等間である。建物方位は N 6° W。柱穴は径 28 ~ 53cm、深さ 16 ~ 34cm、出土遺物は無い。S B 636 と重複しており、これより古い。

S B 603 (第 90 図) 北区中央部で検出した桁行 2 間 (3.0 m) × 梁行 2 間 (2.7 m) の総柱建物である。柱間は、桁行が 1.5 等間、梁行が 1.35 等間である。建物方位は N43° E。柱穴は径 22 ~ 34cm、深さ 18 ~ 36cm、出土遺物は無い。

S B 604 (第 91 図) 北区中央部で検出した 2 間 (3.9 m) 四方の総柱建物である。柱間は、1.95 等間。建物方位は N14° W。柱穴は径 24 ~ 60cm、深さ 23 ~ 32cm、出土遺物は無い。

S B 636 (第 89 図) 北区中央部で検出した桁行 3 間 (6.9 m) × 梁行 2 間 (4.2 m) の総柱建物である^②。柱間は、桁行の東 1 間が 2.7 m、西 2 間が 2.1 m 等間、梁行が 2.1 等間である。建物方位は N11° W。柱穴は径 34 ~ 51cm、深さ 23 ~ 44cm である。柱穴からは土師器甗片が出土しているが、細片のため図化できなかつた。S B 601 および S B 602 と重複しており、切り合いは、S B 602 が最も古く、次が S B 636、最も新しいのが S B 601 となっている。

S B 712 (第 91 図) 南区東側で検出した桁行 3 間

(5.7 m) × 梁行 2 間 (3.6 m) の側柱建物である。柱間は、桁行の両端 1 間が 1.5 m、中央 1 間が 2.7 m、梁行が 1.8 m 等間である。建物方位は N33° W。柱穴は径 34 ~ 49cm、深さ 18 ~ 44cm である。柱穴からは土師器細片と混入とみられる縄文土器片 (327) が出土している。

建物内の柱通りの良い位置にピット (P11・P12) が検出されている。他の柱穴に比べて深さや形状に差異が大きいため、東柱の可能性も考えられる。

S B 747 (第 92 図) 南区中央部で検出した桁行 4 間 (8.1 m) × 梁行 3 間 (6.0 m) の側柱建物である。柱間は、桁行の西 1 間が 1.8 m、東 1 間が 2.1 m、中央 2 間は北壁が 2.1 等間、南壁が 2.7 m・1.5 m とばらつきがある。梁行は両端 1 間が 2.1 m、中央 1 間が 1.8 m である。建物方位は N24° W。柱穴は径 54 ~ 77cm、深さ 21 ~ 42cm である。柱穴からは、須恵器片・土師器片・鞠羽口片が出土したが、土師器甕 (328)・須恵器杯身 (329)・壺 (330) の他は細片のため図化できなかつた。S K 320・S K 340・S B 749 と重複しており、いずれの遺構よりも S B 747 が新しい。

S B 748 (第 92 図) 南区西側で検出した桁行 2 間 (3.0 m) × 梁行 1 間 (2.1 m) 以上の総柱建物である。建物の南側は調査区外のため未確認である。柱間は、桁行が 1.5 m 等間、梁行が 2.1 m。建物方位は N12° W。柱穴は径 50 ~ 65cm、深さ 40 ~ 53cm である。柱穴からは須恵器片・土師器片が出土したが、いずれも細片のため図化できなかつた。

S B 749 (第 92 図) 南区中央部で検出した桁行 3 間 (5.7 m) × 梁行 2 間 (4.5 m) 以上の側柱建物である。建物の南側は調査区外のため未確認である。柱間は、桁行の両端 1 間が 1.5 m、中央 1 間が 2.7 m、梁行が北から 2.4 m・2.1 m である。建物方位は N42° W。柱穴は径 45 ~ 65cm、深さ 30 ~ 40cm である。柱穴からは土師器片が出土したが、細片のため図化できなかつた。S B 747 と重複しており、これより古い。

S B 750 (第 92 図) 南区中央部で検出した桁行 2 間 (5.7 m) 以上 × 梁行 2 間 (5.1 m) の側柱建物である。建物の南側は調査区外のため未確認である。柱間は、桁行の北から 2.1 m・1.8 m・1.8 m、梁行

が2.55 m等間である。建物方位はN43° W。柱穴は径32～51cm、深さ15～41cmである。柱穴からは土師器片が出土したが、細片のため図化できなかった。S K 739と重複しており、これより古い。

S B 751 (第93図) 南区中央部で検出した桁行3間(6.3 m)×梁行2間(3.0 m)以上の側柱建物である。建物の南側は調査区外のため未確認である。柱間は、桁行が2.1 m等間、梁行が北から1.8 m・1.2 mである。建物方位はN21° W。柱穴は径37～72cm、深さ22～61cmである。柱穴からは、土師器片が出土したが、細片のため図化できなかった。

S B 752 (第93図) 南区中央部で検出した桁行2間(4.2 m)×梁行2間(3.6 m)以上の側柱建物である。建物の南側は調査区外のため未確認である。柱間は、桁行が2.1 m等間、梁行が1.8 m等間。建物方位はN28° W。柱穴は径60～85cm、深さ20～41cmである。柱穴からは、須恵器片・土師器片が出土したが、いずれも細片のため図化できなかった。

S B 753 (第93図) 南区西側で検出した桁行5間(10.8 m)×梁行2間(4.2 m)の側柱建物である²⁾。柱間は、桁行の東から2間目のみ2.4 m、他は2.1 m、梁行が2.1等間である。建物方位はN12° E。柱穴は径56～65cm、深さ27～42cm、出土遺物は無い。

(3) 土坑

当該期の土坑は59基を確認した。土坑の多くは複数のピットと重複しているが、大半はピットの埋土が土坑と同じ黒～黒褐色であったため、切り合いの有無を含め、判別できなかったものが多い²⁾。出土遺物の無い遺構は、遺構の形状や埋土等の特徴で時期を判断したものもある。遺構の性格は不明なものが多い。

以下、遺構ごとに記述する。

S K 203 (第16図) 南区西側南壁付近で検出した土坑である。遺構の大半は調査区外のため、全体の規模や形状は不明である。堅穴住居等の可能性もあるが、現段階ではとりあえず土坑として分類した。深さは20cm程度で、底面から5cmほど浮いた位置で、扁平な自然石が出土した。遺物は、土師器細片が1点出土している。

S K 207 (第94図) 南区西端南壁付近で検出した

土坑である。南側は調査区外のため、全体の規模や形状は不明である。深さは65cmで、埋土には、いわゆるレンズ状の堆積がみられた。第6層から当該期の土師器甕の体部片が出土している。

S K 209 (第94図) 南区西側で検出した土坑である。径4.0 m程度の不整形を呈する。底面はほぼ平坦で、深さは20cm程度である。S K 225と重複しており、それより古い。

底面に多数のピット、南側に長径2.0 m×短径1.3 mの楕円形の窪みが存在するが、これらとの切り合いは埋土が同色であるため判別できなかった。

主な遺物として、土師器甕(331～334)・甑(335)・把手(336・337)、須恵器杯蓋(338・339)・杯身(340)、板状鉄製品(341)がある。

S K 210 (第94図) 南区西側で検出した土坑である。長径3.6 m×短径2.8 mの不整形円形を呈する。底面はほぼ平坦で、深さは30cm程度である。土坑内にピットが存在するが、埋土が同色であるため切り合いの有無は判別できなかった。

主な遺物として、土師器甕(342～347)・把手(348)、須恵器杯蓋(349～352)・杯身(353～355)・高杯(356・357)・提瓶(358)・甕(359～363)がある。

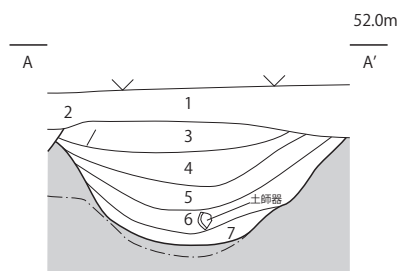
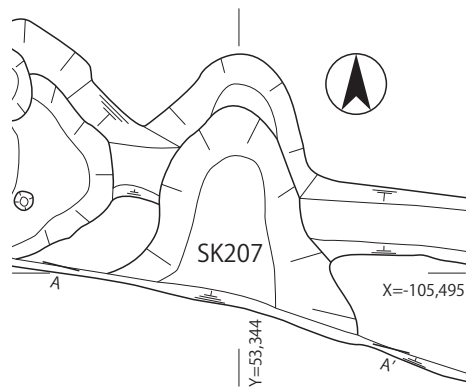
S K 212 (第95図) 南区西側で検出した土坑である。径4.2～5.9 mの不整形円形を呈する。底面はほぼ平坦で、深さは20cm程度である。中央にあるピットはこの土坑の床面を切っていないことが断面で確認できたが、それ以外のピットについては、切り合いの有無は判別できなかった。

主な遺物として、土師器甕底部(364)・把手(365)、須恵器杯蓋(366)・高杯(367)・壺(368)がある。

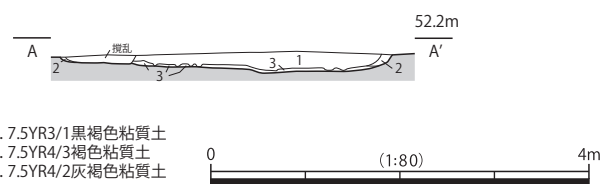
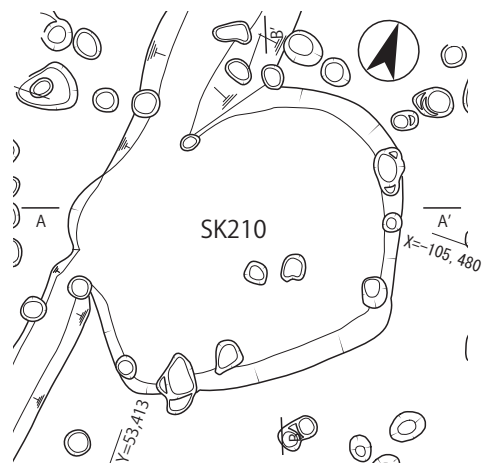
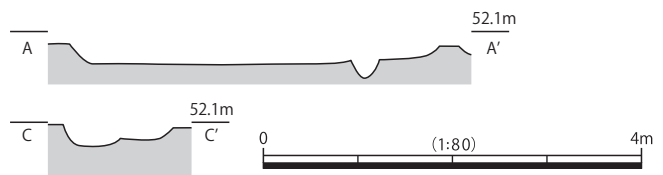
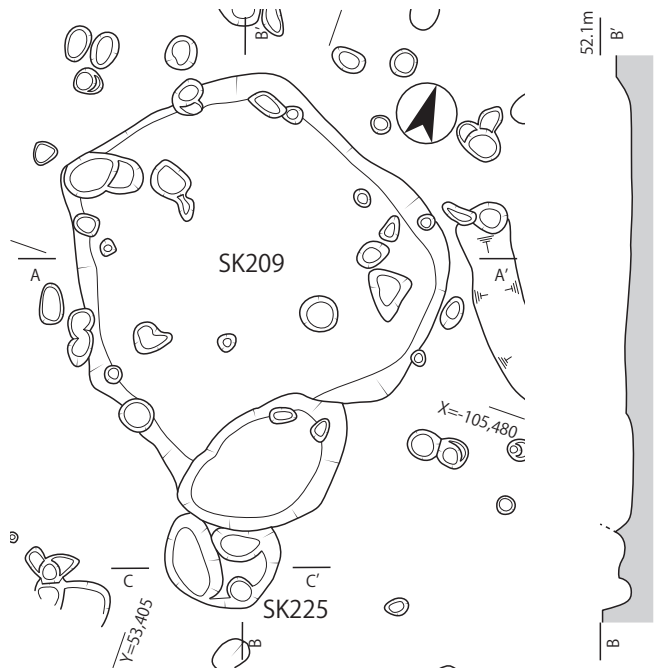
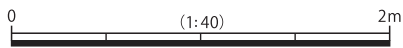
S K 218 (第95図) 南区西側で検出した土坑である。径1.1 m～1.2 mの不整形円形を呈する。深さは10cm程度である。ピットが1基検出されているが、平断面で切り合いはみられなかった。この遺構に伴うピットと考えてよいと思われる。

遺物は、土師器甕の細片が数点、出土している。

S K 221 (第95図) 南区西側で検出した土坑である。北側の大部分は調査区外であったが、平成23年度に新名神事業として行われた第5次調査で全体

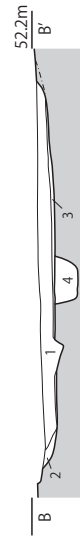
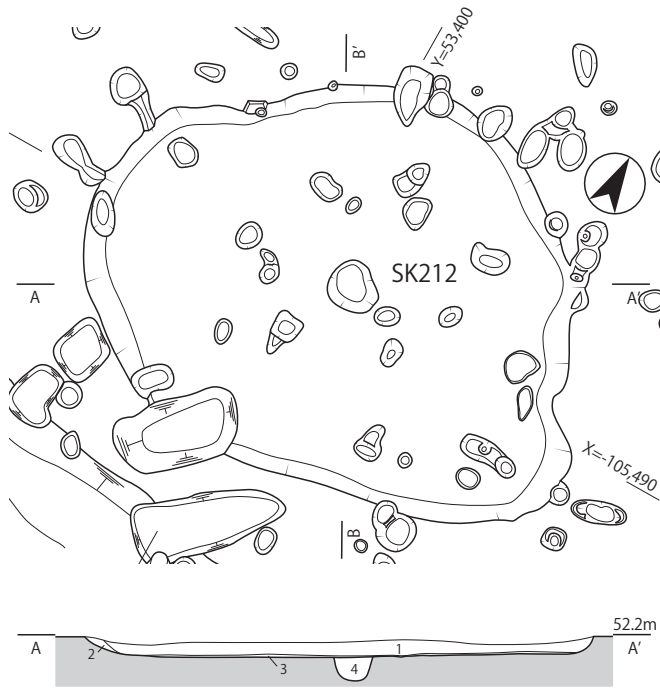


1. 表土・耕作土
2. 10YR3/3 暗褐色粘質土 (別遺構)
3. 7.5YR4/6 褐色粘質土
4. 7.5YR3/3 暗褐色粘質土に
7.5YR4/6 褐色粘質土や炭化物が層状に入る
5. 7.5YR4/6 褐色粘質土
6. 7.5YR3/3 暗褐色粘質土に
7.5YR4/6 褐色粘質土や炭化物が層状に入る
7. 7.5YR5/3 にぶい褐色粘質土に
7.5YR4/6 褐色粘質土がブロック状に入る

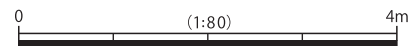
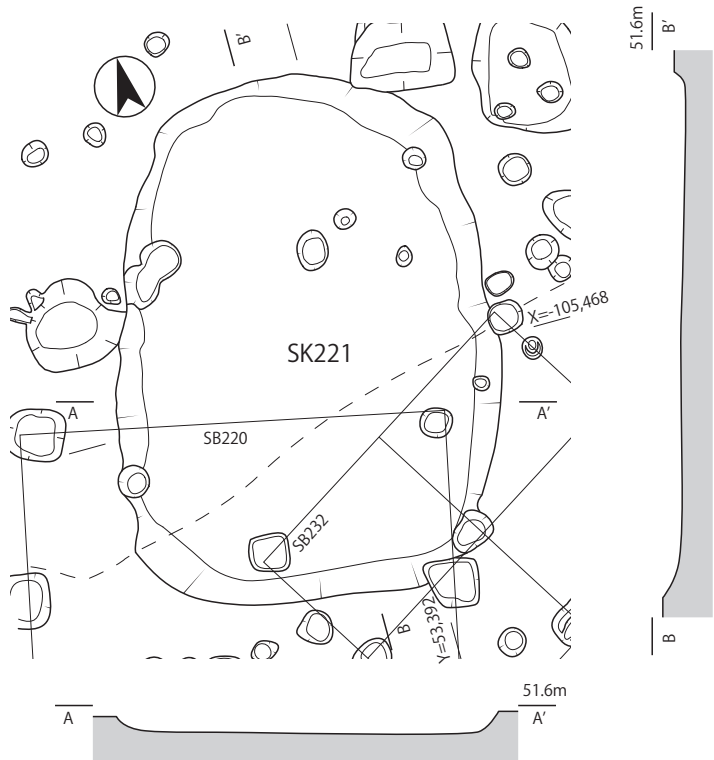
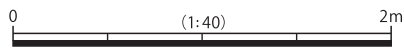
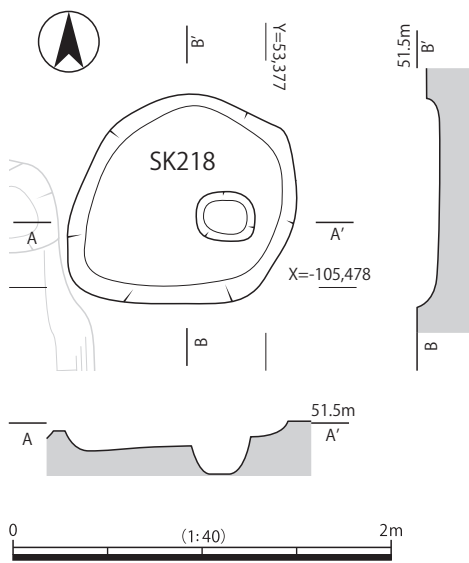
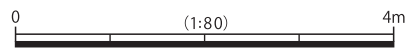


1. 7.5YR3/1 黒褐色粘質土
2. 7.5YR4/3 褐色粘質土
3. 7.5YR4/2 灰褐色粘質土

第94図 SK207・209・210・225 平面・断面図 (1:40・1:80)



1. 7.5YR3/1黒褐色粘質土
2. 7.5YR4/2灰褐色粘質土
3. 7.5YR4/4褐色粘質土 (黒褐色のムラが多い)
4. ビット埋土 (土色等記録なし)



第95図 SK212・218・221 平面・断面図 (1:40・1:80)

が確認された。S B 220・232 と重複しており、これらより古い。

規模は、長径 5.6 m × 短径 4.0 m で、不整楕円形を呈する。底面はほぼ平坦で、深さは 25cm 程度である。

遺物は、土師器甕の細片が数点、出土している。

S K 222 (第 96 図) 南区西側で検出した土坑である。長径 3.2 m × 短径 2.3 m の不整円形を呈する。底面はほぼ平坦で、深さは 16cm 程度である。東側に長径 1.2 m × 短径 0.8 m の楕円形の小土坑が重複しており、これより古い。

主な遺物として、土師器甕 (369)、須恵器杯蓋 (370)・杯身 (371) がある。

S K 225 (第 94 図) 南区西側で検出した土坑である。径 1.2 m 程度の円形を呈し、深さは 25cm である。S K 209 と重複しており、これより新しい。

主な遺物として、土師器甕 (372)・高杯 (373) がある。

S K 228 (第 96 図) 南区西側で検出した土坑である。0.9 m 四方の正方形を呈し、深さは 10cm である。埋土には焼土や木炭粒が含まれていた。

遺物は、土師器甕の細片が数点出土している。

S K 302 (第 96 図) 南区中央部東側で検出した土坑である。北側は調査区外、西側は現代の攪乱により破壊されており、全体の形状・規模は不明である。調査区北壁と重複しているため土層断面は表土から記録できた。遺構の上面は耕作等で若干削平されていると思われるが、底面までの深さは 80cm である。遺構は第 7 層の黒ボク層を切って掘り込まれており、土坑の埋土は黒ボク由来のものが主体である。第 3 層のように焼土を含む層や底面付近の第 5・6 層は分層できたが、それ以外は分層することはできなかった。

主な遺物として、土師器甕 (374・375) があり、この他には土師器小片が 5 点出土した。

S K 312 (第 96 図) 南区中央部西側で検出した土坑である。長径 2.6 m × 短径 1.9 m の不整円形を呈し、深さは 30cm 程度である。埋土は黒ボク由来のもので礫が多く含まれていた。

主な遺物として、土師器甕 (376)、須恵器杯蓋 (377)・杯身 (378～380)・高杯 (381) があり、こ

の他には須恵器小片が 1 点出土した。

S K 313 (第 97 図) 南区中央部西側で検出した土坑である。長径 4.0 m × 短径 3.5 m の楕円形を呈する。底面はほぼ平坦で、深さは 35cm 程度である。土坑内に複数のピットが存在するが、いずれも第 1 層の上面では検出されなかった。土層断面では第 4 層を切っていることが記録されているものがある。第 4 層が波打っているため、床土かどうか判然としないが、土坑の底面になにかが据えられていた可能性が窺える。

遺物は、須恵器杯蓋 (382)・杯身 (383・384)・瓶または壺 (385)・横瓶 (386)・甕 (387) と、図示できなかったが鉄滓 2 点 (22.2 g・28.5 g) が出土した。

S K 315 (第 97 図) 南区中央部西側で検出した土坑である。長径 3.0 m × 短径 2.4 m の楕円形を呈する。底面はほぼ平坦で、深さは 30cm 程度である。土坑内にピットが存在するが、埋土が同色であるため切り合いの有無は判別できなかった。

遺物は土師器の細片が多かったが、主なものとして、いわゆる「近江型」の特徴を持つ土師器甕 (388)、須恵器杯蓋 (389)・杯身 (390)・高杯 (391・392) がある。

S K 318 (第 97 図) 南区中央部西側で検出した土坑である。径 3.0 m の不整円形を呈する。底面はほぼ平坦で、深さは 25cm 程度である。土坑内のピットはいずれも第 1 層上面では検出されなかった。土坑の底面に礫が多くみられた。

主な遺物として、土師器甕 (393～395)、須恵器杯蓋 (396)・杯身 (397)・脚部片 (398) があり、この他には土師器と須恵器の細片が数点出土している。

S K 320 (第 97 図) 南区中央部西側で検出した土坑である。S B 747 と重複しており、それより古い。

2.7 m × 4.2 m の不整方形を呈し、東側に楕円形の小土坑が 2 基存在する。平・断面ともに切り合いがないため、小土坑はこの S K 320 と一体のものと判断した。土層断面では内側の小土坑の両側にアゼ状の高まり (第 3 層) が確認できたが、平面ではほとんど検出できなかった。

主な遺物として、土師器甕 (399～401)、須恵器

杯蓋(402～405)・杯身(406～409)、鞆羽口(410)、土錘(411・412)、L字状鉄製品(413)、埋没過程での混入とみられるチャート剥片(414)がある。他に図示できなかつたが鉄滓が13点(合計184.9g)と金床石の可能性のある被熱痕のある破片(流紋岩)が出土している。

鍛冶関連遺物が出土していることから、小土坑やアゼ状の高まりなどもそれに関連するものである可能性もあるが、焼土等は確認できなかつた。

SK 324(第98図) 南区中央部西側の北壁付近で検出した土坑である。北側は調査区外であつたが、平成23年度と平成25年度に新名神事業として行われた第5次調査と第11次調査^②によって、全体が判明した。径3.8m～4.0mの不整形を呈し、深さは15cm程度である。底面には浅い窪みなどが多く、あまり平坦ではない。

主な遺物として、土師器甕(415)、須恵器高杯(416)があり、その他には須恵器小片が10点出土している。

SK 325(第98図) 南区中央部西側の北壁付近で検出した土坑である。SB 331と重複しているが、埋土がほぼ同じで、切り合いを判別できなかつたため、新旧関係は不明である。

平面形は長径3.1m×短径1.8mの不整楕円形を呈し、深さは15cm程度である。底面からの立ち上がりは非常にゆるく、断面形は浅い皿状を呈する。

遺物は、土師器甕(417)、須恵器杯身(418)が出土したのみである。

SK 326(第98図) 南区中央部西側で検出した土坑である。長径2.1m×短径1.7mの楕円形を呈する。中央から西側にかけて深く掘削されており、その周りは浅く平坦である。深い部分は25cm、浅い部分は10cm程度である。検出面で、土坑の中央付近から径30cm程度の自然石が出土している。埋土には焼土や炭化物が含まれていた。

遺物は、埋没過程での混入と思われるチャートの剥片(419)が出土したのみで土器等はないが、埋土等の特徴から飛鳥時代の遺構とした。

SK 327(第98図) 南区中央部で検出した土坑である。SB 344と重複しているが、埋土が少なく、切り合いは判別できなかつた。

長径3.8m×短径3.4mの不整楕円形を呈する。底面には地山の礫が多くみられたが、ほぼ平坦で、深さは5cm程度である。

遺物は出土していないが、遺構の形状や埋土の特徴から飛鳥時代の遺構とした。

SK 328(第99図) 南区中央部北壁付近で検出した土坑である。縄文時代の集石炉と煙道付炉穴が重複している。平面形は、2.6m四方の不整形を呈し、深さは15cm程度である。東側に楕円形の土坑が重複するが、断面で切り合いが確認できるため、この遺構に伴うものではない。

遺物は、土師器の細片が多く出土したが、主なものとして、土師器甕(420)と、中央の窪みから出土した須恵器高杯(421)がある。

SK 332(第99図) 南区中央部で検出した土坑である。長径5.7m×短径4.6mの楕円形を呈する。底面はほぼ平坦で、深さは25cm程度である。南西側にスロープ状の傾斜がみられたが、底面付近では細く狭まり、用途はよく分からない。埋土は第2・3層に焼土が含まれており、ほとんどの遺物はここから出土した。

規模に比べて出土遺物は少なく、土師器甕(422～424)、須恵器杯蓋・高杯・壺・甕(425～429)、鉄滓2点(59.6g・17.3g)の他は土師器片が数点出土したのみである。

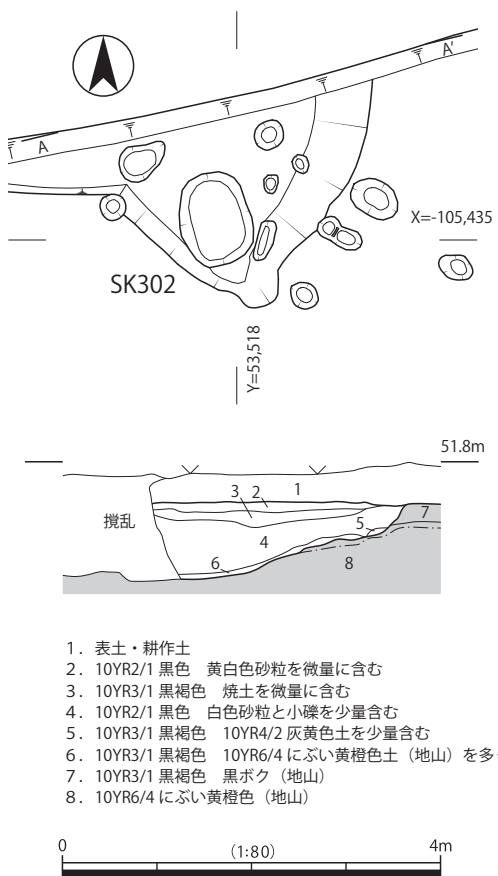
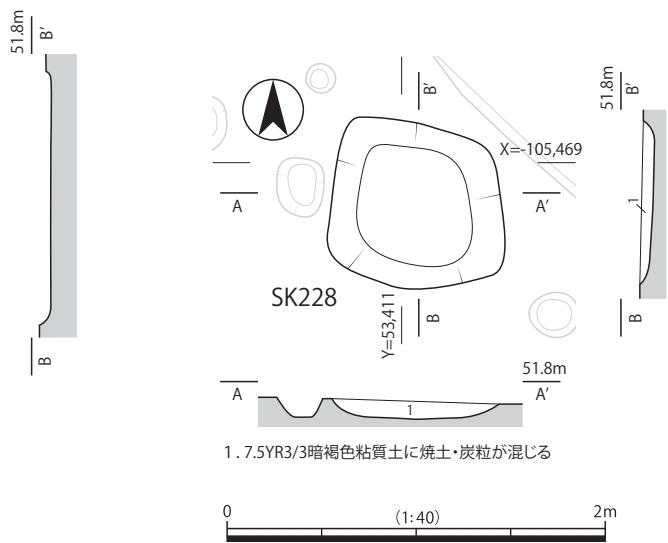
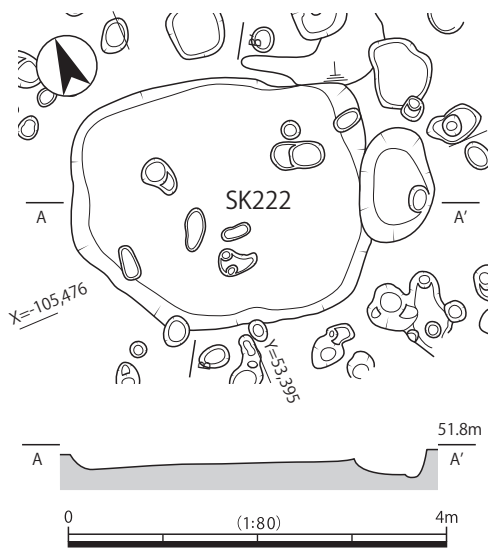
SK 335(第99図) 南区中央部で検出した土坑である。径1.6mの円形を呈する。底面はほぼ平坦で、深さは20cm程度である。底面のピットのうち1つは炭化物を含む第3層を切っており、土坑に伴うものとみられる。

遺物の出土は無いが、埋土等の特徴から飛鳥時代の遺構とした。

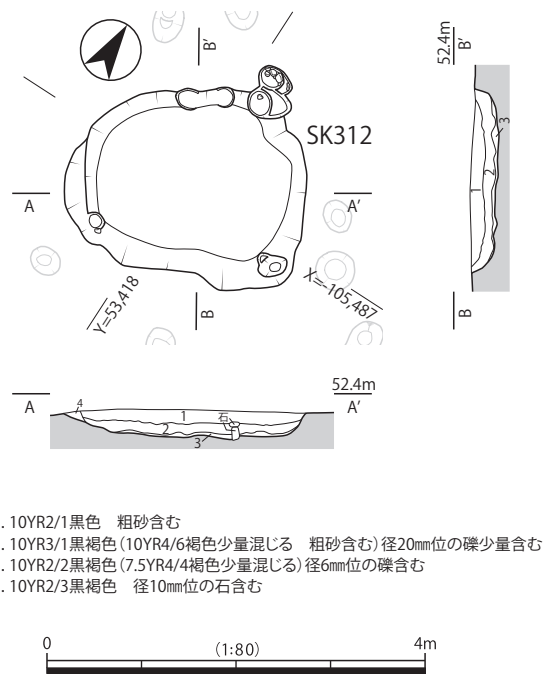
SK 336(第99図) 南区中央部で検出した土坑である。南側は削平を受けて消滅しているが、残存部分は径4.5m程度の不整形を呈する。底面はほぼ平坦で、深さは5cm程度である。

遺物は、土師器片が多数出土した他、主なものに須恵器杯蓋・壺(430・431)がある。

SK 337(第100図) 南区中央部で検出した土坑である。径2.4mの不整形を呈する。底面はほぼ平坦で、深さは20cm程度である。

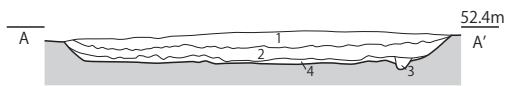
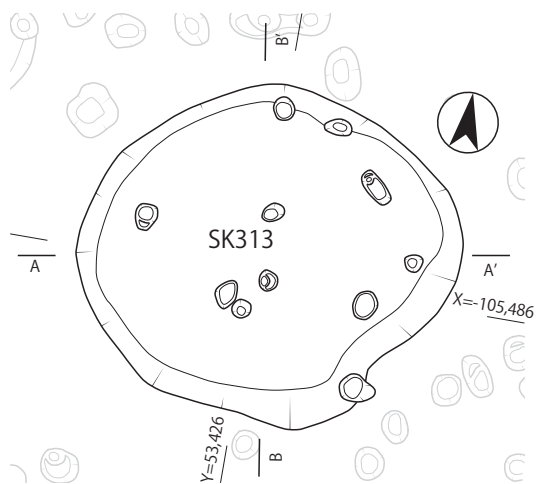


1. 表土・耕作土
2. 10YR2/1 黒色 黄白色砂粒を微量に含む
3. 10YR3/1 黒褐色 焼土を微量に含む
4. 10YR2/1 黒色 白色砂粒と小礫を少量含む
5. 10YR3/1 黒褐色 10YR4/2 灰黄色土を少量含む
6. 10YR3/1 黒褐色 10YR6/4 にぶい黄橙色土 (地山) を多く含む
7. 10YR3/1 黒褐色 黒ボク (地山)
8. 10YR6/4 にぶい黄橙色 (地山)

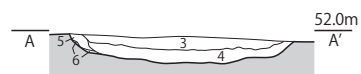
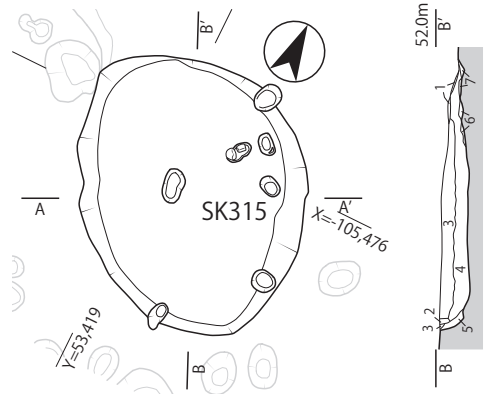
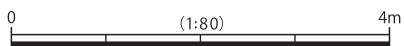


1. 10YR2/1 黒色 粗砂含む
2. 10YR3/1 黒褐色 (10YR4/6 褐色少量混じる 粗砂含む) 径20mm位の礫少量含む
3. 10YR2/2 黒褐色 (7.5YR4/4 褐色少量混じる) 径6mm位の礫含む
4. 10YR2/3 黒褐色 径10mm位の石含む

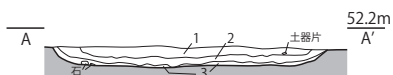
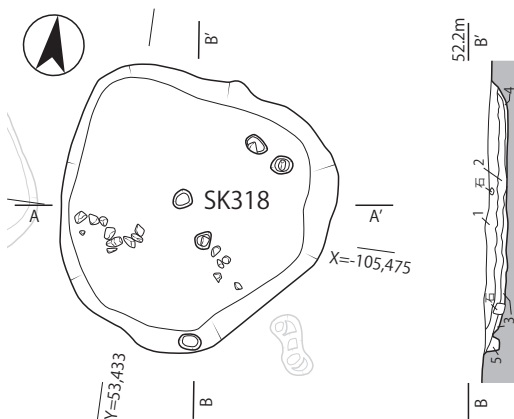
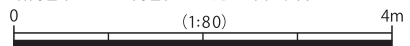
第96図 SK222・228・302・312 平面・断面図 (1:40・1:80)



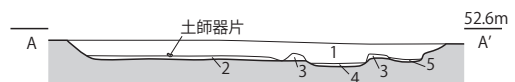
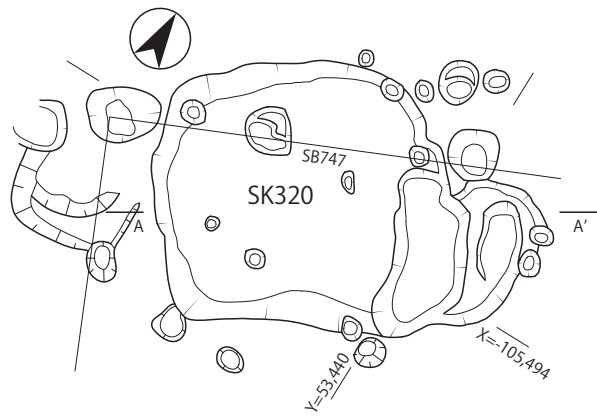
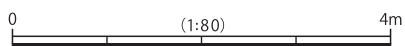
1. 10YR2/1 黒色シルト質砂質土 (10YR3/4 暗褐色斑状に少量混じる) 径30mm~2mm位の礫含む 土器片含む
2. 10YR3/1 黒褐色シルト質砂質土 (10YR3/4 暗褐色少量混じる) 径20mm~2mm位の礫含む 土器片含む
3. 10YR3/1 黒褐色粘質土 (10YR4/6 褐色多く混じる) 粗砂、径40mm~2mm位の礫含む 地山ブロック混濁
4. 10YR3/1 黒褐色粘質土 (10YR4/6 褐色底に多く混じる) 粗砂含む



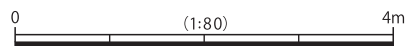
1. 10YR2/2 黒褐色 径10mm~3mm位の礫含む
2. 10YR3/3 暗褐色 (10YR4/3 にぶい黄褐色斑らに混じる) 砂粒多く含む
3. 10YR2/1 黒色 (10YR3/4 暗褐色微量混じる) 径20mm~1mm位の砂礫含む 炭化物微量混じる
4. 10YR2/1 黒色 (10YR2/2 黒褐色斑状に7.5YR4/4 褐色少量混じる) 炭化物、粗砂、径15mm~3mm位の礫少量含む
5. 10YR2/2 黒褐色 (7.5YR4/4 褐色少量混じる) 粗砂、径10mm位の礫含む
6. 10YR2/2 黒褐色 (7.5YR4/4 褐色多く混じる) 粗砂含む
7. 10YR3/3 暗褐色 (7.5YR4/4 褐色多量に混じる) 粗砂含む



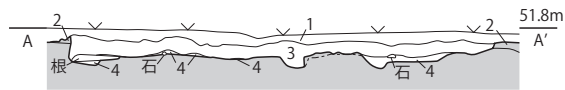
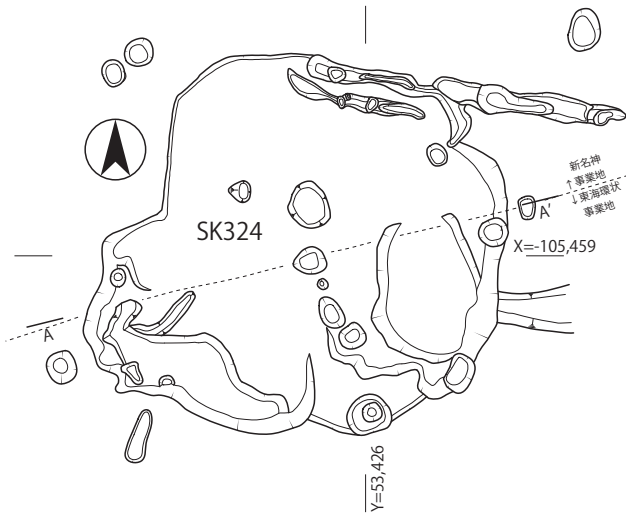
1. 10YR2/1 黒色 (10YR3/2 黒褐色微量混じる) 径10mm~2mm位の礫、炭化物少量含む
2. 10YR3/1 黒褐色 (7.5YR4/4 褐色少量、10YR3/2 黒褐色斑らに混じる) 径8mm位の礫少量、炭化物微量含む
3. 10YR3/2 黒褐色 (10YR4/6 褐色多量に混じる) 粗砂含む
4. 10YR3/2 黒褐色
5. 10YR3/2 黒褐色 (7.5YR4/4 褐色少量混じる)



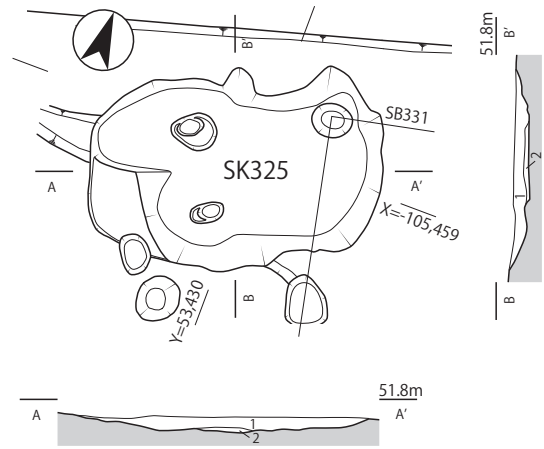
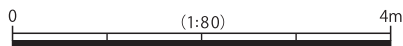
1. 7.5YR3/1 黒褐色シルト質粘質土 (土器器片・鉄滓出土)
2. 7.5YR3/2 黒褐色粘質土に7.5YR4/4 褐色粘質土が斑らに混じる
3. 7.5YR4/3 褐色粘質土に7.5YR3/3 暗褐色粘質土が斑らに混じる
4. 7.5YR4/3 褐色粘質土
5. 7.5YR3/1 黒褐色粘質土



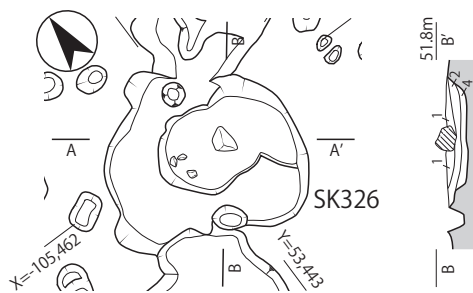
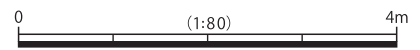
第97図 SK313・315・318・320 平面・断面図 (1:80)



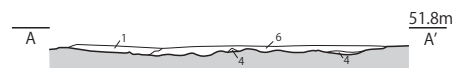
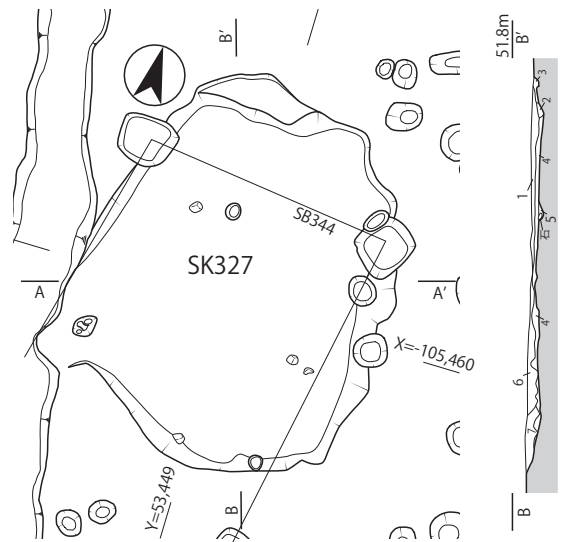
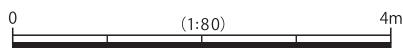
1. 表土
2. 10YR3/2 黒褐色 (10YR2/1 黒色少量混じる) 粗砂含む (黒ボク)
3. 10YR3/1 黒褐色 (10YR4/6 褐色斑状に少量混じる) 径 10mm~1mm位の石含む 粘性あり
4. 10YR2/2 黒褐色 (10YR3/3 暗褐色多く混じる) 粗砂含む 粘性あり



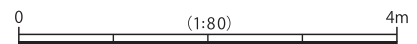
1. 10YR3/1 黒褐色 (10YR3/4 暗褐色少量混じる) 粗砂、径50mm~2mm位の礫含む
2. 10YR3/3 暗褐色 (10YR4/6 褐色斑状に混じる) 粗砂、径30mm位の礫含む



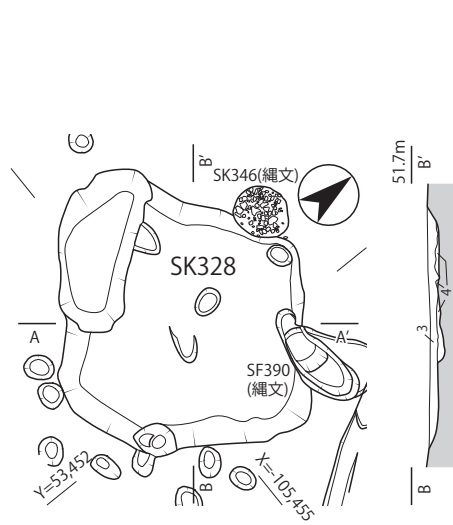
1. 10YR2/1 黒色 (10YR3/2 黒褐色少量、7.5YR5/8 明褐色 (焼土) 点々と混じる) 炭化物、径10mm~2mm位の礫少量含む
2. 10YR3/1 黒褐色 (7.5YR5/8 明褐色 (焼土) 点々と混じる) 径20mm~10mm位の礫含む
3. 10YR3/1 黒褐色 (10YR4/6 褐色少量混じる)
4. 10YR2/1 黒色 (10YR4/6 褐色斑状に混じる) 炭化物、焼土 (7.5YR5/8 明褐色) 少量、径50mm~30mmの礫含む



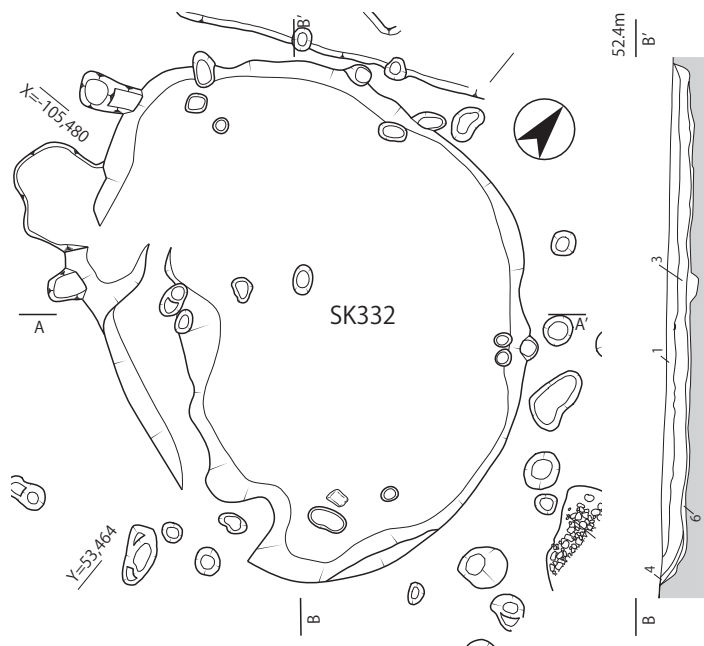
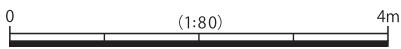
1. 10YR3/2 黒褐色 (10YR2/2 黒褐色~10YR3/3 暗褐色斑状に混じる) 細砂、径30mm~2mm位の礫含む
2. 10YR3/1 黒褐色 (10YR4/6 褐色少量混じる)
3. 10YR3/2 黒褐色 (10YR4/6 褐色多く混じる) 粗砂含む
4. 10YR3/2 黒褐色 (10YR4/4 褐色ブロック状に混じる) 径50mm~10mm位の礫含む
5. 10YR2/2 黒褐色 (10YR3/3 暗褐色多く混じる)
6. 10YR3/2 黒褐色 (10YR4/4 褐色斑状に混じる) 粗砂、径5mm位の礫含む
7. 10YR3/1 黒褐色 (10YR4/4 褐色斑状に混じる) 径30mm~10mm位の石含む



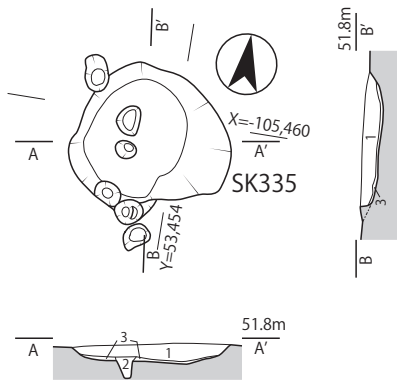
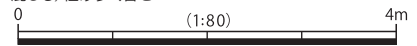
第98図 SK324・325・326・327 平面・断面図 (1:80)



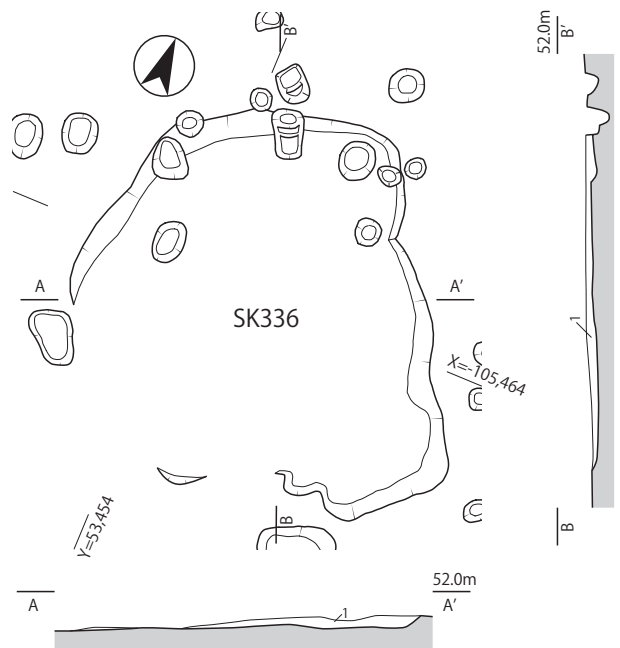
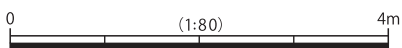
1. 10YR2/1黒色 (10YR3/3暗褐色斑状に混じる)炭化物微量、径30mm~2mmの礫含む
2. 10YR3/1黒褐色 (10YR4/3にぶい黄褐色多く混じる)
3. 10YR3/1黒褐色 (10YR3/3暗褐色斑状に混じる)炭化物少量、径20mm~2mmの礫含む
4. 10YR2/1黒色 (10YR3/3暗褐色斑状に多く混じる)径20mm~2mmの礫含む



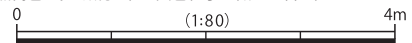
1. 10YR3/1黒褐色 (10YR3/3暗褐色少量混じる)粗砂含む
2. 10YR3/1黒褐色 (10YR3/2黒褐色少量混じる 5YR4/8赤褐色:焼土:少量混じる)土器片、炭化物、径30mm~5mm位の礫含む
3. 10YR3/1黒褐色 (10YR3/3暗褐色斑状に少量、5YR4/8赤褐色 (焼土)少量混じる)粗砂、炭化物含む
4. 10YR2/2~3/1黒褐色 (10YR4/6褐色多く混じる)粗砂、炭化物含む
5. 10YR3/1黒褐色 (10YR4/6褐色少量混じる)炭化物少量、粗砂含む
6. 10YR3/2黒褐色 (10YR4/4褐色多量に混じる)粗砂多く含む



1. 10YR2/1黒色 (10YR3/3暗褐色少量混じる)粗砂、径40mm~5mm位の礫含む
2. 10YR2/1黒色 (10YR4/4褐色少量混じる)粗砂、径50mm位の礫含む
3. 10YR2/1黒色 (10YR3/3暗褐色多量に混じる)炭化物少量、粗砂含む



1. 10YR2/1黒色 (10YR3/2黒褐色を多く、焼土粒と黄色粒子を微量に含む)



第99図 SK328・332・335・336 平面・断面図 (1:80)

遺物は土師器細片が少量の他、主なものとして、土師器甕（432～436）と把手（437）がある。

S K 339（第100図） 南区中央部で検出した土坑である。径0.7 mの円形を呈する。底面に凹凸があり平坦ではない。深さは深い部分で20cm程度である。埋土には焼土や炭化物が含まれており、焼土の多寡で分層したが、切り合いがあるわけではない。

底面から土師器片が4点出土した。器種等は不明だが、ハケメの調整が内外面に施されており、胎土や焼成等、飛鳥時代の他の遺構から出土しているものと差異のないものである。

S K 340（第100図） 南区中央部で検出した土坑である。複数のピットと重複しており、本来の規模や形状は不明である。深さは最も深い部分で50cmである。

遺物は土師器細片が10点出土した他、須恵器杯身（438）がある。

S K 356（第100図） 南区中央部西側の北壁付近で検出した土坑である。直接の切り合いはないがS B 331と重複する。全体の平面形は径0.8 mの不整形を呈するが、断面の形状から2つのピットが上部で崩れ、ひとつながりとなったものと思われる。

浅い方のピットから須恵器壺（439）が出土した。

S K 358（第62図） 南区中央部で検出した竪穴住居群に伴う土坑である。径0.9 mの円形を呈する。底面には凸凹があり平坦ではない。深さは29cmである。埋土は、黒褐色土に暗褐色土が斑らに混じるもので、土器等の遺物は出土せず、焼土や木炭等も確認されていない。

検出された位置等からS H 354に伴う中央土坑であると思われる。

S K 359（第62図） 南区中央部で検出した竪穴住居群に伴う土坑である。長径1.6 m×短径1.4 mの楕円形を呈する。底面は比較的平坦で、深さは32 cmである。埋土は、黒褐色土に暗褐色土が斑らに混じるもので、一部に焼土や炭化物が粒状に含まれていた。土師器甕（440・441）、須恵器杯蓋（442）が出土した。

S H 304等にみられる中央土坑と思われるが、対応する竪穴住居は確定できなかった。

S K 360（第62図） 南区中央部で検出した竪穴住

居群に伴う土坑である。長径1.4 m×短径1.2 mの楕円形を呈する。底面は比較的平坦で、深さは32 cmである。埋土は、黒～黒褐色土に暗褐色土が斑らに混じるもので、焼土や炭化物は確認されなかった。遺物は、土師器片が10点程度出土した。主なものに土師器甕（443）がある。

検出された位置等からS H 310に伴う中央土坑であると思われる。

S K 361（第62図） 南区中央部で検出した竪穴住居群に伴う土坑である。径1.6 mの円形を呈する。底面は比較的平坦で、深さは26cmである。埋土は、黒褐～暗褐色土に暗褐～褐色土が斑らに混じるもので、焼土や炭化物・土器片が多く含まれていた。遺物は、主なものに須恵器杯蓋（444・445）・杯身（446）がある。

検出された位置等からS H 352に伴う中央土坑であると思われる。

S K 362（第62図） 南区中央部で検出した竪穴住居群に伴う土坑である。長径2.0 m×短径0.9 mの長楕円形を呈する。底面は、南北2箇所やや深い部分があり、深さは、深いところで28cmである。

調査時は認識できなかったが、形状等から2基の土坑が重複しているものと思われる。このうち北側は位置等からS H 310の貯蔵穴であると考えられるが、南側に対応する竪穴住居は確定できなかった。

遺物は、南側から土師器細片が数点出土している。

S K 363（第62図） 南区中央部で検出した竪穴住居群に伴う土坑である。長径1.6 m×短径1.2 mの楕円形を呈する。底面は、東側は浅く、西側が深い。深さは、東側が20cm、西側が44cmである。土層断面でも切り合いが確認できるため、2基の土坑が重複しているものと考えられる。

遺物は、須恵器高杯（447）が出土しているが、出土位置の詳細は不明である。

貯蔵穴やS H 304等にみられる中央土坑と思われるが、対応する竪穴住居は確定できなかった。

S K 366（第100図） 南区中央部東側で検出した土坑である。径1.2 mの不整形を呈する。底面は中央付近に向かって徐々に深く掘られており、最も深い部分で深さは30cm程度である。土層はレンズ状

の堆積で埋土には焼土や炭化物が含まれている。土器等の遺物の出土はなかったが、いわゆる廃棄土坑と思われる。埋土等の特徴から飛鳥時代の遺構と判断した。

S K 395 (第 55 図) 北区東側で検出した土坑である。古墳時代の竪穴住居 S H 387 と重複している。長径 2.2 m × 短径 1.5 m の楕円形を呈し、深さは 10 cm 程度である。

遺物は、土師器甕 (448) が出土した。

S K 608・612・616・620・621・623 (第 101 図) 北区西側で検出された土坑である。各土坑から土師器片が 1～3 点出土している。遺物は細片のため図化できないものばかりであるが、胎土や焼成等の特徴は他の飛鳥時代の遺構から出土しているものと差異は感じられないため、飛鳥時代の遺構と判断した。

規模や新旧関係については一覧表を参照された。

S K 702 (第 67 図) 南区東側北寄りで検出した土坑である。S H 706 の貯蔵穴と考えられる。長径 1.1 m × 短径 0.7 m の楕円形を呈し、竪穴住居の底面からの深さは 32cm である。

主な遺物として、土師器甕 (449)、金床石 (450) があり、この他に土師器片が 4 点と鉄滓 4 点 (40.0 g) が出土した。

S K 703・714・716・722・739・741 (第 24・25・26・92 図)

南区で検出された土坑である。各土坑から土師器片が 1～3 点出土している。遺物は細片のため図化できないものばかりであるが、胎土や焼成等の特徴は他の飛鳥時代の遺構から出土しているものと差異は感じられないため、飛鳥時代の遺構と判断した。

規模や新旧関係については一覧表を参照された。

S K 707 (第 67 図) 南区東側北寄りで検出した土坑である。S H 706 と重複するが、切り合いは不明である。長径 3.4 m × 短径 2.3 m の不整形を呈する。底面は平坦で、深さは 30cm 程度である。埋土には焼土塊や土師器片が含まれていた。

S K 710 (第 102 図) 南区東側で検出した土坑である。長径 2.8 m × 短径 2.0 m の不整形を呈する。底面には凹凸があり平坦ではない。深さは 40cm 程度である。

遺物は、土師器片・須恵器片が少数出土した。図化できたものに須恵器杯蓋 (451) がある。

S K 711 (第 102 図) 南区東側で検出した土坑である。長径 4.8 m × 短径 3.6 m の不整形を呈する。土層断面では西側の楕円形の土坑とは切り合いがあるが、北側の土坑とは切り合いがなく、また、第 3 層は第 5 層に切り込んでいるため、3 基程度の土坑の重複が考えられるが、それぞれの範囲はよく分からない。

遺物は主なものに、土師器皿 (452)、須恵器杯蓋 (455～457)・杯身 (458・459)・高台付杯身 (460～462)、高杯 (463)・甕 (464)、土錘 (453・454)、弥生土器底部 (465) がある。それぞれの出土位置は明確でないが、重複する遺構のうち、最も新しいものは、8 世紀まで下る可能性がある。

S K 719 (第 102 図) 南区東側で検出した土坑である。南側は攪乱溝によって破壊されているが、残存部分は、長径 2.4 m × 短径 1.2 m の半円形を呈する。底面は平坦で、深さは 20cm 程度である。S K 720 と重複し、それより新しい。遺物は出土しなかった。

埋土の特徴や遺構の形状等から飛鳥時代の遺構とした。

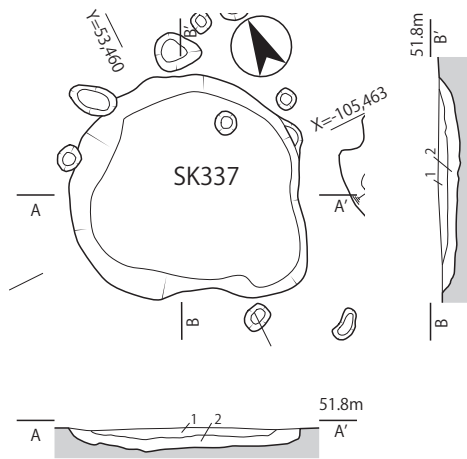
S K 720 (第 102 図) 南区東側で検出した土坑である。南側は S K 719 や攪乱溝によって破壊されているが、残存部分は、長径 6.0 m × 短径 2.2 m の不整形を呈し、深さは 40cm 程度である。

遺物は、土師器甕 (466・467)、須恵器杯身 (468)、埋没過程で混入したと思われる弥生土器壺 (469) がある。

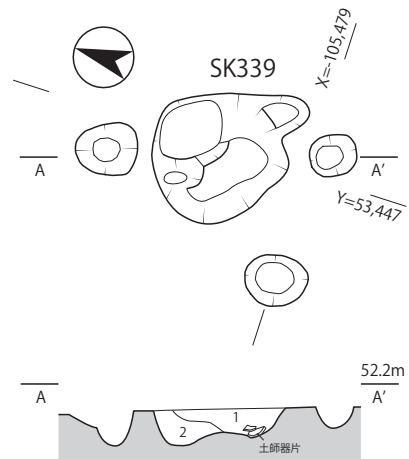
S K 721 (第 73 図) 南区東端で検出した土坑である。平成 23 年度に新名神事業として行われた第 4 次調査で確認されている S K 1061 と同一遺構である。第 4 次調査で確認されていなかった西隅を検出した。

長径 6.4 m × 短径 5.4 m の不整形を呈し、深さは 30cm 程度である。埋土には焼土や炭化物を含んでいる。

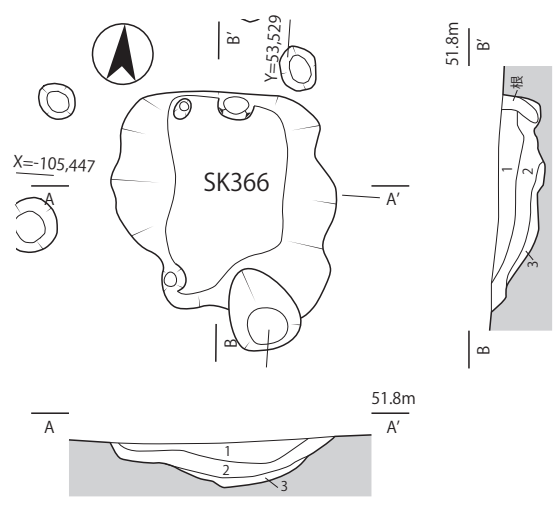
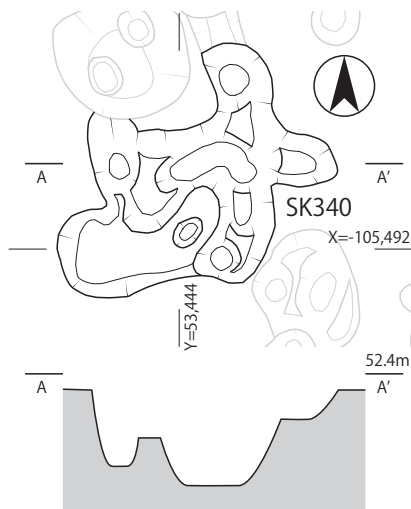
遺物は小片が多いが、図化できたものとして土師器甕 (470) がある。その他は、埋没過程で混入したとみられる縄文土器底部片 (471)、弥生土器鉢



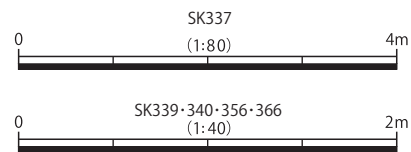
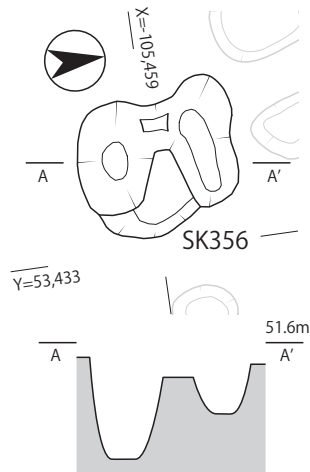
1. 10YR2/2黒褐色(10YR3/3暗褐色斑らに混じる)径20mm~3mm位の礫含む
2. 10YR3/1黒褐色(10YR2/2黒褐色斑らに、7.5YR4/4褐色ブロック状に少量混じる)粗砂、径20mm~10mm位の礫含む



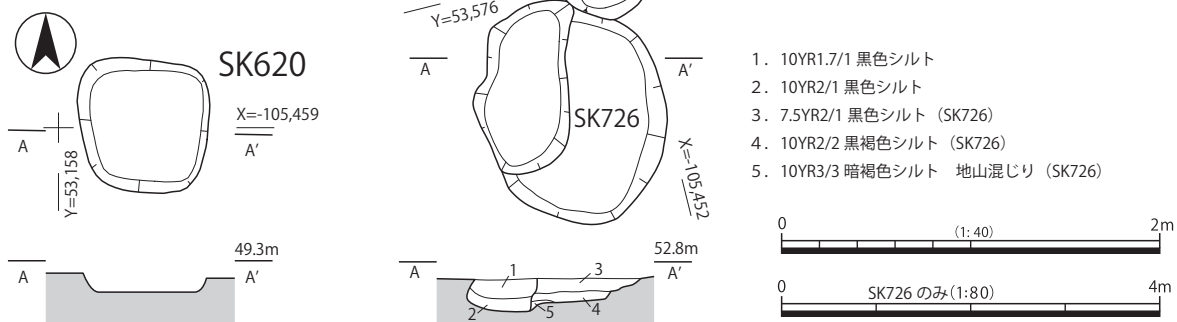
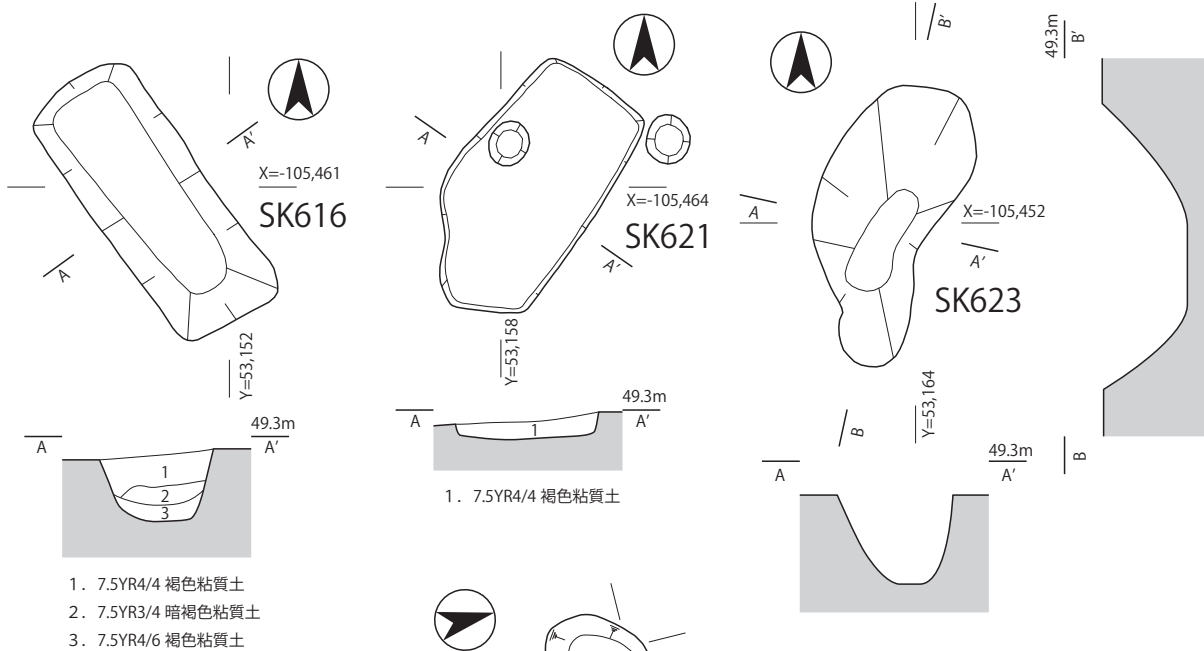
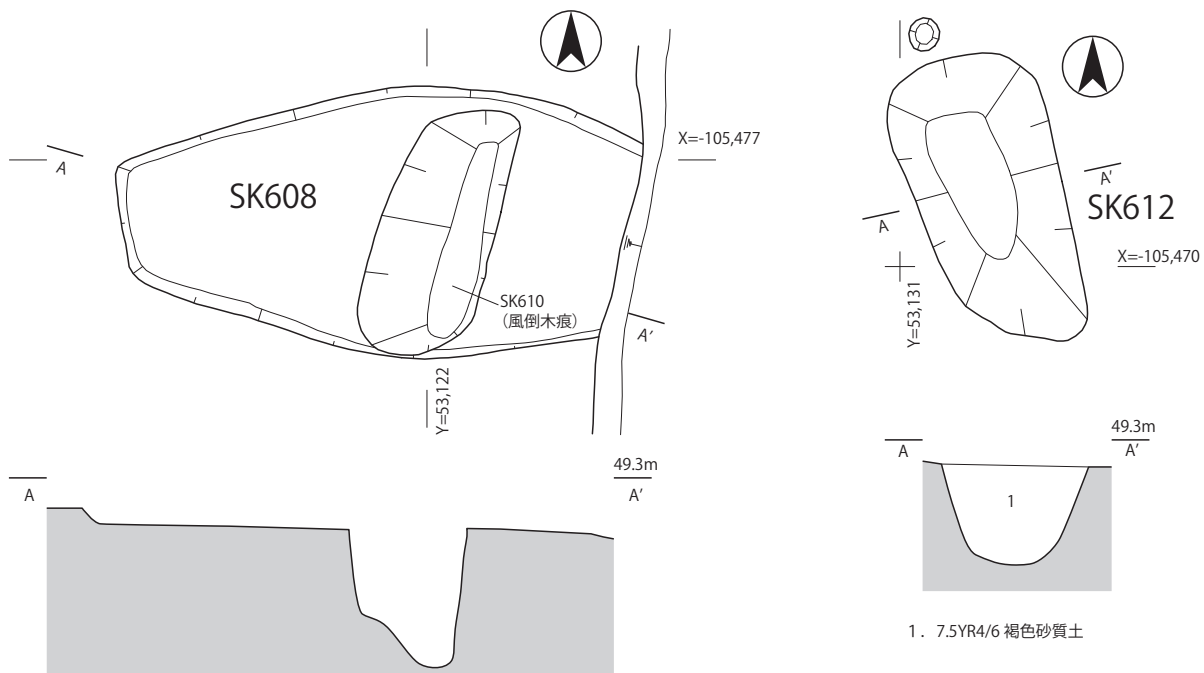
1. 7.5YR4/2灰褐色シルト質粘質土に10mm程の焼土粒と2mm程の炭粒が混じる
2. 7.5YR4/2灰褐色シルト質粘質土(炭粒混じる)



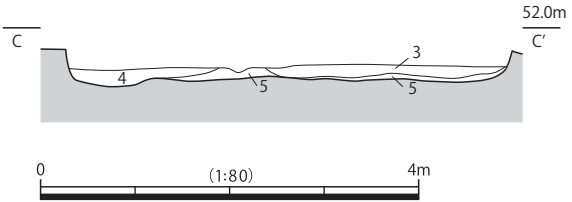
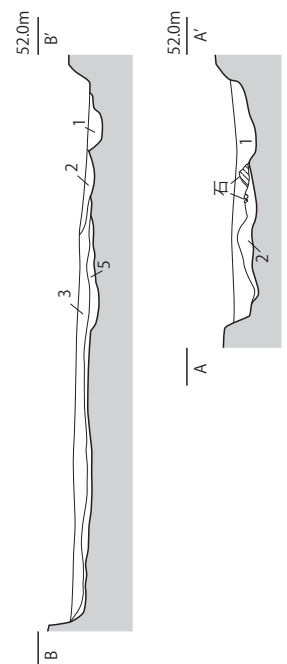
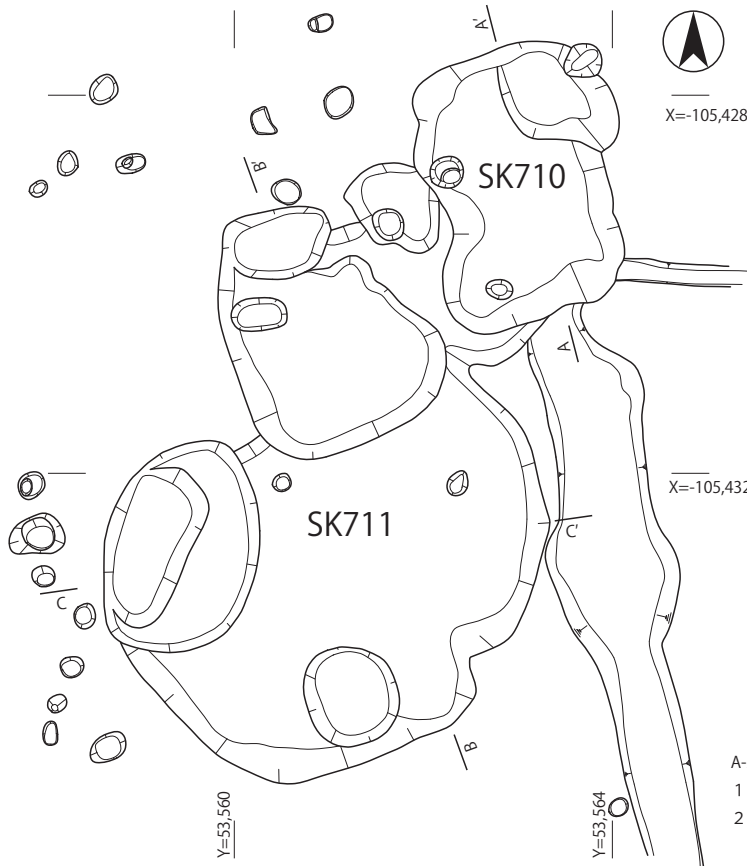
1. 10YR2/2黒褐色(焼土7.5YR4/6褐色ブロック状~粒状に混じる)炭化物、径2mm位の礫含む
2. 10YR2/3黒褐色(10YR3/3暗褐色斑らに多く混じる)炭化物多く、径5mm~2mmの礫含む
3. 10YR3/4暗褐色(10YR2/2黒褐色少量混じる)粘性あり



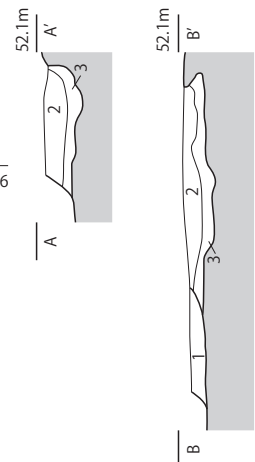
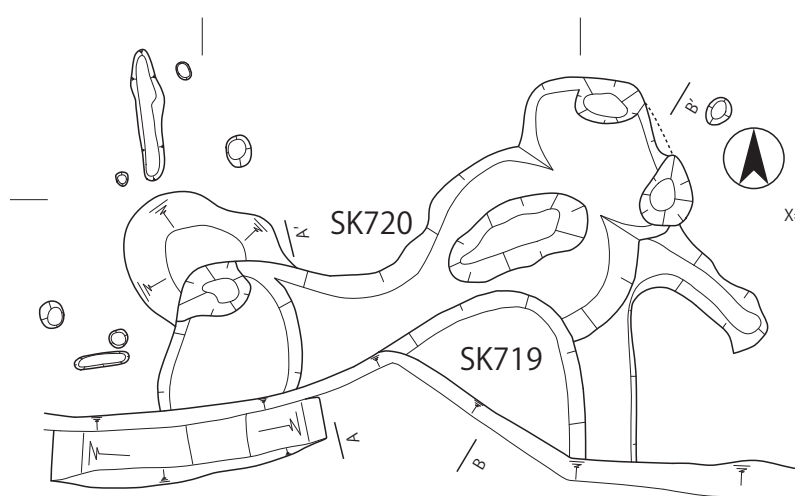
第100図 SK337・339・340・356・366 平面・断面図 (1:40・1:80)



第101図 SK608・612・616・620・621・623・726 平面・断面図 (1:40・1:80)



- A-A'
- 10YR1.7/1 黒色シルト
 - 10YR3/1 黒褐色シルト
(10YR4/3 にぶい黄褐色シルトブロック含む)
- B-B', C-C'
- 10YR2/1 黒色シルト
 - 10YR3/1 黒褐色シルト
(10YR4/3 にぶい黄褐色シルトブロック含む)
 - 10YR1.7/1 黒色シルト
 - 10YR1.7/1 黒色シルト
 - 10YR4/2 灰黄褐色シルト
(10YR4/3 にぶい黄褐色シルトブロック含む)



- 7.5YR3/1 黒褐色シルト
7.5YR5/3 にぶい褐色シルトブロックを含む (SK719)
- 7.5YR2/1 ~ 10YR1.7/1 黒色シルト (SK720)
- 10YR2/1 ~ 3/2 黒色~黒褐色シルト (SK720)

第102図 SK710・711・719・720 平面・断面図 (1:80)

(472)、チャート剥片(473)がある。

S K 726 (第101図) 南区東側で検出した土坑である。南側は重複する土坑により破壊されているが、径2.0mのほぼ円形を呈すると思われる。深さは25cm程度である。

遺物は、土師器甕(474)、須恵器杯蓋(475・476)の他、焼土塊が出土した。

S K 728 (第70図) 南区東端で検出した土坑である。径1.0mの不整形円形を呈し、深さは20cm程度である。埋土には焼土塊が多量に含まれている。削平のため、S H 731・732との新旧関係は判然としないが、S H 732の中央部にも同様の土坑(S K 729)が検出されているため、これらの土坑はそれぞれの堅穴住居に伴うものとみてよいと思われる。

遺物は土師器片が数点と、須恵器杯身(477)が出土している。

S K 729 (第70図) 南区東端で検出した土坑である。径2.0mの不整形を呈し、深さは22cmである。埋土には焼土塊が多量に含まれている。S H 732の項で既述であるが、土層断面図の第2層は締まりがないため、床土ではなく埋没過程で堆積した土と考えられる。土坑は堅穴住居に伴うもので、少なくとも堅穴住居の廃絶時には開口していたものと思われる。

遺物は、土師器片が2点出土したが、細片のため図化はできなかった。

S K 735 (第72図) 南区東端南壁付近で検出した土坑である。S H 737と重複しており、それより古い。北側を攪乱溝に破壊されていることに加え、南側が調査区外であるため、本来の規模や形状は不明である。遺物は土師器片数点の他、須恵器杯身(478)がある。

【註】

- ①田辺昭三『須恵器大成』角川書店1980。
- ②第9次調査については、三重県埋蔵文化財センター『近畿自動車道名古屋神戸線(四日市JCT～亀山西JCT)埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ』2013による。
- ③検出面からの深さである。以下同じ。
- ④被熱が強いことと形状から、おそらく竈で使用されていた支柱石と考えられる。
- ⑤第5次調査については、三重県埋蔵文化財センター『近畿自動車道名古屋神戸線(四日市JCT～亀山西JCT)埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ』2012による。

⑥また、検出時の写真では土坑が堅穴床面を切っているように見えるものもあるが、これは炎天下での調査であったため、土坑などの深い部分以外が乾燥してしまったために、土坑だけが周囲から浮き上がって見えているものである。切り合いを示すものとはいえないため、注意が必要である。

⑦たとえば、S K 362の北半分はS H 310の貯蔵穴の重複と考えられる。

⑧位置的には東壁中央付近の焼土も候補となるが、S H 310の床面より上で竈の崩落土や灰が検出できなかったため、別の堅穴住居に伴うものと判断した。

⑨S K 363も候補となるが、S H 304例と比較すると竈に近すぎる。

⑩調査時のメモには、「どちらの埋土も似ており切り合いは不明瞭だが、西隅で重複するS B 342の柱穴は、S H 317の堅穴に切られているように見える」とある。

⑪調査担当者によると「削平されて残りが悪いため、図では床土のように見えてしまうが、フカフカして締まりは無かった」とのことである。

⑫第8次調査については、三重県埋蔵文化財センター『近畿自動車道名古屋神戸線(四日市JCT～亀山西JCT)埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ』2013による。

⑬第4次調査については、三重県埋蔵文化財センター『近畿自動車道名古屋神戸線(四日市JCT～亀山西JCT)埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ』2012による。

⑭山中敏史「Ⅶ-3 造営尺」『古代の官衙遺跡 I 遺構編』奈良文化財研究所編2003を参考にした。

⑮平成22年度の第2次調査では掘立柱建物として認識できなかったが、平成24年度に行われた新名神高速道路建設事業に伴う第9次調査によって掘立柱建物であることが確認された。三重県埋蔵文化財センター『近畿自動車道名古屋神戸線(四日市JCT～亀山西JCT)埋蔵文化財発掘調査概報Ⅲ』2013。

⑯南側の桁行4間は平成22年度の第2次調査で確認されていたが北側は事業地外のため確認できなかった。のち、平成23年度に行われた新名神高速道路建設事業に伴う第5次調査によって、これ以上北に延びないことが確認されたが、梁行中央の柱穴の記録はない。三重県埋蔵文化財センター『近畿自動車道名古屋神戸線(四日市JCT～亀山西JCT)埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ』2012。

⑰事業地外の北側部分については、三重県埋蔵文化財センター『近畿自動車道名古屋神戸線(四日市JCT～亀山西JCT)埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ』2012による。

⑱現地調査の検出時に、この7つの柱穴は周囲の他のピットに比べて明らかに区別できた。北西隅の柱穴やさらに広がる可能性を考え、再三、検出を行ったが柱穴は確認できなかった。

⑲南側の桁行4間は平成23年度の第3次調査で確認され、柱列(SA308)と命名されたが、平成25年度に行われた新名神高速道路建設事業に伴う第11次調査によって掘立柱建物であることが確認された。三重県埋蔵文化財センター『近畿自動車道名古屋神戸線(四日市JCT～亀山西JCT)埋蔵文化財発掘調査概報Ⅳ』2014。

⑳事業地外の北側部分については、三重県埋蔵文化財センター『近畿自動車道名古屋神戸線(四日市JCT～亀山西JCT)埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ』2012による。

- ④東側の3つの柱穴を採とらずに、2間(4.2m)四方の総柱建物とすることもできるが、柱間の寸法や方位が揃うことを重視し、3間×2間とした。
- ⑤事業地外の北西部分については、三重県埋蔵文化財センター『近畿自動車道名古屋神戸線(四日市JCT～亀山西JCT)埋蔵文化財発掘調査概報Ⅳ』2014による。
- ⑥検出時だけでなく遺構掘削時にも数段階に分けて検出を試みているが、平面で検出できたピットは少数であった。このため、多くは切り合いが無い可能性もあるの

だが、平面で検出できなかったピットが土層断面で確認できた例も一定数あるため、すべてに切り合いがなかったとは言い切れない。

- ⑦第11次調査については、三重県埋蔵文化財センター『近畿自動車道名古屋神戸線(四日市JCT～亀山西JCT)埋蔵文化財発掘調査概報Ⅳ』2014による。

第5節 中世

(1) 土坑

火葬穴の可能性のある土坑2基を検出した。遺物や人骨の出土はないが、菟上遺跡^①で中世後期の火葬墓として報告されている遺構に規模や形態が類似するものである。

SK 223 (第103図) 南区西側で検出した土坑である。長辺1.6m×短辺0.8mの長方形を呈する。底面は平坦で、壁面はやや直立している。深さは12cmである。被熱痕(焼土)が壁面と底面の一部で確認できた。埋土には焼土粒や炭化物が多く含まれていたが、遺物や人骨は出土していない。

SK 230 (第103図) 南区西側で検出した土坑で

ある。長辺0.9m×短辺0.7mの長方形を呈する。飛鳥時代のものと思われるピットと重複している。底面は平坦で、壁面はやや直立している。深さは12cmである。被熱痕(焼土)が壁面と底面の一部で確認できた。埋土には焼土粒や炭化物が多く含まれていたが、遺物や人骨は出土していない。

【註】

- ①三重県埋蔵文化財センター『菟上遺跡発掘調査報告』2005による。なお、菟上遺跡では129基の調査例のうち約4割からは人骨も遺物も出土していない。

第6節 時期不明

時期の特定できなかった遺構のうち、主なものをここに記載する。

(1) 土坑

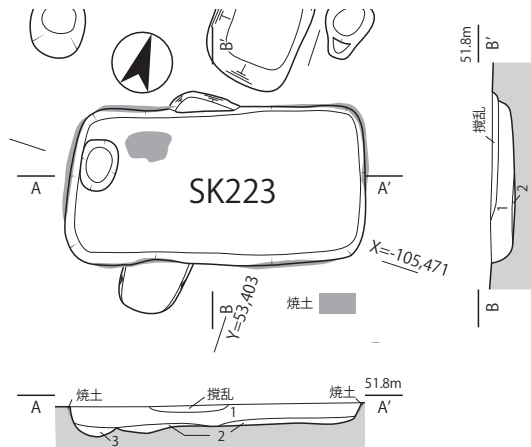
SK 229 (第103図) 南区西側で検出した土坑である。長径1.5m×短径0.9mの楕円形を呈する。第1層が黒ボク由来の土であることから、縄文時代早期までは遡らない。第2層は地山の土がブロック状に混じっており、自然堆積ではないと思われる。遺物の出土はなく、遺構の性格も不明である。

SK 350 (第103図) 南区西側で検出した土坑である。長辺1.2m×短辺0.7mの長方形を呈する。飛鳥時代のものと思われるピット(第1層)と重複しており、それより古いことが分かる。第2層には微量であるが黒ボク由来の土が含まれるため、縄文時代早期までは遡らない。遺物の出土はなく、遺構

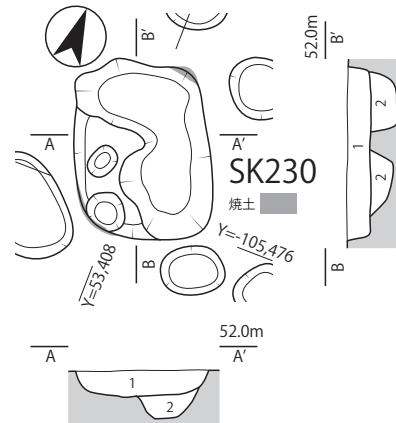
の性格も不明である。

SK 365 (第103図) 南区西側で検出した土坑である。長径1.7m×短径0.9mの楕円形を呈する。底面は比較的平坦だが、西側が浅くなっている。深い部分で、深さは20cmである。埋土に黒ボク由来の土が含まれることから縄文時代早期までは遡らない。遺物の出土はなく、遺構の性格も不明である。

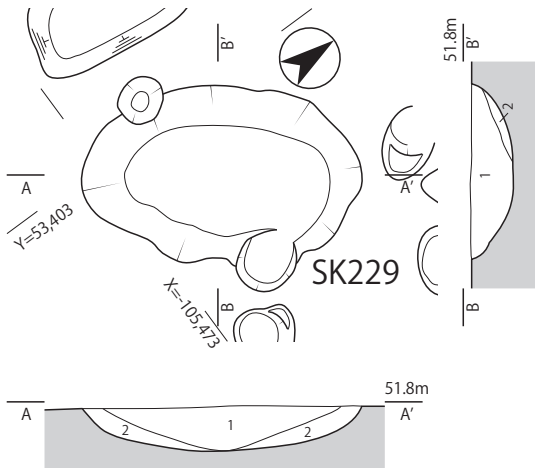
SK 377 (第103図) 北区中央部で検出した土坑である。長径1.3m×短径0.8mの楕円形を呈する。底面はやや丸く、中央部が深い。深さは20cmである。埋土には炭化物を含んでいる。埋土に黒ボクを含まないが、北区では縄文時代早期以降でも黒ボクを含まない遺構も多いため、時期の上限を特定することも難しい。遺物の出土はなく、遺構の性格も不明である。



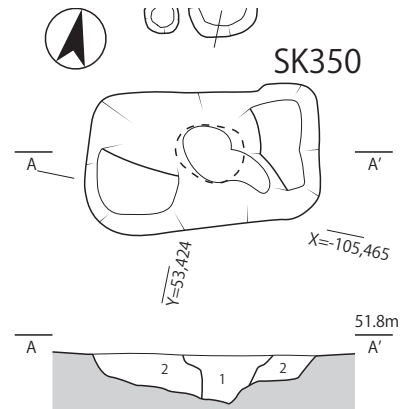
1. 7.5YR3/3暗褐色粘質土
2. 7.5YR3/1黒褐色粘質土 (灰に焼土粒や炭粒が混じる)
3. 7.5YR3/3暗褐色粘質土 (2より少し明るい)



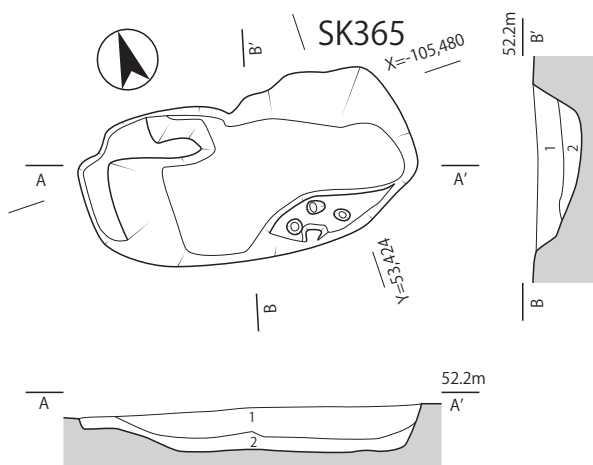
1. 7.5YR2/1黒褐色粘質土に炭のかげらが混じる (SK230埋土)
2. 7.5YR3/3暗褐色粘質土に地山ブロック混じる (飛鳥時代ピット)



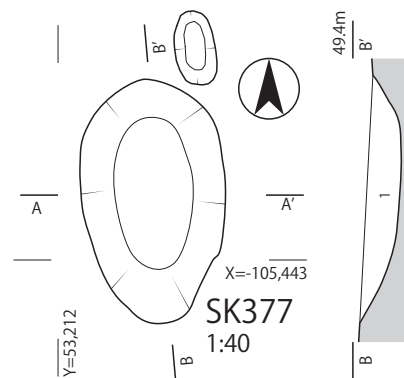
1. 7.5YR3/1黒褐色粘質土
2. 7.5YR3/3暗褐色粘質土に7.5YR4/4褐色粘質土 (地山) がブロック状に混じる



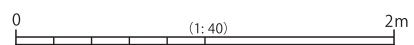
1. 10YR3/3暗褐色(10YR4/3にぶい黄褐色と10YR7/6明黄褐色(地山)を少量含む)(飛鳥時代ピット)
2. 10YR4/3にぶい黄褐色(10YR3/1黒褐色と10YR7/6明黄褐色(地山)を微量に含む)



1. 10YR2/3黒褐色(7.5YR3/4暗褐色斑らに混じる)粗砂含む
2. 10YR3/3暗褐色(7.5YR3/4暗褐色斑らに多く混じる)粘性あり細砂、径10mmの礫含む



1. 7.5YR4/4褐色粘質土 径1mm程の炭粒含む



第103図 SK223・229・230・350・365・377 平面・断面図 (1:40)

第V章 遺物

今回の調査では、縄文時代早期～中世までの遺物が出土した。遺物の総重量は179.95kgである。

以下、時代ごとに報告する。

第1節 縄文時代

縄文時代の出土遺物には縄文土器^①と石器^②がある。早期・中期・後期と多時期にわたるものの、出土した土器は少ない。縄文土器は表面の摩滅した細片以外は、全点とりあげた。

石器は早期の炉穴(集石炉・煙道付炉穴)から敲石・磨石・石皿・礫器が比較的多く出土している。石器についても選別された全点を報告する。

以下、出土遺構ごとに記述する。

1 縄文時代早期の遺構出土遺物

縄文時代早期の遺構から出土した遺物をここで報告する。

S H 370 (1～10)

1は押型文土器小片である。形状等から底部付近と思われる。外面にネガティブな楕円文が縦方向に深く施文されている。内面は風化が激しく調整は不明である。

2は縄文土器小片である。外面に単節斜縄文、内面にヨコナデが施されている。

3～9は敲石である。5・7は磨石としても使用されている。6は表面の一部が被熱し赤変している。石材は、3・5・8が流紋岩、4・7が砂岩、6が花崗岩、9がホルンフェルスである。このうち、4と5について残存デンプン粒分析を行った結果、5からデンプン粒が検出された(詳細は第VI章参照)。

10は石皿の破片である。両端が破損しており、大半を欠損する。扁平な面の片面に使用痕が確認できる。ホルンフェルス製である。

S K 371 (11)

11は押型文土器小片である。外面に市松文、内面にヨコナデが施されている。上端の破断面に粘土の継ぎ目が確認できる。

S F 369 (12～14)

12は縄文土器小片である。外面に単節斜縄文が施されている。内面は剥離しており調整は不明である。

13・14はチャートの剥片である。13は不純物が

多い。14は一部に礫表が残る。色は、13が黒色、14が赤色である。

S F 374 (15)

15は押型文土器小片である。外面に山形文が横方向に浅く施文されている。内面は風化しているが、こちらにもかろうじて山形文が確認できる。

S F 390 (16)

16は敲石の破片である。中央の両面に敲打痕がある。扁平な面の一部には擦痕があり、磨石としても使用されたようである。砂岩製である。

残存デンプン粒分析を行ったが、デンプン粒は検出されなかった(詳細は第VI章参照)。

S F 391 (17)

17は押型文土器口縁部片である。口唇直下に短斜線列が1段施され、それ以下には、ネガティブな楕円文が横方向に施文されている。

S F 402 (18・19)

18は剥片である。石材は灰色のチャートである。

19は石皿である。扁平な面の片面に使用痕がみられる。砂岩製である。

残存デンプン粒分析を行ったが、デンプン粒は検出されなかった(詳細は第VI章参照)。

S K 341 (20・21)

20は磨石の破片である。被熱し赤変している。扁平な面の一方に使用痕がみられる。砂岩製である。

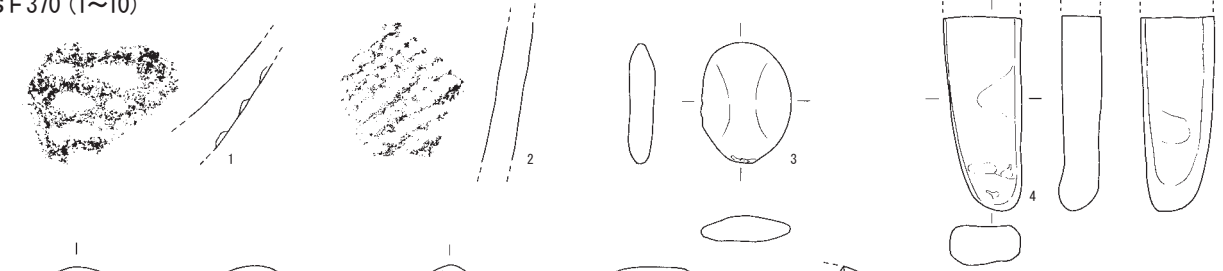
21は石皿の破片である。扁平な面の一方に使用痕がみられる。砂岩製で被熱し赤変している。

S K 341・S K 411 (22～35)

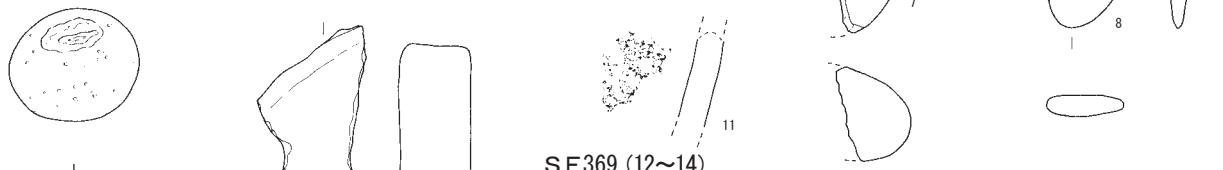
集石炉S K 341とS K 411は重複しており、検出面で確認された被熱礫に含まれていた石器はどちらの遺構に伴うものか分別できないものが多かった。そのような遺物を以下にまとめた。

22～24は礫器である。いずれも礫の一方に打撃によって刃(片刃)がつくられているものの鋭利さはあまりない。特に23は刃というより面を作り

SF370 (1~10)



SK371 (11)



SF369 (12~14)

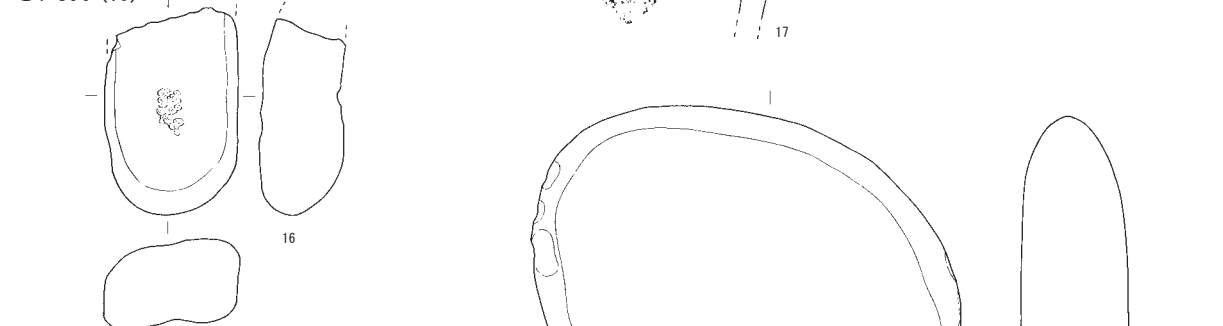


SF374 (15)

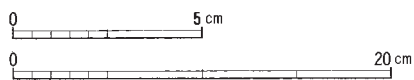
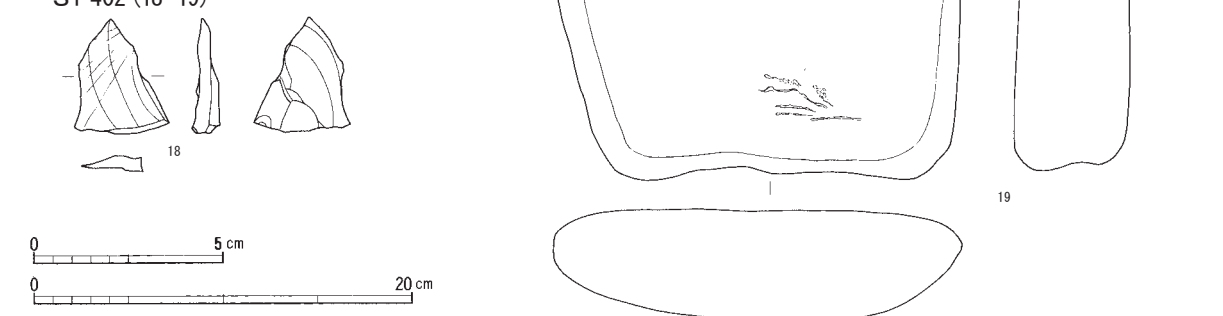


SF391 (17)

SF390 (16)

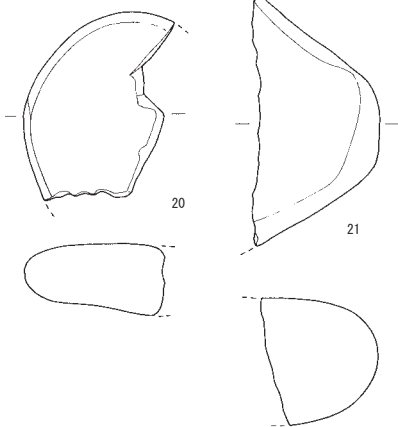


SF402 (18·19)



第104図 出土遺物実測図① (3・4~10・16・19は1:4、他は1:2)

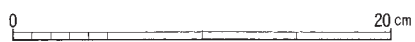
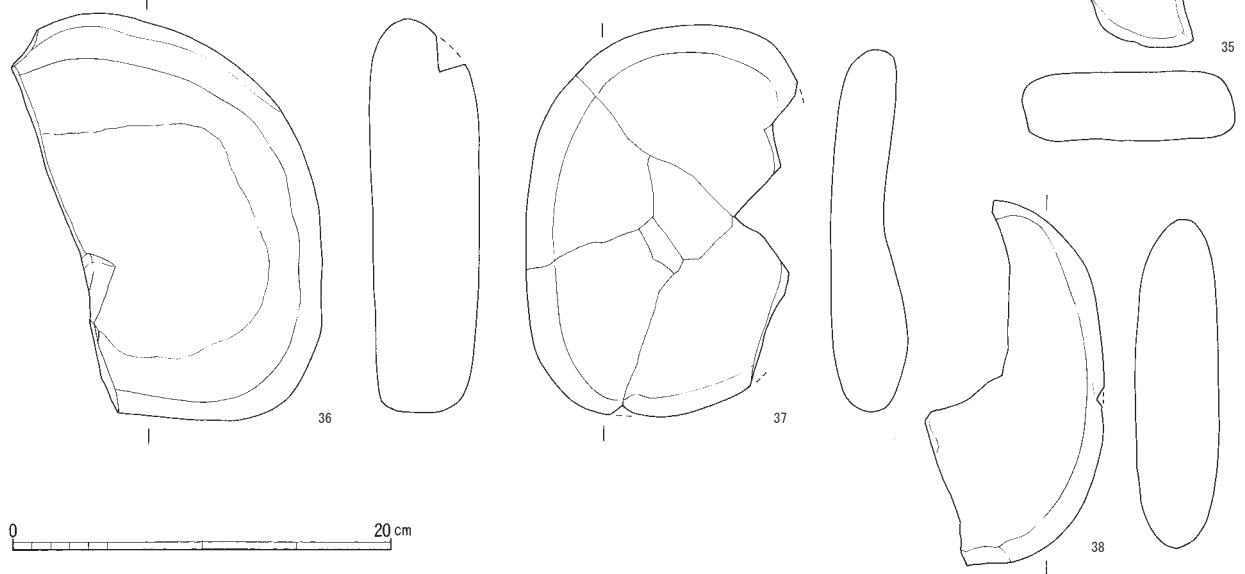
SK341 (20・21)



SK341・SK411 (22~35)



SK411 (36~38)



第105図 出土遺物実測図② (1 : 4)

出そうとした加工のようにも感じられる。また、23は一部に擦痕がみられることから磨石からの転用とみられる。石材は、22が花崗片麻岩、23流紋岩、24が砂岩である。

25は敲石の破片である。被熱し赤変している。大半が欠損しているが、破断面以外はほぼ全面にわたり使用痕が確認できる。図右側の面が特によく使われている。砂岩製である。

26～34は磨石の破片である。30・31・33は両面、他は片面に使用痕がみられる。いずれも砂岩製で被熱し赤変している。

35は石皿の破片である。扁平な面の両面に使用痕がみられる。砂岩製で赤く被熱している。

25と31について残存デンプン粒分析を行ったが、デンプン粒は検出されなかった（詳細は第VI章参照）。
SK 411 (36～38)

36～38は石皿の破片である。36・37は片面、38は両面に使用痕がみられる。いずれも砂岩製で被熱し赤変している。

36について残存デンプン粒分析を行った結果、デンプン粒が検出された（詳細は第VI章参照）。

SK 343 (39～45)

39は楔形石器である。対向する縁辺に階段状剥離が形成されている。黒色泥岩製である。

40は敲石の破片である。両面の中央に使用痕がある。風化のため不明瞭だが擦痕もあり、磨石としても使用された可能性がある。流紋岩製である。

41は磨石の破片である。半分程度が欠損している。扁平な面の両面と、側面の一部に使用痕がみられる。石材は泥岩由来のホルンフェルスである。

42～45は石皿である。いずれも集石炉の底石に転用されていた。使用痕は片面のみである。石材は45が流紋岩、他は砂岩である。砂岩製のものは被熱して赤変が顕著である。

45について残存デンプン粒分析を行った結果、デンプン粒が検出された（詳細は第VI章参照）。

SK 348 (46～51)

46・47は礫器である。46は片刃で先端の一部に使用痕とみられるつぶれた細かい剥離痕がみられる。47は下端に面をつくり出そうとした加工が施されている。どちらも緑色岩製である。

48・49は磨石の破片である。48は両面、49は片面に使用痕がみられる。どちらも砂岩製で被熱し赤変している。

50・51は石皿の破片である。扁平な両面に使用痕がある。どちらも砂岩製で被熱し赤変している。

49について残存デンプン粒分析を行ったが、デンプン粒は検出されなかった（詳細は第VI章参照）。
SK 349 (52～55)

52は楔形石器である。泥岩礫を用いている。両面の一部に礫表が残る。

53・54は礫器である。53は下端に刃（片刃）がつくられており、図ではあまり表現できなかったが、先端の一部は比較的鋭く尖る。面をつくろうと意図した加工である可能性もあるが、実際に握ってみると、面を利用するにはやや使いづらい。片麻岩製。

54は2側縁に刃（片刃）がつくられている。いずれの刃も鈍く鋭利さはない。ホルンフェルス製である。

55は磨石の破片である。半分程度が欠損している。両面に使用痕がある。砂岩製である。

55について残存デンプン粒分析を行ったが、デンプン粒は検出されなかった（詳細は第VI章参照）。
SK 351 (56～62)

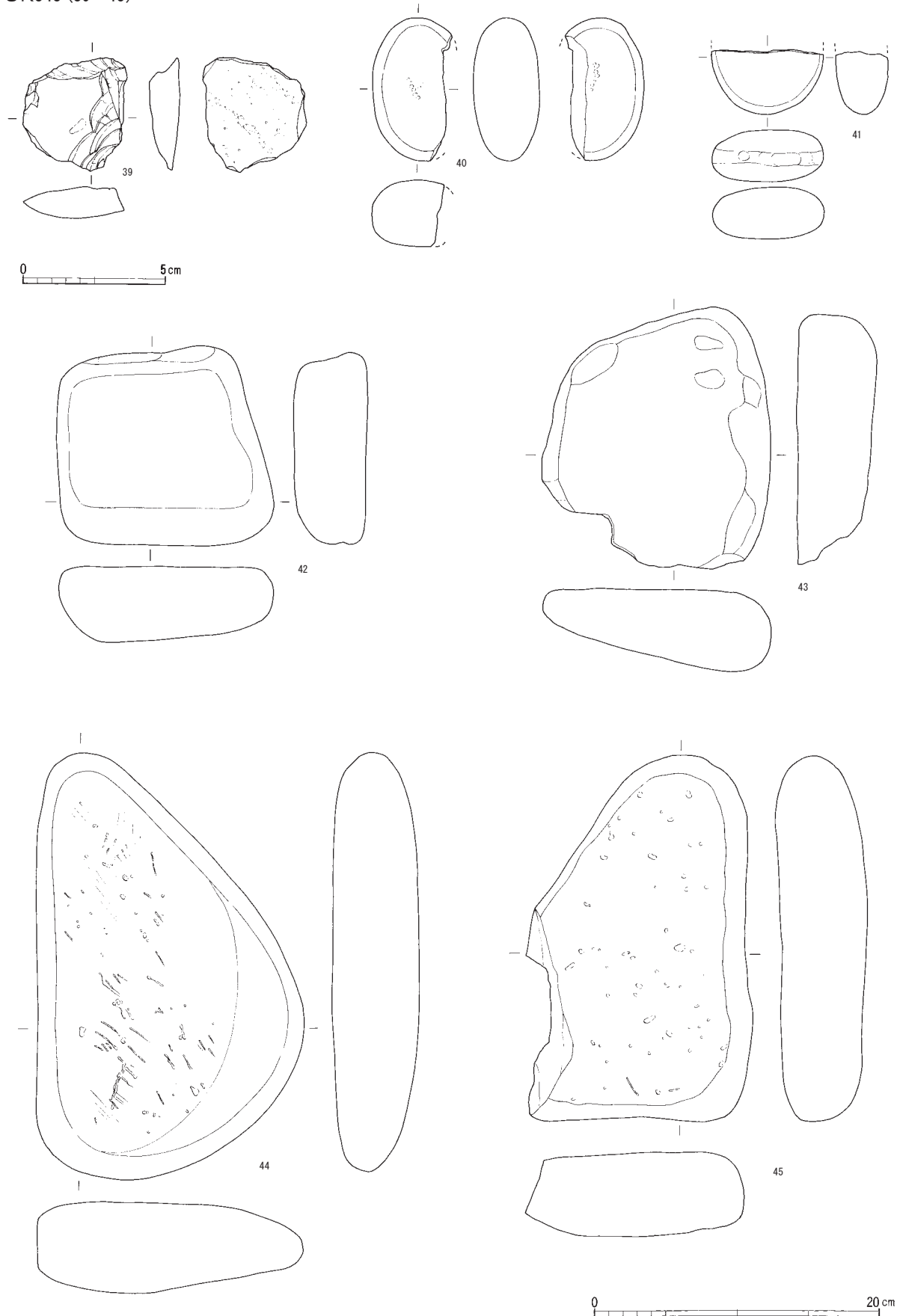
56は打製石斧の破片である。石材は様々な石を内包する火砕岩である。風化が著しく、石灰岩の部分は溶出し、窪んでいる。石材が特殊であり、風化も強い剥離面の判断が難しいが、全体の性状から本器種と判断した。基部の上半は欠損している。扁平な面の一方は比較的平坦で、もう一方はやや盛り上がり、台形もしくは低いかまぼこ形を呈する。側縁に面をつくろうとした加工はみられない。

57・58は礫器である。57は礫の一方を打ち欠いて刃（片刃）がつくられている。58は様々な方向から打撃が加えられ、剥離面が多く確認できるが、刃部と考えられる部分は片刃で裏面には礫表がそのまま残っている。石材は緑色岩であり、石斧等にもよく使用されることから、それらを加工する際に出た端材を利用した可能性も考えられる。

59は磨石の破片である。両面に使用痕がみられる。砂岩製で被熱し赤変している。

60～62は石皿の破片である。62は集石炉の底石に再利用されていた。いずれも使用面は片面にのみ

SK343 (39~45)

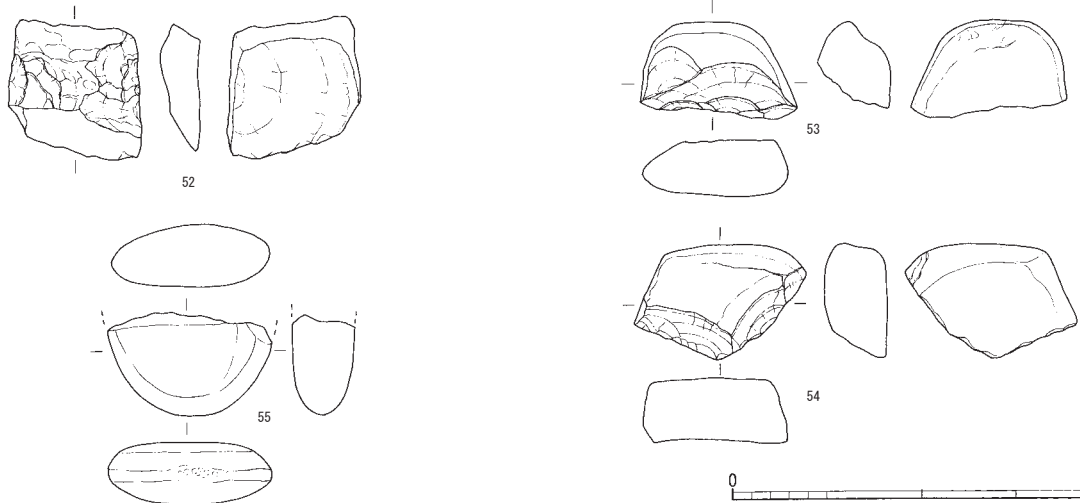


第106図 出土遺物実測図③ (39は1 : 2、他は1 : 4)

SK348
(46~51)



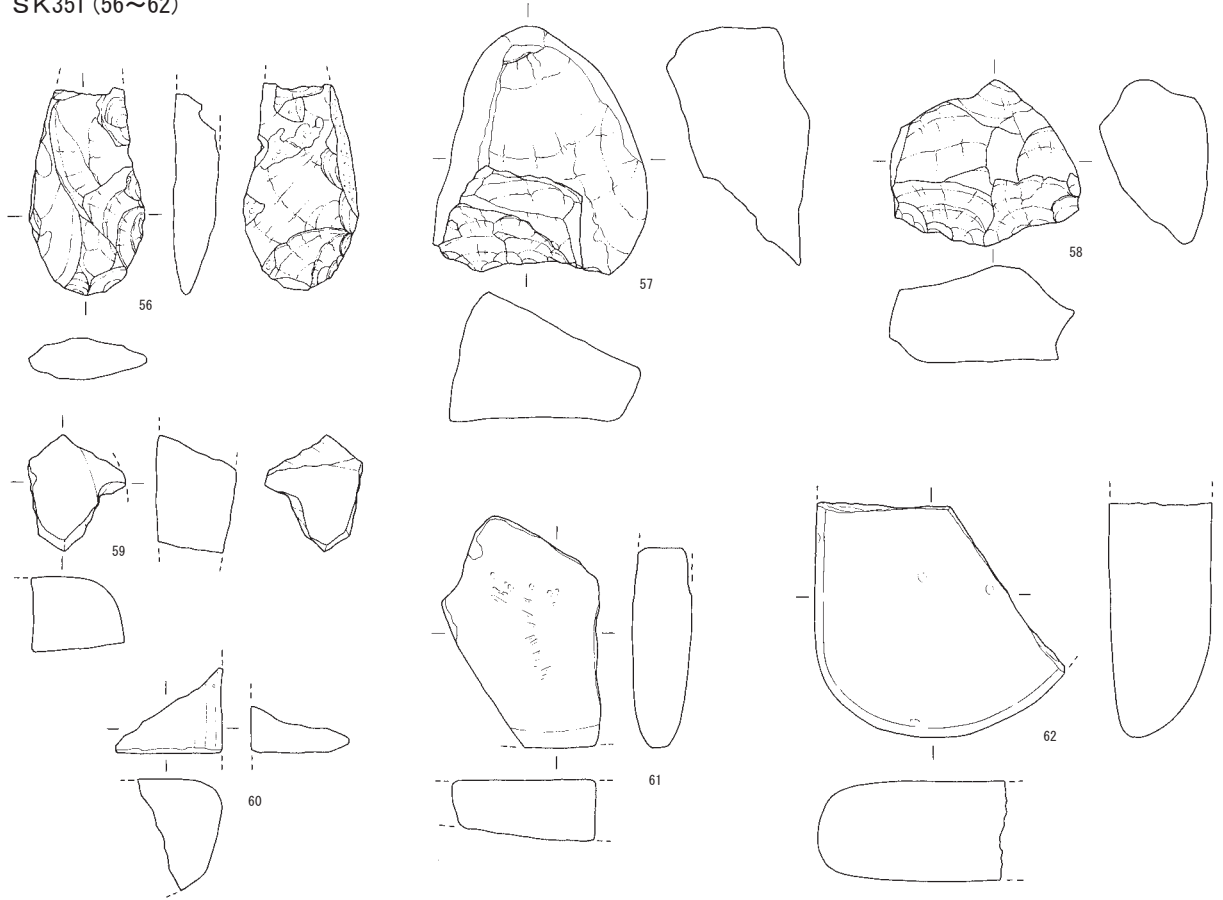
SK349 (52~55)



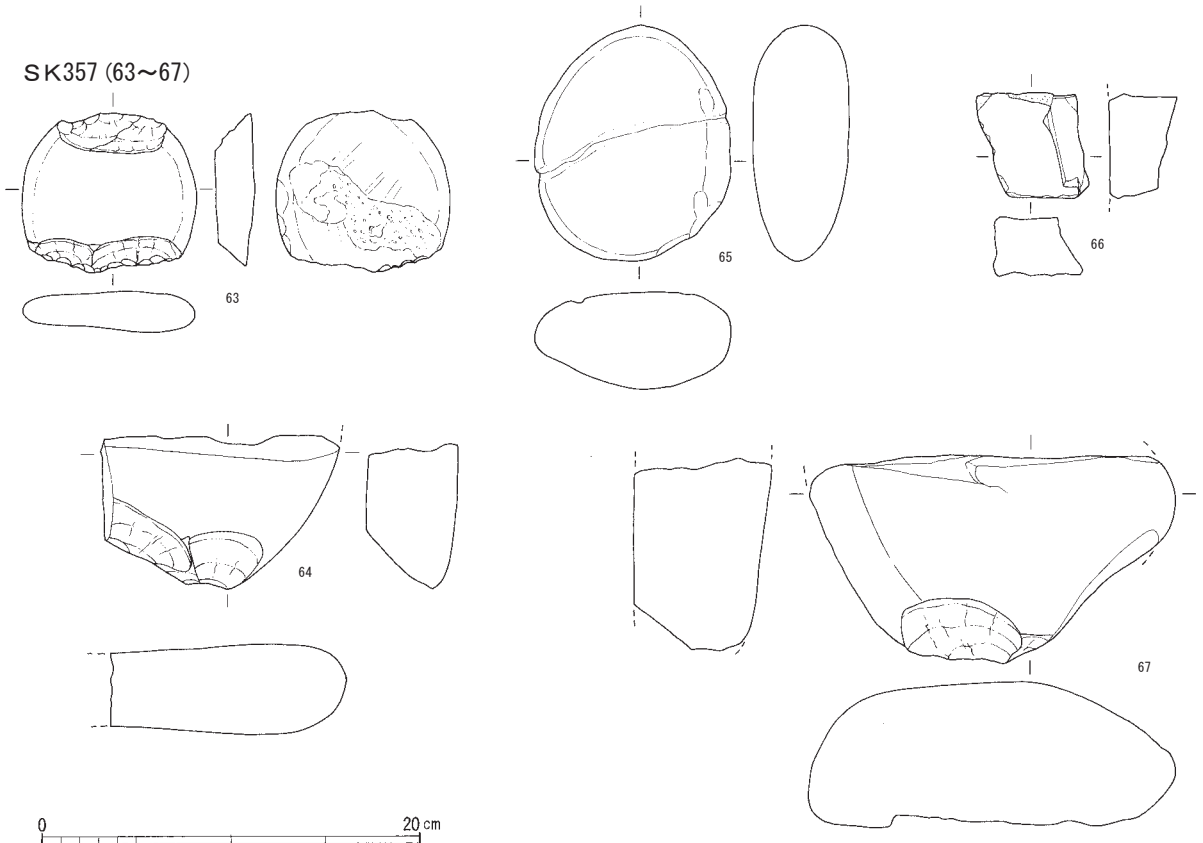
0 20 cm

第107図 出土遺物実測図④ (1 : 4)

SK351 (56~62)



SK357 (63~67)



0 20 cm

第108図 出土遺物実測図⑤ (1 : 4)

みられる。石材はいずれも砂岩で被熱し赤変している。

S K 357 (63 ~ 67)

63は楔形石器である。砂岩礫を用い、対向する両端を打ち欠いて片刃状に加工している。

64は礫器である。一方を打ち欠いて刃（片刃）がつくられている。扁平な面の両面に磨痕があることから、割れた石皿からの転用とみられる。砂岩製で被熱し赤変している。

65は磨石である。片面に使用痕がみられる。また、側面の一部には敲打痕があり、敲石としても使用されている。砂岩製で被熱し赤変している。

66・67は石皿の破片である。どちらも片面に使用痕がみられる。石材はいずれも砂岩製であるが、66は石灰岩粒を含んでおり、その部分が溶出してデコボコしている。

S F 383 (68・69)

68は礫器である。下端を打ち欠いて刃（片刃）がつくられている。刃の先端は比較的尖っており、部分的に使用痕とみられる細かい欠けがある。重さ

が4.2kgもあり、片手で持って使うことはできない。扁平な面に敲打痕がみられることから台石からの転用と考えられる。斑礫岩製である。

69は石皿である。扁平な面の片面に使用痕がみられ、やや凹んでいる。流紋岩製である。

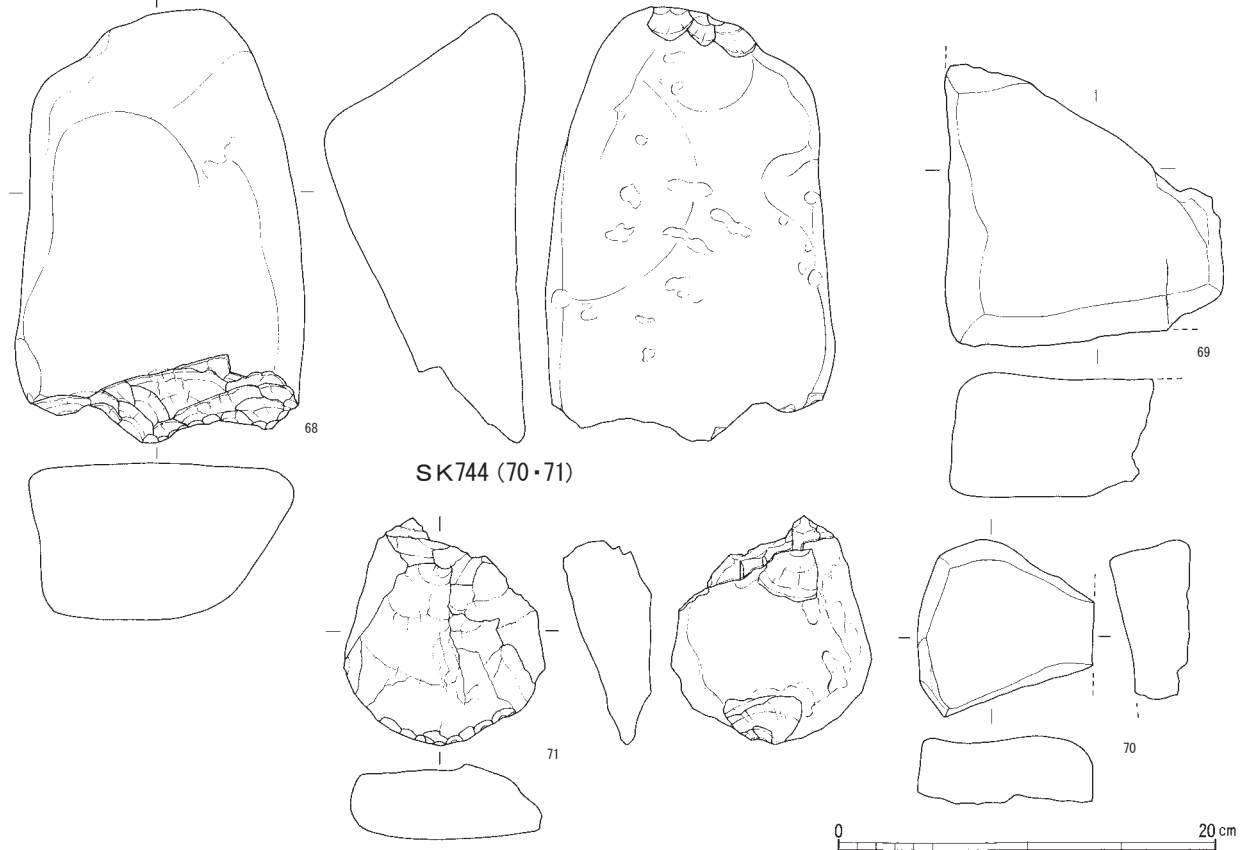
S K 744 (70・71)

70は石皿の破片である。扁平な面の一方に使用痕がみられる。対するもう一方の面は剥離しており使用痕の有無は不明である。砂岩製で被熱し赤変している。

71は礫器である。礫の一方に刃（片刃）がつくられている。刃部は両面に剥離がみられるものの、図右側の面の剥離は刃部を形成するための加工痕ではなく、使用した際の欠けと判断した。上方の割れは折損とも形を整えるための加工とも判断できない形状である。含礫砂岩製である。

70について残存デンプン粒分析を行った結果、デンプン粒が検出された（詳細は第VI章参照）。

SF383 (68・69)



第109図 出土遺物実測図⑥ (1 : 4)

2 縄文時代中期の遺構出土遺物

縄文時代中期の遺構から出土した遺物をここで報告する。土器は中期末のものが多く、一部は後期初頭に下る可能性のものも含む。

SK 399 (72・73)

72は縄文土器鉢の口縁部片である。端部は山形で断面は丸く厚い。山形の部分を縁取るように沈線が1条施されている。

73は打製石斧である。中央部分を抉るように加工が施されている。石材は泥岩質の片麻岩である。

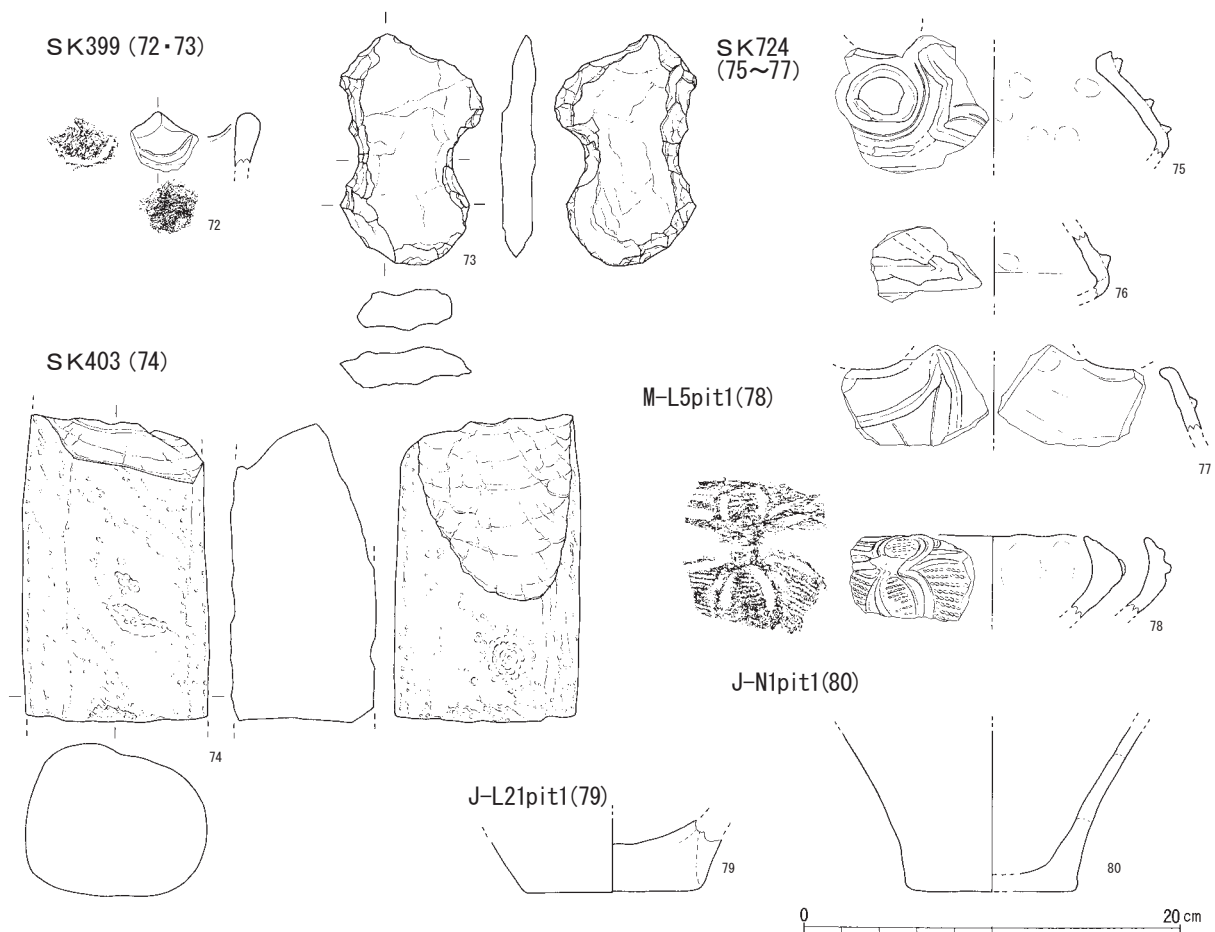
SK 403 (74)

74は石棒大型石棒の中間部の破片である。残存部での最大径は約9.5cmを計る。図の上部がややすぼまることから、頭部もしくは末端に近い部分と推定される。石材は、流紋岩を用いている。断面形は、不整形な楕円形を呈し、素材となった柱状石材の形状を残しているものと理解される。

器体の上下は折断面によって構成される。器体の上部には、二面の折断面が形成されている。図の右

面は、平坦な剥離が大きく伸びている。いっぽう、図左面の折れ面は、末端が蝶番状に巻き込む剥離となっている。二面の剥離の先後は、右面の剥離が先に形成され、その後に左面の剥離が形成されたと考えられる。右面の剥離はほぼ平坦なことから、偶発的な加撃により形成された可能性もあるが、左面の剥離は、人為的な荷重により押し折るよう形成されたと考えられ、石棒が意図的に破断された可能性を示唆しているものといえる。図下部の折れ面はほぼ平坦であるが、この面も人為的な破断である可能性がある。また、図右面の折れ面左上の一部には摩耗が観察されるが、使用によるものか、風化によるものか判然としない。

現在の器体中央に残る敲打痕は、折断前に形成されたものか、折断により現在の形状になった後に形成されたものかは判断できない。但し、図下部の折断面の縁辺には、両面に敲打によるくぼみが形成されており、現在の形状になる以前に、器体上で敲打を伴う行為がすでになされていたことを示している。



第110図 出土遺物実測図⑦ (1:4)

また、石材の特性から表面は全体に風化が進行している。そのため、図左面の敲打痕も、一部は周縁の磨滅が形成後の使用によるものか、風化によるものか判断できない部分がある。右面の敲打痕は浅い皿状にくぼむもので、周囲にも広く荒れが認められる。

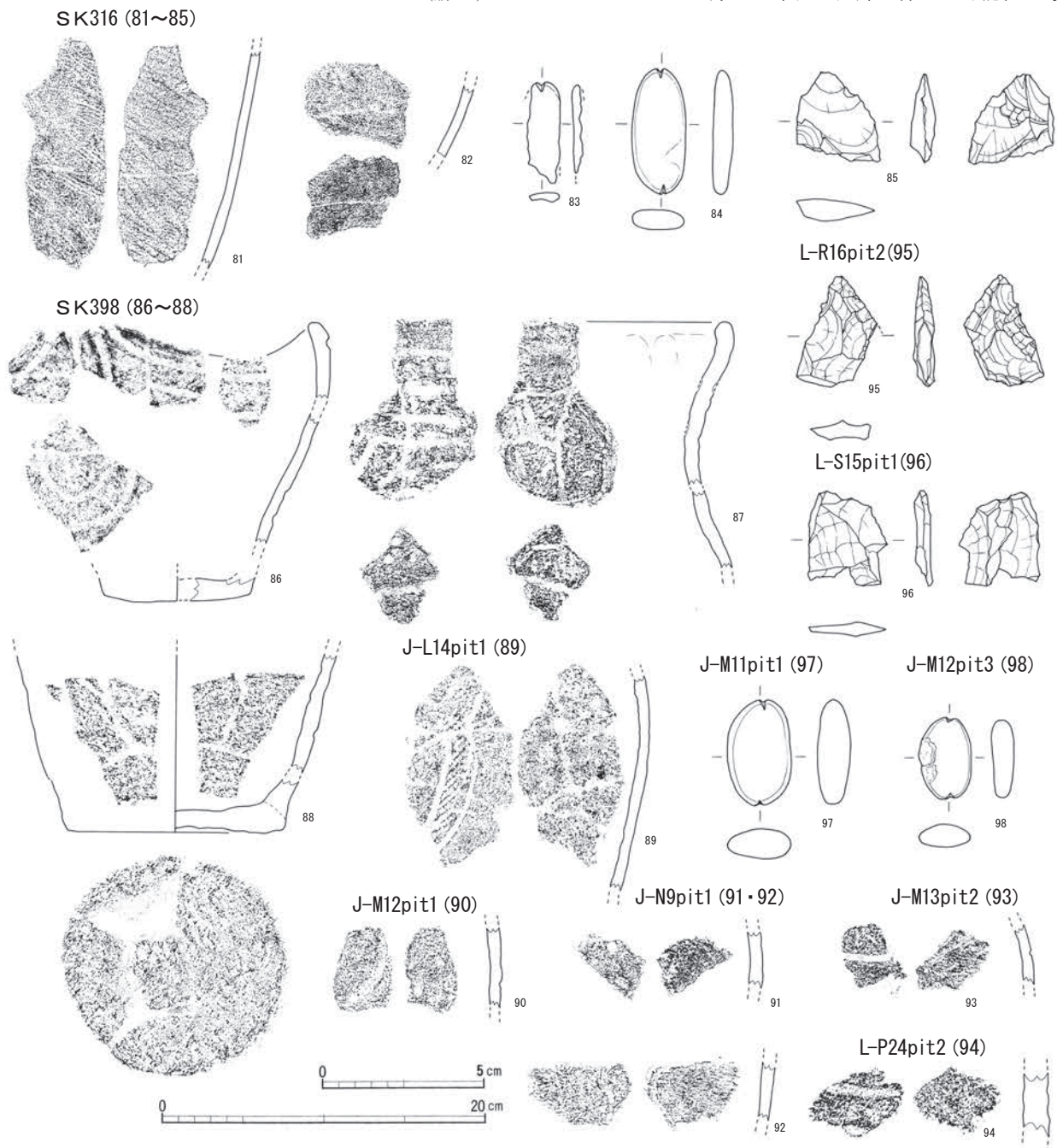
(大下明)

石棒の表面には部分的に、被熱によるものと思われる赤変が、かすかだが認められる。赤変は折断面でも確認できるため、被熱は折断後のものである。

(勝山)

SK 724 (75 ~ 77)

75 ~ 77 は縄文土器鉢の口縁部片である。接合する部分はなかったが、文様や胎土・色調・焼成等の特徴から同一個体とみられる。貼付した粘土紐による円形が中心にあり、その周囲にやや尖った原体を用いて細い沈線が施されている。さらにその外側を粘土紐で円形に囲み、一部は上方へ、一部は分岐して側方へ弧状に延び、口縁部付近の区画を構成している。口縁端部の一部は弧状になっており、欠損しているが、上方には環状の装飾が付いた可能性も考



第111図 出土遺物実測図⑧ (85・94~96は1 : 2、他は1 : 4)

えられる。

器形は、かなり屈曲し内湾することから、深鉢ではなく鉢や浅鉢などが考えられる^③。

M-L5pit1 (78)

78は縄文土器口縁部片である。器形はキャリパー形になるものと思われる。屈曲部は肥厚し、口縁端部は薄く尖っている。外面には屈曲部を境いに上下に隆帯によって円形が2つつくられ、その内側には丸みのある施文具で沈線が施されている。その他の部分には細かい単節斜縄文が施されている。

J-L21pit1 (79)

79は縄文土器の底部である。平底で約2.5cmの厚みがある。底部外面に網代等の痕跡はみられない。

J-N1pit1 (80)

80は縄文土器の底部である。底部中央に穿孔（焼成後）がある。体部外面は無文で、底部外面に網代等の痕跡はみられない。

3 縄文時代後期の遺構出土遺物

縄文時代後期の遺構から出土した遺物をここで報告する。

S K 316 (81～85)

81は縄文土器体部片である。外面には斜めに条遺物外出土 (99～109)

痕が施され、ところどころにススが付着している。内面は丁寧にナデられている。内面の下端に炭化物がごく薄く固着している。器種は深鉢と思われる。

82は縄文土器の体部片である。外面は風化し文様の有無は不明である。内面はナデられている。内面の一部に炭化物が薄く固着している。

83・84は切目石錘である。83は裏面が剥離し下端は折損している。残存部の切目は両面に施されている。84は完形であり、切目は両端の両面に施されている。どちらもホルンフェルス製である。

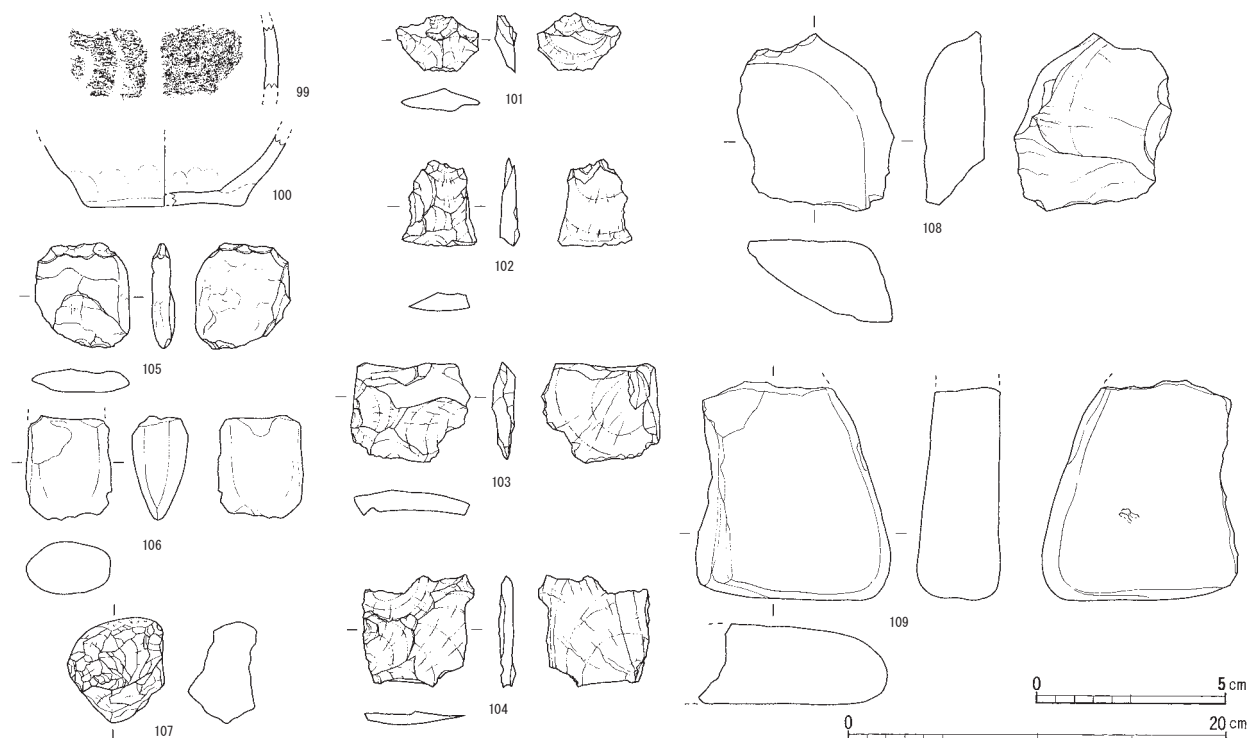
85は剥片である。石材は赤色のチャートである。

S K 398 (86～88)

86は縄文土器深鉢である。山形口縁の頭頂部から体部にかけて縄文帯による文様が施されている。中津式に相当するものである。

縄文帯は、丸みのある施文具を用いた沈線区画文とその内側に施された単節LRの充填縄文によって構成されている。頭頂部から始まる縄文帯は、口縁部に沿って横に広がる帯と、下垂し、体部のJ字文（あるいは紡錘文か）を構成する帯とに分岐している。内面はナデ調整で底部は平底となっている。

87は縄文土器深鉢である。赤茶色で砂粒の目立



第112図 出土遺物実測図^⑨ (101～103は1：2、他は1：4)

つ特徴的な胎土である。内外面ともに風化が著しく細かい調整は不明であるが、太い沈線による区画文が施されている。後述の91・92と同一個体の可能性がある。

88は深鉢底部である。平底で底部外面に網代痕跡が確認できる。

J-L14pit1 (89)

89は縄文土器体部片である。外面にヘラ状工具による沈線区画に充填縄文が施されている。内面は風化しており調整は不明である。

J-M12pit1 (90)

90は縄文土器小片である。内外面ともに風化が激しく細かい調整は不明である。外面に沈線が1条確認できる。

J-N9pit1 (91・92)

91・92は縄文土器小片である。赤茶色で砂粒が目立つ特徴的な胎土である。2点は接合しないが、色調・胎土等がほぼ同じであるため、同一個体と考えられる。内外面ともに風化が著しいが、外面にかすかに沈線による区画文が確認できる。上記の特徴は、前述の87と同様であり、出土位置が近接していることから、この2点は87とも同一個体である可能性がある。

L-M13pit2 (93)

93は縄文土器小片である。外面の中央に沈線、その上半に細かい縄文が施されている。内面は風化しており調整は不明である。

L-P24pit1 (94)

94は縄文土器小片である。外面に浅い沈線が2条、内面にナデが施されている。

4 その他の縄文時代遺物

縄文時代の所産であるが、詳細な時期の比定ができなかったピット出土遺物と、包含層など遺構外から出土した縄文時代の遺物をここで報告する。

L-R16pit2 (95)

95は石鏃状未製品である。側縁の押圧剥離等の加工が一部にとどまる。一見すると石鏃のようにみえるが、折損箇所が多いため言い切れないと判断した。石材は赤色の緑色岩^④である。

L-S15pit1 (96)

96は剥片である。石材は赤色の緑色岩である。

J-M11pit1 (97)・J-M12pit3 (98)

97・98は切目石錘である。どちらも完形で切目は両端の両面に施されている。2つとも泥岩製である。**遺構外（包含層等）出土（99～109）**

99は縄文土器小片である。太い沈線によって区画され、中央部は無文、上下に縄文が施されている。後期の所産と思われる。

100は縄文土器底部片である。平底で比較的薄くつくられている。体部は斜めに緩く立ち上がる。網代根等はみられない。中期末～後期の所産と思われる。

101～104は剥片である。石材は、102は赤色の緑色岩、その他はサヌカイトである。

105は楔形石器である。薄い円盤を用いており、3方の側縁に階段状剥離がみられる。泥岩製である。

106は磨製石斧の破片である。上半は欠損しており、新しい傷も多い。側縁に面がみられるものの明瞭ではない。石材は緻密な硬質の砂岩である。

107は石核である。剥離面は1面のみである。断面図では両面に剥離があるような形状をしているが、裏面は自然の割れであり、かなり風化している。その他の面には礫表が残る。剥離面には2箇所打撃痕がみられる。石材は黒色のチャートである。

108は礫器である。礫の一方に打撃によって刃がつくられている。片刃であるが鋭利さはない。ホルンフェルス製である。

109は石皿の破片である。扁平な面の一方に使用痕がみられる。砂岩製である。

【註】

- ①出土した縄文土器については、小林達雄編『総覧 縄文土器』株式会社アム・プロモーション2008を参考にした。
- ②石器の選別と器種の同定は、学校法人雲雀丘学園 雲雀丘学園中学校・高等学校教諭大下明氏と三重県立名張高等学校教諭久保勝正氏に依頼し、平成24年2月5日と平成26年6月30日の2回にわたり、三重県埋蔵文化財センター四日市整理所にて行った。

石材については、三重県総合博物館学芸員津村善博氏に鑑定を依頼し、平成26年9月19日に三重県総合博物館にて行った。

- ③田村陽一氏のご教示による。

- ④石材を鑑定して頂いた津村善博氏によると、緑色岩は変成作用を受けた玄武岩であり、緑色を呈するものが多いためその名があるが、含有する成分によってはしばしば赤色を呈するものがあり、北勢地域では藤原岳の南側、多志田峡谷で多くみられるという。一見すると赤色のチャートにもみえるが、比較すると赤色の緑色岩は表面の光沢が少なくつや消し状になっており、慣れれば分別することは可能である。

第2節 弥生時代

弥生時代の遺物は中期と後期のものがある^①。弥生土器は表面の摩耗の激しい細片以外は、全点を取り上げた。

1 弥生時代中期の遺構出土遺物

SK 306 (111～114)

111～113は弥生土器甕の口縁部である。111は口縁端部に刺突状の刻み目が施されている。112は口縁部が強く外反し、端部は丸い。113は口縁部がくの字状に屈曲し、端部は平らにナデられ面が作られている。いずれも弥生時代中期のものとみられる。114は敲石である。調査区内で検出されている縄文時代早期の遺構から同様のものが多く出土しており、遺構の埋没過程で混入した可能性がある。

SK 307 (115)

115は弥生土器甕の口縁部である。端部は丸く、刻み目等は施されていない。弥生時代中期のものと

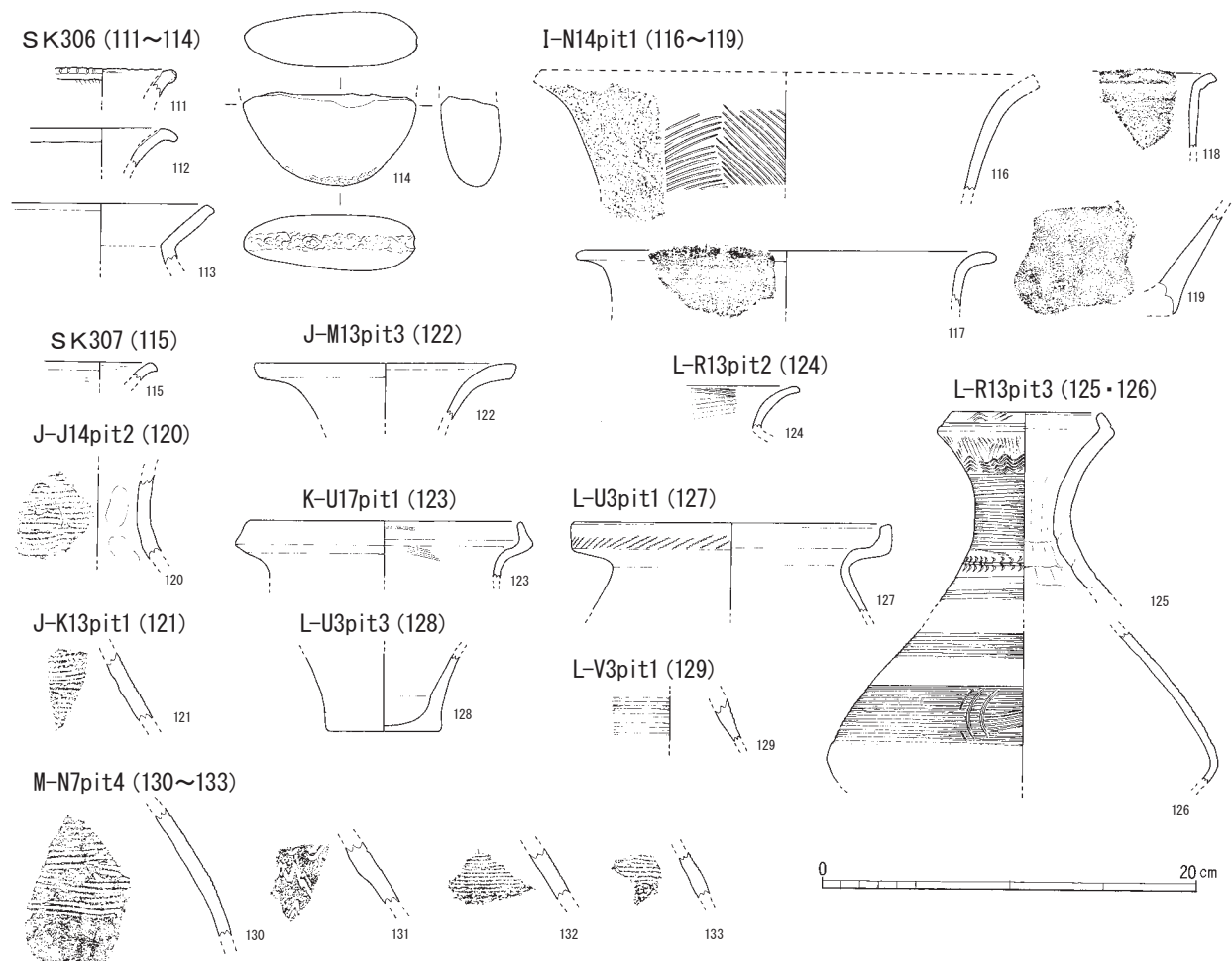
みられる。

I-N14pit1 (116～119)

116は弥生土器鉢である。口縁端部は失われている。内外面ともに風化が激しいが、体部外面に縦位羽状条痕がかろうじて確認できる。

117・118は弥生土器甕の口縁部である。上述の116より口縁部の屈曲が強いため、甕と判断した。どちらも内外面ともに風化が激しく、調整は不明である。胎土・焼成・色調は上述の116とほぼ同じで差異は感じられない。

119は弥生土器の底部である。体部の立ち上がりが若干ゆるいため、壺と思われるが、甕の可能性も残る。肉眼観察では、胎土は上述の116～118と同じものである。116～119はいずれも弥生時代中期前半のものとみられる。



第113図 出土遺物実測図^⑩ (1:4)

J-J14pit2 (120)・J-K13pit1 (121)

120・121は弥生土器壺の頸部～肩部である。どちらも櫛描直線文が施されている。弥生時代中期のものともみられる。

J-M13pit3 (122)

122は弥生土器壺の口縁部である。内外面ともに風化が激しく調整は不明である。弥生時代中期前半のものともみられる。

K-U17pit1 (123)

123は弥生土器壺の口縁部である。受口状を呈し、わずかに内傾している。内外面ともに風化が激しく調整は不明である。弥生時代中期のものともみられる。

L-R13pit2 (124)

124は弥生土器の壺または甕の口縁部である。内外面ともに風化が激しく調整は不明である。弥生時代中期のものともみられる。

L-R13pit3 (125・126)

125・126は弥生土器壺である。2つは接合できなかったが、同一個体ともみられる。

口縁は受口状を呈し、やや内傾する。口縁端部外面に波状文と沈線が施されている。頸部は上から順に、タテハケ後に波状文、櫛描直線文、3条の沈線が入り、この3条沈線の最下の1条に重ねて貝殻側縁による刺突文が施されている。さらにその下方にはヘラによるごく浅い沈線が1条入る。肩部から体部上半にかけては、櫛描直線文が下方ほど幅広に3帯施され、その間を不明瞭ではあるが、ヘラミガキしている。直線文帯の、最下帯には流水文を模したと思われる円弧文が施されている。

弥生時代中期中葉のものともみられる。

L-U3pit1 (127)

127は弥生土器甕の口縁部である。受口状口縁の外面に列点文が施されている。弥生時代中期のものともみられる。

L-U3pit3 (128)

128は弥生土器甕の底部である。内外面ともに風化が激しく調整は不明。底部は非常に薄く作られている。弥生時代中期のものともみられる。

L-V3pit1 (129)

129は弥生土器壺の頸胴部である。外面に二枚具による直線文が施されている。弥生時代中期前葉の

ものとみられる。

M-N7pit4 (130～133)

130～133は弥生土器壺の小片である。130は直線文と波状文が施されている。131は波状文のみが確認できる。132・133は櫛描直線文が施されている。いずれも弥生時代中期のものともみられる。

2 弥生時代後期の遺構出土遺物

後期の遺物は中期末にまで遡る可能性のあるものを含むが、大半は後期初頭から前半までのものである。

S H 385 (134～136)

134は弥生土器壺の口縁部である。内外面ともに摩耗しており調整は明瞭ではないが、口縁端部にころうじて、刻み目の痕跡が残る。

135は貯蔵穴から出土した弥生土器壺の口縁部である。口縁端部が若干下方に広がり、端面の幅が広がっている。端面および口縁端部内面に刺突文が施されている。134・135ともに弥生時代中期末～後期初頭のものともみられる。

136はチャート剥片である。貼床から出土した。形状と大きさから石鏃の未製品とみられることもできるが、刃部等は作られていない。縄文時代のものと思われる。

S H 389 (137・138)

137・138は弥生土器壺または甕の底部である。137は底部内面の中央がやや膨らみ、外面も丸い。138は内面がなだらかで、137のような膨らみはなく、外面も直線的である。137・138ともに弥生時代中期末～後期初頭のものともみられる。

S H 393 (139・140)・S K 404 (141～146)

S K 404はS H 393の貯蔵穴であるため、ここで一括して記述する。

139は弥生土器高杯の口縁部である。口縁端部はナデにより面が作られている。内外面ともに摩耗しているが、外面にはころうじてミガキの痕跡が確認できる。弥生時代中期末～後期初頭のものともみられる。

140は切目石錘である。石材は砂岩である。調査区内の縄文時代中・後期の遺構から同様のものが出土しており、竪穴住居の埋没過程で混じり込んだものともみられる。

141 は弥生土器甕の口縁部である。端部がやや尖り気味の受口状を呈し、やや内傾する。142 は弥生土器短頸壺である。頸部に竹管文が施されている。頸部は 1/4 程度の残存だが、この器種によくみられる穿孔は残っていない。141・142 ともに弥生時代中期末～後期初頭のものともみられる。

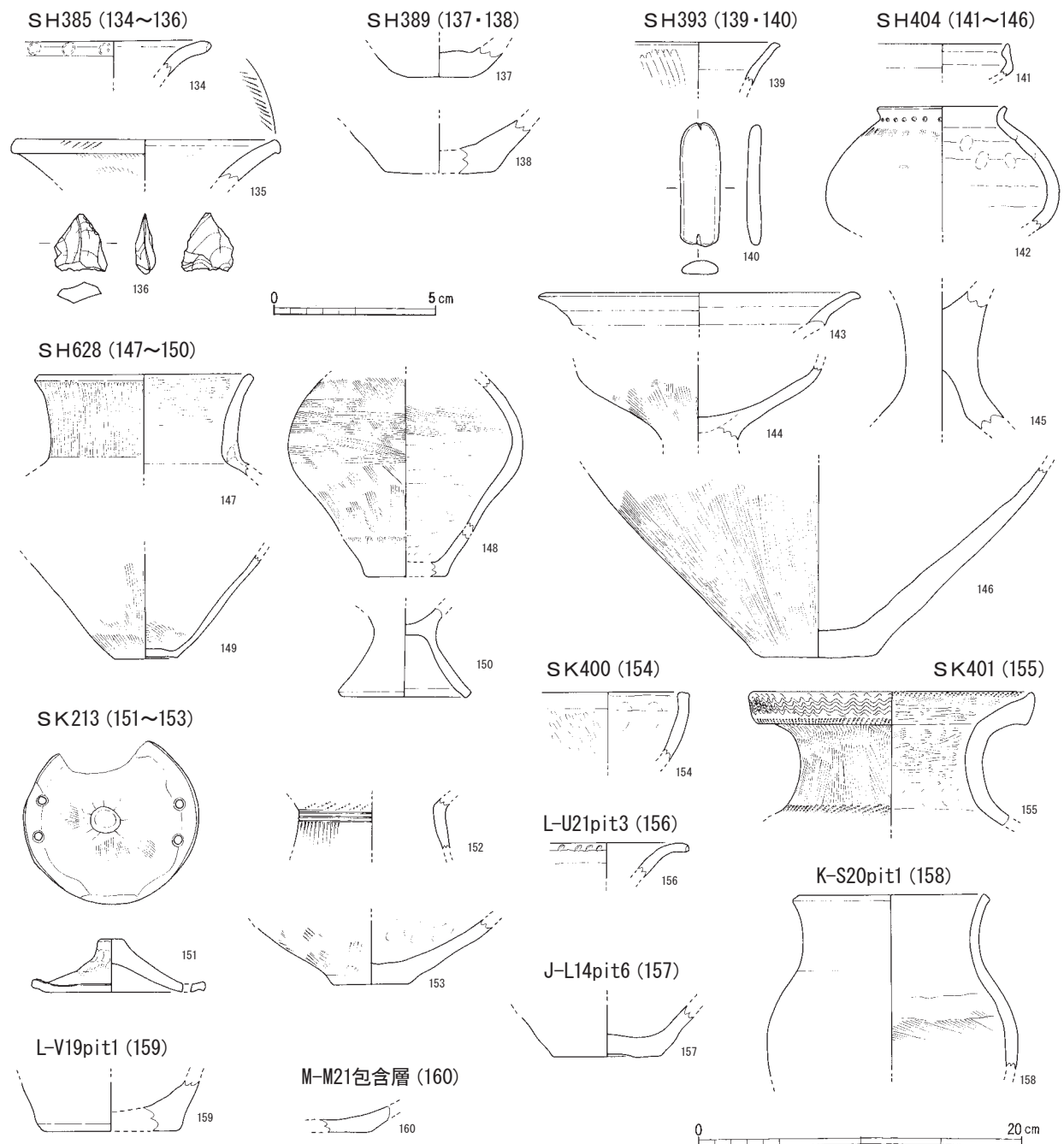
143～145 は弥生土器高杯である。143 は口縁部が外反しており、下端の破断面に擬口縁の痕跡が明瞭に確認できる。144 は杯部がやや内湾し、外面に細かなハケメが施されている。145 は脚部上半のみだが、

外面は摩耗しており、調整は不明。内部は中空になっているが器壁は厚く、ずっしりと重い。いずれも弥生時代中期末～後期前半に収まるものである。

146 は弥生土器壺の底部である。外面には粗いハケメが施され、体部は直線的なラインで、上方の器壁はかなり薄い。弥生時代中期末～後期初頭のものともみられる。

SH 628 (147～150)

147・148 は弥生土器壺である。147 は口縁部の外面にタテミガキ、内面にヨコミガキが施されている。



第114図 出土遺物実測図① (136のみ 1 : 2、他は 1 : 4)

148 は体部外面はタテハケ後にヨコハケが施されている。内面は強いナデの後に、最大径のあたりにヨコハケが施されている。149 は弥生土器甕の底部である。器壁は薄く、体部は直線的に立ち上がる。底部内面にスス状の炭化物が付着している。

150 は貯蔵穴出土の弥生土器台付甕の脚台である。147～150 は、いずれも弥生時代中期末～後期初頭のものともみられる。

S K 213 (151～153)

151 は弥生土器蓋である。穿孔は2孔一対で焼成前の穿孔である。152 は弥生土器器台である。壺の頸部としては立ちすぎの感があるため、器台と判断した。櫛状工具の刺突による列点文と篋または櫛描きによる3条の沈線が施されている。153 は弥生土器壺の底部である。底部を厚くし、段がつくられている。いずれも弥生時代中期末～後期初頭のものともみられる。

S K 400 (154)

154 は弥生土器高杯または鉢の口縁部である。外面にミガキが施されている。弥生時代中期末～後期初頭のものともみられる。

S K 401 (155)

155 は弥生土器壺の口縁～頸部である。口縁端面に波状文、口縁端部内面と外面下端に刺突による列点文が施されている。頸部は外面にタテハケ、内面にヨコミガキが施されている。弥生時代中期末～後期初頭のものともみられる。

L-U21pit3 (156)

156 は弥生土器甕の口縁部である。内外面ともに風化が激しく調整は不明瞭であるが、端部には刺突による刻み目が確認できる。弥生時代中期～後期のものともみられる。

J-L14pit6 (157)

157 は弥生土器壺の底部である。内外面ともに風化が激しく調整は不明瞭である。弥生時代中期末～後期初頭のものともみられる。

K-S20pit1 (158)

158 は弥生土器の壺である。外面に多くススが付着している。弥生時代後期のものともみられる。

3 その他の弥生時代遺物

弥生時代の遺物であるが、詳細な時期比定ができ

なかった遺物をここで報告する。

L-V19pit1 (159)

159 は弥生土器壺の底部である。風化が激しく調整は不明瞭である。形状・胎土等から弥生土器と判断した。詳細な時期は不明瞭である。

M-M21 包含層 (160)

160 は弥生土器の底部である。内外面ともに風化が激しく調整は不明瞭であるが、胎土等から弥生土器と判断した。詳細な時期は不明瞭である。

【註】

①出土した弥生土器については、上村安夫「伊勢・伊賀地域」『弥生土器の様式と編年 - 東海編 -』木耳社 2002 を参考にした。

第3節 古墳時代

古墳時代は後期^①の遺物が主に北区の堅穴住居から出土した。出土した須恵器は田辺昭三氏による須恵器編年^②（以下、田辺編年）のMT 15～TK 43におさまる。

1 古墳時代後期の遺構出土遺物

SH 387 (161～193)・SK 405 (194)^③

161～165は土師器甕の口縁部である。いずれも風化が激しく調整は明瞭ではないが、161と165には外面にタテ（ナナメ）ハケ、内面にヨコハケがかろうじて確認できる。

166は小型の甕である。口縁部は1/3程度の残存だが、体部から底部は完存している。底部は平底となっており、外面にタテハケ、内面にユビオサエが確認できる。

167～174は須恵器杯蓋である。いずれも天井部が完存するものはない。167は稜がやや尖るものの、他は稜がやや丸みを帯び、173のように沈線のみで表現されているものもある。167・172・174は、ロクロケズリが稜の付近まで確認できる。口縁端部にわずかながら段のあるものが多いが、172は丸く、173は面に仕上げられている。

175～182は須恵器杯身である。いずれも底部まで完存するものはない。たちあがりはやや内傾し、端部は、182がやや尖るものの、175・179は丸く仕上げられている。受部は大半が水平またはやや上方に伸びるが、180・182のようにかなり短いものもある。受部とたちあがりの境界には強弱の違いはあるものの、いずれも沈線が1条施されている。底部外面のロクロケズリは178～182で確認できた。ロクロケズリの範囲は、179・182が受部の直近まであり、それ以外は底部の2/3程度まで施されている。

183は須恵器高杯の杯部である。たちあがり内傾し短く、端部はやや尖り、反り返る。受部も短く、やや上方に伸び、端部はやや丸く仕上げられている。底部外面の1/2程度にロクロケズリが施され、中央部には脚部の剥離痕が残る。剥離痕の周囲にスカシを切り込んだ際に付いた工具痕が一箇所、わずかながら確認できる。この工具痕と残存部分との割合から考えると、3方スカシであろうと推測できる。

184～186は須恵器高杯の脚部である。184・185は端部が丸く、端部のやや上方に丸みを帯びた稜が周る。186は端部底面に面が作られている。

187は須恵器把手付短頸壺である。肩がやや張り、その位置に最大径がある。肩には欠けているが把手が貼付されている。外面にはタテハケが施され、最大径よりやや上方に沈線が2条巡る。内面は風化が激しく調整は不明である。

出土した須恵器は、おおむね、田辺編年のTK 10～TK 43に併行するものと思われる。

188は土錘である。両端を欠損するが、最大径の位置から推測すると、本来は8cm程度の長さであったと考えられる。

189～193は石器・石製品である。周辺に縄文時代の遺構が多数存在し、弥生時代の遺構との重複もあるため、混入遺物の可能性の高いものが多い。

189は槌石である^④。砂岩製で、側面を打撃に利用しており、欠けがみられる。また、扁平な面の一部に磨面が確認できることから、磨石か小型の石皿としても利用された可能性がある。調査記録には住居床面からの出土とあるが、出土状況等の詳細は不明である。

190は切目石錘である。切目は両端の両面に入れられている。切目と重複して叩打痕が確認でき、敲石としても使用されているようである。

191は磨製石斧である。折損しており、半分程度の残存である。刃部は両刃になっており、基部の側縁は平坦に仕上げられている。被熱し、表面は非常に荒れているため、石材は不明である。

192は楔形石器である。石材は黒っぽいチャートである。

193は使用痕のある剥片（以下、UFと略す）である。石材は赤いチャートで、側縁の一部を使用した痕跡が窺える。

194はSK 405（SH 387貯蔵穴）から出土した土師器甕である。口縁部は完存している。SH 387から出土した他の土師器甕とほぼ同様のものである。

SH 624 (195～220)

以下のSH 624出土遺物のうち、貯蔵穴出土は、

196・197・200・201・212、竈出土は206・215である。

195～199は土師器甕である。195～198は、体部がほぼ球形のものである。底部は195・198は、ほぼ球形で196はやや平底である。調整は、195は体部外面の上から約2/3がタテ（ナナメ）ハケ、残りの約1/3が不定方向にハケが施されている。内面は口縁部付近にヨコハケが確認できるが、体部はオサエとナデのみとなっている。196も195とほぼ同じ調整だが、体部外面のタテ（ナナメ）ハケが広く、不定方向のハケは底部付近のみとなっている。197・198は接合できなかったが、胎土・焼成および調整等の様子から同一個体と思われる。ただし、197は貯蔵穴から、198は住居北東隅からの出土である。調整は体部内面上半にヨコハケがわずかに確認できる以外は195・196とほぼ同様である。199は195～198よりも体部が長く伸びる。口縁部以外はほぼ完形の出土である。底部は平底で、外面に焼成前の傷、または工具痕が残っている。調整は体部外面にタテハケ、内面にヨコハケがほぼ全面に施されている。

200・206は土師器長胴甕である。径は似ているが接合する部分はなく、胎土・焼成および調整等の様子からも別個体であると判断した。200の外面にはタテハケ、内面にはヨコハケが施されている。206は内外面ともに調整は不明瞭であるが、外面の上部に炭化物が多く付着している。

201は土師器台付甕である。台部は差込式で、体部外面にタテハケが施されている。

202・203は土師器甕の底部である。202は丸底、203は平底である。

204は土師器の把手である。差込式で、体部の角度等から壺ではなく、甕または甌であると思われる。

205は土師器甌である。把手は差込式で、底部は2孔ないし3孔の多孔式である。

207・208は台付甕の台部である。どちらも厚手で端部は丸く仕上げられている。

209～211は須恵器杯蓋である。209は稜が小さいながらも尖り、ロクロケズリが稜の直近まで施されている。口縁端部には、わずかながら段がつくられている。天井部には赤色顔料によって記号が書かれており、半分は欠損しているが、「×」または「+」

になると思われる^⑤。210・211は稜が丸みを帯び、ロクロケズリは天井部の2/3程度まで施されている。口縁端部にはわずかに段がつくられている。

212・213は須恵器杯身である。212は口径に比して底が深い。たちあがりは、ほぼ真上に長く伸びるが、端部は丸く、若干外に反る。受部は断面三角形を呈し、やや上方に伸びる。ロクロケズリは受部の直近まで施されている。213は口径に比して底は浅い。たちあがりは内傾し、端部はやや尖る。受部は断面三角形を呈し、やや上方に伸びる。受部とたちあがりの境界に沈線が1条施されている。ロクロケズリは底部の2/3程度に施されている。口縁端部に若干の欠損があるが、ほぼ完形の出土である。

214は須恵器高杯の蓋である。稜が丸みを帯び、口縁端部にわずかに段がつくられている点は、前述の杯蓋210・211とほぼ同様である。天井部の中央にツマミがつき、ツマミの中央はやや凹んでいる。天井部には稜の付近までカキメが施されている。

215～218は須恵器甕である。215は外面に平行タタキが施され、内面は丁寧にナデられている。216・217は接合できなかったが、出土位置や調整の特徴から同一個体と思われる。外面に平行タタキが施され、内面は青海波文状の当て具痕の上にナデが施されている。218は住居内の出土であるが位置の記録はない。215と似ているが、表面の色合いに差異があるため別個体とした。器壁の厚さや調整等は215と同じである。

219は須恵器横瓶である。外面にタタキが施され、内面は丁寧にナデられている。

220は砥石である。泥岩製で、4面ともよく使い込まれ、表面は滑らかである。

出土した須恵器は、おおむね田辺編年のMT 15～TK 10に併行すると思われる。

SK 216 (221)

221は須恵器杯身である。たちあがりはほぼ真上に伸び、端部は尖る。受部は断面三角形を呈し、やや上方に伸びる。受部とたちあがりの境界に沈線が1条施されている。体部外面のロクロケズリは2/3程度まで施されている。田辺編年のMT 15～TK 10に併行すると思われる。

SK 382 (222～225)

222 は土師器甕の肩部である。外面にタテハケ、内面の一部にヨコハケが施されている。

223 は須恵器杯蓋の口縁部である。端部は丸く仕上げられている。

224 は須恵器杯身の口縁部である。たちあがりは内傾し、端部はやや丸い。受部は短く、やや上方を向く。受部とたちあがりとの境界に沈線が1条施されている。残存部にロクロケズリは確認できない。

225 は須恵器高杯の脚部である。外面に自然釉と釉着物の剥離痕がみられる。

須恵器は、田辺編年のTK 10～TK 43に併行すると思われる。

SK 397 (226)

226 は土師器長胴甕である。口縁端部は丸く、底部は平底である。全体的に風化が激しく調整は不明瞭である。体部下半以外は完存である。

SK 412 (227)

227 は須恵器杯身の口縁部である。受部は断面三角形を呈し、ほぼ水平に伸びる。たちあがりを受部の境界に沈線が1条施されている。田辺編年のTK 10～TK 43に併行すると思われる。

2 その他の古墳時代遺物

ピットと遺構外から出土した古墳時代の遺物をここで報告する。

I-Q24pit1 (510)

510 は須恵器杯蓋である。稜はやや尖り、口縁端

部にわずかに段がつくられている。残存部分にロクロケズリは確認できない。器壁が薄く173に似たつくりである。

J-L13pit1 (511・512)

511・512 は須恵器杯身である。511 は、たちあがりがやや内傾し、端部はやや丸い。受部の直近までロクロケズリが確認できる。512 も残存部分の2/3程度の高さまでロクロケズリが確認できる。

遺構外出土 (538・539)

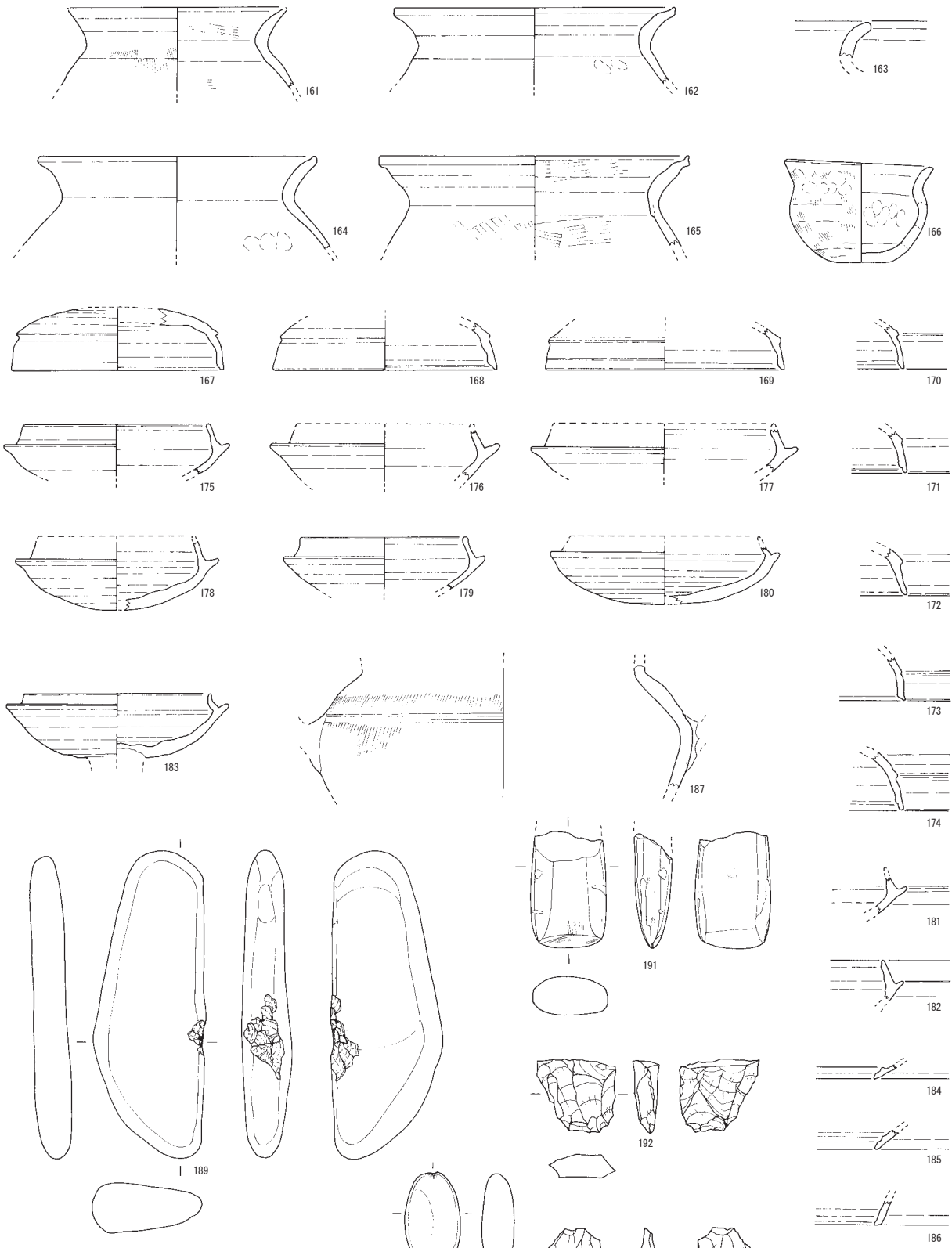
いずれも現代の攪乱溝からの出土である。

538 は須恵器杯身である。上部1/3程度までロクロケズリが確認できる。稜は丸みを帯び、口縁端部も丸い。539 は須恵器杯身である。たちあがりは長く伸びるがやや内傾する。ロクロケズリは1/2程度の高さまで施されている。

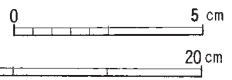
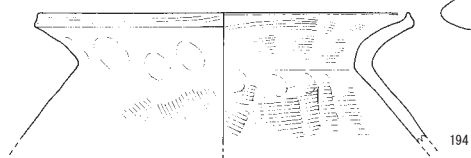
【註】

- ①この節でいう古墳時代後期は概ね6世紀代を指す。
- ②田辺昭三『須恵器大成』角川書店1980
- ③SK 405はSH 387の貯蔵穴であるため、ここで一括して記述する。
- ④石器・石製品については、全点を大下明・久保勝正氏に実見して頂き、器種や特徴についてご教示頂いた。
- ⑤平成25年度に行われた新名神事業による中野山遺跡第12次調査でも同様の赤い×や○印のついた須恵器杯蓋が8点出土している。『近畿自動車道名古屋神戸線(四日市JCT～亀山西JCT)埋蔵文化財発掘調査概報Ⅳ』2014。

SH387 (161~193)

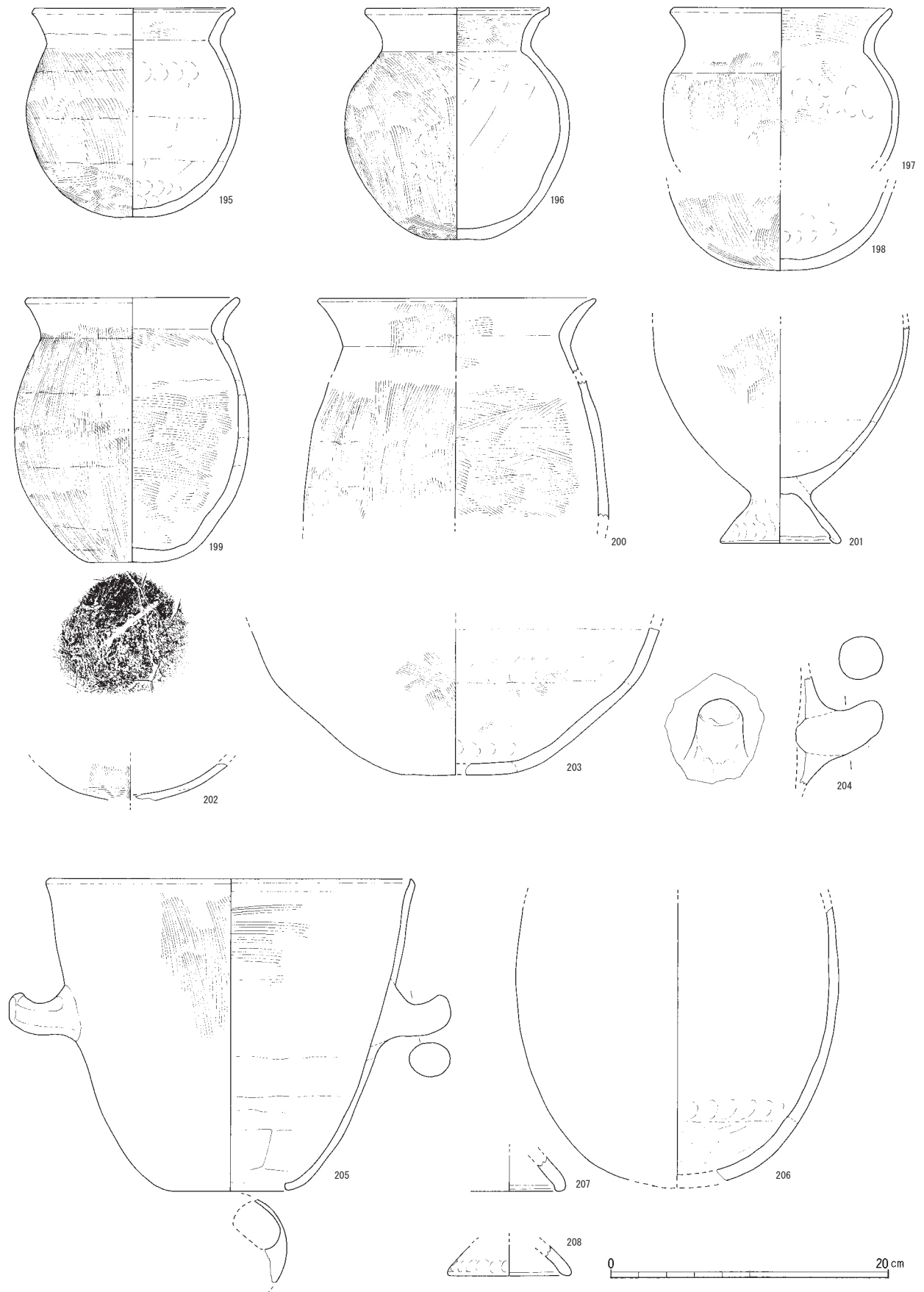


SK405 (SH387貯蔵穴) (194)

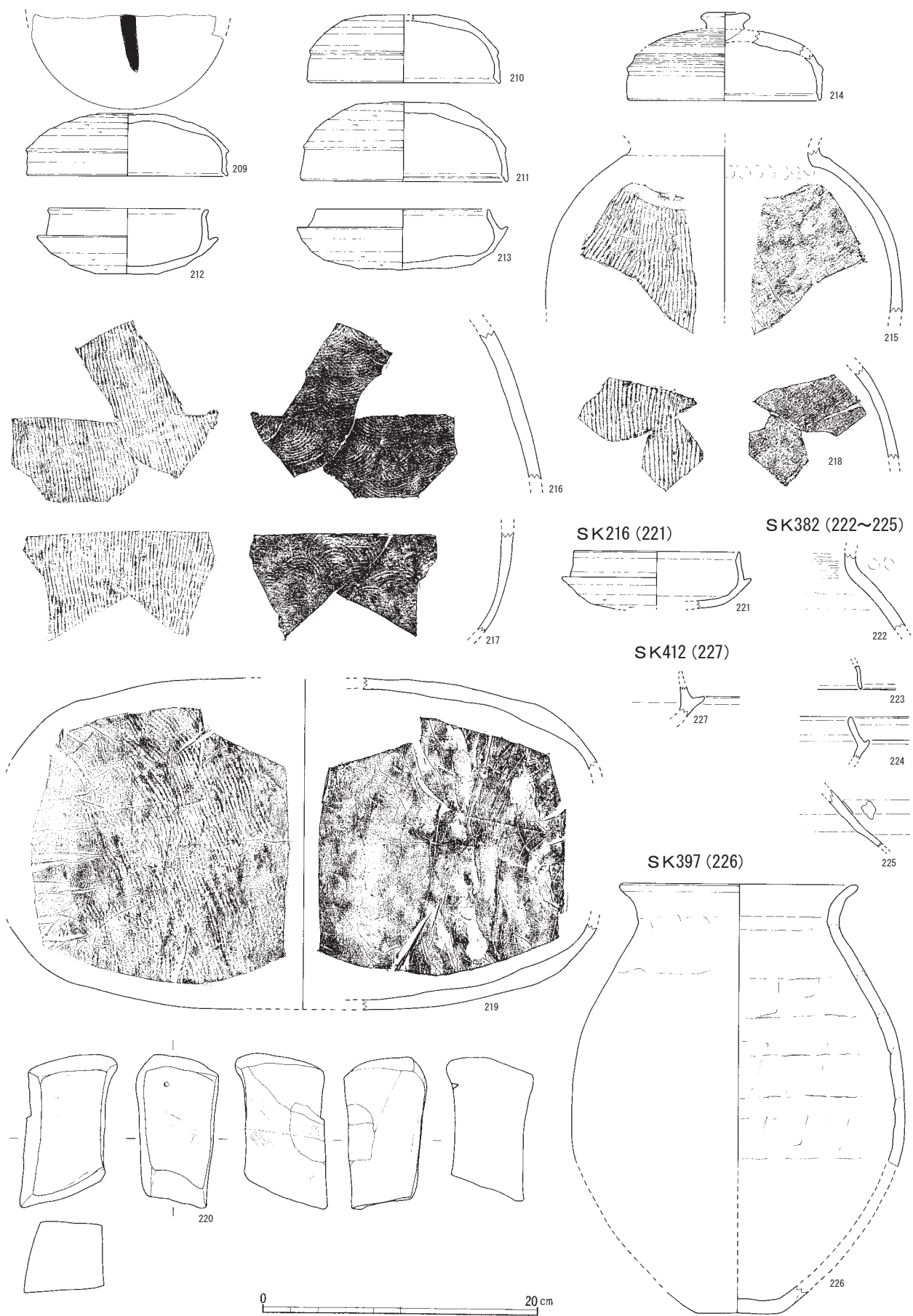


第115図 出土遺物実測図⑫ (192・193は1:2、他は1:4)

SH624 (195~220)



第116図 出土遺物実測図⑬ (1:4)



第117図 出土遺物実測図⑭ (1 : 4)

第4節 飛鳥時代

7世紀代の遺物をここで報告する。出土した須恵器のほとんどは田辺昭三氏による須恵器編年^①（以下、田辺編年）のTK 209～TK 217におさまるものである。土師器は甕が大半を占める^②。

以下、出土遺構ごとに記述する。

（1）竪穴住居

SH 201 貯蔵穴（228～231）

228～230は土師器甕である。228・229は口縁部がやや肥厚し、大きく外反する。端部には面がつくられ、上端は突起している。口縁部の内面と肩部外面にハケメが施されている。230は口縁部の外反は小さく、肥厚しない。頸部から体部上半の外面にハケメが施されている。231は須恵器杯蓋。口縁端部は丸くナデられている。外面は上部1/3程度にロクロケズリが施されているものの稜やその代わりとなる沈線などは全くみられない。

SH 201 竈（232・233）

232・233は土師器甕である。竈の崩落土中から出土した。232は口縁部が肥厚せず、外反も弱い。233は口縁部がやや肥厚し、大きく外反する。端部には面がつくられ、上端は突起している。

SH 208（234～238） 234は須恵器杯身である。たちあがり内傾しており、受部は小さい。235は須恵器短頸壺である。口縁端部は丸く、内外面に自然釉が付着している。236は壺の底部。底部が肥厚し、外面にロクロケズリが施されている。237は甕。注口部に粘土が貼付され、突き出ている。体部外面は沈線によって区画され、その中に櫛描列点文が施されている。238は砥石である。下端は折損しているものの、4面に使用痕が確認できる。凝灰岩製^③。

SH 211（239）

239は須恵器杯蓋である。口縁端部は丸くナデられている。残存部にはロクロケズリは確認できない。

SH 227（240）

240は土師器甕である。口縁部は肥厚しており、外反は弱い。内面にヨコハケ、外面にタテハケが施されている。

SH 304（241～244）

241・242は須恵器杯蓋である。241は上部外面の1/3程度にロクロケズリが施されている。稜が認められるものの、丸みを帯びている。242は口縁端部がやや尖るものの、稜は沈線で表現されている。243は須恵器杯身である。底部外面に「×」のヘラ書きが認められる。244は須恵器脚台部。高杯か台付鉢のものと思われる。

SH 304 中央土坑（245～249）

245は土師器甕である。246・247は須恵器杯蓋である。246は天井部外面にロクロケズリが施されており、「/」のヘラ書きが認められる。248は須恵器杯身である。受部には折り返し技法が用いられている。249は磨石である。側面には敲打痕も認められるため、敲石としても使用されている。SH 304に重複する縄文時代の集石炉（SK 351）からの混入か再利用と思われる。

SH 310（250～266）

250～252は土師器甕である。口縁部が肥厚するもの（251）と肥厚しないもの（250・252）がある。253～255は須恵器杯蓋である。このうち255は床面付近からの出土である。253・254は上部外面の1/3程度にロクロケズリが施されている。比較的稜の明瞭なもの（253）と全く認められないもの（255）がある。256は支柱穴P1から出土した土師器甕である。口縁部は肥厚せず、端部はつまんでナデられている。257は瓶の口縁部である。直線的に伸び、端部は丸い。内面に自然釉が付着している。258は須恵器高杯の脚部である。

259は鞆羽口の破片である。先端部に溶融物が付着している。

260・261は周辺の縄文時代の遺構から埋没過程で混入したと思われる石器・剥片である。260は楔形石器、261は使用痕のある剥片（UF）である。どちらも石材は灰色のチャートが用いられている。

262・263は砥石である。262は乳白色の流紋岩、263は砂岩が用いられている。

264は金床石の破片である。1～2mm程度の茶色の点が約10カ所に付着している。鍛冶の痕跡と思われる。

265は釘状鉄製品としたが、用途は不明。266は鉄滓。形状は椀形を呈する。

S H 317 (267～273)

267・268は土師器甕の口縁部である。269は須恵器杯蓋である。カエリがあり、欠損しているが、天井部にツマミが付くものである。270は須恵器壺の頸部片と思われる。わずかに内傾する。内面には自然釉がみられ、外面には沈線が2条施されている。271は須恵器甕の頸部片である。波状文と浅い沈線が2条確認できる。272は鉢の底部。底部内面は凸凹しており、やや粗雑なつくりである。

273は金床石である。ルーペを使用した肉眼での観察であるが、鉄の付着が顕著に確認できる。鉄の付着している面は、石の表面が赤変しており、被熱が強かったことが窺える。

S H 317 東隅土坑 (274)

274は須恵器杯蓋である。端部は丸い。

S H 317 焼土下土坑 (275～277)

275は土師器甕である。口縁端部がやや上向きにつくられている。276は須恵器壺の体部下半である。外面にロクロケズリが確認できる。内面は焼けぶくれで一部に爆ぜている部分もみられる。277は土錘である。形状から推測すると半分程度の残存である。

S H 329 (278～283)

278・279は土師器甕である。278は口縁端部から頸部まであまり厚さに変化がない。口縁端部はナデにより面がつくられている。279は小型の甕で、口縁部は端部にかけて徐々に薄くなり、端部は丸くつくられている。280須恵器杯蓋である。端部は丸い。281は須恵器壺の肩部である。肩はやや角張っている。282は土錘である。両端を欠損している。

283は付近にある縄文時代の遺構から埋没過程で混入した可能性のある磨石である。両面に使用痕がみられる。側面に敲打痕があることから、敲石としても使用されている。砂岩製である。

S H 329 竈 (284・285)

284は土師器甕である。口縁部は肥厚し、外反する。端部には面がつくられ、上端は突起している。285は椀形滓である。第Ⅵ章の自然科学分析の結果、金属鉄粒だけでなく青銅粒も含まれていることが判明した。

S H 329 中央土坑 (286)

286は須恵器壺の口縁部である。内面に自然釉が顕著に確認できる。

S H 353 (287)

287は須恵器杯蓋である。上部外面1/3程度の高さにロクロケズリが確認できる。稜は上下に浅く沈線を入れることで表現されている。外面に自然釉の付着がみられる。

S H 353 柱穴P5 (288～290)

288・289は土師器甕である。288は頸部から口縁部まで肥厚せず、ほぼ同じ厚さである。289は比較的厚手で、口縁端部はやや尖る。

290は須恵器短頸壺である。口縁端部はやや尖る。体部外面は下半にロクロケズリが施されている。底部付近にヘラ書きがある。

S H 386 (291～297)

291は壁周溝から出土した土師器甕である。やや薄手のものである。292は柱穴P3から出土した土師器壺または甕である。頸部がややくびれており、壺状を呈するが、残存度が低いため、甕である可能性も高い。293は中央土坑から出土した須恵器杯蓋である。破片の上部にわずかだがロクロケズリが確認できる。294は埋没過程で混入したとみられる弥生土器壺口縁部である。中期のものと思われる。

295～297は貯蔵穴からの出土である。295・296は須恵器甕体部片である。同一個体である。外面はタタキ後にカキメが施され、内面には同心円の当て具痕が残る。297は土師器把手である。差し込み式でつくられている。煮炊具類のものと思われる。

S H 701 (298・299)

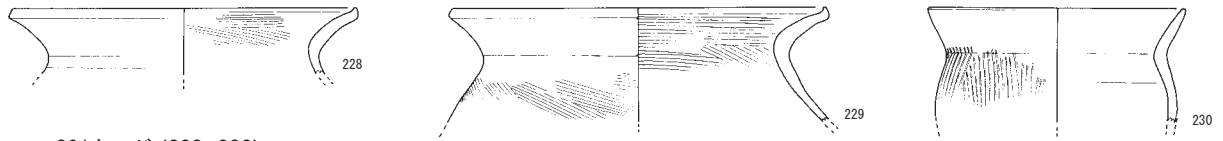
298は土師器甕である。299は須恵器瓶または杯の口縁部である。やや外反している。

S H 713 (300～303)

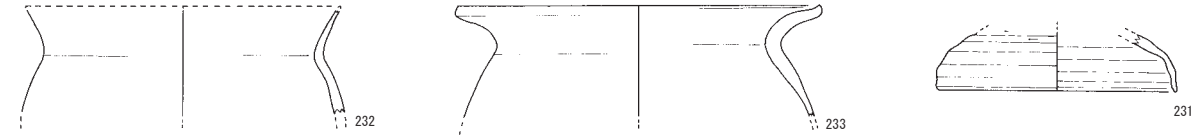
300は鞆羽口である。竈内から甕を支える石の代用として、底面に据え付けられたままの状態出土した。しかし、鍛冶滓の付着がまったくみられないことから、鞆羽口としては未使用と思われる。

301は須恵器杯蓋である。上部外面1/3程度にロクロケズリが施されている。稜は比較的明瞭である。口縁端部は丸い。302は甕の体部片である。外面に平行タタキ、内面には当て具痕が残る。

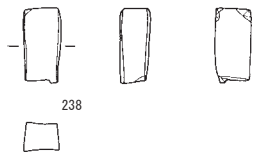
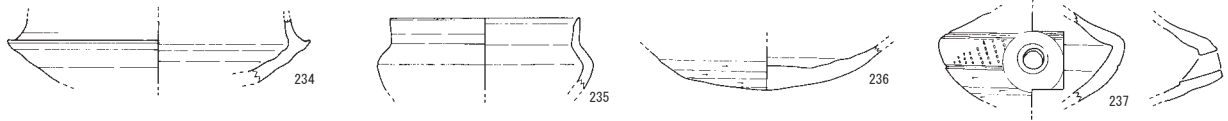
SH201貯蔵穴 (228~231)



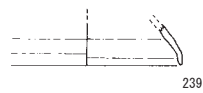
SH201カマド (232・233)



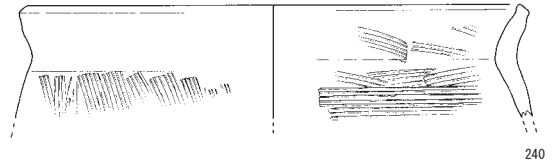
SH208 (234~238)



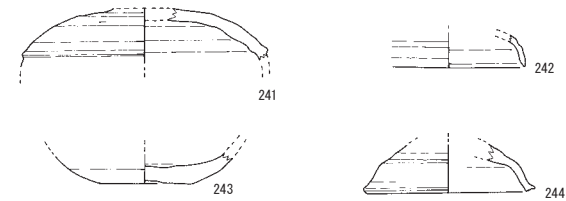
SH211 (239)



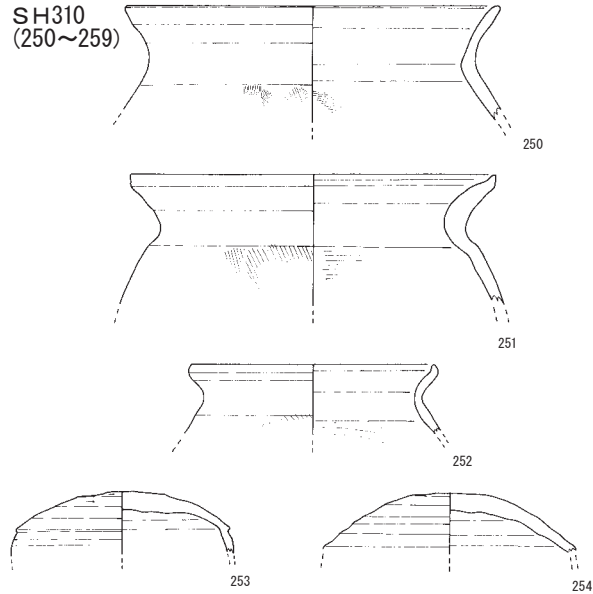
SH227 (240)



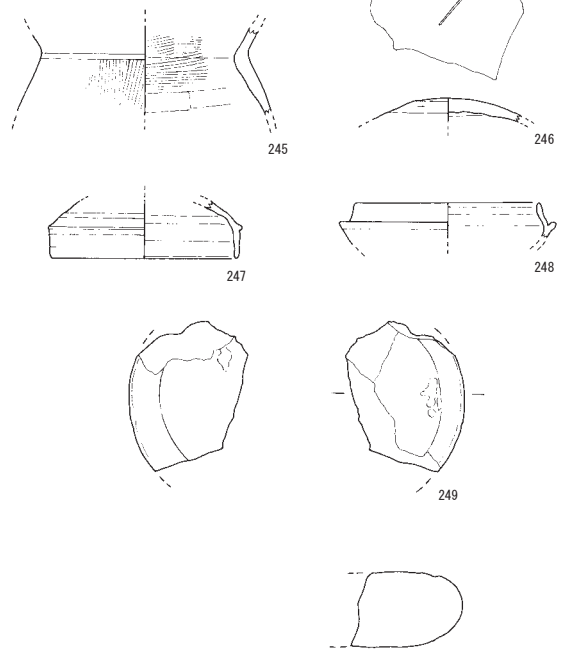
SH304 (241~244)



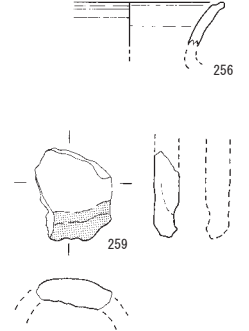
SH310 (250~259)



SH304中央土坑 (245~249)

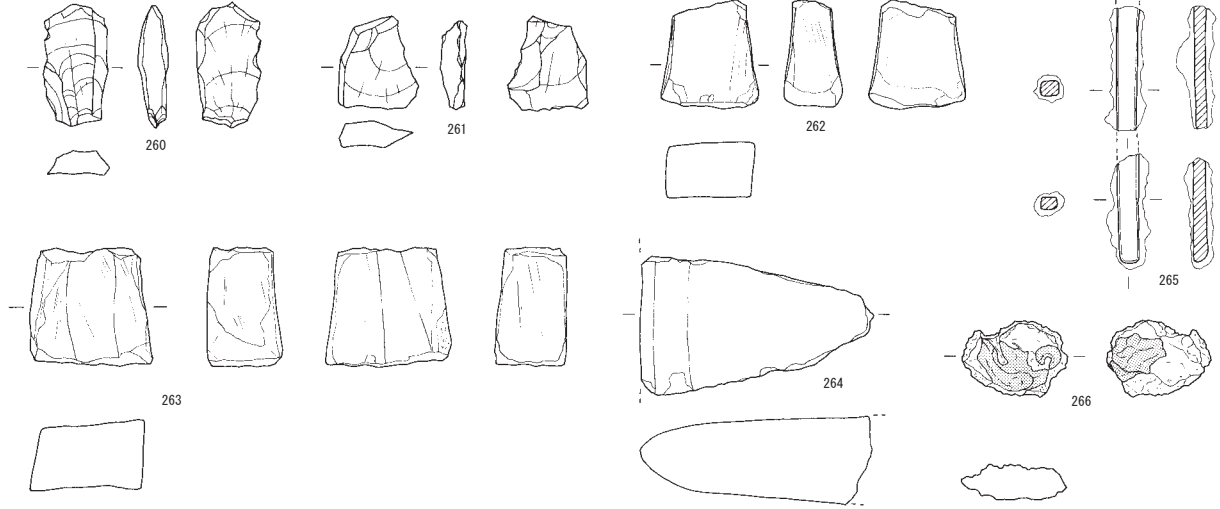


SH310P1 (256)

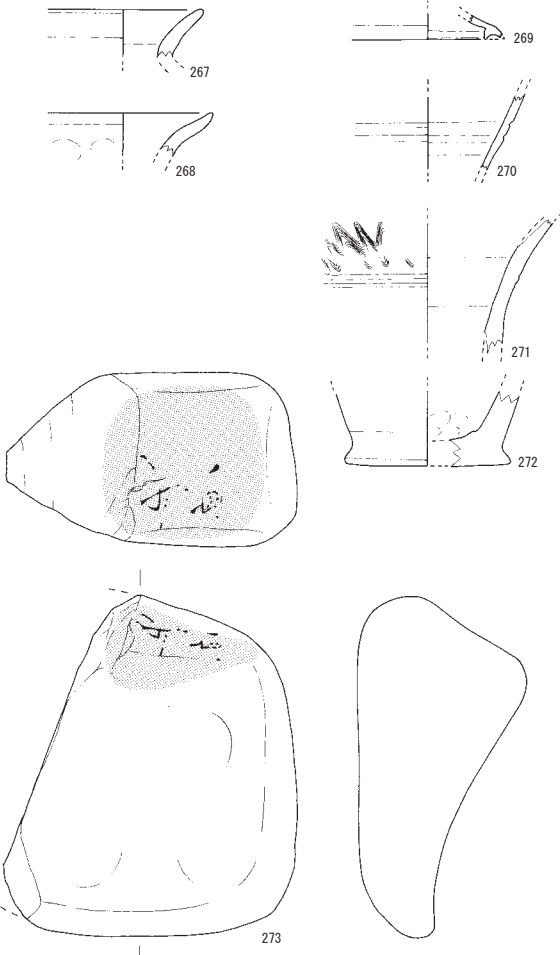


第118図 出土遺物実測図⑮ (1 : 4)

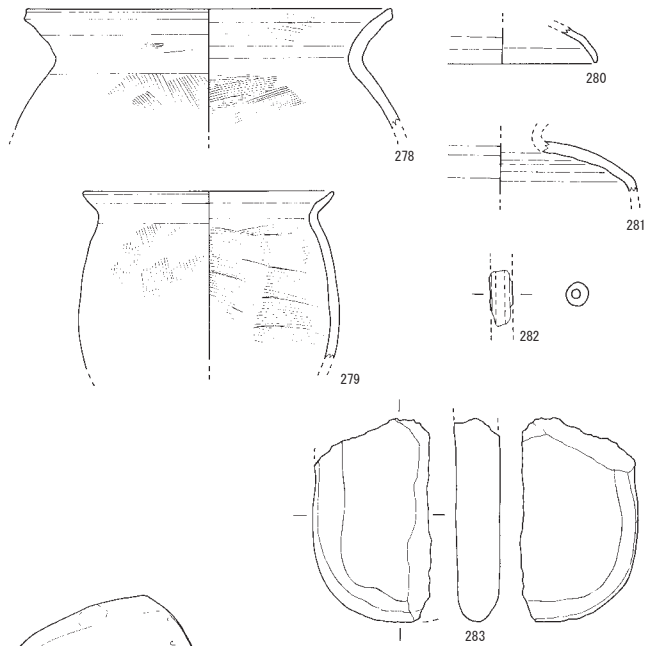
SH310 (260~266)



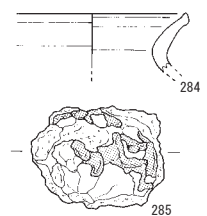
SH317 (267~273)



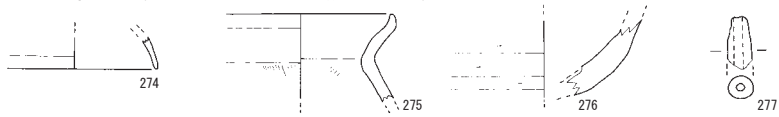
SH329 (278~283)



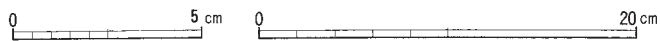
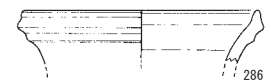
SH329カマド (284・285)



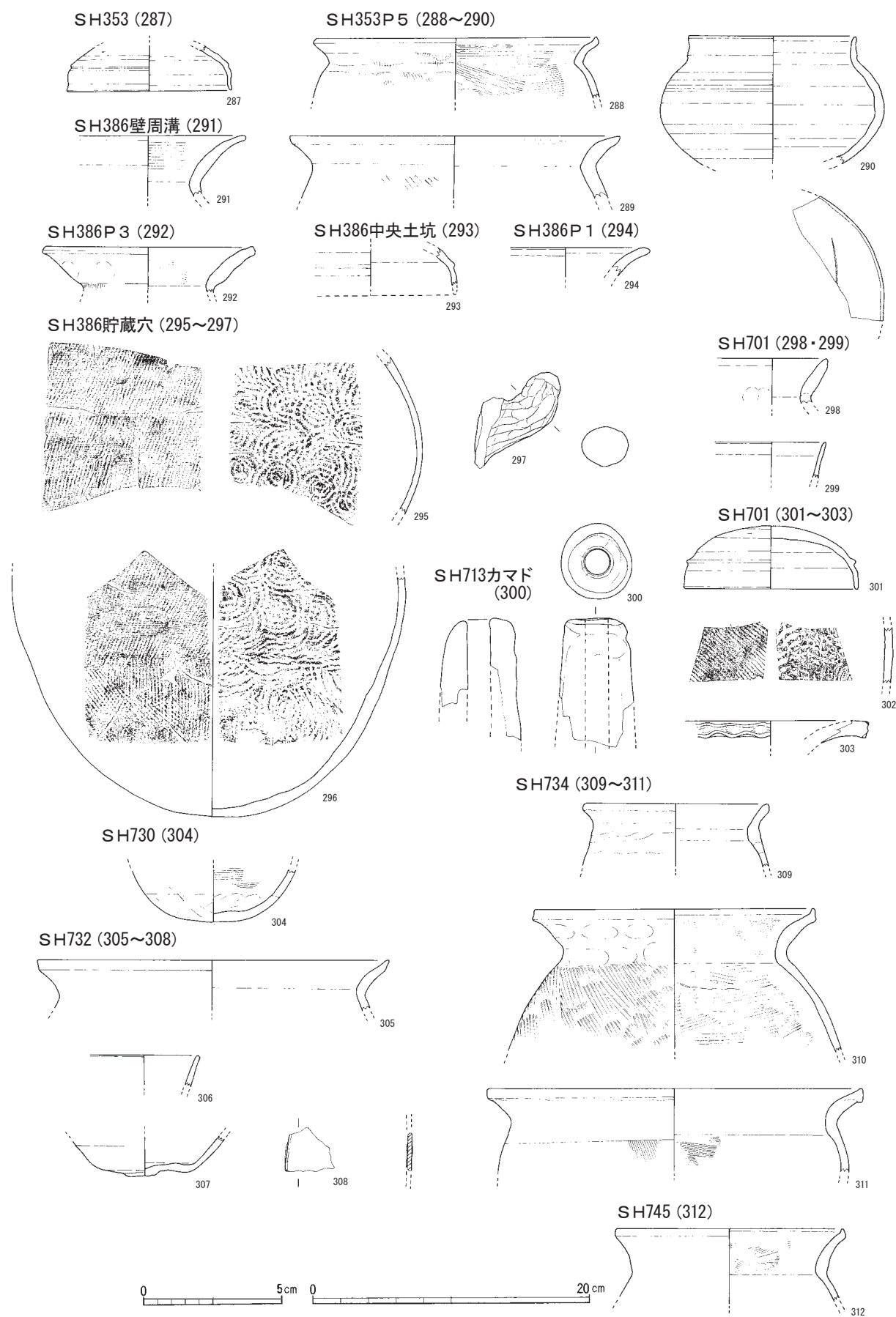
SH317東隅土坑 (274) SH317焼土下土坑 (275~277)



SH329中央土坑 (286)



第119図 出土遺物実測図⑩ (260・261・265は1:2、他は1:4)



第120図 出土遺物実測図⑰ (308のみ1:2、他は1:4)

303 は埋没過程で混入したとみられる弥生土器壺口縁部である。摩耗して調整は不明瞭だが、口縁端部にキザミ状の装飾が施されている。中期前半のものと思われる。

S H 730 (304)

304 は土師器甕の底部である。丸底である。

S H 732 (305 ~ 308)

305 は土師器甕である。306 は瓶または杯の口縁部である。端部は丸い。307 は須恵器杯である。底部外面に粗雑なヘラ切り痕が残る。308 は板状鉄製品の断片である。器種は不明である。

S H 734 (309 ~ 311)

309 ~ 311 は土師器甕である。309 は小型のもの。口縁部の外反は弱く、端部は丸い。310・311 は口縁部の角度に差があるものの内面にヨコハケ、外面にタテハケ（ナナメハケ）の調整は同じである。

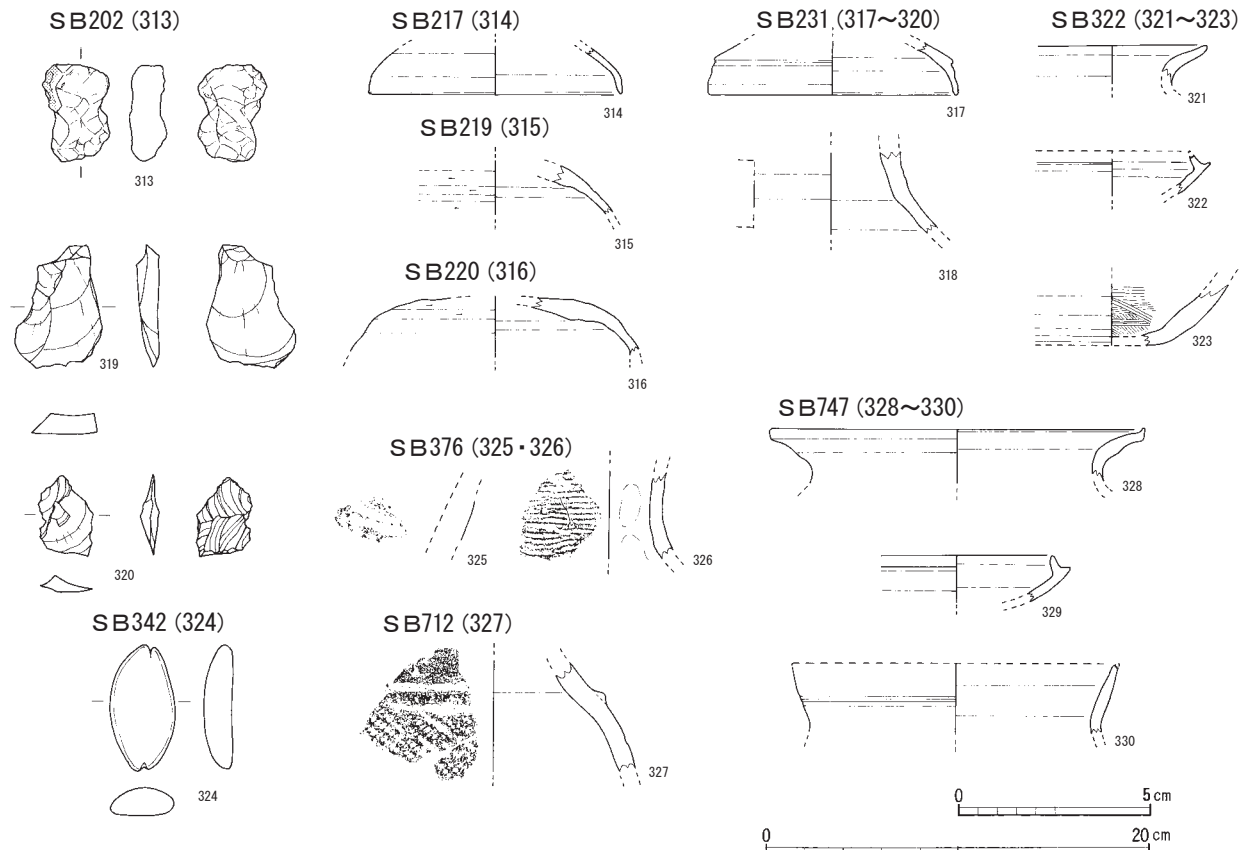
S H 745 (312)

312 は竈の崩壊土中から出土した土師器甕である。

(2) 掘立柱建物

S B 202 (313)

313 は柱穴 (K-W17P1) から出土した鉄滓である。



第121図 出土遺物実測図⑩ (319・320・325は1:2、他は1:4)

鉄分は乏しく磁着しない。

S B 217 (314)

314 は柱穴 (K-V21P1) から出土した須恵器杯蓋である。残存部にロクロケズリは確認できない。端部は丸く、稜もつくられていない。

S B 219 (315)

315 は柱穴 (K-T22P1) の掘形から出土した須恵器杯蓋である。破片の上部にロクロケズリが確認できる。

S B 220 (316)

316 は柱穴 (K-T23P2) の掘形から出土した須恵器杯蓋である。上部外面の1/3程度にロクロケズリが施されている。

S B 231 (317 ~ 320)

317 は柱穴 (L-R3P2) から出土した須恵器杯蓋である。稜は丸い。

318 は柱穴 (L-R3P1) から出土した須恵器高杯の脚部である。スカシの一部が残存するが、数は不明である。

319・320 は柱穴 (L-W9P2) の柱痕から出土したチャートの剥片である。埋没過程で混入したものと

思われる。どちらも不純物は少ない。319は灰色。320は灰～黒色である。

S B 322 (321～323)

321は柱穴(L-U11P2)の掘形から出土した土師器甕である。表面が摩耗しており調整は不明である。

322は柱穴(L-V11P1)の掘形から出土した須恵器杯身である。残存部にロクロケズリは確認できない。

323は柱穴(L-U11P1)の掘形から出土した須恵器壺の底部である。外面にロクロケズリ、内面にハケメが確認できる。

S B 342 (324)

324は柱穴(L-S7P1)の掘形から出土した切目石錘である。遺構の埋没過程で混入したものと思われる。両端の両面に切り込みが入れられている。きめの細かい砂岩製である。

S B 376 (325・326)

325は柱穴(J-N10P6)の掘形から出土した縄文土器片である。遺構の埋没過程で混入したものと思われる。細かい単節斜縄文がごく浅く施されている。内面は剥離している。

326は柱穴(J-N11P1)から出土した弥生土器壺の頸部片である。遺構の埋没過程で混入したものと思われる。中期のものと思われる。

S B 712 (327)

327は柱穴(M-J20P2)から出土した縄文土器鉢である。遺構の埋没過程で混入したものと思われる。

破片の下半に単節斜縄文、中央やや上に突帯が付く。突帯は縄文施文後の貼付である。中期後葉から末葉のものともみられる。

S B 747 (328～330)

328・329は柱穴(L-W11P1)の掘形から出土した。328は土師器甕である。風化が著しく調整は不明である。329は須恵器杯身である。322などとほぼ同じものである。

330は柱穴(L-Y12P4)から出土した須恵器壺の口縁部である。外面に沈線が2条施されている。内外面ともに自然釉が付着している。

(3) 土坑

S K 209 (331～341)

331～334は土師器甕である。このうち334は口

縁端部に面がつくられていない。335は甑の体部下半である。底部は残存していない。336・337は土師器把手である。煮炊具類のものと思われる。どちらも平面形は上から見ると三角形であるが、336は厚手で断面形も三角形を呈する。337は薄手で平坦なつくりである。

338・339は須恵器杯蓋である。いずれも上部外面の1/3程度にロクロケズリが施されている。稜は比較的明瞭である。口縁端部は丸い。340は須恵器杯身である。受部のたちあがり欠損するが前述の322などと同形のものである。

341は板状の鉄製品である。本来の器種は不明である。対向する2箇所径5mm程度の穿孔がある。短辺は両方ともややがたつきがあったため折損していると判断したが、穿孔の位置を勘案するとこれで完形の可能性もある。縦断面は両端とも平らで厚さに変化はなく、刀子のように尖ってはいない。横断面はやや湾曲している。

S K 210 (342～363)

342～347は土師器甕である。大型のものは長胴甕とおもわれる。348は土師器把手である。煮炊具類のものと思われる。上から見た形は、前述の336・337のように三角形ではない。

349～352は須恵器杯蓋である。349は天井部の1/4程度にロクロケズリが施され、稜も明瞭につくられている。350は残存部分にロクロケズリは確認できないが、稜は明瞭である。351にはロクロケズリも稜も全く確認できない。352は天井部にロクロケズリが施され、ごく浅い沈線で稜が表現されている。

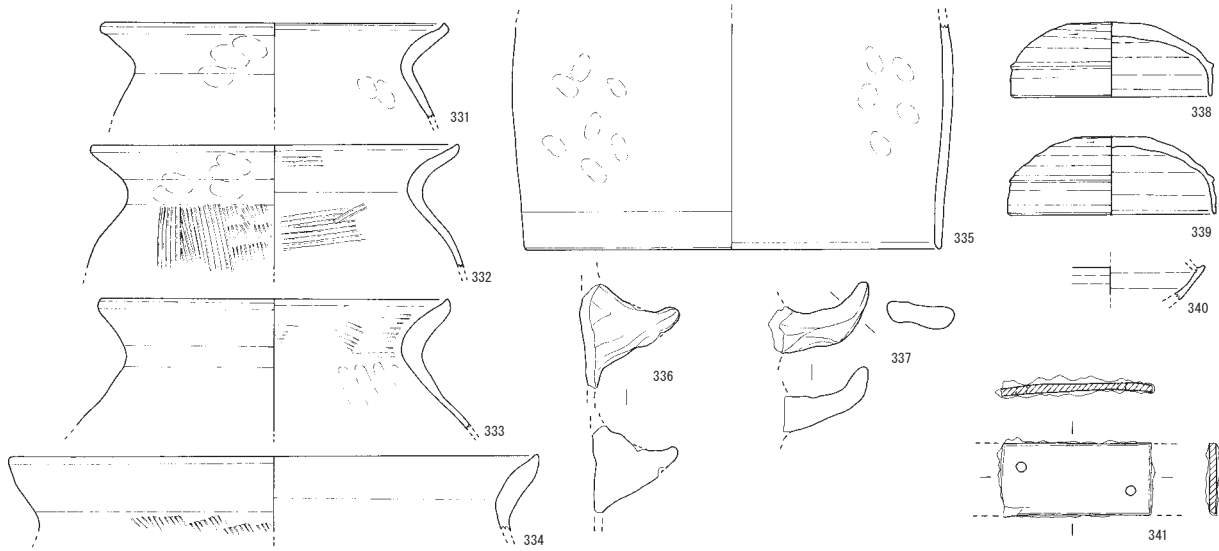
353～355は須恵器杯身である。353は底部にロクロケズリが施されている。354は底部外面にヘラ切り痕が残る。355は350と胎土・焼成・色調が類似しており、径も合う。

356・357は高杯である。接合する部分はないが、出土した位置が近く、胎土・焼成等に差異がないことから同一個体の可能性がある。357は残存するスカシの位置から3方スカシと推定される。

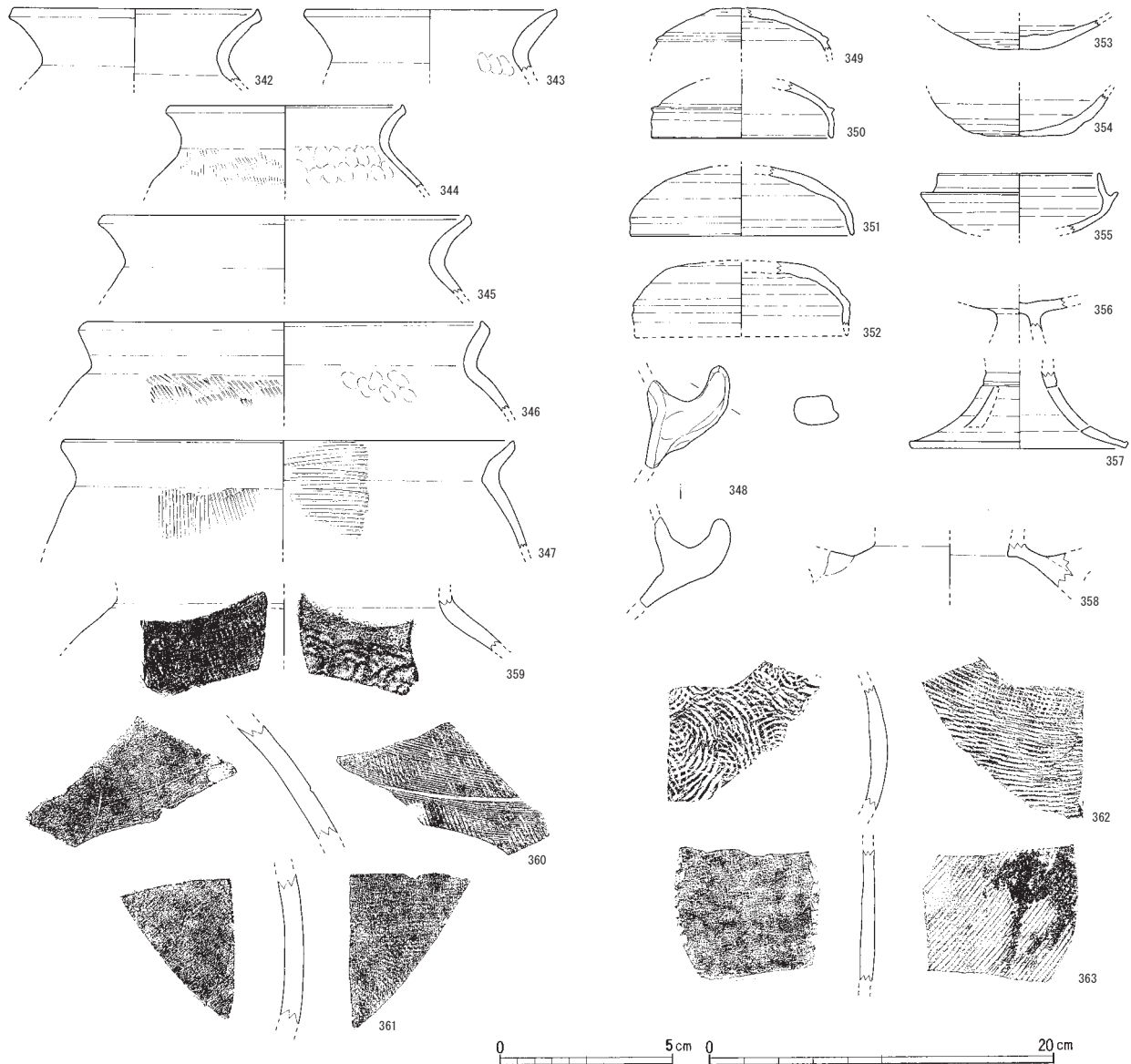
358は須恵器提瓶の肩部である。頸部や把手は折損している。外面は自然釉が付着している。

359～363は須恵器甕である。いずれも外面に

SK209 (331~341)



SK210 (342~363)



0 5cm 0 20cm

第122図 出土遺物実測図⑱ (341のみ1:2、他は1:4)

タタキ痕がみられるが、360はタタキ後にカキメ、361はタタキ後にナデが施されている。内面は当て具痕が残るもの(359・362)とナデ消してあるもの(360・361・363)がある。

SK 212 (364～368)

364は土師器甕底部である。2孔式の中央部分である。365は土師器把手である。煮炊具類のものと思われる。上から見て三角形にならないものである。

366は須恵器杯蓋である。稜やロクロケズリは確認できない。367は須恵器高杯である。外面に沈線が2条施されている。残存するスカシの位置から3方スカシと推定される。368は須恵器壺である。底部外面にロクロケズリが施されているものの、中央部の窪みにはヘラ切り痕が残っている。

SK 222 (369～371)

369は土師器甕である。370は須恵器杯蓋である。天井部にロクロケズリがみられる。稜は比較的明瞭につくられている。371は須恵器杯身である。底部外面にロクロケズリが施されている。

SK 225 (372・373)

372は土師器甕である。外面にタテ(ナナメ)ハケ、内面にヨコハケが施されている。373は須恵器高杯である。焼成不良のため土師器のようにみえる。

SK 302 (374・375)

374・375は土師器甕である。

SK 312 (376～381)

376は土師器甕である。377は須恵器杯蓋である。残存部にロクロケズリは確認できない。378～380は須恵器杯身である。378・379は底部外面にロクロケズリが施されている。381は須恵器高杯である。やや薄手で端部は丸い。

SK 313 (382～387)

382は須恵器杯蓋である。残存部にロクロケズリは確認できない。稜は浅い沈線1条で表現されている。383・384は須恵器杯身である。どちらも受部が非常に小さい。特に383はほとんど消滅している。385は須恵器瓶または壺の頸部である。外面に沈線が2条施されている。口縁部は外反せずやや内傾している。386は須恵器横瓶である。体部外面に沈線が1条施されている。沈線より外側には丁寧にロクロケズリが施されている。387は須恵器甕である。

外面は自然釉が厚く調整が確認しづらいが、頸部外面に沈線と波状文が施されている。体部外面は平行タタキ、内面の当て具痕は丁寧にナデ消されている。

SK 315 (388～392)

388は土師器甕である。口縁部は内湾気味にひらき、端部には面がつくられている。いわゆる「近江型」の特徴である。胎土等に関しては、在地の土師器と比べ差異は感じられない。

389は須恵器杯蓋、390は須恵器杯身である。389の端部はわずかに段がつくられている。390の上部外面にはロクロケズリが施されている。391・392は高杯である。391は外面に沈線が2条施されている。

SK 318 (393～398)

393～395は土師器甕である。395は器高の低い鉢や鍋に近い形態のものか。

396は須恵器杯蓋である。外面天井部にはヘラ切り痕が残り、それに重ねて「/」のヘラ書きがある。ヘラ切り痕の周囲にはロクロケズリが施されており、さらにその外側に浅く太い沈線(凹線)が1条施されている。397は須恵器杯身である。398は須恵器脚部である。高杯か壺のものと思われる。端部に浅く沈線が2条施されている。

SK 320 (399～414)

399～401は土師器甕である。401は器壁がやや薄く立ち気味である。

402～405は須恵器杯蓋である。404・405は端部に段がつくられている。406～409は須恵器杯身である。残存部にロクロケズリは確認できない。

410は鞆羽口である。鍛冶滓の付着はないが、顕著に被熱赤変している。411・412は土錘である。いずれも半分程度の残存である。

413はL字状の鉄製品である。本来の器種は不明である。図上側は破断し2つに裂けている。

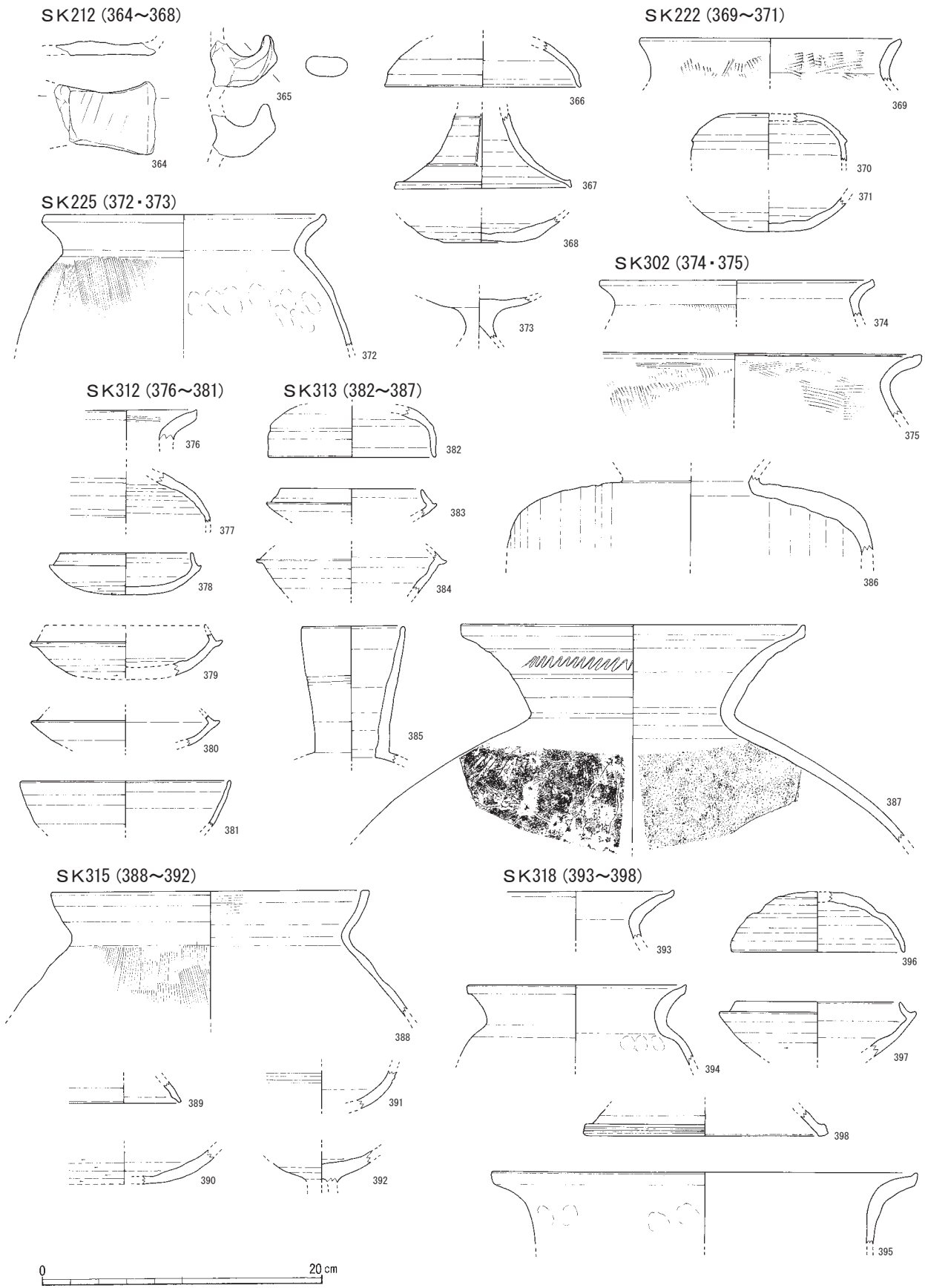
414は埋没過程で混入したと思われる灰色のチャート剥片である。

SK 324 (415・416)

415は土師器甕である。416は須恵器高杯である。端部内面に面がつくられている。

SK 325 (417・418)

417は土師器甕である。418は須恵器杯身である。



第123図 出土遺物実測図② (1 : 4)

外面にロクロケズリが施されている。

S K 326 (419)

419 は埋没過程で混入したと思われる灰色のチャート剥片である。主要剥離面の上部中央に打点がある。不純物が少ないため、リング・フィッシャーは打点から放射状に広がっている。裏面には礫表が残る。

S K 328 (420・421)

420 は土師器甕の体部片である。還元焼成のため須恵質であるが、ロクロを使用せず、内外面にハケメを施すなどの作成技法は土師器と同じである。

421 は須恵器高杯である。低い位置に沈線が1条施されている。残存するスカシの位置から3方スカシと推定される。

S K 332 (442～429)

422～424 は土師器甕である。427 は器高の低い鉢や鍋に近い形態のものか。

425・426 は須恵器杯蓋である。どちらもロクロケズリはないものの、稜は比較的明瞭につくられている。427 は須恵器高杯である。脚部の剥離痕が確認できる。428 は須恵器壺である。肩部に沈線が1条施されている。429 は須恵器甕である。外面は自然釉が厚く付着し、釉着した固体の剥離痕が2箇所にもみられる。一部にタタキ痕が残る。内面は丁寧にナデが施され、当て具痕はみられない。

S K 336 (430・431)

430 は須恵器杯蓋である。ロクロケズリや稜はみられない。431 は須恵器壺である。底部に脚台が付く。

S K 337 (432～437)

432～436 は土師器甕である。いずれも口縁部はやや肥厚し、外反する。432 は上端部の突起がやや大きい。436 は端部の面が不完全で丸い。437 は土師器煮炊具類の把手である。差込み式でつくられている。

S K 340 (438)

438 は須恵器杯身である。底部外面の中央にヘラ切痕が残る。その周囲はロクロケズリが施されている。

S K 356 (439)

439 は須恵器壺の底部である。外面にはロクロケ

ズリがあり、工具痕と釉着した別個体の一部が残っている。内面は自然釉が厚く付着している。

S K 359 (440～442)

440・441 は土師器甕である。440 は口縁部は肥厚せず外反も弱い。端部は丸くおさめられている。441 は口縁部がやや肥厚し強く外反する。端部には面がつくられ、上端は突起している。

442 は須恵器杯蓋である。残存部にロクロケズリは確認できない。稜の上部に浅い沈線が施され、稜が強調されている。端部は丸くおさめられている。

S K 360 (443)

443 は土師器甕である。口縁部は肥厚せず、外反も弱い。小型の丸底になるものか。

S K 361 (444～446)

444・445 は須恵器杯蓋である。444 は口縁部がやや外反する。445 はカエリは折損している。天井部にツマミの付くものである。446 は須恵器杯身である。ロクロケズリが施されている。ヘラ記号が確認できる。

S K 363 (447)

447 は須恵器高杯の脚部である。焼成不良のため軟質である。沈線が2条施されている。

S K 395 (448)

448 は土師器甕である。内外面ともにハケメがない。外面は丁寧にナデられている。口縁部は肥厚せず、やや外反するものの端部は丸くおさめられている。胎土に1mm程度の砂粒が含まれており、やや異質である。

S K 702 (449・450)

449 は土師器甕である。口縁部の肥厚は弱く、外反する。端部には面がつくられ、上端は突起している。

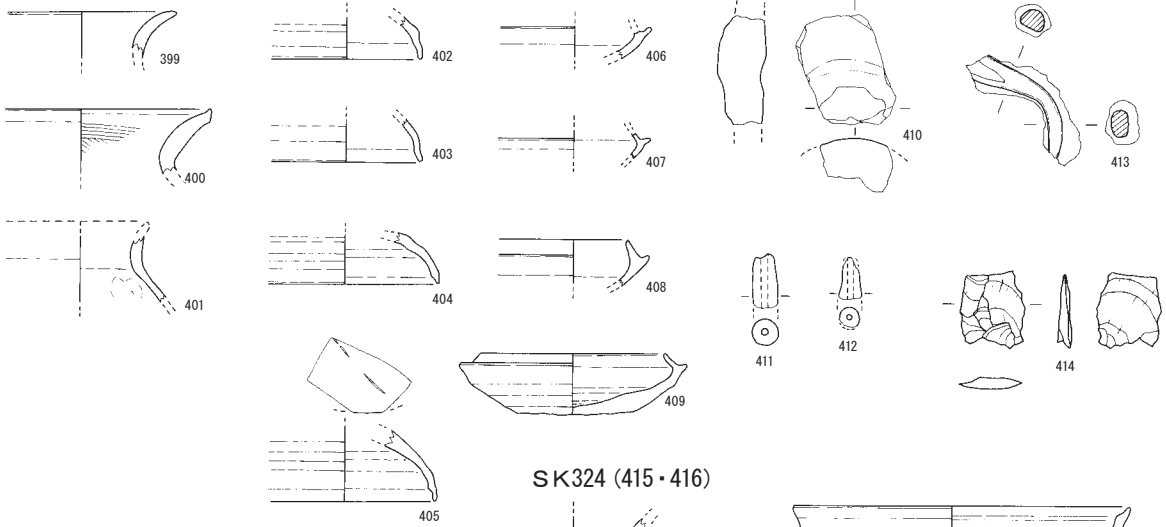
450 は金床石である。砂岩製。砥石からの転用である。全体に被熱しており、赤変している。表面に2～5mm程度の浅い窪みが多数あり、所々に鉄錆色の付着が確認できる。

S K 710 (451)

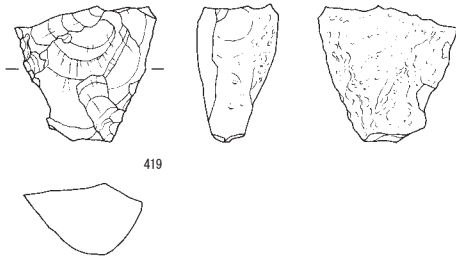
451 は須恵器杯蓋である。残存部にロクロケズリは確認できず、稜もつくられていない。端部は丸くおさめられている。

S K 711 (452～465)

SK320 (399~414)



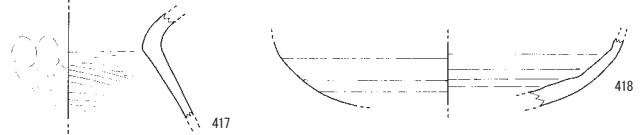
SK326 (419)



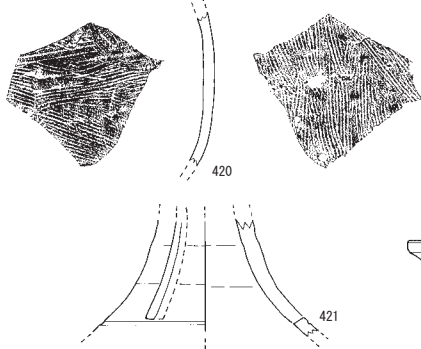
SK324 (415・416)



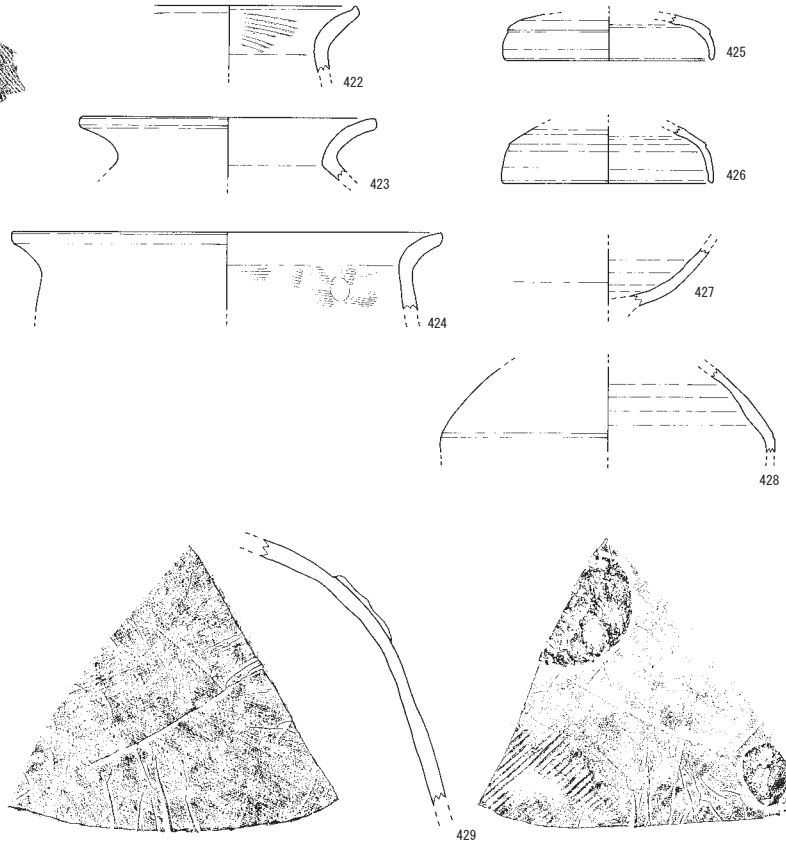
SK325 (417・418)



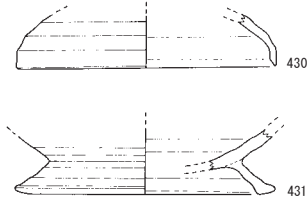
SK328 (420・421)



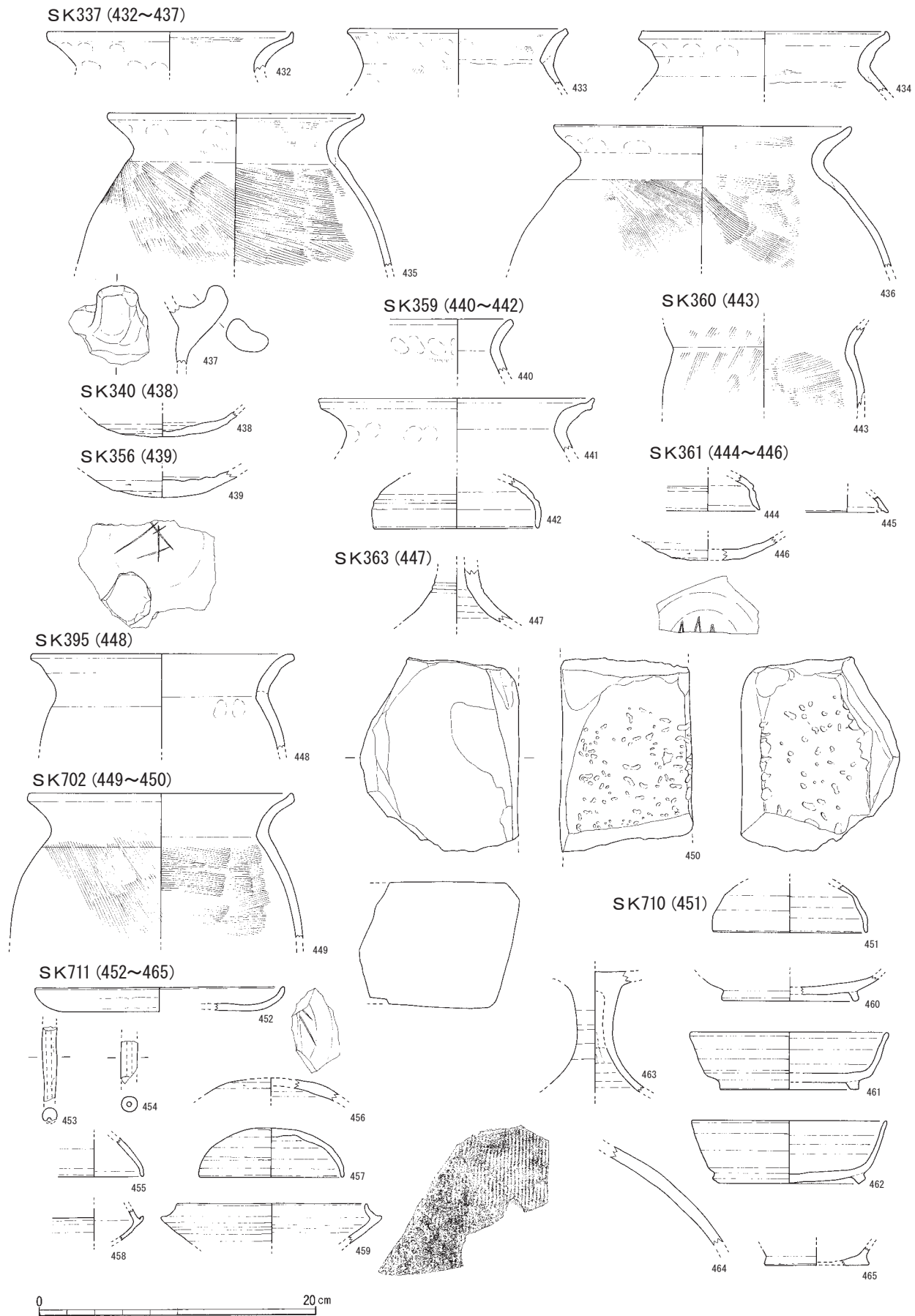
SK332 (422~429)



SK336 (430・431)



第124図 出土遺物実測図② (413・414・419は1:2、他は1:4)



第125図 出土遺物実測図② (1 : 4)

452 は土師器皿である。端部は丸くおさめられている。底部からの立ち上がりも丸い。

453・454 は土鍾である。453 は今回出土した土鍾の中では最も長い。

455～457 は須恵器杯蓋である。455・457 は端部が丸く、稜はつくられていない。456 のみロクロケズリがあり、ヘラ書きが確認できる。458・459 は須恵器杯身である。どちらもロクロケズリは確認できない。

460～462 は須恵器杯身である。底部に高台が付く。460 は底部からの立ち上がりがやや緩やかである。461 は高台の貼付位置がやや内側に寄る。462 は高台がやや外側に向いている。463 は須恵器高杯である。スカシや沈線などは施されていない。464 は須恵器甕である。外面はタタキ痕が残り、自然釉の付着がある。内面は丁寧にナデが施され、当て具痕は消されている。

465 は埋没過程で混入したとみられる弥生土器底部。中期前半のものと思われる。

S K 720 (466～469)

466・467 は土師器甕である。466 は端部のつまみ上げが強く、突起が外側に向いている。

468 は須恵器杯身である。外面に厚く自然釉が付着している。ロクロケズリは確認できない。

469 は埋没過程で混入したものとみられる弥生土器壺の口縁部。端部にユビオサエによる装飾が施されている。中期前半のものと思われる。

S K 721 (470～473)

470 は土師器甕

471～473 は埋没過程で混入したとみられる遺物である。471 は縄文土器底部片である。風化が激しく調整は不明瞭である。胎土等の特徴から縄文土器と判断した。472 は弥生土器鉢の口縁部である。詳細な時期は不明である。風化が激しく調整は不明瞭である。473 はチャート剥片。臙脂色を呈する。主要剥離面の上部中央に打点がある。不純物が少なく、リング、フィッシャーは打点から放射状に広がっている。もう一方の面には剥離面が多くみられる。

S K 726 (474～476)

474 は土師器甕である。口縁部は肥厚せず、外反する。端部に面がつくられている。

475・476 は須恵器杯蓋である。475 は稜が明瞭につくられており、端部がやや尖る。476 は口縁端部に段がつくられている。稜は沈線によって表現されている。

S K 728 (477)

477 は須恵器杯身である。器壁はやや薄く端部は丸くおさめられている。

S K 735 (478)

478 は須恵器杯身である。残存部にロクロケズリは確認できない。

(4) ピット出土遺物

ピットから出土した飛鳥時代の遺物をここで報告する。グリッドとピット番号については遺物観察表を参照されたい。

479～486 は土師器甕である。いずれも口縁部が肥厚する。486 以外は端部に面がつくられている。484 は口縁部の屈曲が弱く、体部は下に伸びる。鍋に近い形状のものか。

487 は土師器甕である。把手は差込式でつくられている。488 は土師器皿である。口縁端部が内側に丸くおさめられている。

489～491 は須恵器杯蓋である。489 は器壁が薄く、稜は沈線によって表現されている。491 は天井がやや丸い。壺の底部にしてはやや薄手のため杯蓋と判断した。492 は須恵器杯身である。受部がややさがる。

493～495 は須恵器高杯である。493 は脚部に沈線が2条あり、スカシは3方に入れられている。494 は杯底部に脚部の剥離痕とスカシを切り込んだ痕跡が残っている。3方スカシである。495 はスカシの一部が残るが、断片から数は推定できない。

496 は須恵器鉢である。小型のもので、口縁部はやや開き、端部は内側に面がつくられている。

497～499 は須恵器壺である。497 は口縁部はほぼ直立し、端部は丸い。外面に自然釉が多く付着している。498 は底部外面の中央にヘラ切り痕が残る。499 は丸底で外面にロクロケズリが施されている。

500・501 は須恵器瓶類の口縁部である。500 は浅い沈線が4条、501 は1条施されている。

502～504 は須恵器甕である。502 は口縁部。端部に面があり、やや尖る。503 は肩部に浅い沈線が

1条施されている。504は沈線が、肩に2条、体部下半に1条あり、その間に櫛描きで斜線が入れている。

505・506は須恵器甕の体部片である。505は外面にタタキ、内面に当て具痕が残る。506は外面にタタキ後にカキメと2条の沈線が施されている。内面はナデられて当て具痕はない。

507は知多式製塩土器の脚部である。今回の調査では他に519があり、合計で2点出土している。

508・509は鉄製品である。508は上下を欠損し、断面は四角形である。釘状のものの断片と思われるが、本来の器種は不明である。509はやや横長の四角形を呈し、上端は平らで下端が尖る。形状から鉋刃の可能性が考えられる。鉋刃であれば、鉋身ではなく裏金である。

遺構外（包含層等）出土（513～540）

513～516は土師器甕である。いずれも強弱はあるものの、口縁部が肥厚し外反する。端部には面があり、514は上端の突起がやや大きい。

517・518は土師器甕である。どちらも口縁端部に面があり、内側にやや突起状に張り出している。

518の把手は差込式の技法で貼付されている。底面は残っておらず、孔数は分からない。

519は知多式製塩土器の脚部である。今回の調査では他に507があり、合計で2点出土している。

520～525は須恵器杯身である。525のみヘラ切り痕が残る。

526～528は須恵器高杯である。いずれもスカシの数は不明である。

529～533は壺である。532・533は外面にロクロケズリが施されている。

534・535は須恵器甕である。どちらも頸部に沈線が2条施されている。

536・537は須恵器横瓶である。どちらも外面にタタキ痕がある。536の内面は当て具痕が残るが、537はナデが施され、当て具痕はない。

【註】

- ①田辺昭三『須恵器大成』角川書店1980。
- ②土師器については古代の土器研究会編『古代の土器4・煮炊具（近畿編）』1996を参考にした。
- ③石材については、三重県総合博物館学芸員津村善博氏に鑑定を依頼した。鑑定は平成26年9月19日に三重県総合博物館にて行った。以下、同じ。

第5節 中世

今回の調査では飛鳥時代以降の遺物は破片を含めてほとんど確認できなかった。

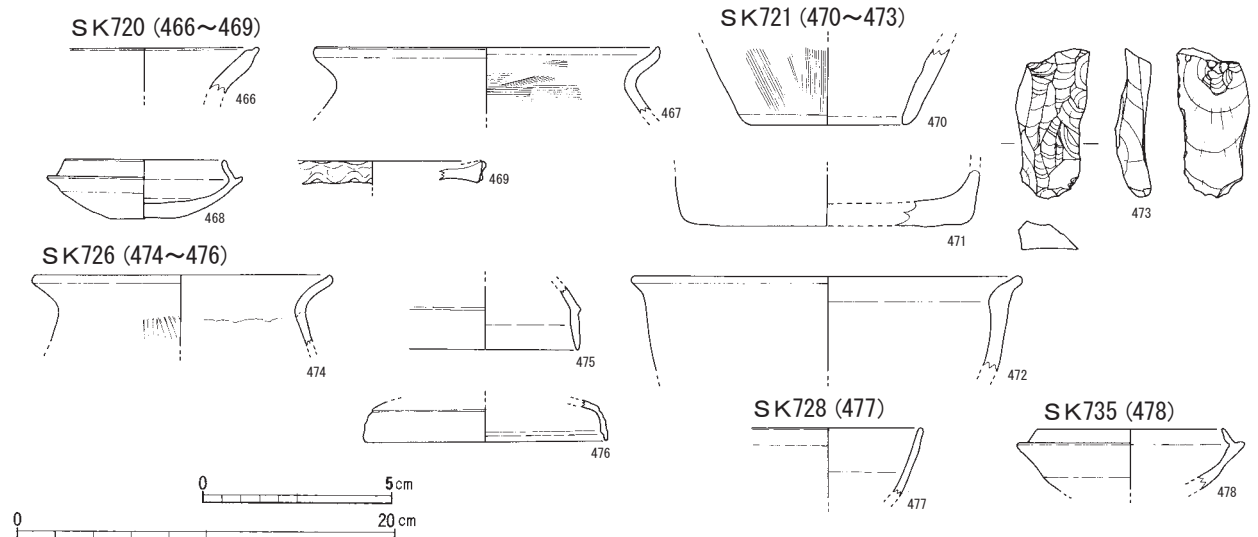
遺構外（包含層等）出土

540は加工円盤である。瀬戸美濃産陶器^①の体部片を打ち欠いて円形に加工している。中世後期の産

と思われる。

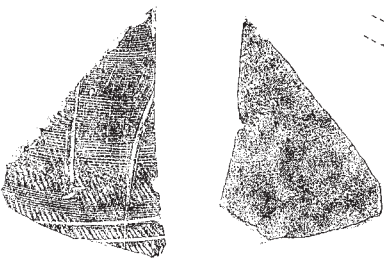
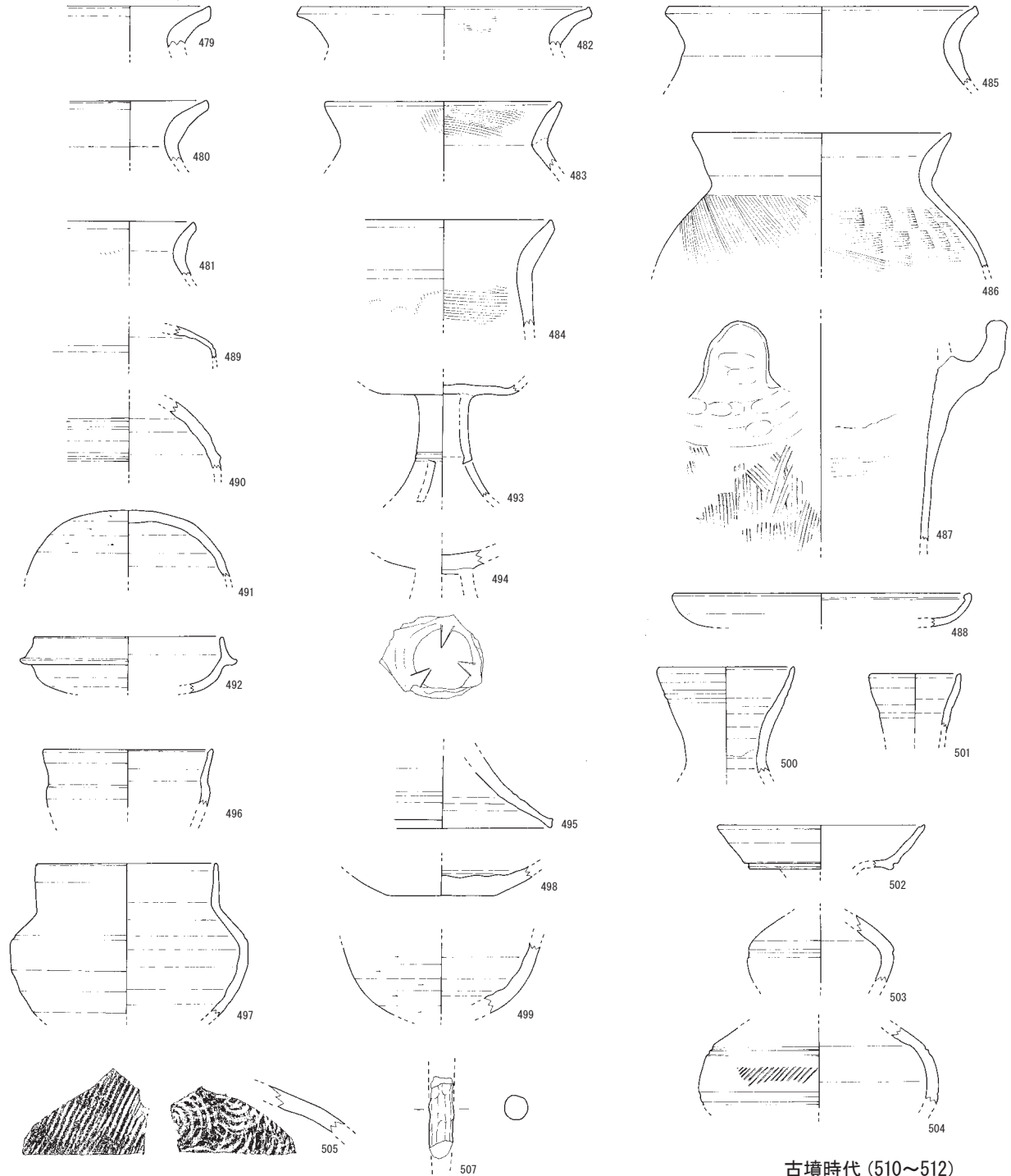
【註】

- ①中世土器研究会編『概説中世の土器・陶磁器』真陽社1995、藤澤良祐『中世瀬戸窯の研究』古志書院2005。



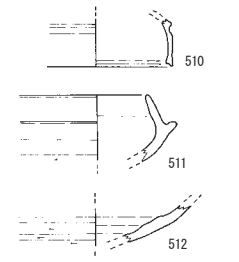
第126図 出土遺物実測図② (473のみ 1:2、他は1:4)

ピット出土遺物 (479~512)



0 20 cm

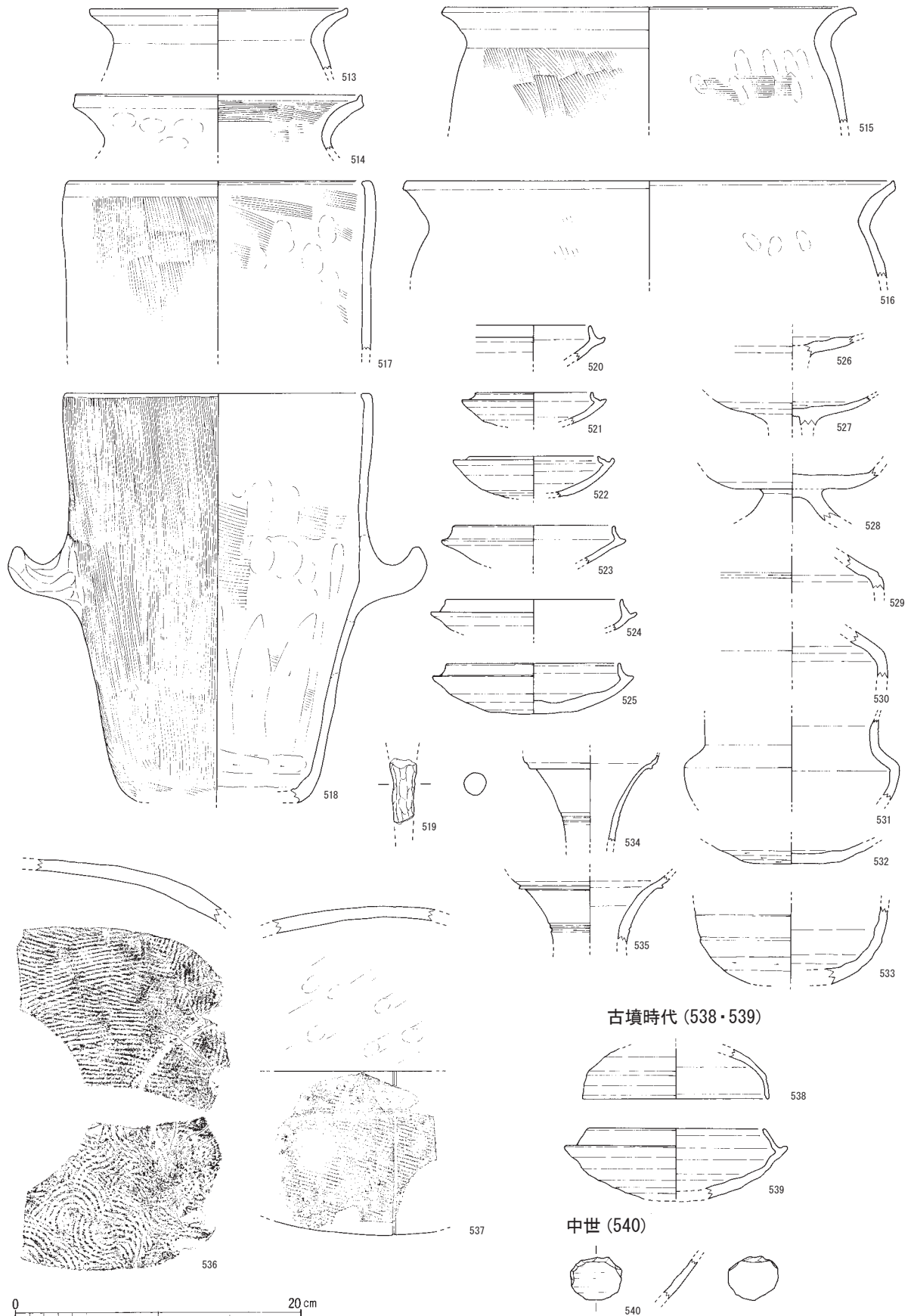
古墳時代 (510~512)



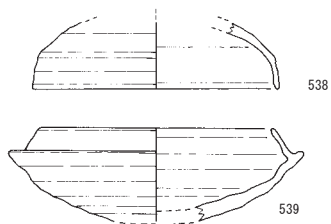
0 5 cm

第127図 出土遺物実測図② (508のみ1:2、他は1:4)

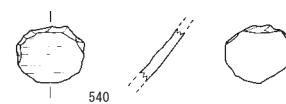
遺構外出土遺物 (513~540)



古墳時代 (538・539)



中世 (540)



第128図 出土遺物実測図② (1:4)

第Ⅵ章 自然科学分析

中野山遺跡の実態（各時代の植生・環境・技術・生活等）を解明する一助とするため、出土遺物について自然科学分析を行った。分析の項目と執筆者および分析対象は、以下のとおりである。

1 放射性炭素年代測定

パレオ・ラボ AMS 年代測定グループ^①（株式会社パレオ・ラボ）

炉穴類出土炭化材（第3・7次調査）：縄文時代早期

2 出土炭化材の樹種同定

小林克也氏（株式会社パレオ・ラボ）

炉穴出土炭化材（第3・7次調査）：縄文時代早期

竪穴住居出土炭化材（第7次調査）：弥生時代後期・古墳時代後期

3 出土石器の残存デンプン粒分析

渋谷綾子氏（国立歴史民俗博物館）

縄文時代早期遺構出土石器（第3・7次調査）

4 出土滓の分析調査

大澤正己氏・鈴木瑞穂氏（日鉄住金テクノロジー株式会社 八幡事業所 TAC センター）

竪穴住居・土坑出土滓（第3次調査）：飛鳥時代

なお、報告書作成をすすめていくうえで、分析後に遺構の名称を変更したものについては、それに合わせて編集の際に名称の修正を行った。それ以外については、調査回数ごとの分析のため、重複する文章も多いが、執筆者の文章を尊重し、明らかな誤字脱字や体裁統一のための最小限の加筆・修正以外は手を加えることなく掲載している。

【註】

①第3次調査：伊藤 茂・安昭炫・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・小林絃一・Zaur Lomtadze・Ineza Jorjoliani・中村賢太郎

第7次調査：伊藤 茂・安昭炫・佐藤正教・廣田正史・山形秀樹・小林絃一・Zaur Lomtadze・Ineza Jorjoliani・小林克也

第1節 放射性炭素年代測定

1 放射性炭素年代測定（第3次調査）

（1）はじめに

三重県四日市市に位置する中野山遺跡の第3次発掘調査で煙道付炉穴と集石炉から採取された炭化材について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。なお、試料の一部については樹種同定も行われている（第2節参照）。

（2）試料と方法

測定試料の情報、調製データは第4表のとおりである。

試料は、縄文時代早期の煙道付炉穴と集石炉から採取された炭化材21点である。煙道付炉穴では、S F 367（第4層底面）、S F 368、S F 369（第3層底面）、S F 373、S F 374、S F 375、S F 383、S F 390、S F 391、S F 402（第7層底面）、S F 406、S F 409（第10層底面と第11層底面）から13点が採取された（試料No.1～5・7・8・10・11・19～22：PLD-21699～21707・21714～21717）。集石炉で

は、S K 343、S K 346、S K 348、S K 349、S K 351、S K 357、S K 379、S K 411から8点が採取された（試料No.12・14～18・23・24：PLD-21709～21713・21718・21719）。なお、煙道付炉穴S F 375から採取された試料No.19（PLD-21714）は、必要な炭素量を回収できず、測定ができなかった。

試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製1.5SDH）を用いて測定した。得られた¹⁴C濃度について同位体分別効果の補正を行った後、¹⁴C年代、暦年代を算出した。

（3）結果

第5表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した¹⁴C年代を、第129～132図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された

際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代 (yrBP) の算出には、 ^{14}C の半減期として Libby の半減期 5568年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差 ($\pm 1\sigma$) は、測定の実験誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5568年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い (^{14}C の半減期 5730 ± 40 年) を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正には OxCal4.1 (較正曲線データ: IntCal09) を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCal の確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

(4) 考察

煙道付炉穴から採取された炭化材は、 ^{14}C 年代が $9425 \pm 30 \sim 9200 \pm 35$ ^{14}C BP、 2σ 暦年代範囲 (確率95.4%) が8784 ~ 8301 cal BCであった。集石炉から採取された炭化材は、 ^{14}C 年代が $9420 \pm 30 \sim 9280 \pm 30$ ^{14}C BP、 2σ 暦年代範囲が8780 ~ 8351 cal BCであった。小林 (2008) と工藤 (2012) を参照すると、全て縄文時代早期前半に相当する。なお、S F 409 では下層と上層で年代の新旧に逆転が見られる。この原因としては、攪乱による土中での炭化材の上下移動や古木効果の影響などが考えられる。

引用・参考文献

Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. Radiocarbon, 51 (1), 337-360.

小林謙一 (2008) 縄文時代の暦年代. 小杉康・谷口康浩・

西田泰民・水ノ江和同・矢野健一編「縄文時代の考古学2 歴史のものさし」: 257-269, 同成社.

工藤雄一郎 (2012) 旧石器・縄文時代の環境文化史—高精度放射性炭素年代測定と考古学—. 373p, 神泉社.

中村俊夫 (2000) 放射性炭素年代測定法の基礎. 日本先史時代の ^{14}C 年代編集委員会編「日本先史時代の ^{14}C 年代」: 3-20, 日本第四紀学会.

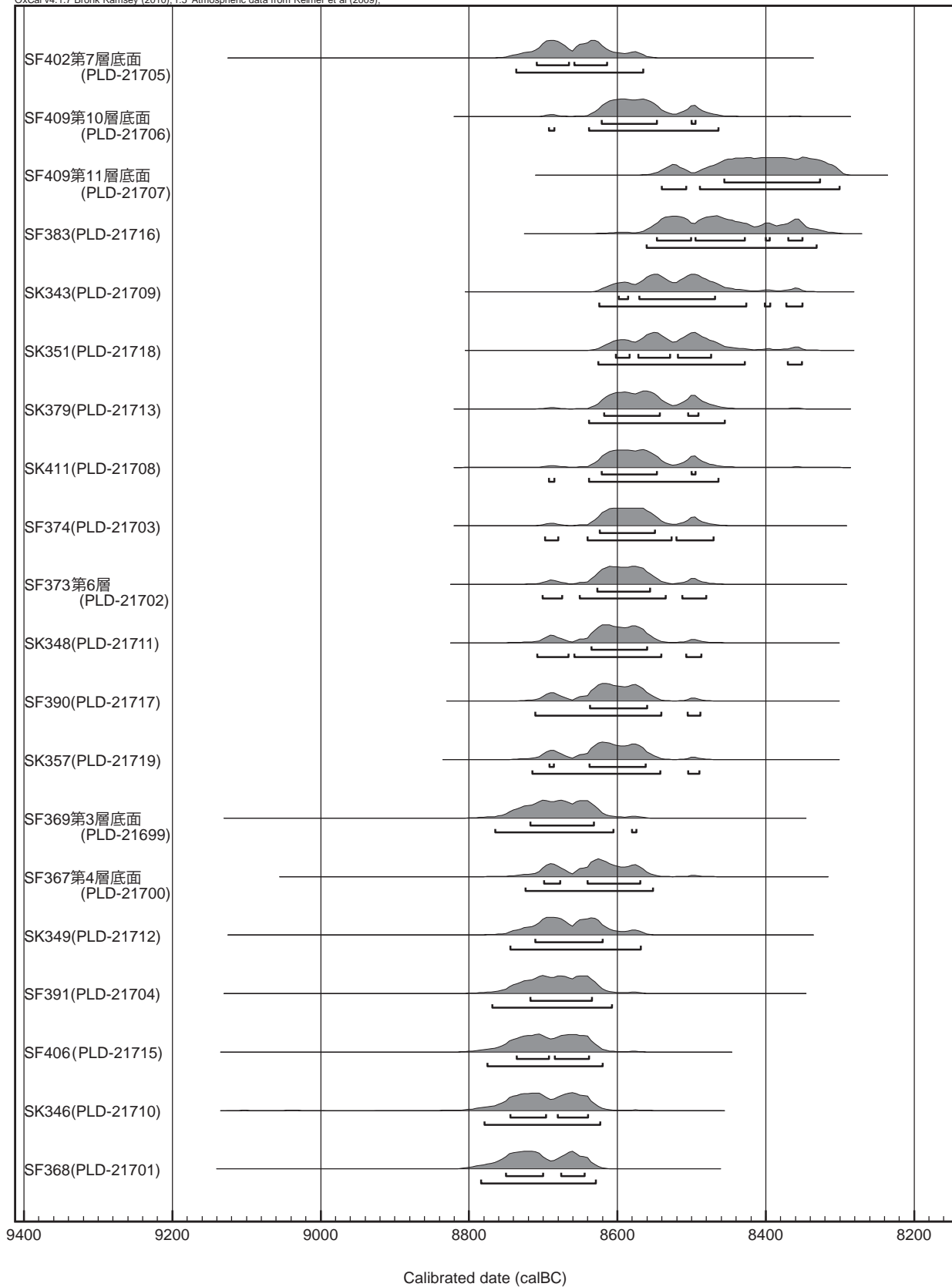
Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Burr, G.S., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., McCormac, F.G., Manning, S.W., Reimer, R.W., Richards, D.A., Southon, J.R., Talamo, S., Turney, C.S.M., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer C.E. (2009) IntCal09 and Marine09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0-50,000 Years cal BP. Radiocarbon, 51, 1111-1150.
矢野健一 (2008) 押型文系土器 (大川式・神宮寺式土器). 小林達雄編「総覧縄文土器」: 154-161, アム・プロモーション.

第4表 測定試料および処理（第3次）

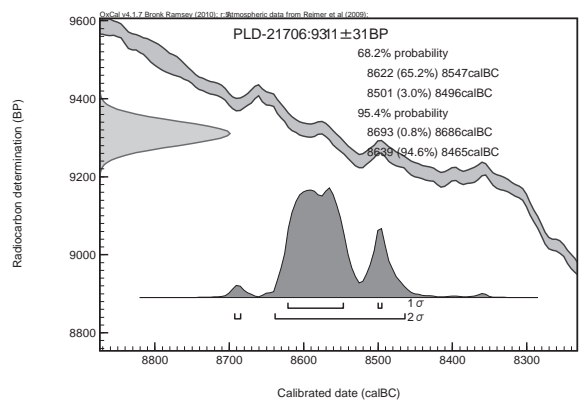
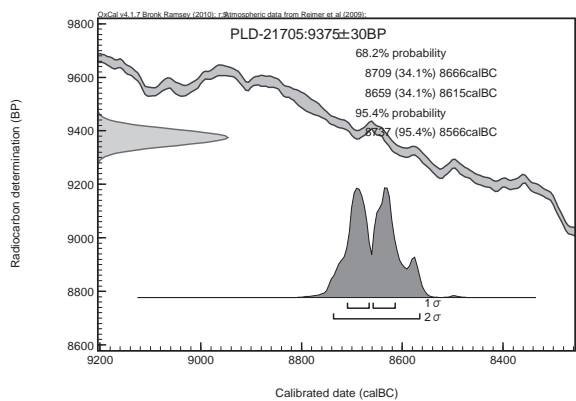
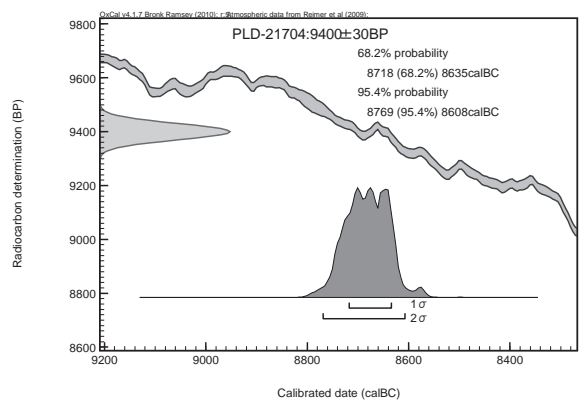
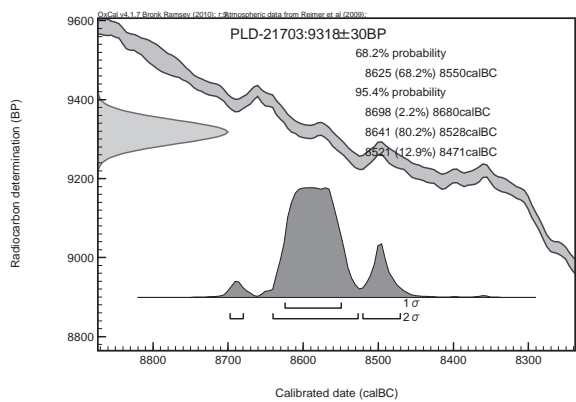
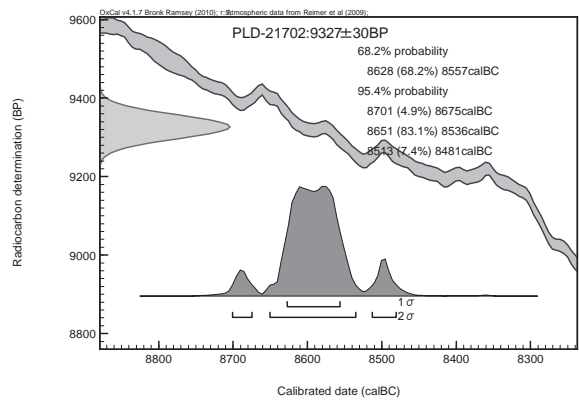
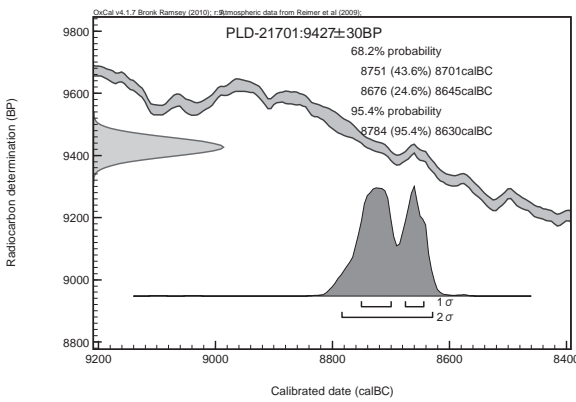
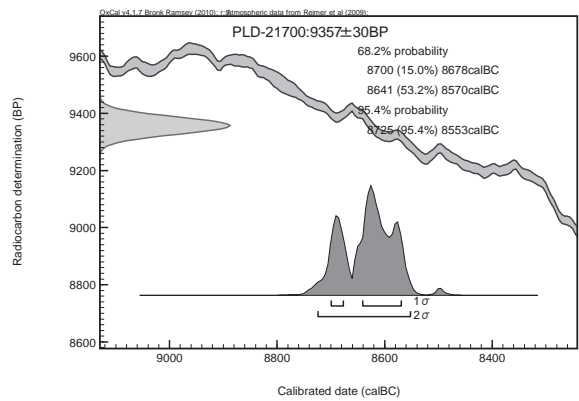
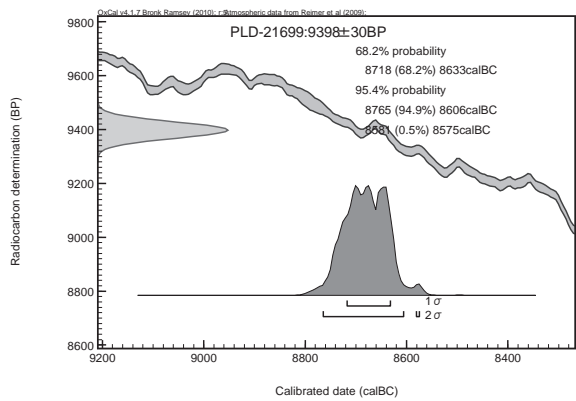
測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-21699	調査区:第3次 試料No. 1 遺構:煙道付炉穴SF369 層位:第3層底面	種類:炭化材 試料の性状:不明 状態:dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:1.0N,塩酸:1.2N)
PLD-21700	調査区:第3次 試料No. 2 遺構:煙道付炉穴SF367 層位:第4層底面	種類:炭化材 試料の性状:不明 状態:dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:1.0N,塩酸:1.2N)
PLD-21701	調査区:第3次 試料No. 3 遺構:煙道付炉穴SF368	種類:炭化材 試料の性状:不明 状態:wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:1.0N,塩酸:1.2N)
PLD-21702	調査区:第3次 試料No. 4 遺構:煙道付炉穴SF373 層位:第6層底面	種類:炭化材 試料の性状:不明 状態:dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:1.0N,塩酸:1.2N)
PLD-21703	調査区:第3次 試料No. 5 遺構:煙道付炉穴SF374	種類:炭化材 試料の性状:不明 状態:dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:1.0N,塩酸:1.2N)
PLD-21704	調査区:第3次 試料No. 7 遺構:煙道付炉穴SF391	種類:炭化材(クリ) 試料の性状:不明 状態:wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:1.0N,塩酸:1.2N)
PLD-21705	調査区:第3次 試料No. 8 遺構:煙道付炉穴SF402 層位:第7層底面	種類:炭化材 試料の性状:不明 状態:dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:1.0N,塩酸:1.2N)
PLD-21706	調査区:第3次 試料No. 10 遺構:煙道付炉穴SF409 層位:第10層底面	種類:炭化材(クリ) 試料の性状:不明 状態:wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:1.0N,塩酸:1.2N)
PLD-21707	調査区:第3次 試料No. 11 遺構:煙道付炉穴SF409 層位:第11層底面	種類:炭化材(クリ) 試料の性状:不明 状態:wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:1.0N,塩酸:1.2N)
PLD-21708	調査区:第3次 試料No. 12 遺構:集石炉SK411	種類:炭化材(クリ) 試料の性状:不明 状態:wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:1.0N,塩酸:1.2N)
PLD-21709	調査区:第3次 試料No. 14 遺構:集石炉SK343	種類:炭化材(クリ) 試料の性状:不明 状態:wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:1.0N,塩酸:1.2N)
PLD-21710	調査区:第3次 試料No. 15 遺構:集石炉SK346	種類:炭化材 試料の性状:不明 状態:dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:1.0N,塩酸:1.2N)
PLD-21711	調査区:第3次 試料No. 16 遺構:集石炉SK348	種類:炭化材 試料の性状:不明 状態:dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:1.0N,塩酸:1.2N)
PLD-21712	調査区:第3次 試料No. 17 遺構:集石炉SK349	種類:炭化材(クリ) 試料の性状:不明 状態:wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:1.0N,塩酸:1.2N)
PLD-21713	調査区:第3次 試料No. 18 遺構:被熱土坑SK379	種類:炭化材(クリ) 試料の性状:不明 状態:dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:1.0N,塩酸:1.2N)
PLD-21714	調査区:第3次 試料No. 19 遺構:煙道付炉穴SF375	種類:炭化材 試料の性状:不明 状態:dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:0.1N,塩酸:1.2N)
PLD-21715	調査区:第3次 試料No. 20 遺構:煙道付炉穴SF406	種類:炭化材 試料の性状:不明 状態:dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:1.0N,塩酸:1.2N)
PLD-21716	調査区:第3次 試料No. 21 遺構:煙道付炉穴SF383	種類:炭化材 試料の性状:不明 状態:dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:1.0N,塩酸:1.2N)
PLD-21717	調査区:第3次 試料No. 22 遺構:煙道付炉穴SF390	種類:炭化材 試料の性状:不明 状態:dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:1.0N,塩酸:1.2N)
PLD-21718	調査区:第3次 試料No. 23 遺構:集石炉SK351	種類:炭化材 試料の性状:不明 状態:wet	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:1.0N,塩酸:1.2N)
PLD-21719	調査区:第3次 試料No. 24 遺構:集石炉SK357	種類:炭化材 試料の性状:不明 状態:dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄(塩酸:1.2N,水酸化ナトリウム:1.0N,塩酸:1.2N)

第5表 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果（第3次）

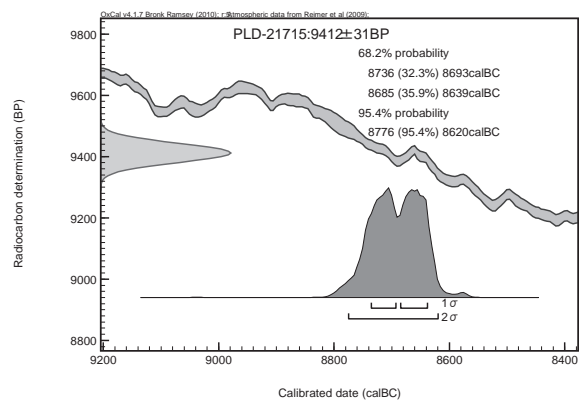
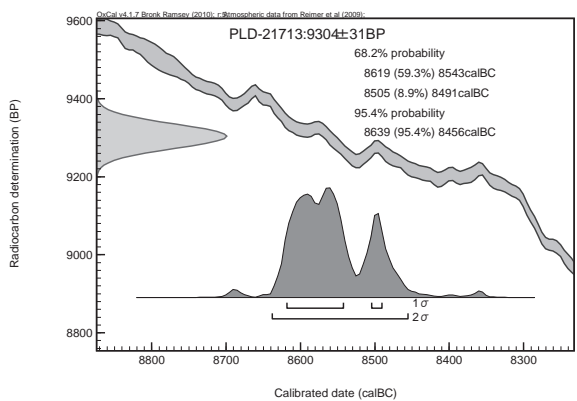
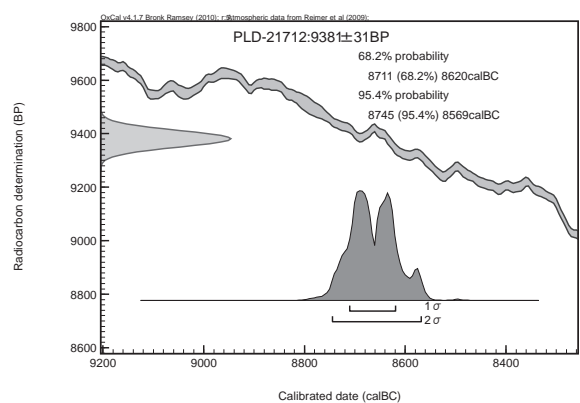
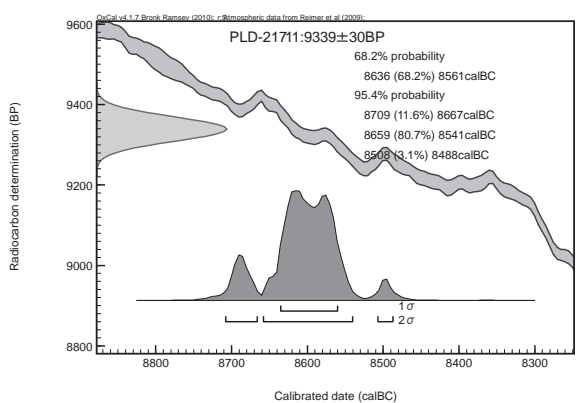
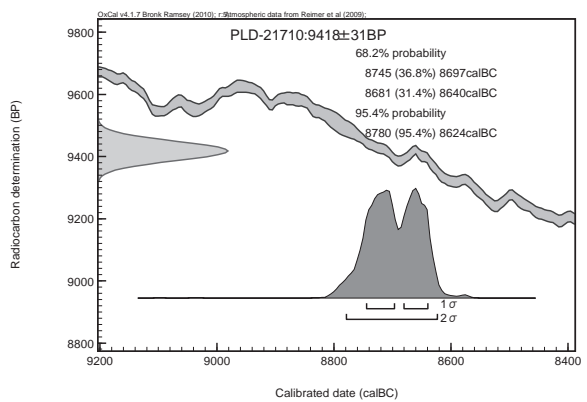
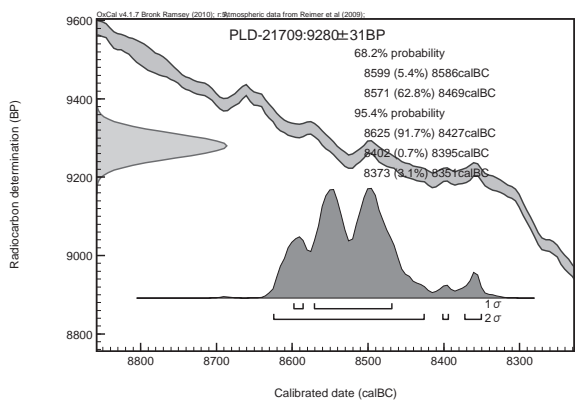
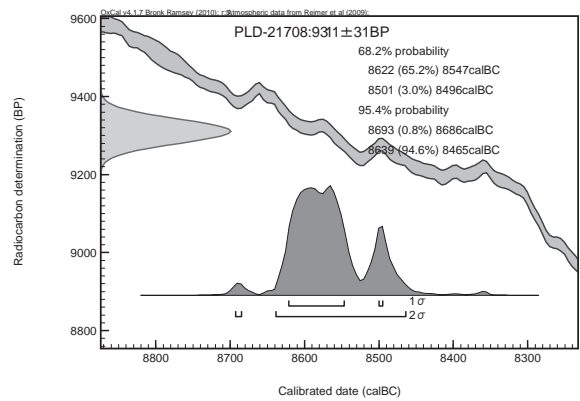
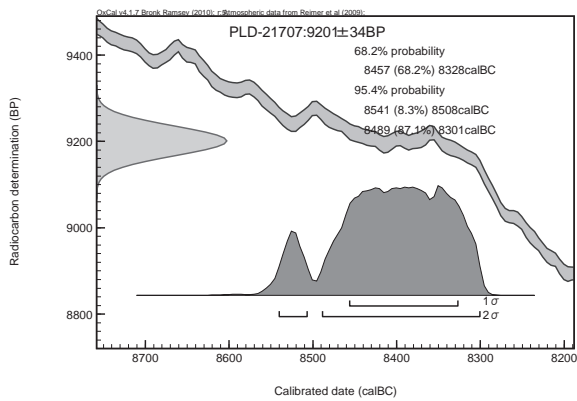
測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-21699 試料No. 1	-24.26 \pm 0.18	9398 \pm 30	9400 \pm 30	8718BC (68.2%) 8633BC	8765BC (94.9%) 8606BC 8581BC (0.5%) 8575BC
PLD-21700 試料No. 2	-24.02 \pm 0.12	9357 \pm 30	9355 \pm 30	8700BC (15.0%) 8678BC 8641BC (53.2%) 8570BC	8725BC (95.4%) 8553BC
PLD-21701 試料No. 3	-22.77 \pm 0.13	9427 \pm 30	9425 \pm 30	8751BC (43.6%) 8701BC 8676BC (24.6%) 8645BC	8784BC (95.4%) 8630BC
PLD-21702 試料No. 4	-23.03 \pm 0.14	9327 \pm 30	9325 \pm 30	8628BC (68.2%) 8557BC	8701BC (4.9%) 8675BC 8651BC (83.1%) 8536BC 8513BC (7.4%) 8481BC
PLD-21703 試料No. 5	-25.47 \pm 0.11	9318 \pm 30	9320 \pm 30	8625BC (68.2%) 8550BC	8698BC (2.2%) 8680BC 8641BC (80.2%) 8528BC 8521BC (12.9%) 8471BC
PLD-21704 試料No. 7	-23.43 \pm 0.11	9400 \pm 30	9400 \pm 30	8718BC (68.2%) 8635BC	8769BC (95.4%) 8608BC
PLD-21705 試料No. 8	-23.30 \pm 0.14	9375 \pm 30	9375 \pm 30	8709BC (34.1%) 8666BC 8659BC (34.1%) 8615BC	8737BC (95.4%) 8566BC
PLD-21706 試料No. 10	-26.07 \pm 0.12	9311 \pm 31	9310 \pm 30	8622BC (65.2%) 8547BC 8501BC (3.0%) 8496BC	8693BC (0.8%) 8686BC 8639BC (94.6%) 8465BC
PLD-21707 試料No. 11	-23.94 \pm 0.12	9201 \pm 34	9200 \pm 35	8457BC (68.2%) 8328BC	8541BC (8.3%) 8508BC 8489BC (87.1%) 8301BC
PLD-21708 試料No. 12	-24.89 \pm 0.19	9311 \pm 31	9310 \pm 30	8622BC (65.2%) 8547BC 8501BC (3.0%) 8496BC	8693BC (0.8%) 8686BC 8639BC (94.6%) 8465BC
PLD-21709 試料No. 14	-25.11 \pm 0.11	9280 \pm 31	9280 \pm 30	8599BC (5.4%) 8586BC 8571BC (62.8%) 8469BC	8625BC (91.7%) 8427BC 8402BC (0.7%) 8395BC 8373BC (3.1%) 8351BC
PLD-21710 試料No. 15	-25.67 \pm 0.14	9418 \pm 31	9420 \pm 30	8745BC (36.8%) 8697BC 8681BC (31.4%) 8640BC	8780BC (95.4%) 8624BC
PLD-21711 試料No. 16	-24.12 \pm 0.11	9339 \pm 30	9340 \pm 30	8636BC (68.2%) 8561BC	8709BC (11.6%) 8667BC 8659BC (80.7%) 8541BC 8508BC (3.1%) 8488BC
PLD-21712 試料No. 17	-24.27 \pm 0.13	9381 \pm 31	9380 \pm 30	8711BC (68.2%) 8620BC	8745BC (95.4%) 8569BC
PLD-21713 試料No. 18	-23.05 \pm 0.11	9304 \pm 31	9305 \pm 30	8619BC (59.3%) 8543BC 8505BC (8.9%) 8491BC	8639BC (95.4%) 8456BC
PLD-21714 試料No. 19	—	—	—	—	—
PLD-21715 試料No. 20	-25.34 \pm 0.11	9412 \pm 31	9410 \pm 30	8736BC (32.3%) 8693BC 8685BC (35.9%) 8639BC	8776BC (95.4%) 8620BC
PLD-21716 試料No. 21	-23.72 \pm 0.10	9241 \pm 30	9240 \pm 30	8547BC (24.5%) 8501BC 8496BC (33.2%) 8429BC 8401BC (2.0%) 8395BC 8370BC (8.5%) 8351BC	8561BC (95.4%) 8332BC
PLD-21717 試料No. 22	-25.74 \pm 0.11	9342 \pm 31	9340 \pm 30	8638BC (68.2%) 8561BC	8712BC (92.8%) 8542BC 8506BC (2.6%) 8489BC
PLD-21718 試料No. 23	-24.32 \pm 0.10	9283 \pm 31	9285 \pm 30	8603BC (9.1%) 8584BC 8573BC (29.3%) 8530BC 8519BC (29.8%) 8474BC	8627BC (92.9%) 8429BC 8371BC (2.5%) 8352BC
PLD-21719 試料No. 24	-24.52 \pm 0.10	9345 \pm 31	9345 \pm 30	8692BC (3.3%) 8686BC 8638BC (64.9%) 8563BC	8715BC (93.4%) 8543BC 8505BC (2.0%) 8490BC



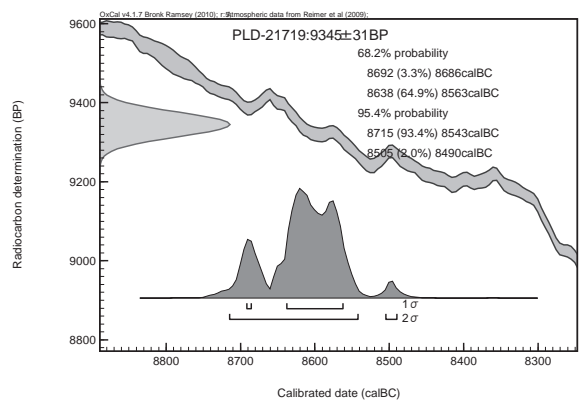
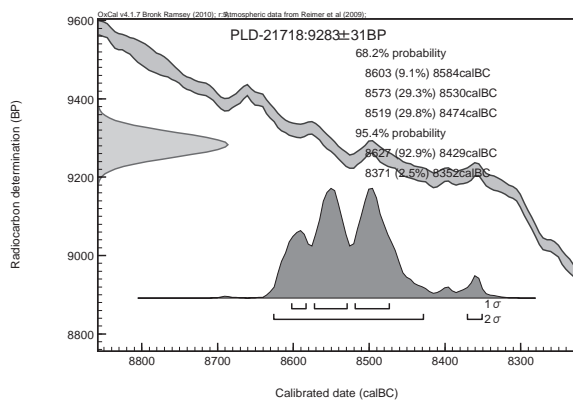
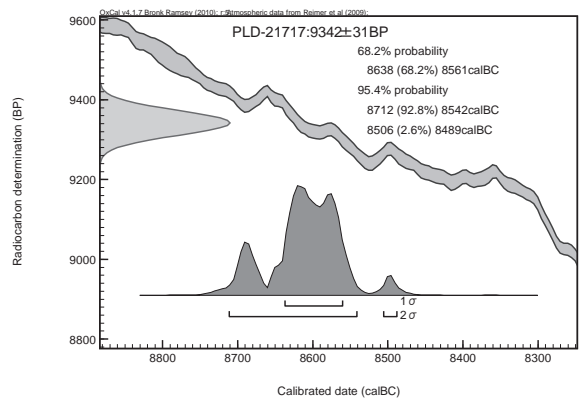
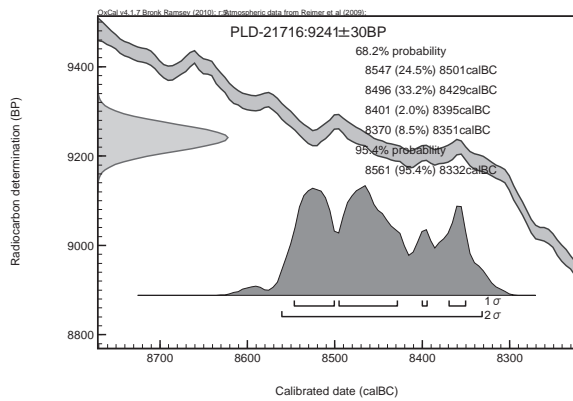
第129図 暦年較正結果の分布



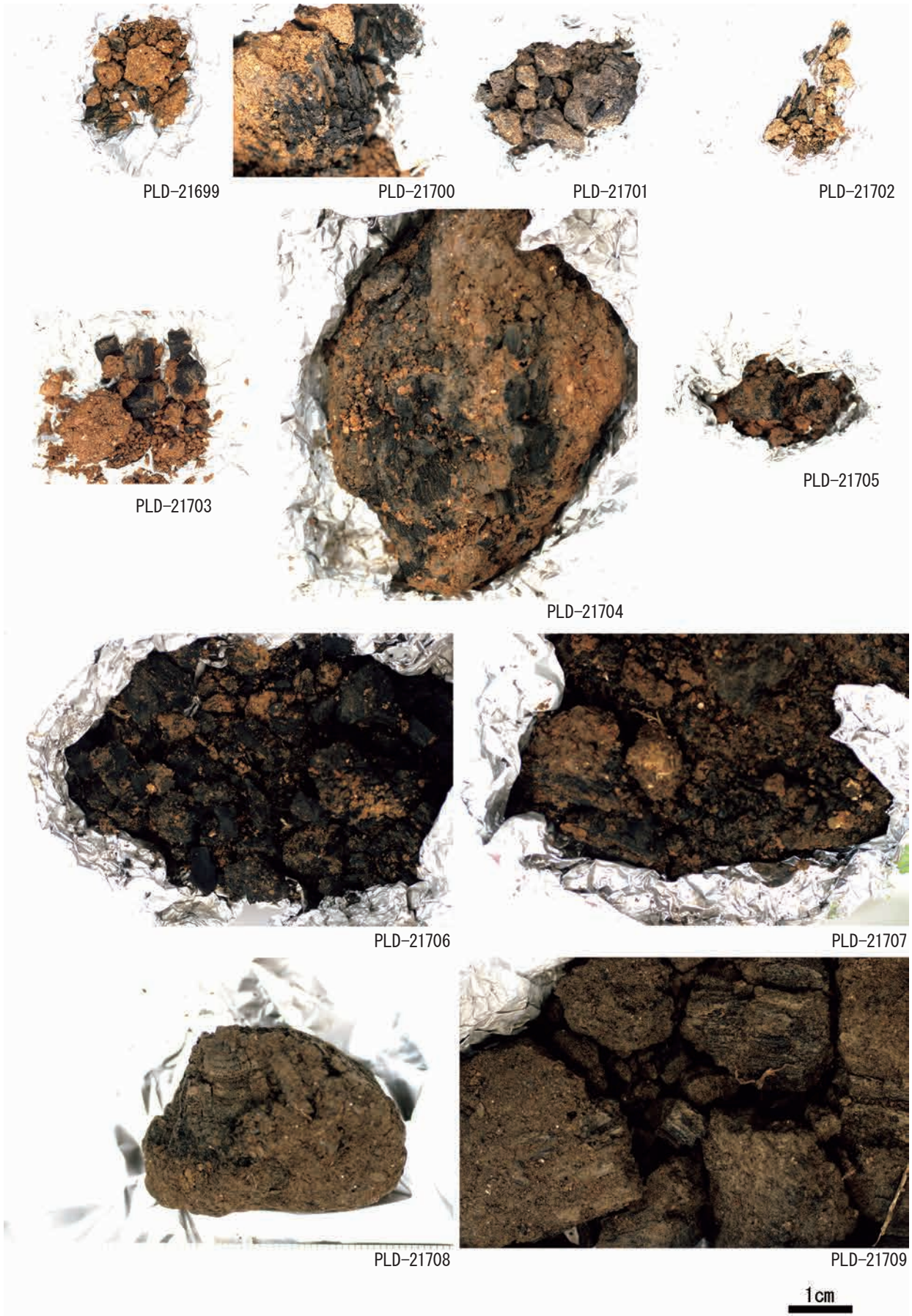
第130圖 曆年較正結果(1)



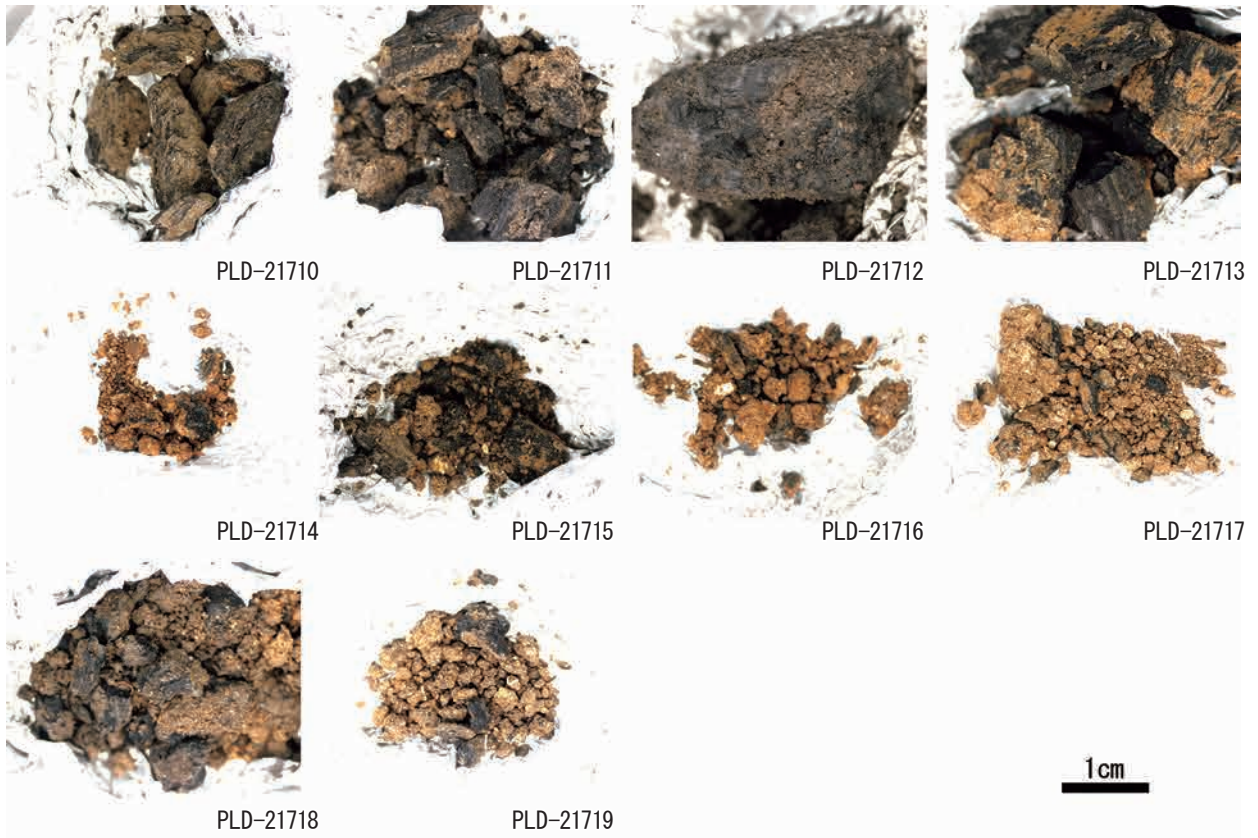
第131図 曆年較正結果(2)



第132図 暦年較正結果(3)



写20 放射性炭素年代測定試料 (1)



写21 放射性炭素年代測定試料 (2)

2 放射性炭素年代測定（第7次調査）

(1) はじめに

三重県四日市市の中野山遺跡の第7次調査で検出された集石炉の炭化材について、加速器質量分析法（AMS法）による放射性炭素年代測定を行った。なお、同じ試料を用いて樹種同定も行われている（第2節参照）。

(2) 試料と方法

試料は、集石炉SK744から出土した炭化材1点（試料No.24：PLD-24204）で、樹種はクリである。発掘調査所見による遺構の時期は、縄文時代早期前半である。

測定試料の情報、調製データは第6表のとおりである。試料は調製後、加速器質量分析計（パレオ・ラボ、コンパクトAMS：NEC製1.5SDH）を用いて測定した。得られた ^{14}C 濃度について同位体分別効果の補正を行った後、 ^{14}C 年代、暦年代を算出した。

(3) 結果

第7表に、同位体分別効果の補正に用いる炭素同位体比（ $\delta^{13}\text{C}$ ）、同位体分別効果の補正を行って暦年較正に用いた年代値と較正によって得られた年代範囲、慣用に従って年代値と誤差を丸めて表示した ^{14}C 年代を、第133図に暦年較正結果をそれぞれ示す。暦年較正に用いた年代値は下1桁を丸めていない値であり、今後暦年較正曲線が更新された際にこの年代値を用いて暦年較正を行うために記載した。

^{14}C 年代はAD1950年を基点にして何年前かを示した年代である。 ^{14}C 年代（yrBP）の算出には、 ^{14}C の半減期としてLibbyの半減期5568年を使用した。また、付記した ^{14}C 年代誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、測定の統計誤差、標準偏差等に基づいて算出され、試料の ^{14}C 年代がその ^{14}C 年代誤差内に入る確率が68.2%であることを示す。

なお、暦年較正の詳細は以下のとおりである。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5568年として算出された ^{14}C 年代に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、および半減期の違い（ ^{14}C の半減期 5730 ± 40 年）を較正して、より実際の年代値に近いものを算出することである。

^{14}C 年代の暦年較正にはOxCal4.1（較正曲線デー

タ：IntCal09）を使用した。なお、 1σ 暦年代範囲は、OxCalの確率法を使用して算出された ^{14}C 年代誤差に相当する68.2%信頼限界の暦年代範囲であり、同様に 2σ 暦年代範囲は95.4%信頼限界の暦年代範囲である。カッコ内の百分率の値は、その範囲内に暦年代が入る確率を意味する。グラフ中の縦軸上の曲線は ^{14}C 年代の確率分布を示し、二重曲線は暦年較正曲線を示す。

(4) 考察

集石炉SK744から出土した炭化材（試料No.24：PLD-24204）は、 ^{14}C 年代が 9435 ± 30 、 1σ の暦年代範囲が8760–8701 cal BC（47.3%）および8676–8646 cal BC（20.9%）、 2σ の暦年代範囲が8792–8632 cal BC（95.4%）であった。これは、小林（2008）、工藤（2012）、矢野（2008）を参照すると、縄文時代早期前半に相当する。

参考文献

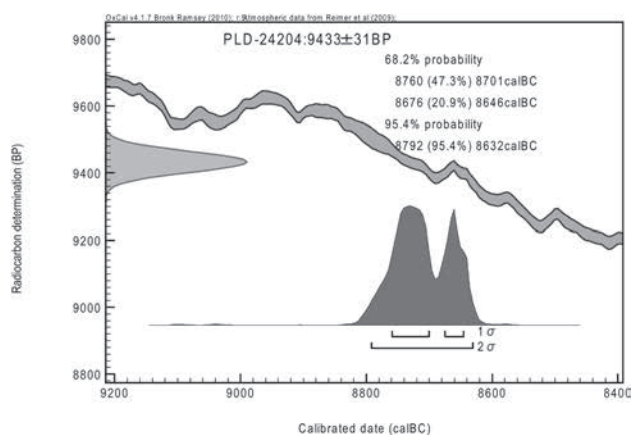
- Bronk Ramsey, C. (2009) Bayesian Analysis of Radiocarbon dates. *Radiocarbon*, 51 (1), 337-360.
- 小林謙一（2008）縄文時代の暦年代。小杉康・谷口康浩・西田泰民・水ノ江和同・矢野健一編「縄文時代の考古学2 歴史のものさし」：257-269, 同成社。
- 工藤雄一郎（2012）旧石器・縄文時代の環境文化史—高精度放射性炭素年代測定と考古学—。373p, 神泉社。
- 中村俊夫（2000）放射性炭素年代測定法の基礎。日本先史時代の ^{14}C 年代編集委員会編「日本先史時代の ^{14}C 年代」：3-20, 日本第四紀学会。
- Reimer, P.J., Baillie, M.G.L., Bard, E., Bayliss, A., Beck, J.W., Blackwell, P.G., Bronk Ramsey, C., Buck, C.E., Burr, G.S., Edwards, R.L., Friedrich, M., Grootes, P.M., Guilderson, T.P., Hajdas, I., Heaton, T.J., Hogg, A.G., Hughen, K.A., Kaiser, K.F., Kromer, B., McCormac, F.G., Manning, S.W., Reimer, R.W., Richards, D.A., Southon, J.R., Talamo, S., Turney, C.S.M., van der Plicht, J. and Weyhenmeyer C.E. (2009) IntCal09 and Marine09 Radiocarbon Age Calibration Curves, 0–50,000 Years cal BP. *Radiocarbon*, 51, 1111–1150. 矢野健一（2008）押型文土器（大川式・神宮寺式土器）。小林達雄編「総覧縄文土器」：154–161, アム・プロモーション。

第6表 測定試料および処理（第7次）

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-24204	調査区：M-S2 遺構：集石炉SK744 試料No. 24 サンプルNo. 5	種類：炭化材(クリ) 試料の性状：部位不明 採取部位：外側4年輪分 状態：dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄（塩酸：1.2N, 水酸化ナトリウム：1.0N, 塩酸： 1.2N)

第7表 放射性炭素年代測定および暦年較正の結果（第7次）

測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	暦年較正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	^{14}C 年代を暦年代に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-24204 試料No. 24 サンプルNo. 5	-26.55 \pm 0.22	9433 \pm 31	9435 \pm 30	8760BC (47.3%) 8701BC 8676BC (20.9%) 8646BC	8792BC (95.4%) 8632BC



第133図 暦年較正結果(4)



写22 放射性炭素年代測定試料(3)

第2節 出土炭化材の樹種同定

1 炉穴出土炭化材の樹種同定（第3次調査）

（1）はじめに

四日市市北山町の丘陵上に位置する中野山遺跡で、煙道付炉穴や集石炉から出土した炭化材の樹種同定を行なった。なお、同定試料の一部を用いて放射性炭素年代測定も行われている（第1節参照）。

（2）試料と方法

試料は、煙道付炉穴であるSF391から2点とSF409から3点、集石炉であるSK349・SK379・SK411から各1点、SK343から2点の、計10点の出土炭化材である。試料の時期は、放射性炭素年代測定の結果、縄文時代早期前半におさまる年代であった。また、計測可能な試料について、残存半径と残存年輪数の計測を行なった。残存半径は試料に残存する半径を直接計測し、残存年輪数は残存半径内の年輪数を計測した。

炭化材の樹種同定では、まず試料を乾燥させ、材の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柾目）について、カミソリと手で割断面を作製し、整形して試料台にカーボンテープで固定した。その後、イオンスパッタにて金蒸着を施し、走査型電子顕微鏡（日本電子（株）製 JSM-5900LV）にて検鏡および写真撮影を行なった。

（3）結果

同定の結果、試料の10点はいずれも広葉樹のクリであった。年輪計測ができたのは4試料のみであったが、残存半径2.2cm内に15年輪がみられた試料No.12をはじめ、年輪幅の比較的詰まった試料が多かった。同定結果を第8表に示す。

次に、同定された材の特徴を記載し、写23に走

第8表 中野山遺跡（第3次）出土炭化材の樹種同定結果一覧

試料 No.	遺構名	遺構種類	樹種	残存半径 (cm)	残存年輪数	年代測定番号
6	SF391	煙道付炉穴	クリ	0.6	5	
7	SF391	煙道付炉穴	クリ	-	-	PLD-21704
9	SF409 第10層底面	煙道付炉穴	クリ	0.7	2	
10	SF409 第10層底面	煙道付炉穴	クリ	0.6	1	PLD-21706
11	SF409 第11層底面	煙道付炉穴	クリ	-	-	PLD-21707
12	SK411	集石炉	クリ	2.2	15	PLD-21708
13	SK343	集石炉	クリ	-	-	
14	SK343	集石炉	クリ	-	-	PLD-21709
17	SK349	集石炉	クリ	-	-	PLD-21712
18	SK379	集石炉	クリ	-	-	PLD-21713

査型電子顕微鏡写真を示す。

クリ *Castanea crenata* Siebold. et Zucc. ブナ科

写真6 1a-1c (No.12)、2a (No.6)、3a (No.7)、4a (No.9)、5a (No.10)、6a (No.11)、7a (No.14)

年輪のはじめに大型の道管が1～2列並び、晩材部では徐々に径を減じた道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で単列となる。

クリは北海道の石狩、日高以南の温帯から暖帯にかけての山林に分布する落葉中高木の広葉樹である。材は重硬で、耐朽性が高い。

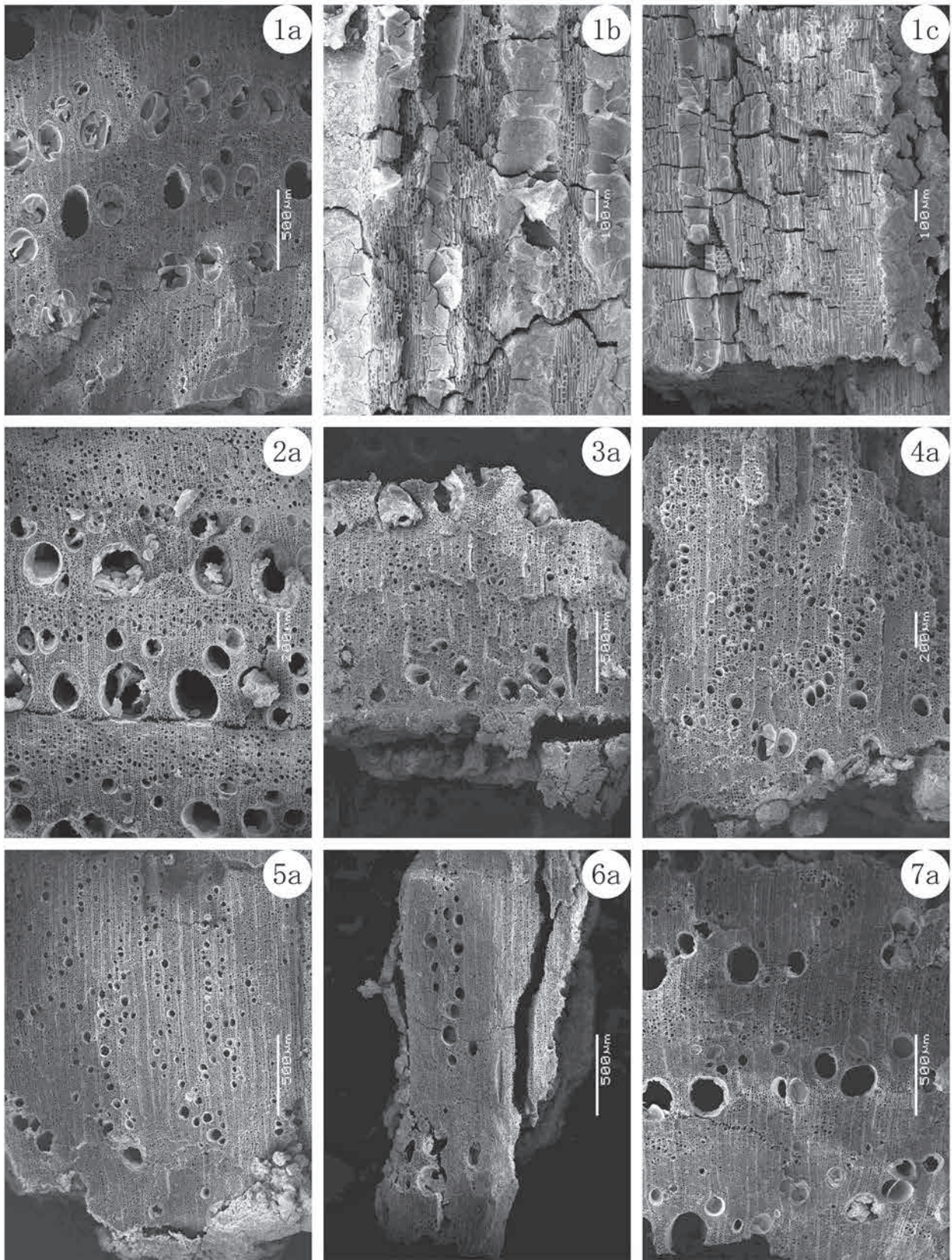
（4）考察

同定試料はいずれもクリであった。試料は煙道付炉穴と集石炉から出土した炭化材であり、燃料材として利用された可能性が高い。クリは重硬で耐朽性が高いという材質であり、薪炭材としては、燃焼性が低いが長時間燃焼し続けるという特徴を持つ（伊東ほか、2011）。燃料材に適したクリが選択的に利用されていた可能性が高い。

また三重県下では、松阪市の鴻ノ木遺跡で縄文時代早期の炉跡から出土した炭化材にクリが極めて多くみられ（伊東・山田編、2012）、今回の中野山遺跡と同様の傾向がうかがえた。前述のとおり、クリは燃料材に適し、果実は食用にもなるため、有用材として選択的に利用されていた可能性がある。

引用文献

- 伊東隆夫・佐野雄三・安部久・内海泰弘・山口和穂（2011）日本有用樹木誌、238p、青海社。
伊藤隆夫・山田昌久編（2012）木の考古学、449p、青海社。



写23 中野山遺跡（第3次）出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真

1a-1c. クリ (No. 12)、2a. クリ (No. 6)、3a. クリ (No. 7)、4a. クリ (No. 9)、5a. クリ (No. 10)、6a. クリ (No. 11)、7a. クリ (No. 14)

a: 横断面、b: 接線断面、c: 放射断面

2 炉穴出土炭化材の樹種同定（第7次調査）

（1）はじめに

四日市市北山町の丘陵上に立地する中野山遺跡の第7次調査で集石炉と考えられる土坑から出土した炭化材について、樹種同定を行なった。なお、同一試料を用いて放射性炭素年代測定も行われている（放射性炭素年代測定の項参照）。

（2）試料と方法

試料は、集石炉であるSK744から出土した炭化材1点である。放射性炭素年代測定の結果、試料の時期は縄文時代早期前半であった。

炭化材の樹種同定では、まず試料を乾燥させ、材の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柾目）について、カミソリと手で割断面を作製し、整形して試料台にカーボンテープで固定した。その後、イオンスパッタにて金蒸着を施し、走査型電子顕微鏡（日本電子（株）製 JSM-5900LV）にて検鏡および写真撮影を行なった。

（3）結果

同定の結果、SK744から出土した試料はクリであった。次に、同定された材の特徴を記載し、写真7に走査型電子顕微鏡写真を示す。

クリ *Castanea crenata* Siebold. et Zucc.

ブナ科 写24 1a-1c (No.24)

年輪のはじめに大型の道管が1～3列並び、晩材部では径を徐々に減じた道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で単列である。クリは、北海道の石狩、日高地方以南の温帯から暖帯にかけての山林に分布する落葉中高木の広葉樹である。材は重硬で耐朽性が高い。

（4）考察

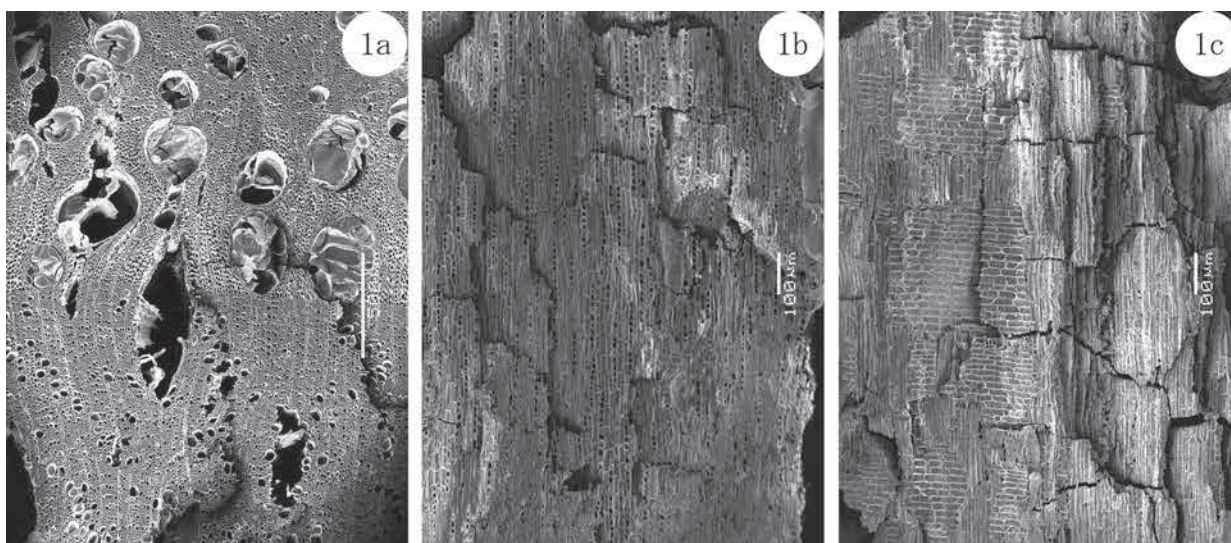
SK744は集石炉であり、出土したクリは燃料材であったと考えられる。燃料材としてのクリは、高い火力は得られないが、長時間燃焼し続けるという材質をもつ（伊東ほか，2011）。松阪市の鴻ノ木遺跡では、縄文時代早期の炉跡出土炭化材にクリが極めて多く認められている（伊東・山田，2012）。したがって、三重県域では縄文時代早期にクリが燃料材として多く利用されていた可能性がある。

第9表 中野山遺跡（第7次）出土炭化材の樹種同定結果

試料No.	出土遺構	遺物No.	樹種	年代測定番号
24	SK744	サンプルNo.5	クリ	PLD-24204

引用文献

伊東隆夫・佐野雄三・安部 久・内海泰弘・山口和穂（2011）日本有用樹木誌，238p，青海社。
伊東隆夫・山田昌久（2012）木の考古学，449p，青海社。



写24 中野山遺跡（第7次）出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真

1a-1c. クリ (No.24)

a: 横断面、b: 接線断面、c: 放射断面

3 竪穴住居出土炭化材の樹種同定 (第7次調査)

(1) はじめに

四日市市北山町の丘陵上に立地する中野山遺跡の第7次調査で焼失住居と考えられる竪穴住居跡から出土した炭化材について、樹種同定を行なった。

(2) 試料と方法

試料は、竪穴住居跡であるSH624から出土した炭化材19点と、SH628から出土した炭化材4点の、計23点である。発掘調査所見によれば、遺構の時期は共に古墳時代後期後葉である。

各試料について、残存半径と残存年輪数の計測を行なった。残存半径は試料に残存する半径を直接計測し、残存年輪数は残存半径内の年輪数を計測した。

炭化材の樹種同定では、まず試料を乾燥させ、材の横断面(木口)、接線断面(板目)、放射断面(柁目)について、カミソリと手で割断面を作製し、整形して試料台にカーボンテープで固定した。その後、イオンスパッタにて金蒸着を施し、走査型電子顕微鏡(日本電子(株)製JSM-5900LV)にて検鏡および写真撮影を行なった。

(3) 結果

同定の結果、広葉樹のクマシデ属イヌシデ節(以下イヌシデ節と呼ぶ)とクリ、ツブラジイ、スダジイ、ブナ属、コナラ属アカガシ亜属(以下アカガシ亜属と呼ぶ)、コナラ属クヌギ節(以下クヌギ節と呼ぶ)、コナラ属コナラ節(以下コナラ節と呼ぶ)の計8分類群が産出した。スダジイが最も多く6点で、アカガシ亜属とクヌギ節が各4点、クリとコナラ節が各3点、イヌシデ節とツブラジイ、ブナ属が各1点であった。

年輪幅の計測は、残存半径2.7cm内に5年輪がみられた試料No.17(クヌギ節)のように年輪幅が広め(平均5.4mm)の試料や、残存半径1.6cm内に23

年輪がみられた試料No.12(ブナ属)のように年輪幅が狭い(平均0.7mm)の試料がみられたが、多くの試料は年輪幅の平均が1.3~3.2mmであった。

次に、同定された材の特徴を記載し、写25に走査型電子顕微鏡写真を示す。

①クマシデ属イヌシデ節 *Carpinus* sect. *Eucarpinus* カバノキ科 写25 1a-1c (No.21)

小型の道管が単独ないし2~7列複合してやや密に散在する散孔材である。軸方向柔組織は短接線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は上下端1列が直立する異性で、1~4列となる。また、放射組織は複合して集合放射組織となる。

クマシデ属イヌシデ節は、温帯から暖帯の山林などに分布する落葉高木の広葉樹である。材はやや重くて硬く、割裂しにくい。切削加工は中庸である。

②クリ *Castanea crenata* Siebold. et Zucc. ブナ科 写25 2a-2c (No.1)、3a (No.10)

年輪のはじめに大型の道管が1~3列並び、晩材部では徐々に径を減じた道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で単列となる。

クリは、北海道の石狩、日高地方以南の温帯から暖帯にかけての山林に分布する落葉中高木の広葉樹である。材は重硬で耐朽性が高い。

③ツブラジイ *Castanopsis cuspidata* (Thunb.) Schottky ブナ科 写25 4a-4c (No.11)

年輪のはじめに中型の道管が断続的に1~3列並び、晩材部では徐々に径を減じた道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で単列となる。

ツブラジイは暖帯から亜熱帯に分布する常緑高木の広葉樹である。重さと強さは中庸で、やや耐朽性があるが、切削加工は困難でない。

④スダジイ *Castanopsis sieboldii* (Makino) Hatus. ex T.Yamaz. et Mashiba ブナ科

写25 5a-5c (No.2)、6a (No.13)、7a (No.22)

年輪のはじめに中型の道管が断続的に1~3列並び、晩材部では徐々に径を減じた道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で

第10表 竪穴住居出土炭化材の樹種同定結果

樹種/遺構	SH624	SH628	合計
クマシデ属イヌシデ節		1	1
クリ	3		3
ツブラジイ	1		1
スダジイ	5	1	6
ブナ属	1		1
コナラ属アカガシ亜属	3	1	4
コナラ属クヌギ節	4		4
コナラ属コナラ節	2	1	3
合計	19	4	23

単列となる。また、放射組織は複合して集合放射組織となる。

スダジイは暖帯から亜熱帯に分布する常緑高木の広葉樹である。重さと強さは中庸で、やや耐朽性があるが、切削加工は困難でない。

⑤ ブナ属 *Fagus* ブナ科

写 25・26 8a-8c (No.12)

小型の道管が単独ないし2～3個複合して密に散在する散孔材である。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、1～10列となる。

ブナ属にはブナとイヌブナがあり、冷温帯の山林に分布する落葉高木の広葉樹である。代表的なブナの材は、重硬で強度があるが、切削加工は困難でない。

⑥ コナラ属 アカガシ亜属 *Quercus* subgen. *Cyclobalanopsis* ブナ科

写 26 9a-9c (No.14)、10a (No.16)、11a (No.18)

大型の道管が単独で放射方向に配列する放射孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列のものと広放射組織がみられる。

コナラ属アカガシ亜属は、材組織の観察では道管の大きなイチイガシ以外は種までの同定ができない。したがって、本試料はイチイガシ以外のアカガシ亜属である。アカガシ亜属にはアカガシヤツクバネガシなどがあり、暖帯に分布する常緑高木の広葉樹である。材は重硬、強靱で耐水性があり、切削加工は困難である。

⑦ コナラ属 クヌギ節 *Quercus* sect. *Aegilops* ブナ科

写 26 12a-12c (No.4)、13a (No.6)、14a (No.17)

年輪のはじめに大型の道管が1～3列並び、晩材部では急に径を減じた、厚壁で丸い道管が放射方向に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列のものと広放射組織がみられる。

コナラ属クヌギ節にはクヌギとアベマキがあり、温帯から暖帯にかけて分布する落葉高木の広葉樹である。材は重硬で、切削などの加工はやや困難である。

⑧ コナラ属 コナラ節 *Quercus* sect. *Prinus* ブナ

科 写 26 15a-15c (No.5)、16a (No.8)

年輪のはじめに大型の道管が1～3列並び、晩材部では急に径を減じた、薄壁で角張った道管が火炎状に配列する環孔材である。軸方向柔組織はいびつな線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は同性で、単列のものと広放射組織がみられる。

コナラ属コナラ節にはコナラやミズナラなどがあり、温帯から暖帯にかけて広く分布する落葉高木の広葉樹である。代表的なミズナラの材は、やや重く強靱で、切削加工はやや難しい。

(4) 考察

焼失住居であるSH624では、スダジイが5点、クヌギ節が4点、クリとアカガシ亜属が各3点、コナラ節が2点、ツブラジイとブナ属が各1点みられた。これらの炭化材は、住居跡内において放射状に検出され、堅穴住居跡の垂木であった可能性が高いと考えられる。ただし、試料No.19のクリは、検出時の形状確認で木製品の鋏身か鋤身であったと考えられている。

同じく焼失住居であるSH628では、イヌシデ節とスダジイ、アカガシ亜属、コナラ節が各1点産出した。この住居跡から出土した炭化材も住居跡内において放射状に検出され、堅穴住居跡の垂木であった可能性が高いと考えられる。

産出した分類群はいずれも重硬で耐朽性が高いが、なかでもアカガシ亜属は特に堅い樹種である。また、イヌシデ節以外の樹種は割裂性が良く、軸方向に割りやすい(伊東ほか, 2011)。堅硬な樹種が建築材に選択されていた可能性がある。鋏身か鋤身と考えられる試料No.19はクリで、用途に合わせて、重硬で耐久性の高い樹種が選択されていた可能性がある。

周辺植生については、落葉広葉樹であるイヌシデ節とクリ、ブナ属、クヌギ節、コナラ節と、常緑広葉樹であるツブラジイとスダジイ、アカガシ亜属が産出しており、古墳時代後期後葉頃の中野山遺跡周辺には常緑・落葉広葉樹混交林が広がっていた可能性がある。ただし、今回の試料は周辺植生の一部を反映しているに過ぎないと考えられるため、当時の遺跡周辺の植生を調べるためには、花粉分析を行なう必要がある。

津市に所在する六大A遺跡の古墳時代中期～後

期の住居跡から出土した建築部材では、マキ属を中心とした針葉樹が多く産出し、花粉分析の結果と比較すると、遺跡周辺の森林植生を反映した用材傾向であると推測されている（金原正明・金原正子，2003）。

中野山遺跡ではスダジイなどの常緑広葉樹やクヌギ節などの落葉広葉樹など、ブナ科を中心とした用材が認められ、六大 A 遺跡とは用材傾向が異なる。これは、遺跡周辺の森林植生が異なっていたためである可能性が高い。

また、六大 A 遺跡では、古墳時代後期の鋏身や鋤身の多くがアカガシ亜属で、他にはスギ、クヌギ節、コナラ節、クスノキがみられ（伊東・山田，2012）、クリであった中野山遺跡の鋏身か鋤身（試料 No.19）とは異なる樹種であった。樋上（2012）による東海・中部の木製品の集成では、直柄鋏身・横鋏・曲柄鋏身（又鋏）・鋤でアカガシ亜属が圧倒的に多いのに対し、曲柄鋏身（平鋏）は約半数をク

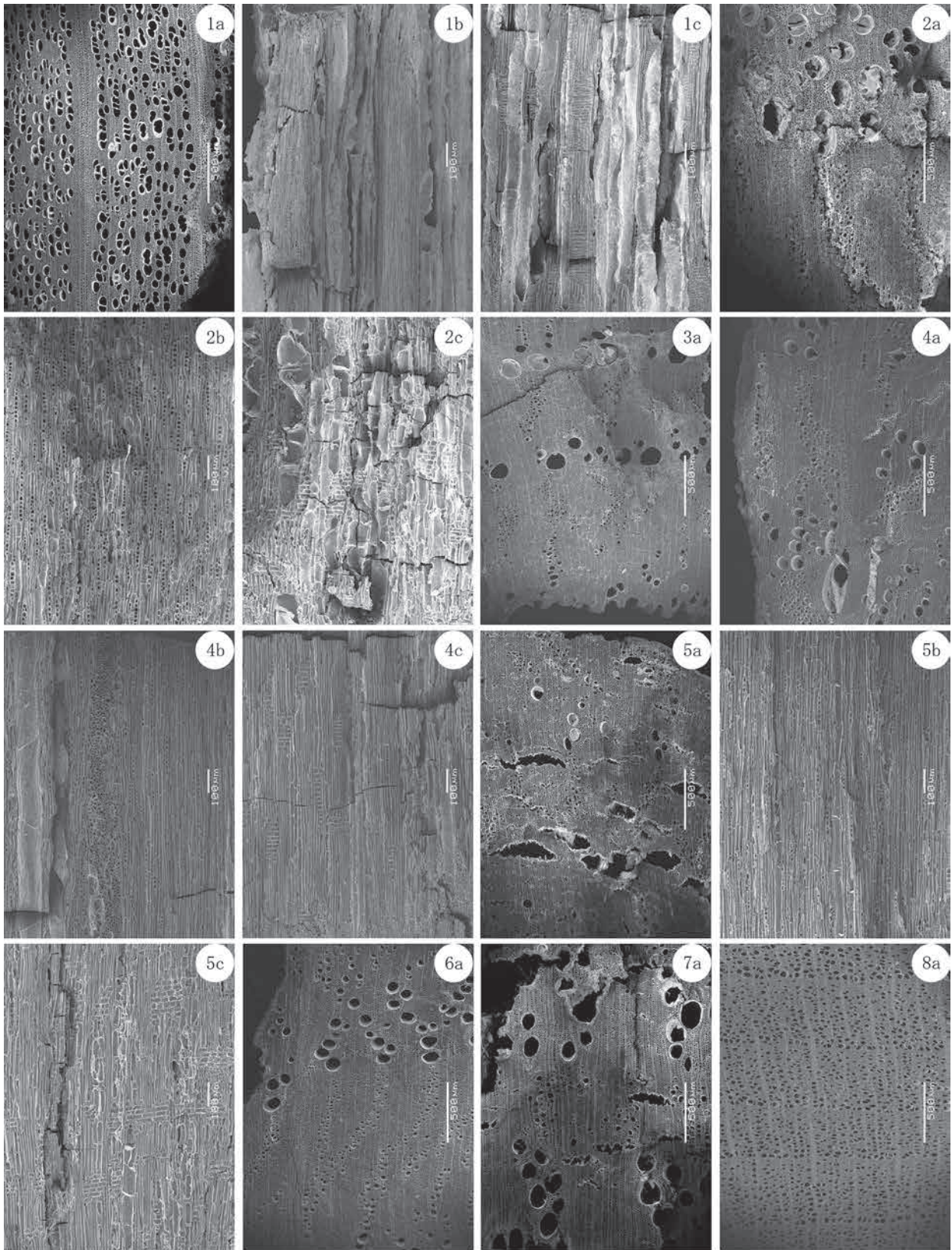
ヌギ節・コナラ節・クリなどが占める、とされている（樋上，2012）。中野山遺跡の鋏身か鋤身（試料 No.19）は、詳細な器種が確認できていないが、クリが使われている点から察すると、曲柄鋏身（平鋏）であった可能性が考えられる。

引用文献

- 樋上 昇（2012）東海・中部－三重県・岐阜県・愛知県・静岡県－. 木の考古学, 193-209.
- 伊東隆夫・佐野雄三・安部 久・内海泰弘・山口和穂（2011）日本有用樹木誌, 238p, 青海社.
- 伊東隆夫・山田昌久（2012）木の考古学, 449p, 青海社.
- 金原正明・金原正子（2003）環境考古学分析. 三重県埋蔵文化財センター編「六大 A 遺跡発掘調査報告－資料分析・遺物観察表・写真図版編－」: 11-42, 三重県埋蔵文化財センター.

第11表 竪穴住居出土炭化材の樹種同定結果一覧

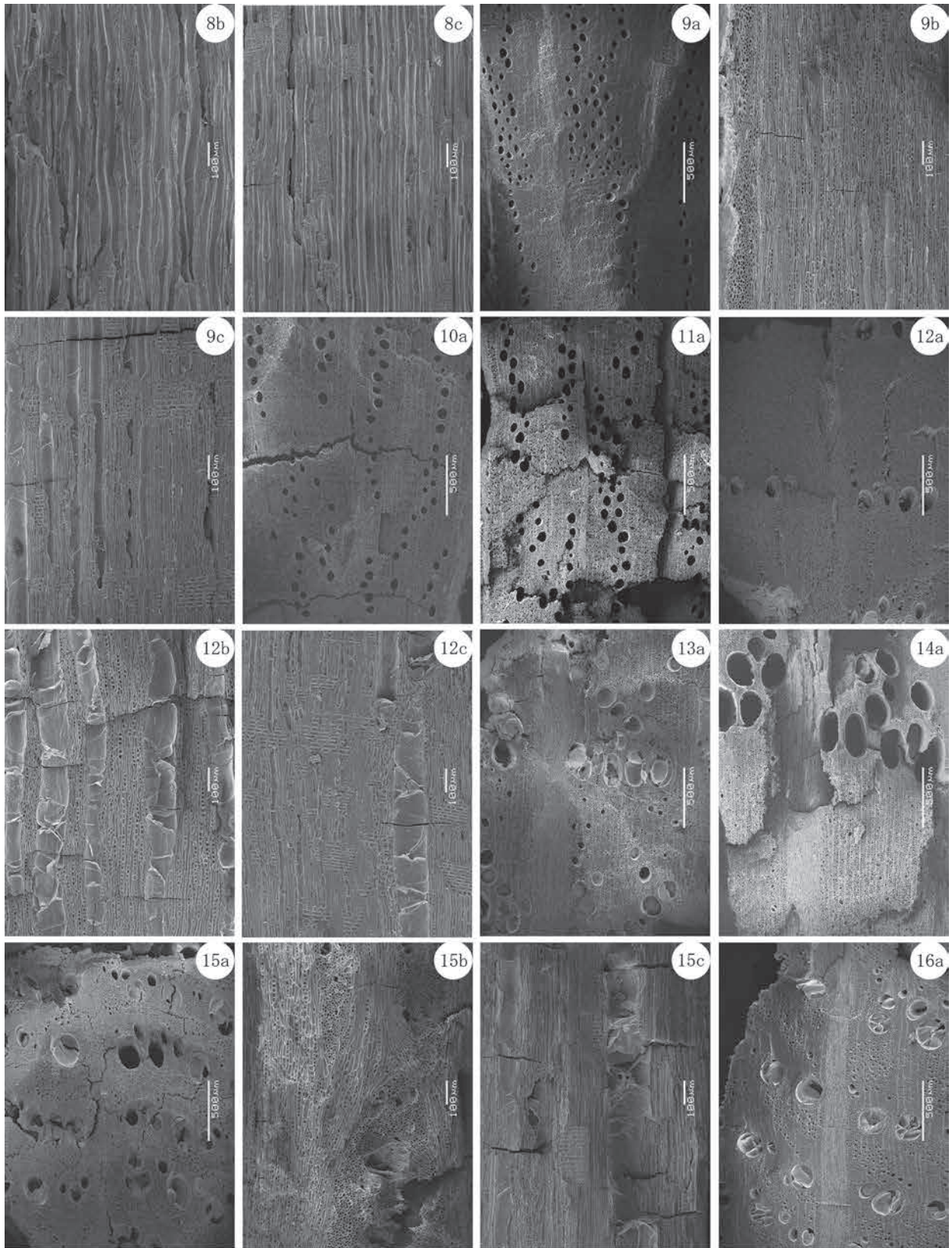
試料 No.	出土遺構	遺物 No.	樹種	残存半径 (cm)	残存年輪数	備考
1	SH624	W1	クリ	1.6	7	
2	SH624	W2	スダジイ	0.9	5	
3	SH624	W4	スダジイ	0.7	5	
4	SH624	W5	コナラ属クヌギ節	1.1	4	
5	SH624	W6	コナラ属コナラ節	1.6	22	
6	SH624	W7	コナラ属クヌギ節	3.6	23	
7	SH624	W8	スダジイ	1.6	21	
8	SH624	W9	コナラ属コナラ節	3.7	14	
9	SH624	W11	コナラ属クヌギ節	1.8	4	
10	SH624	W12	クリ	1.1	7	
11	SH624	W13	ツブラジイ	1.8	9	
12	SH624	W14	ブナ属	1.6	23	
13	SH624	W15	スダジイ	1.2	9	
14	SH624	W17	コナラ属アカガシ亜属	1.5	7	
15	SH624	W18	スダジイ	1.9	6	
16	SH624	W19	コナラ属アカガシ亜属	1.4	9	
17	SH624	W10	コナラ属クヌギ節	2.7	5	
18	SH624	W20	コナラ属アカガシ亜属	1.3	7	
19	SH624	W22	クリ	-	-	木製品？
20	SH628	5	コナラ属コナラ節	-	-	
21	SH628	6	クマシデ属イヌシデ節	-	-	
22	SH628	7	スダジイ	1.2	5	
23	SH628	8	コナラ属アカガシ亜属	-	-	



写25 竪穴住居出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真(1)

1a-1c. クマシデ属イヌシデ節 (No.21)、2a-2c. クリ (No.1)、3a. クリ (No.10)、4a-4c. ツブラジイ (No.11)、5a-5c. スダジイ (No.2)、6a. スダジイ (No.13)、7a スダジイ (No.22)、8 a. ブナ属 (No.12)

a: 横断面、b: 接線断面、c: 放射断面



写26 竪穴住居出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真(2)

8a-8c. ブナ属 (No.12)、9a-9c. コナラ属アカガシ亜属 (No.14)、10a. コナラ属アカガシ亜属 (No.16)、11a. コナラ属アカガシ亜属 (No.18)、12a-12c. コナラ属クヌギ節 (No.4)、13a. コナラ属クヌギ節 (No.6)、14a. コナラ属クヌギ節 (No.17)、15a-15c. コナラ属コナラ節 (No.5)、16a. コナラ属コナラ節 (No.8)

a: 横断面 b: 接線断面、c: 放射断面

第3節 出土石器の残存デンプン粒分析

(1) はじめに

中野山遺跡第3次（縄文時代早期・押型文期）、ならびに第7次（縄文時代早期・押型文期）の調査で出土した石器に対して残存デンプン粒分析を実施した。その分析結果にもとづいて、本稿では、これらの石器で植物加工が行われた可能性を検討するとともに、検出された残存デンプン粒の形態学的特徴から石器の加工対象物について考察した。

(2) 分析の対象とした石器

調査対象の石器は、第3次調査の出土資料が石皿8点、磨石1点、敲石2点、第7次調査の出土資料（SK744）の石皿1点の合計12点である（第12表）。いずれも発掘調査で出土した後に水洗され、三重県埋蔵文化財センターで保管されている。

試料採取時に行った観察では、石器の面の中央部を利用して対象物を磨る・敲くという使用状況が推定された。ただし、植物のような軟質物を磨った時に生じる光沢痕は、肉眼での観察では確認することができなかった。

(3) 分析方法

試料採取 本分析では、2012年2月と2013年2月の2度にわたって、三重県埋蔵文化財センター四日市整理所で資料観察と分析試料を採取した。資料の採取時は異物の混入を避けるため、白衣の着用や資料ごとの手洗い等、採取条件に留意した。

石器から分析試料を採取する際は Fullagar (2006) の方法を参照し、敲打痕と磨面の確認された部位を主に選択するとともに、使用痕の外側の面、確認されなかった部位の試料も採取し、残存デンプン粒の有無と検出量を検討した。マイクロピペットにチップをはめて精製水（シグマ社製）を吸入し、採取する対象に注入、洗浄しながら試料が16 μ l以上（複数枚のプレパラートを作製する必要量）になるまで吸引した。1資料につき試料を4～6箇所、石器の表面の凹所から採取した。この方法は、後期旧石器時代や縄文時代の石器に対する他の分析事例（渋谷 2010a, 2011, 2012）でも採用している。

プレパラート作製と顕微鏡観察 プレパラートの作

製と顕微鏡観察は、2012年採取分を広島大学総合博物館事務室、2013年採取分を国立歴史民俗博物館の第1室準備室で行った。

採取した試料はすべて、現生デンプン粒標本の作製（渋谷 2006, 2010b）と同じ方法でプレパラートを作製し、試料を遠心後（13,000rpm・1分）、8 μ lをグリセロール・ゼラチン（シグマ社製、屈折率1.46-1.48）8 μ lで封入し、1試料につき2～3枚作製した。試料を入れないブランクスライドも毎回作製し、スライドガラスやカバーガラス、スライド封入剤における汚染の有無を確認した。

次に光学顕微鏡（Olympus BX53-33Z、簡易偏光装置付）を用いて、接眼レンズを10倍、対物レンズを10～40倍、総合倍率100～400倍の視野条件で観察した。デンプン粒の外形や偏光十字の形状などの特徴を記録する際は400倍で観察し、写真記録を行った。

顕微鏡観察の際は、検出したデンプン粒の形態に対して現生植物を用いたデンプン粒標本の形態分類法（渋谷綾子 2010b）をふまえ、A：円形・いびつな円形・楕円形、B：半円形・三角形・四角形、C：多角形の3つのカテゴリーに分類し、大きさは最大粒径を計測してI：10 μ m未満、II：10～20 μ m、III：20 μ mより大、の3つのサイズクラスに分け、合わせて9つのタイプに分類した。分解・損傷して原形の識別が難しい残存デンプン粒はこれらとは別に、「D：分解・損傷」とした。残存デンプン粒を確認した場合は、これらの項目で形態分類を行うとともに、デンプン粒の外形や粒芯、層紋（半結晶ラメラ構造）、形成核（粒芯の中央部で偏光十字が交差する箇所、ヘソ hilum）の位置、偏光十字の形状も記録した。この作業を資料ごとに行い、残存デンプン粒の形態分類図を作製した。

(4) 分析結果

残存デンプン粒の検出状況 分析した石器12点のうち、石皿1・2・9、敲石2より合計9個の残存デンプン粒が検出された。石皿1・9の分解デンプン粒をのぞき、他はすべて形態や偏光十字の形状を

識別することができた(第13表)。デンプン粒の検出状態は単独粒(1粒単独の状態)と石皿1より検出された、細胞組織に密着した状態のデンプン粒(写真10:1)であり、植物繊維や細胞組織の微細な断片も試料に含まれていた。

検出された残存デンプン粒の形態については、石皿1がAII、AIII、BIIIの3類型であり、石皿2・9はそれぞれAIIIの1類型、敲石2はAIIの1類型であった(第13表)。第134図では、これらの形態が明確に識別可能なデンプン粒を図示した。

石器の磨面や敲打痕のある範囲から検出された残存デンプン粒は、石器で加工された植物の痕跡である可能性が高い。しかし、石皿9の残存デンプン粒は磨面(IS1)と磨面の確認されない部位(IS2)から検出され、敲石2についても、敲打痕の確認されない部位(IS1)からデンプン粒が検出された。そのため、これらのデンプン粒は植物加工に伴うものとコンタミネーションの可能性という2通りの解釈が提示できる。石皿1の残存デンプン粒は磨面(IS1)からの検出量が4個であり、磨面の確認されない部位(IS2)の1個という検出量よりも多く、磨面との明確な関係性を示唆している。同様に石皿2も、磨面の部位からのみデンプン粒が検出されたため、磨面との関係性が推定される。

石器の残存デンプン粒の由来する植物 以上の検出結果を受けて、石皿1・2・9、敲石2の形態と現生標本を比較し(第134図)、残存デンプン粒の由来する植物を検討する。

今回検出された残存デンプン粒は単独粒とともに、アミロプラストと呼ばれる細胞内構造体に密着した状態のもの(写真10:1)が確認された。これらのデンプン粒は鱗茎・根茎類に由来する可能性がある。短径11.47 μm ・長径11.83 μm の円形(AII)、短径17.53 μm ・長径21.37 μm の円形(AIII)という形態、縦十字に交差する偏光十字の形状、形成核の位置などにもとづくと、キツネノカミソリ *Lycoris sanguinea* Maxim. のデンプン粒と類似している。BIIIのデンプン粒(写真10:2)とあわせると、由来する植物の候補としてこの植物が挙げられる。

石皿2のAIIIのデンプン粒については、短径15.08 μm ・長径20.43 μm の楕円形、偏光十字が粒子

の長径にあわせて細く伸びているという特徴がみられる。トチノキ *Aesculus turbinata* Blume も同様の形態であるが、形成核を2つもつ複粒構造を示す。そのため、石皿2のデンプン粒の由来する植物種である可能性は低く、遺跡周辺の植生と合わせて再検討する必要がある。

敲石2のAIIのデンプン粒は、粒径ならびに十字の暗線が粒子の中央で垂直に交わる偏光十字の特徴をふまえると、球形やいびつな楕円形で粒径範囲7.3~18.0 μm 、最頻値10.0 μm の形態をもつワラビ *Pteridium aquilinum* のデンプン粒の形態(渋谷2010b)と類似しており、ワラビに由来すると考えることができる。

検出された残存デンプン粒のうち、石皿9から検出された、最小径29.11 μm ・最大径57.36 μm のいびつな楕円形を示すAIIIのデンプン粒(写真10:5)は、ユリ属やウバユリ属などにみられる特徴を示している。そのため、デンプン粒の由来する植物としてユリ属やウバユリ属が推定される。このデンプン粒は磨面(IS1)から検出されたが、磨面の確認されない部位(IS2)の分解デンプン粒(写真10:6)も、粒子の損壊状態をふまえると、磨面のデンプン粒と同じ植物種である可能性が高い。

以上をまとめると、検出された残存デンプン粒の由来する植物の種類は、石皿1:キツネノカミソリ、石皿2:トチノキ?、敲石2:ワラビ、石皿9:ユリ属やウバユリ属、が考えられる。

先述したように、磨面の確認されない部位から検出されたデンプン粒は植物加工に伴うもの、あるいは遺跡土壌などによる混入という2通りの可能性がある。石器が使用された当時の当該地域の古植生に対する詳細な復元結果や他の石器類に対する残存デンプン粒分析の結果とあわせて検証する必要がある。

検出されたデンプン粒のうち、石皿1の分解デンプン粒2個(写真10:1)は偏光十字が完全に消失しており、石皿9の分解デンプン粒(写真10:6)は粒子の膨潤や外縁の損傷、偏光十字の消失が確認できる。これらのデンプン粒は被熱にともなって糊化・糖化が生じた結果を示している。

植物のデンプン粒は基本的にどのような土壌環境でも残存するが(Barton & Matthews 2006; Evers

& Stevens 1985)、熱を受けるとデンプン粒の酵素反応が促進されて糊化が始まり、さらに進むと糖化する。熱によって糊化したデンプン粒はしばしば粒子が膨張し、偏光十字の幅が拡大し不明瞭な状態となることが多く、外縁も損傷していることが多い。そのため、加熱により分解したデンプン粒の由来する植物をたどることは困難である (Braadbaart et al. 2004; Burrell 2003; Evers & Stevens 1985; Lamb & Loy 2005; 渋谷 2007; 庄田 他 2011; Weston 2009)。ただし、植物の種類によってデンプン粒が糊化する温度は異なる。

一般的には、約 60～85 度の温度で加熱され、加熱対象物の全体の水分量が 30% 以下となった後に加熱が止められ、加熱前の温度近くまで冷やされた時にデンプン粒の糊化が進んで糖化するという (Crowther 2012)。加熱時間もデンプン粒の糊化や糖化を引き起こす要因であり (Crowther 2012; Henry et al. 2009; Raviele 2011)、多くの植物では、単に加熱されただけでデンプン粒の粒子が膨潤し、粘性が高まって糊状になり、さらに糖化するという反応が即座に起きることはない。

こうしたデンプン粒の性質にもとづくと、石皿 1・9 の分解デンプン粒はいずれも、デンプン粒の糊化が進んで糖化する状態になるまでの加熱温度、かつ時間を経ていたことが考えられる。

(5) まとめ

今回分析した中野山遺跡第 3 次・第 7 次調査で出土した石器について、石皿 1・2・9、敲石 2 よりデンプン粒を検出することに成功し、これらが鱗茎類や根茎類などに由来する可能性を提示した。分析試料中の植物性物質の含有量からは、検出された残存デンプン粒がこれらの石器の加工対象物の残滓である可能性はあるが、石皿 9 と敲石 2 については使用痕との関係性が明確には確認できなかった。そのため、同じ遺構から出土した他の石器、同じ土層中から出土した他の石器において残存デンプン粒が見られないかを検討する必要がある。

今後、中野山遺跡を含む遺跡周辺の古環境が詳細に復元され、遺跡での植物利用や石器の用途の検討がさまざまな角度から行われれば、残存デンプン粒の候補となる植物の範囲がより狭められ植物種の同

定が可能となる。本分析の結果を含めて学際的な視点から研究していくことが必要である。

引用文献

- Barton, H., Matthews, P. 2006 「Taphonomy」 (Torrence, R. & Barton, H. 『Ancient starch research』、Walnut Creek)、pp.75-94
- Braadbaart, F., Boon, J. J., Veld, H., David, P., van Bergen, P. F. 2004 「Laboratory simulations of the transformation of peas as a result of heat treatment: changes of the physical and chemical properties」 『Journal of Archaeological Science』 31, pp.821-833
- Burrell, M. M. 2003 「Starch: the need for improved quality or quantity—an overview」 『Journal of Experimental Botany』 54 (382)、pp.451-456
- Crowther, A. 2012 「The differential survival of native starch during cooking and implications for archaeological analyses: a review」 『Archaeological and Anthropological Sciences』
- Evers, A. D. & Stevens, D. J. 1985 「Starch damage」 (Pomeranz, Y. 『Advances in cereal science and technology』、St. Paul)、pp.321-349
- Fullagar, R. 2006 「Starch on artifacts」 (Torrence R. & Barton H. 『Ancient starch research』、Walnut Creek)、pp.177-203
- Henry, A. G. · Hudson, H. F., Piperno, D. R. 2009 「Changes in starch grain morphologies from cooking」 『Journal of Archaeological Science』 36、pp.915-922
- Lamb, J. & Loy, T. 2005 「Seeing red: the use of Congo Red dye to identify cooked and damaged starch grains in archaeological residues」 『Journal of Archaeological Science』 32、pp.1433-1440
- 渋谷綾子 2006 「日本の現存植物を用いた参照デンプン標本」 『新潟県立歴史博物館研究紀要』 7、7-16 頁
- 渋谷綾子 2007 「佃遺跡・更良岡山遺跡の石皿および三宅西遺跡の土器付着物における残存デンプン」 『古代文化』 59(2)、116-126 頁
- 渋谷綾子 2010a 「高山寺貝塚、溝ノ口、市脇、下芳養、丁の町・妙寺遺跡から出土した縄文時代石器の残

存デンプン粒分析』『和歌山市立博物館研究紀要』
25、105-117 頁

渋谷綾子 2010b 「日本列島における現生デンプン粒標本と
日本考古学研究への応用—残存デンプン粒の形
態分類をめざして」『植生史研究』18(1)、13-27
頁

渋谷綾子 2011 「飛田給北遺跡から出土した石器の残存デ
ンプン粒分析」(比田井民子・田中純男・杉原重
夫・渋谷綾子・上條朝宏・武笠多恵子編『調布
市飛田給北遺跡 第9地点』、多摩市、2011年)、
192-203 頁

渋谷綾子 2012 「鹿児島県水迫遺跡出土石器の残存デンプ
ン粒と縄文時代草創期・早期における植物利用」
『植生史研究』21(2)、55-66 頁

庄田慎矢・松谷暁子・國木田大・渋谷綾子 2011 「岡山区
上東遺跡出土の弥生土器に付着した炭化物の由
来を探る」『植生史研究』20(1)、41-52 頁

Raviele, M. E. 2011 「Experimental assessment of maize
phytolith and starch taphonomy in carbonized

cooking residues」『Journal of Archaeological
Science』38、pp.2708-2713

Weston, J. 2009 「Seeing red: the use of a biological stain
to identify cooked and processed/damaged
starch grains in archaeological residues」
(Fairbairn, A., O'Connor, S., Marwick, B. 『terra
australis 28: New Directions in Archaeological
Science』、Canberra)、pp.77-91

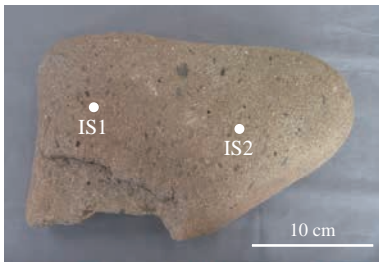
第12表 出土石器の分析試料と残存デンプン粒の検出個数
(IS: 第1次試料, 使用痕の識別は筆者自身の観察による)

石器 (報告番号)	分析番号	出土地区	出土遺構	採取 部位	使用痕 の種類	検出 個数
石皿 1 (45)	NNY-SRP1		SK343	IS1	磨面	4
				IS2	無	1
				IS3	磨面	0
				IS4	磨面	0
石皿 2 (36)	NNY-SRP2	南区 L-T17・18 L-U17・18	SK411	IS1	無	0
				IS2	無	0
				IS3	磨面	1
				IS4	磨面	0
石皿 3 (7)	NNY-SRP5	M-J1	SH370	IS1	磨面	0
				IS2	無	0
石皿 4 (19)	NNY-SRP34	L-L18	SF402	IS1	磨面	0
				IS2	磨面	0
				IS3	無	0
				IS4	無	0
石皿 5 (31)	NNY-SRP36		SK341・ SK411	IS1	磨面	0
				IS2	磨面	0
石皿 6 (25)	NNY-SRP37		SK341・ SK411	IS1	磨面	0
				IS2	無	0
石皿 7 (49)	NNY-SRP38		SK348	IS1	磨面	0
				IS2	無	0
石皿 8 (55)	NNY-SRP39	L-S7	SK349	IS1	磨面	0
				IS2	磨面	0
石皿 9 (70)	NNY-SRP33	M-S2	SK744	IS1	磨面	1
				IS2	無	1
磨石 1 (4)	NNY-SRP35	M-J1	SH370	IS1	無	0
				IS2	磨面	0
敲石 1 (16)	NNY-SRP3	L-N14	SF390	IS1	敲打痕	0
				IS2	無	0
				IS3	敲打痕	0
敲石 2 (5)	NNY-SRP4	M-J1	SH370	IS1	無	1
				IS2	無	0
				IS3	敲打痕	0

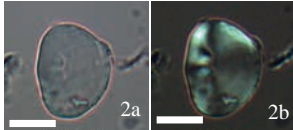
第13表 石器から検出した残存デンプン粒 (単位: 個)

分析した 石器	円形主体		半円・三角・ 四角形			多角形			D	計	
	AI	A II	A III	BI	B II	B III	CI	C II			C III
石皿 1	1	1				1				2	5
石皿 2			1								1
石皿 3											0
石皿 4											0
石皿 5											0
石皿 6											0
石皿 7											0
石皿 8											0
石皿 9				1						1	2
磨石 1											0
敲石 1											0
敲石 2			1								1
計	0	2	3	0	0	1	0	0	0	3	9

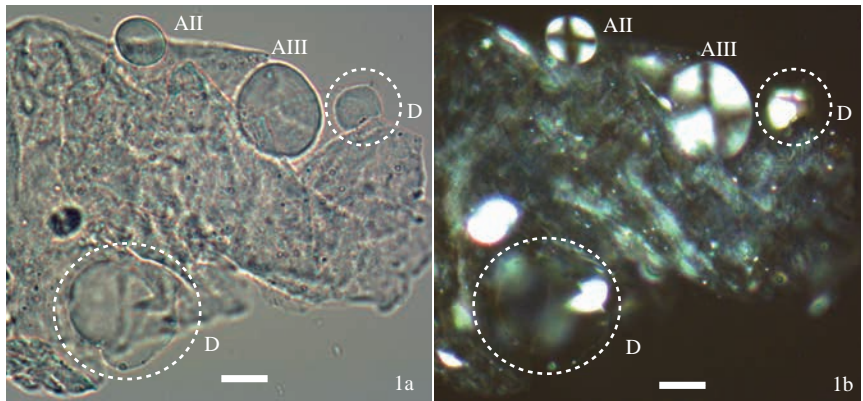
※ A: 円形・いびつな円形・楕円形, B: 半円形・三角形・
四角形, C: 多角形, D: 分解して原形の識別が困難なもの。
I: 10 μm 未満, II: 10 ~ 20 μm, III: 20 μm 以上



石皿 1 (SK343 より出土)



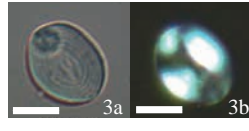
2 IS2 より検出した BIII のデンプン粒



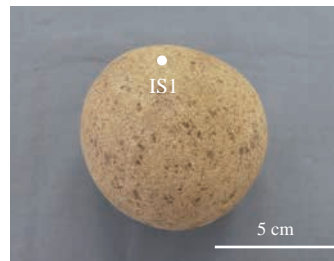
1 IS1 より検出した AII・AIII のデンプン粒と分解デンプン粒 (D)



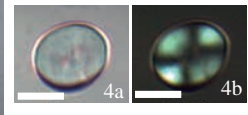
石皿 2 (SK411 より出土)



3 IS3 より検出した AIII のデンプン粒



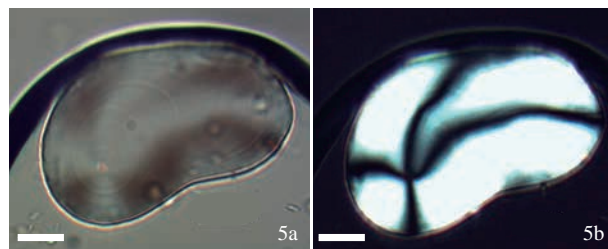
敲石 2 (SH370 より出土)



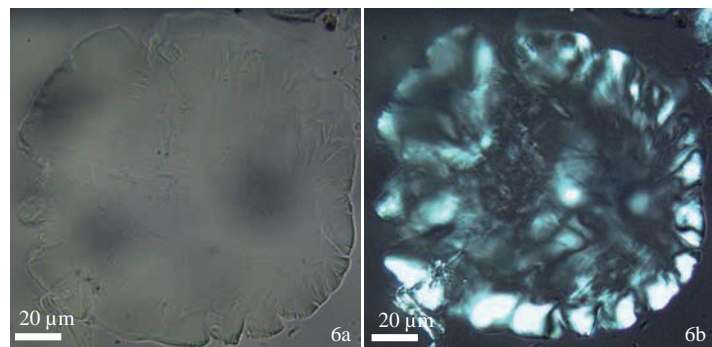
4 IS1 より検出した AII のデンプン粒



石皿 9 (SK744 より出土)



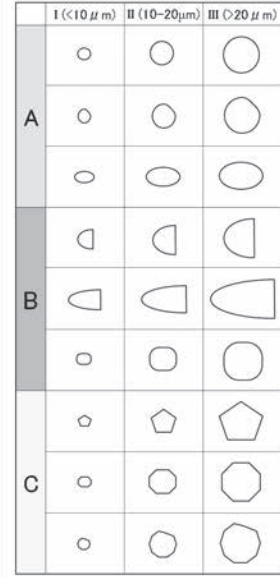
5 IS1 より検出した AIII のデンプン粒



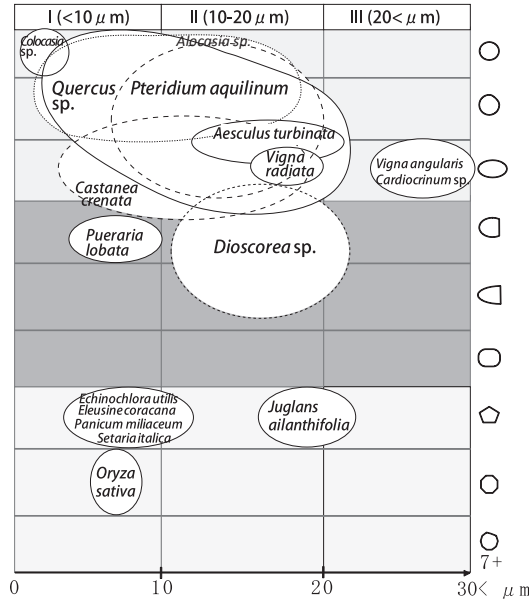
6 IS2 より検出した分解デンプン粒

写27 分析した中野山遺跡出土石器の例と検出された残存デンプン粒. 白丸は試料採取箇所, IS: 第1次試料, 残存デンプン粒写真のスケールバーは10μmを示す. デンプン粒の写真はすべて400倍: a: 開放ニコル, b: 直交ニコルで撮影.

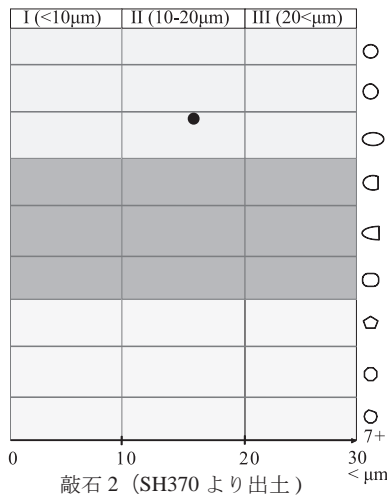
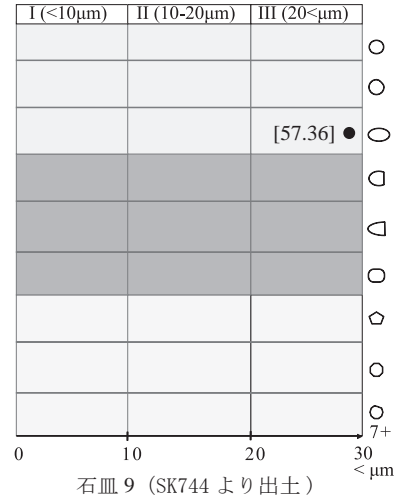
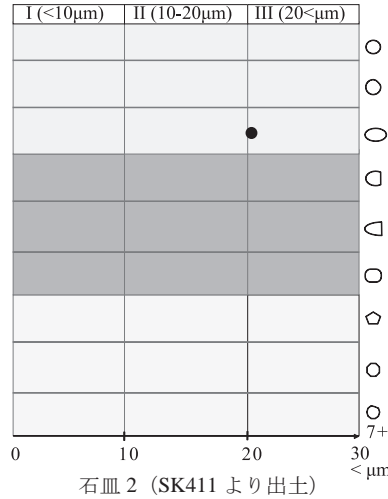
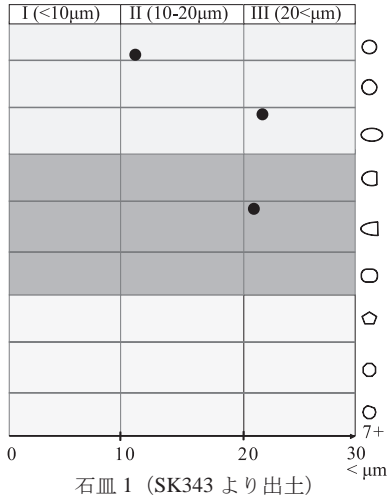
デンプン粒の形態分類の基準



現生標本 17 属の形態分類図



A : 円形
 B : 半円形・三角形・四角形
 C : 多角形
 I : < 10 μm
 II : 10-20 μm
 III : 20 < μm



第134図 デンプン粒の形態分類の基準と現生標本17属の形態分類図（渋谷2010bをもとに作製），および分析した石器から検出した残存デンプン粒の形態分類図。黒丸は形態が識別可能なデンプン粒（分解/損傷デンプン粒を除く）の形態と最大粒径を示す。

第4節 出土滓の分析調査

(1) いきさつ

中野山遺跡は三重県四日市市北山町に所在する。奈良～飛鳥時代の掘立柱建物跡、竪穴住居跡等が検出されている。調査地区内からは鍛冶関連遺構は未確認であるが、鉄滓が出土したため、遺跡周辺での作業内容を検討する目的から、調査を実施する運びとなった。

(2) 調査方法

供試材 第14表に示す。出土滓6点の調査を行った。

調査項目

(1) 肉眼観察

分析調査を実施する遺物の外観の特徴など、調査前の観察所見を記載した。

(2) マクロ組織

本来は肉眼またはルーペで観察した組織であるが、本稿では顕微鏡埋込み試料の断面を、低倍率で撮影したものを指す。当調査は顕微鏡検査よりも、広範囲で組織の分布状態、形状、大きさなどが観察できる利点がある。

(3) 顕微鏡組織

鉄滓の鉄物組成や金属部の組織観察、非金属介在物の調査などを目的とする。

試料観察面を設定・切り出し後、試験片は樹脂に埋込み、エメリー研磨紙の #150、#240、#320、#600、#1000、及びダイヤモンド粒子の $3\mu\text{m}$ と $1\mu\text{m}$ で鏡面研磨した。また観察には金属反射顕微鏡を用い、特徴的・代表的な視野を選択して写真撮影を行った。

(4) ビッカース断面硬度

ビッカース断面硬度計 (Vickers Hardness Tester) を用いて硬さの測定を行い、文献硬度値に照らして、鉄滓中の晶出物の判定を行った。また金属鉄の硬さ測定も同様に実施した。

試験は鏡面研磨した試料に 136° の頂角をもったダイヤモンドを押し込み、その時に生じた窪みの面積をもって、その荷重を除いた商を硬度値としている。試料は顕微鏡用を併用し、荷重は 50gf で測定した。

(5) EPMA (Electron Probe Micro Analyzer) 調査

日本電子(株)製 JXA-8800RL (波長分散型 5 チャンネル) にて含有元素の定性・定量分析を実施した。定量分析は試料電流 2.0×10^{-8} アンペア、ビーム径 $3\mu\text{m}$ 、補正法は ZAF に従った。

試料面 (顕微鏡試料併用) に真空中で電子線を照射し、発生する特性 X 線を分光後に画像化し定性的な結果を得る。更に標準試料と X 線強度との対比から元素定量値をコンピューター処理してデータ解析を行う方法である。

反射電子像 (COMP) は、調査面の組成の違いを明度で表示するものである。重い元素で構成される個所ほど明るく、軽い元素で構成される個所ほど暗い色調で示される。これを利用して、各相の組成の違いを確認後、定量分析を実施している。

また元素の分布状態を把握するため、反射電子像に加え、特性 X 線像の撮影も適宜行った。

(6) 化学組成分析

出土遺物の性状を調査するため、構成成分の定量分析を実施した。

全鉄分 (Total Fe)、金属鉄 (Metallic Fe)、酸化第一鉄 (FeO) : 容量法。

炭素 (C)、硫黄 (S) : 燃焼容量法、燃焼赤外吸収法。

二酸化硅素 (SiO_2)、酸化アルミニウム (Al_2O_3)、酸化カルシウム (CaO)、酸化マグネシウム (MgO)、酸化カリウム (K_2O)、酸化ナトリウム (Na_2O)、酸化マンガン (MnO)、二酸化チタン (TiO_2)、酸化クロム (Cr_2O_3)、五酸化燐 (P_2O_5)、バナジウム (V)、銅 (Cu)、二酸化ジルコニウム (ZrO_2) : ICP (Inductively Coupled Plasma Emission Spectrometer) 法 : 誘導結合プラズマ発光分光分析。

(3) 調査結果

TNKN - 1 : 椀形鍛冶滓

(1) 肉眼観察 : 上面中央に羽口先端部が溶着した、やや不定形の椀形鍛冶滓破片 (137.22g) である。また側面には 1 箇所白色の小礫が固着している。滓部は黒灰色で弱磁性がある。下面側は細かい木炭痕による凹凸が著しい。

(2) マクロ組織：写 28 ①に示す。上側の黒灰色部は羽口粘土、左側の暗灰色部は側面に溶着した小礫である。また写真右下が鍛冶滓部分である。滓中の微細な明灰色部は錆化鉄であるが、まとまった鉄部はみられない。

(3) 顕微鏡組織：写 28 ②③に示す。ともに鍛冶滓部分の拡大である。灰褐色多角形結晶はマグネタイト (Magnetite : $\text{FeO} \cdot \text{Fe}_2\text{O}_3$) とヘルシナイトを主な端成分とする固溶体^①と推定される。さらに白色粒状結晶ウスタイト (Wustite : FeO)、発達した淡灰色盤状結晶ファヤライト (Fayalite : $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$) が晶出する。

(4) ビッカース断面硬度：写 28 ②の滓部の硬度を測定した。灰褐色多角形結晶の暗色部の硬度値は 962Hv であった。ヘルシナイトとしてはやや明るい色調で、硬度も若干軟質であるためマグネタイトとヘルシナイトを主な端成分とする固溶体と推測される。また淡灰色盤状結晶硬度値は 674Hv であった。ファヤライトの文献硬度値^② (600 ~ 700Hv) の範囲内であり、ファヤライトに同定される。

(5) EPMA 調査：写 28 ④に滓部の反射電子像 (COMP) を示す。黒色結晶は特性 X 線像ではカリウム (K) に強い反応がある。定量分析値は 7.7% K_2O - 66.9% SiO_2 - 25.7% Al_2O_3 - 1.1% FeO (分析点 1) であった。オルソクレース (Orthoclase : KAlSi_3O_8) と推定される。また多角形結晶は特性 X 線像をみると鉄 (Fe)、アルミニウム (Al) に強い反応がある。定量分析値は 69.7% FeO - 26.9% Al_2O_3 - 2.0% TiO_2 (分析点 2)、68.7% FeO - 27.1% Al_2O_3 - 1.9% TiO_2 (分析点 3) であった。マグネタイト (Magnetite : $\text{FeO} \cdot \text{Fe}_2\text{O}_3$) とヘルシナイト (Hercynite : $\text{FeO} \cdot \text{Al}_2\text{O}_3$) を主な端成分とする固溶体で、チタン (TiO_2) を少量固溶する。淡灰色板状結晶は特性 X 線像をみると鉄 (Fe)、珪素 (Si) に反応がある。定量分析値は 71.3% FeO - 31.6% SiO_2 (分析点 4) であった。ファヤライト (Fayalite : $2\text{FeO} \cdot \text{SiO}_2$) に同定される。さらに白色粒状結晶は特性 X 線像では鉄 (Fe)、酸素 (O) に反応がある。定量分析値は 101.0% FeO (分析点 5) で、ウスタイト (Wustite : FeO) に同定される。

(6) 化学組成分析：第 15 表に示す。全鉄分 (Total Fe) 50.42% に対して、金属鉄 (Metallic Fe) 0.06%、

酸化第 1 鉄 (FeO) 46.27%、酸化第 2 鉄 (Fe_2O_3) 20.58% の割合であった。造滓成分 ($\text{SiO}_2 + \text{Al}_2\text{O}_3 + \text{CaO} + \text{MgO} + \text{K}_2\text{O} + \text{Na}_2\text{O}$) 28.23% で、このうち塩基性成分 ($\text{CaO} + \text{MgO}$) は 1.28% と低値であった。主に砂鉄 (含チタン鉄鉱) 起源の二酸化チタン (TiO_2) は 0.21%、バナジウム (V) が 0.01% と低い。また酸化マンガン (MnO) は 0.08%、銅 (Cu) も 0.01% と低下する。

当鉄滓は鉄分 (FeO) および炉材粘土の溶融物 (SiO_2 主成分) 主体の鉄滓であった。製鉄原料の起源の脈石成分 (鉄鉱石 : CaO 、 MgO 、 MnO 、砂鉄 : TiO_2 、V など) の低減傾向が著しく、鍛錬鍛冶滓に分類される。

TNKN - 2 : 椀形鍛冶滓

(1) 肉眼観察：やや扁平な椀形鍛冶滓の破片 (53.71g) である。滓の地の色調は黒灰色で、着磁性がある。表面には茶褐色の土砂や鉄錆化物が薄く付着するが、まとまった鉄部はみられない。また上下面とも細かい木炭痕による凹凸が著しい。

(2) マクロ組織：写 29 ①に示す。写真左上の青灰色部が錆化鉄である。他にも微細な錆化鉄部が滓中に点在するが、観察面ではまとまった鉄部はみられない。

(3) 顕微鏡組織：写 29 ②③に示す。②左側は錆化鉄部の拡大である。素地部分は層状のパールライト (Pearlite)、針状黒色部はセメントイト (Cementite : Fe_3C) 痕跡であり、共析組織 ~ 過共析組織 ($\text{C} \geq 0.77\%$) であったと判断される。②右側および③は滓部で、白色樹枝状結晶ウスタイト、淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。鍛錬鍛冶滓に最もよくみられる晶癖といえる。

(4) ビッカース断面硬度：写 29 ③の白色樹枝状結晶の硬度を測定した。硬度値は 428Hv、439Hv であった。ウスタイトの文献硬度値 (450 ~ 500Hv) と比較するとやや軟質であるが、色調や形状および EPMA 調査の結果からウスタイトと推定される。淡灰色柱状結晶の硬度値は 717Hv とファヤライトとしては若干硬質であるが、ファヤライトに同定される。

(5) EPMA 調査：写 29 ④に滓部の反射電子像 (COMP) を示す。白色樹枝状結晶は特性 X 線像をみると、鉄 (Fe)、酸素 (O) に反応がある。定量分析値は 101.2% FeO (分析点 10) であった。ウスタイト (Wustite : FeO) に同定される。微細

な暗色結晶は特性 X 線像では鉄 (Fe)、アルミニウム (Al) に反応がある。定量分析値は 48.5%FeO - 51.4%Al₂O₃ (分析点 11) で、ヘルシナイト (Hercynite: FeO·Al₂O₃) に同定される。淡灰色柱状結晶は特性 X 線像では鉄 (Fe)、珪素 (Si)、酸素 (O) に反応がある。定量分析値は 68.6%FeO - 2.1%CaO - 31.4%SiO₂ (分析点 12) であった。ファヤライト (Fayalite: 2FeO·SiO₂) で、少量ライム (CaO) を固溶する。また微細黒色結晶は特性 X 線像ではカリウム (K) に強い反応がある。定量分析値は 12.8%K₂O - 59.3%SiO₂ - 25.0%Al₂O₃ - 2.2%FeO (分析点 13) であった。オルソクレース (Orthoclase: KAlSi₃O₈) と推測される。(6) 化学組成分析: 第 15 表に示す。全鉄分 (Total Fe) は 59.80% と高値である。このうち金属鉄 (Metallic Fe) は 0.03%、酸化第 1 鉄 (FeO) が 64.81%、酸化第 2 鉄 (Fe₂O₃) 13.43% の割合であった。造滓成分 (SiO₂ + Al₂O₃ + CaO + MgO + K₂O + Na₂O) は 19.40% と低めで、塩基性成分 (CaO + MgO) も 1.17% と低値である。主に砂鉄 (含チタン鉄鉱) 起源の二酸化チタン (TiO₂) は 0.17%、バナジウム (V) が 0.01%、酸化マンガン (MnO) 0.06%、銅 (Cu) < 0.01% といずれも低値であった。

当鉄滓も製鉄原料起源の脈石成分の低減傾向が著しく、鍛錬鍛冶滓に分類される。また鉄酸化物 (FeO) の割合が高く、主に熱間で鍛打加工した時の吹き減り (酸化に伴う損失) で生じた滓と考えられる。

TNKN - 3: 銅滓?

(1) 肉眼観察: 側面の一部が破面であるが、ほぼ完形に近い形状の椀形滓 (121.49g) である。上面表層には羽口先端溶融物 (ガラス質滓) と熱影響を受けた白色の小礫が付着する。滓の地の色調は黒灰色で着磁性はやや弱い。また上面表層はごく弱い流動状で木炭痕が散在する。下面側には広い範囲で茶褐色の炉床土が付着する。

(2) マクロ組織: 写 30 ①に示す。下側表層寄りに複数点存在する暗灰色粒は、炉材粘土に混和された石英・長石類などの砂粒である。また観察面では、滓中にはまとまった金属鉄部はみられなかった。〔顕微鏡組織の項で詳述するが、非常に微細な金属粒が散在する状態であった。〕

(3) 顕微鏡組織: 写 30 ②③に示す。滓中には発達

した淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。さらに部分的に微細な樹枝状のウスタイトまたはマグネタイトが晶出する。

また滓中には微細な金属粒が点在する。組成については EPMA 調査の項で上述するが、②の淡橙色金属粒は青銅、③の明白色金属粒は金属鉄であることが明らかとなった。

(4) ビッカース断面硬度: 紙面の構成上、圧痕の写真を割愛したが、淡灰色柱状結晶硬度を測定した。硬度値は 637Hv であった。ファヤライトの文献硬度値の範囲内であり、ファヤライトに同定される。

(5) EPMA 調査: 写 30 ④に滓部 (写 30 ②と同視野) の反射電子像 (COMP) を示す。白色微結晶の定量分析値は 97.3%FeO - 1.6%TiO₂ - 1.2%Al₂O₃ (分析点 14) であった。マグネタイト (Magnetite: FeO·Fe₂O₃) で、チタン (TiO₂)、アルミナ (Al₂O₃) を少量固溶する。また淡灰色柱状結晶の定量分析値は 69.7%FeO - 1.4%CaO - 30.8%SiO₂ (分析点 15) であった。ファヤライト (Fayalite: 2FeO·SiO₂) でライム (CaO) を少量固溶する。

また滓中の微細な淡橙色粒は特性 X 線像をみると、銅 (Cu)、錫 (Sn) に反応がある。定量分析値は 92.1%Cu - 6.9%Sn - 4.4%Fe (分析点 3)、88.8%Cu - 6.5%Sn - 5.5%Fe (分析点 4) であった。鉄 (Fe) を含む青銅 (Cu - Sn 合金) と推定される。もう 1 視野、滓中の微小金属粒の調査を実施した。

写 30 ⑤ (写 30 ③と同視野) の反射電子像 (COMP) を示す。定量分析値は 100.5%Fe - 1.3%Cu (分析点 5)、99.7%Fe - 1.1%Cu (分析点 6) であった。こちらは少量銅 (Cu) を含む金属鉄 (Metallic Fe) である。

(6) 化学組成分析: 第 15 表に示す。全鉄分 (Total Fe) 53.73% に対して、金属鉄 (Metallic Fe) 0.07%、酸化第 1 鉄 (FeO) 58.15%、酸化第 2 鉄 (Fe₂O₃) 12.10% の割合であった。造滓成分 (SiO₂ + Al₂O₃ + CaO + MgO + K₂O + Na₂O) 26.80% で、このうち塩基性成分 (CaO + MgO) は 1.31% と低値であった。主に砂鉄 (含チタン鉄鉱) 起源の二酸化チタン (TiO₂) は 0.25%、バナジウム (V) は 0.01%、酸化マンガン (MnO) も 0.08% と低値であった。銅 (Cu) は 0.05% と高めである。

当鉄滓中には微細な青銅粒と金属鉄粒の双方が含まれていることが明らかとなった。この特徴から、

青銅製品の製作に関わる滓と推察される。ただし鉄 (Fe)、砒素 (As) などを相当量含む粗銅の溶解や精製に伴うものであれば、金属粒からかなりの割合で砒素が含まれると考えられるが、EPMA を用いた定量分析結果を見るとその含有率は微量であった。同じ (鍛冶) 炉または近接した作業空間で鍛造鉄器製作のみでなく、青銅小物を作るための坩堝の加熱など行ったため、こうした青銅粒と金属鉄が混在する滓が生じた可能性が考えられる。

TNKN - 4 : 椀形鍛冶滓

(1) 肉眼観察：小形で偏平な椀形鍛冶滓 (59.55g) である。上面端部に砂粒を含むガラス質滓が付着する。炉材粘土の溶融物と推測される。表面は広い範囲が茶褐色の土砂や銹化物に覆われる。着磁性もあるが、特殊金属探知器での反応はない。滓の地の色調は黒灰色で、上下面とも細かい木炭痕が残る。特に下面側は顕著である。

(2) マクロ組織：写 31 ①に示す。写真左側の暗色部は銹化鉄である。残存状態はよくないが、顕微鏡組織の項で詳述するように、部分的に亜共析組織 ($C < 0.77\%$) 痕跡が確認された。また表層側でも微細な銹化鉄 (明灰色部) が多数散在する。

(3) 顕微鏡組織：写 31 ②③に示す。②は銹化鉄部の拡大である。初析フェライトの痕跡が残存している。③は滓部の拡大である。白色粒状結晶はウスタイトまたはマグネタイトと推測される。灰褐色多角形結晶はマグネタイトとヘルシナイトを主な端成分とする固溶体、淡灰色盤状結晶はファヤライトである。

(4) ビッカース断面硬度：写 31 ③の白色樹枝状の硬度を測定した。硬度値は 651Hv であった。マグネタイトとしても硬質であるが、この数値からはマグネタイトの可能性が考えられる。ただし結晶が微細なため、周囲の影響を受けたものと判断される。また灰褐色多角形結晶の硬度値は 1285Hv と非常に硬質であるが、色調が明るく、マグネタイトとヘルシナイトを主な端成分とする固溶体と推測される。淡灰色盤状結晶の硬度値は 731Hv であった。ファヤライトの文献硬度値よりも若干硬質であるが、結晶の色調と形状、EPMA 調査の結果から、ファヤライトに同定される。

(5) EPMA 調査：写 31 ④に滓部の反射電子像 (COMP) を示す。多角形結晶は特性 X 線像をみると鉄 (Fe)、アルミニウム (Al) に反応がある。定量分析値は内側の明色部が $88.4\%FeO - 8.2\%Al_2O_3 - 1.1\%TiO_2$ (分析点 18)、これに対して外側の暗色部は $65.9\%FeO - 32.0\%Al_2O_3 - 1.6\%TiO_2$ (分析点 19) であった。ともにマグネタイト (Magnetite : $FeO \cdot Fe_2O_3$) とヘルシナイト (Hercynite : $FeO \cdot Al_2O_3$) を主な端成分とする固溶体で、チタン (TiO_2) を少量固溶する。アルミナ (Al_2O_3) 含有率の違いが色調差となって現れている。淡灰色盤状結晶は特性 X 線像をみると鉄 (Fe)、珪素 (Si)、酸素 (O) に反応がある。定量分析値は $70.1\%FeO - 31.7\%SiO_2$ (分析点 20) であった。ファヤライト (Fayalite : $2FeO \cdot SiO_2$) に同定される。また素地部分の定量分析値は $43.0\%SiO_2 - 18.0\%Al_2O_3 - 14.4\%CaO - 1.9\%K_2O - 3.8\%Na_2O - 19.0\%FeO$ (分析点 22) であった。非晶質珪酸塩である。

(6) 化学組成分析：第 15 表に示す。全鉄分 (Total Fe) 50.22% に対して、金属鉄 (Metallic Fe) 0.08%、酸化第 1 鉄 (FeO) 42.34%、酸化第 2 鉄 (Fe_2O_3) 24.63% の割合であった。造滓成分 ($SiO_2 + Al_2O_3 + CaO + MgO + K_2O + Na_2O$) 27.65% で、このうち塩基性成分 ($CaO + MgO$) は 1.29% と低値である。主に砂鉄 (含チタン鉄鉱) 起源の二酸化チタン (TiO_2) は 0.22%、バナジウム (V) も 0.01% と低値であった。酸化マンガン (MnO) は 0.08%、銅 (Cu) も 0.01% 低値である。

当鉄滓は製鉄原料の起源の脈石成分の低減傾向が著しく、鍛錬鍛冶滓に分類される。

椀形鍛冶滓 (TNKN - 1) とよく似た化学組成であった。

TNKN - 5 : 椀形鍛冶滓

(1) 肉眼観察：小形で薄手の椀形鍛冶滓の破片 (22.23g) である。側面は全面破面。上面側には気孔の多いガラス質滓が点在する。滓部は黒灰色で弱い着磁性がある。下面には微細な砂粒を含む灰褐色の炉床土が部分的に付着する。

(2) マクロ組織：写 32 ①に示す。上下面表層には部分的に炉材 (羽口・鍛冶炉床土) 粘土溶融物が付着する。また滓中には微細な銹化鉄が散在するが、その割合は少ない。

(3) 顕微鏡組織：写 32 ②③に示す。②右側は銹化鉄部の拡大である。金属組織痕跡は不明瞭で、炭素

含有率の推定等は困難な状態であった。②左側および③は滓部である。全面淡灰色盤状結晶ファヤライトが晶出するが、部分的に③右下のような微細灰褐色多角形結晶マグネタイトも確認される。

(4) ビッカース断面硬度：写 32 ③の淡灰色板状結晶の硬度を測定した。硬度値は 686Hv であった。ファヤライトの文献硬度値の範囲内であり、ファヤライトに同定される。

(5) EPMA 調査：写 32 ④に滓部（写 32 ③の拡大）の反射電子像（COMP）を示す。淡灰色盤状結晶は特性 X 像をみると、鉄（Fe）、珪素（Si）、酸素（O）に反応がある。定量分析値は 70.1%FeO - 31.4%SiO₂（分析点 26）であった。ファヤライト（Fayalite：2FeO·SiO₂）に同定される。微細灰褐色結晶は特性 X 線像では鉄（Fe）、酸素（O）に強い反応がある。定量分析値は 95.2%FeO - 2.7%MgO（分析点 27）であった。マグネタイト（Magnetite:FeO·Fe₂O₃）で、少量マグネシア（MgO）を固溶する。また素地部分の定量分析値は 47.8%SiO₂ - 18.1%Al₂O₃ - 2.9%CaO - 3.7%K₂O - 27.1%FeO - 1.1%TiO₂（分析点 28）であった。非晶質珪酸塩でチタン（Ti）を少量固溶する。

(6) 化学組成分析：第 15 表に示す。全鉄分（Total Fe）47.72% に対して、金属鉄（Metallic Fe）0.07%、酸化第 1 鉄（FeO）49.24%、酸化第 2 鉄（Fe₂O₃）13.41% の割合であった。造滓成分（SiO₂ + Al₂O₃ + CaO + MgO + K₂O + Na₂O）33.75% と高めであるが、このうち塩基性成分（CaO + MgO）は 1.05% と低い。主に砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の二酸化チタン（TiO₂）は 0.36%、バナジウム（V）が 0.01% と低値であった。また酸化マンガン（MnO）も 0.09%、銅（Cu）< 0.01% と低下する。

当鉄滓も製鉄原料の起源の脈石成分の低減傾向が著しく、鍛錬鍛冶滓に分類される。

TNKN - 6：梔形鍛冶滓

(1) 肉眼観察：小形で偏平な梔形鍛冶滓の破片（42.08g）である。側面 2 面は破面。上面表層には部分的に薄くガラス質滓が付着する。滓の地の色調は黒灰色で、着磁性は弱い。表面には茶褐色の土砂や錆化鉄が薄く付着するが、まとまった鉄部はみられない。下面には部分的に灰褐色の鍛冶炉床土が固着する。

(2) マクロ組織：写 33 ①に示す。上面端部から側面にかけて、炉材粘土（暗灰色部）が薄く付着する。また滓中にはごく微細な錆化鉄が若干点在するが、まとまった鉄部はみられない。

(3) 顕微鏡組織：写 33 ②③に示す。②の中央は錆化鉄部の拡大である。金属組織痕跡は不明瞭で、炭素含有率等の推定は困難な状態であった。③は滓部の拡大である。白色樹枝状結晶ウスタイト、暗色微細結晶ヘルシナイト、淡灰色柱状結晶ファヤライトが晶出する。

(4) ビッカース断面硬度：写 33 ③の白色樹枝状結晶の硬度を測定した。硬度値は 442Hv、445Hv であった。前者はウスタイトの文献硬度値の下限より僅かに軟質であるが、色調と形状、および後述の EPMA 調査結果からウスタイトに同定される。また淡灰色盤状結晶の硬度を測定した。硬度値は 629Hv であった。ファヤライトの文献硬度値の範囲内であり、ファヤライトに同定される。

(5) EPMA 調査：写 33 ④に滓部の反射電子像（COMP）を示す。白色樹枝状結晶は鉄（Fe）、酸素（O）に反応がある。定量分析値は 101.2%FeO（分析点 29）であった。ウスタイト（Wustite：FeO）に同定される。微細な暗色結晶は特性 X 線像では鉄（Fe）、アルミニウム（Al）に反応がある。定量分析値は 51.1%FeO - 51.6%Al₂O₃（分析点 30）であった。ヘルシナイト（Hercynite:FeO·Al₂O₃）である。淡灰色柱状結晶は特性 X 線像では鉄（Fe）、珪素（Si）、酸素（O）に反応がある。定量分析値は 71.5%FeO - 31.2%SiO₂（分析点 12）であった。ファヤライト（Fayalite：2FeO·SiO₂）に同定される。また微細な明白色粒は、特性 X 線像では鉄（Fe）にのみ強い反応がある。定量分析値は 100.9%Fe であった（分析点 10）。金属鉄（Metallic Fe）である。

(6) 化学組成分析：第 15 表に示す。全鉄分（Total Fe）48.61% に対して、金属鉄（Metallic Fe）0.04%、酸化第 1 鉄（FeO）59.16%、酸化第 2 鉄（Fe₂O₃）3.70% の割合であった。造滓成分（SiO₂ + Al₂O₃ + CaO + MgO + K₂O + Na₂O）33.49% で、このうち塩基性成分（CaO + MgO）は 1.37% と低値である。主に砂鉄（含チタン鉄鉱）起源の二酸化チタン（TiO₂）は 0.31%、バナジウム（V）も 0.01% であった。また酸化マンガ

ン (MnO) は 0.08%、銅 (Cu) < 0.01% と低値である。

当鉄滓も製鉄原料の起源の脈石成分の低減傾向が著しく、鍛錬鍛冶滓に分類される。

(4) まとめ

中野山遺跡 (第3次) から出土した滓を調査した結果、以下の点が明らかとなった。

〈1〉 椀形鍛冶滓 (TNKN - 1、2、4 ~ 6) はいずれも鍛錬鍛冶滓に分類される。当地域周辺で鉄素材を熱間で鍛打加工して、鍛造鉄器を製作していたことを示す遺物といえる。鉄酸化物 (FeO) および炉材粘土の溶融物 (SiO₂ 主成分) 主体で、製鉄原料起源の脈石成分 (鉄鉱石: CaO、MgO、MnO、砂鉄: TiO₂、V など) の低減傾向が著しい。銅 (Cu) 含有率も低値である。

〈2〉 銅滓 (TNKN - 3) 中には、微細な青銅と金属鉄粒の双方が含まれていた。青銅粒を含むことから、何らかの形で青銅製品の製作に関連した反応副生物と考えられる。

近接する筆ヶ崎古墳群・筆ヶ崎西遺跡 (第3・4次調査地区) では、鉄 (Fe)、砒素 (As) などを含む銅滓が確認されており、地域周辺にやや銅品位の低い銅素材 (国内産の粗銅) が搬入されて、銅 (青銅) 小物が製作されたと推測される。銅滓 (TNKN - 3) も鍛造鉄器に加えて、銅 (青銅) 製品を製作していたことを反映したものといえる。

ただし銅滓 (TNKN - 3) 中の青銅粒は、EPMA 調査結果を見ると筆ヶ崎古墳群・筆ヶ崎西遺跡出土滓のように砒素 (As) を含まず、錫 (Sn) をかなり (6% 台後半) 含んでいる。粗銅 (新銅) のみでなく、青銅製品の再溶解・鋳造も行われた可能性も考える必要がある。

また同じ滓中に金属鉄粒も含まれることから、鍛冶炉で鉄素材を熱間で鍛打加工するだけでなく、同じ炉または近接した作業空間で、坩堝などを用いて銅 (青銅) 小物を製作していた可能性が高いと考えられる。

現時点では今回調査で明らかとなった銅滓以外の銅関連遺物は確認されていないが、古代の鍛冶遺跡では、小規模の鋳銅関連遺物を伴う事例は珍しくはない。

【註】

- ① 黒田吉益・諏訪兼位『偏光顕微鏡と造岩鉱物 [第2版]』共立出版株式会社 1983
第5章 鉱物各論 D. 尖晶石類・スピネル類 (Spinel Group) の記載に加筆
尖晶石類の化学組成の一般式は XY₂O₄ と表記できる。X は 2 価の金属イオン、Y は 3 価の金属イオンである。その組み合わせでいろいろの種類のものがある。(略)
- ② 日刊工業新聞社『焼結鉱組織写真および識別法』1968
ウスタイトは 450 ~ 500Hv、マグネタイトは 500 ~ 600Hv、ファイヤライトは 600 ~ 700Hv の範囲が提示されている。[またマグネタイトにアルミナ (Al₂O₃) が加わり、ウルボスピネルとヘルシナイトを主な端成分とする固溶体となると硬度値は上昇する。ヘルシナイトでは 1000Hv を越える値を示す。]

第14表 供試材の履歴と調査項目

符号	地区名	出土位置	遺物No.	遺物名称	推定年代	計測値		調査項目						備考		
						大きさ (mm)	重量 (g)	メタル度	マクロ組織	顕微鏡組織	ビッカース断面硬度	X線回折	EPMA		化学分析	耐火度
TNKN-1		SH310-②北東	1	楕形鍛冶滓		79 × 54 × 35	137.22	なし	○	○	○	○	○			
TNKN-2		SH310-②	2	楕形鍛冶滓		55 × 40 × 20	53.71	なし	○	○	○	○	○			
TNKN-3	中野山 (第3次)	SH329 下ノ	3	銅滓	飛鳥～奈良	68 × 52 × 26	121.49	なし	○	○	○	○	○			
TNKN-4		SK332 1・2層	4	楕形鍛冶滓		59 × 50 × 22	59.55	なし	○	○	○	○	○			
TNKN-5		SK313-①	5	楕形鍛冶滓		46 × 25 × 18	22.23	なし	○	○	○	○	○			
TNKN-6		SK320 埋土	6	楕形鍛冶滓		56 × 43 × 18	42.08	なし	○	○	○	○	○			

第15表 供試材の化学組成

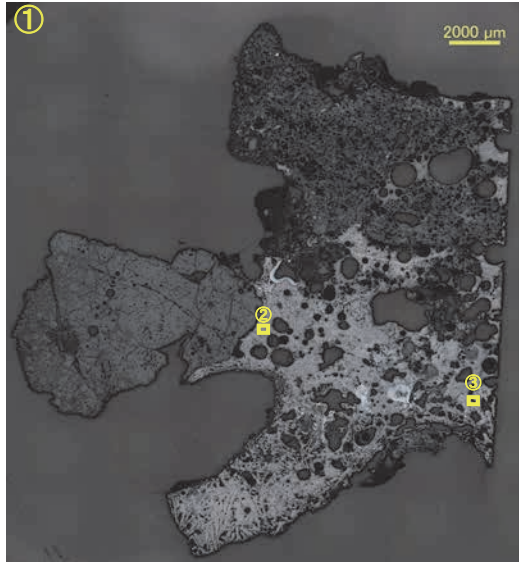
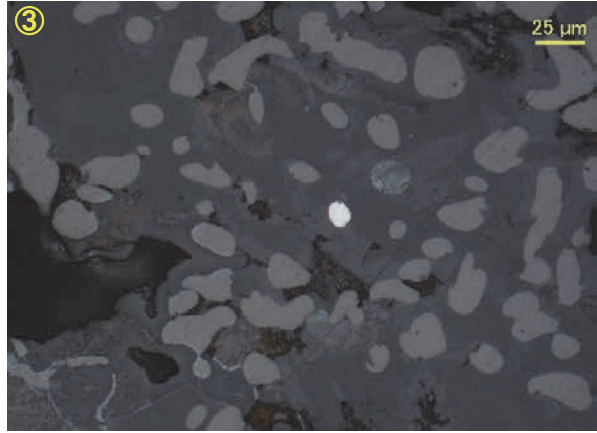
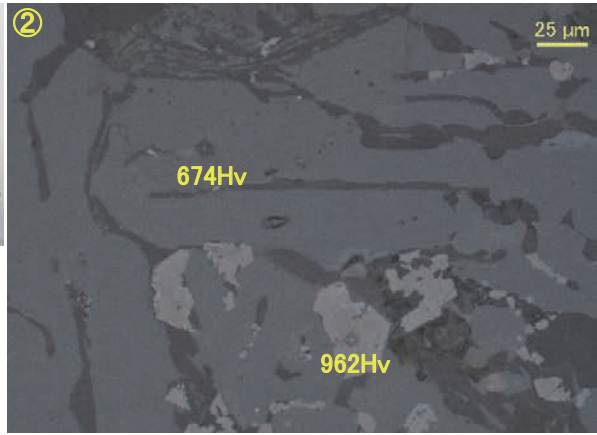
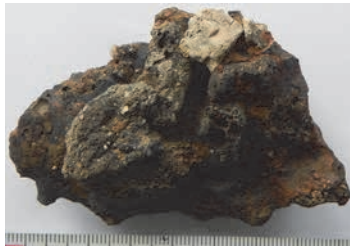
符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	全鉄分 (Total Fe)	金属鉄 (Metallic Fe)	酸化第1鉄 (FeO)	酸化第2鉄 (Fe ₂ O ₃)	二酸化珪素 (SiO ₂)	酸化アルミニウム (Al ₂ O ₃)	酸化カルシウム (CaO)	酸化マグネシウム (MgO)	酸化チタン (TiO ₂)	酸化マンガン (MnO)	酸化バナジウム (V ₂ O ₅)	酸化クロム (Cr ₂ O ₃)	硫酸 (S)	五酸化リン (P ₂ O ₅)	炭素 (C)	バナジウム (V)	銅 (Cu)	二酸化ジルコニウム (ZrO ₂)	造滓成分 Total Fe	TiO ₂ Total Fe	Σ *	
																										Fe ₂ O ₃
TNKN-1		SH310-②北東	楕形鍛冶滓		50.42	0.06	46.27	20.58	22.17	4.02	0.81	0.47	0.08	0.21	0.10	0.064	0.14	0.35	0.01	0.01	0.01	0.01	28.23	0.560	0.004	
TNKN-2		SH310-②北東	楕形鍛冶滓		59.80	0.03	64.81	13.43	14.73	3.03	0.81	0.36	0.06	0.17	0.09	0.021	0.12	0.24	0.01	0.01	<0.01	0.01	19.40	0.324	0.003	
TNKN-3	中野山 (第3次)	SH329 下ノ	銅滓	飛鳥～奈良	53.73	0.07	58.15	12.10	20.33	4.22	0.81	0.50	0.08	0.25	0.16	0.088	0.14	0.27	0.01	0.01	0.05	0.01	26.80	0.499	0.005	
TNKN-4		SK332 1・2層	楕形鍛冶滓		50.22	0.08	42.34	24.63	21.30	4.31	0.70	0.59	0.08	0.22	0.10	0.096	0.19	0.61	0.01	0.01	0.01	0.01	27.65	0.551	0.004	
TNKN-5		SK313-①	楕形鍛冶滓		47.72	0.07	49.24	13.41	26.22	5.54	0.56	0.49	0.09	0.36	0.10	0.070	0.13	0.40	0.01	0.01	<0.01	0.01	33.75	0.707	0.008	
TNKN-6		SK320 埋土	楕形鍛冶滓		48.61	0.04	59.16	3.70	25.04	6.35	0.82	0.55	0.08	0.31	0.08	0.046	0.22	0.20	0.01	0.01	<0.01	0.01	33.49	0.689	0.006	

第16表 出土遺物の調査結果のまとめ

符号	遺跡名	出土位置	遺物名称	推定年代	化学組成 (%)						顕微鏡組織	推定年代	所見	
					Total Fe	Fe ₂ O ₃	塩基性成分	TiO ₂	V	MnO				造滓成分
TNKN-1	中野山 (第3次)	SH310-②北東	楕形鍛冶滓		50.42	20.58	1.28	0.21	0.01	0.08	28.23	0.01	鍛錬鍛冶滓	
TNKN-2		SH310-②北東	楕形鍛冶滓		59.80	13.43	1.17	0.17	0.01	0.06	19.40	<0.01	鍛錬鍛冶滓	
TNKN-3		SH329 下ノ	銅滓?	飛鳥～奈良	53.73	12.10	1.31	0.25	0.01	0.08	26.80	0.05	青銅小物の製作に伴う滓の可能性が高い (滓中に微細な青銅粒が含まれる、As含有率は低く、粗銅の精製による反応副生物の可能性は低い)	
TNKN-4		SK332 1・2層	楕形鍛冶滓		50.22	24.63	1.29	0.22	0.01	0.08	27.65	0.01	鍛錬鍛冶滓	
TNKN-5		SK313-①	楕形鍛冶滓		47.72	13.41	1.05	0.36	0.01	0.09	33.75	<0.01	鍛錬鍛冶滓	
TNKN-6		SK320 埋土	楕形鍛冶滓		48.61	3.70	1.37	0.31	0.01	0.08	33.49	<0.01	鍛錬鍛冶滓	

W:Wustite (FeO)、M:Magnetite (FeO·Fe₂O₃)、H:Hercynite (FeO·Al₂O₃)、F:Fayalite (2FeO·SiO₂)、Or:Orthoclase (KAlSi₃O₈)、Is:Iscorite (5FeO·Fe₂O₃·SiO₂)

TNKN-1
 椀形鍛冶滓
 ①マクロ組織、写真側面～
 下面、被熱小礫・粘土付
 着、
 ②③滓部拡大、ウスタイト・マ
 ゲネタイト・ヘマタイト・ファヤライト・
 オルソクレス、微小金属鉄
 硬度:50gf

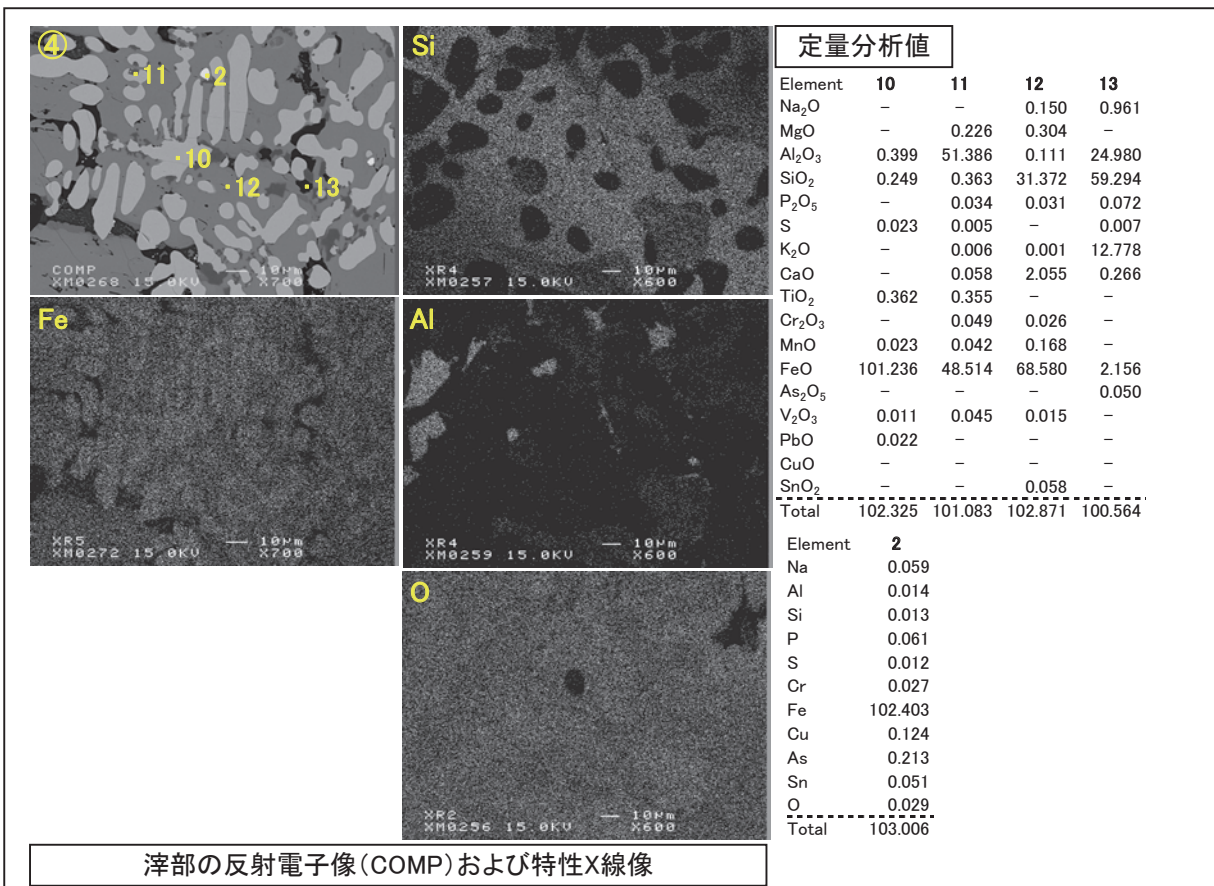
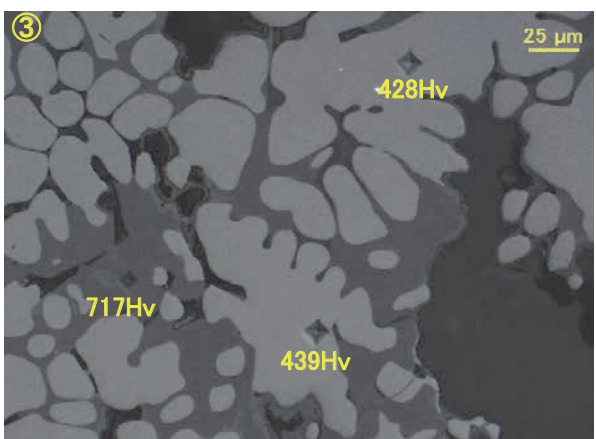
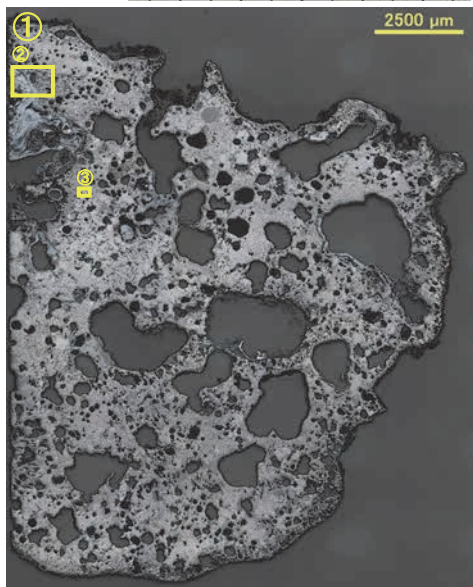
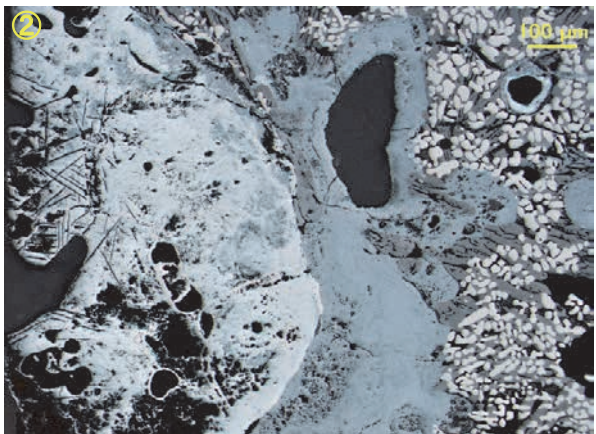


定量分析値					
Element	1	2	3	4	5
Na ₂ O	1.114	0.031	0.019	-	0.088
MgO	-	0.077	0.047	0.581	0.092
Al ₂ O ₃	25.655	26.862	27.082	0.071	0.264
SiO ₂	66.877	0.350	0.369	31.588	0.264
P ₂ O ₅	-	-	-	0.014	-
S	-	-	-	0.007	0.006
K ₂ O	7.693	-	0.011	0.008	0.006
CaO	0.005	-	-	0.472	-
TiO ₂	-	1.977	1.851	-	0.183
Cr ₂ O ₃	-	0.042	0.055	-	0.057
MnO	0.004	0.010	-	0.133	0.059
FeO	1.140	69.745	68.661	71.265	101.005
As ₂ O ₅	-	0.033	-	0.070	0.084
V ₂ O ₃	-	0.063	0.008	-	0.011
PbO	-	0.043	-	-	-
CuO	0.080	0.093	-	0.010	0.054
SnO ₂	-	0.098	0.008	0.005	-
Total	102.568	99.428	98.111	104.224	102.173

滓部の反射電子像 (COMP) および特性X線像

写28 椀形鍛冶滓の顕微鏡組織 (1)

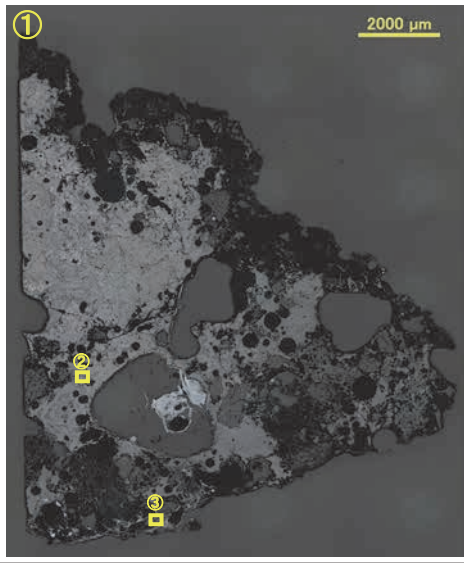
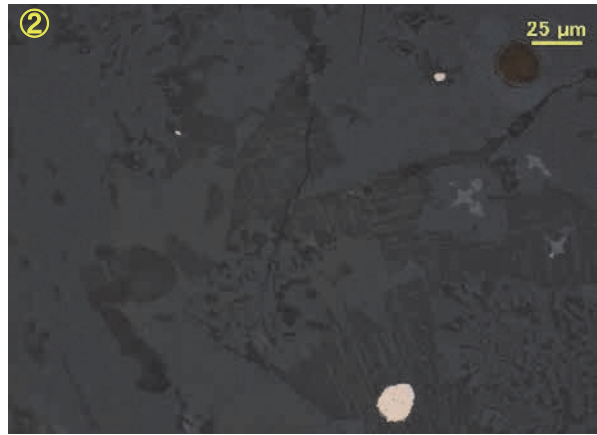
TNKN-2
 椀形鍛冶滓
 ①マクロ組織
 ②左側: 錆化鉄部、過共析組織、②右側③: 滓部、ウスタイト・ファヤライト、硬度: 50 gf



滓部の反射電子像 (COMP) および特性X線像

写29 椀形鍛冶滓の顕微鏡組織 (2)

TNKN-3
銅滓？
①マクロ組織
②③滓部拡大、微小マグ
ネタイト・ファヤライト
微小金属粒②：青銅粒、
③：金属鉄



Cu

Sn

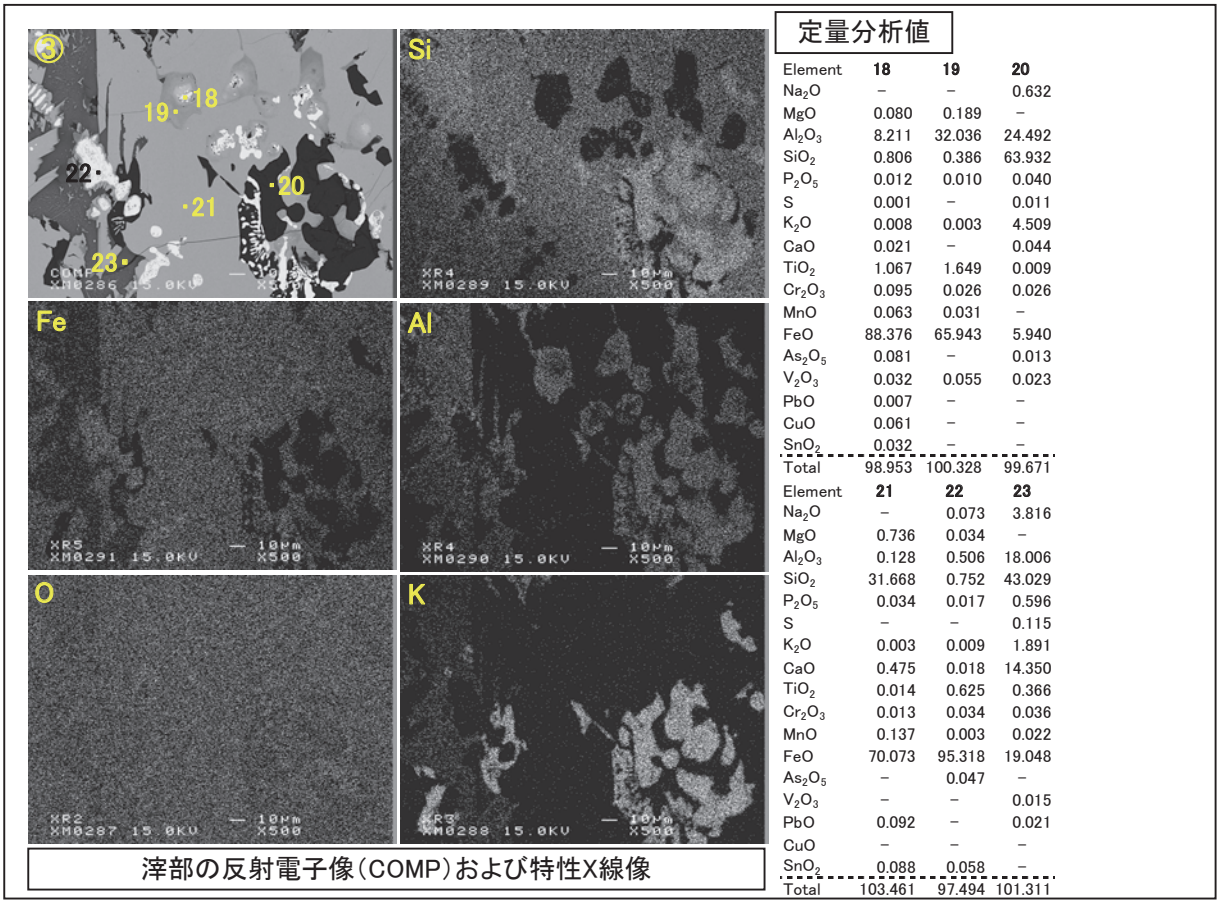
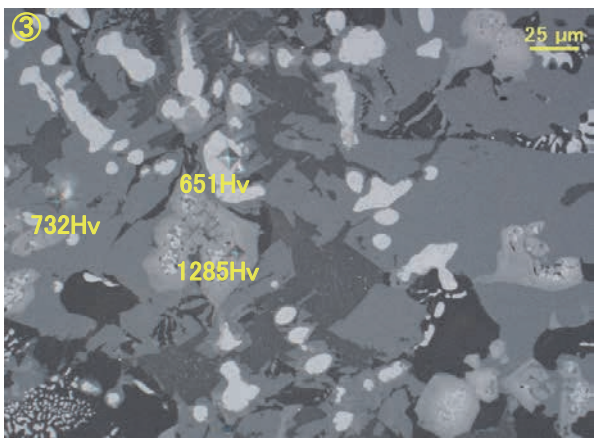
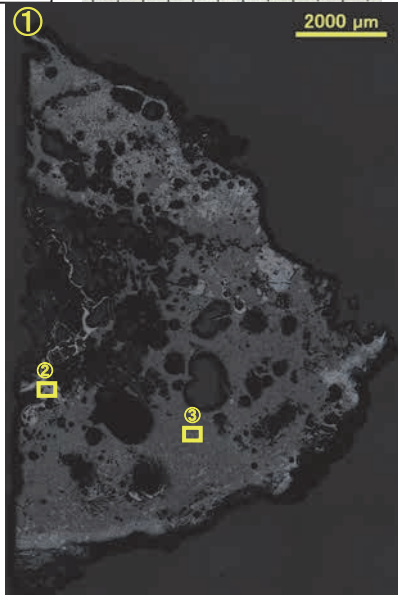
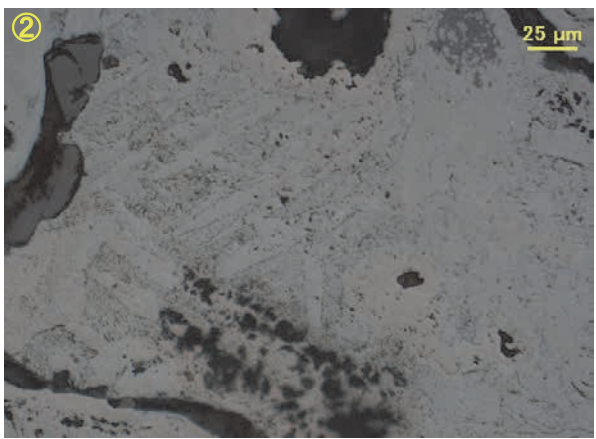
Fe

定量分析値							
Element	14	15	Element	3	4	5	6
Na ₂ O	-	0.006	Na	-	-	0.045	0.010
MgO	0.010	0.013	Mg	0.048	-	0.018	-
Al ₂ O ₃	1.186	0.109	Al	0.013	0.027	0.003	0.003
SiO ₂	0.442	30.756	Si	0.014	0.032	0.020	0.041
P ₂ O ₅	-	0.013	P	-	0.038	-	0.015
S	0.004	-	S	0.008	0.002	0.004	-
K ₂ O	0.032	0.013	K	-	-	-	0.068
CaO	-	1.378	Ca	0.069	0.076	-	-
TiO ₂	1.610	0.017	Ti	-	-	-	-
Cr ₂ O ₃	0.019	-	Cr	0.003	-	-	-
MnO	-	0.130	Mn	0.035	0.098	0.025	-
FeO	97.343	69.668	Fe	4.379	5.485	100.521	99.718
As ₂ O ₅	0.068	0.098	Sr	0.080	0.010	-	0.002
V ₂ O ₃	0.057	0.011	Zr	0.012	0.005	0.015	0.046
PbO	-	0.018	Cu	92.058	88.806	1.346	1.084
CuO	-	-	As	0.081	0.634	0.042	0.077
SnO ₂	-	0.063	Sn	6.862	6.458	-	-
Total	100.834	102.230	Pb	-	0.053	-	-
			O	-	-	0.056	0.066
			Total	103.662	101.724	102.095	101.130

滓部の反射電子像 (COMP) および特性X線像

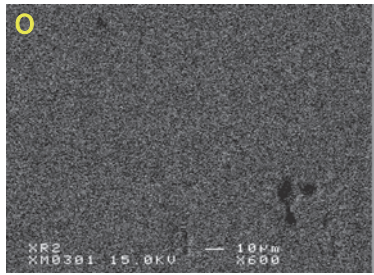
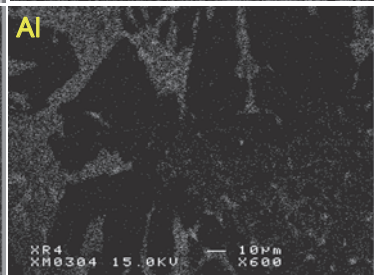
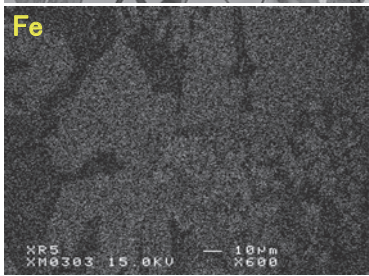
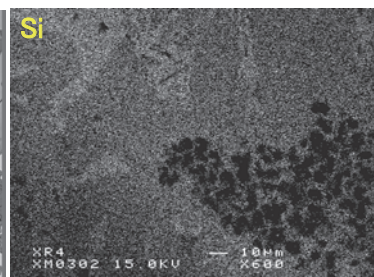
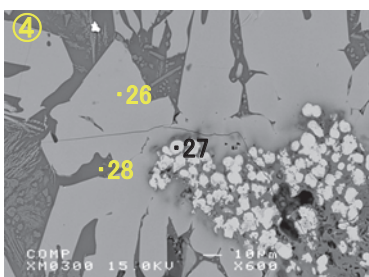
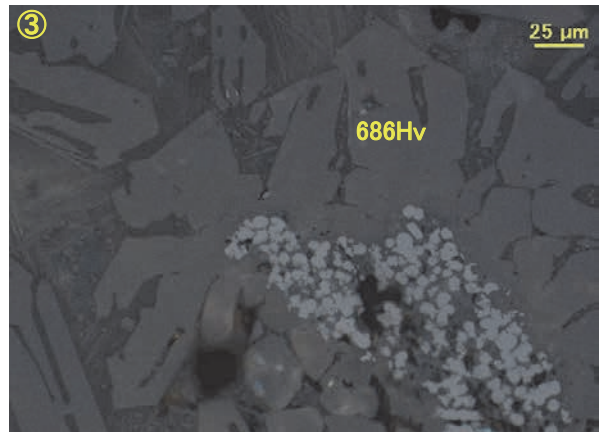
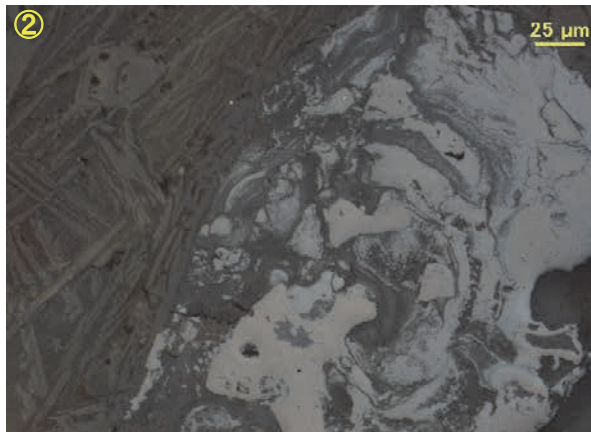
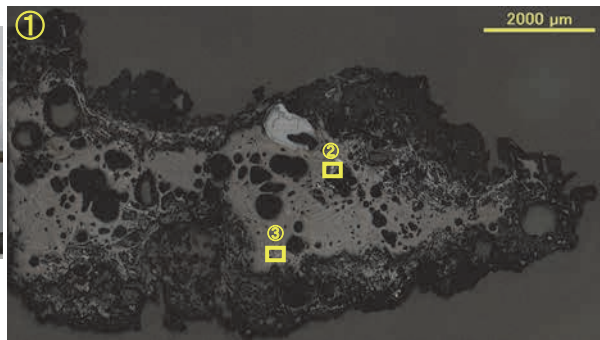
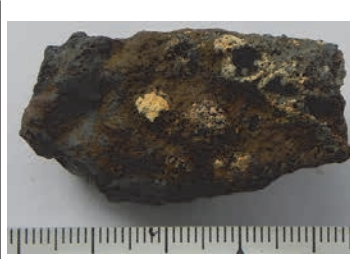
写30 銅滓？の顕微鏡組織 (3)

TNKN-4
 椀形鍛冶滓
 ①マクロ組織
 ②錆化鉄部拡大:亜共析組織痕跡
 ③滓部拡大、ウスタイト・マグネタイト・ヘルシナイト・オルソクレーズ・ファヤライト、硬度:50gf



写31 椀形鍛冶滓の顕微鏡組織 (4)

TNKN-5
 椀形鍛冶滓
 ①マクロ組織
 ②右側: 錆化鉄部(金属組織痕跡不明瞭)、左側: 滓部、ファイヤライト、③滓部: マグネタイト・ファイヤライト、硬度: 50gf

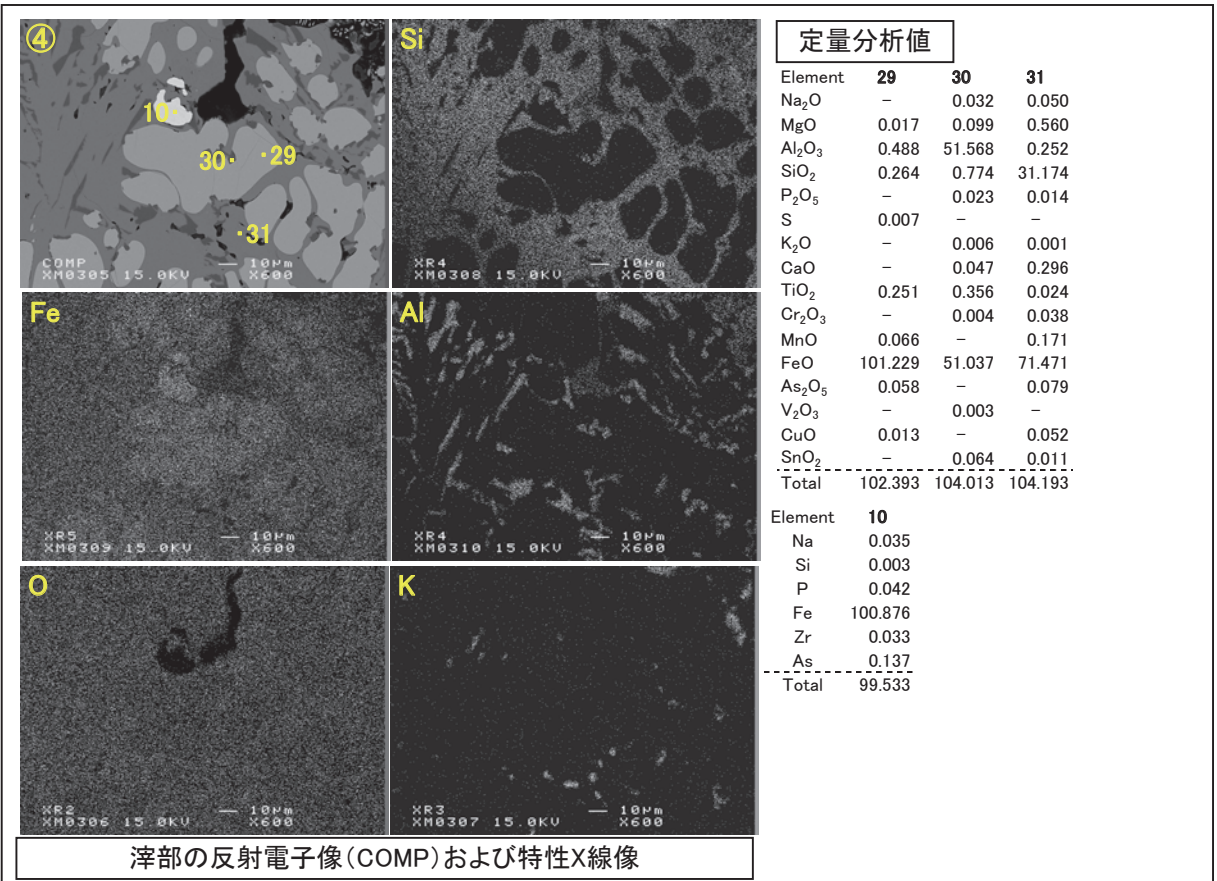
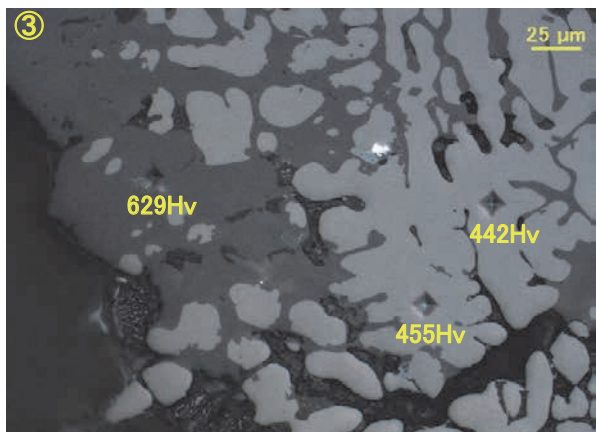
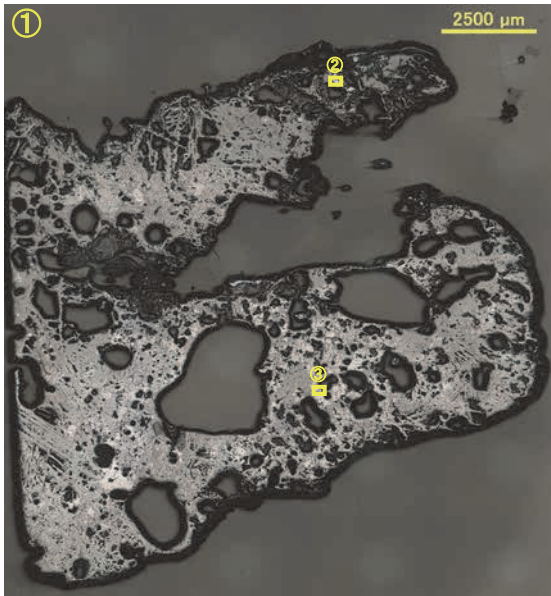
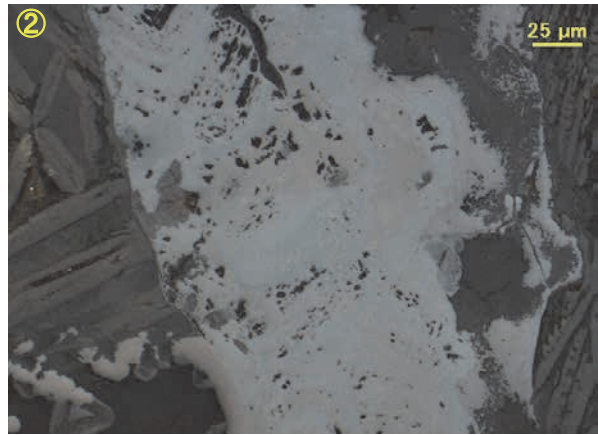
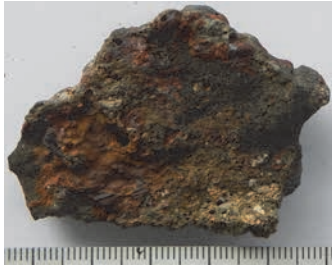


定量分析値			
Element	26	27	28
Na ₂ O	-	0.058	0.505
MgO	0.990	2.672	0.031
Al ₂ O ₃	0.138	0.785	18.063
SiO ₂	31.423	0.287	47.812
P ₂ O ₅	0.068	0.006	0.178
S	-	0.002	0.028
K ₂ O	-	-	3.743
CaO	0.053	-	2.861
TiO ₂	0.013	0.241	1.146
Cr ₂ O ₃	0.042	-	0.049
MnO	0.119	0.382	0.118
FeO	70.097	95.176	27.062
As ₂ O ₅	-	0.083	0.015
V ₂ O ₃	-	-	0.001
PbO	-	0.015	-
CuO	0.097	0.074	0.071
SnO ₂	-	-	-
Total	103.040	99.781	101.683

滓部の反射電子像 (COMP) および特性X線像

写32 椀形鍛冶滓の顕微鏡組織 (5)

TNKN-6
 梔形鍛冶滓
 ①マクロ組織
 ②中央: 錆化鉄部、金属組織痕跡不明瞭
 ③滓部: ウスタイト・ファヤライト、
 硬度: 50gf



写33 梔形鍛冶滓の顕微鏡組織(6)

第Ⅶ章 調査のまとめ

平成 21～24 年度の 4 年間にわたり行われた東海環状自動車道建設に伴う今回の発掘調査では、当初の予想を超える大きな成果が得られた。

遺構・遺物は縄文時代早期～中世までのものを確認したが、なかでも、縄文時代早期と飛鳥時代については、遺構数も多く、今後もこの地域の歴史を考える上で欠くことのできない貴重な資料となるものと思われる。

しかしながら、今回の調査と併行してさらに広範

囲を調査した新名神高速道路建設に伴う発掘調査（以下、新名神調査）が、平成 23～26 年度に行われており、中野山遺跡の評価については、この新名神調査の成果を合わせて検討することが不可欠である。そのため、今回は結論的なことは差し控え、成果の概要と今後の展望を示すにとどめ、遺跡の評価と総括については、現在、整理作業が進められている新名神調査の正式報告で合わせて行うこととした。

第 1 節 遺跡の変遷

以下、今回の調査成果に基づき、時代ごとの変遷を記す。

縄文時代（第 135・138 図） 今回の調査で確認できた最も古い遺構・遺物は縄文時代早期のものである。早期の遺構は、竪穴住居 1 棟・集石炉 11 基・煙道付炉穴 16 基・土坑 4 基を確認した。遺構のほとんどは南区で検出されており、北区では被熱した小土坑（S K 379）が 1 基あるのみである。各遺構の分布をみると、煙道付炉穴がやや集中するのに対し、集石炉は散在する傾向がみられる。また、これらの炉穴類の数に比して、竪穴住居は 1 棟（S H 370）と少ない。

早期以降では、中期と後期に土坑（中期 3 基・後期 4 基）と遺物の出土したピットが数基検出されているだけで、遺構数はかなり減少する。

遺物については、ほぼ全点を掲載したが、縄文時代の全期間を通じて出土数は少ない。特に土器は、遺構数の増える早期においても、ごく少量で、これは同じ早期の遺跡である鴻ノ木遺跡^①や野添大辻遺跡^②などと比較しても格段に少ない。竪穴住居の少なさと合わせて、生活臭の希薄さが感じられる。

石器は早期の炉穴類から礫器・磨石・石皿等が一定量出土しているものの、剥片石器はごく少量である。石器の組成については、新名神調査出土のものと一緒に合わせてさらに詳細な検討が必要である。

弥生時代（第 136 図） 前期の遺構・遺物は確認できなかった。中期は南区で土坑が 2 基あるほかは、北区と南区で遺物の出土したピットが数基確認できる程度である。

後期は北区で竪穴住居 4 棟と土坑 2 基、南区で土坑 1 基を確認した。後期の遺構から出土した土器は、中期末まで遡る可能性のあるものも混じるが、大半は後期初頭～前半におさまるものである。

古墳時代（第 136 図） 前期・中期の遺構・遺物は確認できなかったが、後期の竪穴住居 2 棟と土坑 4 基を確認した。出土した須恵器は田辺編年^③の M T 15～T K 43 におさまるものである。遺構のほとんどは北区で検出されており、南区では土坑が 1 基検出されているのみである。

当該期の注目できる遺構として、焼失住居（S H 624）がある。垂木等の炭化材が放射状に遺存しており、上部構造の一端が窺えた。また、この住居からは土師器や須恵器がある程度まとまって出土しており、土師器甕には、球形で丸底のもの（195）、平底でやや長胴化したもの（199）、台付のもの（201）などがみられ、同じく北区で検出された S K 397 出土の平底の長胴甕（226）と合わせて、北勢地域の煮炊具の変遷を知る上で貴重な資料といえる。さらに、同住居からは赤彩の施された須恵器杯蓋（209）も出土しており、この住居や集落の性格を考える上で重要な遺物である。なお、同様の赤彩のある須恵器杯身・杯蓋は、平成 25 年度の新名神調査（第 12 次調査）でも出土しており、関連性が窺える^④。

飛鳥時代（第 137・139 図） 竪穴住居 28 棟・掘立柱建物 44 棟・土坑 59 基を確認した。中野山遺跡において遺構・遺物ともに最も多くなる時期である。出土した須恵器は田辺編年の T K 209～217 におさ

まる。

遺構の分布をみると、北区では、中央部から東側にかけて、竪穴住居と掘立柱建物が2～3箇所にとまって建てられている様子が窺える。西側には建物はなく、土坑が6基検出されている。これらの土坑については墓坑等が想定されるが、土師器の細片が数点出土しているのみで、性格についてははっきりしない。

南区は、北区より遺構が多く、北区ではみられない径3m以上の比較的大型で平底の土坑（以下、大型土坑）が多く検出されている。

南区中央部東側には、遺構の少ない「空白地帯」があり、そこを境に遺構の集中する地区が二分され

第2節 縄文時代早期の集石炉について

本書では被熱した多量の礫（以下、被熱礫）を伴う土坑を「集石炉」の名称で報告している。縄文時代の遺構で、このような多量の被熱礫を伴う遺構は、「集石炉」の名称以外に、「集石土坑」・「焼石遺構」・「焼礫集積遺構」など研究者によって様々に呼称されている^⑤。近年は、掘り込み（土坑）の有無にかかわらず、「集石遺構」の名称で論じられることが多いようであるが^⑥、今回の中野山遺跡の調査例では、土坑内で燃焼が行われていることが窺えるものが多いことから、火処であることを重視して「集石炉」の名称を用いた。集石炉は11基を検出した。

所属時期 土器の出土はなかったが、放射性炭素年代測定の結果は、¹⁴C年代が9435 ± 30 ~ 9280 ± 30 ¹⁴C BP、2σ暦年代範囲が8792 ~ 8351 cal BCであり、縄文時代早期の所産と見做せるものであった（第VI章参照）。

規模・構造 調査区内で検出されたものは、径1m前後、深さ30cm前後のものが多く（遺構一覧表参照）、平面形は円形～楕円形を呈するものが多い。

基本的な構造（土層）は上から順に、以下の3層構造となっている。

- 1：被熱礫層
- 2：灰炭層
- 3：底石（無いものもある）

被熱礫の量（重量）は概ね土坑の規模が大きくなると多くなるが、必ずしも完全に比例するものでは

ており、集落の構造や変遷の一端が窺える。

遺物では、鞆羽口、金床石、砥石、鍛冶滓等、鍛冶関連の遺物が一定数出土していることが注目できる。

中世 飛鳥時代以降は、遺構・遺物ともにほとんど確認できなくなり、南区で中世の火葬穴とみられる被熱痕のある土坑が2基検出されている程度となる。

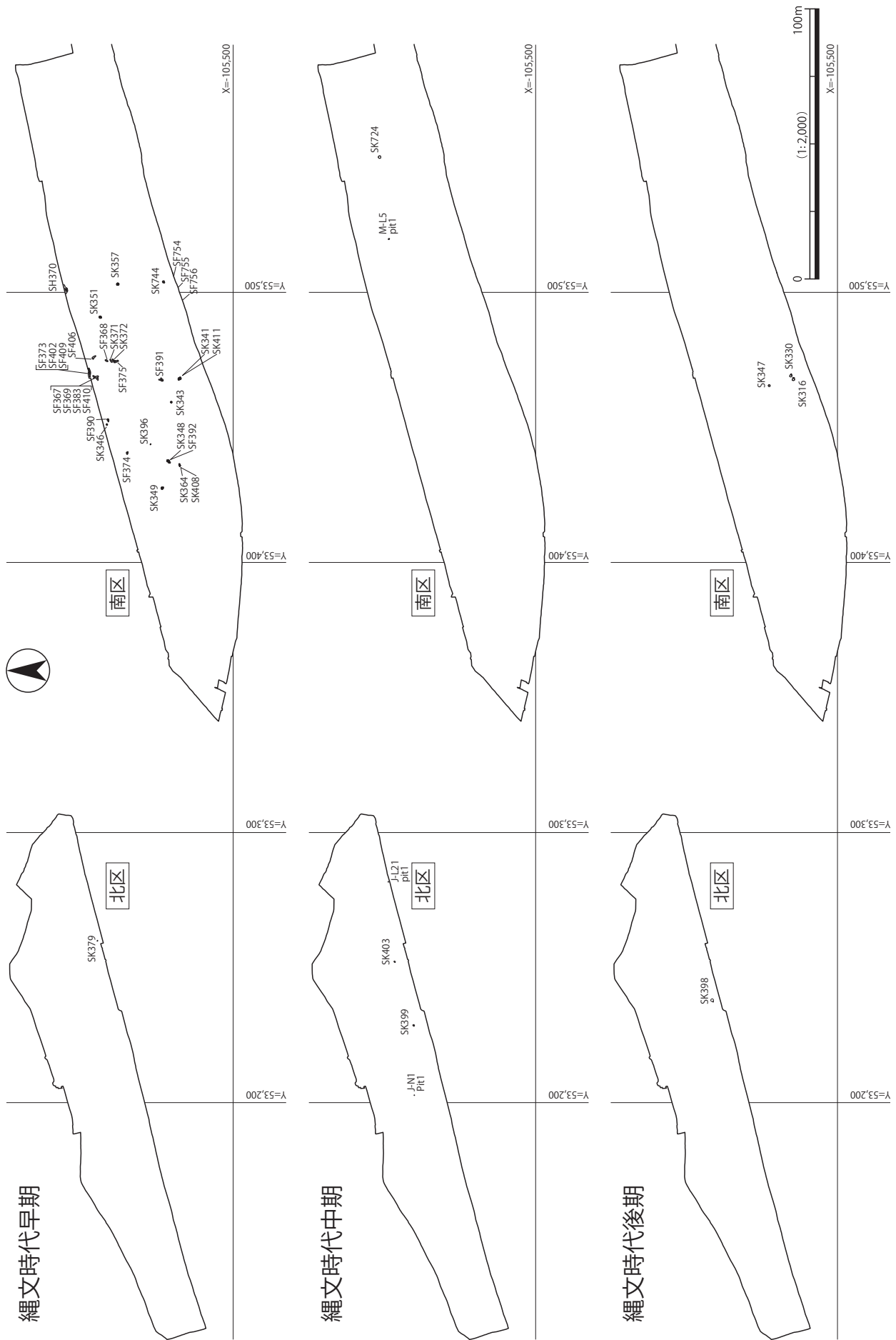
北区では少量の炭化物と地山の土をブロック状に含む層が表土直下に広くみられたことから（第三章参照）、樹木が繁茂した時期があり、その後、時期は不明であるが、それらが伐採・焼却され、開墾や耕作が行われた時期があったものと思われる。

なかった^⑦。被熱礫と灰炭は混じりあっており、完全に分離しているわけではないが、下方ほど灰炭が多くなる傾向がみられ、S K 343のように比較的是っきりと分れているものがあった（写161）。逆に灰炭層が被熱礫より上に、層状に覆い被さる例はみられなかった。

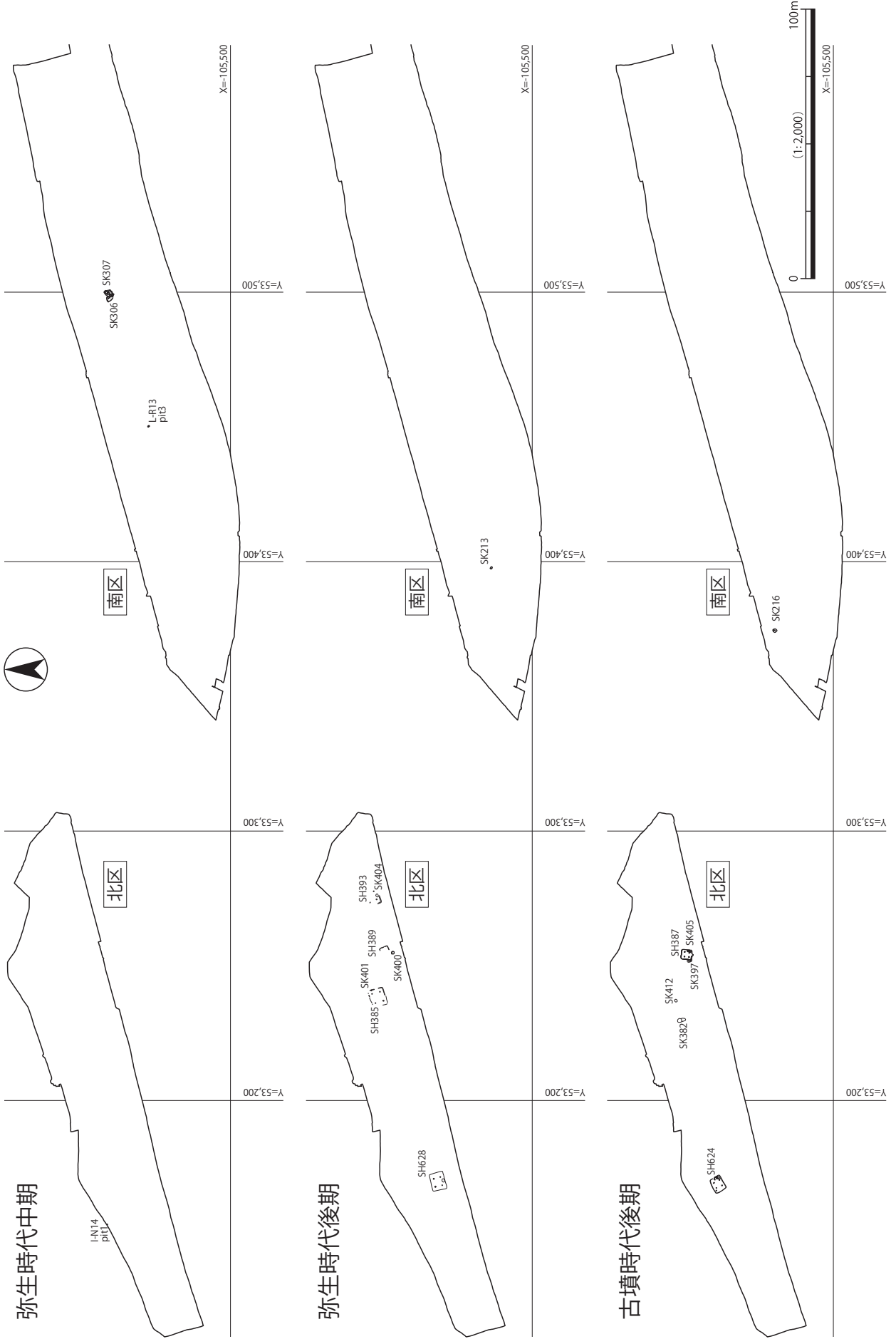
灰炭層は炭化物粒（肉眼で観察する限り木炭）が多量に含まれているため、黒～黒褐色を呈するものが多かった。S K 343からは、長さ15～20cm、太さ5cm程度の炭化したクリ材が3本、底石の上に並んだ状態で出土した（第32図）。燃焼材（木枝等）は火付きをよくするため、並べたり組み合わせるなどの工夫がなされていた可能性が窺える。

底石は11基中7基に存在した。底石は基本的に被熱礫よりも大きい石が使用されており、少ないもので3個、多いもので20個程度が使用されていた。概ね土坑底面の中央部に配置されており、底面全体や壁面にまで貼り付けるような例はみられなかった。

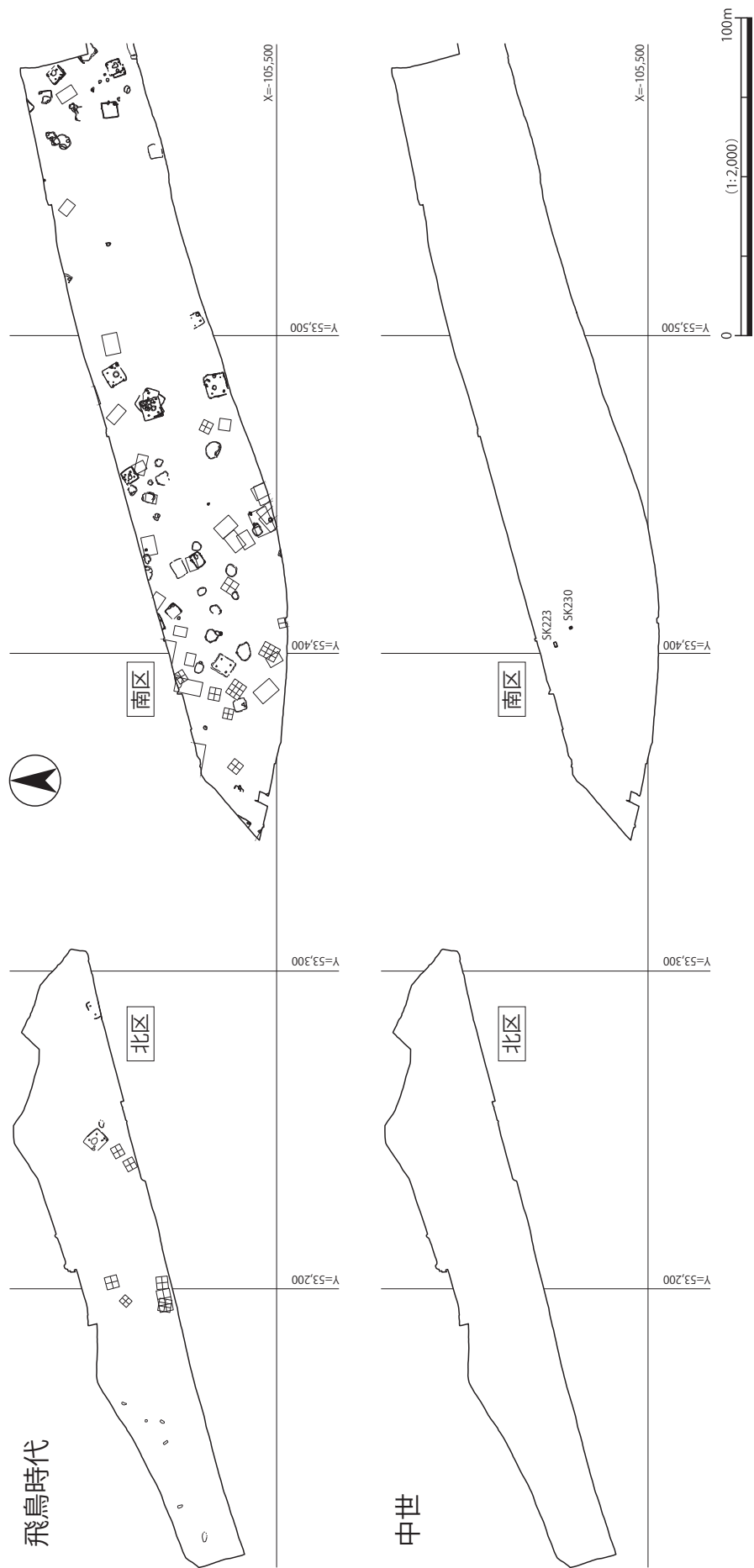
焼礫施設の有無 調査当初は集石炉の壁面に被熱痕（焼土・赤変等）の認められる例が少なかったことから、他所で火を焚いて礫等を加熱し、それらを土坑に移動させて使用している可能性（焼礫施設の存在）も考えられたが、S K 346のように焼土が顕著に認められる例があること（第33図）、底石の多くが上面のみ顕著に赤変していること、底石が被熱し原形を保った状態で割れて出土している例がある



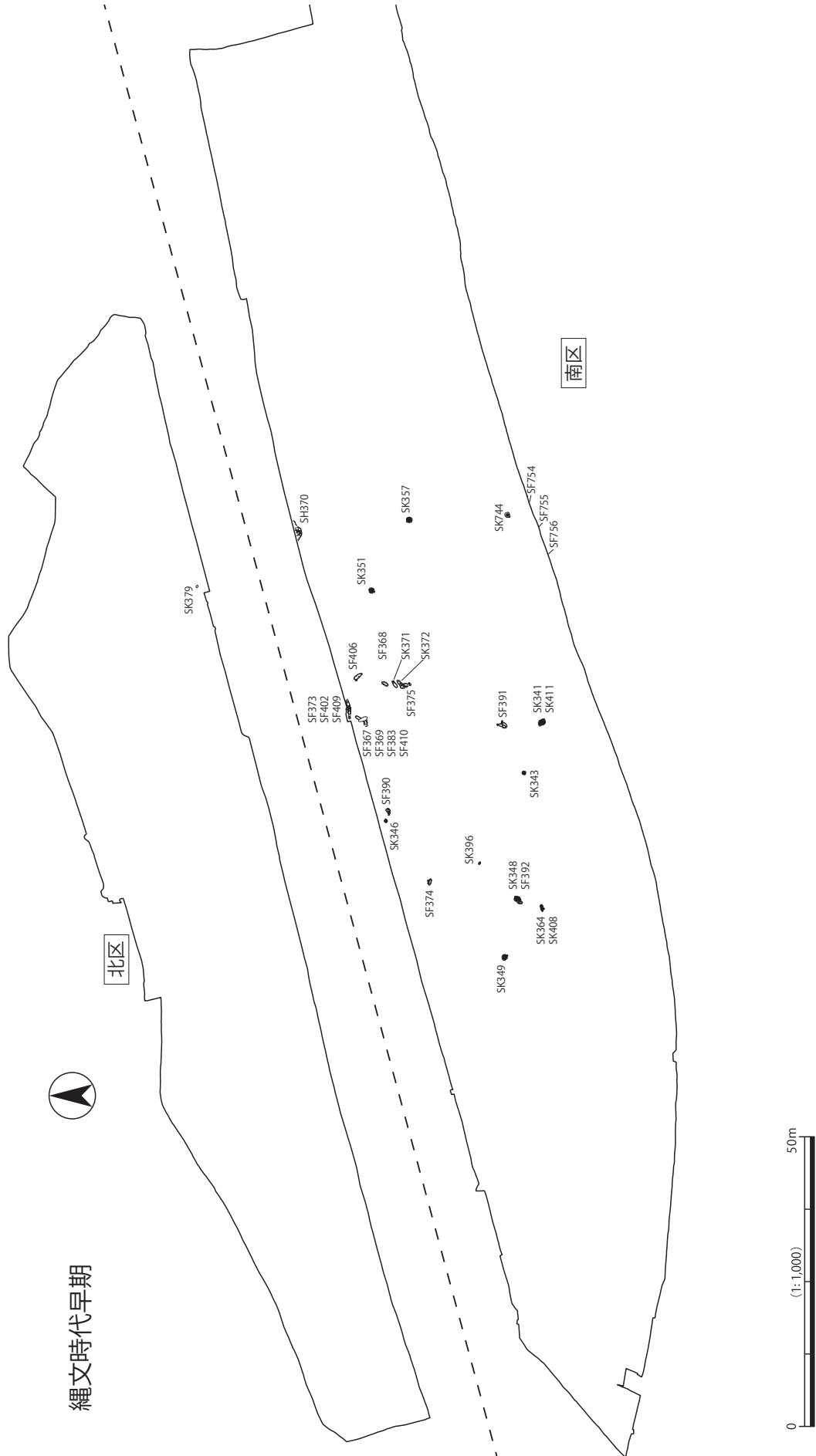
第135図 中野山遺跡の変遷① (1 : 2,000)



第136図 中野山遺跡の変遷② (1 : 2,000)



第137図 中野山遺跡の変遷③ (1 : 2,000)



縄文時代早期

第138図 縄文時代早期遺構図 (1 : 1,000)

こと（写 169）などから、底石を並べた状態で、土坑内で燃焼が行われているものが多いことが分かった。このような状況から、底石のみを土坑内で加熱し、被熱礫は別の場所で加熱して移動させるというようなことは今回の中野山遺跡例については想定しにくい。

なお、土坑内で燃焼が行われていることが確実にある集石炉であっても、土坑の壁面から被熱痕（焼土・赤変等）が検出・確認できない例が多くみられた^⑧。

集石炉の用途 掘り込み（土坑）の有無にかかわらず、「集石遺構」は、世界の民族（民俗）例や遺構の形態的特徴から、石蒸焼き料理の調理施設であるという見解で概ね一致しているという^⑨。なかでも、中野山遺跡の集石炉のように、掘り込みを伴うものは、ある程度の高温を長時間保つ必要のある食材（植物質であればタロイモや球根等の根茎類、動物質であれば脂質の多い動物や部位）を調理する際に使用される例が多いという^⑩。中野山遺跡においては、あくまでも想像の域を出ないが、植物質では、ヤマノイモ・クズ・ワラビ根・ユリ根など、動物質であれば、イノシシなどが対象となりそうだが、今回行った残存デンプン粒分析では、S K 343 の底石からヒガンバナ科のキツネノカミソリ、S K 411 の被熱礫からトチノキのデンプン形態に似たデンプンをもつ不明植物、S K 744 の被熱礫からユリ属またはウバユリ属のデンプン粒が検出されている（第 VII 章参照）。これらは集石炉内で調理された食物由来のデンプン粒とは言い切れないが、当時の植生や植物利用に関する貴重な手がかりといえるだろう。

土壌被覆の有無 前述のように、世界の民族（民俗）例では、中野山遺跡の集石炉のように掘り込みのある形態のものは、長時間の保温と同時に蒸す効果が意図されており、それらの効果を高めるために炉を土壌で被覆する例が典型的にみられるという^⑪。今回の調査では、土壌による被覆を直接示す痕跡は検出できなかったが、灰炭層に含まれる炭化物の割合が非常に高いことや、S K 343 や S K 411 から原形を保ったクリ材の木炭が出土していることなどから、燃焼材が燃え尽きて灰化する前に酸素の供給が遮断されている様子が窺える。このような状況

から、中野山遺跡例においては土壌による被覆が行われていた可能性は高いと考えられる。

底石の機能 底石は被熱礫より格段に大きい石が選ばれていることから、輻射熱や遠赤外線効果を調理に利用するだけでなく、蓄熱による保温効果が、より期待されているものと思われる。しかし、今回の調査例では、底石は土坑底面の中央に集めて配置されており、底面全体や壁面にまで貼り付ける例はみられなかった。保温効果を追求する点ではやや効果の劣る仕様といえる。しかし、底石を中央に集めて配置することで、土坑の壁面との間に隙間ができることや、燃焼材を土坑の底面より高い位置に浮かせて敷設できるなど、空気の通りを良くし、火付きや火まわりを良くする効果が生じるように思える。中野山遺跡例の底石は、保温効果と同時に「燃焼台」としての効果を意図していた可能性も窺えるものといえる。

再利用 集石炉は直火を利用する調理法と比較して、資材搬入の労力など、手間のかかる調理法であることから、省力化のための再利用は当然考えられることだが、今回の調査では、重複して検出された S K 341 と S K 411 にその一端が窺えた^⑫。S K 411 は、先につくられた S K 341 の土坑をそのまま利用するのではなく若干深めに掘り直されていた。

また、どちらの集石炉からも底石がみつからなかったが、S K 411 の被熱礫の中に、被熱によって破砕した石皿（36・37・38）が含まれていた。石皿は接合できた部分から元の大きさを推定すると、被熱礫として使うには大きすぎ、底石として使用するに相応しいサイズであった。先につくられた S K 341 で底石として使用された石皿が、S K 411 を掘り直す際に、破砕していたなどの理由で取り出され、他の被熱礫と一緒に再利用された可能性も考えられる。

後片付け 集石炉で調理された食物を取り出す際、食物を覆っていた被熱礫は外に掻き出されることが想定される。それらは、土坑内に戻さずにそのままにしておいた方が、後日利用する際に改めて取り出す手間が省けて良いように思われるが、今回の調査では、食物を取り出したあとに土砂が流れ込んで埋没している様子はみられず、被熱礫が検出面まで充満している例が多くみられた。集石炉の使用後は、

被熱礫はそのつど、土坑内に片付けられている状況が窺える¹³。

今後の課題 今回の調査では、集石炉から磨石や石皿が多く出土したが、これらと集石炉との関係についてはほとんど検討できていない。また、中野山遺跡の集石炉と他の遺跡の集石炉（集石遺構）との比

較や、前節にも書いたが、集石炉が煙道付炉穴に比べて散在することや、活動拠点内（集落内）での位置づけについても検討できなかった。

これらについては、新名神調査の成果と合わせて検討することが不可欠である。

第3節 飛鳥時代の遺構と遺物について

1 竪穴住居について

当該期の竪穴住居は28棟を検出した。これらのほとんどが重複することなく建てられているなかで、5棟以上が重複するS H 310群が目を引く。周囲の状況からは、重複が単にスペース上の問題とは考えられないのだが、この位置に繰り返し竪穴住居が建てられた理由については、今回の調査では明確にできなかった。ただし、重複するS H 310・352・354とその隣のS H 304は、建物の規模、竈・貯蔵穴の配置が同じであり、なんらかの規格（プラン）が存在したものと考えられる。新名神調査でもこれと同じ規格の竪穴住居が存在していないか、出土遺物や他の遺跡例とも合わせて検討することで建物の性格や位置付けがより明確にできるものと思われる。

また、竪穴住居には、平面形がほぼ正方形（S H 304・329など）と長方形（S H 317・704など）の2種類がみられ、いずれも中央付近に土坑（以下、中央土坑）を伴うものがみられた。この中央土坑と類似する遺構として、小谷赤坂遺跡¹⁴の「貼床下土坑」や木造赤坂遺跡¹⁵c地区の住居内「小土坑」等、同様の遺構の報告例は多いが、その機能等については明らかにされていない。この点についても新名神調査の成果が期待される。

なお、今後も当該期の竪穴住居については、この中央土坑の存在と機能等について意識的な調査が求められるものである。

2 掘立柱建物について

掘立柱建物は竪穴住居より集中する傾向が窺え、建て替えとみられる重複も多い¹⁶。南区西側では、建物の方向を揃える一群（第139図中の網掛け）があり、S B 226を中心にL字形に囲むようにもみえる。調査区内ではこのような配置をとる建物群はほかになく、集落内の有力者の居宅やそれを含めた公

的性格を持つ施設が想定できる。ただし、墨書土器や階層の優位性を示す遺物等は今回の調査では出土していない。新名神調査ではこの建物群の北側が調査されており、その成果を合わせて検討することで、この建物群の性格や集落内での位置付けがより明確にできるものと思われる。

また、調査区内で検出された掘立柱建物を個別にみていくと、桁行が等間ではなく、両端1間が狭いものがあり、柱通りも、両端の柱穴よりその間の柱穴が外側にやや張り出す例がみられた。典型的な例はS B 333であるが（第139図上）、他にもこの両方または片方の特徴をもつ掘立柱建物が多くみられた。このような特徴的な掘立柱建物についても、新名神調査だけでなく他の遺跡の類例とも合わせて検討することで、建物の構造や他の遺跡との関連性などが明らかにできる可能性がある。

3 大型土坑について

S K 212・332など、径3m以上の比較的大型の土坑が多く検出された。これらは平面形が歪な円形または楕円形を呈し、底面は竪穴住居のように平坦につくられている。しかし、土坑壁面の立ち上がりは竪穴住居よりも緩やかである。土坑の周囲や壁際に不規則にピットが検出されているものも多くみられた。この遺構の性格については今のところ不明であるが、調査区内では、竪穴住居や側柱建物に比べて、倉庫と考えられる正方形の総柱建物が少なく、また、正方形（2間×2間）の総柱建物の割合の高い北区では、この大型土坑が検出されていないこと等を考えると、例えば、簡易な屋根が付けられた穴倉（あるいは竪穴倉庫）とでも呼称できるような、倉庫の機能をもつ施設である可能性も想定できる。この点についても新名神調査の成果と合わせて検討することでより明確にできるものと思われる。

4 鍛冶関連遺物について

竪穴住居や大型土坑から、鞆羽口・金床石・砥石・鍛冶滓・鉄器片等、鍛冶関連遺物が一定数出土したが、調査区内で鍛冶が行われていたことを直接示す鍛冶炉等の遺構はみつかっていない。中野山遺跡近隣の西山遺跡^⑰では、昭和45・46年に工場建設に伴う発掘調査が行われており、その際に、飛鳥・奈良時代の鍛冶遺構が多数検出されている。その報告書には、出土した鍛冶滓の正確な量は記録されていないが、「鍛冶を専業とした村落といえるほど」の「多量の鉄滓」が出土したとの記述があり、その表現に比べると今回の調査で出土した鍛冶滓の量は合計で783.7gであり、あまりにも少ない印象を受ける。

さらに、S H 329 から出土した鍛冶滓（285【試料TNKN-3】）は自然科学分析の結果、金属鉄粒だけでなく青銅粒も含まれていることが判明した。鍛冶遺構の存在だけでなく、青銅小物の製作についても念頭に、新名神調査の成果を検討する必要がある。

【註】

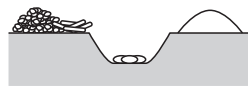
- ①三重県埋蔵文化財センター『鴻ノ木遺跡（下層編）』1998。
- ②三重県埋蔵文化財センター『野添大辻遺跡（第1次）発掘調査報告』2014。
- ③田辺昭三『須恵器大成』角川書店1980。以下同じ。
- ④『近畿自動車道名古屋神戸線（四日市JCT～亀山西JCT）埋蔵文化財発掘調査概報Ⅳ』2014。出土した須恵器は「TK 209 型式併行期」と報告されており、時期がやや下る点に注意が必要である。

- ⑤小葉一夫「遺構研究 集石遺構」『縄文時代』第10号縄文時代文化研究会1999による。
- ⑥小葉一夫「遺構研究 集石遺構」『縄文時代』第10号縄文時代文化研究会1999、矢木澤一郎「集石遺構とその機能」『縄文時代の考古学5-なりわい-』同成社2007など。
- ⑦後世の開墾や耕作による削平が一様でないこともあり、単純な比較は難しい。
- ⑧焼土や赤変が検出・確認できなくとも、直ちに燃焼がなかったと言いきれない点は、今後も注意が必要である。
- ⑨野嶋洋子「集石の民族誌」・矢木澤一郎「集石遺構とその機能」『縄文時代の考古学5-なりわい-』同成社2007による。
- ⑩野嶋洋子「集石の民族誌」『縄文時代の考古学5-なりわい-』同成社2007による。
- ⑪野嶋洋子「集石の民族誌」・矢木澤一郎「集石遺構とその機能」『縄文時代の考古学5-なりわい-』同成社2007。
- ⑫他にも複数回使用されている集石炉は存在すると思われるが、たんに礫と土坑を再利用しただけでは、切り合いができないため、切り合いを探すだけでは再利用の事実を確認することは難しい。被熱礫の破碎状況等を詳細に検討すれば、ある程度の推定は可能と思われるが、今後の課題である。
- ⑬この理由としては、土砂等の流入を防ぐことなどがあると思われる。あるいは、まじないなど祭祀的な意味合いも付加されるのかも知れないが、今のところそれを示す痕跡はない。
- ⑭三重県埋蔵文化財センター『天花寺丘陵内遺跡群発掘調査報告』1996。
- ⑮三重県埋蔵文化財センター『木造赤坂遺跡・池新田遺跡・井手ノ上遺跡発掘調査報告』2012。
- ⑯掘立柱建物は竪穴住居よりも柱が風雨にさらされるため、耐用年数が短くなり、建て替えが増える可能性も考えられる。
- ⑰東員町教育委員会『西山遺跡・新野遺跡』1976。

- ①資材搬入（礫・底石・燃焼材）
- ②土坑掘削



- ③底石配置



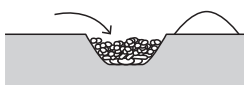
- ④燃焼材敷設



- ⑤着火

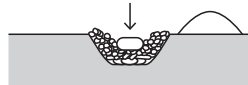


- ⑥礫投入・加熱



※燻になった頃か？

- ⑦食材投入



- ⑧被熱礫・土壌で覆う
- ⑨蒸す



※この間に灰炭層が形成される

- ⑩土壌・被熱礫を除去
- ⑪食物を取り出す（食べる）



※最後に被熱礫を土坑内に戻している可能性がある。
集石炉を再利用する場合は、被熱礫と灰炭を取り出し、④へ。
土坑を若干掘り直す例もある。

第140図 集石炉使用過程

第17表 遺構一覧(1/8)

遺構番号	主なグリッド	種別	時代	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	主な遺物	切合い(旧→新)	備考
SH201	K-V13 K-W12・13	竪穴住居	飛鳥	5.1	5.0	0.2	土師器甕、須恵器蓋杯・甕		貯蔵穴・竈あり
SB202	K-V16・17 K-W16・17	掘立柱建物	飛鳥	3.6	3.6	-	土師器細片、鉄滓		
SK203	K-Y14	土坑	飛鳥	0.2	0.2	0.2	土師器小片		
SB204	K-X11・12	掘立柱建物	飛鳥	8.4≦	3.0≦	-	なし	(SB204→SK207)	9次調査:SB1326
SB205	K-X22・23 K-Y22・23・24 R-A22・23	掘立柱建物	飛鳥	6.6	4.8	-	なし		
SB206	K-X25,L-X1 K-Y25,L-Y1 R-A25,S-A1	掘立柱建物	飛鳥	5.4	4.5	-	土師器細片	SB206→SB215	
SK207	K-X11・12	土坑	飛鳥	1.0≦	1.0	0.65	土師器甕	(SB204→SK207)	
SH208	K-T24・25 K-U24・25 K-V24・25	竪穴住居	飛鳥	6.2	5.5	0.32	土師器甕、須恵器蓋杯・壺・短頸壺・甕・ハソウ、砥石	SK213→SH208	
SK209	L-T1・2 L-U1・2	土坑	飛鳥	4.0	4.0	0.2	土師器甕、須恵器蓋杯、板状鉄製品、スサ入り焼土塊	SK209→SK225	調査時:SH209
SK210	L-T4 L-U3・4	土坑	飛鳥	3.6	2.8	0.3	土師器甕・把手、須恵器蓋杯・高杯・甕・提瓶		調査時:SH210
SH211	K-V21・22 K-W21・22	竪穴住居	飛鳥	4.1	4.0	0.24	須恵器蓋杯	SH211→SB214	
SK212	K-V25,L-V1 K-W25,L-W1	土坑	飛鳥	5.9	4.2	0.2	土師器甕・把手、須恵器高杯		調査時:SH212
SK213	K-V25	土坑	弥生後期	1.0	0.7	0.05	弥生土器壺・蓋	SK213→SH208	
SB214	K-V22・23 K-W22・23	掘立柱建物	飛鳥	5.4	4.5	-	なし	SH211→SB214	
SB215	K-Y24・25 R-A25,S-A1	掘立柱建物	飛鳥	4.5	3.3	-	土師器細片	SB206→SB215	
SK216	K-T19	土坑	古墳後期	1.6	1.4	0.68	土師器細片、須恵器杯身		
SB217	K-U20・21 K-V20・21	掘立柱建物	飛鳥	3.3	3.0	-	土師器細片、須恵器杯蓋		
SK218	K-T19・20	土坑	飛鳥	1.2	1.1	0.1	土師器甕		
SB219	K-T22・23 K-U22・23	掘立柱建物	飛鳥	3.9	3.6	-	須恵器杯蓋		
SB220	K-R22・23・24 K-S22・23 K-T22・23	掘立柱建物	飛鳥	8.4	4.5	-	土師器甕、須恵器杯蓋	SK221→SB220	5次調査:SB1196
SK221	K-R23・24	土坑	飛鳥	5.6	4.0	0.25	土師器甕	SK221→SB220 SK221→SB232	5次調査:SK1161
SK222	K-S24・25 K-T24・25	土坑	飛鳥	3.2	2.3	0.16	土師器甕、須恵器高杯		調査時:SH222
SK223	L-R1	土坑	中世	1.6	0.8	0.12	土師器細片		火葬穴?
SB224	K-P25,K-Q25 L-P1・2 L-Q1・2,L-R1	掘立柱建物	飛鳥	7.8	5.7	-	なし		5次調査:SB1189
SK225	L-U2	土坑	飛鳥	1.2	1.2	0.25	土師器高杯・甕	SK209→SK225	
SB226	K-R25,L-R1 K-S24・25,L-S1	掘立柱建物	飛鳥	3.9	3.0	-	なし		
SH227	L-P2・3・4 L-Q2・3	竪穴住居	飛鳥	5.4	北 5.6 南 5.2	0.16	土師器甕		5次調査:SH1164
SK228	L-R3	土坑	飛鳥	0.9	0.9	0.1	土師器甕		
SK229	L-S1	土坑	不明	1.5	0.9	0.2	なし		

第17表 遺構一覧 (2/8)

遺構番号	主なグリッド	種別	時代	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	主な遺物	切合い(旧→新)	備考
SK230	L-S2・3 L-T2・3	土坑	中世	0.9	0.7	0.12	なし		
SB231	L-Q2 L-R2・3 L-S3	掘立柱建物	飛鳥	4.05	3.0	-	土師器甕、須恵器高杯・杯蓋・甕・壺		
SB232	K-Q24 L-R23・24 L-S23・24	掘立柱建物	飛鳥	3.6	3.0	-	なし	SK221→SB232	
SB301	M-H10・11 M-I10・11 M-J10・11	掘立柱建物	飛鳥	4.5	3.3	-	土師器細片		
SK302	M-I5	土坑	飛鳥	3.8≦	1.8≦	0.8	土師器甕		
SH303	L-T21・22 L-U21	竪穴住居	飛鳥	7.0	6.8	0.08	なし		SH734に統合
SH304	L-L21・22・23 L-M21・22・23 L-N22・23	竪穴住居	飛鳥	6.0	6.0	0.04	土師器甕、須恵器蓋杯・壺 磨石		中央土坑・竈あり
SB305	L-L24・25 L-M24・25 M-M1・L1	掘立柱建物	飛鳥	6.6	4.8	-	土師器細片		
SK306	L-N25,L-O25	土坑	弥生 中期	2.6	1.9	0.18	弥生土器甕 敲石	SK306→SK307	
SK307	L-N25,M-N1 L-O25,M-O1	土坑	弥生 中期	3.7	2.4	0.47	弥生土器甕	SK306→SK307	
SB308	L-K21・22 L-L20・21	掘立柱建物	飛鳥	6.0	5.1	-	土師器細片		調査時:SA308 11次調査:SB1576
SB309	L-L19 L-M18・19・20 L-N19・20	掘立柱建物	飛鳥	5.7	3.3	-	土師器細片		
SH310	L-O19・20 L-P19・20・21 L-Q19・20	竪穴住居	飛鳥	6.2	6.1	0.12	土師器甕、須恵器高杯・蓋杯、 輪羽口、鉄釘、鉄滓、砥石、楔 形石器(混入)	SH354→SH352→SH310 SH355→SH353→SH310	
SH311	L-Q3・4 L-R3・4	竪穴住居	飛鳥	4.1	4.0	0.02	土師器細片		
SK312	L-V5 L-W5	土坑	飛鳥	2.6	1.9	0.3	土師器甕、須恵器蓋杯・高 杯	SB407との切合い不明	
SK313	L-U7 L-V7・8	土坑	飛鳥	4.0	3.5	0.35	須恵器蓋杯・甕・横瓶		
SB314	L-P4・5 L-Q4・5	掘立柱建物	飛鳥	5.4	3.6	-	土師器甕		5次調査:SB1191
SK315	L-S5・6 L-T5・6	土坑	飛鳥	3.0	2.4	0.3	土師器甕、須恵器蓋杯・高 杯		
SK316	L-U17・18 L-V17・18	土坑	縄文 後期	1.2	0.9	0.3	縄文土器小片、切目石錘、 赤チャート剥片		
SH317	L-S7・8 L-T7・8	竪穴住居	飛鳥	4.8	3.4	0.18	土師器甕、須恵器蓋杯・鉢・ 甕、金床石、軽石	SB342→SH317	
SK318	L-S9 L-T9	土坑	飛鳥	3.0	3.0	0.25	土師器甕、須恵器蓋杯、敲 石		
SH319	L-Q7・8 L-R6・7・8	竪穴住居	飛鳥	5.4	3.9	0.03	土師器高杯		
SK320	L-X10・11	土坑	飛鳥	4.2	2.7	0.38	土師器甕、須恵器蓋杯、土 錘、輪羽口、鏝、金床石	SK320→SB323	7次調査:SK740
SB321	L-V9・10 L-W9・10 L-X9・10	掘立柱建物	飛鳥	5.1	3.9	-	土師器甕、須恵器甕、 チャート剥片(混入)		
SB322	L-U9・10・11 L-V10・11	掘立柱建物	飛鳥	6.3	4.5	-	土師器甕、須恵器杯身・壺	SB322→SB333	
SB323	L-W11 L-X10・11・12	掘立柱建物	飛鳥	8.1	6.0	-	土師器甕、須恵器蓋杯、輪 羽口	SK320→SB323 SK340→SB323	SB747に統合
SK324	L-O6・7 L-P6・7	土坑	飛鳥	4.0	3.8	0.15	土師器甕、須恵器蓋杯・甕		
SK325	L-O8 L-P8	土坑	飛鳥	3.1	1.8	0.15	土師器甕、須恵器細片	SB331との切合い不明	

第17表 遺構一覧 (3/8)

遺構番号	主なグリッド	種別	時代	長さ (m)	幅 (m)	深さ (m)	主な遺物	切合い(旧→新)	備考
SK326	L-P11	土坑	飛鳥	2.1	1.7	0.25	チャート石核(混入)		
SK327	L-O12・13 L-P12・13	土坑	飛鳥	3.8	3.4	0.05	なし	SB344との切合い不明	
SK328	L-N13・14 L-O13	土坑	飛鳥	2.6	2.6	0.15	土師器甕(須恵質) 須恵器高杯		
SH329	L-M14・15 L-N14・15 L-O14・15	竪穴住居	飛鳥	4.5	4.4	0.04	土師器甕、須恵器蓋杯・甕・壺、土錘、椀形鉄滓、磨石	SB384→SH329→SB345	中央土坑あり
SK330	L-U18	土坑	縄文後期	1.3	0.8	0.3	なし		
SB331	L-O8・9・10 L-P8・9・10	掘立柱建物	飛鳥	6.0	4.2	-	土師器細片	SK325との切合い不明	
SK332	L-T16・17 L-U16・17	土坑	飛鳥	5.7	4.6	0.25	土師器甕、須恵器蓋杯・壺・甕		
SB333	L-U9・10 L-V8・9・10 L-W9・10	掘立柱建物	飛鳥	6.0	4.2	-	土師器細片、須恵器甕 スサ入り焼土塊	SB322→SB333	
SB334	L-S18 L-T18・19 L-U18・19	掘立柱建物	飛鳥	3.6	3.3	-	土師器細片		
SK335	L-O14 L-P14	土坑	飛鳥	1.6	1.6	0.2	なし		
SK336	L-P14・15 L-Q14・15	土坑	飛鳥	4.5	4.5	0.05	土師器細片、須恵器蓋杯・壺		
SK337	L-P15・16 L-Q15・16	土坑	飛鳥	2.4	2.4	0.2	土師器甕・把手		
SB338	L-U18・19 L-V18・19	掘立柱建物	飛鳥	3.6	3.6	-	土師器細片		7次調査:SB746
SK339	L-T12	土坑	飛鳥	0.7	0.7	0.2	土師器細片		
SK340	L-W11・12 L-X11・12	土坑	飛鳥	(0.7)	(0.7)	0.5	土師器細片、須恵器杯身	SK340→SB747	
SK341	L-T17・18 L-U17・18	集石炉	縄文早期	1.5	0.9	0.25	石皿・磨石	SK341→SF411	底石なし
SB342	L-R8 L-S7・8	掘立柱建物	飛鳥	4.5	3.0	-	土師器細片、須恵器細片、 切目石錘(混入)	SB342→SH317	
SK343	L-T15	集石炉	縄文早期	0.7	0.6	0.25	なし		底石あり
SB344	L-O12・13 L-P12・13	掘立柱建物	飛鳥	東 3.6 西 3.5	北 2.7 南 2.9	-	なし	SK327との切合い不明	
SB345	L-N15 L-O15・16	掘立柱建物	飛鳥	4.2	3.0	-	土師器甕、須恵器蓋杯	SB384→SH329→SB345	
SK346	L-N13	集石炉	縄文早期	0.6	0.6	0.22	なし		底石あり
SK347	L-S17	土坑	縄文後期	0.9	0.8	0.2	なし		SK316に埋土・形状酷似
SK348	L-S10 L-T10	集石炉	縄文早期	1.2	0.9	0.38	土器細片	SF392→SK348	底石あり
SK349	L-S7	集石炉	縄文早期	1.0	0.9	0.43	磨石		底石あり
SK350	L-Q6・7	土坑	不明	1.2	0.7	0.2	なし		
SK351	L-M23	集石炉	縄文早期	0.9	0.9	0.25	なし		底石あり
SH352	L-P20 L-Q19・20	竪穴住居	飛鳥	3.5≦	2.5≦	0.04	なし	SH354→SH352→SH310	
SH353	L-O20・21 L-P20・21	竪穴住居	飛鳥	4.5	4.0	0.02	土師器甕、須恵器蓋杯・短頸壺、輪羽口	SH355→SH353→SH310 SH354→SH353	
SH354	L-P20・21 L-Q20・21	竪穴住居	飛鳥	2.5≦	2.5≦	0.02	土師器細片	SH354→SH352→SH310 SH354→SH353	
SH355	L-N20 L-O19・20・21	竪穴住居	飛鳥	3.2≦	3.0≦	0.04	なし	SH355→SH353→SH310	
SK356	L-O9	土坑	飛鳥	0.8	0.8	0.5	須恵器壺		2つのピットの重複したものか

第17表 遺構一覧(4/8)

遺構番号	主なグリッド	種別	時代	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	主な遺物	切合い(旧→新)	備考
SK357	M-O1	集石炉	縄文早期	1.0	0.9	0.30	石皿		底石あり
SK358	L-P20	土坑	飛鳥	0.9	0.9	0.29	なし	SK358→SK359→SK360	SH354の中央土坑
SK359	L-O20 L-P20	土坑	飛鳥	1.6	1.4	0.32	土師器甕、須恵器蓋杯	SK358→SK359→SK360	
SK360	L-O20 L-P20	土坑	飛鳥	1.4	1.2	0.32	土師器甕	SK358→SK359→SK360 SK361→SK360	SH310の中央土坑
SK361	L-P20	土坑	飛鳥	1.6	1.6	0.26	須恵器蓋杯	SK361→SK360	SH352の中央土坑
SK362	L-O20	土坑	飛鳥	2.0	0.9	0.28	なし		2基の土坑が重複 北側はSH310の貯蔵穴
SK363	L-O20 L-P20	土坑	飛鳥	1.6	1.2	東 0.2 西 0.4	須恵器高杯		2基の土坑が重複
SK364	L-U9	集石炉	縄文早期	0.9	0.6	0.11	なし	SK408→SK364	底石なし
SK365	L-T6・7 L-U6・7	土坑	不明	1.7	0.9	0.2	なし		
SK366	M-L8	土坑	飛鳥	1.2	1.2	0.3	なし		
SF367	L-M18	煙道付炉穴	縄文早期	2.06	0.66	0.32	石皿、チャート剥片	SF367→SF383 SF367→SF369	調査時:SF367下層
SF368	L-N19	煙道付炉穴	縄文早期	1.21	0.58	0.21	縄文土器(押型文)		
SF369	L-L18 L-M18	煙道付炉穴	縄文早期	1.63	0.50	0.20	縄文土器(縄文)	SF367→SF369	調査時:SF367上層
SH370	L-J25 M-J1	竪穴住居	縄文早期	4.0≦	1.7≦	0.2	縄文土器(押型文・捺糸文)、敲石		
SK371	L-N19	土坑	縄文早期	1.05	0.51	0.09	縄文土器(押型文)		
SK372	L-N19 L-O19	土坑	縄文早期	1.22	0.60	0.16	なし	SF375との切合い不明	
SF373	L-L18	煙道付炉穴	縄文早期	2.11	0.51	0.27	縄文土器(押型文)	SF409→SF402→SF373	
SF374	L-P10・11	煙道付炉穴	縄文早期	1.16	0.47	0.22	縄文土器(押型文)		
SF375	L-O19	煙道付炉穴	縄文早期	1.45	0.66	0.32	縄文土器細片 チャート川原石	SF372との切合い判然とせず	
SB376	J-M10 J-N10・11 J-O10	掘立柱建物	飛鳥	3.6	3.3	-	須恵器甕、縄文土器細片(混入)、弥生土器壺(混入)		
SK377	J-K4	土坑	不明	1.3	0.8	0.2	なし		
SK378	J-O5・6 J-P5・6	土坑	縄文	1.5	0.7	0.4	縄文土器細片		
SK379	J-M15・16	被熱土坑	縄文早期	0.45	0.29	0.20	木炭		
SK380	J-N7	土坑	縄文	1.2	0.7	0.2	縄文土器細片		
SK381	J-L13	土坑	不明	1.1≦	0.8	0.16	なし	SH386→SK381	
SK382	J-K8 J-L8	土坑	古墳後期	3.1	1.4	0.24	土師器甕、須恵器蓋杯・高杯		
SF383	L-M17・18	煙道付炉穴	縄文早期	1.09	0.49	0.28	なし	SF367→SF383	
SB384	L-N15・16 L-O14・15・16	掘立柱建物	飛鳥	6.3	3.3	-	土師器細片	SB384→SH329→SB345	
SH385	J-J10・11 J-K9・10・11 J-L9・10・11	竪穴住居	弥生後期	6.7	5.8	0.1	弥生土器壺 チャート剥片(混入)	SH385→SK401 SH385→SK412	主柱穴・貯蔵穴あり
SH386	J-J12 J-K11・12・13 J-L11・12・13	竪穴住居	飛鳥	6.0	5.5	0.03	土師器甕・把手、須恵器蓋杯・甕、弥生土器壺(混入)	SH386→SK381	主柱穴・中央土坑・竈あり

第17表 遺構一覧 (5/8)

遺構番号	主なグリッド	種別	時代	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	主な遺物	切合い(旧→新)	備考
SH387	J-K14 J-L13・14	竪穴住居	古墳後期	4.1	3.7	0.24	土師器甕、須恵器蓋杯・高杯、土錘、弥生土器(混入)、切目石錘・磨製石斧(混入)		主柱穴・貯蔵穴(SK405)あり
SH388	J-K14・15 J-L14・15	竪穴住居	弥生後期	3.2	1.8≦	0.22	なし		SH389と同一のため統合
SH389	J-K14・15 J-L14・15	竪穴住居	弥生後期	3.2	1.8≦	0.22	弥生土器底部・細片		
SF390	L-N14	煙道付炉穴	縄文早期	1.21	0.44	0.22	蔽石		
SF391	L-S17	煙道付炉穴	縄文早期	1.56	0.49	0.30	縄文土器(押型文)		
SF392	L-T10	煙道付炉穴	縄文早期	1.60	0.55	0.31	なし	SF392→SK348	
SH393	J-K19・20	竪穴住居	弥生後期	(6.5)	(5.7)	0.22	弥生土器甕・高杯、切目石錘(混入)		主柱穴・貯蔵穴(SK404)あり
SH394	J-K22・23 J-L22・23	竪穴住居	飛鳥	5.7	(5.1)	0.02	土師器細片		主柱穴あり
SK395	J-L13	土坑	飛鳥	2.2	1.5	0.1	土師器甕		
SK396	L-R11	被熱土坑	縄文早期?	0.42	0.34	0.32	なし		
SK397	J-L13・14	土坑	古墳後期	1.8	1.1	0.32	土師器甕		
SK398	J-N10	土坑	縄文後期	1.0	1.0	0.2	縄文土器深鉢(中津式)		
SK399	J-N8	土坑	縄文中期	0.5	0.4≦	0.25	縄文土器小片、打製石器		
SK400	J-L14 J-M14	土坑	弥生後期	1.1	1.1	0.38	弥生土器口縁、縄文土器細片(混入)		
SK401	J-K11	土坑	弥生後期	0.7	0.7	0.1≦	弥生土器壺	SH385→SK401	
SF402	L-L18	煙道付炉穴	縄文早期	1.84	0.50	0.35	土器片、チャート剥片・石皿	SF409→SF402→SF373	調査時:SF402上層
SK403	J-L13・14 J-M13・14	土坑	縄文	0.35	0.34	0.44	石棒、緑色の自然石		
SK404	J-K19・20	土坑	弥生後期	1.2	0.9	0.22	弥生土器高杯・壺		SH393の貯蔵穴
SK405	J-L14	土坑	古墳後期	1.0	0.8	0.2	土師器甕		SH387の貯蔵穴
SF406	L-L19 L-M19	煙道付炉穴	縄文早期	1.60	0.67	0.32	なし		調査時:SF376(番号重複のため改名)
SB407	L-U5・6・7 L-V5・6・7 L-W6	掘立柱建物	飛鳥	4.2	4.2	-	なし	SK312との切合い不明	
SK408	L-U10	集石炉	縄文早期	0.7	0.4	0.11	なし	SK408→SK364	底石なし
SF409	L-L18	煙道付炉穴	縄文早期	1.64	0.50	0.44	なし	SF409→SF402→SF373	調査時:SF402下層
SB410	J-L11 J-M11・12	掘立柱建物	飛鳥	3.6	3.3	-	なし		
SK411	L-T17・18 L-U17・18	集石炉	縄文早期	0.8	0.8	0.37	木炭	SK341→SK411	底石なし
SK412	J-K10	土坑	古墳後期	1.0	0.9	0.22		SH385→SK412	調査時:SH385内土坑1
SB601	I-P24・25 I-Q24・25	掘立柱建物	飛鳥	3.9	3.9	-	須恵器細片	SB636→SB601	
SB602	I-P25 J-P1 J-Q1・25	掘立柱建物	飛鳥	3.9	3.6	-	なし	SB602→SB636	
SB603	I-M24・25 I-N24・25	掘立柱建物	飛鳥	3.0	2.7	-	なし		
SB604	I-L25, J-L1 I-M25, J-M1・2	掘立柱建物	飛鳥	3.9	3.9	-	なし		
SD605	I-W5	攪乱溝	近現代	-	-	-	近現代陶器		

第17表 遺構一覧 (6/8)

遺構番号	主なグリッド	種別	時代	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	主な遺物	切合い(旧→新)	備考
SK606	I-T7	土坑	縄文	1.9	0.8	0.2	縄文土器細片		
SK607	I-T5	土坑	不明	1.0	0.5	0.4	なし		
SK608	I-T6	土坑	飛鳥	2.6≦	1.4	0.1	土師器細片		
SK609	I-T5・6	土坑	不明	2.7	0.9	0.5	なし		
SK610	I-T6	風倒木痕	不明	1.3	0.6	0.7	なし		
SD611	I-S9 I-T9	攪乱溝	近現代	-	-	-	なし		畑の境界溝
SK612	I-R8	土坑	飛鳥	1.5	0.8	0.5	土師器細片		
SK613	I-S8	土坑	不明	1.6	0.4	0.2	なし		
SK614	I-T8	土坑	不明	0.8	0.8	0.2	なし		
SK615	I-U10	土坑	不明	0.8	0.4	0.24	なし		
SK616	I-Q13	土坑	飛鳥	1.5	0.6	0.4	土師器細片		
SK617	I-P13・14	土坑	不明	2.0	1.5	0.15	なし		
SK618	I-R13	土坑	不明	1.7	0.9	0.58	なし		
SK619	I-S12・13	土坑	不明	1.3	0.8	0.3	なし		
SK620	I-O15	土坑	飛鳥	0.7	0.7	0.1	土師器細片		
SK621	I-P15 I-Q15	土坑	飛鳥	1.4	0.7	0.1	土師器細片		
SK622	I-Q16・17 I-R16・17	土坑	不明	2.0	0.7	0.54	なし		
SK623	I-M16・17 I-N16・17	土坑	飛鳥	1.3	1.1	0.5	土師器細片		
SH624	I-N17・18 I-O17・18	竪穴住居	古墳後期	5.7	4.5	0.22	土師器甕・甗、須恵器蓋杯・高杯・短頸壺、砥石		主柱穴・竈・貯蔵穴あり
SK625	I-O16	土坑	不明	1.5	1.2	0.1	なし		
SD626	I-O17 I-P17	攪乱溝	近現代	-	-	-	近現代陶器		
SD627	I-N19 I-O19	攪乱溝	近現代	-	-	-	近現代磁器		
SH628	I-P17・18・19 I-Q17・18・19	竪穴住居	弥生後期	6.7	5.4	0.19	弥生土器甕・壺		主柱穴・貯蔵穴あり
SK629	I-L22・23	攪乱	近現代	-	-	-	なし		
SK630	I-Q12	土坑	不明	0.8	0.4	0.2	なし	SK630→SK633	
SK631	I-Q12	土坑	不明	1.5	0.7	0.2	なし		
SK632	I-Q14・15 I-R14・15	土坑	不明	2.3	1.5	0.35	なし		
SK633	I-Q12	土坑	不明	0.4≦	0.4	0.07	なし	SK630→SK633	
SD634	I-Q23	攪乱溝	近現代	-	-	-	近現代陶器		
SD635	I-L17 I-M17	攪乱溝	近現代	-	-	-	なし		
SB636	I-P24・25 I-Q24・25 J-Q1	掘立柱建物	飛鳥	6.9	4.2	-	土師器甗	SB602→SB636→SB601	
SH701	M-F18・19	竪穴住居	飛鳥	3.4≦	2.2≦	0.2	土師器甕、須恵器壺		

第17表 遺構一覧 (7 / 8)

遺構番号	主なグリッド	種別	時代	長さ (m)	幅 (m)	深さ (m)	主な遺物	切合い(旧→新)	備考
SK702	M-G20	土坑	飛鳥	1.1	0.7	0.32	土師器甕、須恵器蓋杯、金床石		SH706の貯蔵穴
SK703	M-G13	土坑	飛鳥	0.6	0.5≦	0.2	土師器細片		
SH704	M-H20・21 M-I21	竪穴住居	飛鳥	(5.2)	(4.4)	0.04	土師器甕		
SK705	M-I21	攪乱溝	近現代	-	-	-	土師器細片(混入)		SH704掘削時に消滅
SH706	M-G20 M-H19・20	竪穴住居	飛鳥	4.0	2.4≦	0.02	なし	SK707との切合い不明	壁周溝 貯蔵穴(SK702)あり
SK707	M-G19 M-H19	土坑	飛鳥	3.4	2.3	0.3	土師器甕、焼土塊	SH706との切合い不明	調査時: SX707
SK708	M-H16	攪乱溝	近現代	-	-	-	土師器甕(混入)		
SA709	M-H15	-	-	-	-	-	なし		調査時に柱列と誤認
SK710	M-G16 M-H16	土坑	飛鳥	2.8	2.0	0.4	土師器甕、須恵器蓋杯・高杯・甕、自然石		
SK711	M-H16 M-I15・16	土坑	飛鳥	4.8	3.6	0.3	土師器皿、須恵器蓋杯・甕、弥生土器底部(混入)		複数土坑重複か?
SB712	M-H19・20 M-I19・20 M-J19・20	掘立柱建物	飛鳥	5.7	3.6	-	土師器細片、縄文土器鉢(混入)		
SH713	M-L18・19 M-M18・19	竪穴住居	飛鳥	5.0	5.0	0.24	土師器甕、須恵器蓋杯・甕、轆羽口、弥生土器壺(混入)		貯蔵穴・竈あり
SK714	M-M19	土坑	飛鳥	1.2	0.8	0.2	土師器甕		
SK715	M-I19・20 M-J19・20	土坑	不明	1.5	0.9	0.2	なし		
SK716	M-L20・21	土坑	飛鳥	0.9	0.8	0.15	土師器甕、須恵器細片		
SK717	M-L21	土坑	不明	1.1	0.9	0.2	なし		
SK718	M-K20	土坑	不明	1.6	0.9	0.3	なし		
SK719	M-J18	土坑	飛鳥	2.4	1.2	0.2	なし	SK720→SK719	
SK720	M-I18・19 M-J17・18・19	土坑	飛鳥	6.0	2.2	0.4	土師器甕、須恵器杯身、弥生土器壺(混入)	SK720→SK719	
SK721	M-J22 M-K22・23	土坑	飛鳥	6.4	5.4	0.3	土師器瓶、須恵器細片、縄文土器底部(混入)、弥生土器鉢(混入)、チャート剥片(混入)	SH743→SK721	4次調査: SK1061
SK722	M-L21	土坑	飛鳥	0.7	0.6	0.1	土師器細片		調査時: SX722
SK723	M-K18・19	風倒木痕	不明	-	-	-	なし		調査時に風倒木痕を土坑と誤認
SK724	M-K13	土坑	縄文 中期後半	1.0	1.0	0.15	縄文土器鉢		
SB725	M-M15	-	-	-	-	-	土師器細片		調査時に掘立柱建物と誤認
SK726	M-N20	土坑	飛鳥	2.2	1.6≦	0.2	土師器壺、須恵器蓋杯・甕・壺、焼土塊		
SH727	M-O15 M-P14・15・16	竪穴住居	飛鳥	4.2	4.2	0.05	土師器甕、染付磁器(混入)		
SK728	M-M21	土坑	飛鳥	1.0	1.0	0.2	土師器皿 須恵器杯身		SH731の中央土坑
SK729	M-M22	土坑	飛鳥	2.0	2.0	0.22	土師器甕、須恵器細片		SH732の中央土坑
SH730	M-S1・2 M-T1・2	竪穴住居	飛鳥	4.1	4.0≦	0.06	土師器壺	SK744→SH730	
SH731	M-21・22 M-N21	竪穴住居	飛鳥	4.0≦	3.2≦	0.15	なし	SH731→SH732	中央土坑(SK728)あり
SH732	M-L21・22 M-M21・22	竪穴住居	飛鳥	4.6	4.2	0.04	土師器甕、須恵器杯・甕 板状鉄製品	SH731→SH732	中央土坑(SK729)あり

第17表 遺構一覧(8/8)

遺構番号	主なグリッド	種別	時代	長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	主な遺物	切合い(旧→新)	備考
SK733	M-M22・23	撈乱	現代	-	-	-	なし		木の根
SH734	L-T21・22 L-U21・22・23 L-V21・22	竪穴住居	飛鳥	7.0	6.8	0.08	土師器甕、須恵器細片		3次調査:SH303
SK735	M-N22	土坑	飛鳥	1.8≦	1.3≦	0.2	土師器甕、須恵器杯身	SK735→SK737	調査時:SZ735
SZ736	M-N23	土坑	飛鳥	-	-	-	なし		SH737と同一遺構のため統合
SH737	M-N23	竪穴住居	飛鳥	6.2≦	2.2≦	0.2	なし	SK735→SH737	8次調査:SH1233
SK738	L-W13・14	土坑	不明	2.3	1.4	0.9	なし	SB752→SK738	
SK739	L-Y11	土坑	飛鳥	1.6	1.5	0.8	土師器甕、須恵器甕	SB750→SK739	
SK740	L-X10・11	土坑	飛鳥	4.2	2.7	0.38	土師器甕、須恵器杯蓋		SK320に統合
SK741	S-A8	土坑	飛鳥	2.3	1.0≦	0.7	土師器甕		
SK742	S-A7	土坑	不明	2.4	0.9	0.6	なし		
SH743	M-J22 M-K22・23	竪穴住居	飛鳥	6.1	6.0	0.02	なし	SH743→SK721	壁周溝のみ検出 4次調査:SH1057
SK744	M-S1・2	集石炉	縄文 早期	1.0	0.8	0.30	石皿	SK744→SH730	底石あり
SH745	K-V15 K-W15	竪穴住居	飛鳥	3.0	1.1≦	0.1	土師器甕、竈支柱石		竈あり
SB746	L-V18・19	掘立柱建物	飛鳥	3.6	3.6	-	なし		SB338に統合
SB747	L-W11 L-X10・11・12 L-Y10・11・12	掘立柱建物	飛鳥	8.1	6.0	-	土師器甕、須恵器杯身、鞆羽口	SK320→SB747 SK340→SB747 SB749→SB747	3次調査:SB323
SB748	S-A2・3	掘立柱建物	飛鳥	3.0	2.1≦	-	土師器甕、須恵器杯		
SB749	L-X11 L-Y10・11・12	掘立柱建物	飛鳥	5.7	4.5≦	-	土師器甕小片	SB749→SB747	
SB750	L-X11・12 L-Y11・12	掘立柱建物	飛鳥	5.7	5.1	-	土師器甕小片	SB750→SK739 SB751との切合い不明	
SB751	L-X12・13・14 L-Y12	掘立柱建物	飛鳥	6.3	3.0	-	土師器甕小片	SB750との切合い不明	
SB752	L-X12・13・14 L-Y13	掘立柱建物	飛鳥	4.2	3.6	-	土師器甕、須恵器甕	SB752→SK738	
SB753	K-S18 K-T17・18	掘立柱建物	飛鳥	10.8	4.2	-	なし		12次調査:SB1612
SF754	M-T1	煙道付炉穴	縄文 早期	-	(0.88)	(0.39)	なし		7次調査終了後、工事中不時発見
SF755	M-T2	煙道付炉穴	縄文 早期	-	(0.48)	(0.15)	なし		7次調査終了後、工事中不時発見
SF756	L-U25	煙道付炉穴	縄文 早期	-	(0.67)	(0.20)	なし		7次調査終了後、工事中不時発見

第18表 掘立柱建物一覧（1／4）

遺構名	時期	種別	グリッド	遺物出土 柱穴	出土遺物	桁行		梁行		柱間		方位	備考
						間数	m	間数	m	桁行(m)	梁行(m)		
SB202	飛鳥	総柱	K-V17	Pit1	土師器細片	2	3.6	2	3.6	1.8等間	1.8等間	N39° E	
				Pit1	土師器細片・鉄滓								
			K-W17	Pit2柱痕	土師器細片								
				Pit2	土師器細片								
SB204	飛鳥	側柱	K-X11	なし	なし	4≦	8.4≦	2≦	3.0≦	1.8+1.8+1.8+(2.7)	1.5等間	N30° E	(SB204→SK207)
SB205	飛鳥	側柱	K-Y23	なし	なし	5	6.6	3	4.8	1.05+1.5+1.5+1.5+1.05	1.65+1.5+1.65	N41° W	
SB206	飛鳥	総柱	S-A1	Pit2	土師器細片	3	5.4	3	4.5	1.8等間	1.5等間	N29° E	SB206→SB215
			L-Y1	Pit1掘形	土師器細片								
				Pit2	土師器細片								
SB214	飛鳥	総柱	K-V23	なし	なし	3	5.4	3	4.5	1.8等間	1.5等間	N35° E	SH211→SB214
SB215	飛鳥	側柱	K-Y25	Pit1	土師器細片	2	4.5	2	3.3	北側:1.8+2.7 南側:2.1+2.4	1.65等間	N30° W	SB206→SB215
			R-A25	Pit1	土師器細片								
SB217	飛鳥	総柱	K-V21	Pit1柱痕	土師器細片 須恵器杯蓋	2	3.3	2	3.0	1.65等間	1.5等間	N12° E	
SB219	飛鳥	総柱	K-T22	Pit1掘形	須恵器杯蓋	2	3.9	2	3.6	1.95等間	1.8等間	N11° E	
SB220	飛鳥	側柱	K-R22	Pit3	土師器甕体部小片	4	8.4	2	4.5	1.8+2.4+2.4+1.8	2.25等間	N12° E	SK221→SB220
			K-T23	Pit1掘形	土師器甕体部小片								
				Pit2掘形	須恵器杯蓋								
SB224	飛鳥	側柱	L-Q1	なし	なし	4	7.8	3	5.7	1.8+2.1+2.1+1.8	1.8+1.8+2.1	N11° E	5次調査:SB1189
SB226	飛鳥	側柱	K-S25	なし	なし	3	3.9	2	3.0	1.2+1.5+1.2	1.5等間	N12° E	
SB231	飛鳥	側柱	L-R2	Pit1	土師器細片 須恵器高杯	3	4.05	1	3.0	1.35等間	3.0	N11° E	
			L-R3	Pit1	土師器甕体部 須恵器高杯・甕								
				Pit2	土師器細片 須恵器杯蓋・甕								
				Pit5	土師器細片 須恵器壺体部片								
SB232	飛鳥	総柱	K-R24	なし	なし	2	3.6	2	3.0	1.8等間	1.5等間	N32° W	SK221→SB232
SB301	飛鳥	側柱	M-I11	Pit1	土師器細片	3	4.5	2	3.3	1.5等間	1.65等間	N38° E	
SB305	飛鳥	側柱	M-L1	Pit2掘形	土師器細片	4	6.6	3	4.8	1.5+1.8+1.8+1.5	東側: 1.2+1.8+1.8 西側: 1.8+1.8+1.2	N12° W	
SB308	飛鳥	側柱	L-L20	Pit2柱痕	土師器細片	4	6.0	3	5.1	1.5等間	1.65+1.8+1.65	N19° W	3次調査:SA308 11次調査:SB1576
SB309	飛鳥	側柱	L-L19	Pit1掘形	土師器細片	4	5.7	2	3.3	1.5+1.35+1.35+1.5	1.65等間	N41° E	
			L-M20	Pit4	土師器細片								
SB314	飛鳥	側柱	L-P5	Pit1	土師器細片	3	5.4	2	3.6	1.5+2.4+1.5	1.8等間	N34° E	5次調査:SB1191
				Pit2	土師器甕口縁								

第18表 掘立柱建物一覧（2／4）

遺構名	時期	種別	グリッド	遺物出土 柱穴	出土遺物	桁行		梁行		柱間		方位	備考
						間数	m	間数	m	桁行(m)	梁行(m)		
SB321	飛鳥	側柱	L-W9	Pit2柱痕	チャート剥片(混入)	3	5.1	2	3.9	1.5+2.1+1.5	1.95等間	N31° W	
				Pit2掘形	土師器甕体部片								
			L-W10	Pit1	土師器細片								
				Pit2掘形	土師器甕小片 須恵器甕小片								
SB322	飛鳥	側柱	L-U11	Pit1掘形	須恵器壺底部	3	6.3	2	4.5	1.8+2.7+1.8	2.25等間	N42° W	SB322→SB333
				Pit2掘形	土師器甕口縁部								
			L-V11	Pit1柱痕	土師器細片								
				Pit1掘形	土師器細片 須恵器杯身								
				Pit2柱痕	土師器細片								
				Pit2掘形	土師器甕小片								
				Pit3掘形	土師器細片								
SB331	飛鳥	側柱	L-O9	Pit1	土師器細片	4	6.0	2	4.2	1.5等間	2.4+1.8	N12° W	SK325との切り合い不明
SB333	飛鳥	側柱	L-V9	Pit1掘形	須恵器甕体部片 スサ入り焼土塊	3	6.0	2	4.2	1.5+3.0+1.5	2.1等間	N39° W	SB322→SB333
				Pit2掘形	土師器細片								
			L-V10	Pit1掘形	土師器細片								
				Pit2柱痕	土師器細片								
				Pit2掘形	土師器細片								
				Pit3掘形	土師器細片								
			L-W9	Pit1掘形	須恵器甕体部片								
SB334	飛鳥	総柱	L-T18	Pit1掘形	土師器細片	2	3.6	2	3.3	1.8等間	1.5+1.8	N26° E	
			L-T19	Pit1掘形	土師器細片								
SB338	飛鳥	側柱	L-U18	Pit1掘形	土師器細片	3	3.6	2	3.6	1.2等間	1.8等間	N8° E	7次調査:SB746
SB342	飛鳥	側柱	L-S7	Pit1掘形	土師器細片 須恵器細片 切目石錘(混入)	3	4.5	2	3.0	1.5等間	1.5等間	N17° W	SH317→SB342
				Pit3柱痕	土師器細片								
				Pit3掘形	土師器細片								
SB344	飛鳥	側柱	L-P13	なし	なし	1	東3.6 西3.5	1	北2.7 南2.9	—	—	N11° E	SK327との切り合い不明
SB345	飛鳥	側柱	L-N15	Pit1柱痕	土師器細片	3	4.2	2	3.0	1.35+1.5+1.35	1.5等間	N27° W	SB384→SH329→ SB345
				Pit1掘形	土師器細片								
			L-O15	Pit1掘形	須恵器蓋杯								
				Pit1	土師器細片								
				Pit2	土師器細片								
				Pit3掘形	土師器細片								
			L-O16	Pit2	土師器甕体部片								

第18表 掘立柱建物一覧（3／4）

遺構名	時期	種別	グリッド	遺物出土 柱穴	出土遺物	桁行		梁行		柱間		方位	備考
						間数	m	間数	m	桁行(m)	梁行(m)		
SB376	飛鳥	総柱	J-N10	Pit4掘形	縄文土器細片(混入)	2	3.6	2	3.3	1.8等間	1.65等間	N29° W	
				Pit6掘形	縄文土器小片(混入)								
			J-N11	Pit1	弥生土器壺小片(混入)								
				Pit4柱痕	須恵器甕体部片								
SB384	飛鳥	側柱	L-O16	Pit1	土師器細片	5	6.3	2	3.3	北側: 2.5)+1.2+1.3+1.3 南側: 1.0+1.2+1.1+1.3+1.7	東側:1.65等間 西側:1.9+1.4	N13° E	SB384→SH329→ SB345
SB407	飛鳥	総柱	L-V6	なし	なし	2	4.2	2	4.2	2.1等間	2.1等間	N33° E	SK312との切り合い不明
SB410	飛鳥	総柱	L-M11	なし	なし	2	3.6	2	3.3	1.8等間	1.65等間	N29° W	
SB601	飛鳥	総柱	I-Q24	Pit2	須恵器細片	3	3.9	2	3.9	1.5+1.2+1.2	1.95等間	N10° E	SB636→SB601
SB602	飛鳥	総柱	J-P1	なし	なし	2	3.9	2	3.6	1.95等間	1.8等間	N6° W	SB602→SB636
SB603	飛鳥	総柱	I-N25	なし	なし	2	3.0	2	2.7	1.5等間	1.35等間	N43° E	
SB604	飛鳥	総柱	J-M1	なし	なし	2	3.9	2	3.9	1.95等間	1.95等間	N14° W	
SB636	飛鳥	総柱	I-Q25	Pit1	土師器甕小片	3	6.9	2	4.2	2.1+2.1+2.7	2.1等間	N11° W	SB602→SB636→ SB601
SB712	飛鳥	側柱	M-J20	Pit2	土師器細片 縄文土器鉢(混入)	3	5.7	2	3.6	1.5+2.7+1.5	1.8等間	N33° W	
SB747	飛鳥	側柱	L-W11	Pit1掘形	土師器甕口縁部 須恵器杯身	4	8.1	3	6.0	北側: 1.8+2.1+2.1+2.1 南側: 1.8+2.7+1.5+2.1	2.1+1.8+2.1	N24° W	3次調査:SB323 SK320→SB747 SK340→SB747 SB749→SB747
				Pit2掘形	土師器細片								
			L-X10	Pit1柱痕	土師器細片								
				Pit1掘形	土師器細片								
				Pit2掘形	土師器細片								
			L-X12	Pit2	須恵器細片								
				Pit1柱痕	土師器甕口縁部 鞆羽口細片								
				Pit1掘形	土師器細片								
			L-Y10	Pit8	土師器細片								
				Pit2	土師器甕小片								
			L-Y11	Pit1	土師器甕小片								
				Pit2	土師器甕小片								
L-Y12	Pit4	土師器甕小片 須恵器壺											
	Pit6	土師器甕小片											
SB748	飛鳥	総柱	S-A3	Pit1	土師器細片	2	3.0	1≦	2.1≦	1.5等間	2.1	N12° W	
				Pit2	土師器甕小片								
				Pit3	須恵器杯								
				Pit5	土師器細片								

第18表 掘立柱建物一覧（4 / 4）

遺構名	時期	種別	グリッド	遺物出土 柱穴	出土遺物	桁行		梁行		柱間		方位	備考
						間数	m	間数	m	桁行(m)	梁行(m)		
SB749	飛鳥	側柱	L-X11	Pit1	土師器甕小片	3	5.7	2≦	4.5≦	1.5+2.7+1.5	2.4+2.1	N42° W	SB749→SB747
				Pit3	土師器細片								
SB750	飛鳥	側柱	L-X11	Pit2	土師器甕小片	2≦	5.7	2	5.1	2.1+1.8+1.8<	2.55等間	N43° W	SB750→SK739
			L-X12	Pit3	土師器甕小片								
SB751	飛鳥	側柱	L-X12	Pit9	土師器甕小片	3	6.3	2≦	3.0≦	2.1等間	1.8+1.2	N21° W	
			L-X13	Pit4	土師器甕小片								
				Pit9	土師器甕小片								
			L-X14	Pit5	土師器甕小片								
L-Y12	Pit3	土師器甕小片											
SB752	飛鳥	側柱	L-X14	Pit3	土師器甕小片	2	4.2	2≦	3.6≦	2.1等間	1.8等間	N28° W	SB752→SK738
				Pit7	須恵器甕小片								
			L-Y13	Pit1	土師器甕小片								
SB753	飛鳥	側柱	K-T18	なし	なし	5	10.8	2	4.2	2.1+2.1+2.1+2.4+2.1	2.1等間	N12° E	12次調査:SB1612

第19表 土器・土製品観察表（1/9）

法量の※印は復元または残存計測値

報告 番号	実測 番号	種類	器種等	グリッド	遺構 層位	法量(cm)			残存	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
						口径	底径	器高						
1	380-04	縄文土器	小片	M-J1	SH370	—	—	—	小片	ネガ楕円押型文(深く縦施文)	砂粒 (~1.0mm)	—	(外)にぶい黄橙 10YR6/4 (内)にぶい黄橙 10YR6/4	
2	380-03	縄文土器	小片	M-J1	SH370	—	—	—	小片	単節斜縄文、内面にヨコナデ	砂粒 (~3.0mm)	—	(外)にぶい黄橙 10YR6/4 (内)にぶい黄橙 10YR6/4	
11	380-05	縄文土器	小片	L-N19	SK371	—	—	—	体部小片	市松押型文・内面にヨコナデ、 上端はツギメ	砂粒 (~1.0mm)	—	(外)明褐 7.5YR5/6 (内)明褐 7.5YR5/6	
12	380-02	縄文土器	小片	L-M18	SF369 第2層	—	—	—	小片	単節斜縄文	砂粒 (~1.0mm)	—	(外)灰黄褐 10YR5/2 (内)灰黄褐 10YR5/2	調査時:Sf367第2層
15	380-06	縄文土器	小片	L-P11	SF374 底面	—	—	—	体部小片	内外に山形押型文(浅く横施文)	砂粒 (~1.5mm)	—	(外)明黄褐 10YR6/6 (内)明黄褐 10YR6/6	
17	380-01	縄文土器	小片	L-S18	SF391	—	—	—	口縁部 小片	口唇直下に縦斜線を1段、以下はネガ楕円押型文(縦施文、前)	砂粒 (~1.5mm)	—	(外)明黄褐 10YR6/6 (内)明黄褐 10YR6/6	
72	337-02	縄文土器	鉢	J-N8	SK399	—	—	—	口縁部 小片	(外)ナデ (内)ナデ	やや粗	良好	(外)にぶい黄 7.5YR7/3 (内)にぶい黄 7.5YR7/3	
75	730-01A	縄文土器	深鉢	M-K13	SK724	—	—	—	口縁部 1/4以下	(外)貼付突起・半蔵竹管文 (内)ユビオサエ・ナデ	粗	良好	(外)にぶい黄橙 10YR7/4 (内)にぶい黄橙 10YR7/4	75・76・77は同一個体
76	730-01B	縄文土器	深鉢	M-K13	SK724	—	—	—	口縁部 1/4以下	(外)貼付突起・半蔵竹管文 (内)ユビオサエ・ナデ	粗	良好	(外)にぶい黄橙 10YR7/4 (内)にぶい黄橙 10YR7/4	75・76・77は同一個体
77	730-01C	縄文土器	深鉢	M-K13	SK724	—	—	—	口縁部 1/4以下	(外)貼付突起・沈線 (内)ユビオサエ・ナデ	粗	良好	(外)にぶい黄橙 10YR7/4 (内)にぶい黄橙 10YR7/4	75・76・77は同一個体
78	339-01	縄文土器	深鉢	M-L5	Ph1	—	—	—	口縁部 小片	(外)沈線・隆帯・単節斜縄文 (内)オサエ・ナデ	やや粗	良好	(外)にぶい黄橙 10YR6/4 (内)にぶい黄橙 10YR6/4	
79	338-01	縄文土器	甕	J-L21	Ph1	—	※9.2	—	底部 11/12	(外)オサエ・ナデ (内)ナデ	粗	良好	(外)橙 5YR6/6 (内)橙 5YR6/6	
80	601-01	縄文土器	深鉢	J-N1	Ph1	—	※9.0	※8.7	底部 完存	(外)ナデ(無文) (内)ナメナデあげ・ヨコナデ	粗	良好	(外)橙 7.5YR6/6 (内)にぶい黄橙 10YR6/4	
81	336-01	縄文土器	深鉢	L-U17	SK316	—	—	—	体部 小片	(外)条痕 (内)ナデ	やや粗	良好	(外)にぶい黄橙 10YR7/3 (内)にぶい黄橙 10YR7/3	外面にスス付着
82	336-02	縄文土器	鉢	L-U17	SK316	—	—	—	体部 小片	(内)ナデ	やや粗	良好	(外)橙 7.5YR7/6 (内)橙 7.5YR7/6	内面にスス付着・黒変
86	381-01	縄文土器	深鉢	J-N10	SK398	—	—	—	口縁部 底部	波状口縁・円棒状具の沈線間 に単節斜縄文、平底	小石 (~4.0mm)	—	(外)橙 7.5YR6/6 (内)橙 7.5YR6/6	中津式
87	336-04	縄文土器	深鉢	J-N10	SK398	—	—	—	体上部 1/4以下	(外)ナデ後沈線文? (内)オサエ・ナデ	やや密	良好	(外)暗赤褐 5YR3/3 (内)暗赤褐 5YR3/3	外面の風化顕著
88	337-01	縄文土器	鉢	J-N10	SK398	—	※12.0	—	底部 完存	(外)摩擦のため不明 (内)摩擦のため不明	やや粗	良好	(外)にぶい黄 2.5Y6/4 (内)にぶい黄 2.5Y6/4	
89	338-02	縄文土器	深鉢	J-L14	Ph1	—	—	—	体部 小片	(外)へラ沈線・充填縄文 (内)風化のため不明	粗	良好	(外)にぶい黄橙 10YR5/4 (内)にぶい黄橙 10YR5/4	
90	338-03	縄文土器	小片	J-M12	Ph1	—	—	—	体部 小片	(外)ナデ・沈線 (内)オサエ・ナデ	粗	良好	(外)黒褐 2.5YR3/2 (内)黒褐 2.5YR3/2	
91	339-03	縄文土器	小片	J-N9	Ph1	—	—	—	体部小片	(外)ナデ? (内)ナデ	やや粗	良好	(外)暗赤褐 5YR3/3 (内)暗赤褐 5YR3/3	
92	339-02	縄文土器	小片	J-N9	Ph1	—	—	—	体部 小片	(外)沈線・ナデ? (内)ナデ?	やや粗	良好	(外)暗赤褐 5YR3/3 (内)暗赤褐 5YR3/3	
93	338-05	縄文土器	小片	L-M13	Ph2	—	—	—	体部 小片	(外)細い縄文・撚系・沈線 (内)ナデ?	やや粗	良好	(外)にぶい黄橙 10YR7/4 (内)にぶい黄橙 10YR7/4	
94	338-04	縄文土器	小片	L-P24	Ph1	—	—	—	小片	(外)沈線 (内)ナデ	粗	良好	(外)明赤褐 5YR5/6 (内)明赤褐 5YR5/6	
99	338-06	縄文土器	小片	J-M14	検出中	—	—	—	体部 小片	(外)ナデ・沈線 (内)ナデ	粗	良好	(外)にぶい黄橙 10YR7/4 (内)にぶい黄橙 10YR7/4	
100	724-05	縄文土器	壺	M-K21	風倒木痕	—	※8.0	—	底部 1/3	(外)オサエ・ハケメ?・ナデ (内)ナデ・オサエ	粗	良好	(外)にぶい黄 7.5YR5/4 (内)にぶい黄 7.5YR5/4	内・外面とも摩擦顕著
111	305-05	弥生土器	甕	L-N25	SK306	—	—	※1.6	口縁部 1/4以下	(外)条痕・口縁端部に刺突 (内)条痕	やや粗	良好	(外)橙 7.5YR6/6 (内)橙 7.5YR6/7	
112	305-06	弥生土器	甕	L-N25	SK306	—	—	※2.1	口縁部 1/4以下	(外)ハケメ・ナデ (内)ナデ	やや粗	良好	(外)明褐 7.5YR5/6 (内)明褐 7.5YR5/6	
113	305-03	弥生土器	甕	L-N25	SK306	—	—	※3.3	口縁部 1/4以下	(外)ナデ・ユビオサエ (内)ナデ・ユビオサエ	粗	良好	(外)にぶい黄 7.5YR7/4 (内)にぶい黄 7.5YR7/4	
115	305-04	弥生土器	甕	L-N25	SK307	—	—	※1.1	口縁部 1/4以下	(外)ナデ (内)ナデ	やや粗	良好	(外)橙 7.5YR6/6 (内)橙 7.5YR6/6	
116	103-01	弥生土器	鉢	I-N14	Ph1	※26.2	—	※5.5	口縁部 1/4	(外)縦位羽状条痕 (内)風化のため不明	やや粗	—	(外)橙 7.5YR6/6 (内)橙 7.5YR6/6	調査時:トレンチ17ピット
117	103-02	弥生土器	甕	I-N14	Ph1	※21.3	—	※2.8	口縁部 1/4以下	(外)風化のため不明 (内)風化のため不明	やや密	—	(外)橙 7.5YR6/8 (内)橙 7.5YR6/8	調査時:トレンチ17ピット
118	103-03	弥生土器	甕	I-N14	Ph1	—	—	※3.9	口縁部 1/4以下	(外)風化のため不明 (内)風化のため不明	やや密	—	(外)橙 7.5YR6/6 (内)橙 7.5YR6/6	調査時:トレンチ17ピット
119	103-04	弥生土器	壺	I-N14	Ph1	—	—	※5.5	底部 1/4以下	(外)ヨコナデ (内)風化	やや密	—	(外)明黄褐 10YR6/6 (内)橙 7.5YR6/6	調査時:トレンチ17ピット
120	303-03	弥生土器	甕	J-J14	Ph2	—	—	※4.5	体部 1/4以下	(外)直線文 (内)ユビオサエ	粗	良好	(外)黄褐 10YR5/6 (内)黄褐 10YR5/6	
121	303-05	弥生土器	壺	J-K13	Ph1	—	—	※3.7	体部 1/4以下	(外)直線文 (内)ナデ	粗	良好	(外)橙 7.5YR6/6 (内)橙 7.5YR6/6	
122	319-07	弥生土器	壺	J-M13	Ph3	※14.0	—	※3.0	口縁部 1/4以下	(外)ナデ (内)ナデ	やや粗	良好	(外)にぶい黄橙 10Y6/4 (内)にぶい黄橙 10Y6/4	外・内面摩擦顕著
123	213-01	弥生土器	甕	K-U17	Ph1	※14.6	—	※2.8	口縁部 1/4以下	(外)ナデ (内)ナデ	やや粗	やや不良	(外)灰白 10YR8/2 (内)灰白 10YR8/2	
124	320-01	弥生土器	甕	L-R13	Ph2	—	—	※2.2	口縁部 1/4以下	(外)ナデ (内)ハケメ	粗	良好	(外)にぶい黄橙 10Y6/4 (内)にぶい黄橙 10Y6/4	外・内面摩擦顕著
125	310-02	弥生土器	壺	L-R13	Ph3	※7.8	—	※9.6	頸部 完存	(外)直線文・波状文・刺突文 (内)ナデ	やや粗	良好	(外)にぶい黄橙 10YR6/4 (内)にぶい黄橙 10YR6/4	126と同一個体か
126	310-05	弥生土器	壺	L-R13	Ph3	—	—	※8.1	体部 1/4以下	(外)直線文・円弧文 (内)磨滅のため不明	やや粗	良好	(外)にぶい黄橙 10YR4/3 (内)にぶい黄橙 10YR4/3	125と同一個体か
127	218-01	弥生土器	甕	L-U3	Ph1	※16.6	—	※4.7	口縁部 3/4	(外)列点文 (内)磨滅のため不明	やや粗	良好	(外)にぶい黄 7.5YR7/4 (内)にぶい黄 7.5YR7/4	
128	214-06	弥生土器	甕	L-U3	Ph3	—	※6.0	※4.1	底部 1/2	(外)磨滅のため不明 (内)ナデ	やや粗	良好	(外)にぶい黄橙 10Y6/4 (内)にぶい黄橙 10Y6/4	
129	217-05	弥生土器	壺	L-V3	Ph1	—	—	※2.2	頸部 1/4以下	(外)直線文 (内)ナデ・ユビオサエ	やや粗	良好	(外)にぶい黄 7.5YR7/4 (内)にぶい黄 7.5YR7/4	
130	303-09	弥生土器	壺	M-N7	Ph4	—	—	※7.0	体部 1/4以下	(外)条痕・波状文 (内)ナデ・ユビオサエ	粗	良好	(外)にぶい黄橙 10YR5/3 (内)にぶい黄橙 10YR5/3	
131	303-07	弥生土器	壺	M-N7	Ph4	—	—	※3.3	体部 1/4以下	(外)波状文 (内)ナデ	粗	良好	(外)灰白 7.5Y7/1 (内)灰白 7.5Y7/1	
132	303-08	弥生土器	壺	M-N7	Ph4	—	—	※2.3	体部 1/4以下	(外)直線文 (内)ナデ	粗	良好	(外)明黄褐 10YR6/6 (内)明黄褐 10YR6/6	

第19表 土器・土製品観察表 (2/9)

法量の※印は復元または残存計測値

報告番号	実測番号	種類	器種等	グッド	遺構	法量(cm)			残存	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
						口径	底径	器高						
133	303-06	弥生土器	壺	M-N7	PH4	—	—	※2.5	体部 1/4以下	(外)直線文 (内)ナデ	粗	良好	(外)明褐色 7.5YR5/6 (内)明褐色 7.5YR5/6	
134	335-10	弥生土器	壺	J-K10	SH385	—	—	※2.2	口縁部 1/4以下	(外)ナデ? (内)ナデ?	粗	良好	(外)オリーブ褐色 2.5Y4/3 (内)オリーブ褐色 2.5Y4/3	
135	311-01	弥生土器	壺	J-L10	SH385 貯蔵穴	※16.0	—	※2.6	口縁部 1/4以下	(外)ハケメ・刺突文 (内)ハケメ・ミガキ?	密	良好	(外)にぶい黄褐色 5YR6/4 (内)にぶい黄褐色 5YR6/4	調査時SH385土坑3
137	327-04	弥生土器	甕?	J-L15	SH389	—	※4.0	※1.8	底部 1/4以下	(外)磨滅のため不明 (内)ナデ?	粗	やや不良	(外)にぶい黄褐色 10YR 6/4 (内)にぶい黄褐色 10YR 6/4	
138	327-05	弥生土器	甕?	J-L15	SH389	—	※6.8	※3.3	底部 1/4以下	(外)磨滅のため不明 (内)磨滅のため不明	粗	やや不良	(外)明黄褐色 10YR 7/6 (内)明黄褐色 10YR 7/6	
139	328-06	弥生土器	高杯	J-K19	SH393	—	—	※2.7	口縁部 1/4以下	(外)ミガキ (内)ナデ	密	良好	(外)褐色 7.5YR 6/6 (内)褐色 7.5YR 6/6	
141	328-05	弥生土器	甕	J-K20	SK404	—	—	※1.7	口縁部 1/4以下	(外)ナデ (内)ナデ	密	良好	(外)にぶい黄褐色 10YR 7/3 (内)にぶい黄褐色 10YR 7/3	SH393貯蔵穴
142	301-03	弥生土器	短頸壺	J-K20	SK404	※7.8	—	※7.7	体上部 1/4	(外)竹管文・ハケメ (内)ナデ・ユビオサエ	やや密	やや良好	(外)褐色 7.5YR7/6 (内)褐色 7.5YR7/6	SH393貯蔵穴
143	328-04	弥生土器	高杯	J-K20	SK404	※19.0	—	※2.0	口縁部 1/4以下	(外)ナデ (内)ナデ	密	良好	(外)にぶい黄褐色 10YR7/4 (内)にぶい黄褐色 10YR7/4	山中式 SH393貯蔵穴
144	301-01	弥生土器	高杯	J-K20	SK404	—	—	※4.5	杯部 3/4	(外)ハケメ (内)磨滅のため不明	やや粗	やや良好	(外)にぶい黄褐色 10YR6/4 (内)にぶい黄褐色 10YR6/4	SH393貯蔵穴
145	312-02	弥生土器	高杯	J-K20	SK404	—	—	※8.6	脚柱部 1/4以下	(外)磨滅のため不明 (内)ナデ・ユビオサエ	やや密	良好	(外)浅黄褐色 10YR8/4 (内)浅黄褐色 10YR8/4	SH393貯蔵穴
146	301-02	弥生土器	壺	J-K20	SK404	—	※7.0	※11.8	底部 1/2	(外)ハケメ (内)磨滅のため不明	粗	やや不良	(外)明黄褐色 10YR6/6 (内)明黄褐色 10YR6/6	SH393貯蔵穴
147	711-02	弥生土器	壺	I-P19	SH628	※13.4	—	—	口縁部 1/4	(外)ヨコナデ・タテミガキ (内)ヨコミガキ・ナデ	密	良好	(外)浅黄褐色 10YR8/4 (内)浅黄褐色 10YR8/4	内面の風化顕著
148	711-03	弥生土器	壺	I-P17	SH628	最大径 ※14.4	—	—	体部 1/4	(外)タテヨコハケメ (内)ハケメ・ヨコナデ	密	良好	(外)にぶい褐色 7.5YR5/3 (内)褐色 10YR4/1	
149	711-05	弥生土器	甕	I-Q18	SH628	—	※3.8	—	底部 2/3	(外)タテハケメ (内)ナデ・ハケメ	密	良好	(外)にぶい黄褐色 10YR6/3 (内)にぶい黄褐色 10YR6/3	内面にスス付着
150	711-04	弥生土器	台付甕	—	SH628 貯蔵穴	—	※8.2	—	脚部 完存	(外)ナデ (内)ナデ	密	良好	(外)浅黄褐色 10YR8/4 (内)浅黄褐色 10YR8/4	
151	219-01	弥生土器	蓋	K-V25	SK213	10.7	—	3.3	ほぼ 完存	(外)ハケメ・ナデ (内)ナデ	密	良好	(外)にぶい褐色 7.5YR7/4 (内)にぶい褐色 7.5YR7/4	
152	207-03	弥生土器	器台	K-V25	SK213	—	—	—	1/2	(外)列点文・沈線文・ハケメ (内)磨滅のため不明	やや粗	良好	(外)にぶい黄褐色 10YR7/4 (内)にぶい黄褐色 10YR7/4	
153	206-02	弥生土器	壺	K-V25	SK213	—	※4.6	※4.0	底部 1/2	(外)ハケメ・ナデ (内)ユビオサエ	やや粗	やや良好	(外)にぶい黄褐色 10YR7/4 (内)にぶい黄褐色 10YR7/4	
154	337-03	弥生土器	鉢	J-M14	SK400	—	—	—	口縁部 小片	(外)ヨコナデ・ミガキ? (内)オサエ・ナデ	やや密	良好	(外)褐色 7.5YR6/6 (内)褐色 7.5YR6/6	
155	333-01	弥生土器	壺	J-K11	SK401	※17.2	—	—	口縁部 1/2	(外)波状文・列点・タテハケ (内)ハケ後ミガキ・列点	密	良好	(外)褐色 7.5YR7/6 (内)褐色 7.5YR7/6	
156	721-01	弥生土器	甕	L-U21	PH3	—	—	—	口縁部 1/4以下	(外)刻み・風化のため不明 (内)ナデ? 風化のため不明	粗	良好	(外)にぶい黄褐色 10YR7/4 (内)にぶい黄褐色 10YR7/4	
157	335-07	弥生土器	壺	J-L14	PH6	—	※6.4	※3.1	底部 完存	(外)ナデ? (内)磨滅のため不明	密	良好	(外)にぶい黄褐色 10YR7/4 (内)オリーブ黒 7.5Y3/1	外・内面の摩耗顕著
158	213-04	弥生土器	壺	K-S20	PH1	※11.4	—	※10.8	口縁部 1/4	(外)ナデ (内)ハケメ・ナデ	やや粗	良好	(外)浅黄褐色 7.5YR8/4 (内)浅黄褐色 7.5YR8/4	外面に煤付着
159	721-03	弥生土器	壺	L-V19	PH1	—	※8.0	—	底部 1/4以下	(外)風化のため不明 (内)ナデ	粗	良好	(外)にぶい褐色 5YR6/4 (内)にぶい褐色 5YR6/4	
160	720-03	弥生土器	—	M-M21	包含層	—	—	—	底部 1/4以下	(外)ナデ (内)ナデ	粗	良好	(外)褐色 7.5YR7/6 (内)褐色 7.5YR7/6	
161	334-03	土師器	甕	J-L14	SH387 床面	※14.8	—	※5.5	口縁部 1/4以下	(外)ハケメ (内)ハケメ・ナデ	やや粗	良好	(外)褐色 7.5YR6/6 (内)暗灰黄 2.5Y5/2	
162	335-03	土師器	甕	J-L14	SH387 カマド袖部	※18.8	—	※4.6	口縁部 1/4	(外)磨滅のため不明 (内)ユビオサエ・ナデ	密	良好	(外)にぶい黄褐色 10YR6/4 (内)にぶい黄褐色 10YR6/4	
163	334-06	土師器	甕	J-L14	SH387	—	—	※2.5	口縁部 1/4以下	(外)磨滅のため不明 (内)磨滅のため不明	密	良好	(外)にぶい黄褐色 10YR7/4 (内)にぶい黄褐色 10YR7/4	
164	318-01	土師器	甕	J-L14	SH387	※18.7	—	※6.2	口縁部 3/4	(外)ナデ・ユビオサエ (内)ナデ・ユビオサエ	やや粗	良好	(外)褐色 7.5YR7/6 (内)褐色 7.5YR7/6	
165	334-02	土師器	甕	J-L14	SH387	※20.8	—	※6.1	口縁部 1/4以下	(外)ハケメ (内)ハケメ・ナデ	密	良好	(外)にぶい黄褐色 10YR7/4 (内)にぶい黄褐色 10YR7/4	
166	310-01	土師器	甕	J-L14	SH387 カマド袖部	※9.9	—	※7.0	底部 完存	(外)ハケメ・ユビオサエ (内)ナデ・ユビオサエ	やや粗	良好	(外)にぶい黄褐色 10YR5/4 (内)にぶい黄褐色 10YR5/4	
167	329-01	須恵器	杯蓋	J-L14	SH387	※14.2	—	※4.2	1/4	(外)ロクロナデ・ケズリ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)灰白 10YR 7/1 (内)灰白 10YR 7/1	
168	330-01	須恵器	杯蓋	J-L14	SH387	※15.2	—	※3.2	口縁部 1/4以下	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)灰 7.5Y6/1 (内)灰 7.5Y6/1	
169	330-02	須恵器	杯蓋	J-L14	SH387	※16.2	—	※2.8	口縁部 1/4以下	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)灰 7.5Y6/1 (内)灰 7.5Y6/1	
170	330-03	須恵器	杯蓋	J-L14	SH387	—	—	※3.0	口縁部 1/4以下	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)灰 7.5Y6/1 (内)灰 7.5Y6/1	
171	329-12	須恵器	杯蓋	J-L14	SH387	—	—	※2.9	口縁部 1/4以下	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)灰 7.5Y6/1 (内)灰 7.5Y6/1	
172	330-04	須恵器	杯蓋	J-L14	SH387	—	—	※3.2	口縁部 1/4以下	(外)ロクロナデ・ケズリ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)灰 5Y6/1 (内)灰 5Y6/1	
173	334-04	須恵器	杯蓋	J-L14	SH387	—	—	※3.0	口縁部 1/4以下	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)灰 7.5Y5/1 (内)灰 7.5Y5/1	
174	329-09	須恵器	杯蓋	J-L14	SH387	—	—	※3.9	口縁部 1/4以下	(外)ロクロナデ・ケズリ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)黄灰 2.5Y4/1 (内)浅黄 2.5Y7/4	
175	329-08	須恵器	杯身	J-L14	SH387	※12.5	—	※3.4	口縁部 1/4以下	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)灰 10Y6/1 (内)灰 10Y6/1	
176	329-05	須恵器	杯身	J-L14	SH387	—	—	※3.5	口縁部 1/4以下	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)灰 10Y6/1 (内)灰 10Y6/1	
177	329-10	須恵器	杯身	J-L14	SH387	—	—	※3.5	口縁部 1/4以下	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)灰 7.5Y6/1 (内)灰 7.5Y6/1	
178	329-06	須恵器	杯身	J-L14	SH387	—	—	※4.7	口縁部 1/4以下	(外)ロクロナデ・ケズリ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)灰黄 2.5Y6/1 (内)灰黄 2.5Y6/1	
179	329-07	須恵器	杯身	J-L14	SH387	※11.2	—	※3.6	口縁部 1/4以下	(外)ロクロナデ・ケズリ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)灰 10Y6/1 (内)灰 10Y6/1	
180	329-03	須恵器	杯身	J-L14	SH387	—	—	※4.0	底部 1/2	(外)ロクロナデ・ケズリ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)灰 7.5Y5/1 (内)灰 7.5Y5/1	
181	329-11	須恵器	杯身	J-L14	SH387	—	—	※2.5	口縁部 1/4以下	(外)ロクロナデ・ケズリ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)灰 10Y6/1 (内)灰 10Y6/1	

第19表 土器・土製品観察表(3/9)

法量の※印は復元または残存計測値

報告 番号	実測 番号	種類	器種等	グリッド	遺構 層位	法量(cm)			残存	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
						口径	底径	器高						
182	329-04	須恵器	杯身	J-L14	SH387	—	—	※2.8	口縁部 1/4以下	(外)ロクロナデ・ケズリ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)灰 7.5Y5/1 (内)灰 7.5Y5/1	
183	329-02	須恵器	高杯	J-L14	SH387	※12.6	—	※4.3	杯部 1/3	(外)ロクロナデ・ケズリ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)灰オリーブ 5Y6/2 (内)灰オリーブ 5Y6/2	
184	335-01	須恵器	高杯	J-L14	SH387	—	—	※0.9	脚部 1/4以下	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)青黒 5PB2/1 (内)青黒 5PB2/1	外・内面に自然釉付着
185	335-02	須恵器	高杯	J-L14	SH387	—	—	※1.4	脚部 1/4以下	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)オリーブ黒 5Y3/1 (内)オリーブ黒 5Y3/1	外・内面に自然釉付着
186	334-05	須恵器	杯? 脚?	J-L14	SH387	—	—	※1.6	端部 1/4以下	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)灰オリーブ 5Y5/2 (内)暗灰 N3/	
187	318-02	須恵器	把手付短頸蓋	J-L14	SH387	—	—	※8.3	体部 1/4	(外)ハケメ・沈線2条 (内)摩耗のため不明	粗	やや不良	(外)灰黄褐色 10YR6/2 (内)灰黄褐色 10YR6/2	外面に把手の残欠あり
188	335-08	土製品	土罐	J-L14	SH387	4.3×1.1	孔径 0.6	重さ ※3.4g	2/3	ナデ	密	良好	にぶい黄橙 10YR7/3	
194	312-01	土師器	甕	J-L14	SK405	※19.6	—	※6.9	口縁部 3/4	(外)ハケメ・ナデ (内)ハケメ	やや粗	良好	(外)にぶい黄橙 10YR6/4 (内)にぶい黄橙 10YR6/4	
195	705-02	土師器	甕	I-N18	SH624	14.2	—	15.0	体部 完存	(外)ナデ・ハケメ (内)ナデ・板ナデ・ハケメ	密	良好	(外)にぶい褐色 7.5YR6/3 (内)にぶい褐色 7.5YR6/3	
196	705-01	土師器	甕	—	SH624 貯蔵穴	13.0	—	16.6	1/2	(外)ナデ・ハケメ (内)ナデ・板ナデ・ハケメ	密	良好	(外)にぶい褐色 7.5YR7/3 (内)にぶい褐色 7.5YR7/3	
197	704-02	土師器	甕	—	SH624 貯蔵穴	16.0	—	※11.0	口縁部 1/2	(外)ナデ・ハケメ (内)ナデ・コビオサエ・ハケメ	密	良好	(外)にぶい黄褐色10YR7/4 (内)にぶい黄褐色10YR7/4	198と同一個体か
198	704-03	土師器	甕	I-N18	SH624	—	—	※5.8	底部 完存	(外)ナデ・ハケメ (内)ナデ・コビオサエ	密	良好	(外)にぶい黄褐色10YR7/4 (内)にぶい黄褐色10YR7/4	197と同一個体か?
199	704-01	土師器	甕	I-N18	SH624	15.0	6.8	19.0	体部 完存	(外)ナデ・ハケメ (内)ナデ・ハケメ	密	良好	(外)浅黄色 2.5Y7/3 (内)浅黄色 2.5Y7/3	
200	707-02	土師器	長胴甕	—	SH624 貯蔵穴	※19.8	—	—	体上部 1/4以下	(外)タテハケメ (内)ヨコハケメ	やや密	良好	(外)にぶい黄橙 10YR6/4 (内)にぶい黄橙 10YR6/4	
201	707-01	土師器	台付甕	—	SH624 貯蔵穴	—	※8.6	※15.5	脚部 完存	(外)タテハケメ・ナデ・オサエ (内)ナデ	密	良好	(外)橙 7.5YR7/6 (内)橙 7.5YR7/6	
202	711-01	土師器	甕	I-O18	SH624	—	—	—	体部 1/4以下	(外)ハケメ (内)ナデ	密	良好	(外)橙 5YR7/6 (内)橙 5YR7/6	脚部の剥離痕あり
203	709-01	土師器	甕	I-N18	SH624	—	※9.0	—	底部 1/4以下	(外)タテナデ・ハケメ痕跡 (内)オサエ・ナデ・ハケメ痕跡	やや粗	良好	(外)にぶい黄橙 10YR7/4 (内)にぶい黄橙 10YR7/4	№11
204	708-04	土師器	把手	I-O18	SH624	—	—	—	把手 完存	ナデ	やや粗	良好	浅黄橙 10YR8/4	把手差込 №13
205	706-01	土師器	甕	I-O17 I-O18	SH624	※26.0	—	※22.4	1/4 以下	(外)ハケメ (内)ナデ・板ナデ・ハケメ	密	良好	(外)褐色 7.5YR6/6 (内)褐色 7.5YR6/6	底部多孔・把手差込 №7・8・16
206	710-01	土師器	長胴甕	—	SH624 カマド	—	※7.0	—	体下部 1/4以下	(外)ナデ (内)オサエ・ヨコナデ	やや密	良好	(外)にぶい褐 7.5YR6/3 (内)浅黄橙 10YR8/3	№25
207	708-02	土師器	台杯甕	I-O17 I-O18	SH624	—	—	—	底部 1/4以下	(外)ナデ・オサエ (内)ナデ	やや密	良好	(外)灰黄 2.5Y6/2 (内)灰黄 2.5Y6/2	
208	708-03	土師器	台杯甕	I-N18	SH624	—	※8.8	—	底部 1/6	(外)ナデ・オサエ (内)ナデ	やや粗	良好	(外)灰黄 2.5Y7/2 (内)灰黄 2.5Y7/2	
209	701-04	須恵器	杯蓋	I-O18	SH624	14.4	—	4.4	1/2	(外)ロクロナデ・ケズリ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)灰色 10Y6/1 (内)灰色 10Y6/1	天井部に朱線
210	701-05	須恵器	杯蓋	I-O18	SH624	14.0	—	4.9	口縁部 1/3	(外)ロクロナデ・ケズリ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)灰色 10Y6/1 (内)灰色 10Y6/1	
211	701-03	須恵器	杯蓋	I-O18	SH624 焼土面	15.0	—	5.7	1/3	(外)ロクロナデ・ケズリ (内)ロクロナデ	密	やや不良	(外)灰白色 7.5Y7/1 (内)灰白色 7.5Y7/1	
212	701-02	須恵器	杯身	I-O18	SH624 貯蔵穴	11.4	—	4.7	1/4	(外)ロクロナデ・ケズリ (内)ロクロナデ	やや粗	良好	(外)灰色 N5/ (内)灰色 N5/	
213	701-01	須恵器	杯身	I-N18	SH624	12.4	—	4.4	ほぼ 完存	(外)ロクロナデ・ケズリ (内)ロクロナデ	やや粗	良好	(外)灰白色 7.5Y7/1 (内)灰白色 7.5Y7/1	
214	702-01	須恵器	高杯蓋	I-N18	SH624	※14.0	—	※6.5	1/4 以下	(外)ロクロナデ・カキメ・ツマミ (内)ロクロナデ	密	やや不良	(外)オリーブ灰色2.5GY6/1 (内)オリーブ灰色2.5GY6/1	
215	702-03	須恵器	甕	—	SH624	—	—	—	頸部 1/4以下	(外)平行タタキ (内)ナデ・オサエ	密	良好	(外)灰白色 7.5Y6/1 (内)灰白色 7.5Y6/1	
216	703-02	須恵器	甕	I-O18	SH624	—	—	—	体部 1/4以下	(外)平行タタキ (内)当て具痕(同心円)・ナデ	密	良好	(外)灰色 N5/ (内)灰色 N5/	
217	703-01	須恵器	甕	I-O18	SH624	—	—	—	体部 1/4以下	(外)平行タタキ (内)当て具痕(同心円)・ナデ	密	良好	(外)灰色 N4/ (内)灰色 N4/	
218	702-02	須恵器	甕	—	SH624	—	—	—	体部 1/4以下	(外)平行タタキ (内)ナデ	密	良好	(外)灰白色 7.5Y7/2 (内)灰白色 7.5Y7/2	
219	708-01	須恵器	横瓶	I-O18	SH624	—	—	—	体部 1/4以下	(外)平行タタキ (内)ナデ・工具オサエ	密	良好	(外)灰 7.5Y6/1 (内)灰 7.5Y6/1	外面に自然釉付着
221	217-06	須恵器	杯身	K-T19	SK216 検出面	※12.0	—	※4.1	口縁部 1/2	(外)ロクロナデ・ケズリ (内)ロクロナデ	密	不良	(外)灰白 7.5YR7/1 (内)灰白 7.5YR7/1	
222	312-07	土師器	甕	J-K8	SK382	—	—	※5.7	体部 1/4以下	(外)ナデ・ハケメ (内)ナデ・ハケメ	密	良好	(外)にぶい黄橙 10YR7/4 (内)にぶい黄橙 10YR7/4	
223	312-04	須恵器	杯蓋	J-K8	SK382	—	—	※1.7	口縁部 1/4以下	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)灰黄 2.5Y6/2 (内)灰黄 2.5Y6/2	
224	312-05	須恵器	杯身	J-K8	SK382	—	—	※3.1	口縁部 1/4以下	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)灰 7.5Y5/1 (内)灰 7.5Y5/1	
225	312-06	須恵器	高杯	J-K8	SK382	—	—	※4.3	脚部 1/4以下	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)灰オリーブ 5Y6/2 (内)灰オリーブ 5Y6/2	
226	317-01	土師器	甕	J-L13	SK397	※16.6	※12.0	※31.0	3/4	(外)ナデ (内)工具ナデ・ナデ	やや粗	良好	(外)にぶい黄橙 10YR7/4 (内)にぶい黄橙 10YR7/4	外・内面の摩耗顕著
227	335-11	須恵器	杯身	J-K10	SK412	—	—	※2.3	口縁部 1/5以下	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)灰オリーブ 5Y6/2 (内)灰オリーブ 5Y6/2	調査時SH385内土坑1
228	216-02	土師器	甕	K-W12	SH201 貯蔵穴	※18.2	—	※3.5	口縁部 1/4	(外)ハケメ・ナデ (内)ハケメ・ナデ	やや密	やや良好	(外)橙 7.5YR7/6 (内)橙 7.5YR7/6	
229	219-02	土師器	甕	K-W12	SH201 貯蔵穴	※19.8	—	※6.0	口縁部 完存	(外)ハケメ・ナデ (内)ハケメ・ナデ	やや粗	良好	(外)浅黄橙 10YR8/3 (内)浅黄橙 10YR8/3	
230	216-04	土師器	甕	K-W12	SH201 貯蔵穴	※13.6	—	※6.0	口縁部 1/4	(外)ハケメ・ナデ (内)磨滅のため不明	密	不良	(外)浅黄橙 10YR8/4 (内)浅黄橙 10YR8/4	
231	216-01	須恵器	杯蓋	K-W12	SH201 貯蔵穴	※12.6	—	※3.0	口縁部 1/4以下	(外)ロクロナデ・ケズリ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)青灰 5B5/1 (内)青灰 5B6/1	
232	216-05	土師器	鉢	K-W12	SH201 カマド灰中	※16.6	—	※5.7	口縁部 1/4以下	(外)磨滅のため不明 (内)磨滅のため不明	密	不良	(外)浅黄橙 10YR8/3 (内)浅黄橙 10YR8/3	
233	216-03	土師器	甕	K-W12	SH201 カマド灰中	※19.0	—	※5.9	口縁部 1/4以下	(外)ナデ (内)コビオサエ・ナデ	やや密	不良	(外)浅黄橙 10YR8/4 (内)浅黄橙 10YR8/4	外・内面の摩耗顕著
234	205-05	須恵器	杯身	K-U25	SH208	—	—	※3.4	口縁部 1/4以下	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)灰黄褐色 10YR6/2 (内)灰黄褐色 10YR6/2	

第19表 土器・土製品観察表 (4/9)

量の※印は復元または残存計測値

報告 番号	実測 番号	種類	器種等	グリッド	遺構 層位	法 量 (cm)			残存	調整技法の特徴	胎土	焼成	色 調	備 考
						口径	底径	器高						
235	205-03	須恵器	短頸壺	K-V25	SH208	※9.8	—	※3.7	口縁部 1/4	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)灰黄橙 10YR4/2 (内)灰 N5/	外・内面に自然釉付着
236	205-04	須恵器	壺	K-V24	SH208	—	—	※2.3	底部 完存	(外)ロクロナデ・ケズリ (内)ロクロナデ	やや 粗	やや 不良	(外)灰白 N8/ (内)灰白 N8/	
237	218-03	須恵器	甗	—	SH208 検出中	—	—	※4.7	体部 1/4	(外)ロクロナデ・ケズリ・列点文 (内)ロクロナデ	密	良好	(外)灰黄 2.5YR7/3 (内)灰黄 2.5YR6/2	
239	209-01	須恵器	杯蓋	K-W22	SH211	—	—	※2.2	口縁部 1/4以下	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	やや 粗	良好	(外)灰 N6/ (内)灰 N6/	
240	212-01	土師器	甗	L-P3	SH227内 土坑	※26.0	—	※6.0	口縁部 1/4以下	(外)ハケメ・ナデ (内)ハケメ・ナデ	やや 粗	良好	(外)浅黄橙 10YR8/3 (内)浅黄橙 10YR8/3	
241	325-02	須恵器	杯蓋	L-M22	SH304	—	—	※2.8	天井部 1/4	(外)ロクロナデ・ケズリ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)灰 10YR5/1 (内)暗灰黄 2.5Y5/2	
242	325-04	須恵器	杯蓋	L-M23	SH304	—	—	※1.7	口縁部 1/4以下	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)灰 7.5Y5/1 (内)灰 7.5Y5/1	
243	325-05	須恵器	杯身	L-N22	SH304 床面	—	※5.0	※1.6	底部 1/4以下	(外)ロクロナデ・ナデ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)灰 N5/ (内)灰 N5/	ヘラ記号あり
244	311-03	須恵器	脚台	L-M22	SH304	※8.4	—	※2.5	脚部 1/4以下	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)黄灰 2.5Y5/1 (内)黄灰 2.5Y5/1	
245	325-07	土師器	甗	L-M23	SH304内 中央土坑	—	—	※4.7	口縁部 1/4以下	(外)ハケメ・ナデ (内)ハケメ	密	やや 不良	(外)暗灰黄 10YR7/4 (内)暗灰黄 10YR7/4	
246	311-04	須恵器	杯蓋	L-M22	SH304内 中央土坑	—	—	※1.2	天井部 1/4以下	(外)ロクロナデ・ケズリ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)灰黄 2.5Y6/2 (内)灰黄 2.5Y6/2	ヘラ記号あり
247	311-05	須恵器	杯蓋	L-M22	SH304内 中央土坑	※9.6	—	※3.0	口縁部 1/2	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)灰 5Y6/1 (内)灰 5Y6/1	
248	325-06	須恵器	杯身	L-M22	SH304内 中央土坑	※9.6	—	※1.9	底部 1/4	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)暗灰黄 2.5Y5/2 (内)暗灰黄 2.5Y5/2	
250	325-01	土師器	甗	—	SH310	※19.4	—	※6.0	口縁部 1/4以下	(外)ナデ・ハケメ (内)ナデ・ハケメ	粗	やや 不良	(外)にぶい黄橙 10YR7/4 (内)にぶい黄橙 10YR7/4	
251	322-01	土師器	甗	—	SH310	※19.2	—	※6.9	口縁部 1/4	(外)ハケメ・ナデ (内)ハケメ・ナデ	密	良好	(外)橙 7.5YR7/6 (内)橙 7.5YR7/6	
252	322-06	土師器	甗	L-P21	SH310	※12.8	—	※3.6	口縁部 1/4以下	(外)ナデ・ハケメ (内)ナデ・ハケメ	密	良好	(外)にぶい橙 7.5YR6/4 (内)にぶい橙 7.5YR6/4	
253	311-02	須恵器	杯蓋	L-P20	SH310	—	—	※3.4	天井部 完存	(外)ロクロナデ・ケズリ・ヘラ切り (内)ロクロナデ・ナデ	密	良好	(外)暗灰黄 2.5Y5/2 (内)暗灰黄 2.5Y5/2	
254	322-04	須恵器	杯蓋	L-O20	SH310	—	—	※3.3	天井部 1/4以下	(外)ロクロナデ・ケズリ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)灰 N5/ (内)灰 N5/	
255	325-03	須恵器	杯蓋	—	SH310 床面	※13.0	—	※2.9	口縁部 1/4以下	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)灰 N6/ (内)灰 N6/	
256	322-05	土師器	甗	L-O20	SH310 P1	—	—	※2.4	口縁部 1/4以下	(外)ナデ (内)ナデ	密	良好	(外)にぶい橙 7.5YR7/4 (内)にぶい橙 7.5YR7/4	
257	322-02	須恵器	瓶	—	SH310	※6.2	—	※3.5	口縁部 1/2	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)オーブ黒 5Y3/1 (内)暗灰黄 2.5Y5/2	外・内面に自然釉付着
258	322-03	須恵器	高杯	L-O20	SH310 床土	—	※9.8	※2.5	脚部 1/4以下	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)灰 7.5Y5/1 (内)灰 7.5Y5/1	
259	323-03	土製品	フイゴ 羽口	—	SH310	※4.0	幅 ※4.0	※4.8	—	ナデ・オサエ	粗	不良	(外)暗灰黄 2.5Y5/2 (内)橙 7.5YR6/6	外面に不純物付着・硬化
267	330-07	土師器	甗	L-T8	SH317	—	—	※2.7	口縁部 1/4以下	(外)ナデ (内)ナデ	密	やや 不良	(外)にぶい黄橙 10YR7/4 (内)にぶい黄橙 10YR7/4	外・内面摩耗顕著
268	316-02	土師器	甗	L-T8	SH317	—	—	※2.2	口縁部 1/4以下	(外)ナデ・ユビオサエ (内)ナデ	密	良好	(外)にぶい黄橙 10YR7/3 (内)にぶい黄橙 10YR7/3	
269	316-04	須恵器	杯蓋	L-T8	SH317	—	—	※1.4	口縁部 1/4以下	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)灰黄 2.5Y6/2 (内)灰黄 2.5Y6/2	
270	316-07	須恵器	壺?	L-T8	SH317	—	—	※3.9	頸部? 1/4以下	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)暗灰 N3/ (内)暗灰 N3/	
271	316-06	須恵器	甗	L-T8	SH317	—	—	※6.5	口縁部 1/4以下	(外)ロクロナデ・波状文 (内)ロクロナデ	密	良好	(外)灰 5Y6/1 (内)灰 5Y6/1	
272	316-01	須恵器	鉢	L-T8	SH317	—	※8.4	※4.0	底部 1/4	(外)ロクロナデ (内)ナデ・ユビオサエ	やや 密	良好	(外)褐灰 10YR4/1 (内)褐灰 10YR4/1	
274	330-08	須恵器	杯蓋	L-S8	SH317 東隅土坑	—	—	※1.9	口縁部 1/4以下	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	密	やや 不良	(外)明オーブ灰2.5GY7/1 (内)明オーブ灰2.5GY7/1	
275	316-03	土師器	甗	L-S8	SH317 焼土下土坑	—	—	※4.6	口縁部 1/4以下	(外)ハケメ・ナデ (内)ハケメ・ナデ	やや 密	良好	(外)にぶい橙 7.5YR6/4 (内)にぶい橙 7.5YR6/4	
276	316-09	須恵器	壺	L-S8	SH317 焼土下土坑	—	—	※3.8	体部 1/4以下	(外)ロクロナデ・ナデ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)黄灰 2.5Y4/1 (内)黄灰 2.5Y4/1	
277	316-08	土製品	土錐	L-S8	SH317 焼土下土坑	1.3×2.8 ×1.2	孔径 0.5	重さ ※3.5g	1/2	ナデ	密	良好	橙 5YR6/6	
278	327-01	土師器	甗	L-N15	SH329	※19.2	—	※6.4	口縁部 1/4以下	(外)ハケメ・ナデ (内)ハケメ・ナデ	密	良好	(外)にぶい黄橙 10YR 7/4 (内)にぶい黄橙 10YR 7/4	
279	327-06	土師器	甗	L-N15	SH329	※13.2	—	※8.8	口縁部 1/2	(外)ハケメ・ナデ (内)ハケメ・ナデ	やや 粗	良好	(外)にぶい橙 7.5YR 6/4 (内)にぶい橙 7.5YR 6/4	
280	327-03	須恵器	杯蓋	L-M15	SH329	—	—	※1.9	口縁部 1/4以下	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)灰白 7.5Y 7/1 (内)灰白 7.5Y 7/1	
281	327-02	須恵器	壺	L-M15	SH329	—	—	※2.8	肩部 1/4以下	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)灰 5Y 5/1 (内)灰 5Y 5/1	
282	328-02	土製品	土錐	L-N14	SH329	3.0×1.2 ×1.2	孔径 0.5	重さ ※2.0g	1/2	ナデ	密	良好	にぶい黄橙 10YR7/4	
284	328-03	土師器	甗	L-N14	SH329 カマド	—	—	※3.1	口縁部 1/4以下	(外)ナデ? (内)ナデ?	密	良好	(外)灰黄橙 10YR 4/2 (内)橙 5Y 6/6	内・外面とも摩耗顕著
286	101-02	須恵器	壺	—	SH329 中央土坑	※12.4	—	※2.8	口縁部 1/4以下	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)青灰 5PB6/1 (内)灰オーブ 5Y5/3	調査時:トレンチ10
287	101-03	須恵器	杯蓋	—	SH353	※11.8	—	※3.2	口縁部 1/4以下	(外)ロクロナデ・ケズリ (内)ロクロナデ	やや 密	良好	(外)明オーブ 5Y4/3 (内)灰黄 2.5Y6/2	調査時:トレンチ8 外面に自然釉付着
288	310-04	土師器	甗	L-O21	SH353 Ph5	※20.2	—	※4.4	口縁部 1/4以下	(外)ハケメ・ナデ (内)ハケメ・ナデ	密	良好	(外)浅黄橙 10YR8/3 (内)浅黄橙 10YR8/3	
289	310-03	土師器	甗	L-O21	SH353 Ph5	※23.8	—	※4.5	口縁部 1/4以下	(外)ハケメ・ナデ (内)ハケメ・ナデ	やや 密	良好	(外)にぶい黄橙 10YR7/4 (内)にぶい黄橙 10YR7/4	
290	326-01	須恵器	短頸壺	L-O21	SH353 Ph5	※12.0	—	※9.3	1/3	(外)ロクロナデ・ケズリ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)灰 5Y 4/1 (内)灰黄 2.5Y6/2	外面に自然釉付着 ヘラ記号あり
291	335-04	土師器	甗	J-K13	SH386 壁周溝	—	—	※4.5	口縁部 1/4以下	(外)ナデ (内)ハケメ・ナデ	密	良好	(外)明黄橙 10YR7/6 (内)明黄橙 10YR7/6	
292	311-06	土師器	甗	J-K12	SH386 Ph3	※15.0	—	※3.3	口縁部 1/4以下	(外)ナデ (内)ハケメ・ナデ	やや 粗	良好	(外)にぶい黄橙 10YR7/4 (内)にぶい黄橙 10YR7/4	
293	335-06	須恵器	杯蓋	J-K12	SH386 中央土坑	—	—	※2.8	口縁部 1/4以下	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)灰 7.5Y5/1 (内)灰黄橙 10YR4/2	

第19表 土器・土製品観察表(5/9)

法量の※印は復元または残存計測値

報告番号	実測番号	種類	器種等	グリッド	遺構 層位	法量(cm)			残存	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
						口径	底径	器高						
294	335-05	弥生土器	壺	J-K12	SH386 Pit1 掘形	—	—	※2.1	口縁部 1/4以下	(外)ナデ (内)ナデ	粗	良好	(外)暗灰黄 2.5Y5/2 (内)暗灰黄 2.5Y5/2	混入遺物
295	304-01	須恵器	甕	J-K11	SH386 貯蔵穴	—	—	※11.3	体部 1/4以下	(外)平行タタキ・カキメ (内)当て具痕(同心円)	密	良好	(外)にふい黄橙 10YR5/3 (内)にふい黄橙 10YR5/4	296と同一個体
296	304-02	須恵器	甕	J-K11	SH386 貯蔵穴	—	—	※17.2	底部 完存	(外)平行タタキ・カキメ (内)当て具痕(同心円)	やや密	良好	(外)灰 7.5Y6/1 (内)灰 7.5Y6/1	295と同一個体
297	335-09	土師器	把手	J-K11	SH386 貯蔵穴	—	—	※7.3	把手 完存	(外)ナデ・ユビオサエ (内)ナデ	密	良好	(外)にふい黄橙 10YR7/4 (内)にふい黄橙 10YR7/4	把手のみ
298	713-02	土師器	甕	M-F18	SH701	—	—	—	口縁部 1/4以下	(外)オサエ・ナデ (内)オサエ・ナデ	やや密	良好	(外)にふい橙 7.5YR6/4 (内)にふい橙 7.5YR6/4	
299	713-01	須恵器	瓶? 杯?	M-F19	SH701	—	—	—	口縁部 1/4以下	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)灰5Y6/1 (内)灰5Y6/1	
300	713-06	土製品	フイゴ 羽口	—	SH713 カマド	9.2×5.4 ×5.6	孔径 1.7	重さ (160.8g)	1/4 以下	ナデ	密	良好	にふい黄橙 10YR7/3	
301	713-03	須恵器	杯蓋	M-M18 M-M19	SH713	※12.4	—	※4.5	口縁部 1/4	(外)ロクロズリ・ロクロナデ (内)ロクロズリ・ロクロナデ	やや密	良好	(外)黄灰 2.5Y6/1 (内)黄灰 2.5Y6/1	外面に自然袖付着
302	713-04	須恵器	甕	M-L19	SH713	—	—	—	体部 1/4以下	(外)タタキ (内)タタキ	密	良好	(外)灰 N4/ (内)灰 N4/	
303	713-05	弥生土器	壺	M-M19	SH713	—	—	—	口縁部 1/4以下	(外)風化のため不明 (内)風化のため不明	やや粗	良好	(外)にふい橙 7.5YR6/4 (内)にふい橙 7.5YR6/4	混入遺物
304	714-01	土師器	甕	—	SH730	—	—	—	底部 完存	(外)ナデ? (内)ハケ・オサエ・ナデ	やや密	良好	(外)橙 7.5YR6/6 (内)橙 7.5YR6/6	
305	714-04	土師器	甕	M-M21	SH732	※25.0	—	—	口縁部 1/6	(外)ナデ?・風化のため不明 (内)風化のため不明	やや密	良好	(外)浅黄橙 10YR8/3 (内)浅黄橙 10YR8/3	
306	714-03	須恵器	瓶? 杯?	M-M21	SH732	—	—	—	口縁部 1/4以下	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)灰黄 2.5Y6/2 (内)灰黄 2.5Y6/2	
307	714-02	須恵器	杯	M-M21	SH732	—	—	—	底部 5/6	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)灰白 5Y7/1 (内)灰白 5Y7/1	底部にヘラ切り痕
309	714-05	土師器	甕	—	SH734	※13.0	—	—	口縁部 1/12	(外)風化のため不明 (内)風化のため不明	やや密	良好	(外)にふい黄橙 10YR7/4 (内)にふい黄橙 10YR7/4	
310	715-01	土師器	甕	—	SH734	※20.2	—	—	口縁部 1/4	(外)オサエ・ナデ・ハケメ (内)オサエ・ナデ・ハケメ	やや密	良好	(外)浅黄 2.5Y7/4 (内)浅黄 2.5Y7/4	外面にスス付着
311	714-06	土師器	甕	—	SH734	※26.8	—	—	口縁部 1/12	(外)ヨコナデ・タテハケメ (内)ヨコナデ・ヨコハケメ	やや密	良好	(外)にふい黄橙 10YR7/4 (内)にふい黄橙 10YR7/4	
312	715-02	土師器	甕	K-W15	SH745 カマド	※16.4	—	—	口縁部 1/6	(外)ヨコナデ・ハケメ (内)ハケメ	やや密	良好	(外)にふい黄橙 10YR6/4 (内)にふい黄橙 10YR6/4	内・外面とも摩耗顕著
314	217-03	須恵器	杯蓋	K-V21	SB217 Pit1 柱痕跡	※13.2	—	※2.4	口縁部 1/4以下	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)暗灰 N3/ (内)灰 N5/	
315	217-04	須恵器	杯蓋	K-T22	SB219 Pit1 掘形	—	—	※2.7	体部 1/4以下	(外)ロクロナデ・ケズリ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)暗灰 10YR5/1 (内)灰白 2.5Y7/1	
316	217-02	須恵器	杯蓋	K-T23	SB220 Pit2 掘形	—	—	※3.1	天井部 1/4以下	(外)ロクロナデ・ケズリ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)青灰 5PB5/1 (内)青灰 5PB5/1	
317	214-02	須恵器	杯蓋	L-R3	SB231 Pit2	※13.0	—	※2.7	口縁部 1/4以下	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	やや密	良好	(外)灰 5Y5/1 (内)灰 5Y5/1	
318	214-04	須恵器	高杯	L-R3	SB231 Pit1	—	—	※4.3	脚部 1/4以下	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)灰 7.5Y4/1 (内)灰 7.5Y4/1	
321	320-05	土師器	甕	L-U11	SB322 Pit2 掘形	—	—	※2.1	口縁部 1/4以下	(外)ヨコナデ (内)ヨコナデ	密	良好	(外)にふい黄橙 10YR7/4 (内)にふい黄橙 10YR7/4	
322	320-03	須恵器	杯身	L-V11	SB322 Pit1 掘形	—	—	※2.2	口縁部 1/4以下	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	密	やや不良	(外)灰黄 2.5Y6/2 (内)灰黄 2.5Y6/2	
323	320-04	須恵器	壺	L-U11	SB322 Pit1 掘形	—	—	※3.1	底部 1/4以下	(外)ロクロズリ (内)ハケメ	密	良好	(外)灰 5Y6/1 (内)黒 5Y2/3	
325	380-07	縄文土器	小片	J-N10	SB376 Pit6 堀形	—	—	—	体部小片	細い単節斜縄文	砂粒 (~1.0mm)	—	(外)にふい黄橙 10YR5/3 (内)にふい黄橙 10YR5/3	混入遺物
326	303-04	弥生土器	壺	J-N11	SB376 Pit1	—	—	※2.8	体部 1/4以下	(外)直線文 (内)ナデ	粗	良好	(外)にふい黄橙 10YR6/4 (内)にふい黄橙 10YR6/4	混入遺物
327	730-02	縄文土器	鉢	M-J20	SB712 Pit2	—	—	—	体部 1/4以下	(外)ナデ・貼付突起・縄文 (内)ナデ	やや粗	良好	(外)にふい黄橙 10YR7/4 (内)にふい黄橙 10YR7/4	混入遺物
328	320-06	土師器	甕	L-W11	SB747 Pit1 掘形	※19.4	—	※2.7	口縁部 1/4以下	(外)ヨコナデ (内)ヨコナデ	粗	良好	(外)明黄橙 10YR7/6 (内)明黄橙 10YR7/6	調査時SB323 外・内面摩耗顕著
329	320-07	須恵器	杯身	L-W11	SB747 Pit1 掘形	—	—	※2.4	口縁部 1/4以下	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)黄灰 2.5Y6/1 (内)黄灰 2.5Y6/1	調査時:SB323
330	722-01	須恵器	壺	L-Y12	SB747 Pit4	—	—	—	頸部 1/4以下	(外)ロクロナデ・沈線 (内)ロクロナデ	密	良好	(外)灰白 N5/ (内)灰白 N5/	外面に自然袖付着
331	206-03	土師器	甕	L-T2	SK209	※17.8	—	※5.0	口縁部 1/4以下	(外)ナデ・ユビオサエ (内)ナデ・ユビオサエ	やや粗	やや不良	(外)にふい黄橙 10YR7/4 (内)にふい黄橙 10YR7/4	調査時:SH209
332	206-01	土師器	甕	L-T2	SK209	※19.2	—	※6.5	口縁部 1/4以下	(外)ハケメ・ナデ (内)ハケメ・ナデ	やや粗	やや良好	(外)浅黄橙 7.5YR8/4 (内)浅黄橙 7.5YR8/4	調査時:SH209
333	218-02	土師器	甕	L-U2	SK209 検出中	※18.4	—	※7.0	口縁部 1/4	(外)磨滅のため不明 (内)ハケメ・ナデ	やや密	やや良好	(外)橙 7.5YR7/6 (内)橙 7.5YR7/6	調査時:SH209
334	207-04	土師器	甕	L-T2	SK209	※28.0	—	※4.0	口縁部 1/4以下	(外)ハケメ・ナデ (内)磨滅のため不明	やや密	やや良好	(外)浅黄橙 10YR8/3 (内)浅黄橙 10YR8/3	調査時:SH209
335	207-05	土師器	甕	L-T2	SK209	※22.0	—	※11.8	体部 1/4以下	(外)ナデ (内)ナデ	やや密	良好	(外)浅黄橙 10YR8/4 (内)浅黄橙 10YR8/4	調査時:SH209
336	207-02	土師器	把手	L-T2	SK209	—	—	—	把手 完存	(外)ナデ (内)ナデ	やや粗	やや良好	(外)浅黄橙 10YR8/3 (内)浅黄橙 10YR8/3	調査時:SH209
337	207-01	土師器	把手	L-T2	SK209	—	—	—	把手 完存	(外)ナデ (内)ナデ	やや粗	やや良好	(外)浅黄橙 10YR8/3 (内)浅黄橙 10YR8/3	調査時:SH209
338	205-01	須恵器	杯蓋	L-T2	SK209	※10.4	—	3.9	1/2	(外)ロクロナデ・ケズリ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)灰 N6/ (内)灰 N6/	外面の一部に自然袖付着 調査時:SH209
339	205-06	須恵器	杯蓋	L-T2	SK209	※10.7	—	4.1	口縁部 1/4以下	(外)ロクロナデ・ケズリ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)灰 N6/ (内)灰 N6/	外面に自然袖付着 調査時:SH209
340	205-07	須恵器	杯身	L-T2	SK209	—	—	※1.7	口縁部 1/4以下	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)にふい黄橙 10YR7/2 (内)にふい黄橙 10YR7/2	調査時:SH209
342	203-02	土師器	甕	L-U4	SK210	※14.0	—	※4.2	口縁部 1/4以下	(外)ナデ (内)ナデ	やや密	やや良好	(外)にふい黄橙 10YR7/4 (内)にふい黄橙 10YR7/4	調査時:SH210 外・内面の摩耗顕著
343	203-04	土師器	甕	L-U4	SK210	※14.4	—	※3.7	口縁部片 1/4以下	(外)ナデ (内)ユビオサエ・ナデ	やや密	やや良好	(外)浅黄橙 7.5YR8/3 (内)浅黄橙 7.5YR8/3	調査時:SH210 外面の摩耗顕著
344	203-01	土師器	甕	L-U4	SK210	※13.5	—	※4.8	口縁部 1/3	(外)ハケメ・ナデ (内)ユビオサエ・ナデ	やや粗	やや良好	(外)橙 5YR7/6 (内)橙 5YR7/6	調査時:SH210
345	203-05	土師器	甕	L-U4	SK210	※20.9	—	※4.6	口縁部片 1/4以下	(外)ナデ (内)ナデ	やや粗	やや良好	(外)橙 7.5YR6/6 (内)明橙 2.5YR5/6	調査時:SH210 外・内面の摩耗顕著
346	204-01	土師器	甕	L-U4	SK210	※22.8	—	※5.2	口縁部片 1/4以下	(外)ハケメ・ナデ (内)ユビオサエ・ナデ	やや密	良好	(外)にふい黄橙 10YR7/4 (内)にふい黄橙 10YR7/4	調査時:SH210

第19表 土器・土製品観察表（6/9）

量の※印は復元または残存計測値

報告番号	実測番号	種類	器種等	グッド	遺構	法量(cm)			残存	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
						口径	底径	器高						
347	203-03	土師器	甕	L-U4	SK210	※26.0	—	※6.3	口縁部1/4以下	(外)ハケメナデ (内)ハケメ	やや密	良好	(外)黒褐 2.5YR3/1 (内)浅黄橙 10YR8/3	調査時:SH210
348	204-04	土師器	把手	L-U4	SK210	—	—	—	把手完存	(外)ナデ	やや粗	不良	(外)浅黄橙 10YR8/3	調査時:SH210
349	202-07	須恵器	杯蓋	L-U4	SK210	—	—	※2.4	天井部2/3	(外)ロクロナデ・ケズリ (内)ロクロナデ	やや密	良好	(外)黄灰 2.5Y4/1 (内)にぶい橙 5YR7/4	調査時:SH210
350	201-03	須恵器	杯蓋	L-U4	SK210	※10.2	—	※3.3	口縁部1/4以下	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	やや密	良好	(外)灰 5Y6/1 (内)灰 5Y6/1	調査時:SH210
351	202-05	須恵器	杯蓋	L-U4	SK210	※12.7	—	※4.0	口縁部1/4以下	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)灰 N5/ (内)灰 N5/	調査時:SH210
352	202-08	須恵器	杯蓋	L-U4	SK210	—	—	※3.6	天井部1/4以下	(外)ロクロナデ・ケズリ (内)ロクロナデ	やや密	やや不良	(外)褐灰 7.5YR4/1 (内)にぶい赤褐 2.5YR5/3	調査時:SH210
353	202-06	須恵器	杯身	L-U4	SK210	—	—	※1.7	底部1/2	(外)ロクロナデ・ケズリ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)灰 N5/ (内)灰 N5/	調査時:SH210
354	202-04	須恵器	杯身	L-U4	SK210	—	—	※2.5	底部1/4	(外)ロクロナデ・ヘラ切り (内)ロクロナデ	密	良好	(外)灰 N6/ (内)灰 N6/	調査時:SH210
355	201-04	須恵器	杯身	L-U4	SK210 中央部床面	※9.2	—	※3.4	口縁部1/3	(外)ロクロナデ・ケズリ (内)ロクロナデ	やや密	良好	(外)灰白 2.5Y7/1 (内)灰白 2.5Y7/1	調査時:SH210
356	202-02	須恵器	高杯	L-U4	SK210	—	—	※2.0	脚部1/4以下	(外)ロクロナデ (内)ナデ	密	良好	(外)灰白 N7/ (内)灰白 N7/	調査時:SH210
357	202-03	須恵器	高杯	L-U4	SK210	—	※12.4	※4.5	脚部1/4以下	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	やや密	良好	(外)灰白 N7/ (内)灰白 N7/	調査時:SH210
358	202-01	須恵器	提瓶	L-U4	SK210	—	—	※2.6	肩部1/4以下	(外)ロクロナデ (内)ナデ	密	良好	(外)オリーブ灰 10Y4/2 (内)黄灰 2.5Y6/1	調査時:SH210 外面に自然袖付着
359	201-05	須恵器	甕	L-U4	SK210	—	—	※3.3	肩部1/4以下	(外)平行タタキ (内)当て具痕(同心円)	やや密	不良	(外)灰白 7.5Y8/1 (内)灰白 7.5Y8/1	調査時:SH210
360	204-03	須恵器	甕	L-U4	SK210	—	—	※6.5	体部1/4以下	(外)平行タタキ・カキメ (内)ナデ	やや粗	良好	(外)灰褐 10YR8/2 (内)灰褐 10YR6/2	調査時:SH210
361	204-02	須恵器	甕	L-U4	SK210	—	—	※8.6	体部1/4以下	(外)平行タタキ・ナデ (内)ナデ	密	良好	(外)灰白 N7/ (内)灰白 N7/	調査時:SH210
362	201-01	須恵器	甕	L-U4	SK210	—	—	※7.3	体部1/4以下	(外)平行タタキ (内)当て具痕(同心円)	やや密	良好	(外)灰 N7/ (内)灰白 N5/	調査時:SH210
363	201-02	須恵器	甕	L-U4	SK210	—	—	※7.7	体部1/4以下	(外)平行タタキ (内)ナデ	やや密	良好	(外)灰白 10YR7/1 (内)灰白 10YR7/1	調査時:SH210 外面に自然袖付着
364	212-03	土師器	瓶	L-W1	SK212	—	—	—	底部1/4以下	(外)ハケメ (内)ナデ	密	良好	(外)浅黄橙 10YR8/4 (内)浅黄橙 10YR8/4	外・内面の摩耗顕著 調査時:SH212
365	212-02	土師器	把手	L-W1	SK212	—	—	—	把手完存	(外)ナデ	密	良好	(外)灰白 2.5Y8/2	摩耗顕著 調査時:SH212
366	211-01	須恵器	杯蓋	L-W1	SK212 床面	※13.8	—	※3.3	口縁部1/4以下	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	やや粗	良好	(外)灰白 5Y8/1 (内)灰白 5Y8/1	調査時:SH212
367	211-03	須恵器	高杯	L-W1	SK212	—	※12.4	※5.3	脚部1/3	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	やや密	良好	(外)暗灰 N3/ (内)暗黄灰 2.5Y5/2	調査時:SH212
368	211-04	須恵器	壺	L-W1	SK212	—	—	※1.8	底部1/4以下	(外)ロクロナデ・ケズリ・ヘラ切り (内)ロクロナデ	やや密	良好	(外)灰白 N8/ (内)灰白 N8/	調査時:SH212
369	211-06	土師器	甕	K-S24	SK222	※18.6	—	※3.1	口縁部1/4以下	(外)ハケメナデ (内)ハケメナデ	やや粗	良好	(外)黄橙 10YR8/6 (内)黄橙 10YR8/6	調査時:SH222
370	211-02	須恵器	杯蓋	K-S24	SK222	—	—	※3.4	天井部1/4以下	(外)ロクロナデ・ケズリ (内)ロクロナデ	やや密	良好	(外)灰白 5Y7/1 (内)灰白 5Y7/1	調査時:SH222
371	211-05	須恵器	杯身	K-S24	SK222	—	—	※2.5	底部1/4以下	(外)ロクロナデ・ケズリ・ヘラ切り (内)ロクロナデ	密	良好	(外)灰白 N7/ (内)灰白 N7/	調査時:SH222
372	220-01	土師器	甕	L-U2	SK225 底面	※20.0	—	※9.4	口縁部1/4	(外)ハケメナデ (内)ハケメナデ・ユビオサエ	やや密	良好	(外)浅黄橙 10YR8/4 (内)浅黄橙 10YR8/4	
373	217-07	須恵器	高杯	L-U2	SK225 底面	—	—	※3.0	杯部1/4以下	(外)ナデか? (内)ナデか?	やや密	不良	(外)橙 5YR7/6 (内)橙 5YR7/6	焼成不良 外・内面の摩耗顕著
374	305-01	土師器	甕	M-15	SK302	※19.2	—	※2.6	口縁部1/4以下	(外)ハケメナデ (内)ナデ	粗	良好	(外)にぶい橙 5YR6/4 (内)にぶい橙 5YR6/4	
375	305-02	土師器	甕	M-15	SK302	—	—	※4.5	口縁部1/4以下	(外)ハケメナデ (内)ハケメナデ	やや粗	良好	(外)にぶい黄橙 10YR7/4 (内)にぶい黄橙 10YR7/4	
376	305-07	土師器	甕	L-V5	SK312	—	—	※2.2	口縁部1/4以下	(外)ナデ (内)ナデ	やや密	良好	(外)にぶい黄橙 10YR7/3 (内)にぶい黄橙 10YR7/3	
377	306-02	須恵器	杯蓋	L-U5	SK312	—	—	※3.5	天井部1/4以下	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)灰 N5/ (内)灰 N5/	
378	305-08	須恵器	杯身	L-V5	SK312	※9.2	—	3.0	口縁部1/4	(外)ロクロナデ・ケズリ (内)ロクロナデ	やや密	良好	(外)灰 5Y5/1 (内)灰 5Y5/1	
379	305-09	須恵器	杯身	L-V5	SK312	—	—	※2.9	口縁部1/4以下	(外)ロクロナデ・ケズリ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)灰 N4/ (内)灰 N4/	
380	306-01	須恵器	杯身	L-U5	SK312	—	—	※2.2	口縁部1/4以下	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)灰 5Y5/1 (内)灰 5Y5/1	
381	101-04	須恵器	高杯?	—	SK312	※14.7	—	※3.5	杯部1/4以下	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)灰 N6/ (内)灰 N6/	調査時:トレンチ5
382	301-04	須恵器	杯蓋	L-V7	SK313	※11.7	—	※3.6	口縁部1/4以下	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)灰白 5Y7/1 (内)灰白 5Y7/1	
383	301-05	須恵器	杯身	L-V7	SK313	※10.0	—	※2.0	口縁部1/4	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)灰黄 7.5Y7/2 (内)灰黄 7.5Y7/2	
384	306-03	須恵器	杯身	L-V7	SK313	—	—	※3.1	口縁部1/4以下	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	やや密	良好	(外)灰 5Y5/1 (内)灰 5Y5/1	
385	301-06	須恵器	壺	L-V7	SK313	※7.2	—	※9.7	口縁部1/4以下	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	やや密	良好	(外)暗灰黄 2.5Y4/2 (内)暗灰黄 2.5Y4/2	
386	332-01	須恵器	横瓶	L-V7	SK313	—	—	※6.2	体部1/4	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)灰 5Y5/1 (内)灰 5Y5/1	
387	331-02	須恵器	甕	L-V7	SK313	※24.4	—	※15.4	口縁部1/4	(外)平行タタキ・波状文 (内)すり消し	密	良好	(外)灰オリーブ 5Y4/2 (内)灰 5Y6/1	外面に自然袖付着
388	331-01	土師器	甕	L-T6	SK315	※22.6	—	※9.0	口縁部1/4	(外)ハケメナデ (内)ハケメナデ	やや粗	良好	(外)にぶい黄橙 10YR7/4 (内)にぶい黄橙 10YR7/4	「近江型」 内面摩耗顕著
389	306-08	須恵器	杯蓋	L-T5	SK315	—	—	※1.6	口縁部1/4以下	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)灰 5Y6/1 (内)灰 5Y6/1	
390	306-04	須恵器	杯身	L-S・T5	SK315	—	—	※2.4	底部1/4以下	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	粗	良好	(外)黄灰 2.5Y6/1 (内)黄灰 2.5Y6/1	
391	306-07	須恵器	高杯	L-T5	SK315	—	—	※2.8	杯部1/4以下	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	やや密	良好	(外)灰 7.5Y5/1 (内)灰 7.5Y5/1	
392	306-06	須恵器	高杯	L-T6	SK315	—	—	※2.1	杯部1/4以下	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	やや密	良好	(外)灰 7.5Y5/1 (内)灰 7.5Y5/1	
393	307-04	土師器	甕	L-S9	SK318	—	—	※3.5	口縁部1/4以下	(外)ナデ (内)ナデ	粗	良好	(外)明黄橙 10YR7/6 (内)明黄橙 10YR7/6	

第19表 土器・土製品観察表（7/9）

法量の※印は復元または残存計測値

報告 番号	実測 番号	種類	器種等	グリッド	遺構 層位	法 量 (cm)			残存	調整技法の特徴	胎土	焼成	色 調	備 考
						口径	底径	器高						
394	307-05	土師器	甕	L-S9	SK318	※15.4	—	※5.7	口縁部 1/4以下	(外)ナデ (内)ナデ	粗	良好	(外)橙 7.5YR6/6 (内)橙 7.5YR6/6	
395	307-03	土師器	甕	L-S9	SK318	※30.2	—	※5.1	口縁部 1/4以下	(外)ナデ・ユビオサエ (内)ロクロナデ	粗	良好	(外)明黄褐 10YR7/6 (内)明黄褐 10YR7/6	
396	306-05	須恵器	杯蓋	L-S9	SK318	※12.2	—	※4.3	1/2	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	やや 粗	良好	(外)灰 5Y6/1 (内)灰 5Y6/1	天井部に線刻あり
397	307-02	須恵器	杯身	L-S9	SK318	※11.8	—	※3.9	口縁部 1/4以下	(外)ロクロナデ・ケズリ (内)ロクロナデ	やや 密	不良	(外)灰白 5Y7/1 (内)灰白 5Y7/1	
398	307-01	須恵器	脚部	L-S9	SK318	—	※16.3	※1.9	脚部 1/4以下	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)灰 N5/ (内)灰 N5/	
399	308-09	土師器	甕	L-X10	SK320	—	—	※2.5	口縁部 1/4以下	(外)磨滅のため不明 (内)磨滅のため不明	やや 密	良好	(外)橙 7.5YR6/6 (内)橙 7.5YR6/6	
400	308-12	土師器	甕	L-X10	SK320	—	—	※3.6	口縁部 1/4以下	(外)ナデ (内)ハケメ・ナデ	やや 粗	良好	(外)橙 7.5YR6/4 (内)橙 7.5YR6/4	
401	309-08	土師器	甕	L-X10	SK320	—	—	※3.6	頸部 1/4以下	(外)ナデ (内)ナデ	密	良好	(外)橙 7.5YR7/6 (内)橙 7.5YR7/6	
402	308-04	須恵器	杯蓋	L-X10	SK320	—	—	※2.2	口縁部 1/4以下	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)灰白 2.5Y7/1 (内)灰白 2.5Y7/1	
403	308-03	須恵器	杯蓋	L-X10	SK320	—	—	※2.3	口縁部 1/4以下	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)灰 7.5Y5/1 (内)灰 7.5Y5/1	
404	308-08	須恵器	杯蓋	L-X10	SK320	—	—	※2.7	口縁部 1/4以下	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)灰白 5Y7/1 (内)灰白 5Y7/1	
405	308-07	須恵器	杯蓋	L-X10	SK320	—	—	※3.8	口縁部 1/4以下	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)黄灰 2.5Y6/1 (内)黄灰 2.5Y6/1	天井部に工具痕
406	308-02	須恵器	杯身	L-X10	SK320	—	—	※1.7	口縁部 1/4以下	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)灰白 5Y7/1 (内)灰白 5Y7/1	
407	308-01	須恵器	杯身	L-X10	SK320	—	—	※1.5	口縁部 1/4以下	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)灰 5Y6/1 (内)灰 5Y6/1	
408	308-05	須恵器	杯身	L-X10	SK320	—	—	※2.3	口縁部 1/4以下	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)灰 7.5Y6/1 (内)灰 7.5Y6/1	
409	308-06	須恵器	杯身	L-X10	SK320	※9.8	—	※3.2	1/4	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)灰 5Y6/1 (内)灰 5Y6/1	底部に工具痕
410	309-09	土製品	フイゴ 羽口	L-X10	SK320	—	—	—	小片	ナデ	粗	良好	にぶい黄橙 10YR6/3	
411	308-10	土製品	土錐	L-X10	SK320	(2.8)×1.4 ×1.3	孔径 0.35	重さ ※4.5g	1/3	ナデ	やや 密	良好	にぶい黄橙 10YR7/4	
412	308-11	土製品	土錐	L-X10	SK320	(2.2)×(1.0) ×1.1	孔径 0.3	重さ ※1.3g	1/3	ナデ	粗	良好	にぶい黄橙 10YR6/3	
415	316-05	土師器	甕	L-O7	SK324	—	—	※2.4	口縁部 1/4以下	(外)ナデ・ユビオサエ (内)ナデ	密	良好	(外)灰黄褐 10YR4/2 (内)灰黄褐 10YR4/2	
416	330-06	須恵器	高杯	L-O7	SK324	※18.8	—	※2.8	口縁部 1/4以下	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)灰 5Y4/1 (内)灰 5Y4/1	
417	315-02	土師器	甕	L-O8	SK325	—	—	※5.6	頸部 1/4以下	(外)ハケメ・ナデ (内)ハケメ・ナデ	密	良好	(外)橙 7.5YR7/6 (内)橙 7.5YR7/6	
418	314-04	須恵器	杯身?	L-O8	SK325	—	—	※3.5	1/4 以下	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)灰 N4/ (内)灰 N4/	
420	101-01	土師器 (須恵質)	甕	—	SK328	—	—	※8.0	体部 1/4以下	(外)ハケメ (内)ハケメ	密	良好 (硬質)	(外)灰 N4/ (内)灰 N5/	調査時:トレンチ10
421	312-03	須恵器	高杯	L-N13	SK328	—	—	※6.2	脚柱部 1/4以下	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)灰 N4/ (内)灰 N4/	三方スカシ?
422	309-07	土師器	甕	L-U16	SK332 2-3層	—	—	※3.5	口縁部 1/4以下	(外)ナデ (内)ハケメ・ナデ	密	良好	(外)橙 7.5YR6/6 (内)橙 7.5YR6/6	
423	309-06	土師器	甕	L-U16	SK332 2-3層	※15.4	—	※3.3	口縁部 1/4以下	(外)ナデ (内)ナデ	やや 密	良好	(外)浅黄橙 10YR8/3 (内)浅黄橙 10YR8/3	
424	309-05	土師器	甕	L-U17	SK332	※20.6	—	※4.1	口縁部 1/4以下	(外)ナデ (内)ハケメ・ユビオサエ	やや 粗	良好	(外)灰黄褐 10YR5/2 (内)灰黄褐 10YR5/2	
425	309-04	須恵器	杯蓋	L-U16	SK332	※10.9	—	※3.4	口縁部 1/4以下	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	やや 密	良好	(外)灰黄 2.5Y7/2 (内)灰黄 2.5Y7/2	
426	309-01	須恵器	杯蓋	L-U17	SK332 2-3層	※11.0	—	※3.0	口縁部 1/4	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)にぶい黄橙 10YR6/3 (内)にぶい黄橙 10YR6/3	
427	309-03	須恵器	高杯	L-U16	SK332	—	—	※3.1	杯部 1/4以下	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	やや 密	良好	(外)黄灰 2.5YR4/1 (内)黄灰 2.5YR4/1	内面に自然釉付着
428	309-02	須恵器	壺	L-T17	SK332 2-3層	—	—	※4.4	肩部 1/4以下	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)灰黄 2.5YR6/2 (内)灰黄 2.5YR6/2	
429	332-02	須恵器	甕	L-T17	SK332 2-3層	—	—	※14.0	肩部 1/4以下	(外)平行タタキ (内)ナデ	密	良好	(外)灰オレンジ 7.5Y4/2 (内)灰 5Y5/1	外面に自然釉付着
430	330-05	須恵器	杯蓋	J-P14	SK336	※13.7	—	※2.8	口縁部 1/4以下	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)灰 10Y6/1 (内)灰 10Y6/1	
431	330-09	須恵器	壺	L-P14	SK336	—	※13.8	※3.4	底部 1/4以下	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)灰黄 2.5Y6/2 (内)灰黄 2.5Y6/2	
432	313-06	土師器	甕	L-P15	SK337	※17.6	—	※3.0	口縁部 1/4以下	(外)ナデ・ユビオサエ (内)ハケメ・ナデ	やや 密	良好	(外)にぶい黄褐 10YR5/4 (内)にぶい黄褐 10YR5/4	
433	313-03	土師器	甕	L-P16	SK337	※15.6	—	※4.2	口縁部 1/4以下	(外)ハケメ・ナデ (内)ハケメ・ナデ	やや 密	良好	(外)にぶい黄褐 10YR5/3 (内)にぶい黄褐 10YR5/3	
434	313-02	土師器	甕	L-P16	SK337	※17.6	—	※4.2	口縁部 1/2	(外)ナデ (内)ナデ	やや 粗	良好	(外)明黄褐 10YR5/3 (内)明黄褐 10YR5/3	外・内面の摩耗顕著
435	314-01	土師器	甕	L-P16	SK337	※18.3	—	※11.1	口縁部 1/4	(外)ハケメ・ナデ (内)ハケメ・ナデ	やや 密	良好	(外)明黄褐 10YR6/6 (内)明黄褐 10YR6/6	
436	313-01	土師器	甕	L-P16	SK337	※21.4	—	※8.2	口縁部 1/4	(外)ハケメ・ナデ (内)ハケメ・ナデ	密	良好	(外)にぶい黄橙 10YR7/4 (内)にぶい黄橙 10YR7/4	
437	313-05	土師器	把手	L-P15	SK337	—	—	—	把手 完存	(外)ナデ・ユビオサエ	やや 密	良好	(外)淡黄 2.5Y8/4	
438	313-04	須恵器	杯身	L-W12	SK340	—	—	※1.8	底部 1/3	(外)ロクロケズリ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)黄灰 2.5Y5/1 (内)黄灰 2.5Y5/1	
439	314-06	須恵器	壺?	L-O9	SK356	—	—	※1.9	底部 1/4以下	(外)ロクロケズリ (内)ロクロナデ	やや 密	良好	(外)灰 2.5Y6/1 (内)灰 2.5Y6/1	線刻あり 内面に自然釉付着
440	302-02	土師器	甕	L-O20	SK359	—	—	※4.0	口縁部 1/4以下	(外)ハケメ・ナデ (内)ナデ	やや 密	良好	(外)橙 7.5YR6/6 (内)橙 7.5YR6/6	
441	315-01	土師器	甕	L-P20	SK359	※19.8	—	※3.9	口縁部 1/4以下	(外)ナデ・ユビオサエ (内)ナデ	やや 粗	良好	(外)橙 7.5YR7/6 (内)橙 7.5YR7/6	
442	302-01	須恵器	杯蓋	L-O20	SK359	※11.7	—	※3.7	口縁部 1/4以下	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)灰 N4/ (内)灰 N4/	
443	315-03	土師器	甕	L-P20	SK360	—	—	※6.0	体部 1/4以下	(外)ハケメ (内)ハケメ・ナデ	密	良好	(外)橙 5YR6/6 (内)橙 5YR6/6	

第19表 土器・土製品観察表(8/9)

質量の※印は復元または残存計測値

報告番号	実測番号	種類	器種等	グリッド	遺構 層位	法量(cm)			残存	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
						口径	底径	器高						
444	314-05	須恵器	杯蓋	L-P20	SK361	—	—	※2.6	口縁部 1/4以下	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)灰 7.5Y5/1 (内)灰 7.5Y5/1	
445	315-04	須恵器	杯蓋	L-P20	SK361	—	—	※1.2	口縁部 1/4以下	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)灰白 2.5Y8/1 (内)灰白 2.5Y8/1	
446	314-03	須恵器	杯身	L-P20	SK361	—	—	※1.7	底部 1/3	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ・ケズリ	密	良好	(外)灰 5Y4/1 (内)灰 5Y4/1	線刻あり
447	314-02	須恵器	高杯	L-P20	SK363	—	—	※4.0	脚部 1/4以下	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	密	不良	(外)にぶい黄褐 10YR7/3 (内)にぶい黄褐 10YR7/3	
448	311-07	土師器	甕	J-L13	SK395	※18.8	—	※6.9	体上部 1/4以下	(外)ナデ・ミガキ? (内)ナデ・ユビオサエ	粗	良好	(外)にぶい黄褐 10YR6/4 (内)にぶい黄褐 10YR6/4	
449	718-01	土師器	甕	M-G20	SK702	※19.0	—	—	口縁部 2/3	(外)ヨコナデ・ハケメ (内)ヨコナデ・ハケメ	やや粗	良好	(外)淡黄 2.5Y8/3 (内)淡黄 2.5Y8/3	外面にスス付着
451	716-01	須恵器	杯蓋	M-H16	SK710	※11.2	—	—	口縁部 1/4以下	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)灰白 5Y8/1 (内)灰白 5Y8/1	
452	716-08	土師器	皿	M-H16	SK711	※17.8	—	※1.7	口縁部 1/4以下	(外)ヨコナデ・オサエ・ナデ (内)ナデ	やや粗	良好	(外)浅黄橙 7.5YR8/6 (内)浅黄橙 7.5YR8/6	内・外面とも摩耗顕著
453	716-09	土製品	土錐	M-H16	SK711	5.4×1.1	孔径 0.3	重さ (※6.1g)	1/2	オサエ・ナデ	密	良好	橙 5YR7/6	
454	716-05	土製品	土錐	M-H16	SK711	3.1×1.2	孔径 0.35	重さ (※3.8g)	小片	オサエ・ナデ	密	良好	浅黄橙 10YR8/4	
455	716-06	須恵器	杯蓋	M-H16	SK711	—	—	—	底部 1/4以下	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)灰白 5Y7/1 (内)灰白 5Y7/1	
456	716-07	須恵器	杯蓋	M-H16	SK711	—	—	—	天井部 1/4以下	(外)ケズリ・ロクロナデ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)灰白 5Y7/1 (内)灰白 5Y7/1	へラ記号あり
457	716-03	須恵器	杯蓋	M-H15	SK711	※10.4	—	※3.5	1/4	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)灰 N6/ (内)灰 N6/	
458	717-02	須恵器	杯身	M-H16	SK711	—	—	—	口縁部 1/4以下	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)灰 5Y6/1 (内)灰 5Y6/1	
459	716-02	須恵器	杯蓋	M-H15	SK711	※13.8	—	—	口縁部 1/4以下	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)灰白 2.5Y7/1 (内)灰白 2.5Y7/1	
460	716-04	須恵器	杯身 高台付	M-H15	SK711	—	—	※9.6	底部 1/4	(外)ナデ (内)ナデ	やや粗	良好	(外)灰白 2.5Y8/3 (内)灰白 2.5Y8/3	内・外面とも摩耗顕著
461	717-05	須恵器	杯	M-H16	SK711	※14.2	※10.0	※4.1	1/2	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)灰白 2.5Y7/1 (内)灰白 2.5Y7/1	
462	717-06	須恵器	杯	M-H16	SK711	※14.0	※10.0	※4.5	1/3	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)にぶい橙 7.5YR7/4 (内)にぶい橙 7.5YR7/4	
463	717-01	須恵器	高杯	M-H16	SK711	—	—	—	脚部残	(外)ロクロナデ (内)シボリ・ロクロナデ	密	良好	灰白 5Y7/1	
464	717-04	須恵器	甕? 壺?	M-H16	SK711	—	—	—	体部 1/4以下	(外)タタキ? (内)オサエ・ナデ	密	良好	(外)灰白 2.5Y7/1 (内)灰白 2.5Y7/1	
465	717-03	弥生土器	壺?	M-H16	SK711	—	※7.4	—	底部 1/6	(外)ナデ (内)ナデ	やや粗	良好	(外)にぶい黄褐 10YR5/3 (内)にぶい黄褐 10YR5/3	混入遺物
466	718-04	土師器	甕	M-J19 M-J20	SK720	—	—	—	口縁部 1/4以下	(外)ナデ (内)ナデ	やや粗	良好	(外)にぶい橙 7.5YR6/4 (内)にぶい橙 7.5YR6/4	
467	718-03	土師器	甕	M-J19 M-J20	SK720	※18.0	—	—	口縁部 1/4以下	(外)ナデ (内)ハケメ	やや粗	良好	(外)にぶい橙 7.5YR6/3 (内)にぶい橙 7.5YR6/3	
468	718-02	須恵器	杯身	M-J19 M-J20	SK720	※8.3	—	※3.1	ほぼ 完存	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)浅黄 2.5Y7/3 (内)浅黄 2.5Y7/3	外面に自然釉付着
469	718-05	弥生土器	壺	M-J18 M-J19	SK720	—	—	—	口縁部 1/4以下	(外)ヨコナデ・ユビオサエ (内)ナデ	やや粗	良好	(外)橙 7.5YR7/6 (内)橙 7.5YR7/6	混入遺物
470	718-07	土師器	甕?	M-K22	SK721	—	※8.0	—	底部 1/4以下	(外)ハケメ・ヨコナデ (内)ナデ	やや密	良好	(外)にぶい黄橙 10YR7/4 (内)にぶい黄橙 10YR7/4	
471	718-06	縄文土器	不明	M-K22	SK721	—	※15.4	—	底部 1/4以下	(外)ナデ (内)ナデ	粗	良好	(外)赤褐 5YR4/6 (内)赤褐 5YR4/6	混入遺物
472	719-01	弥生土器	鉢	M-K22	SK721	※20.4	—	—	口縁部 1/4以下	(外)ナデ (内)ナデ	やや密	良好	(外)にぶい橙 7.5YR7/4 (内)にぶい橙 7.5YR7/4	混入遺物
474	719-03	土師器	壺	M-N20	SK726	※15.6	—	—	口縁部 1/4以下	(外)ナデ・ハケメ (内)ナデ	粗	良好	(外)橙 2.5YR6/6 (内)橙 2.5YR6/6	
475	719-04	須恵器	杯蓋	M-N20	SK726	—	—	—	口縁部 1/4以下	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	やや粗	良好	(外)灰 5Y4/1 (内)灰 5Y4/1	
476	719-02	須恵器	杯蓋	M-N20	SK726	※12.7	—	—	口縁部 1/4以下	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)灰 7.5Y5/1 (内)灰 7.5Y5/1	
477	719-05	須恵器	杯身	M-M21	SK728	—	—	—	口縁部 1/4以下	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	やや粗	良好	(外)灰白 5Y8/1 (内)灰白 5Y8/1	
478	715-03	須恵器	杯身	M-N22	SK735	※9.8	—	—	口縁部 1/6	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	やや密	良好	(外)灰 N5/ (内)灰 N5/	
479	721-04	土師器	甕	L-W13	Ph1	—	—	—	口縁部 1/4以下	(外)ナデ (内)ナデ	やや密	良好	(外)橙 7.5YR7/6 (内)橙 7.5YR7/6	
480	303-01	土師器	甕	L-R15	Ph1	—	—	※4.0	口縁部 1/4以下	(外)ナデ (内)ナデ	やや粗	良好	(外)橙 7.5YR7/6 (内)橙 7.5YR7/6	
481	722-02	土師器	甕	L-Y12	Ph5	—	—	—	口縁部 1/4以下	(外)ヨコナデ・ハケメ (内)ヨコナデ・風化のため不明	粗	良好	(外)浅黄橙 10YR8/4 (内)浅黄橙 10YR8/4	
482	721-08	土師器	甕	L-X13	Ph7	※18.3	—	—	口縁部 1/4以下	(外)ヨコナデ (内)ハケメ	粗	良好	(外)明褐 7.5YR5/6 (内)明褐 7.5YR5/6	
483	712-05	土師器	甕	I-R16	Ph2	※14.6	—	—	口縁部 1/4以下	(外)ナデ・ハケメ (内)ナデ・ハケメ	密	良好	(外)灰白10YR8/2 (内)灰白10YR8/2	
484	722-04	土師器	甕	L-Y13	Ph4	—	—	—	口縁部 1/4以下	(外)ヨコナデ・ハケメ (内)ヨコナデ・ハケメ	やや粗	良好	(外)明黄褐 10YR7/6 (内)明黄褐 10YR7/6	
485	721-05	土師器	甕	L-X12	Ph4	※19.6	—	—	口縁部 1/6	(外)ヨコナデ? (内)ヨコナデ・ナデ	やや粗	良好	(外)明黄褐 10YR7/6 (内)明黄褐 10YR7/6	風化のため調整不明瞭
486	213-03	土師器	甕	K-S25	Ph1	※16.4	—	※8.6	口縁部 1/4	(外)ハケメ・ナデ (内)ハケメ・ナデ	やや密	やや良好	(外)橙 7.5YR7/6 (内)橙 7.5YR7/6	
487	215-02	土師器	甕	K-T25	Ph5	—	—	※14.0	体部 1/4以下	(外)ハケメ・ナデ (内)ハケメ・ナデ	やや粗	良好	(外)浅黄橙 10YR8/3 (内)浅黄橙 10YR8/3	把手残存
488	722-07	土師器	皿	M-M21	Ph6	※18.8	—	—	口縁部 1/6	(外)摩耗のため不明 (内)摩耗のため不明	やや粗	良好	(外)明赤褐 2.5YR5/8 (内)明赤褐 2.5YR5/8	
489	214-03	須恵器	杯蓋	K-T25	Ph5	—	—	※2.1	天井部 1/4以下	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)灰 5Y5/1 (内)灰 5Y5/2	
490	206-04	須恵器	杯蓋	L-T2	Ph11	—	—	※4.5	体部 1/4以下	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)灰白 N8/ (内)灰白 N8/	
491	214-05	須恵器	杯蓋	K-S25	Ph1	—	—	※4.2	天井部 1/4以下	(外)ロクロナデ・ケズリ (内)ロクロナデ	密	やや不良	(外)灰 10Y6/1 (内)灰 10Y6/1	
492	721-07	須恵器	杯身	L-X13	Ph5	※12.0	—	—	口縁部 1/4以下	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	やや密	良好	(外)灰 5Y6/1 (内)灰 5Y6/1	

第19表 土器・土製品観察表(9/9)

法量の※印は復元または残存計測値

報告番号	実測番号	種類	器種等	グリッド	遺構層位	法量(cm)			残存	調整技法の特徴	胎土	焼成	色調	備考
						口径	底径	器高						
493	303-02	須恵器	高杯	L-W12	Pit1	—	—	※7.2	脚柱部 完存	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	やや粗	良好	(外)灰 N4/ (内)灰 N4/	
494	214-01	須恵器	高杯	K-T25	Pit3	—	—	※1.3	口縁部 1/4以下	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	やや密	良好	(外)灰 N6/ (内)灰 N6/	
495	320-02	須恵器	高杯	L-N21	Pit3	—	—	※4.6	脚部 1/4以下	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)灰 7.5Y4/1 (内)灰 7.5Y4/1	
496	319-05	須恵器	鉢	L-W12	Pit4	※10.8	—	※3.7	口縁部 1/4以下	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)黄灰 2.5Y5/1 (内)黄灰 2.5Y5/1	
497	723-01	須恵器	壺	S-A4	Pit1	※11.4	—	—	頸部 1/3	(外)沈線・ロクロナデ (内)ロクロナデ	やや密	良好	(外)灰白 2.5Y7/1 (内)灰白 2.5Y7/1	
498	721-06	須恵器	壺	L-X13	Pit3	—	※6.6	—	底部 5/12	(外)ロクロナデ・ヘラ切り (内)ロクロナデ	密	良好	(外)暗灰 N3/ (内)暗灰 N3/	
499	722-05	須恵器	壺	M-G19	Pit3	—	—	—	体下部 1/6	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)黄灰 2.5Y6/1 (内)黄灰 2.5Y6/1	
500	722-06	須恵器	瓶	M-M21	Pit4	—	—	—	口縁部 1/3	(外)沈線・ロクロナデ (内)ロクロナデ	やや粗	良好	(外)灰黄 2.5Y7/2 (内)灰黄 2.5Y7/2	
501	319-06	須恵器	瓶	L-S15	Pit5	※5.8	—	※3.8	口縁部 1/2	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)灰 5Y5/1 (内)灰 5Y5/1	
502	319-04	須恵器	ハソウ	L-M17	Pit1	※13.2	—	※2.8	口縁部 1/4以下	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)オリブ黒 7.5Y3/1 (内)オリブ黒 7.5Y3/1	
503	721-02	須恵器	ハソウ	L-V16	Pit1	体部径 ※9.2	—	—	体部 1/4以下	(外)ロクロナデ・沈線 (内)ロクロナデ	密	良好	(外)黄灰 2.5Y6/1 (内)黄灰 2.5Y6/1	
504	213-02	須恵器	ハソウ	K-U16	Pit2	—	—	※4.9	体部 1/4以下	(外)ロクロナデ・襷掛斜線 (内)ロクロナデ	密	良好	(外)灰 N6/ (内)灰 N6/	
505	722-03	須恵器	甕	L-Y13	Pit3	—	—	—	肩部 1/4以下	(外)タタキ (内)同心円	密	良好	(外)灰 N4/ (内)灰 N4/	
506	723-02	須恵器	甕	S-A4	Pit2	—	—	—	体部 1/4以下	(外)タタキ後カキメ・沈線 (内)ロクロナデ	密	良好	(外)灰黄 2.5Y6/2 (内)灰黄 2.5Y6/2	
507	321-02	製塩土器	—	L-P14	Pit1	—	—	※5.2	脚部 1/4以下	ナデ・ユビオサエ	密	良好	橙 5YR7/6	知多式
510	712-04	須恵器	杯蓋	I-Q24	Pit1	—	—	—	口縁部 小片	(外)タテハケメ (内)ナデ・ハケメ	密	良好	(外)灰白10Y7/1 (内)灰白10Y7/1	
511	302-04	須恵器	杯身	J-L13	Pit1	—	—	※3.5	口縁部 1/4以下	(外)ロクロナデ・ナデ (内)ロクロナデ	やや密	良好	(外)灰 5Y5/1 (内)にぶい・橙 7.5YR5/3	
512	302-03	須恵器	杯身	J-L13	Pit1	—	—	※1.9	底部 1/4以下	(外)ロクロナデ・ナデ (内)ロクロナデ	やや密	良好	(外)灰 5Y6/1 (内)灰 5Y6/1	
513	208-02	土師器	甕	—	表土掘削中	※18.0	—	※4.0	口縁部 1/4以下	(外)ナデ (内)ナデ	密	良好	(外)橙 7.5YR7/6 (内)橙 7.5YR7/6	
514	720-04	土師器	甕	L-V22	包含層	※20.0	—	—	口縁部 1/6	(外)ヨコナデ (内)ハケメ	粗	良好	(外)明黄橙 10YR7/6 (内)明黄橙 10YR7/6	
515	208-01	土師器	甕	—	検出中	※27.8	—	※8.1	口縁部 1/4以下	(外)ハケメ・ナデ (内)ハケメ・ユビオサエ	密	良好	(外)橙 7.5YR6/6 (内)橙 7.5YR6/6	
516	210-01	土師器	甕	—	表土掘削中	※34.0	—	※6.8	口縁部 1/4以下	(外)ハケメ・ナデ (内)ナデ・ユビオサエ	密	良好	(外)灰黄 7.5YR7/6 (内)灰黄 7.5YR7/6	
517	720-05	土師器	甕	M-K21	包含層	※21.1	—	—	口縁部 1/4	(外)ヨコナデ・ハケメ (内)ユビオサエ・ハケメ	やや粗	良好	(外)にぶい・黄橙 10YR6/3 (内)にぶい・黄橙 10YR6/3	
518	726-01	土師器	甕	M-K21	風倒木痕	※21.4	—	—	1/4	(外)タテハケメ・貼付ナデ (内)ハケメ・オサエ・ケズリ	やや粗	良好	(外)にぶい・黄橙 10YR6/4	内面炭化
519	321-01	製塩土器	—	L-P20	検出中	—	—	※4.6	脚部 1/4以下	ナデ・ユビオサエ	密	良好	橙 5YR6/6	知多式
520	724-06	須恵器	杯身	M-K21	風倒木痕	—	—	—	口縁部 1/4以下	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)灰 7.5Y6/1 (内)灰 7.5Y6/1	
521	724-03	須恵器	杯身	南区	表土掘削中	※8.0	—	—	口縁部 1/6	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)黄灰 2.5Y6/1 (内)黄灰 2.5Y6/1	
522	724-02	須恵器	杯身	南区	表土掘削中	※9.2	—	—	1/3	(外)ロクロナデ・ヘラケズリ? (内)ロクロナデ	密	良好	(外)灰 5Y5/1 (内)灰 5Y5/1	
523	720-01	須恵器	杯身	M-M22	包含層	※11.3	—	—	口縁部 1/4以下	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	やや粗	良好	(外)灰 5Y5/1 (内)灰 5Y5/1	
524	724-04	須恵器	杯身	M-K21	風倒木痕	※12.2	—	—	口縁部 1/4以下	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)黄灰 2.5Y4/1 (内)黄灰 2.5Y4/1	
525	319-03	須恵器	杯身	南区	包含層	※12.0	—	3.5	口縁部 1/4	(外)ロクロナデ・ヘラ切り (内)ロクロナデ	密	やや不良	(外)灰黄 2.5Y7/2 (内)灰黄 2.5Y7/2	
526	209-03	須恵器	高杯	—	表土掘削中	—	—	※1.5	杯部 1/4以下	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	密	やや不良	(外)灰黄 2.5Y7/2 (内)灰黄 2.5Y7/2	
527	209-02	須恵器	高杯	—	表土掘削中	—	—	※2.0	杯部底 2/3	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	やや粗	良好	(外)灰 5Y6/1 (内)灰白 5Y7/2	
528	321-03	須恵器	高杯	南区	北壁 黒ボク層	—	—	※3.7	杯部 1/4以下	(外)ロクロナデ・ケズリ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)オリブ黄 5Y6/3 (内)オリブ黄 5Y6/3	内・外面に自然釉付着
529	209-04	須恵器	壺	—	表土掘削中	—	—	※3.0	肩部 1/4以下	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	密	不良	(外)にぶい・黄 2.5Y6/3 (内)黒 5Y2/1	
530	209-06	須恵器	壺	K-V18	風倒木痕	—	—	※3.8	肩部 1/4以下	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	やや密	良好	(外)灰 N6/ (内)灰 N6/	
531	724-01	須恵器	短頸壺	M-K21	風倒木痕	—	—	—	頸部 1/4以下	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)灰黄 2.5Y7/2 (内)灰黄 2.5Y7/2	外面に自然釉付着
532	101-06	須恵器	壺	—	排土	—	—	※1.5	底部 1/4以下	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)灰 N6/ (内)灰 N6/	
533	101-05	須恵器	壺	—	排土	—	—	※5.8	底部 1/4以下	(外)ロクロナデ・ケズリ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)灰白 N7/ (内)灰白 N7/	
534	720-02	須恵器	ハソウ	L-V19	包含層	—	—	—	頸部 1/4	(外)ロクロナデ・横線3条 (内)ロクロナデ	やや密	良好	(外)灰 7.5Y6/1 (内)灰 7.5Y6/1	
535	209-05	須恵器	ハソウ	K-X21	検出中	—	—	※4.8	頸部 1/2	(外)ロクロナデ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)灰 5Y6/1 (内)オリブ 5Y5/4	内面に自然釉付着
536	725-01	須恵器	横瓶	M-K21	風倒木痕	—	—	—	体部 1/4以下	(外)タタキ (内)当て具痕・青海波	密	良好	(外)灰白 7.5Y7/1 (内)灰白 7.5Y7/1	
537	209-07	須恵器	横瓶	—	排土	—	—	※22.9	体部 1/4以下	(外)タタキ・沈線一条	密	やや良好	(外)灰黄 2.5Y6/2 (内)灰黄 2.5Y7/2	外面に自然釉付着
538	319-01	須恵器	杯蓋	J-N8	カクラン溝	※13.0	—	※3.5	口縁部 1/4	(外)ロクロナデ・ケズリ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)灰 N4/ (内)灰 N4/	
539	319-02	須恵器	杯身	J-N8	カクラン溝	※12.2	—	※4.9	口縁部 1/2	(外)ロクロナデ・ケズリ (内)ロクロナデ	密	良好	(外)灰 N5/ (内)灰 N5/	
540	102-01	施釉陶器	加工 円盤	—	排土	(3.5)	—	—	—	(外)ロクロナデ・施釉 (内)ロクロナデ・施釉	密	良好	(外)灰白 7.5Y7/1 (内)オリブ黄 5Y6/3	瀬戸・美濃系

第20表 石器・石製品観察表(1/3)

法量の※印は復元または残存計測値

報告 番号	実測 番号	器種等	グリッド	遺構 層位	石材	法量(cm)(g)				備考
						長辺	短辺	厚さ	重さ	
3	356-01	敲石	M-J1	SH370	流紋岩	6.3	4.7	1.4	58.3	完形
4	356-02	敲石	M-J1	SH370	砂岩	※10.2	※4.0	※2.1	※155.7	約1/2欠 デンプン分析「磨石1」
5	356-03	敲石	M-J1	SH370	流紋岩	6.9	6.8	5.9	403.3	完形 デンプン分析「敲石2」
6	356-04	敲石	M-J1	SH370	花崗岩	8.2	7.4	6.9	504.6	完形 被熱赤変
7	357-01	敲石	M-J1	SH370	砂岩	※10.8	※4.9	※3.9	※246.2	被熱赤変・約2/3欠 デンプン分析「石皿3」
8	357-03	敲石?	M-J1	SH370	流紋岩	9.0	4.0	1.1	108.6	完形
9	358-01	敲石?	M-J1	SH370	ホルン フェルス	7.2	5.6	1.1	81.9	完形
10	357-02	石皿	M-J1	SH370	ホルン フェルス	※14.1	※6.1	※3.7	※409.0	約3/5欠・被熱
13	340-02	剥片	L-M18	SF369 1層	チャート黒	2.4	1.8	0.5	1.4	完形
14	340-01	剥片	L-M18	SF369 検出中	チャート赤	5.1	3.05	1.0	15.2	完形
16	351-02	敲石	L-N14	SF390	砂岩	※11.0	7.2	4.8	579.2	被熱赤変・約1/5欠 磨石転用・デンプン分析「敲石1」
18	340-03	剥片	L-L18	SF402 7層	チャート灰	3.0	2.5	0.4	3.2	完形
19	351-01	石皿	L-L18	SF402	砂岩	23.4	22.7	5.9	5100	被熱赤変・完形 デンプン分析「石皿4」
20	346-02	磨石	L-T17・18 L-U17・18	SK341	砂岩	※9.9	※7.4	※3.7	※360	被熱赤変 約1/2欠
21	349-02	石皿	L-T17・18 L-U17・18	SK341 最上面	砂岩	※13.3	※6.3	※6.6	※570	被熱赤変 約4/5欠
22	359-02	礫器	—	SK341・SK411	花崗片麻岩	14.3	6.1	3.9	479.5	完形
23	345-03	礫器	—	SK341・SK411	流紋岩	※8.6	※8.2	※5.8	※480	被熱・磨石転用 約1/4欠
24	360-01	礫器	—	SK341・SK411	砂岩	10.6	7.9	5.3	464.9	被熱赤変 完形
25	345-01	敲石	—	SK341・SK411	砂岩	※8.7	※6.3	※5.0	※320	被熱赤変・約1/2欠 デンプン分析「石皿6」
26	344-01	磨石	—	SK341・SK411	砂岩	9.9	7.7	4.8	490	被熱赤変 完形
27	345-02	磨石	—	SK341・SK411	砂岩	※9.1	※5.5	※5.0	※340	被熱赤変 約1/2欠
28	345-04	磨石	—	SK341・SK411	砂岩	※7.0	※6.2	※2.9	※110	被熱赤変 約3/4欠
29	346-04	磨石	—	SK341・SK411	砂岩	※5.8	※5.6	※4.0	※180	被熱赤変 約4/5欠
30	346-03	磨石	—	SK341・SK411	砂岩	※9.4	※6.2	※4.2	※280	被熱赤変 約1/2欠
31	346-05	磨石	—	SK341・SK411	砂岩	※7.8	※7.7	※3.4	※230	被熱赤変・約2/3欠 デンプン分析「石皿5」
32	361-01	磨石	—	SK341・SK411	砂岩	※6.7	※5.9	※4.5	※297.9	被熱赤変 小片
33	361-02	磨石	—	SK341・SK411	砂岩	※6.3	※5.0	※3.5	※131.9	被熱赤変 小片
34	361-03	磨石	—	SK341・SK411	砂岩	※8.3	※5.6	※2.7	※133.4	被熱赤変 約2/3欠
35	346-01	石皿	—	SK341・SK411	砂岩	※21.1	※11.6	※31.8	※1080	被熱赤変 約1/5欠
36	348-01	石皿	L-T17・18 L-U17・18	SK411 最上面	砂岩	※21.4	※16.4	※5.8	※2860	被熱赤変・約1/3欠 デンプン分析「石皿2」
37	350-01	石皿	L-T17・18 L-U17・18	SK411 最上面	砂岩	※15.7	※15.3	※4.0	※1510	被熱赤変 約1/5欠
38	349-01	石皿	L-T17・18 L-U17・18	SK411 最上面	砂岩	※19.1	※9.4	※4.4	※900	被熱赤変 約1/2欠
39	365-03	楔	—	SK343	黒色泥岩	4.0	3.5	1.1	19.1	完形
40	366-02	敲石	L-T15	SK343	流紋岩	※9.9	※5.5	※4.6	※340.2	風化大・使用痕不明瞭 約1/5欠
41	364-02	磨石	L-T15	SK343	ホルン フェルス	※7.8	※4.5	※3.6	※176.4	被熱 約1/2欠
42	365-01	石皿	—	SK343 底石	砂岩	15.0	14.0	5.2	197.0	被熱赤変 完形
43	366-01	石皿	—	SK343 底石	流紋岩	※18.2	※16.0	※5.8	※2280	被熱赤変 約1/4欠・磨面不明瞭
44	363-01	石皿	—	SK343 底石	砂岩	29.9	18.6	6.3	4990	被熱赤変
45	364-01	石皿	—	SK343 底石	砂岩	※25.7	※15.3	※6.0	※3780	被熱赤変・磨面弱い・約1/5欠 デンプン分析「石皿1」

第20表 石器・石製品観察表（2/3）

法量の※印は復元または残存計測値

報告 番号	実測 番号	器種等	グリッド	遺構 層位	石材	法量(cm)(g)				備考
						長辺	短辺	厚さ	重さ	
46	367-02	礫器	—	SK348	緑色岩	11.0	8.4	4.3	279.5	完形
47	367-03	礫器	—	SK348	緑色岩	10.4	6.8	5.0	368.5	被熱 完形
48	367-01	磨石	—	SK348	砂岩	※7.2	※7.1	※4.7	※297.4	被熱 約2/3欠
49	368-01	磨石	L-T10	SK348	砂岩	※10.3	※8.1	※4.3	※501.9	被熱赤変・磨面弱い・約1/3欠 デンプン分析「石皿7」
50	368-02	石皿	—	SK348	流紋岩	※17.3	※13.0	※5.6	※1764.3	風化大・被熱 使用面不明瞭・約2/3欠
51	369-01	石皿	—	SK348	砂岩	※16.8	※16.7	※6.3	※217.0	被熱赤変 約1/2欠
52	371-03	楔	—	SK349 1層	泥岩	7.0	4.5	1.6	115.8	礫素材 完形
53	370-01	礫器	—	SK349 1層	片麻岩	8.3	5.2	3.7	157.4	完形
54	370-03	礫器	—	SK349 1層	ホルン フェルス	8.7	6.0	3.2	220.9	完形
55	370-02	磨石	L-S7	SK349	砂岩	※8.7	※5.4	※3.3	※174.9	被熱赤変・約1/2欠 デンプン分析「石皿8」
56	372-01	打製石斧?	—	SK351	火砕岩	※10.7	※6.1	※2.3	※173.9	風化大 約1/3欠
57	373-01	礫器	—	SK351	砂岩	12.9	11.2	7.6	1000	被熱 完形
58	373-02	礫器	—	SK351	緑色岩	10.0	8.8	6.2	513.4	風化大・被熱 完形
59	371-01	磨石	—	SK351	砂岩	※6.2	※4.9	※4.1	※125.8	被熱赤変 小片
60	371-02	石皿	—	SK351	砂岩	※5.7	※4.6	※3.8	※113.8	被熱赤変・磨面不明瞭 小片
61	371-04	石皿	—	SK351	砂岩	※11.4	※8.2	※3.2	※390.2	被熱赤変・磨面不明瞭 小片
62	372-02	石皿	—	SK351 底石	砂岩	※12.8	※12.3	※5.3	※1080	被熱赤変 約2/3欠
63	377-02	楔	—	SK357	砂岩	9.1	8.4	2.1	245.9	礫素材 完形
64	379-02	礫器	M-O1	SK357	砂岩	12.5	7.8	4.7	663.8	被熱赤変・石皿転用 完形
65	378-02	磨石	M-O1	SK357	砂岩	12.4	10.3	5.1	80.0	被熱赤変 完形
66	377-01	石皿	—	SK357	砂岩	※5.5	※5.3	※3.6	※145.0	被熱 小片
67	379-01	石皿	—	SK357	砂岩	※19.3	※10.9	※7.2	※1840	被熱赤変 約1/2欠
68	375-01	礫器	—	SK383 底石	斑礫岩	22.9	15.2	10.4	4200	被熱・台石転用か 完形
69	374-01	石皿	—	SK383 底石	流紋岩	※14.9	※14.7	※6.5	※1880	風化大・被熱赤変 約1/2欠
70	727-06	石皿	M-S2	SK744	砂岩	※9.4	※9.3	※4.2	※418.4	被熱赤変・小片 デンプン分析「石皿9」
71	732-01	礫器	M-S2	SK744	含礫砂岩	12.0	9.5	4.6	495.0	完形
73	378-01	打製石斧	J-N8	SK399	片麻岩	12.2	7.4	1.9	199.6	被熱 完形
74	376-01	石棒	J-L14	SK403	流紋岩	※16.0	※9.5	※8.0	※1910	被熱赤変・磨石に転用か 破片
83	340-11	切目 石錘	L-U17	SK316 底面	ホルン フェルス	※6.2	※2.05	—	※9.0	破片
84	340-12	切目 石錘	L-U17	SK316 底面	ホルン フェルス	7.7	3.25	1.2	46.8	両端両面 完形
85	341-01	剥片	L-U17	SK316 底面	チャート赤	2.75	2.6	0.6	4.1	完形
95	342-02	石鏃状 未製品	L-R16	Pit2	緑色岩	3.4	2.4	0.5	4.1	約1/3欠
96	341-07	剥片	L-S15	Pit1	緑色岩	2.9	2.45	0.45	2.3	完形
97	341-06	切目 石錘	J-M11	Pit1	泥岩	6.45	3.95	1.7	72.7	両端両面 完形
98	341-08	切目 石錘	J-M12	Pit3	泥岩	5.1	3.25	1.4	29.0	両端両面 完形
101	727-02	剥片	南区	表土掘削中	サヌカイト	2.13	1.43	0.68	1.3	完形
102	343-05	剥片	L-M17	検出中	緑色岩	2.3	1.9	0.5	2.0	完形
103	727-03	剥片	南区	表採	サヌカイト	2.96	2.6	0.62	5.0	完形
104	343-01	剥片	北区	表採	サヌカイト	5.9	5.85	0.65	27.0	完形
105	343-04	楔	—	排土中	泥岩	5.4	5.0	1.1	44.0	完形 礫素材

第20表 石器・石製品観察表 (3/3)

法量の※印は復元または残存計測値

報告 番号	実測 番号	器種等	グリッド	遺構 層位	石材	法量(cm)(g)				備考
						長辺	短辺	厚さ	重さ	
106	343-03	磨製石斧	—	排土中	硬質砂岩	※5.4	※4.5	※2.95	※96.2	風化大破片
107	343-02	石核	—	排土中	チャート黒	5.5	5.05	—	117.5	完形
108	354-02	礫器	—	包含層	ホルンフェルス	9.0	8.3	4.4	345.5	完形
109	727-05	石皿	M-K21	風倒木痕	砂岩	※11.5	※10.3	※4.4	※779.3	約2/3欠
114	364-03	敲石	L-N25	SK306	砂岩	※9.2	※4.8	※2.9	※161.8	被熱赤変 約2/3欠
136	340-06	UF	J-K11	SH385 貼床	チャート灰	1.8	1.6	0.5	1.3	完形
140	340-10	切目 石錘	J-K19	SH393	砂岩	7.65	2.35	0.9	30.8	両端両面 完形
189	353-01	槌石	J-L14	SH387 床面	砂岩	20.8	7.6	3.4	705.8	磨石転用 完形
190	340-08	切目 石錘	J-L14	SH387	砂岩	6.25	3.75	2.2	71.1	両端両面・敲石転用 完形
191	334-01	磨製石斧	L-14	SH387	ホルンフェルス	※8.4	※5.1	※2.6	※147.9	被熱 約1/2欠・両刃
192	340-07	楔	J-L14	SH387	チャート黒	2.6	2.5	0.7	6.2	完形
193	340-09	UF	J-L14	SH387	チャート赤	2.9	2.45	0.55	3.7	完形
220	712-01	砥石	I-O18	SH624	泥岩	※10.5	※5.0	※4.9	※565.9	使用面4面 No.14
238	205-08	砥石	K-U25	SH208 埋土	流紋岩	※3.9	※1.9	※1.5	※20.2	約1/2欠
249	326-02	磨石	L-M22 L-M23	SH304内 土坑底面	砂岩	※7.9	※5.9	※4.0	※242.1	小片
260	340-04	楔	L-O20	SH310 カマド	チャート灰	3.3	1.65	0.6	4.5	混じり込み 完形
261	340-05	UF	L-O20	SH310	チャート灰	2.45	1.9	0.7	3.5	完形
262	323-02	砥石	—	SH310	流紋岩	※5.7	※5.2	※3.1	※108.5	約2/3欠
263	323-01	砥石	—	SH310	砂岩	※6.2	※6.2	※3.6	※256.7	約2/3欠
264	324-01	金床石	—	SH310	砂岩	※7.3	※12.2	※4.6	※530.0	小片
273	355-01	金床石	L-S7	SH317	砂岩	17.9	15.4	8.5	2980	被熱痕あり・鉄付着 完形
283	328-01	磨石	L-M15	SH329	砂岩	※10.7	※6.2	※2.4	※257.8	小片
319	341-04	剥片	L-W9	SB321 Pit2 柱痕跡	チャート灰	3.2	2.3	0.5	4.1	完形
320	341-05	UF	L-W9	SB321 Pit2 柱痕跡	チャート灰	2.05	1.4	0.45	0.8	完形
324	342-01	切目 石錘	L-S7	SB342 Pit1 堀形	砂岩	6.5	3.4	1.4	39.7	両端両面 完形
414	341-02	剥片	L-X11	SK320	チャート灰	2.0	1.7	0.25	1.1	下端欠損
419	341-03	剥片	L-P11	SK326	チャート灰	3.7	3.6	2.15	28.1	完形
450	729-01	金床石 砥石	M-G20	SK702	砂岩	14.0	9.5	11.4	2470	被熱・鉄付着 No.3
473	727-04	剥片	M-K22	SK721	チャート赤	3.9	1.9	0.83	6.4	完形

第21表 鍛冶滓・鉄製品観察表

法量の※印は復元または残存計測値

報告 番号	実測 番号	種類	器種等	グリッド	遺構 層位	法量(cm)(g)				備考
						長辺	短辺	厚さ	重さ	
265	382-03	鉄製品	釘状	—	SH310	※5.9	※0.6	※0.5	※2.9	破片
266	382-02	鉄滓	椀形	—	SH310	5.6	4.0	2.0	54.3	TNKN-2
285	382-01	鍛冶滓	椀形	L-N14	SH329 カマド	7.0	5.4	2.6	125.4	鉄・銅含む TNKN-3
308	731-03	鉄製品	板状破片	M-M21	SH732	※1.8	※1.6	0.2	※1.1	破片
313	217-01	鉄滓	—	K-W17	SB202 Pit1	5	3.5	1.8	37.1	磁着せず
341	220-02	鉄製品	板状製品	L-U2	SK209 検出面	※3.2	2.5	0.3	※3.6	破片
413	382-04	鉄製品	L字状	L-X10	SK320	※3.4	※0.7	0.8	※2.9	破片
508	731-02	鉄製品	釘状	L-X13	Pit4	※2.3	※0.5	※0.5	※1.1	破片
509	731-01	鉄製品	鉋刀?	S-A2	Pit1	6.0	4.8	0.6	54.8	

第22表 出土鍛冶滓一覧

遺構名	点数	重量(g)	備考
SH310	3	197.5	うち椀形2点を分析
SH329竈	1	121.5	椀形 分析の結果銅含有
SB202	1	37.1	
SK307	1	2.8	
SK313	2	50.7	うち椀形1点を分析
SK320	13	184.9	うち椀形1点を分析
SK332	2	76.9	うち椀形1点を分析
SK702	4	40.0	
L-S15P1	2	72.3	うち椀形1点
合計	29	783.7	

写真図版



写 34 米軍撮影空中写真（昭和 21 年）



写 35 第 2 次調査区遠景（南から）



写 36 第 2 次調査区垂直全景（上が北）



写 37 第 3 次調査区南区全景（西から）



写 38 第 3 次調査区南区垂直全景（上が北）



写 39 第 3 次北区・第 6 次調査区垂直全景（上が北）



写 40 第 3 次北区・第 6 次調査区全景（東から）



写 41 第 7 次調査区北区垂直全景（上が北）



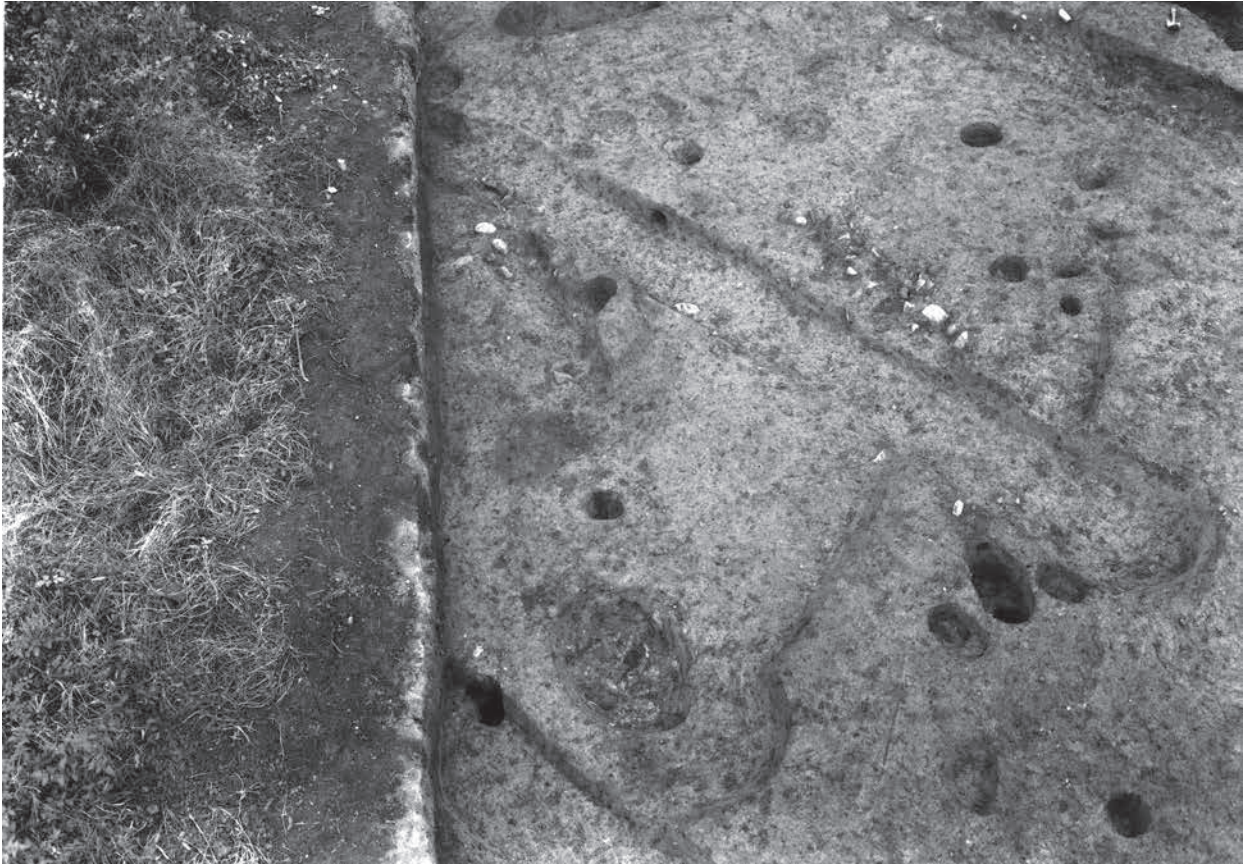
写 42 第 7 次調査区北区全景（東から）



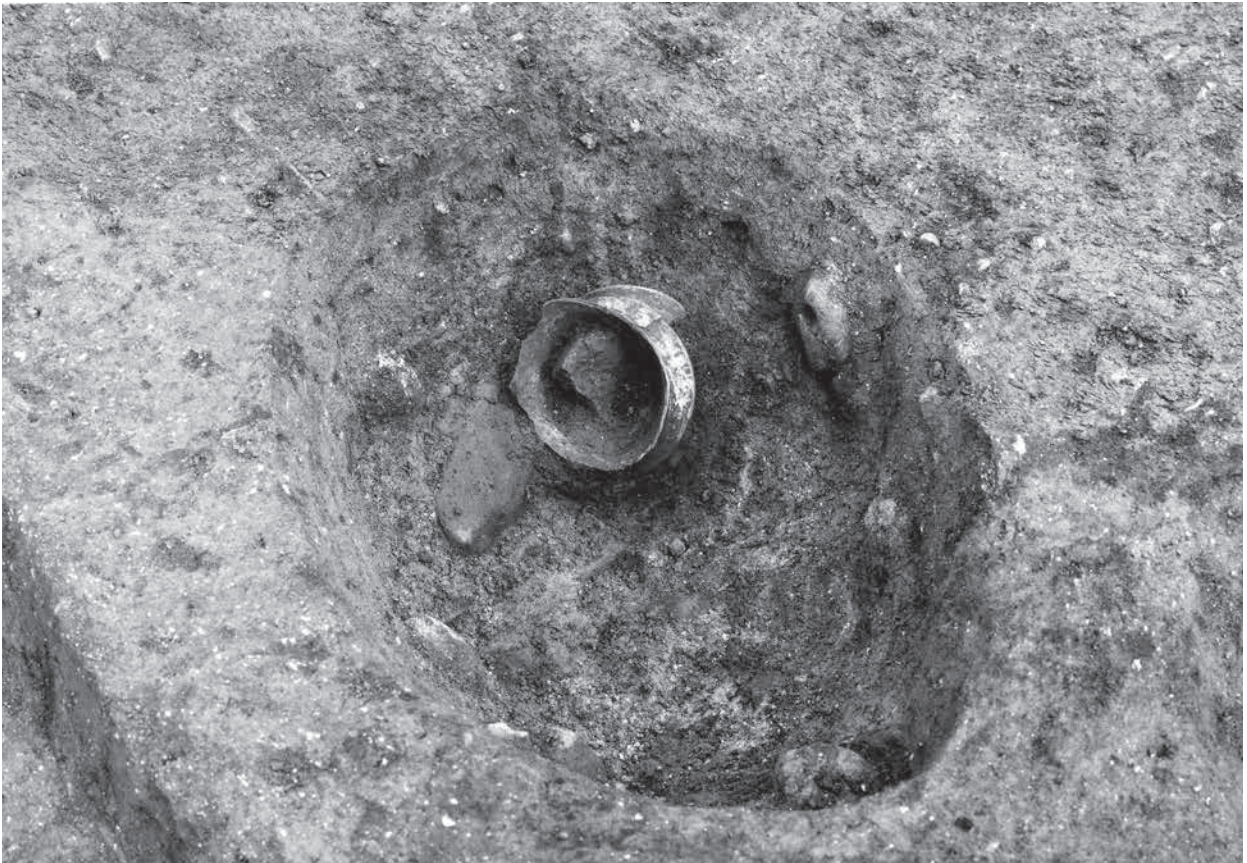
写 43 第 7 次調査区南区垂直全景（上が北）



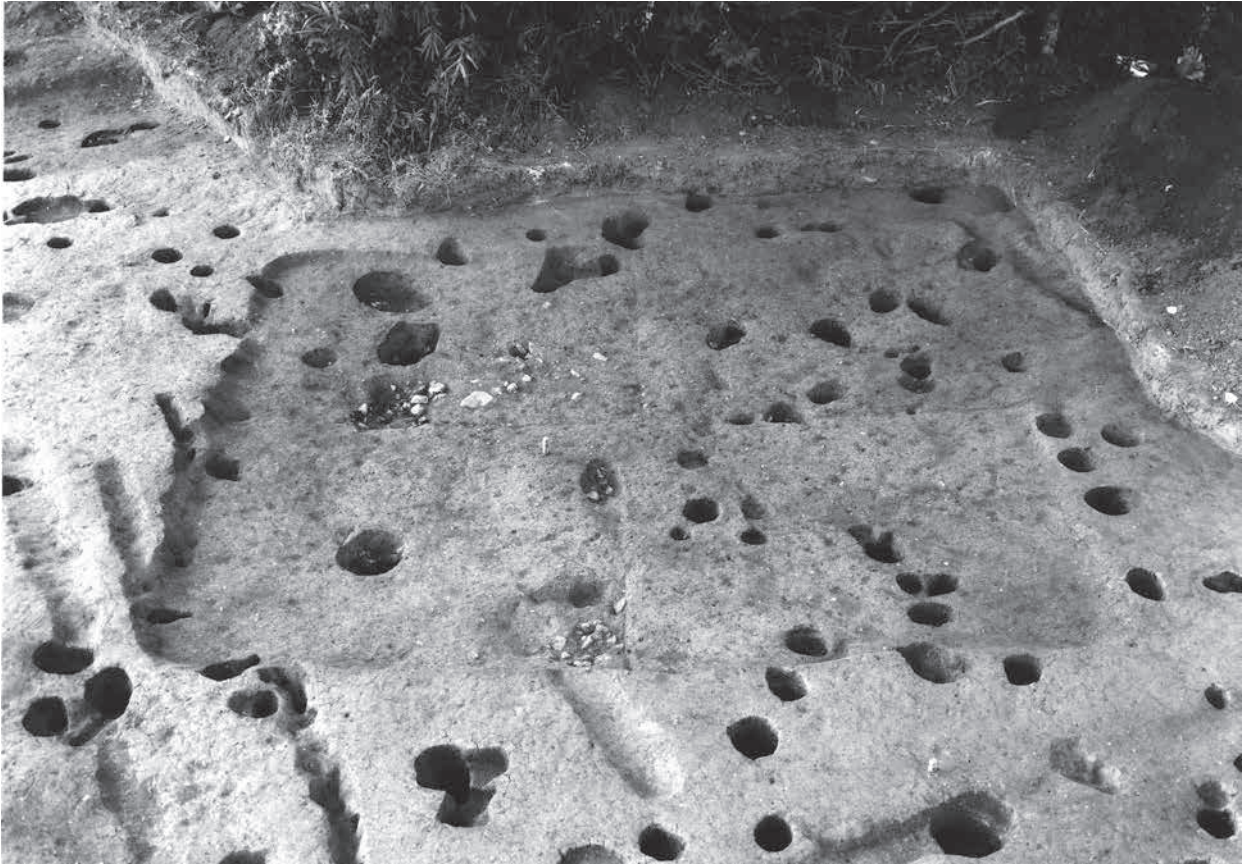
写 44 第 7 次調査区南区全景（東から）



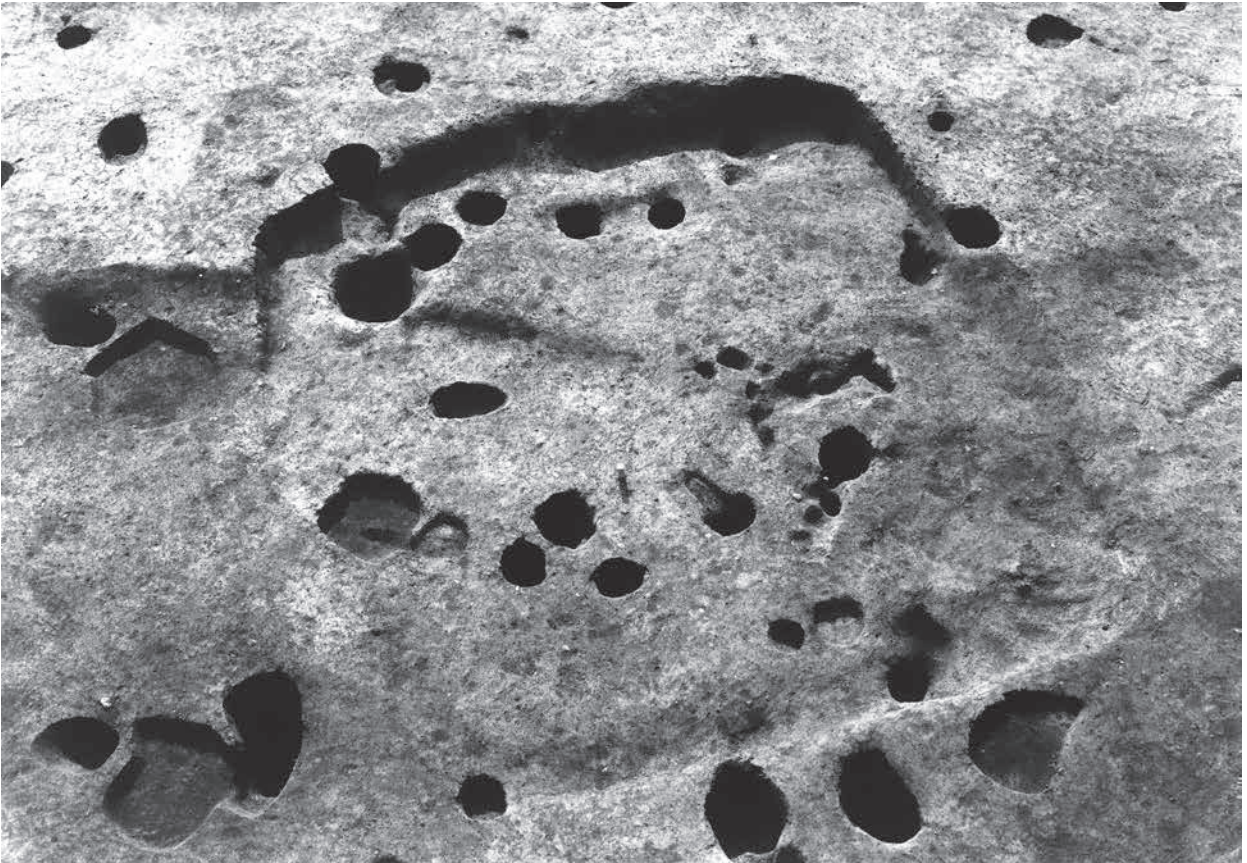
写 45 SH 201 (南から)



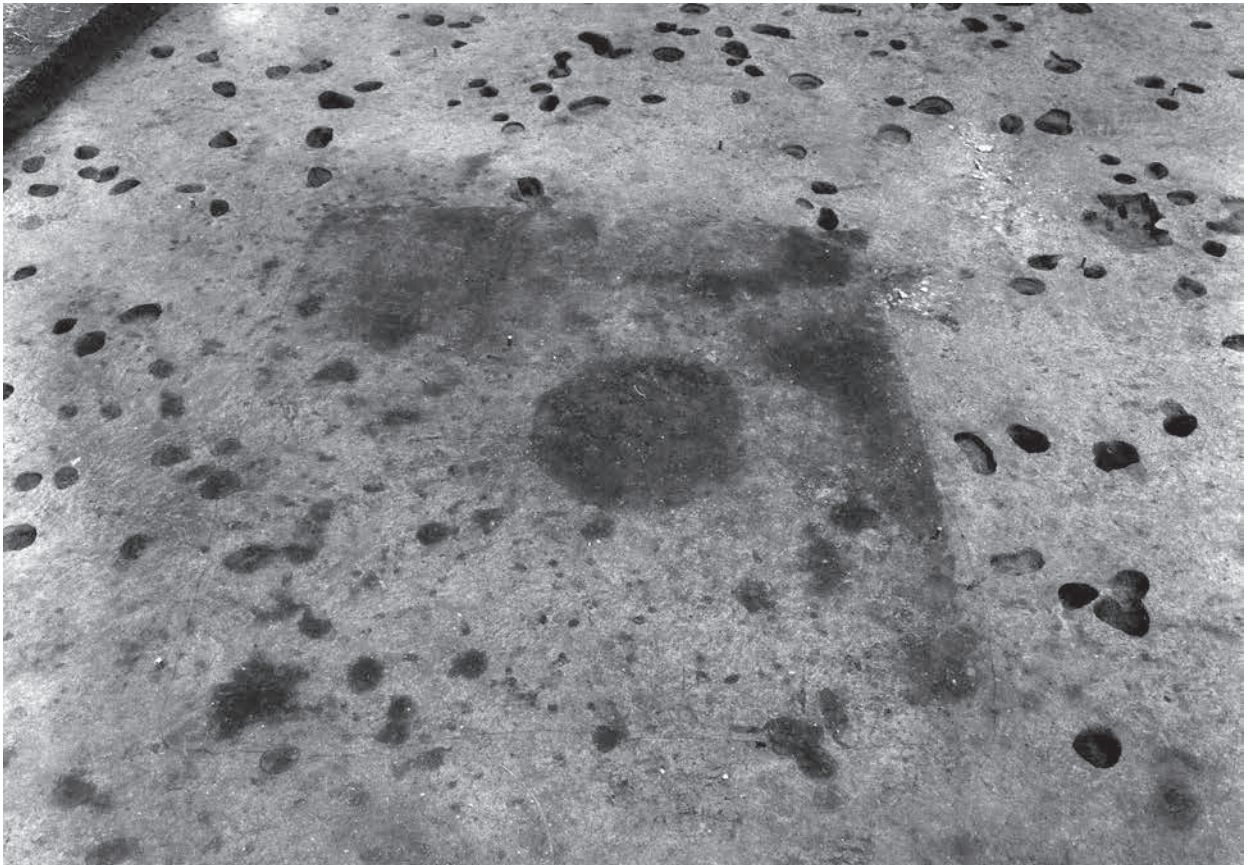
写 46 SH 201 貯蔵穴遺物出土状況 (南から)



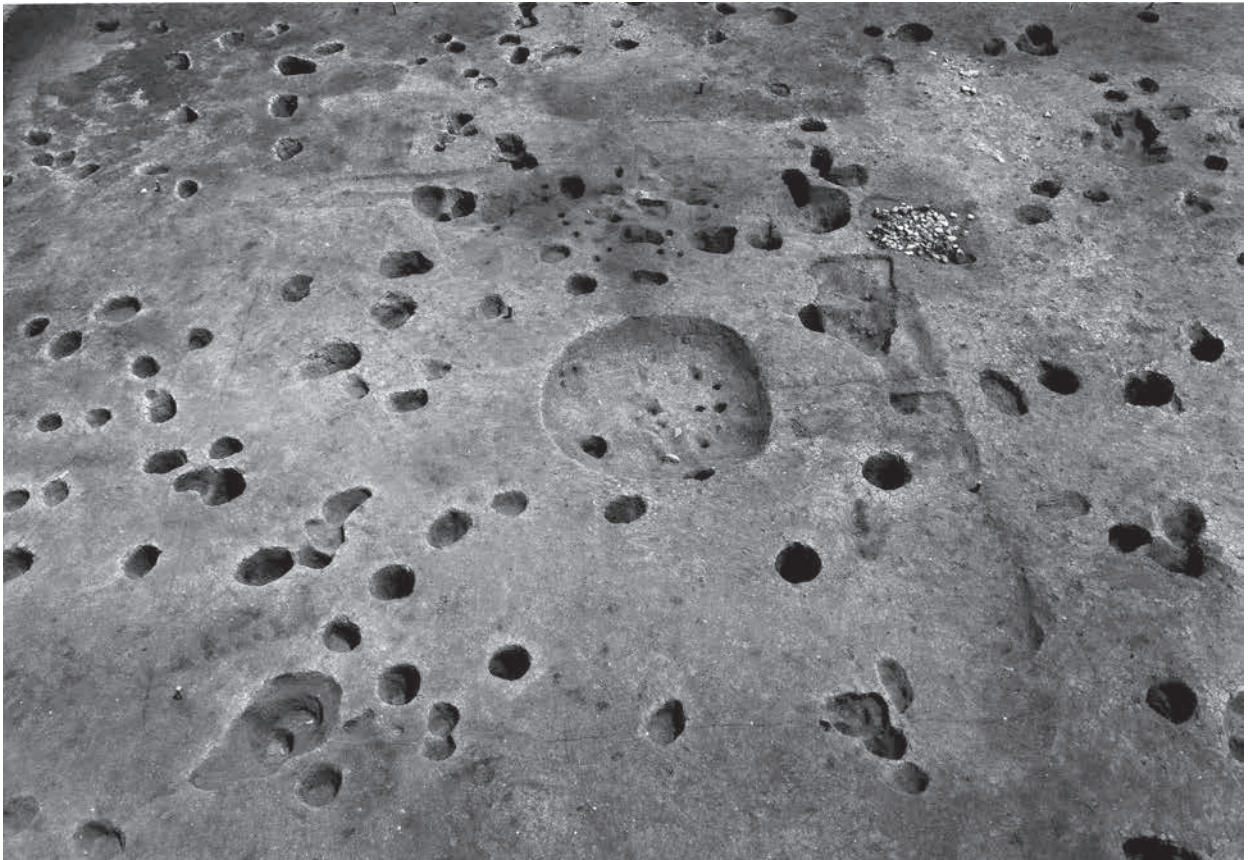
写 47 SH 208・SK 213 (東から)



写 48 SH 211 (北から)



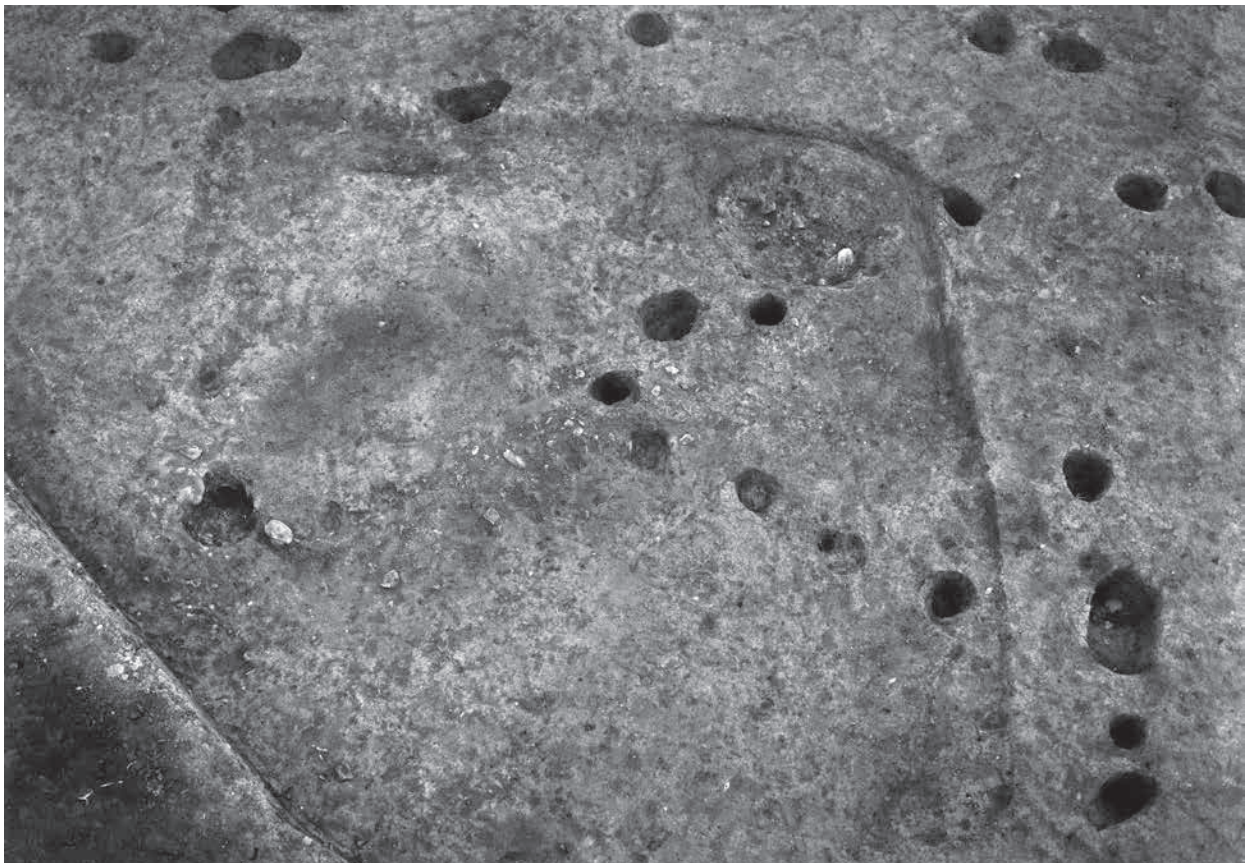
写 49 SH 304 検出状況 (西から)



写 50 SH 304 完掘 (西から)



写 51 SH 304 中央土坑 (南東から)



写 52 SH 311 (西から)



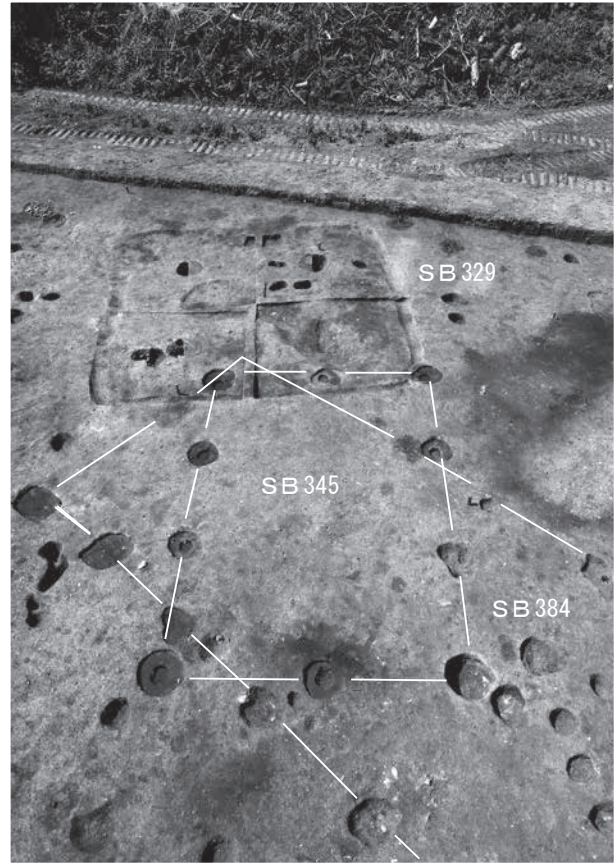
写 53 S H 310・352・354・355 検出状況（北東から）



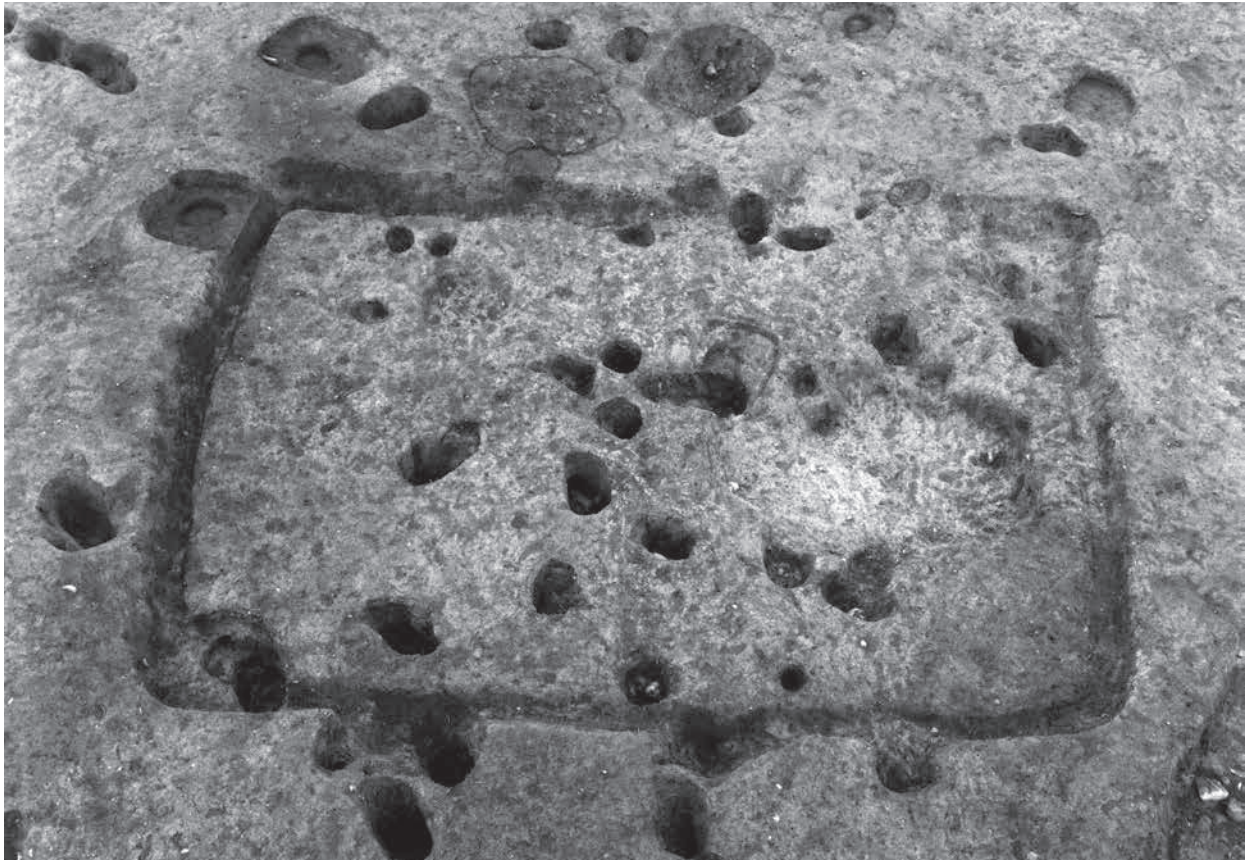
写 54 S H 310・352・353・354・355（南から）



写 55 SH 317・319, SB 342 (南から)



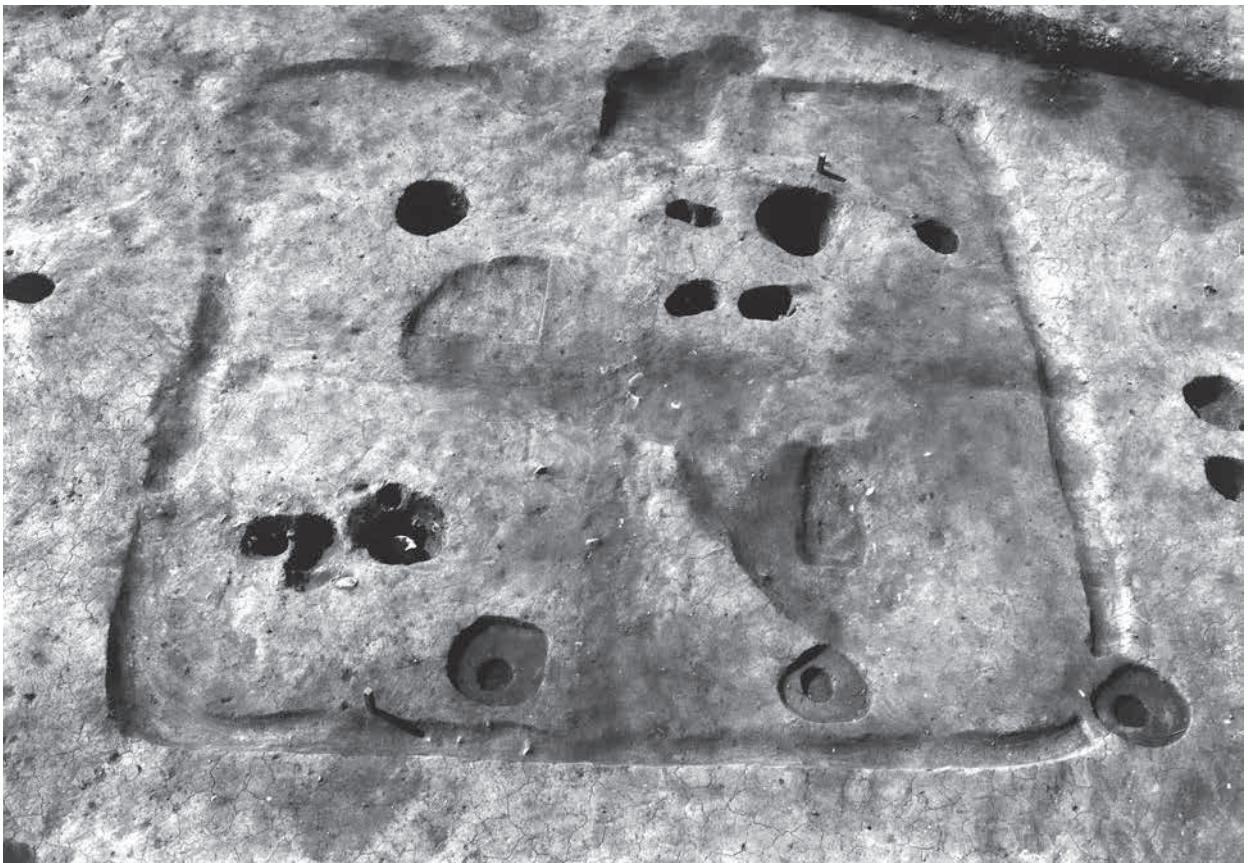
写 56 SH 329, SB 345・384 (南から)



写 57 SH 317 (南から)



写 58 SH 319 (南から)



写 59 SH 329 (南から)



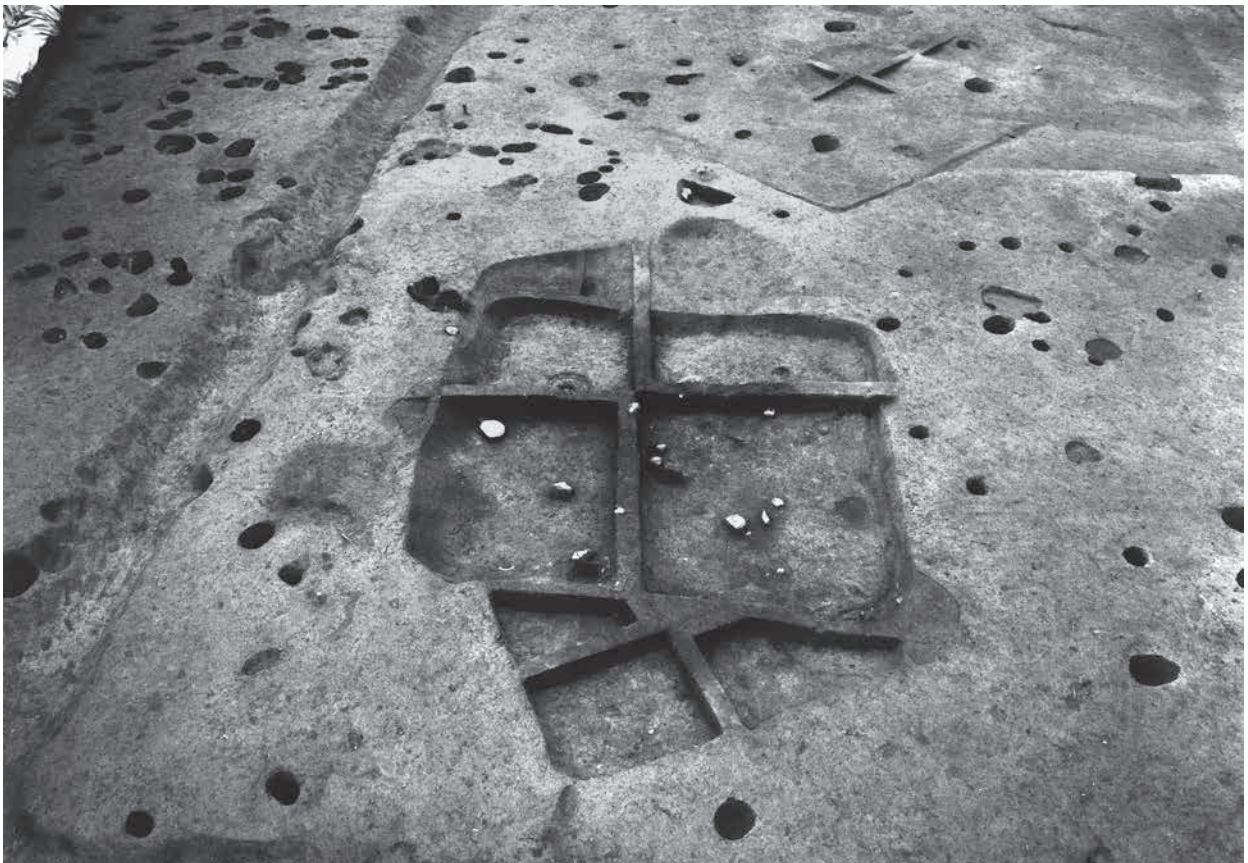
写 60 SH 370 遺物出土状況 (南から)



写 61 SH 386 (南から)



写 62 SH 386 (南東から)



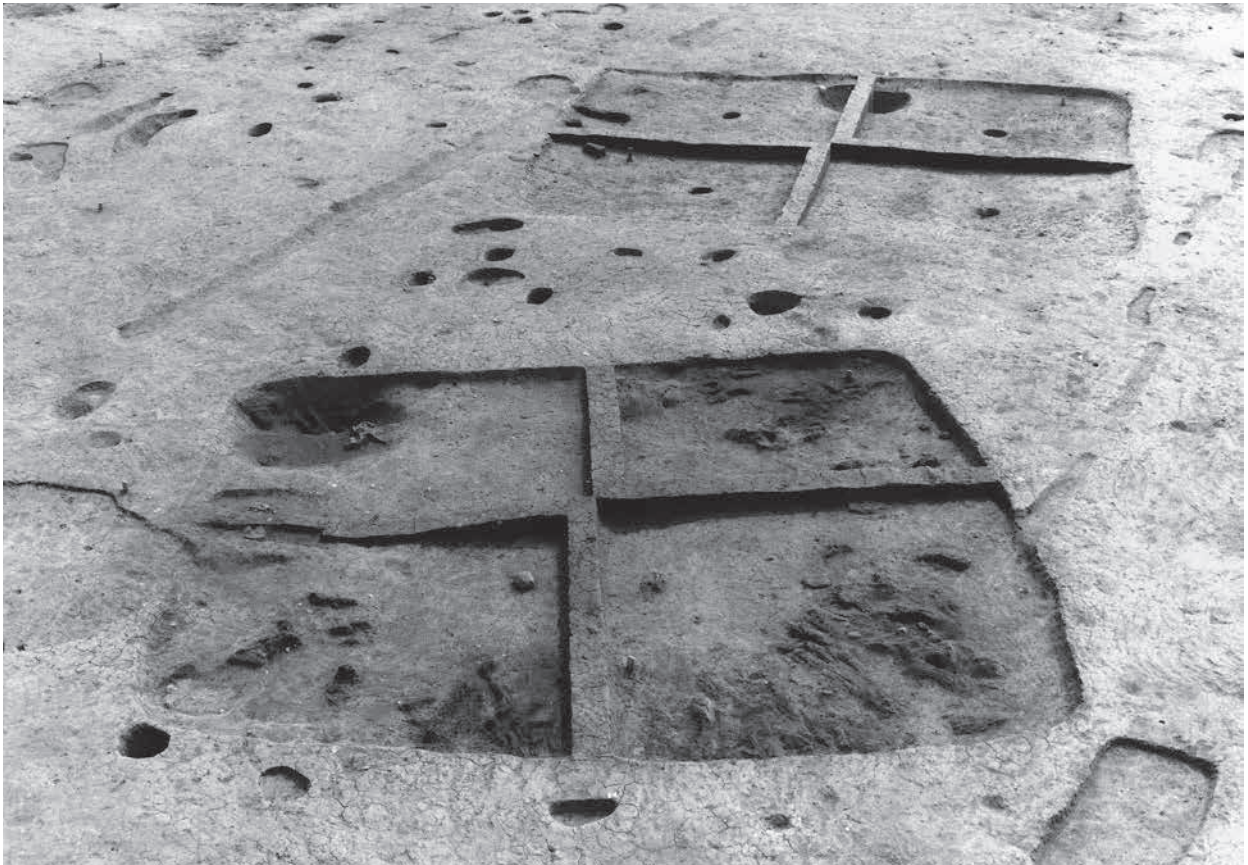
写 63 SH 387・389, SK 395・397 (東から)



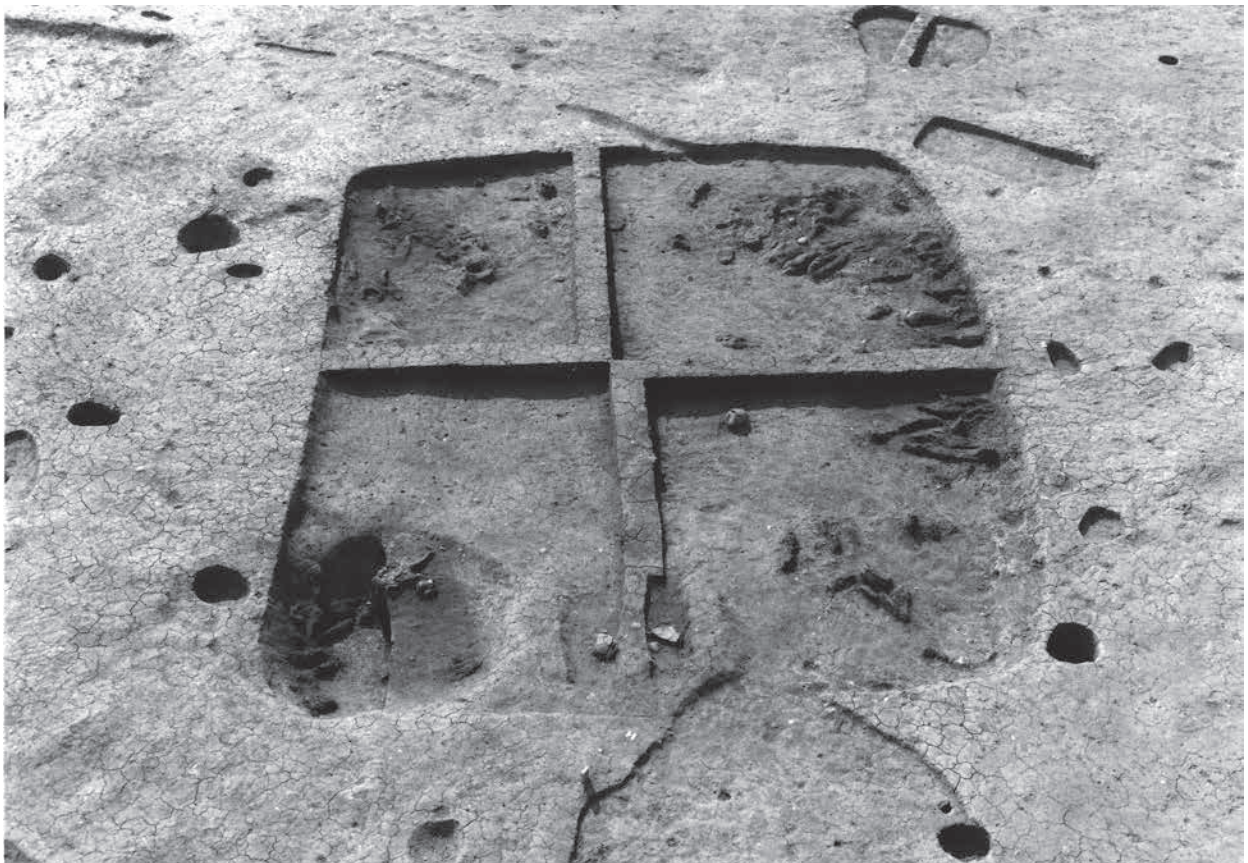
写 64 SH 393, SK 404 (南から)



写 65 SH 394 (北から)



写 66 SH 624・628 (北から)



写 67 SH 624 遺物出土状況 (東から)



写 68 SH 624・628 遠景 (西から)



写 69 SH 701・706 (南東から)



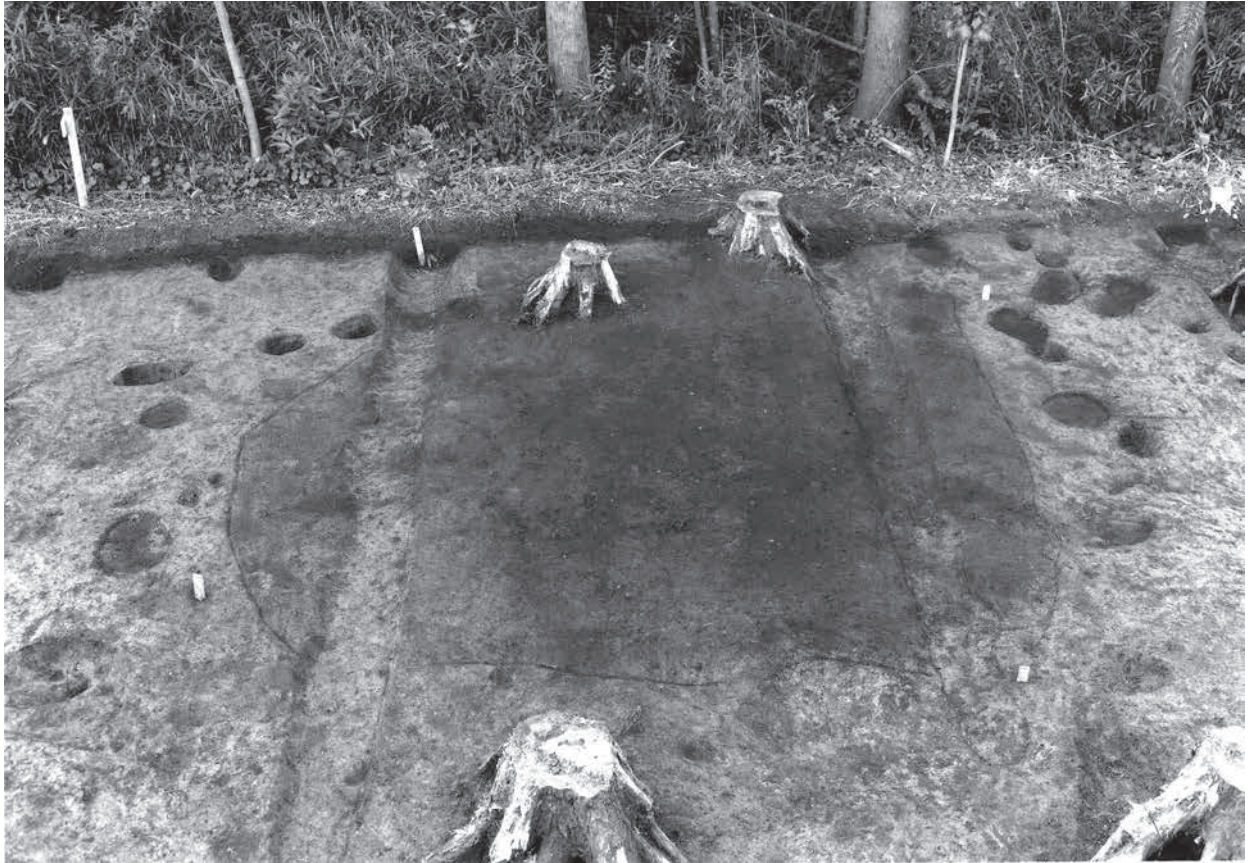
写 70 SH 704 (北西から)



写 71 SH 713 (西から)



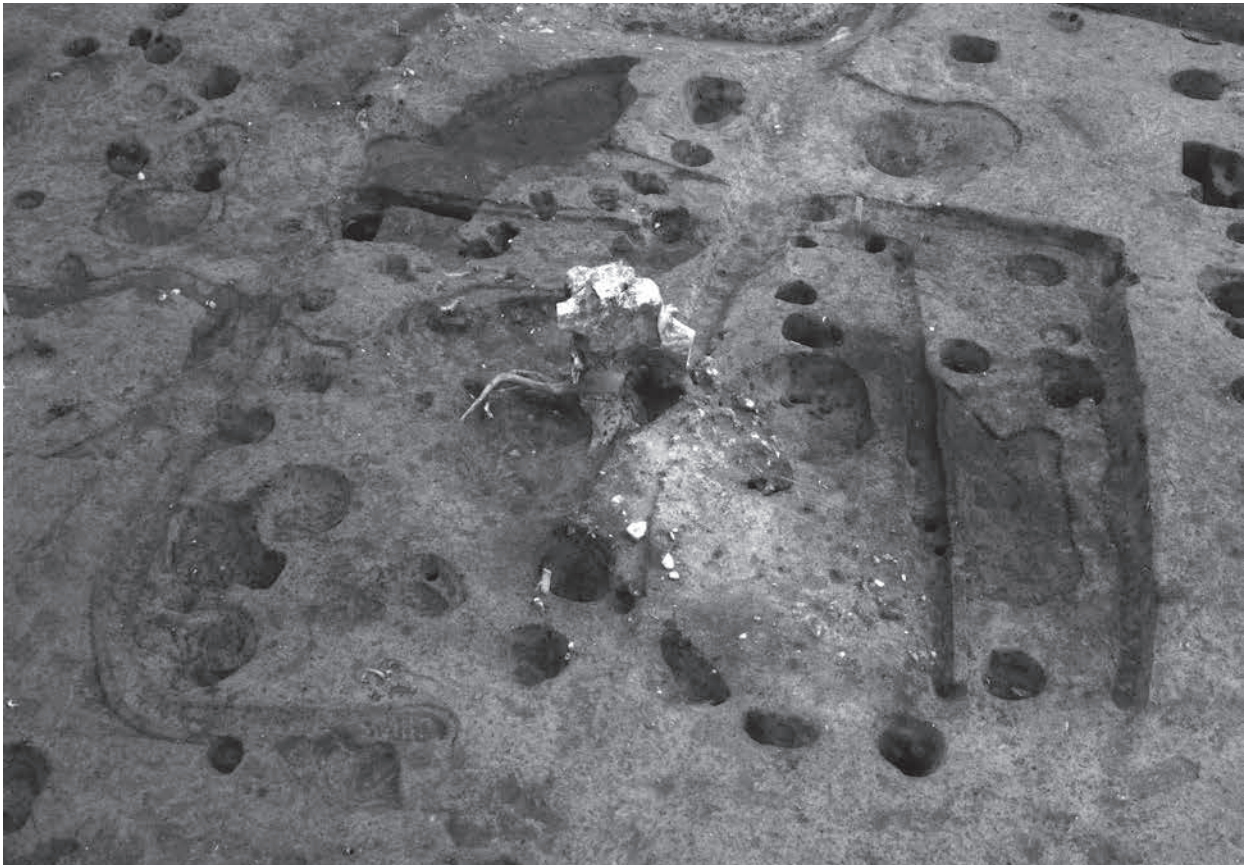
写 72 SH 713 カマド出土状況 (西から)



写 73 SH 727 検出状況 (北から)



写 74 SH 730 (北から)



写 75 SH 731・732 (北西から)



写 76 SH 734 (北東から)



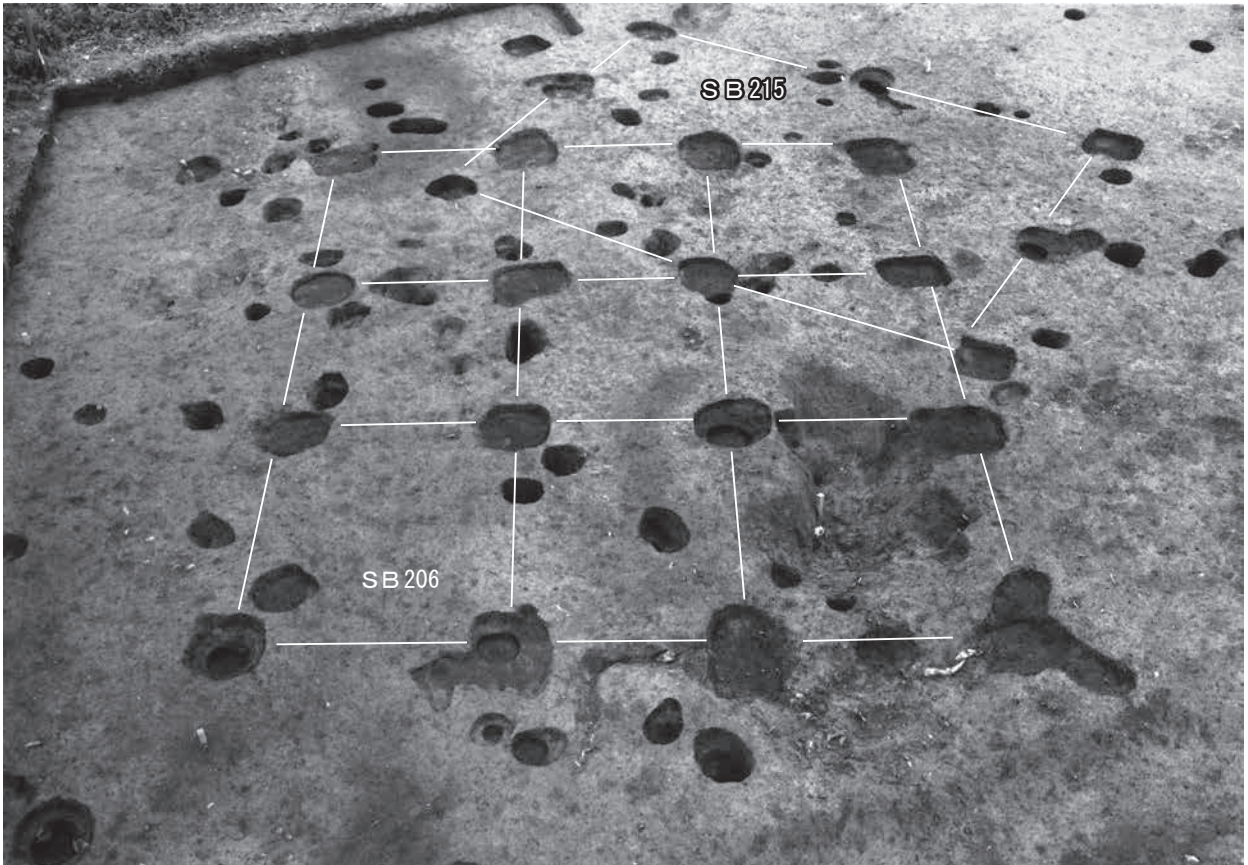
写 77 SH 745 カマド出土状況 (西から)



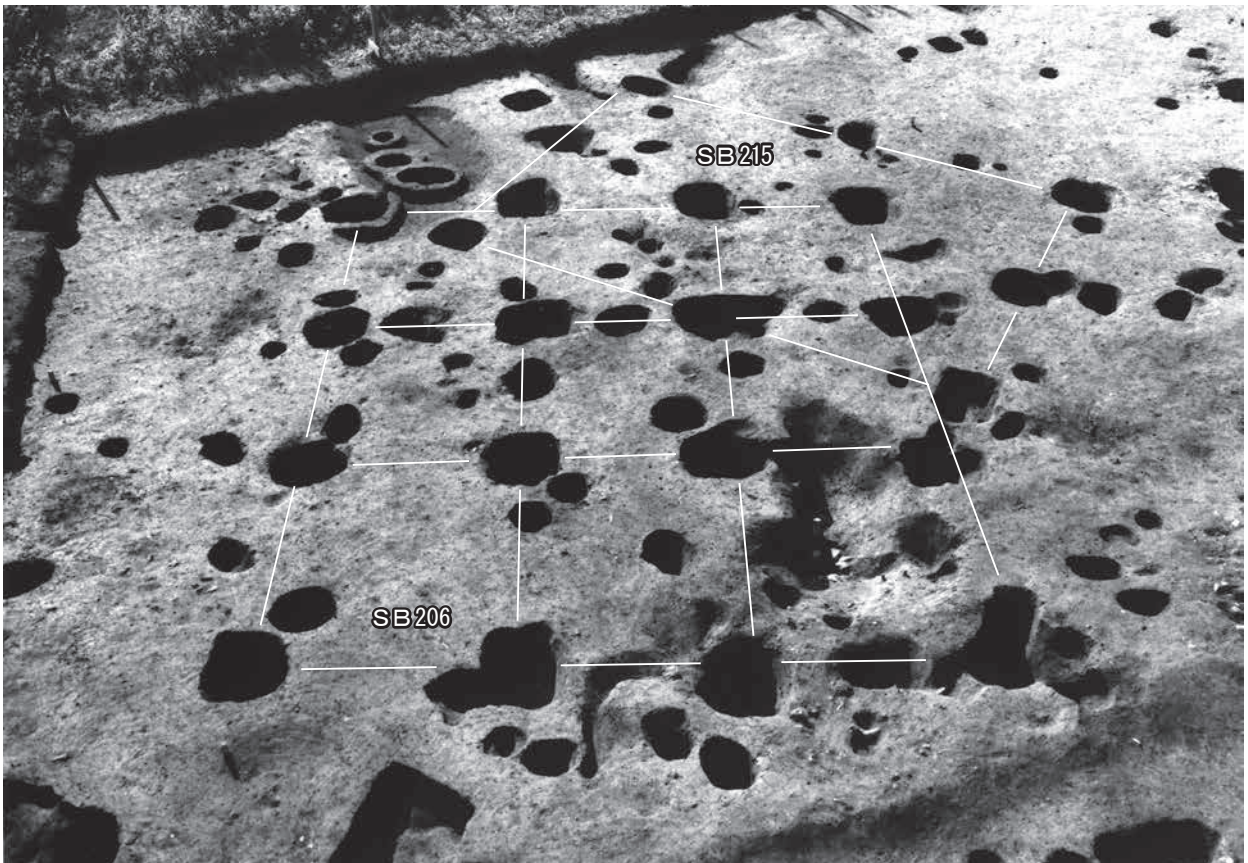
写 78 SB 202 (南東から)



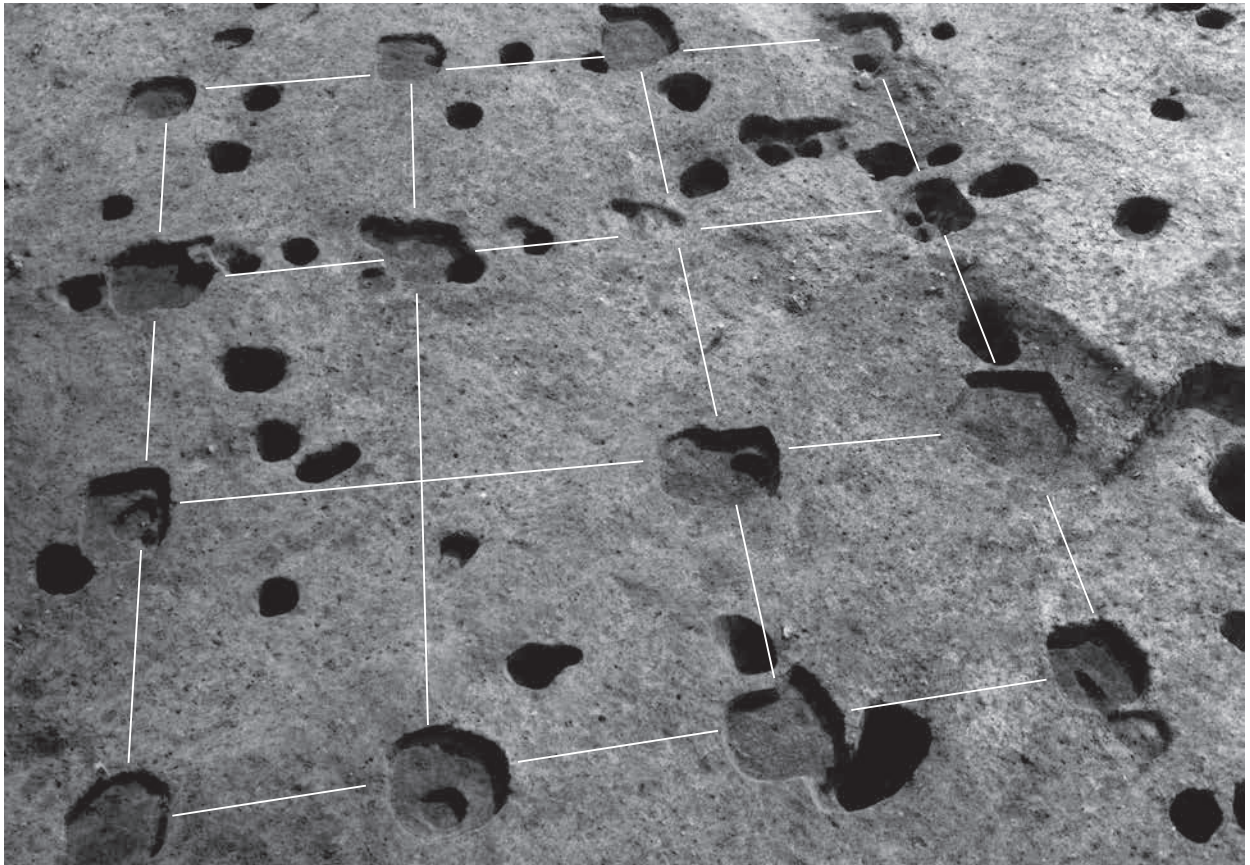
写 79 SB 205 (東から)



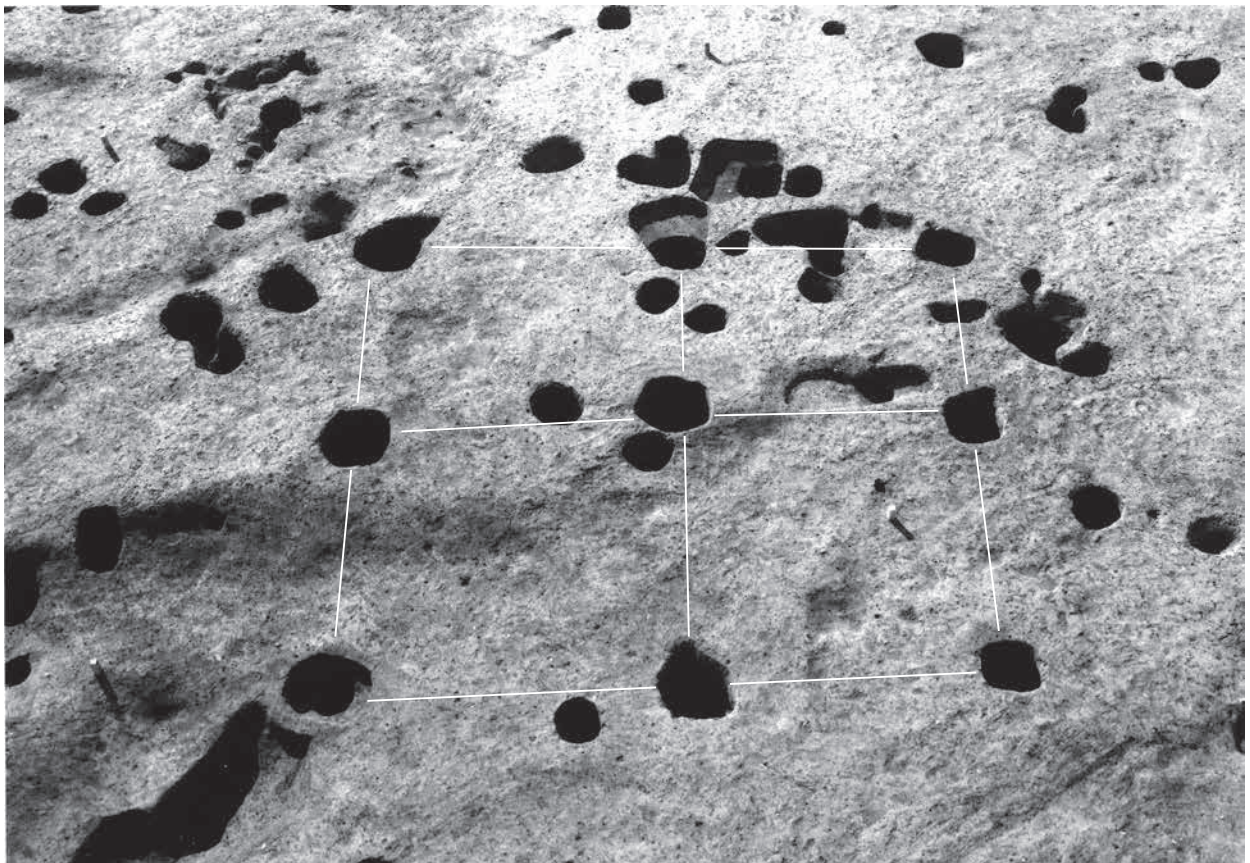
写 80 SB 206・215 検出状況 (北から)



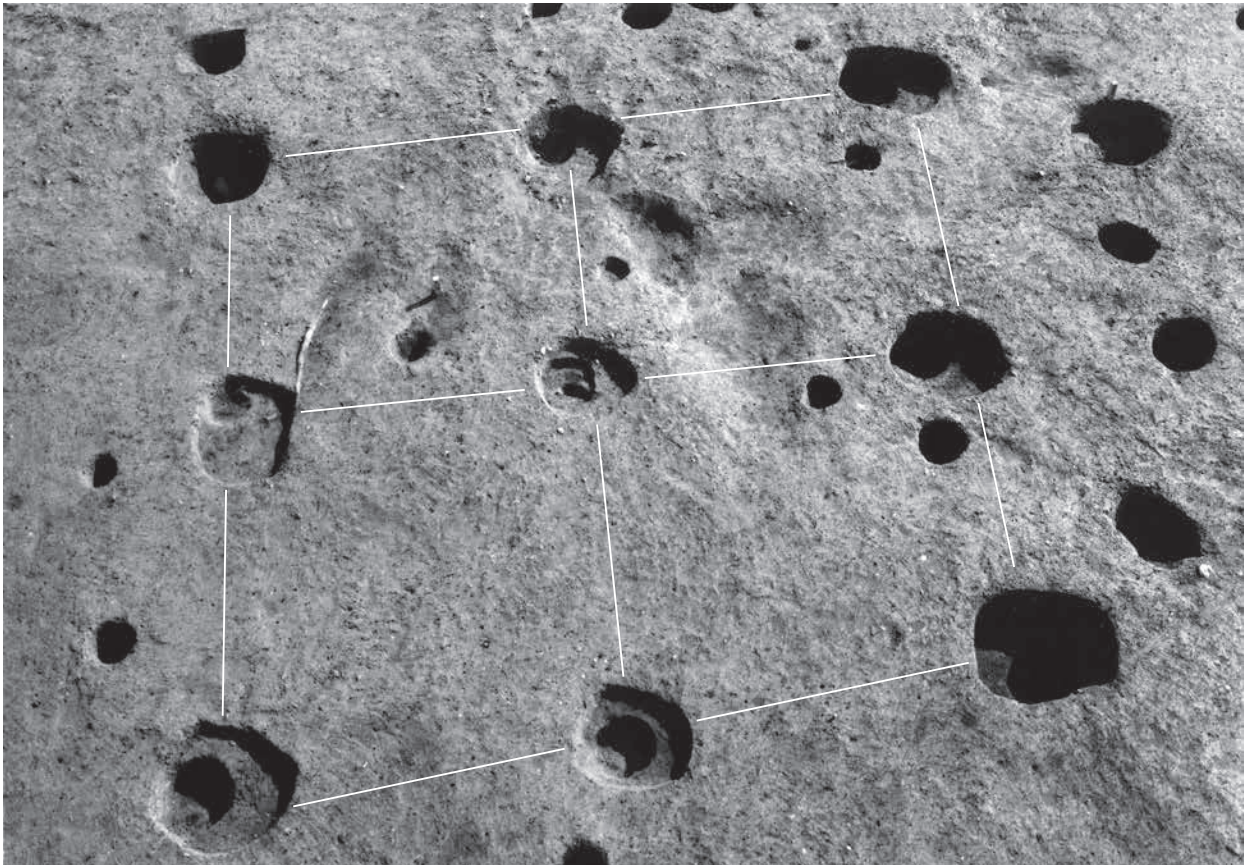
写 81 SB 206・215 (北から)



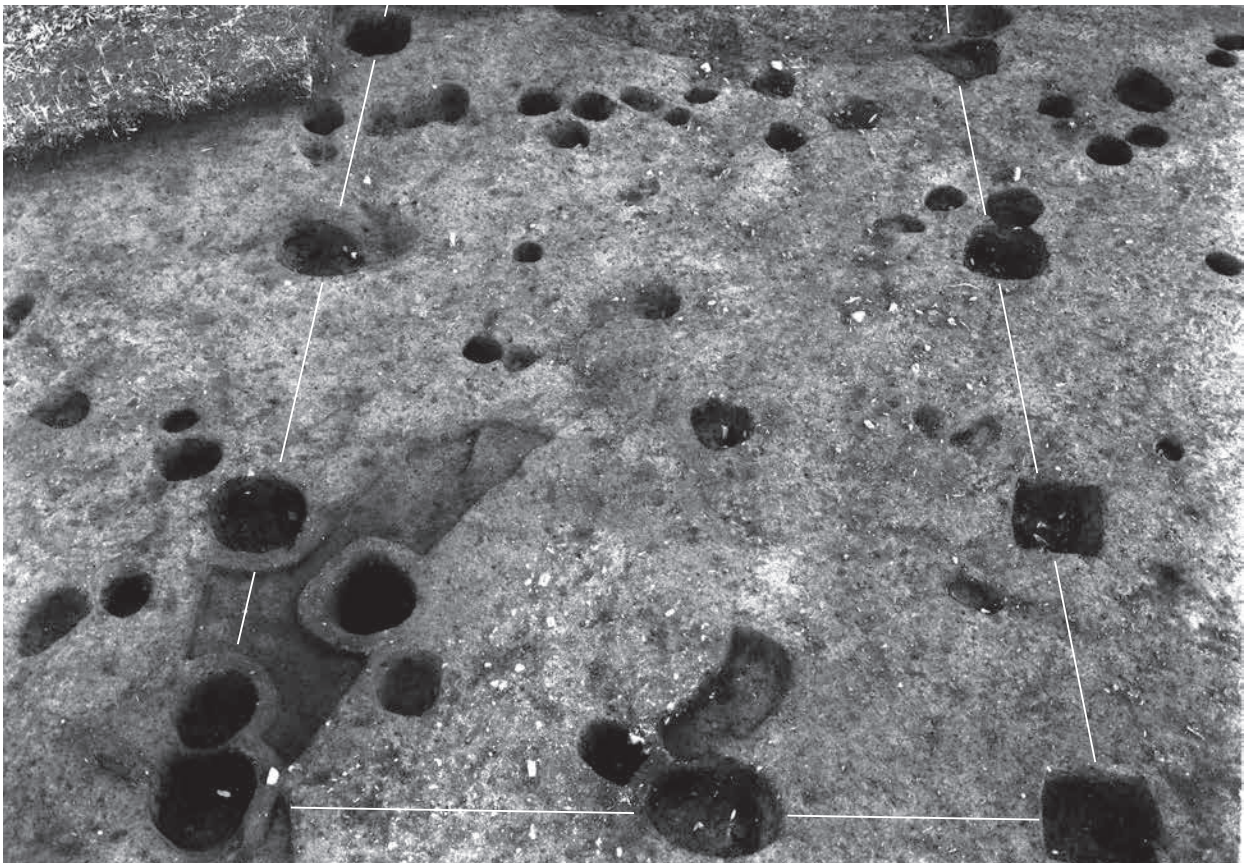
写 82 SB 214 検出状況 (北西から)



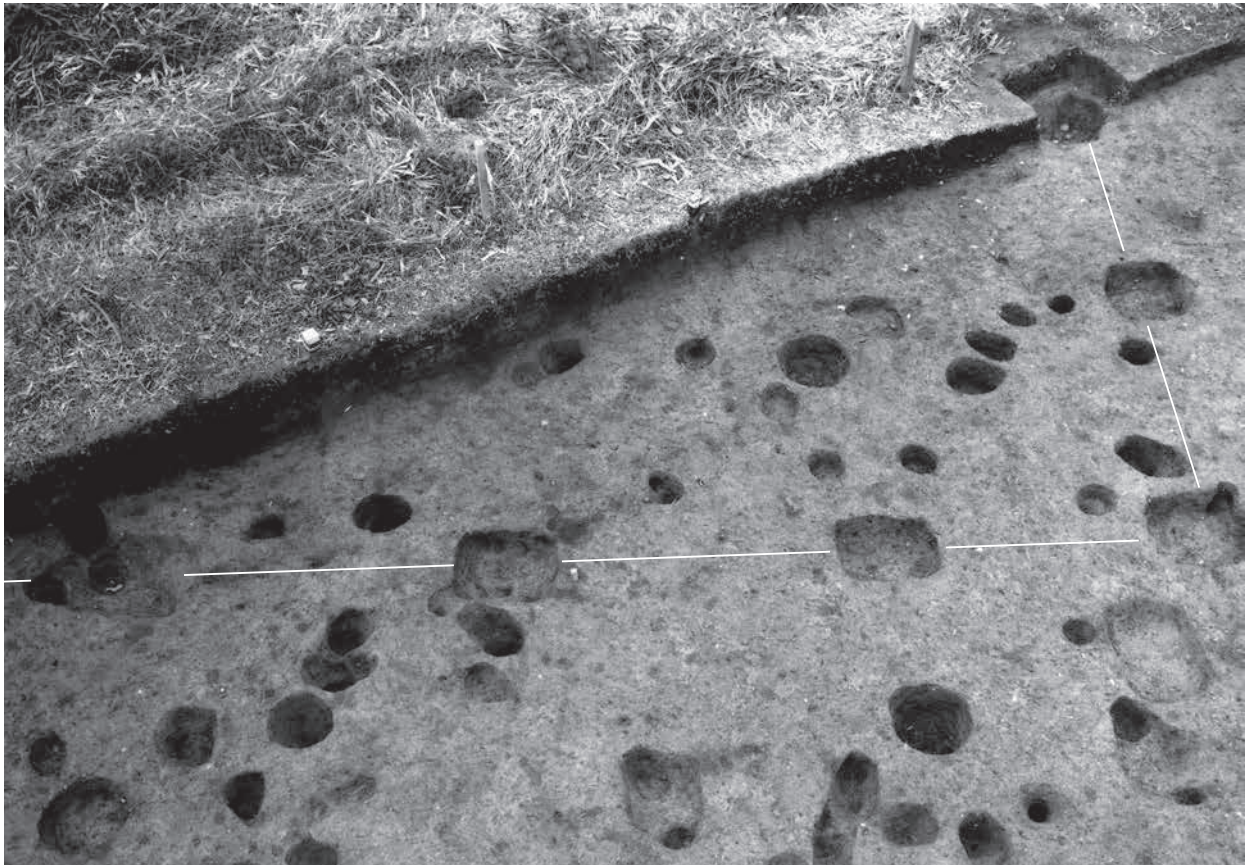
写 83 SB 217 (北から)



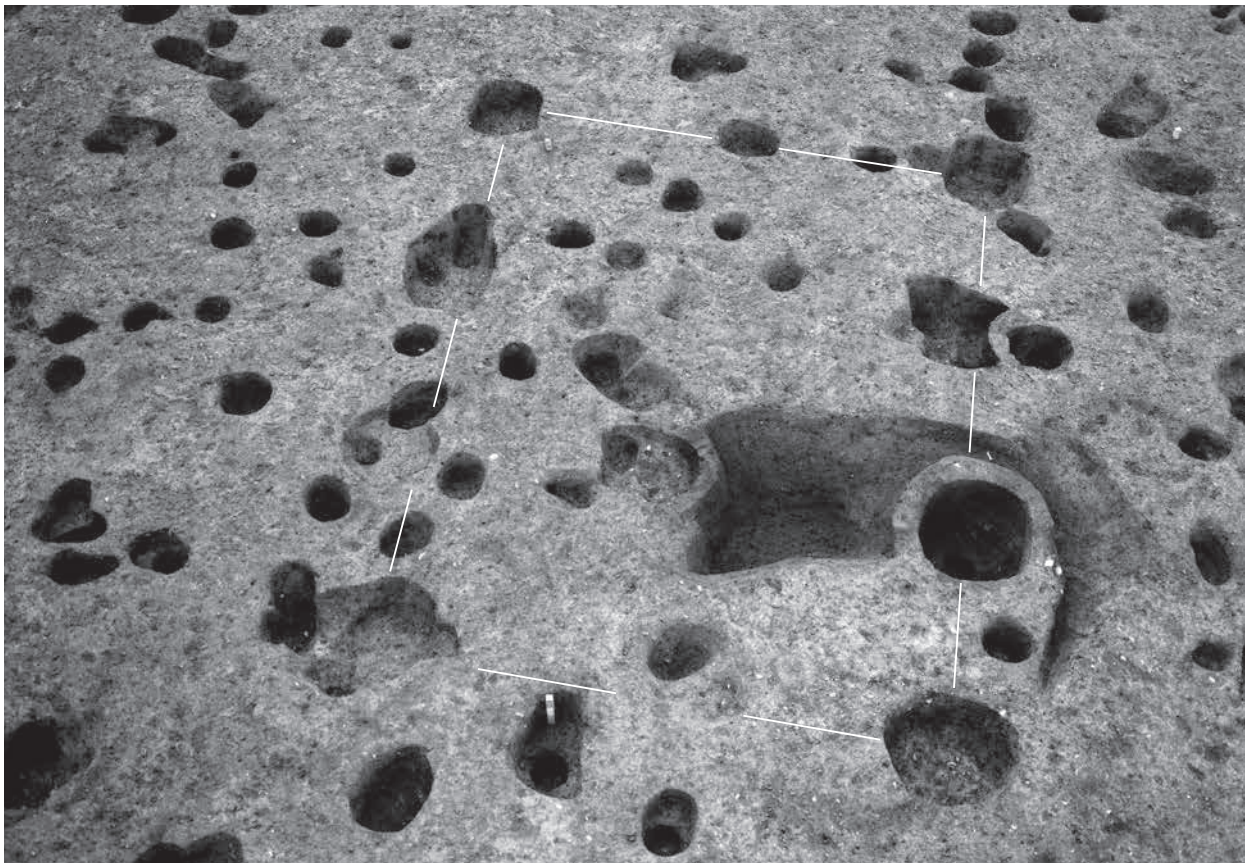
写 84 S B 219 検出状況 (西から)



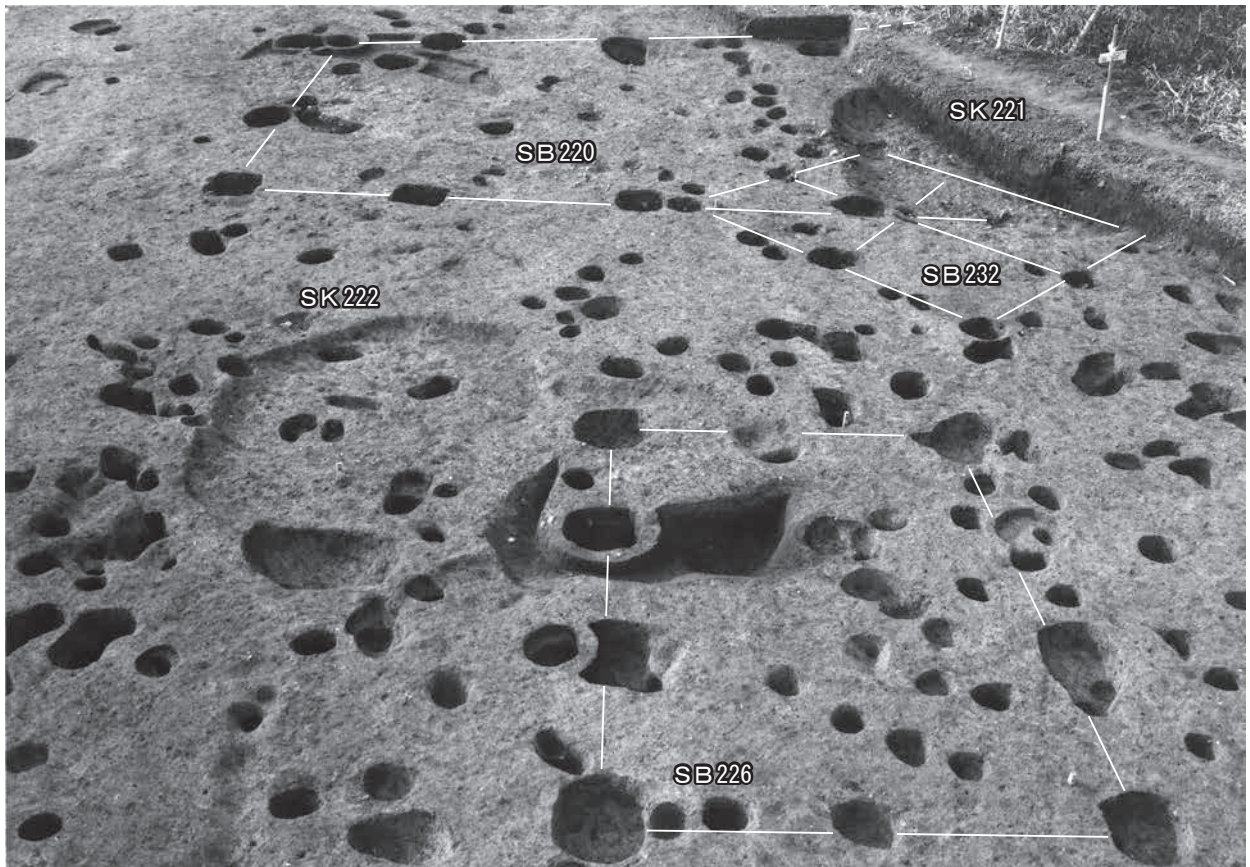
写 85 S B 220 (南から)



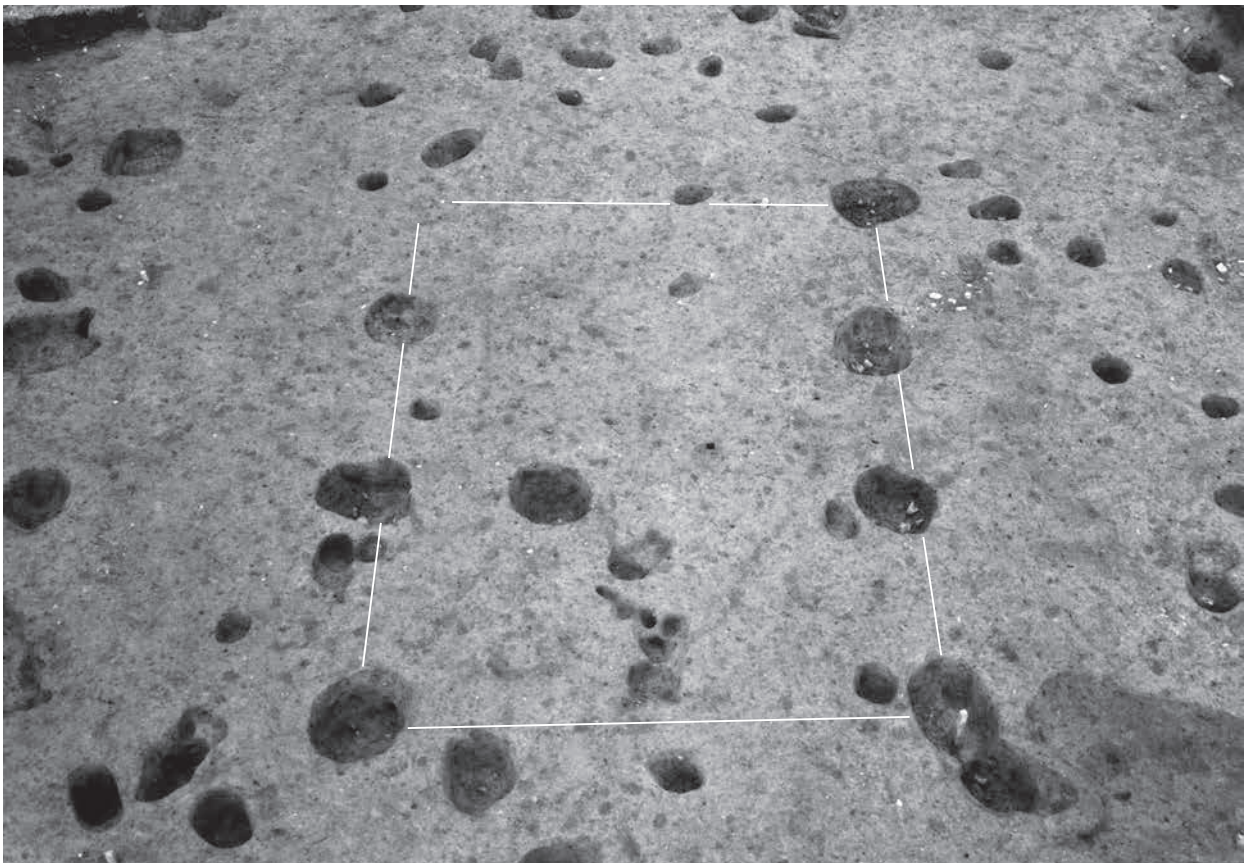
写 86 SB 224 (南から)



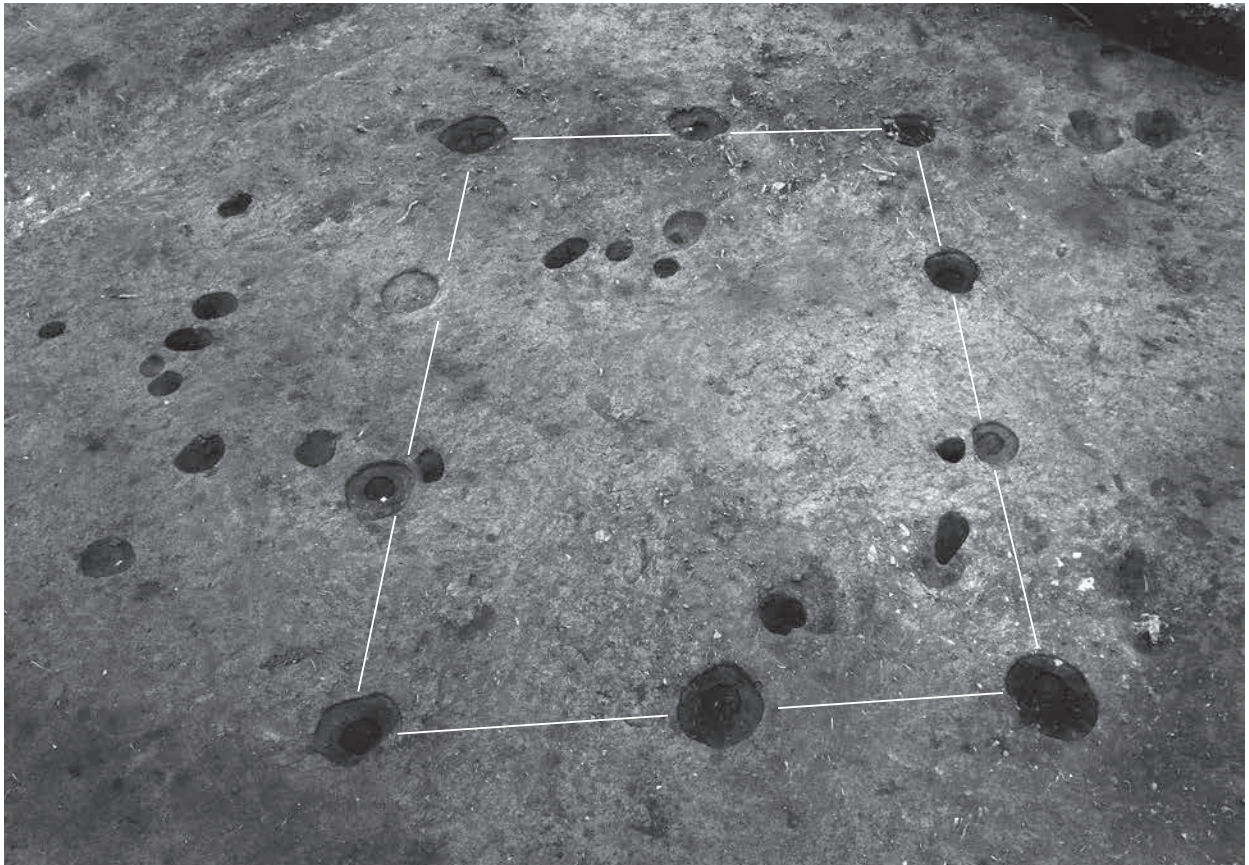
写 87 SB 226 (西から)



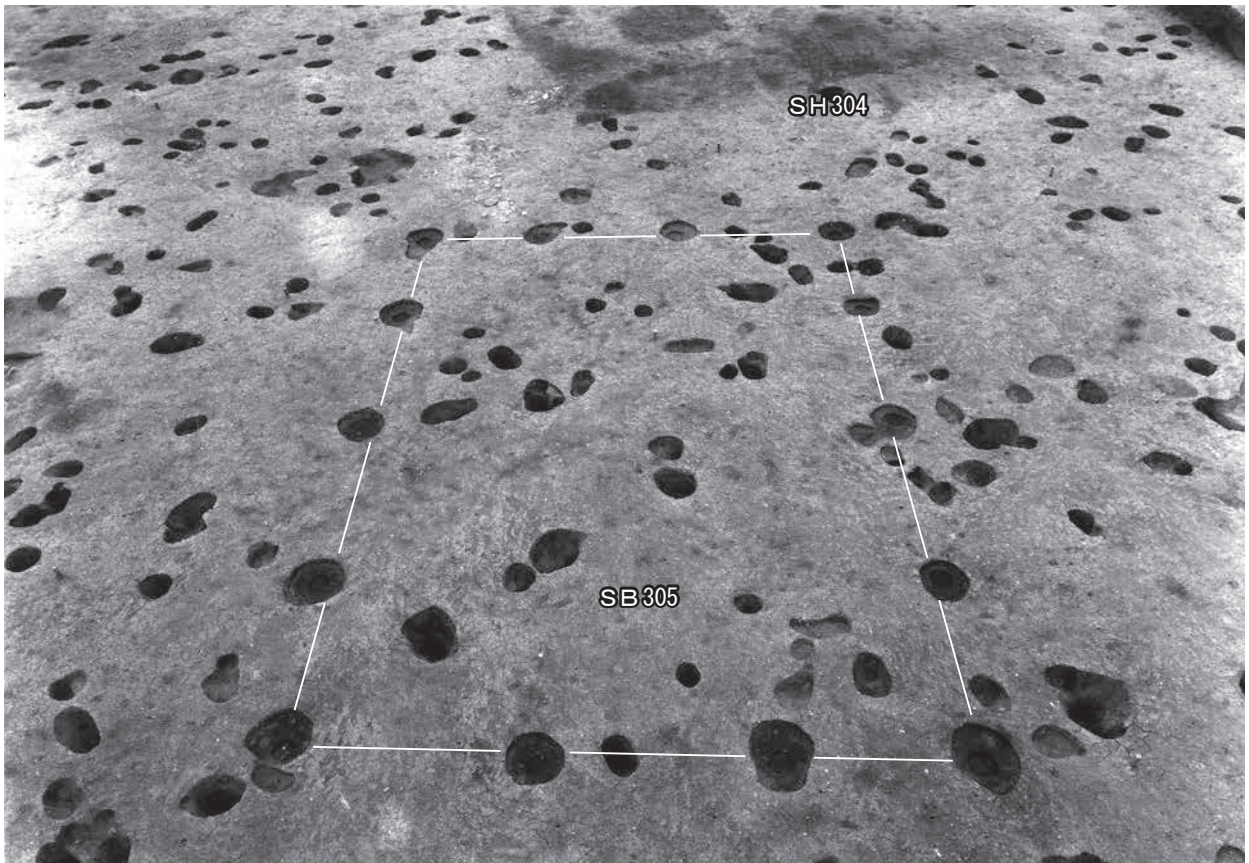
写 88 SB 220・226, SK 221・222 (東から)



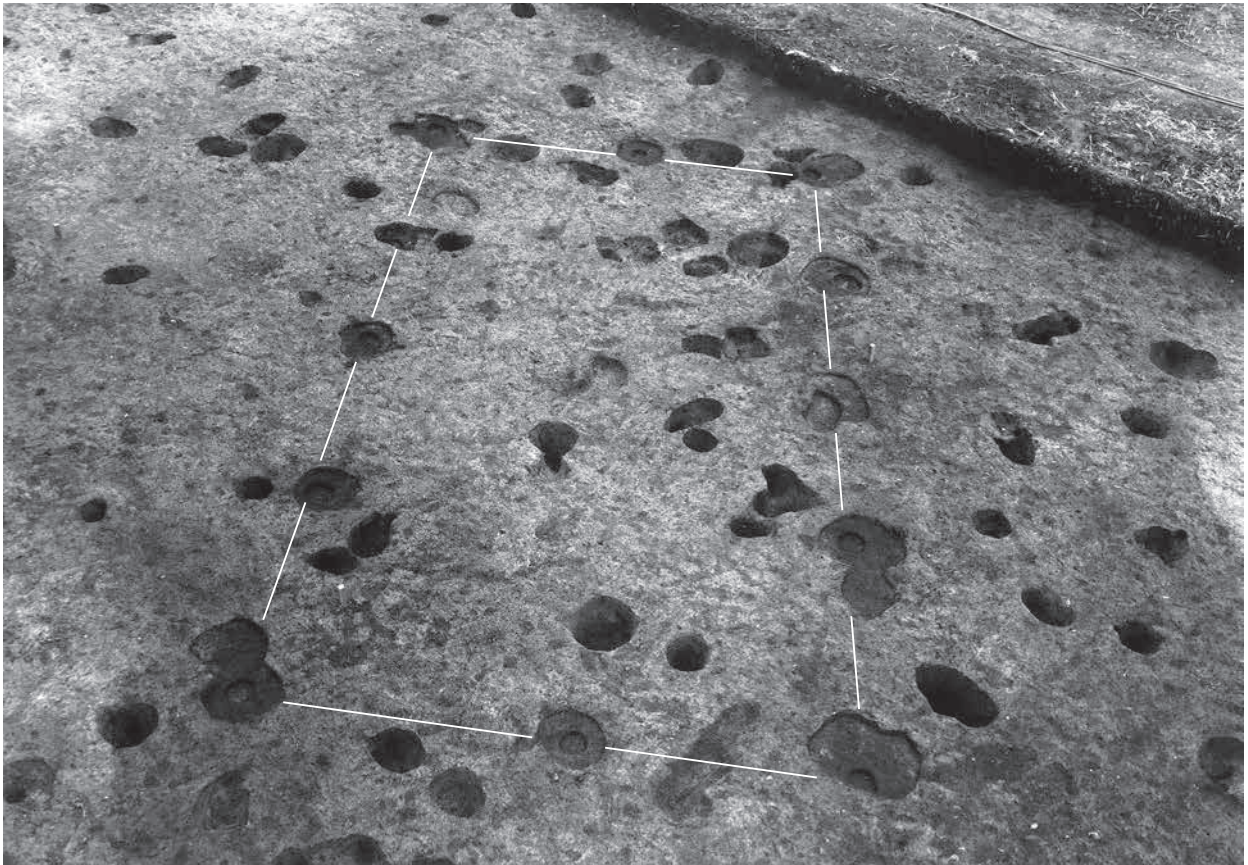
写 89 SB 231 (南から)



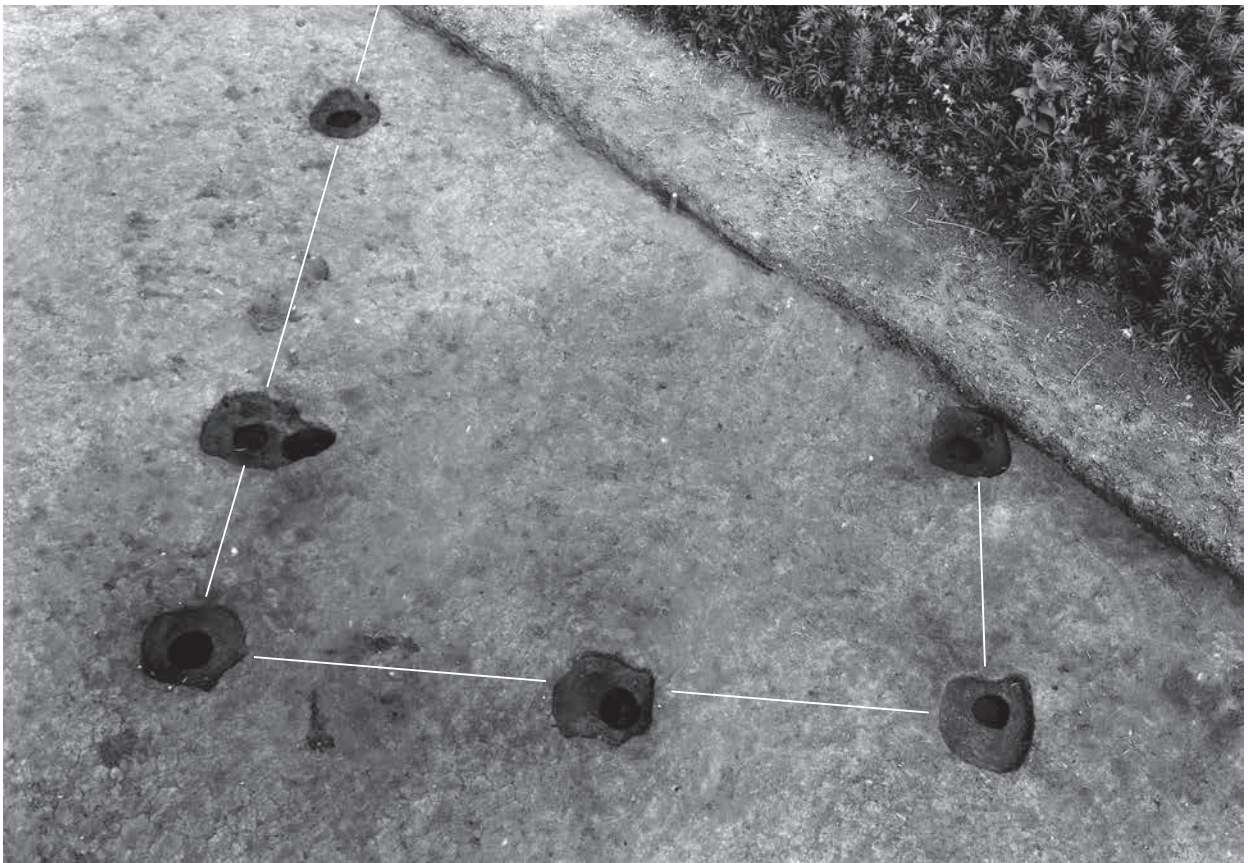
写 90 SB 301 検出状況 (南東から)



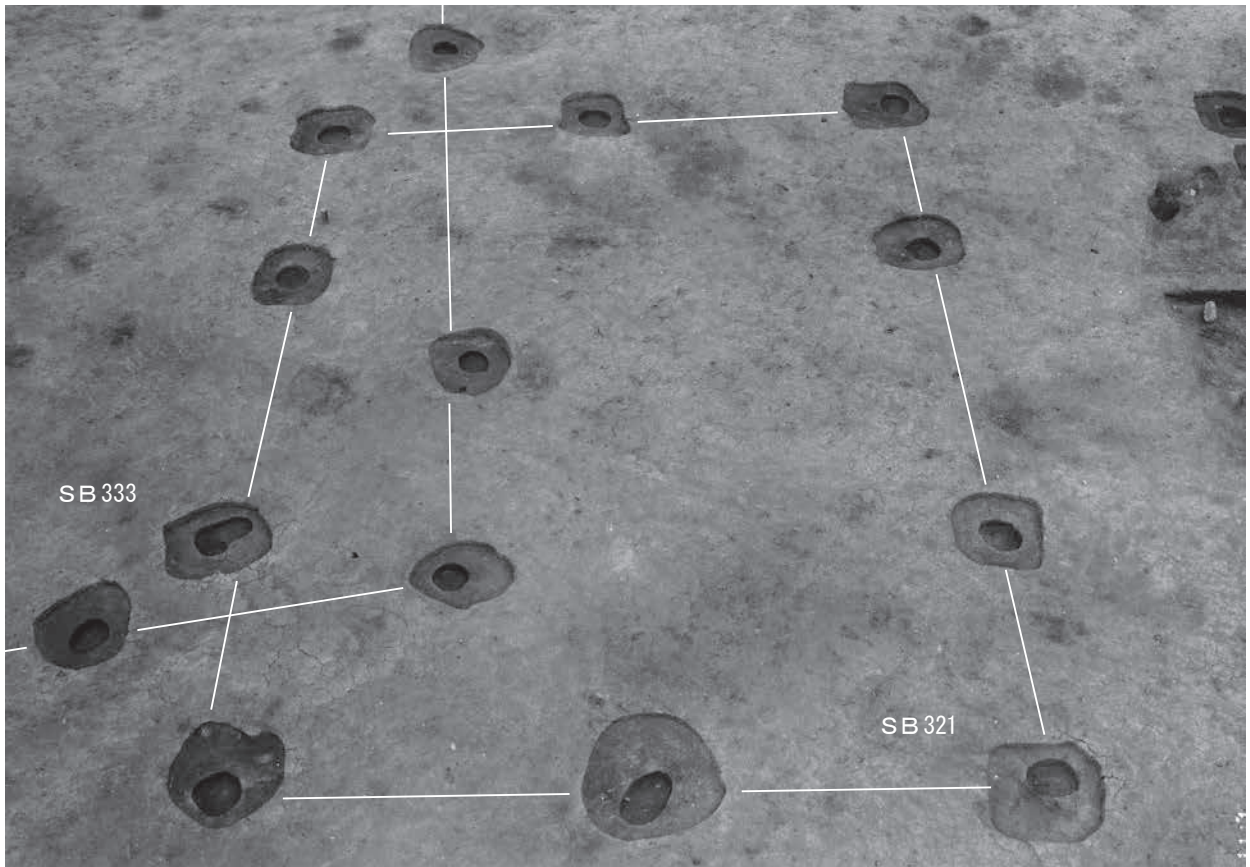
写 91 SB 305, SH 304 検出状況 (東から)



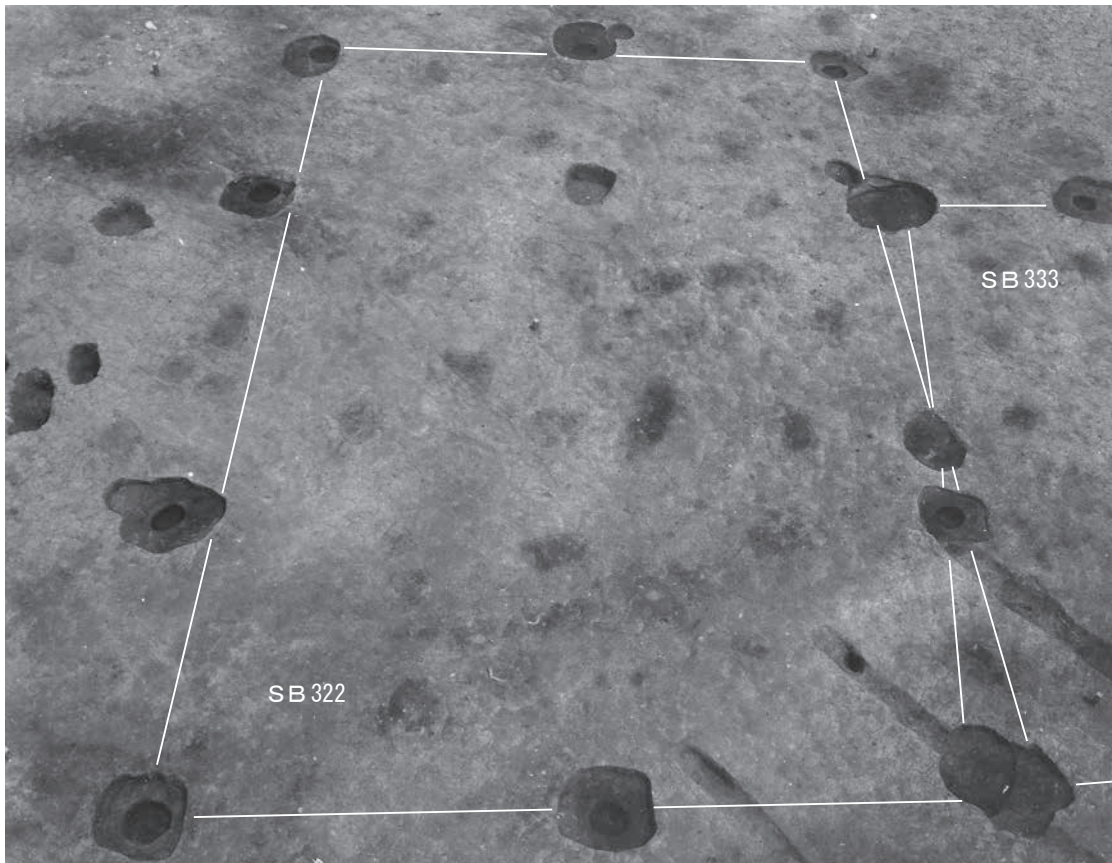
写 92 S B 309 検出状況 (南東から)



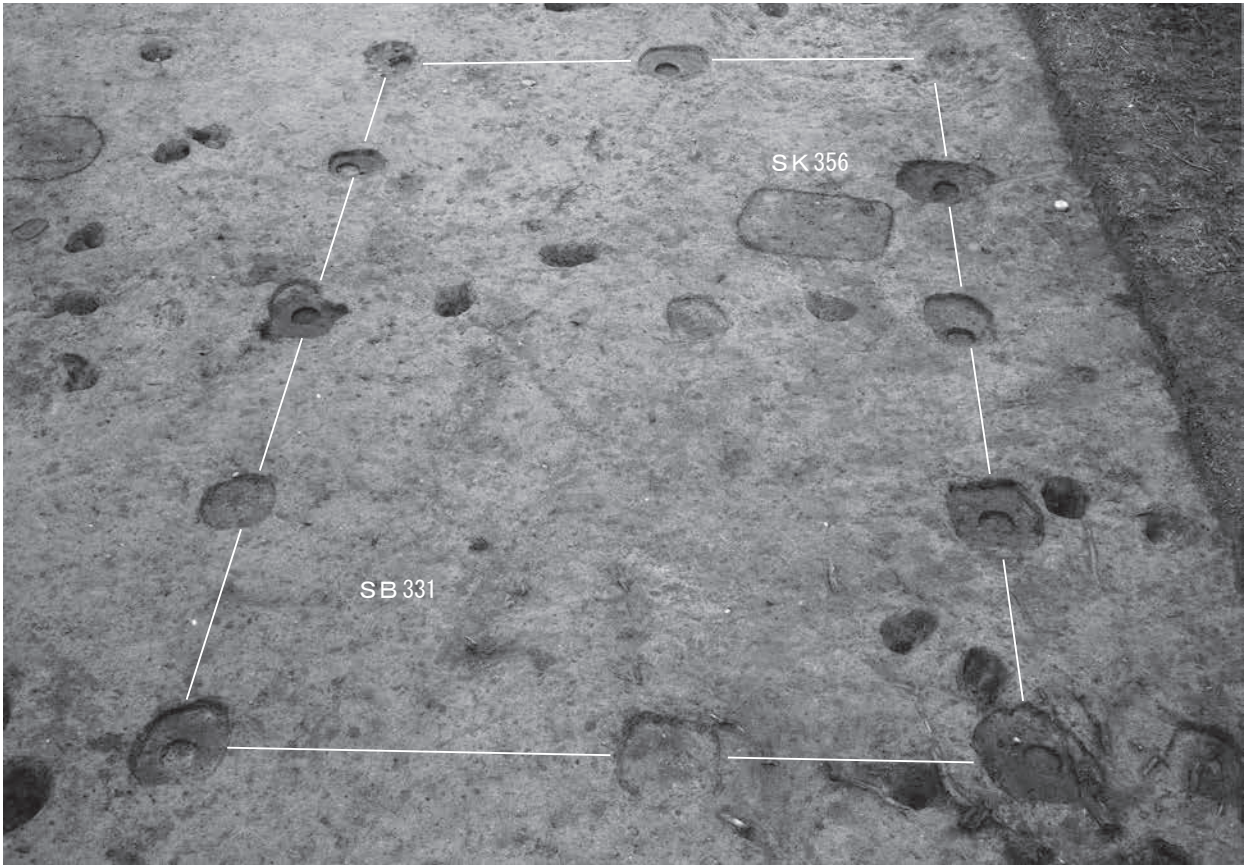
写 93 S B 314 検出状況 (南東から)



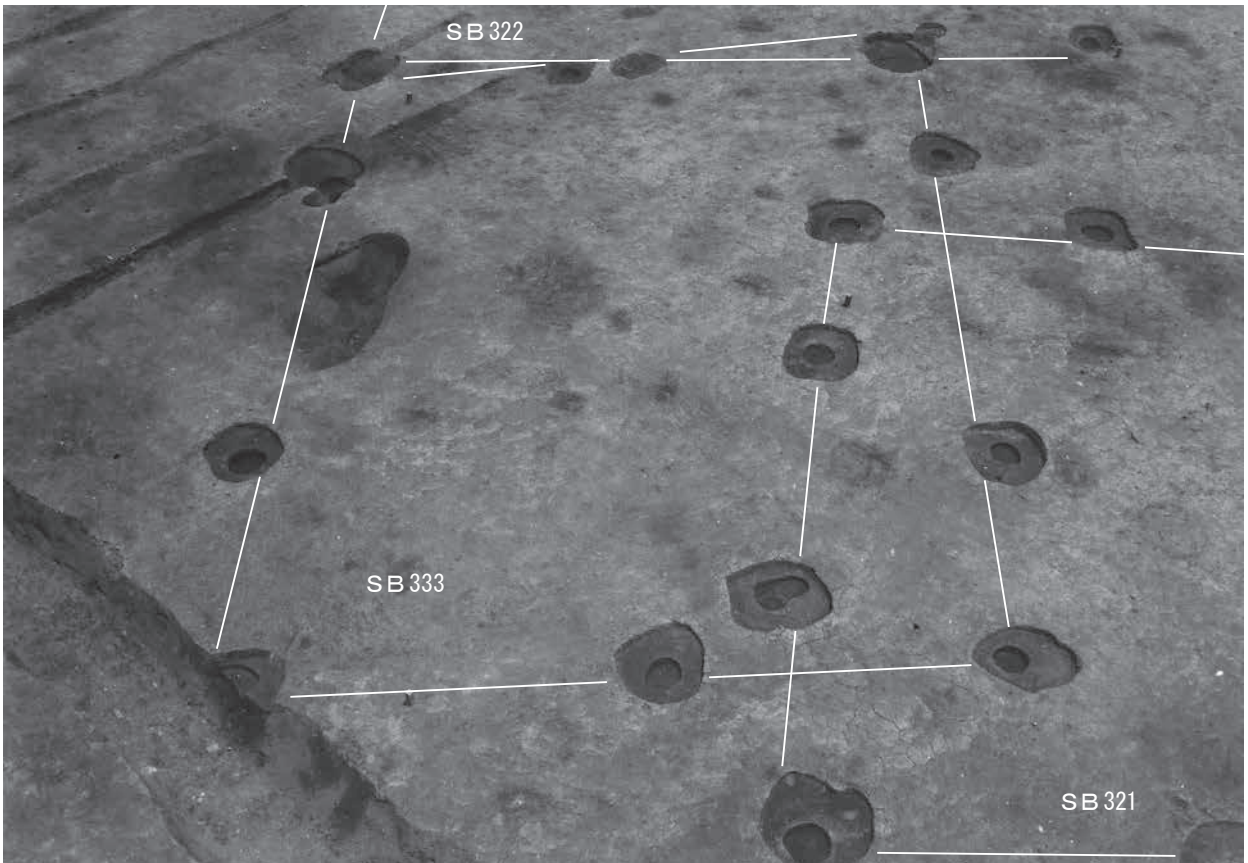
写 94 S B 321 検出状況 (西から)



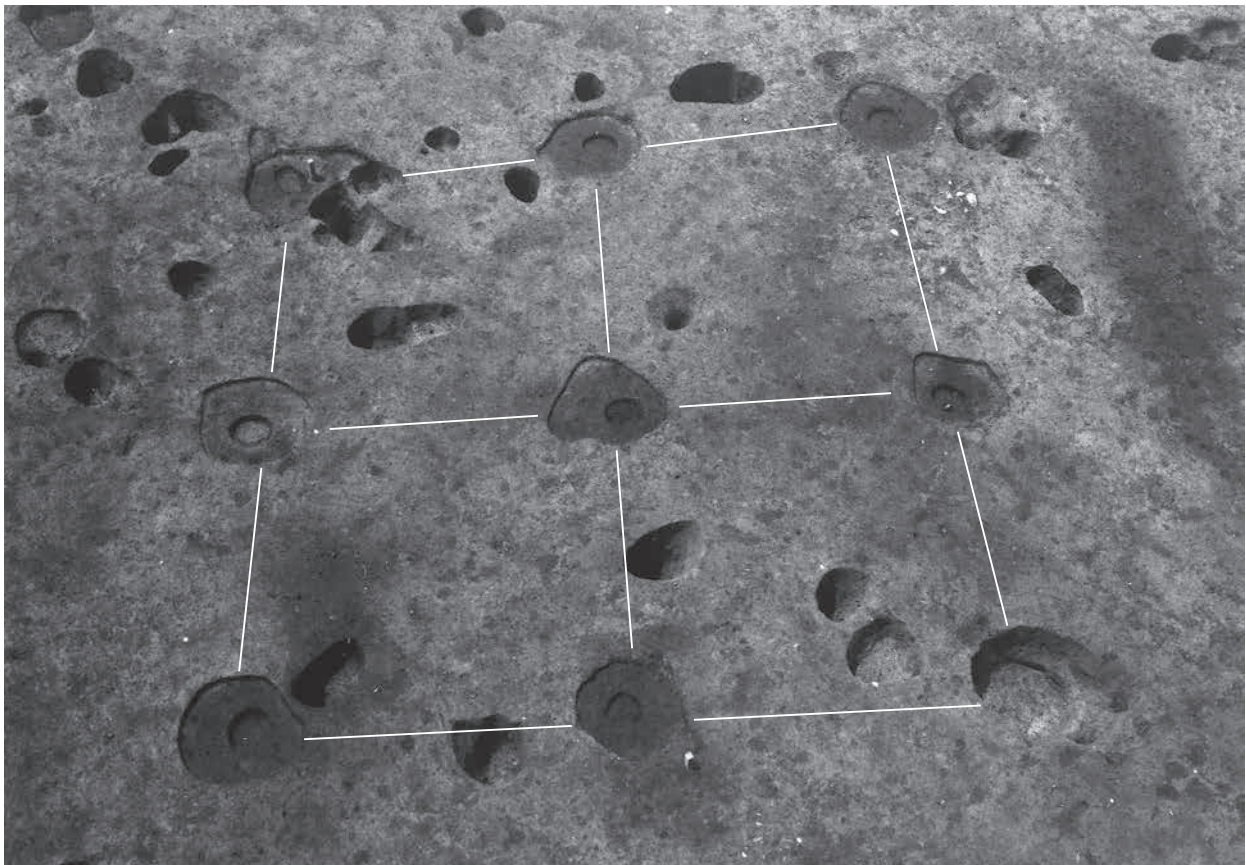
写 95 S B 322 検出状況 (北から)



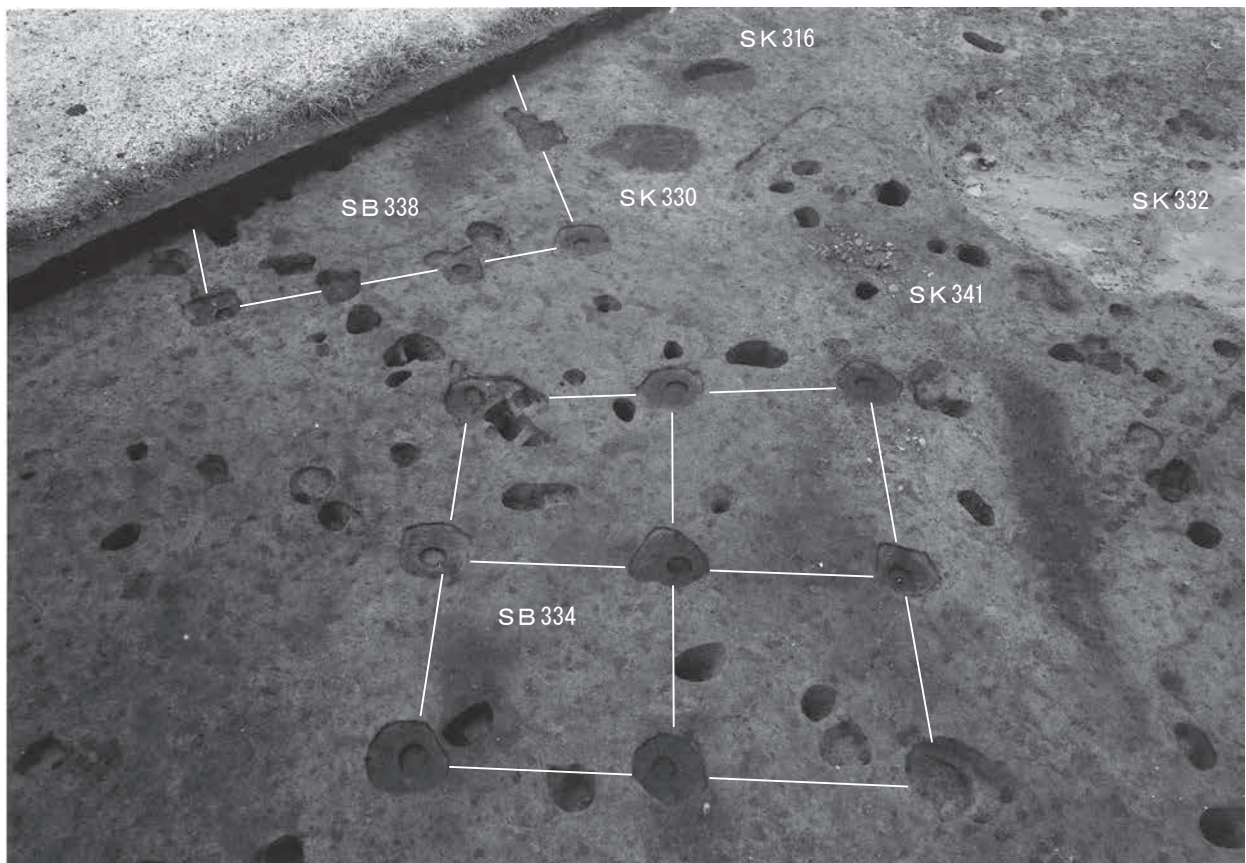
写 96 SB 331 検出状況 (東から)



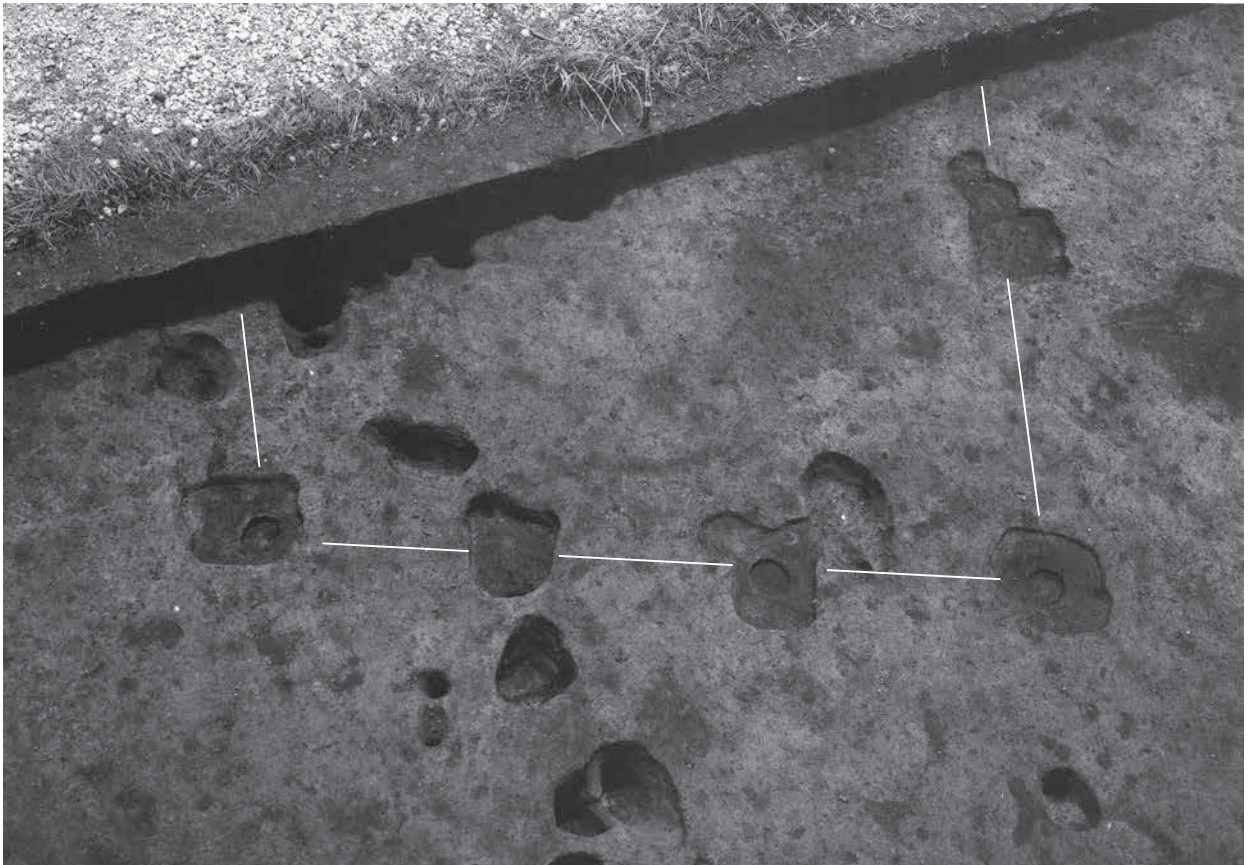
写 97 SB 333 検出状況 (西から)



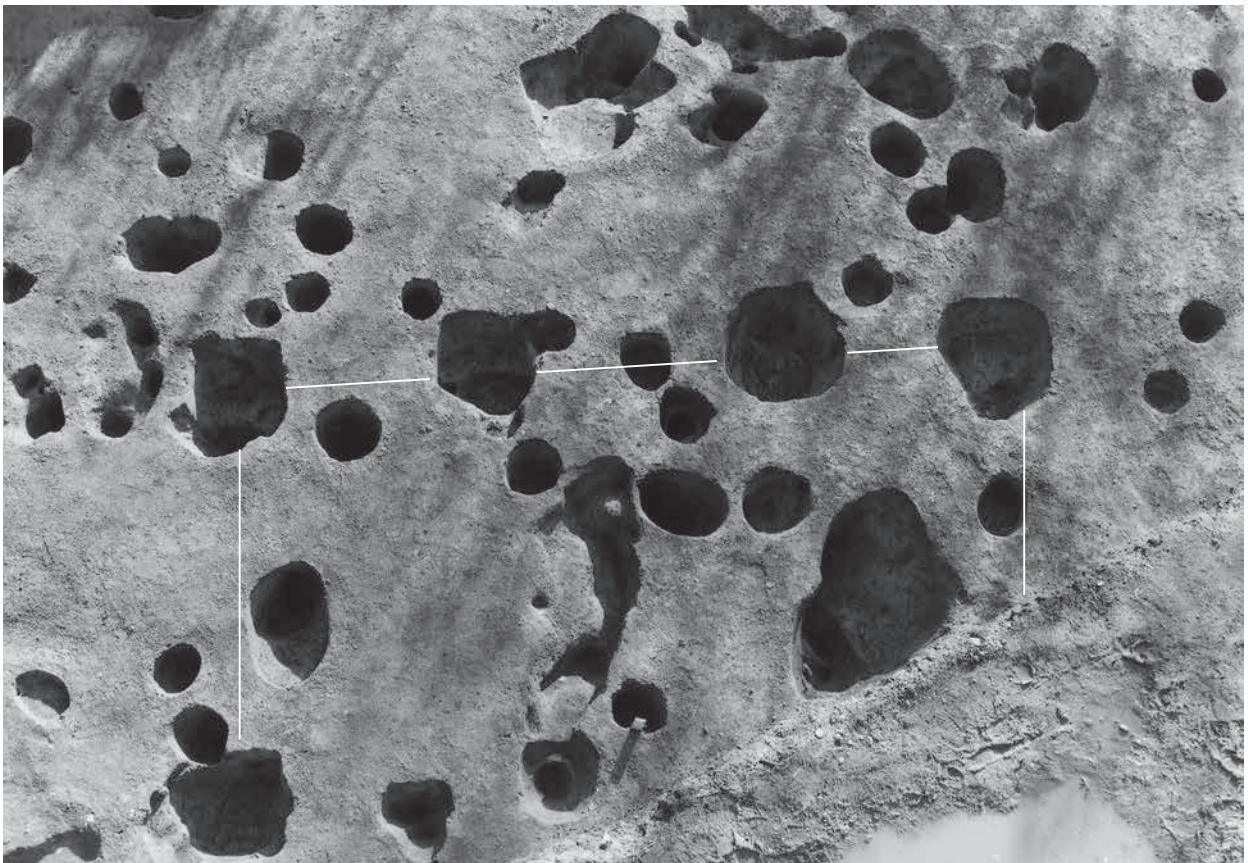
写 98 SB 334 検出状況 (北から)



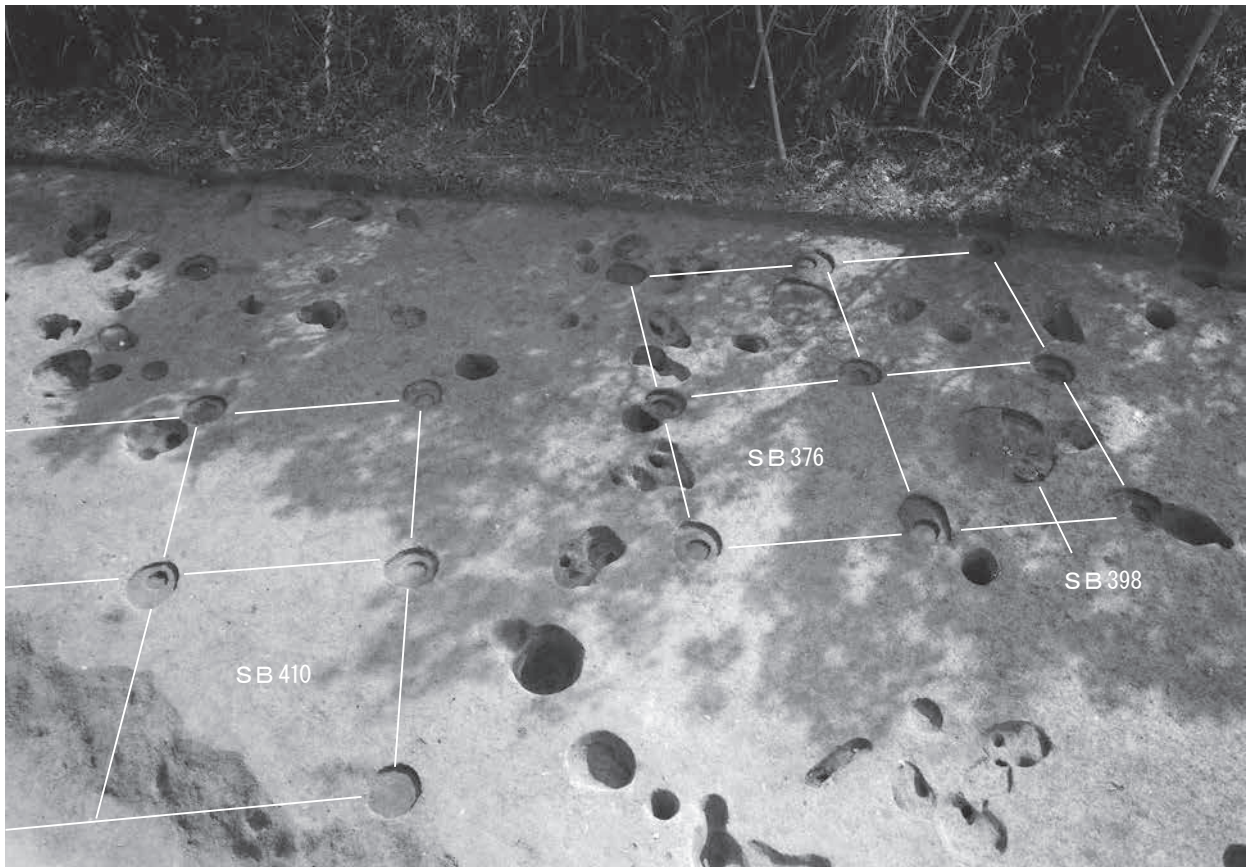
写 99 SB 334・338 検出状況 (北から)



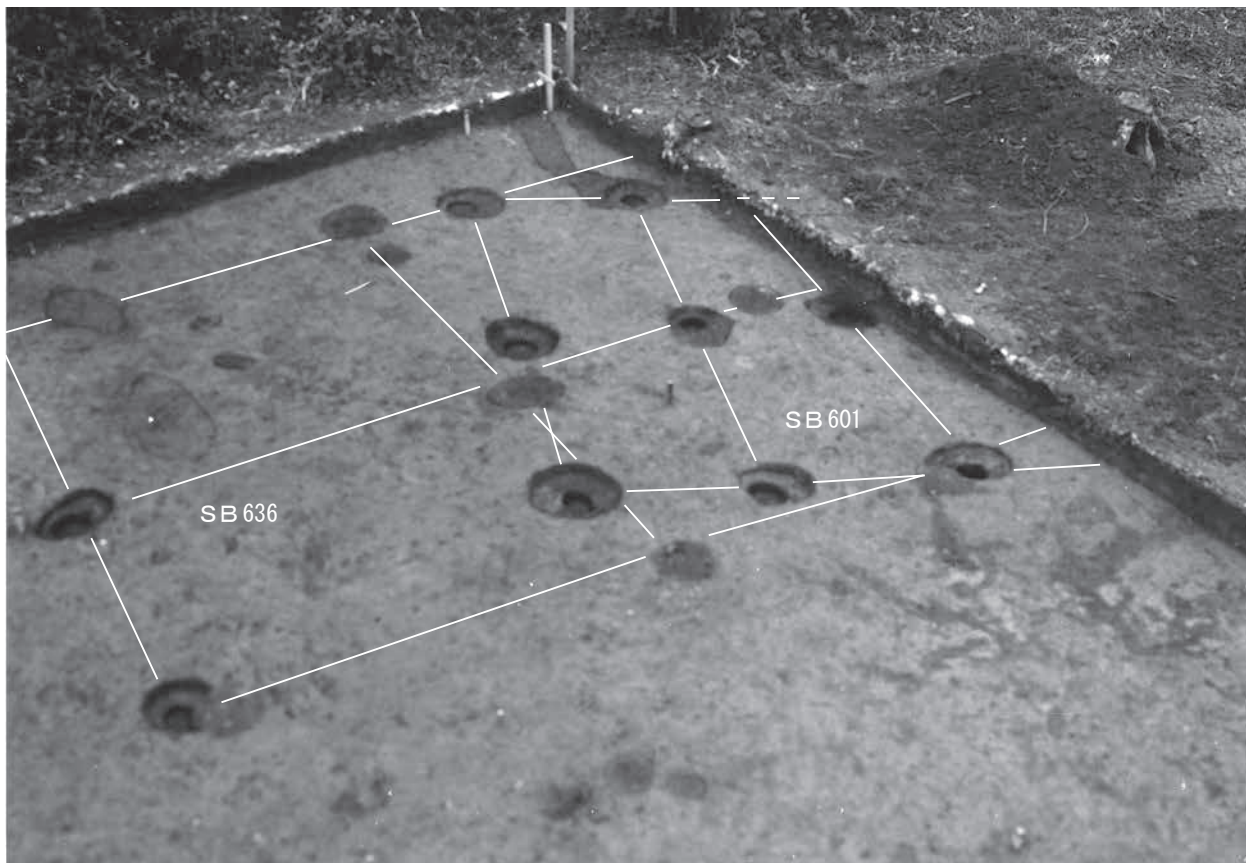
写 100 S B 338 北側部分 (北から)



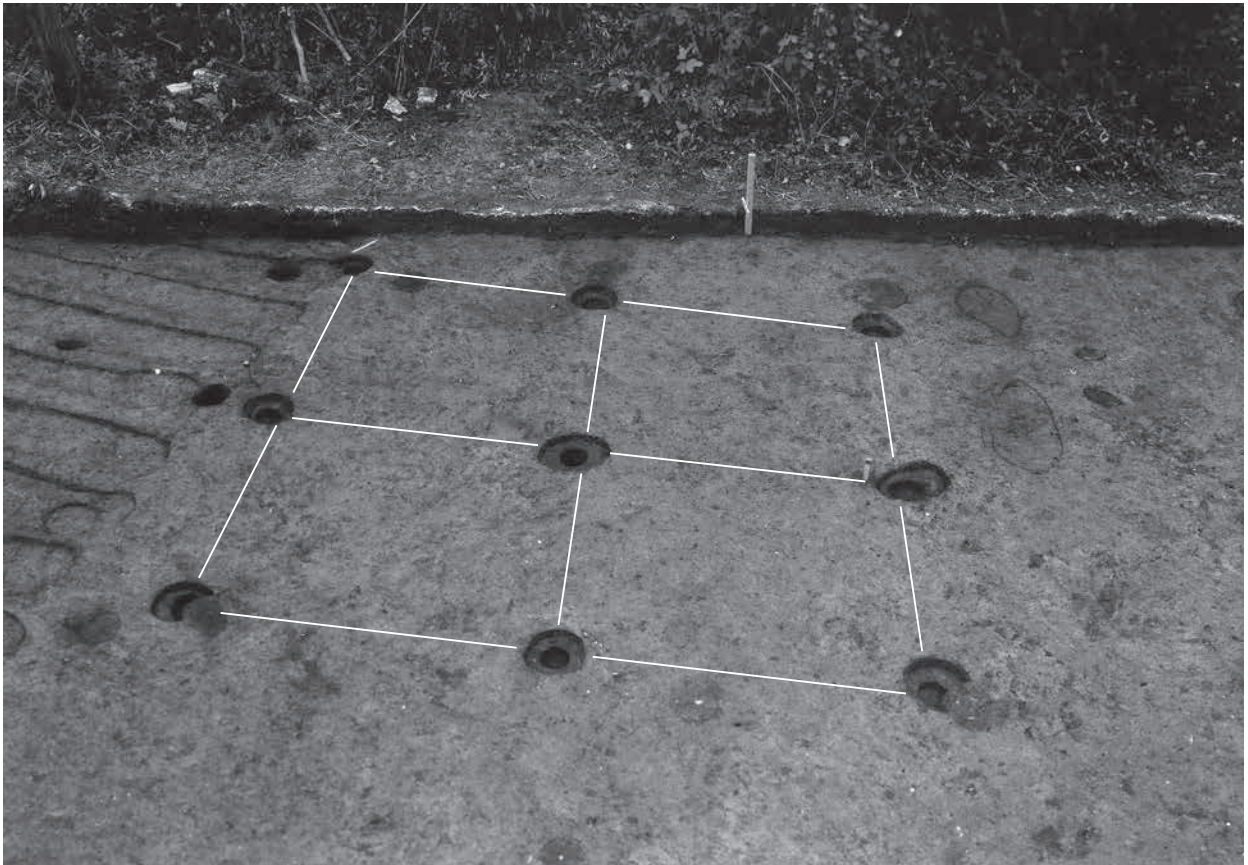
写 101 S B 338 南側部分 (北東から)



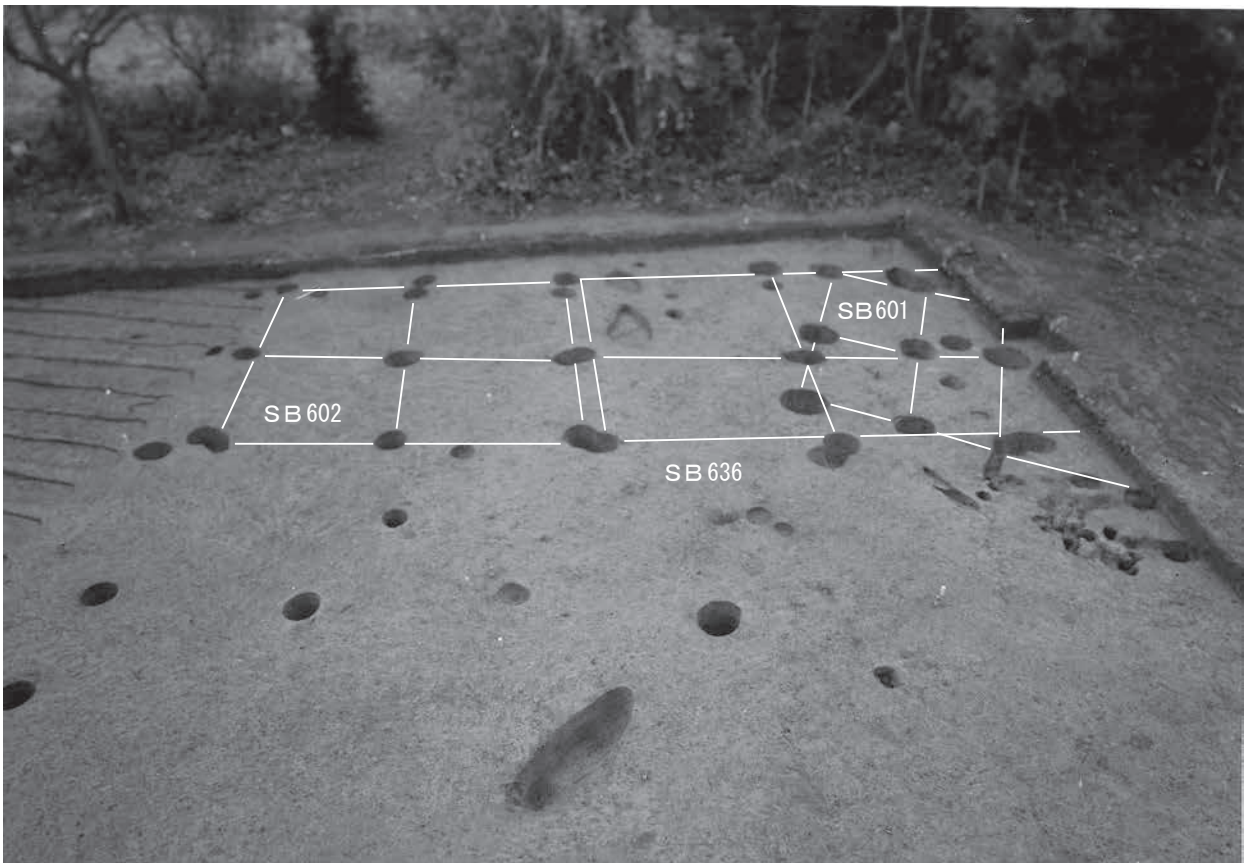
写 102 S B 376・410, S K 398 検出状況 (北から)



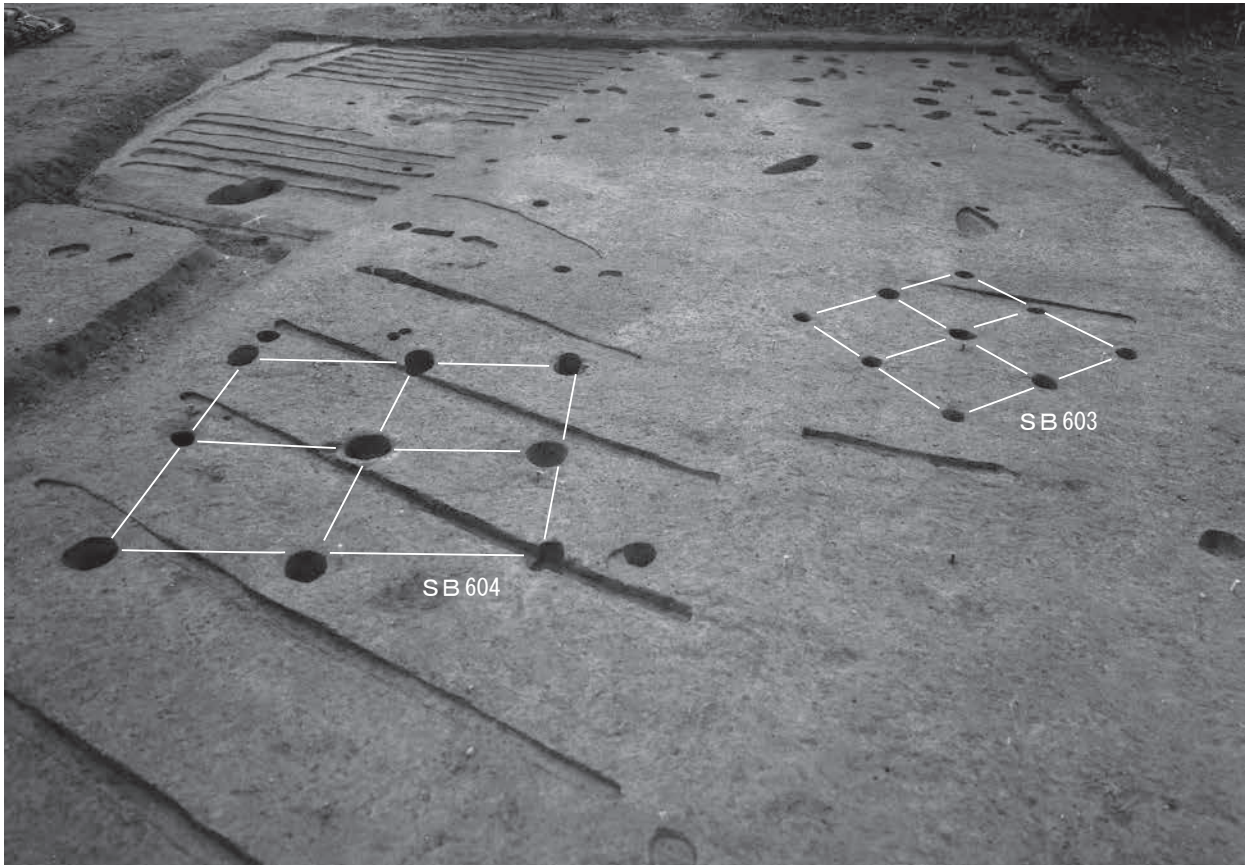
写 103 S B 601・636 検出状況 (北から)



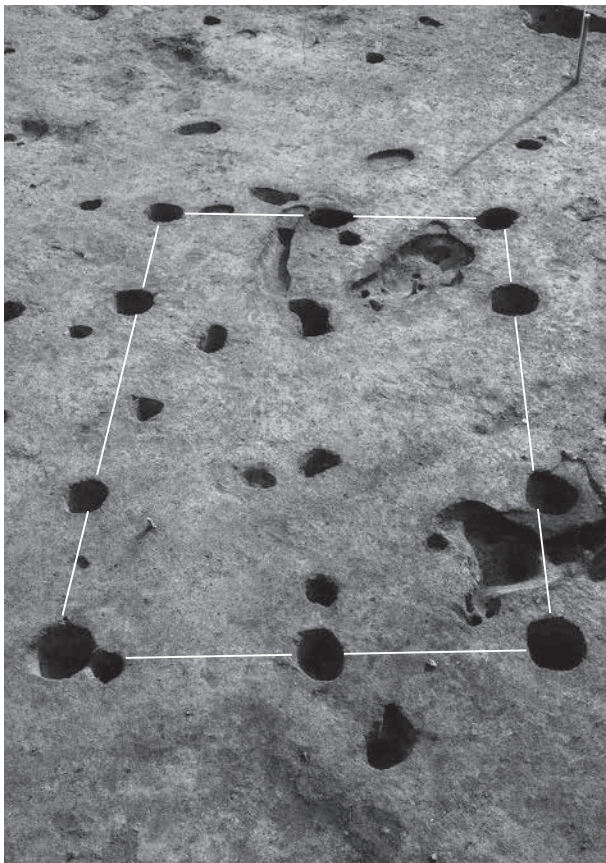
写 104 S B 602 検出状況 (北から)



写 105 S B 601・602・636 (西から)



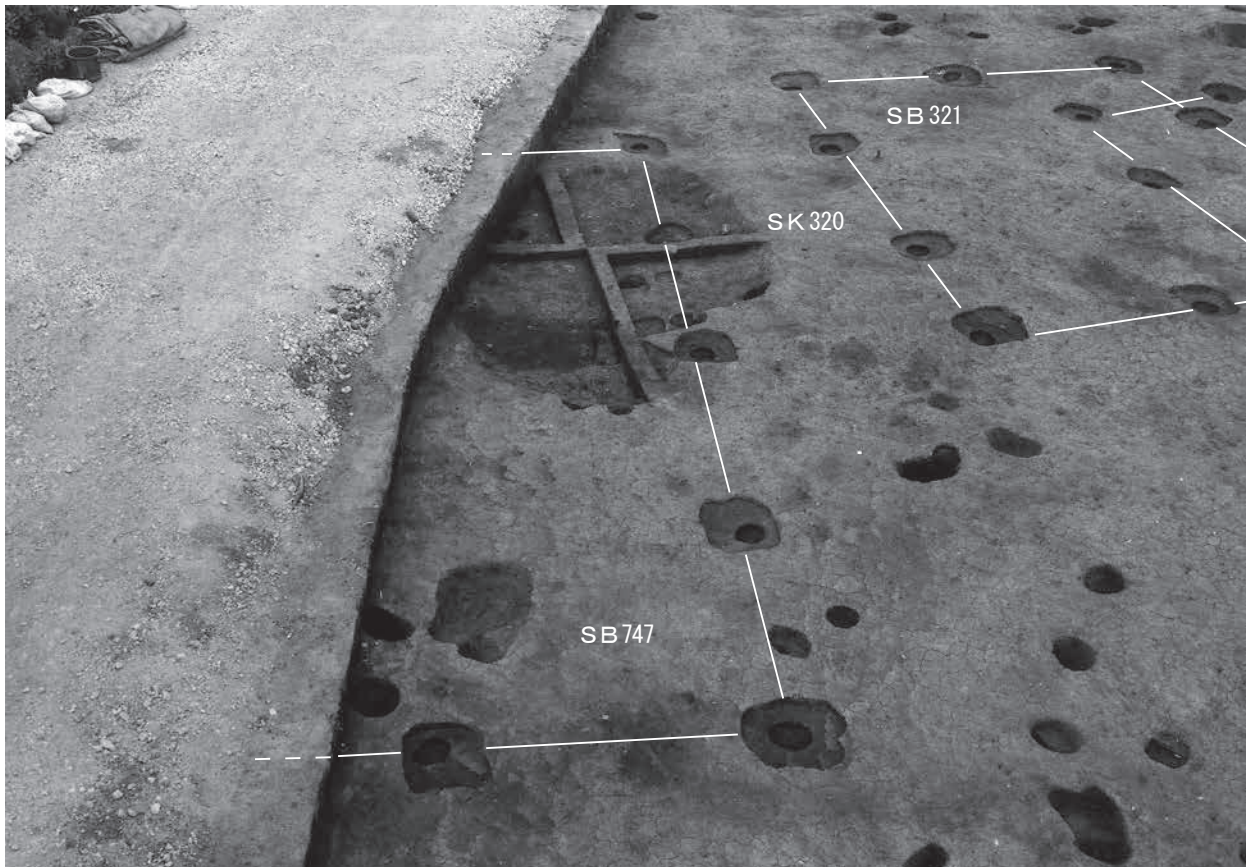
写 106 SB 603・604 (北から)



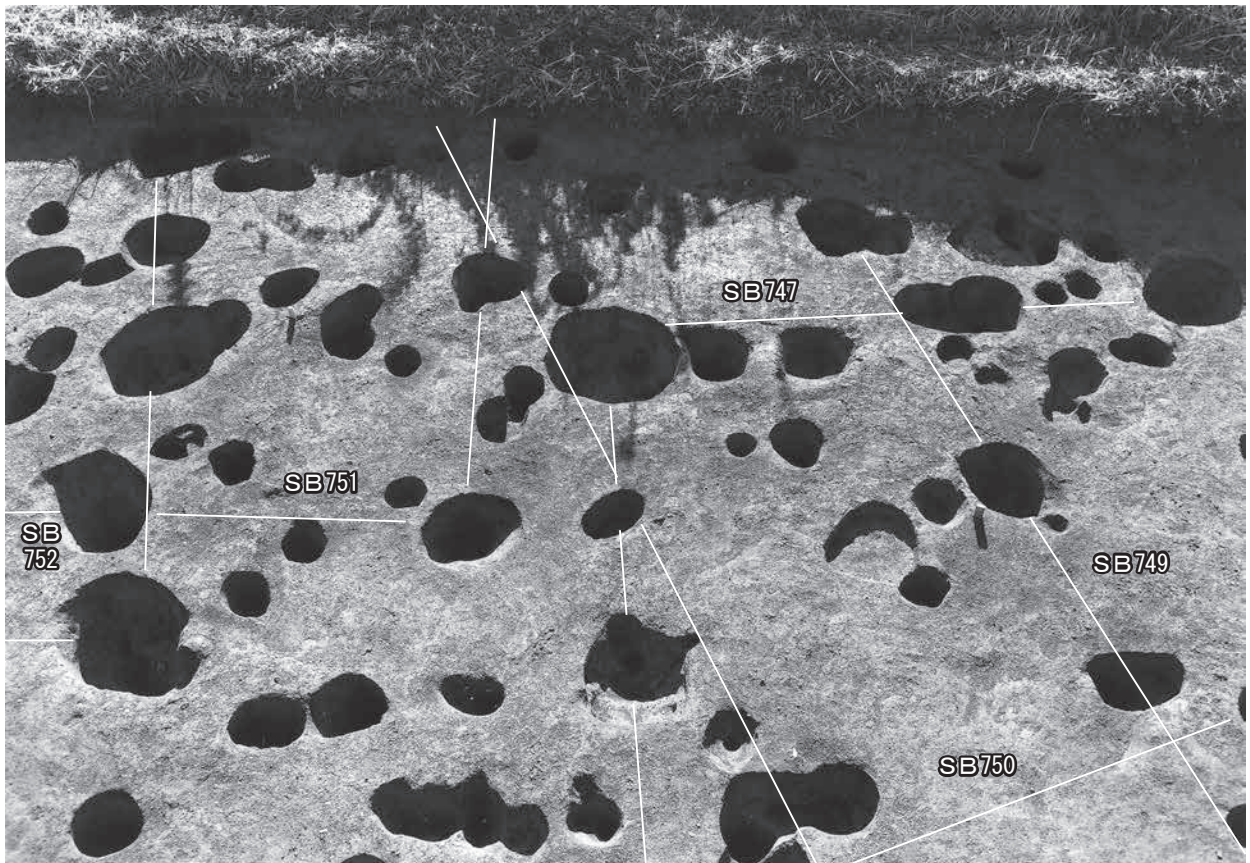
写 107 SB 712 (北西から)



写 108 SB 748 (西から)



写 109 SB 747, SK 320 北側部分 (東から)



写 110 SB 747 他 (北から)



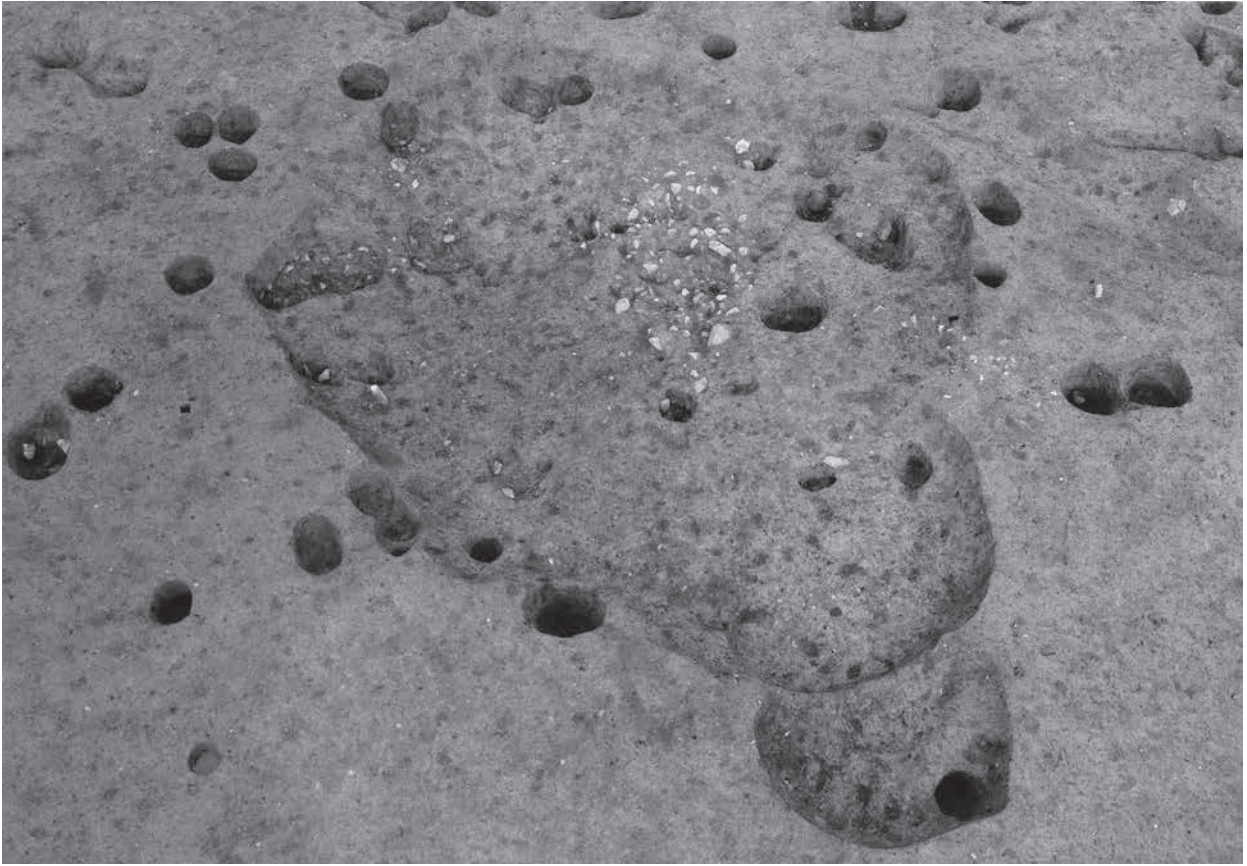
写 111 SB 735 (北東から)



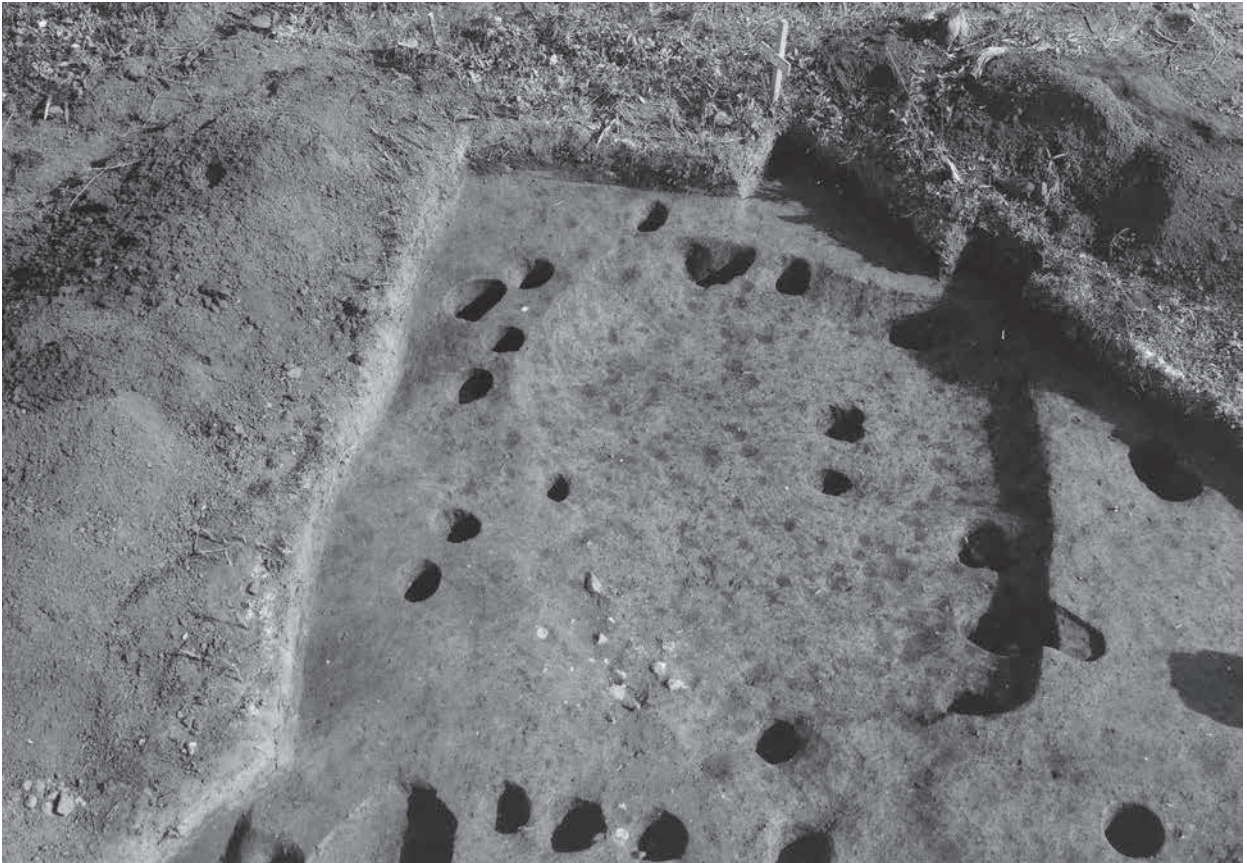
写 112 第7次調査南②区全景 (北東から)



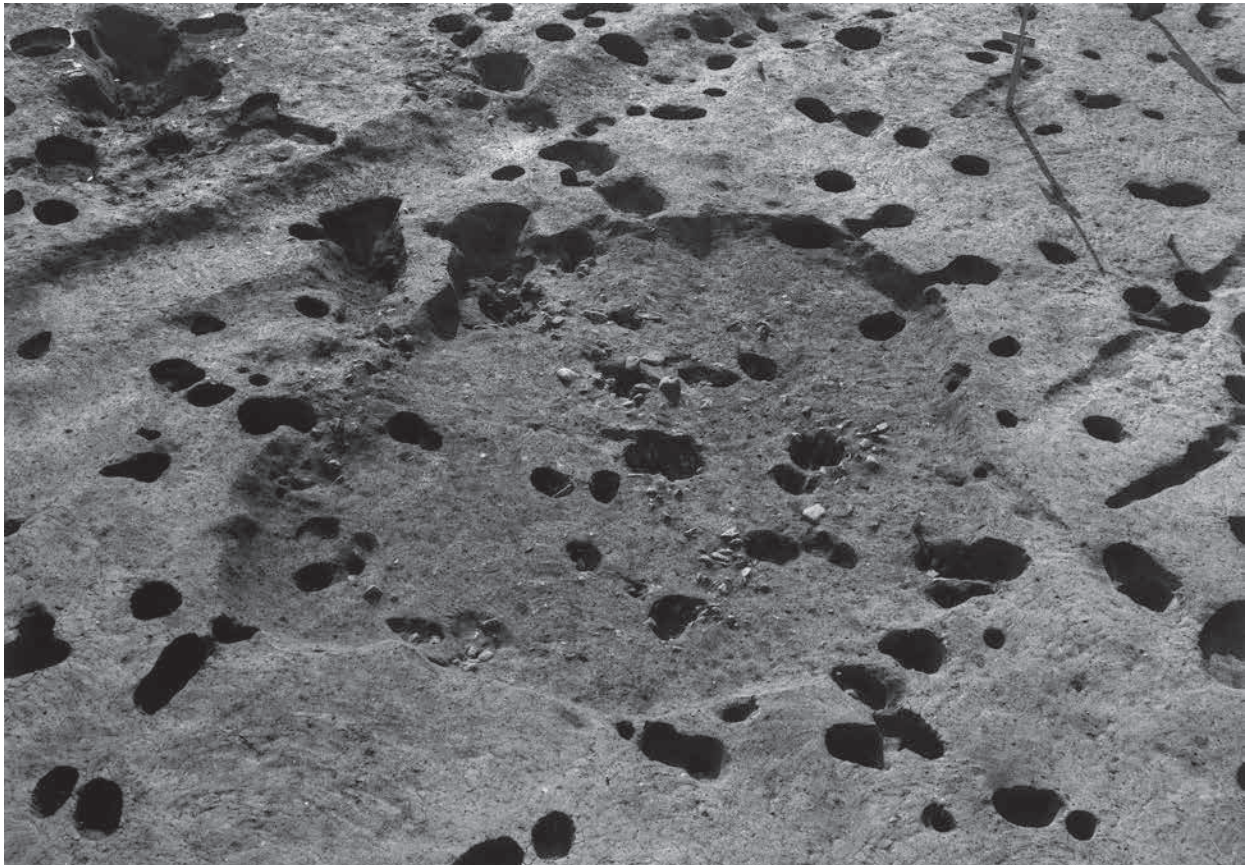
写 113 第3次調査南区西側 (南から)



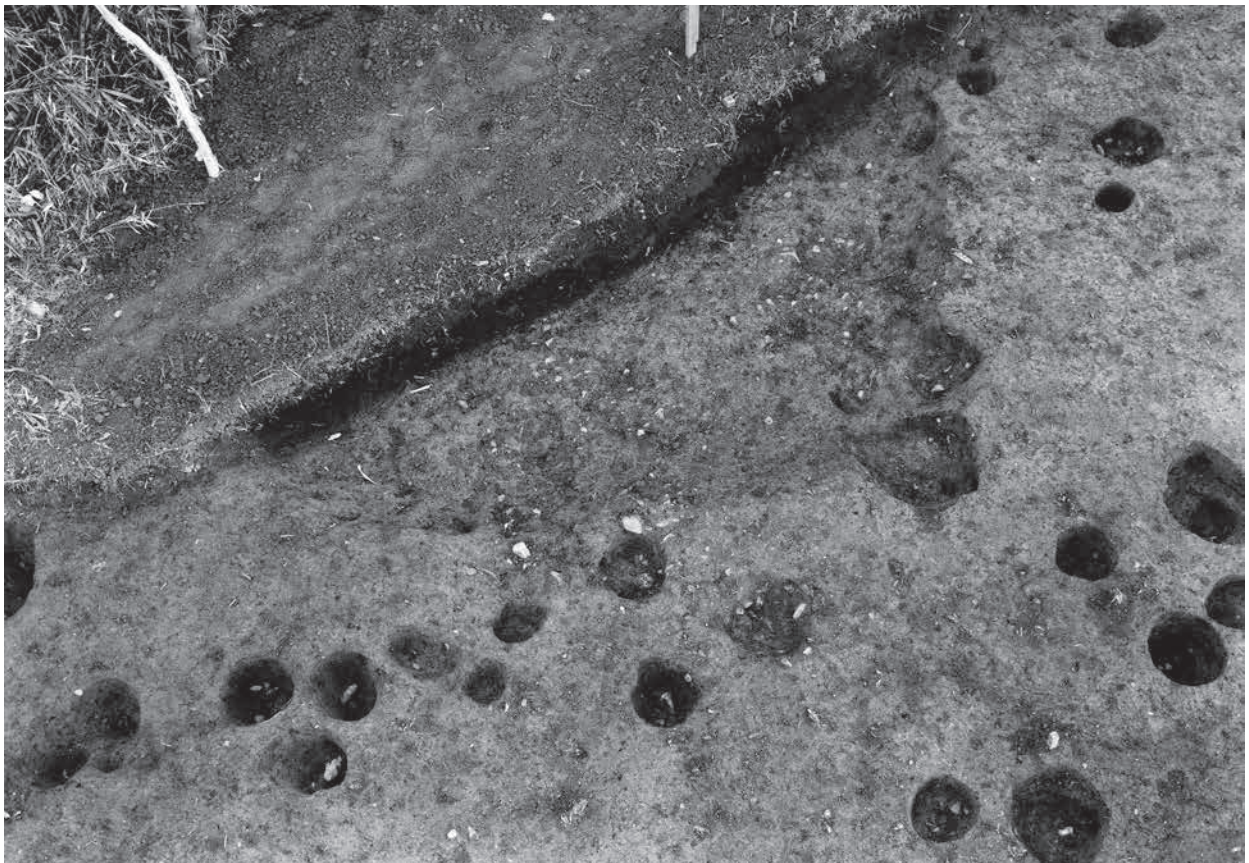
写 114 SK 209・225 (南から)



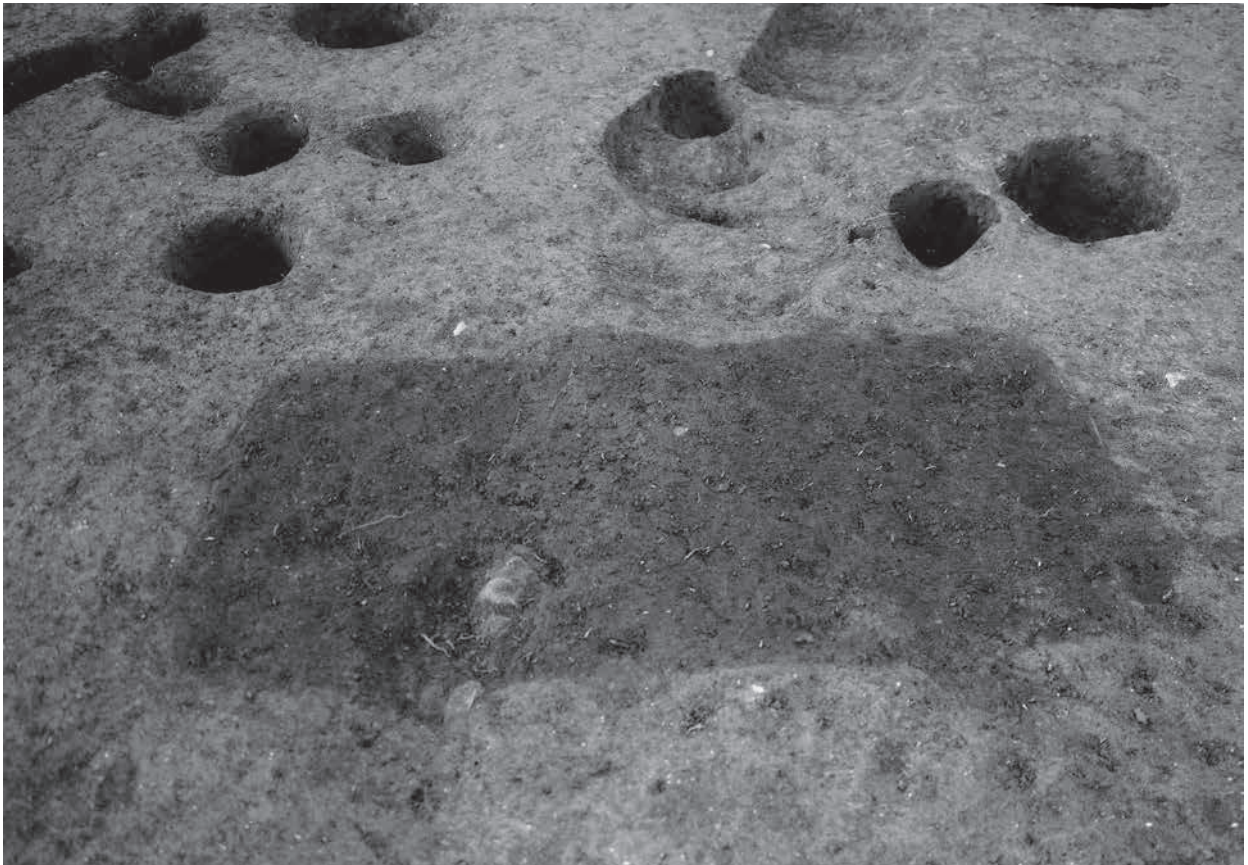
写 115 SK 210 (南西から)



写 116 S K 212 (北東から)



写 117 S K 221 (南から)



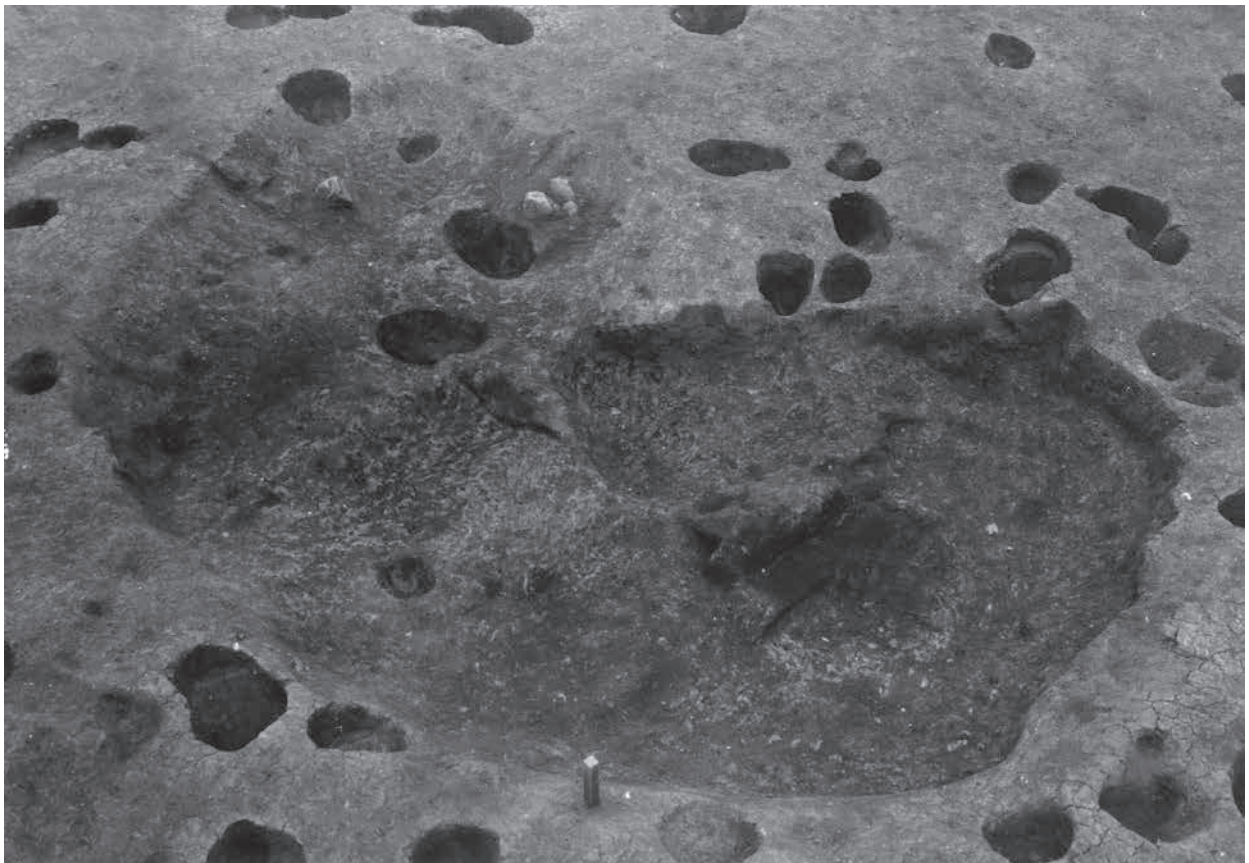
写 118 SK 223 検出状況 (南から)



写 119 SK 223 実掘 (南から)



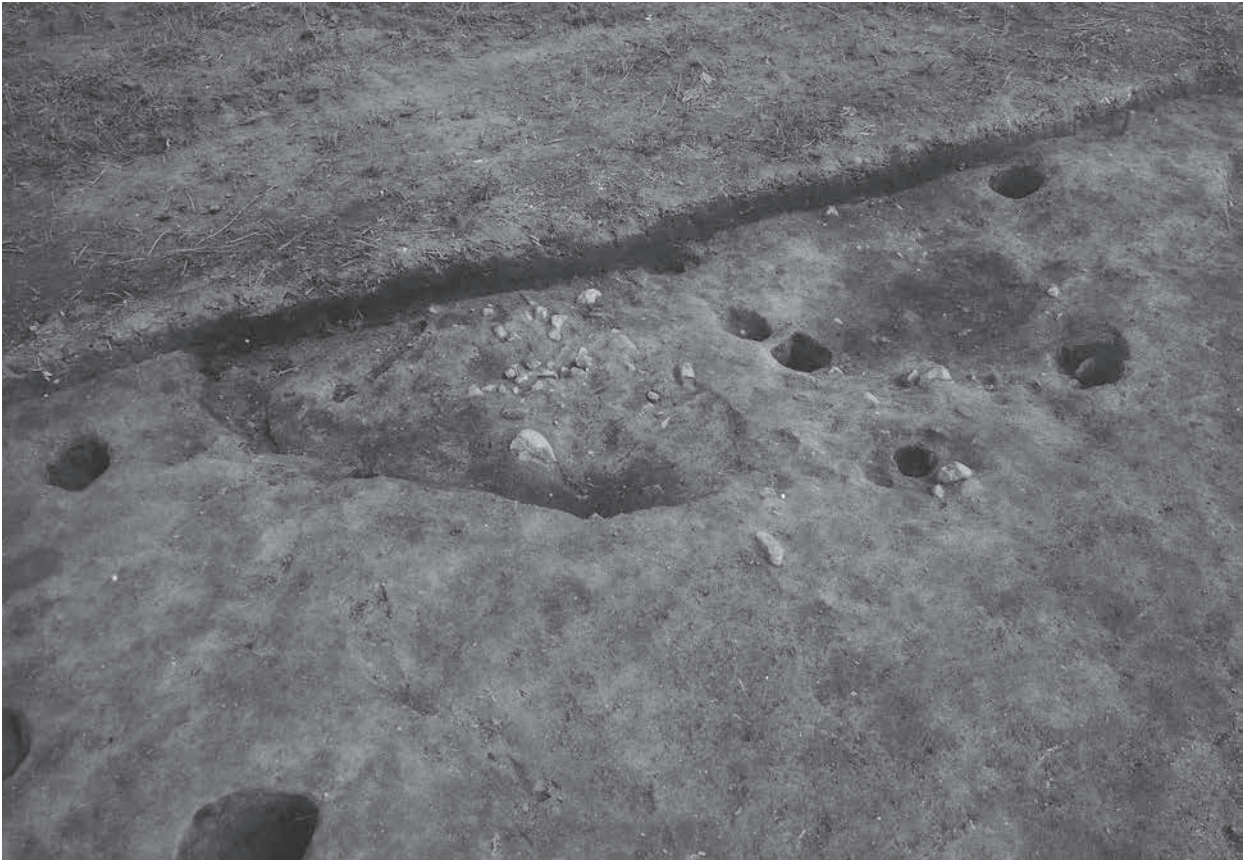
写 120 S K 302 検出状況 (南から)



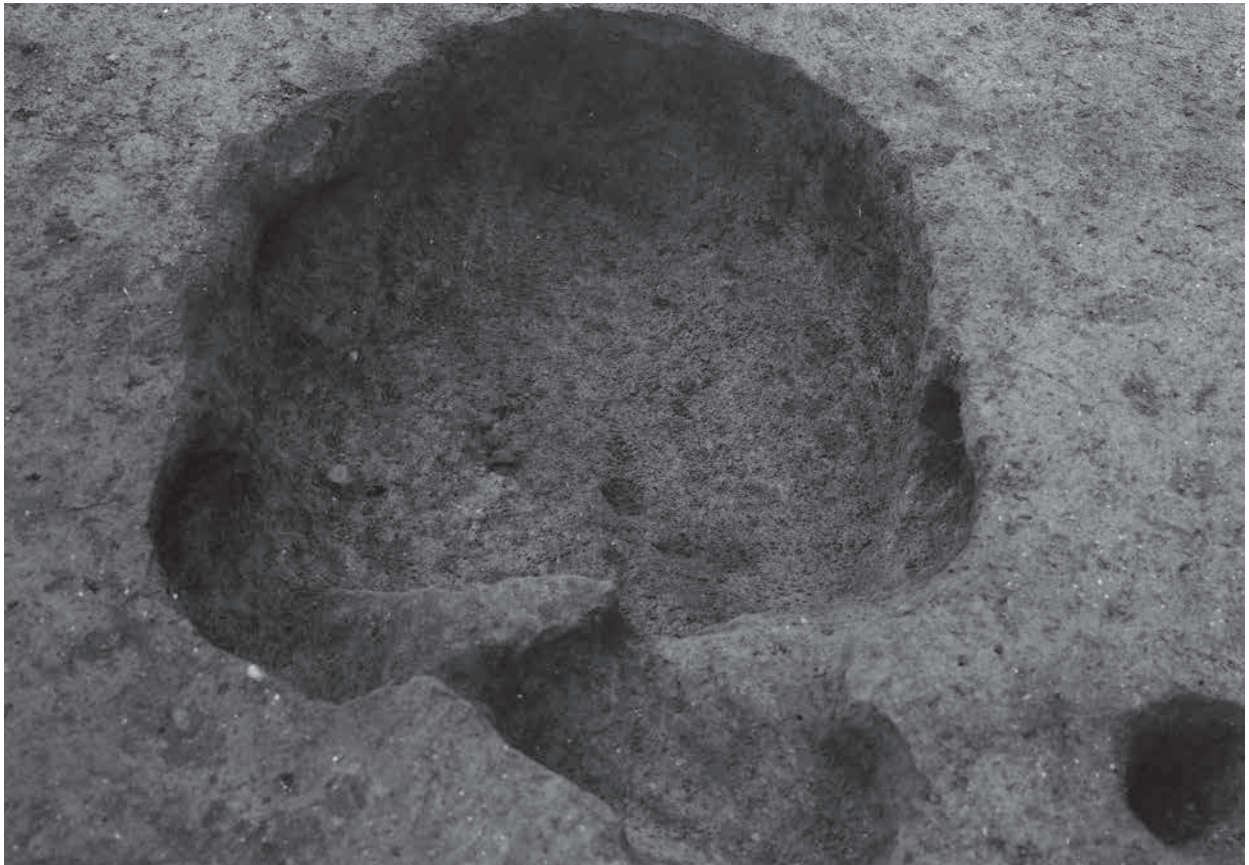
写 121 S K 306・307 (南東から)



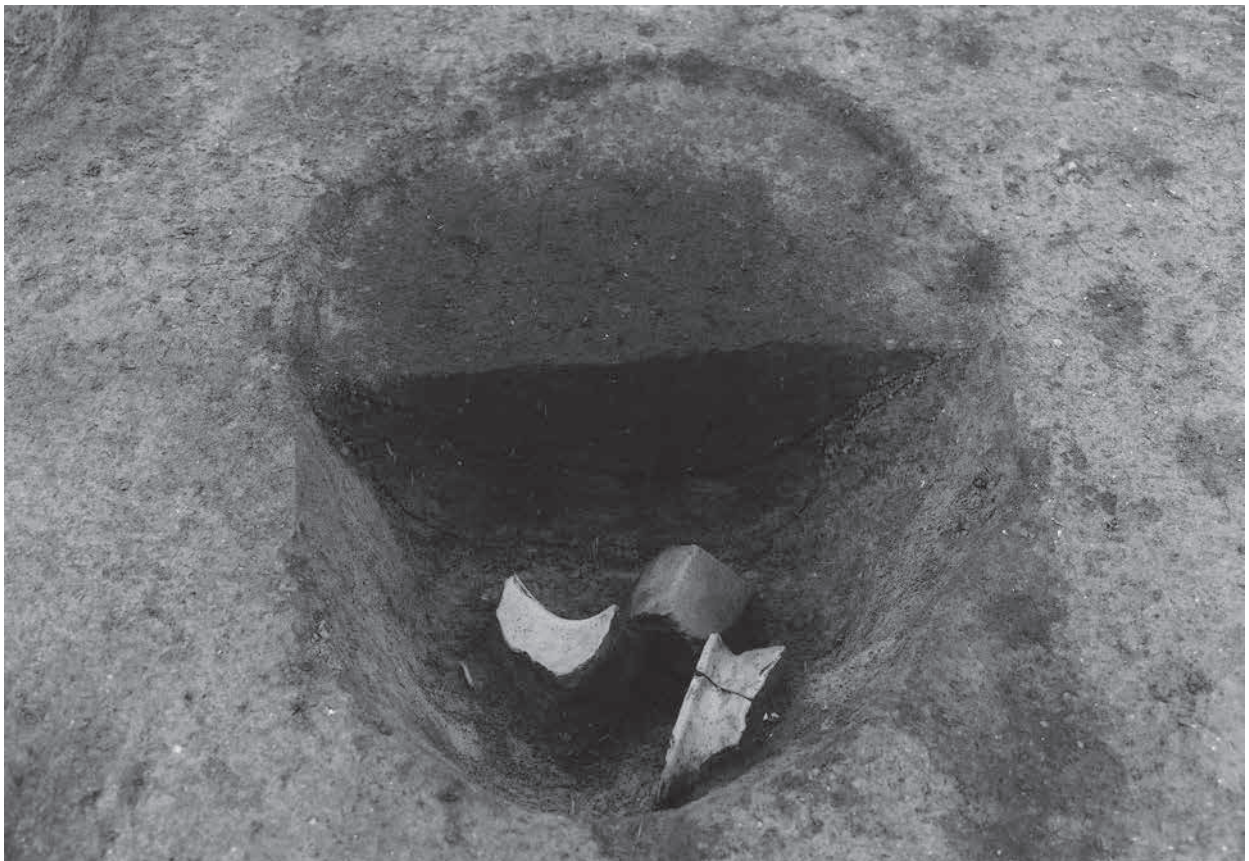
写 122 SK 316 遺物出土状況 (南東から)



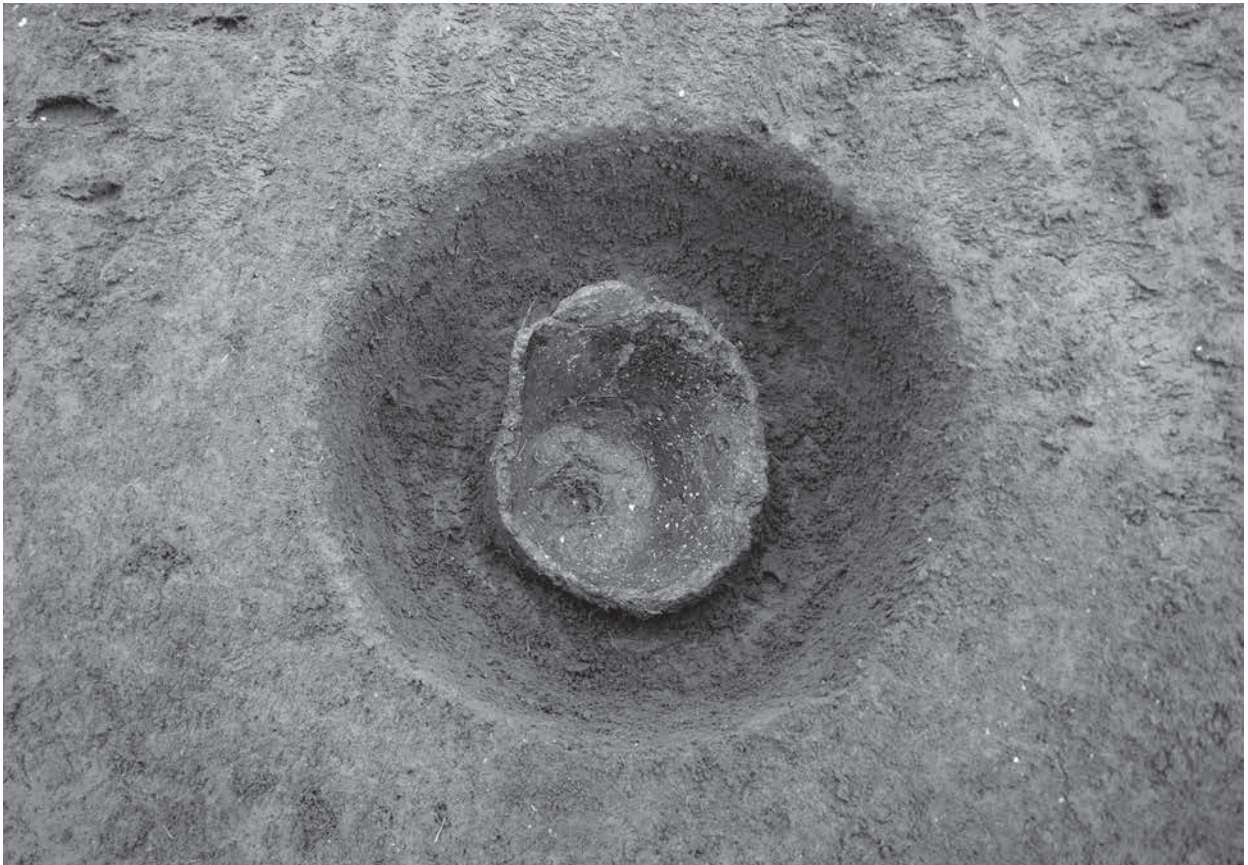
写 123 SK 324 (南から)



写 124 S K 330 (南東から)



写 125 S K 702 遺物出土状況 (南から)



写 126 縄文土器底部 (80) 出土状況 (西から)



写 127 SK 403 石棒 (74) 出土状況 (西から)



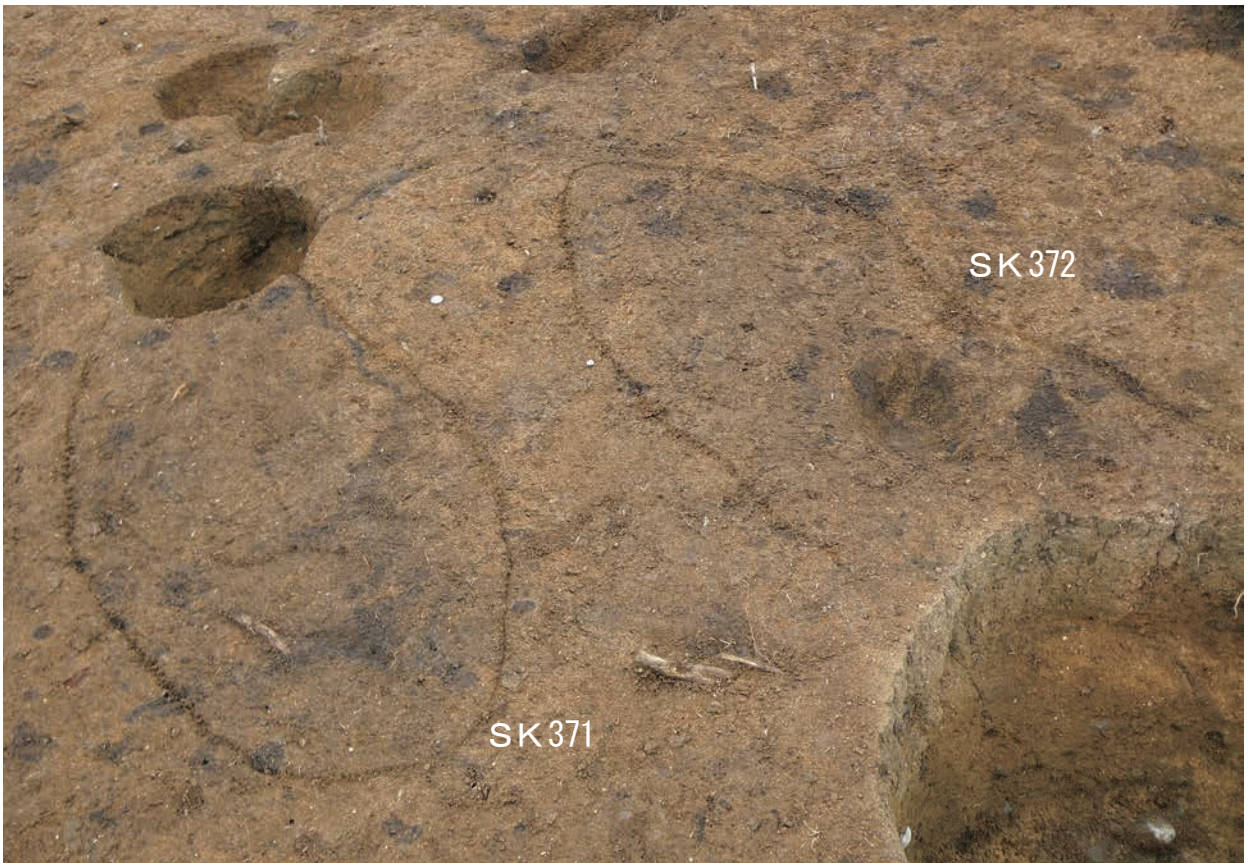
写 128 S F 367・369・383 (南から)



写 129 S F 367・369・383 (東から)



写 130 S F 368 (南から)



写 131 S K 371・372 (西から)



写 132 S F 374 検出状況（西から）



写 133 S F 374 炭化物採取状況（東から）



写 134 SK 379 (南から)



写 135 SK 396 (南東から)



写 136 S F 375 (東から)



写 137 S F 375 第3層底面出土礫 (北から)



写 138 S F 375 煙道断面 (南から)



写 139 S F 375 煙道断面 (南西から)



写 140 S F 373 検出状況 (東から)



写 141 S F 373 (東から)



写 142 S F 373 煙道断面 (南から)



写 143 S F 373・402 断面 (南から)



写 144 S F 373・402 (東から)



写 145 S F 402 遺物出土状況 (南東から)



写 146 S F 373・402・409 (東から)



写 147 S F 409 炭化物 (No. 11) 採取状況 (南から)



写 148 S F 390 (西から)



写 149 S F 391 (南から)



写 150 S F 406 検出状況 (南から)



写 151 S F 406 (北西から)



写 152 S F 392 (北東から)



写 153 S F 754 (北から)



写 154 S F 756 (北から)



写 155 S F 755 (北から)



写 156 S F 754・755・756 発見現場 (北西から)



写 157 SK 341・411 検出状況 (南から)



写 158 SK 341・411 断面 (東から)



写 159 S K 341・411 木炭出土状況 (東から)



写 160 S K 343 検出状況 (南から)



写 161 SK 343 断面 (南東から)



写 162 SK 343 木炭・底石出土状況 (南東から)



写 163 S K 346 検出状況 (北から)



写 164 S K 346 底石出土状況 (南東から)



写 165 S K 744 検出状況 (北から)



写 166 S K 744 底石出土状況 (南から)



写 167 S K 348 検出状況 (南東から)



写 168 S K 348 断面 (南東から)



写 169 SK 348 底石出土状況 (南東から)



写 170 SK 357 検出状況 (南から)



写 171 S K 357 断面 (南西から)



写 172 S K 357 底石出土状況 (東から)



写 173 SK 349 検出状況（北から）



写 174 SK 349 底石出土状況（南から）



写 175 S K 351 検出状況 (東から)



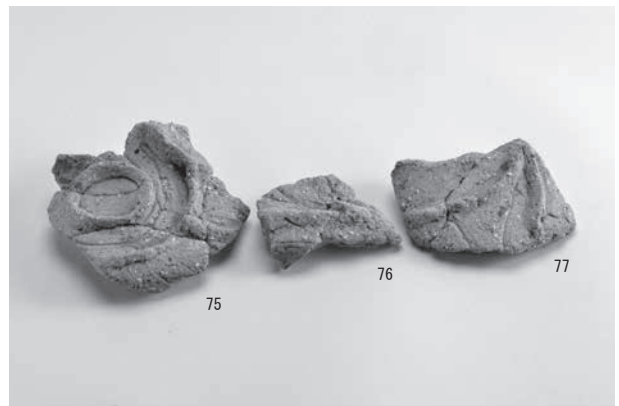
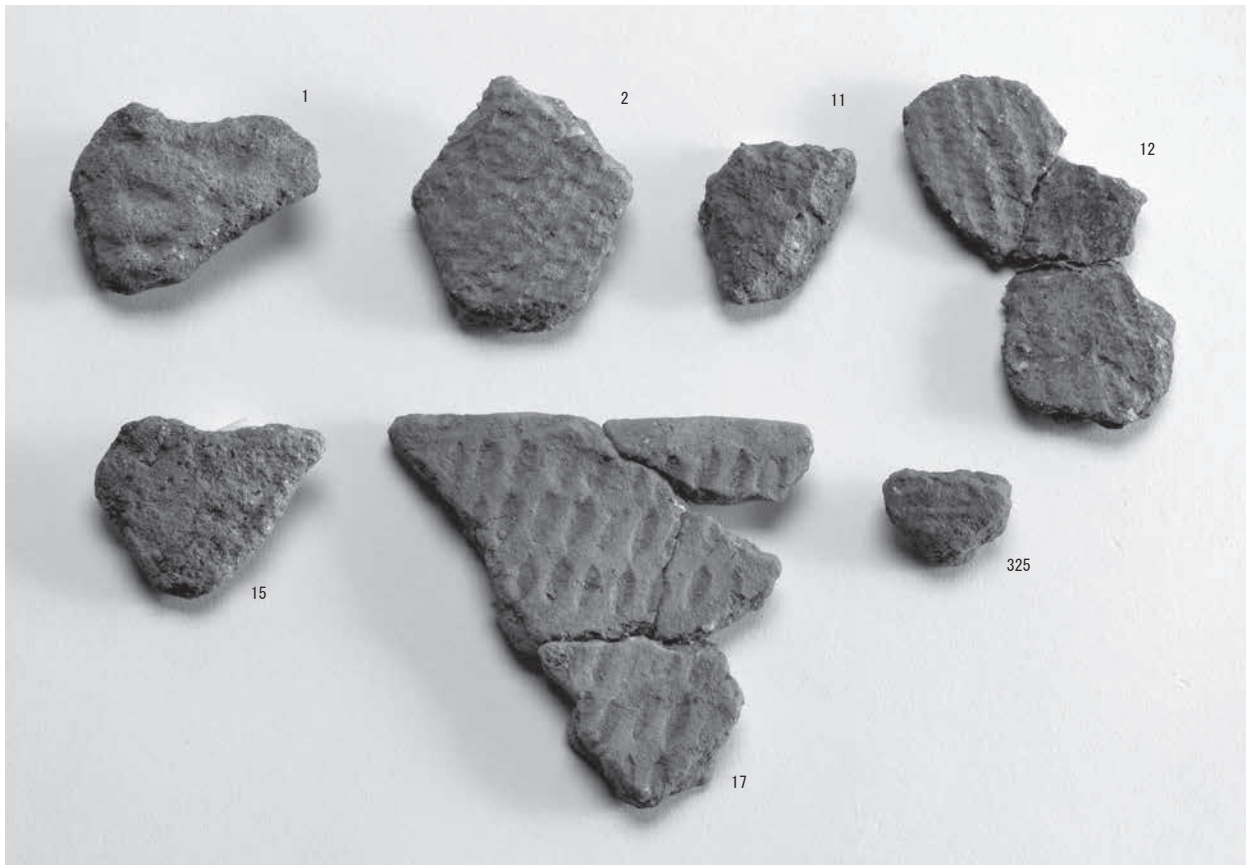
写 176 S K 351 底石出土状況 (南から)



写 177 S K 364・408 検出状況（北から）



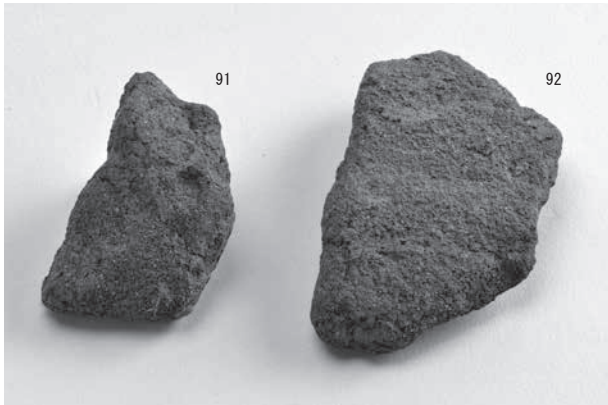
写 178 S K 364・408 断面（南から）



写 179 出土遺物 (1)



写 180 出土遺物 (2)



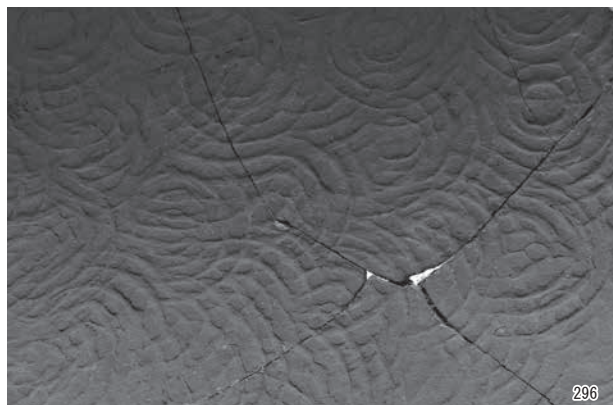
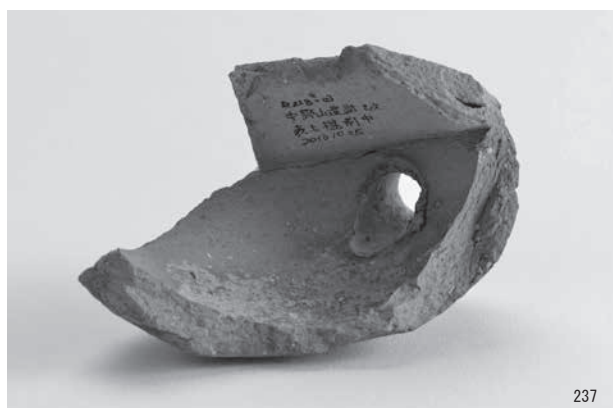
写 181 出土遺物 (3)



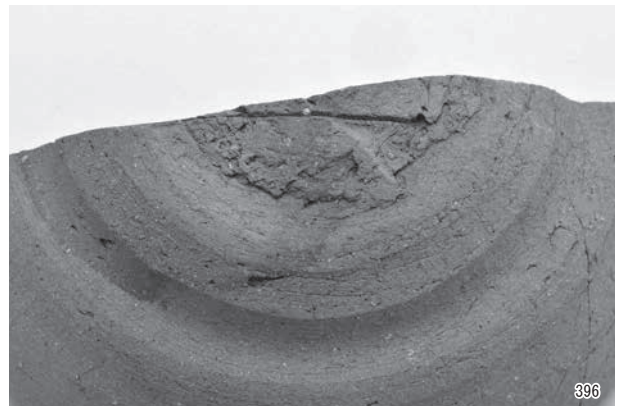
写 182 出土遺物 (4)



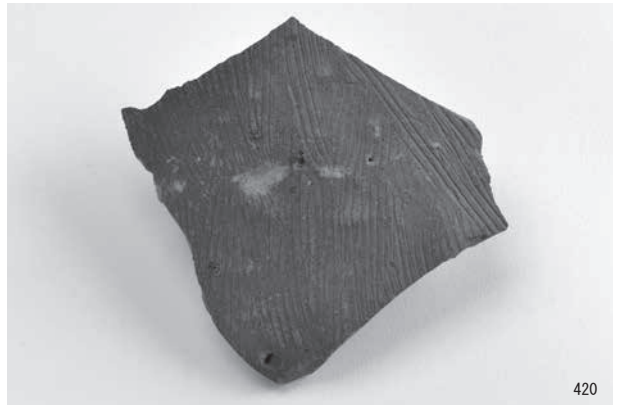
写 183 出土遺物 (5)



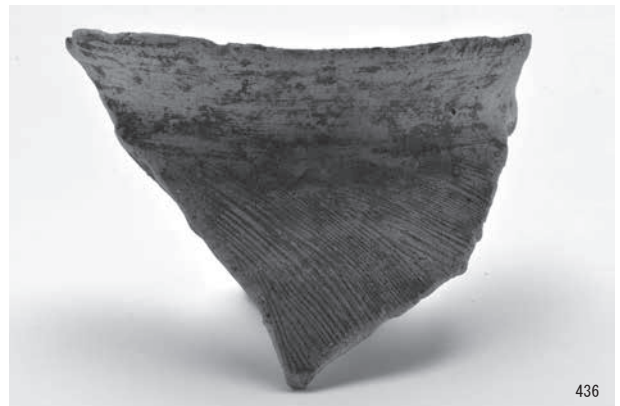
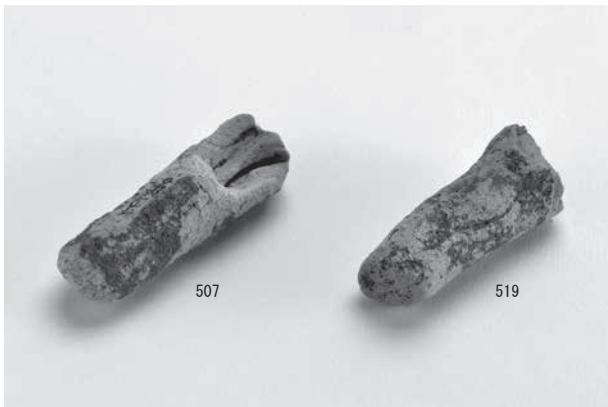
写 184 出土遺物 (6)



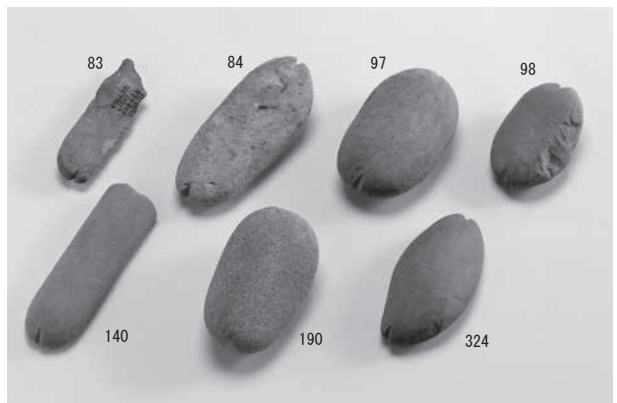
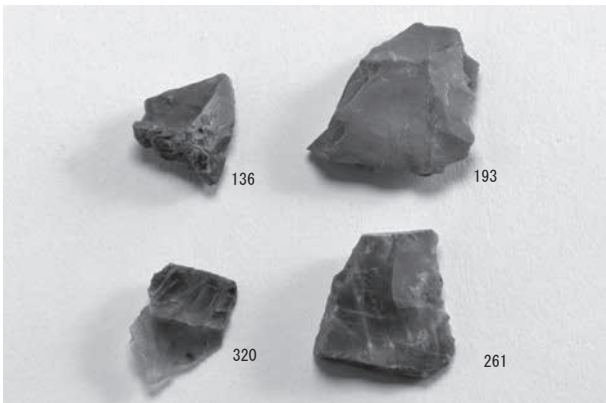
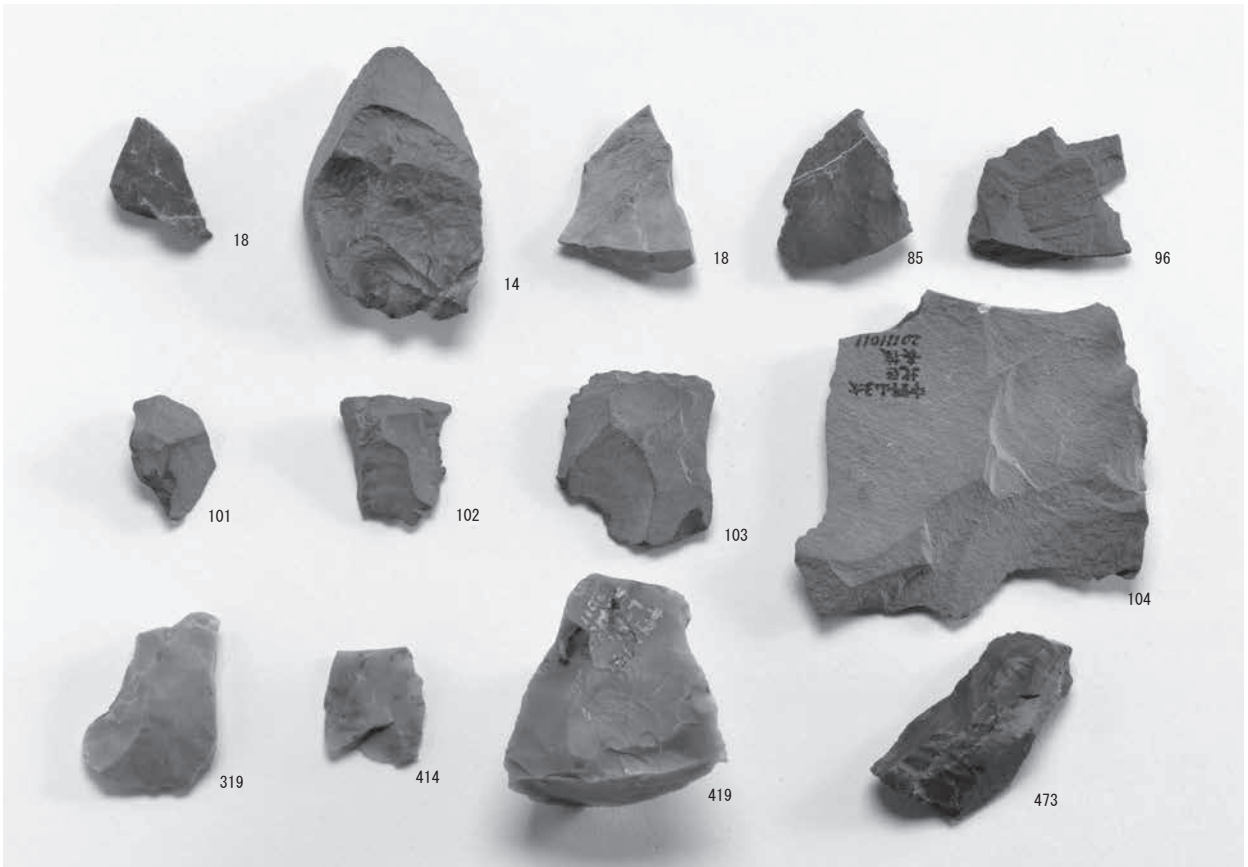
写 185 出土遺物 (7)



写 186 出土遺物 (8)



写 187 出土遺物 (9)



写 188 出土遺物 (10)



写 189 出土遺物 (11)



写 190 出土遺物 (12)



写 191 出土遺物 (13)



写 192 出土遺物 (14)



44



45



46



47



48



49

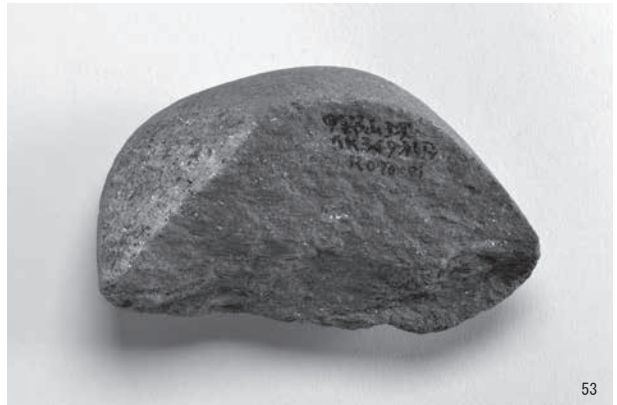


50



51

写 193 出土遺物 (15)



写 194 出土遺物 (16)



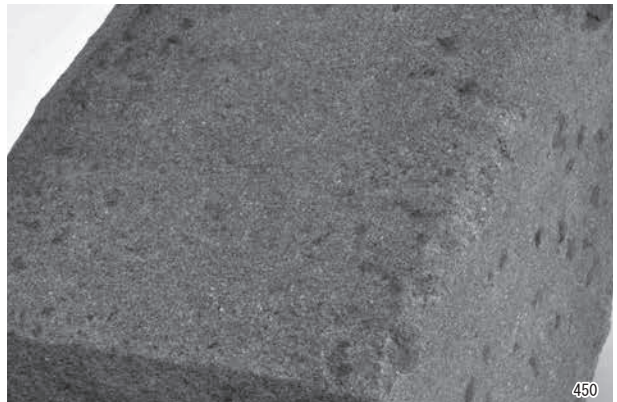
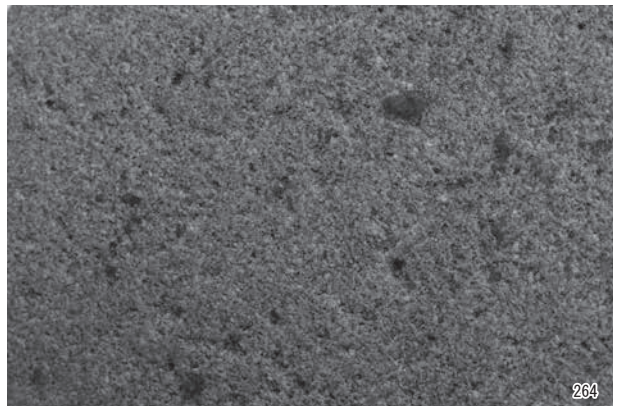
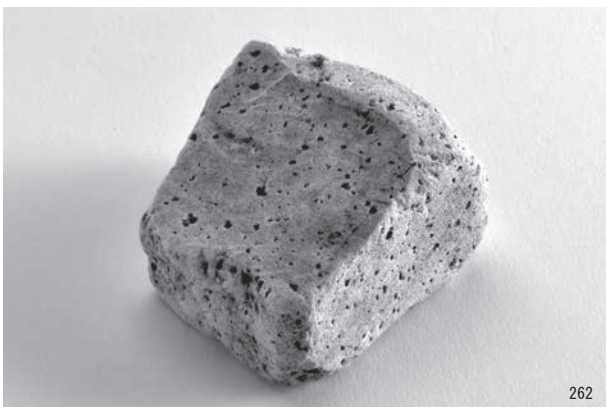
写 195 出土遺物 (17)



写 196 出土遺物 (18)



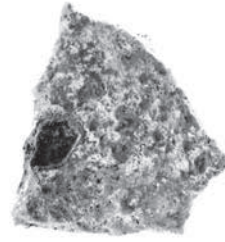
写 197 出土遺物 (19)



写 198 出土遺物 (20)



265



308



341



413



508



509



鉄滓



碗形鉄滓

写 199 出土遺物 (21)

報告書抄録

ふりがな	なかのやまいせき だい に・さん・ろく・しち じ はっくつちようさほうこく							
書名	中野山遺跡（第2・3・6・7次）発掘調査報告							
副書名								
巻次								
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	186-8							
編著者名	田中久生・勝山孝文							
編集機関	三重県埋蔵文化財センター							
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503 電話 0596-52-1732							
発行年月日	2016年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯 ° / ' / "	東経 ° / ' / "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号				m ²	
なかのやまいせき 中野山遺跡	よっかいちしきたやまちょう 四日市市北山町	202	238	35° 03' 43"	136° 35' 14"	20100830 ～20110124	1,715	国道475号東海 環状自動車道建設 事業
						20110425 ～20111115	7,572	
	20111011 ～20111219					504		
	20120731 ～20130107					4,600		
	合計					14,391		
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
中野山遺跡	集落跡	縄文時代	早期：煙道付炉穴16基・集石炉11基・竪穴住居1棟	早・中・後期：縄文土器、石器			遺物総重量： 179.95kg	
弥生時代		中・後期：竪穴住居4棟	中・後期：弥生土器					
古墳時代		後期：竪穴住居2棟	後期：須恵器、土師器					
飛鳥時代		竪穴住居28棟・掘立柱建物44棟・土坑59基	須恵器、土師器 砥石、鞆羽口、鉄滓					
要約	縄文時代早期～中世までの遺構・遺物を確認した。 主体となるのは縄文時代早期と飛鳥時代である。 縄文時代早期の遺構には、煙道付炉穴16基・集石炉11基等があり、飛鳥時代の遺構には、竪穴住居28棟・掘立柱建物44棟・土坑59基等がある。 飛鳥時代の遺構からは、鞆羽口・鉄滓・金床石等、鍛冶関連の遺物が出土した。							

三重県埋蔵文化財調査報告 186-8

中野山遺跡（第2・3・6・7次）
発掘調査報告

—四日市市北山町所在—

2016（平成28）年3月

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター
印刷 株式会社アイブレーション

